茨城県教育財団文化財調査報告第43集

霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

五斗落遺跡　大儘遺跡
弁ノ内遺跡　原ノ内遺跡
ゴリン山遺跡　真木ノ内遺跡

昭和62年3月

財団法人　茨城県教育財団

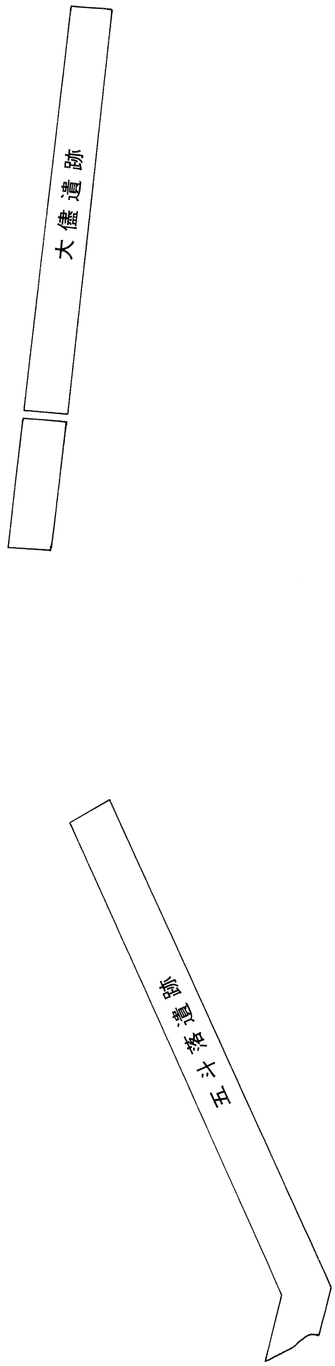
茨城県教育財団文化財調査報告第43集

霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

五斗落(ごとおち)遺跡　大儘(おおまま)遺跡
弁ノ内(べんのうち)遺跡　原ノ内(はらのうち)遺跡
ゴリン山(やま)遺跡　真木ノ内(まきのうち)遺跡

昭和62年3月

財団法人　茨城県教育財団


大儘遺跡
五斗落遺跡

五斗落遺跡・大儘遺跡遠景

五斗落遺跡・大儘遺跡遠景

序

茨城県土浦市は，筑波研究学園都市の表玄関でもあり，日本第２位の面積を誇る湖，霞ヶ浦が所在しています。この豊富な水量を利用して，県民の生活向上に役立てるべく「霞ヶ浦用水建設事業」が，水資源開発公団の手によって進められております。事業地内である土浦市手野町には，埋蔵文化財包蔵地である「五斗落遺跡・大儘遺跡・弁ノ内遺跡・原ノ内遺跡・ゴリン山遺跡・真木ノ内遺跡」の合計６遺跡が所在しております。これに伴い，財団法人茨城県教育財団は，水資源開発公団と埋蔵文化財の発掘調査について委託契約を締結し，昭和61年４月から10月まで，６遺跡の発掘調査を実施いたしました。その後，出土品等の整理を実施し，この度,「霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」として刊行の運びとなりました。

本書が記録保存としての役割だけでなく，教育及び研究の資料として，また，郷土の歴史の理解を深めるために，広く活用されますことを希望いたします。

最後に，発掘調査及び整理に当たり，水資源開発公団・茨城県教育委員会・土浦市教育委員会をはじめ，関係諸機関並びに関係各位の御指導，御協力に対しまして，衷心より感謝の意を表します。

昭和62年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　川　又　友三郎

例　言

1　本書は，水資源開発公団の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和61年度に実施した土浦市に所在する五斗落遺跡ほか５遺跡の発掘調査報告書である。

2　五斗落遺跡ほか５遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		川又友三郎	昭和61年４月～
副理事長		礒田　勇	昭和61年４月～
常務理事		滑川貞雄	昭和61年４月～
事務局長		堀井昭生	昭和60年４月～
調査課長		青木義夫	昭和59年４月～
企画管理班	班長	北畠　健	昭和60年４月～
	主任調査員	山本静男	昭和61年４月～
	係長	田所多佳男	昭和60年４月～
	主事	山崎初雄	昭和60年４月～
	〃	大部　章	昭和61年４月～
調査第三班	班長	石井　毅	昭和61年度
	主任調査員	柴　正	昭和61年度調査・整理・執筆
	〃	中根節男	昭和61年度調査・整理・執筆
整理班長		加藤雅美	昭和61年度

3　本書は，大儘遺跡，弁ノ内遺跡，原ノ内遺跡，真木ノ内遺跡を柴　正が，五斗落遺跡，ゴリン山遺跡を中根節男が分担して執筆，編集した。

4　発掘調査にあたっては，市原市埋蔵文化財センター主幹石田広美氏の御指導を得た。また，本書の作成にあたり，石質鑑定は，茨城県立上郷高等学校教頭蜂須紀夫氏の御指導を得た。

5　本書に使用した記号等については，第３章遺構・遺物の記載方法を参照されたい。

6　発掘調査及び出土遺物の整理等に際して，御指導・御協力を賜った関係各機関及び各位に対し，感謝の意を表します。

目　次

序
例　言
第１章　調査経緯…… 1
　第１節　調査に至る経過…… 1
　第２節　調査方法…… 2
　第３節　調査経過…… 6
第２章　位置と環境…… 10
　第１節　地理的環境…… 10
　第２節　歴史的環境…… 11
第３章　遺構・遺物の記載方法…… 15
　第１節　遺構の記載方法…… 15
　第２節　遺物の記載方法…… 17
第４章　遺跡の調査結果…… 23
　第１節　五斗落遺跡…… 23
　　１　遺跡の概観…… 23
　　２　遺構と遺物…… 23
　　(1)　竪穴住居跡…… 23
　　(2)　土坑…… 137
　　(3)　溝…… 139
　　(4)　その他の遺物…… 141
　　３　まとめ…… 145
　第２節　大儘遺跡…… 163
　　１　遺跡の概観…… 163
　　２　遺構と遺物…… 163
　　(1)　竪穴住居跡…… 163
　　(2)　土坑…… 222
　　(3)　その他の遺物…… 225
　　３　まとめ…… 228

第3節　弁ノ内遺跡…… 247
1　遺跡の概観…… 247
2　遺構と遺物…… 247
(1)　竪穴住居跡…… 247
(2)　土坑…… 254
3　まとめ…… 255
第4節　原ノ内遺跡…… 259
1　遺跡の概観…… 259
2　遺構と遺物…… 259
(1)　屋外炉…… 259
(2)　その他の遺物…… 260
3　まとめ…… 261
第5節　ゴリン山遺跡…… 263
1　遺跡の概観…… 263
2　遺構と遺物…… 263
(1)　土坑…… 263
(2)　その他の遺物…… 264
3　まとめ…… 268
第6節　真木ノ内遺跡…… 271
1　遺跡の概観…… 271
2　遺構と遺物…… 271
(1)　竪穴住居跡…… 271
(2)　溝…… 277
(3)　その他の遺物…… 280
3　まとめ…… 282
終章　むすび…… 283

挿　図　目　次

第１図　五斗落遺跡他５遺跡大調査区・小調査区名称図…… 2
第２図　五斗落遺跡土層柱状図…… 3
第３図　大儘遺跡土層柱状図…… 3
第４図　弁ノ内遺跡土層柱状図…… 4
第５図　原ノ内遺跡土層柱状図…… 4
第６図　ゴリン山遺跡土層柱状図…… 4
第７図　真木ノ内遺跡土層柱状図…… 5
第８図　五斗落遺跡・大儘遺跡地形図……７～８
第９図　五斗落他５遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図…… 13
第10図　五斗落遺跡他５遺跡全体図……21～22

五斗落遺跡

第11図　第１号住居跡実測図…… 24
第12図　第１号住居跡出土遺物実測図…… 24
第13図　第２号住居跡出土遺物実測図…… 25
第14図　第２号住居跡実測図…… 26
第15図　第３号住居跡実測図…… 28
第16図　第３号住居跡出土遺物実測図…… 28
第17図　第４号住居跡実測図…… 29
第18図　第４号住居跡出土遺物実測図…… 30
第19図　第５号住居跡実測図…… 31
第20図　第５号住居跡出土遺物実測図…… 32
第21図　第６号住居跡実測図…… 33
第22図　第６号住居跡出土土器接合関係図…… 34
第23図　第６号住居跡出土遺物実測図…… 35
第24図　第７号住居跡出土遺物実測図…… 36
第25図　第７号住居跡実測図…… 37
第26図　第８号住居跡実測図…… 39
第27図　第８号住居跡出土遺物実測図…… 40
第28図　第８号住居跡出土土器接合関係図…… 41
第29図　第10号住居跡実測図…… 44
第30図　第10号住居跡出土遺物実測図…… 45
第31図　第11－Ａ・Ｂ号住居跡実測図…… 47
第32図　第11－Ａ号住居跡出土遺物実測図…… 48
第33図　第11－Ｂ号住居跡出土遺物実測図…… 49
第34図　第12・33号住居跡実測図…… 51
第35図　第12号住居跡出土遺物実測図…… 52
第36図　第13号住居跡実測図…… 53
第37図　第13号住居跡出土遺物実測図…… 54
第38図　第14号住居跡実測図…… 55
第39図　第14号住居跡出土土器接合関係図…… 56
第40図　第14号住居跡出土遺物実測図…… 57
第41図　第15号住居跡実測図…… 58
第42図　第15号住居跡出土遺物実測図…… 60
第43図　第16号住居跡実測図…… 61
第44図　第16号住居跡出土遺物実測図…… 62
第45図　第17号住居跡実測図（１）…… 63
第46図　第17号住居跡カマド実測図（２）…… 64
第47図　第17号住居跡出土遺物実測図…… 66
第48図　第18－Ａ・Ｂ号住居跡実測図…… 67
第49図　第18－Ａ号住居跡出土遺物実測図…… 68
第50図　第18－Ｂ号住居跡出土遺物実測図…… 69
第51図　第19号住居跡実測図…… 71
第52図　第19号住居跡出土土器接合関係図…… 72
第53図　第19号住居跡出土遺物実測図（１）…… 73
第54図　第19号住居跡出土遺物実測図（２）…… 74
第55図　第20号住居跡実測図…… 75
第56図　第21号住居跡実測図（１）…… 77
第57図　第21号住居跡カマド実測図（２）…… 78
第58図　第21号住居跡出土遺物実測図（１）…… 79
第59図　第21号住居跡出土遺物実測図（２）…… 80
第60図　第22号住居跡実測図…… 82
第61図　第22号住居跡出土遺物実測図…… 83
第62図　第23号住居跡実測図…… 85
第63図　第23号住居跡出土遺物実測図…… 86
第64図　第24号住居跡実測図…… 87
第65図　第24号住居跡出土土器接合関係図…… 88
第66図　第24号住居跡出土遺物実測図（１）…… 91
第67図　第24号住居跡出土遺物実測図（２）…… 92
第68図　第24号住居跡出土遺物実測図（３）…… 93
第69図　第25号住居跡実測図…… 94
第70図　第25号住居跡出土遺物実測図…… 95
第71図　第26号住居跡実測図…… 97
第72図　第26号住居跡出土遺物実測図（１）…… 98
第73図　第26号住居跡出土遺物実測図（２）…… 99
第74図　第27号住居跡実測図…… 102
第75図　第27号住居跡出土遺物実測図（１）…… 104
第76図　第27号住居跡出土遺物実測図（２）…… 105
第77図　第28－Ａ・Ｂ号住居跡実測図…… 106

第78図　第28－Ａ号住居跡出土遺物実測図…… 108
第79図　第28－Ｂ号住居跡出土遺物実測図…… 109
第80図　第29号住居跡出土遺物実測図…… 110
第81図　第29号住居跡実測図…… 111
第82図　第30号住居跡出土遺物実測図…… 112
第83図　第30号住居跡実測図…… 113
第84図　第32号住居跡炉実測図…… 114
第85図　第32号住居跡出土遺物実測図…… 114
第86図　第33号住居跡出土遺物実測図…… 115
第87図　第34号住居跡実測図…… 117
第88図　第34号住居跡出土遺物実測図…… 118
第89図　第35号住居跡実測図…… 120
第90図　第35号住居跡出土遺物実測図…… 121
第91図　第36号住居跡実測図…… 122
第92図　第36号住居跡出土遺物実測図…… 123
第93図　第39号住居跡実測図…… 124
第94図　第39号住居跡出土土器接合関係図…… 125
第95図　第39号住居跡出土遺物実測図…… 126
第96図　第40号住居跡実測図…… 128
第97図　第40号住居跡出土遺物実測図…… 129
第98図　第41号住居跡実測図…… 130
第99図　第41号住居跡出土土器接合関係図…… 131
第100図　第41号住居跡出土遺物実測図…… 132
第101図　第42号住居跡実測図　…… 134
第102図　第42号住居跡出土遺物実測図…… 135
第103図　第43号住居跡実測図…… 136
第104図　第43号住居跡出土遺物実測図…… 137
第105図　第1・2・3・4号土坑実測図 …… 139
第106図　第１号溝実測図…… 140
第107図　グリッド出土遺物拓影図（１）…… 142
第108図　グリッド出土遺物拓影図（２）…… 143
第109図　石器実測図…… 144
第110図　古墳時代住居跡（五領）長軸方向…… 145
第111図　古墳時代住居跡（鬼高Ⅰ）主軸方向…… 147
第112図　古墳時代住居跡（鬼高Ⅱ）主軸方向…… 147
第113図　古墳時代住居跡（鬼高Ⅲ）主軸方向…… 148
第114図　奈良時代住居跡主軸方向…… 148
第115図　平安時代住居跡（Ⅰ・Ⅱ）主軸方向…… 150
第116図　平安時代住居跡（Ⅲ）主軸方向…… 150
第117図　平安時代住居跡（Ⅳ）主軸方向…… 150
第118図　平安時代住居跡（Ⅴ）主軸方向…… 150
第119図　五斗落遺跡住居跡分布図……151～152
第120図　土師器・須恵器の法量分布図…… 159

大儘遺跡

第121図　第１号住居跡実測図…… 164
第122図　第１号住居跡出土遺物実測図…… 165
第123図　第２号住居跡実測図…… 166
第124図　第２号住居跡出土遺物実測図…… 167
第125図　第３号住居跡実測図…… 168
第126図　第３号住居跡出土遺物実測図…… 169
第127図　第４号住居跡実測図…… 170
第128図　第４号住居跡出土遺物実測図…… 171
第129図　第５号住居跡実測図・出土土器接合
関係図…… 174
第130図　第５号住居跡出土遺物実測図…… 175
第131図　第６号住居跡実測図…… 178
第132図　第６号住居跡出土土器接合関係図…… 179
第133図　第６号住居跡出土遺物実測図（１）…… 180
第134図　第６号住居跡出土遺物実測図（２）…… 181
第135図　第７号住居跡実測図…… 184
第136図　第７号住居跡出土遺物実測図…… 185
第137図　第８号住居跡実測図…… 186
第138図　第８号住居跡出土遺物実測図…… 186
第139図　第９号住居跡実測図…… 187
第140図　第９号住居跡出土遺物実測図…… 187
第141図　第10号住居跡実測図…… 189
第142図　第10号住居跡出土遺物実測図…… 189
第143図　第11号住居跡実測図…… 191
第144図　第11号住居跡出土遺物実測図…… 191
第145図　第12号住居跡実測図…… 193
第146図　第12号住居跡出土遺物実測図…… 193
第147図　第13号住居跡実測図…… 195
第148図　第13号住居跡出土遺物実測図…… 196
第149図　第14号住居跡実測図…… 199
第150図　第14号住居跡出土遺物実測図…… 200
第151図　第15号住居跡実測図…… 201
第152図　第15号住居跡出土遺物実測図…… 202
第153図　第16号住居跡実測図…… 204
第154図　第16号住居跡出土土器接合関係図…… 205
第155図　第16号住居跡出土遺物実測図（１）…… 208
第156図　第16号住居跡出土遺物実測図（２）…… 209
第157図　第16号住居跡出土遺物実測図（３）…… 210
第158図　第17号住居跡実測図…… 211
第159図　第17号住居跡出土遺物実測図…… 212

第160図　第18号住居跡実測図…… 213
第161図　第18号住居跡出土遺物実測図…… 214
第162図　第19号住居跡実測図・出土土器接合関係図…… 215
第163図　第19号住居跡出土遺物実測図…… 216
第164図　第21号住居跡実測図・出土土器接合関係図…… 219
第165図　第21号住居跡出土遺物実測図…… 220
第166図　第22号住居跡実測図…… 221
第167図　第22号住居跡出土遺物実測図…… 221
第168図　土坑実測図…… 224
第169図　遺構外出土遺物拓影図…… 227
第170図　大儀遺跡住居跡分布図…… 231～232
第171図　大儀遺跡時期別住居跡規模・主軸方向（１）…… 233
第172図　大儀遺跡時期別住居跡規模・主軸方向（２）…… 234
第173図　大儀遺跡時期別住居跡規模・主軸方向（３）…… 235
第174図　第１群２類遺物実測図…… 239
第175図　第１群３類遺物実測図…… 240
第176図　第２群１類・２類・３類遺物実測図…… 242
第177図　第３群１類・２類・３類・４類・５類遺物実測図…… 245

弁ノ内遺跡

第178図　第１号住居跡実測図…… 248
第179図　第１号住居跡出土遺物実測図…… 249
第180図　第２号住居跡実測図…… 250
第181図　第２号住居跡出土遺物実測図…… 251
第182図　第３号住居跡実測図…… 252
第183図　第３号住居跡出土遺物実測図…… 253
第184図　第１号土坑実測図…… 254

原ノ内遺跡

第185図　屋外炉実測図…… 260
第186図　遺跡出土遺物拓影図…… 261

ゴリン山遺跡

第187図　第１号土坑実測図…… 263
第188図　第１号土坑出土遺物実測図…… 264
第189図　グリッド出土遺物拓影図（１）…… 266
第190図　グリッド出土遺物拓影図（２）…… 267
第191図　石器実測図…… 267
第192図　遺物平面分布図…… 269

真木ノ内遺跡

第193図　第１号住居跡実測図…… 271
第194図　第１号住居跡出土遺物実測図（１）…… 274
第195図　第１号住居跡出土遺物実測図（２）…… 275
第196図　第１号住居跡出土遺物実測図（３）…… 276
第197図　第１号溝出土遺物実測図…… 277
第198図　第１号溝実測図…… 278
第199図　グリッド出土遺物実測図…… 279
第200図　遺構外出土遺物拓影図…… 281

表　目　次

表１　五斗落遺跡他５遺跡周辺遺跡一覧表…… 14

五斗落遺跡

表２　石器一覧表…… 144
表３　古墳時代前・後期住居跡一覧表…… 153
表４　奈良時代住居跡一覧表…… 154
表５　平安時代住居跡一覧表…… 154
表６　時期不明住居跡一覧表…… 154
表７　土師器・須恵器の法量分布一覧表…… 159

大儀遺跡

表８　古墳時代後期住居跡一覧表…… 235
表９　奈良時代住居跡一覧表…… 236
表10　平安時代住居跡一覧表…… 236
表11　時期別出土土器一覧表…… 246

弁ノ内遺跡

表12　住居跡一覧表…… 256

ゴリン山遺跡

表13　石器一覧表…… 268

写真図版目次

五斗落遺跡

ＰＬ１　発掘前全景，遺構確認，農道除去後遺構確認

ＰＬ２　作業風景，見学者説明，発掘後全景

ＰＬ３　第１・２・３・４・５号住居跡・第６号住居跡遺物出土状況・第６・７号住居跡

ＰＬ４　第８号住居跡遺物出土状況，第８号住居跡，第10号住居跡遺物出土状況，第10号住居跡，第14号住居跡遺物出土状況，第14・15号住居跡

ＰＬ５　第17号住居跡遺物出土状況，第17号住居跡，第19号住居跡遺物出土状況第19号住居跡カマド内遺物出土状況，第19・21・22号住居跡

ＰＬ６　第23号住居跡遺物出土状況，第23・24号住居跡・第24・25・41号住居跡，第26・27号住居跡，第28－Ａ号住居跡遺物出土状況，第11－Ａ・Ｂ・28－Ａ・Ｂ・29号住居跡

ＰＬ７　第30号住居跡，第32号住居跡(炉)，第34・35・36号住居跡，第41号住居跡遺物出土状況，第41・39・43号住居跡，第42号住居跡

ＰＬ８　住居跡出土土器

ＰＬ９　住居跡出土土器

ＰＬ10　住居跡出土土器

ＰＬ11　住居跡出土土器

ＰＬ12　住居跡出土土器

ＰＬ13　住居跡出土土器

ＰＬ14　住居跡出土土器

ＰＬ15　住居跡出土遺物

大儘遺跡

ＰＬ16　発掘前全景，遺構確認

ＰＬ17　第１・２号住居跡，第３号住居跡遺物出土状況，第３号住居跡，第４号住居跡遺物出土状況，第４号住居跡，第５号住居跡貯蔵穴内遺物出土状況，第５号住居跡

ＰＬ18　第６・７・８・９・10・11・12号住居跡，第３号住居跡遺物出土状況

ＰＬ19　第13号住居跡遺物出土状況，第13号住居跡，第14号住居跡遺物出土状況，第14･15号住居跡，第16号住居跡カマド内遺物出土状況，第16号住居跡土層断面，第16号住居跡

ＰＬ20　第17・18・19号住居跡，第21号住居跡遺物出土状況，第21・22号住居跡，見学者説明

ＰＬ21　住居跡出土遺物

ＰＬ22　住居跡出土土器

ＰＬ23　住居跡出土土器

ＰＬ24　住居跡出土土器

ＰＬ25　住居跡出土土器

ＰＬ26　住居跡出土土器

ＰＬ27　住居跡出土遺物

弁ノ内遺跡

ＰＬ28　発掘前全景，発掘後全景

ＰＬ29　第１号住居跡カマド袖部遺物出土状況，第１号住居跡遺物出土状況，第

１号住居跡
ＰＬ30　第２号住居跡遺物出土状況，第２号住居跡，第３号住居跡
ＰＬ31　住居跡出土土器
原ノ内遺跡
ＰＬ32　発掘前全景，発掘後全景
ＰＬ33　遺物出土状況，第１号屋外炉土層セクション，第２号屋外炉平面完掘
ゴリン山遺跡
ＰＬ34　発掘前全景，発掘後全景，遺物出土状況
ＰＬ35　第１号土坑遺物出土状況，第１号土坑，第１号土坑出土遺物
真木ノ内遺跡
ＰＬ36　発掘前全景，発掘後全景
ＰＬ37　第１号住居跡遺物出土状況，第１号住居跡，第１号溝・グリッド覆土遺物出土状況
ＰＬ38　住居跡・溝出土土器
ＰＬ39　住居跡・グリッド出土土器

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

茨城の県西地区は，平年降水量が少なく，しかも降雨分布が不均一なため，畑地は粗放で不安な生産体系となっている。水田は地区内河川による水源が不安定で，しばしば用水不足を生ずるほか，土地基盤の悪条件から土地生産性が低下している。これらの深刻な用水不足を解消し，また，筑波工業団地等の工業用水の需要増に対応するため，茨城県は，「県西用水事業計画」を樹立した。これにより，水資源開発公団（以下・水資源公団と言う）は，農業用水はもとより，工業用水をも含めた総合用水計画を策定し，霞ヶ浦から県西地区に向けて，鬼怒川に至る全長約51㎞を「霞ヶ浦用水開発事業」の一環として施工することとなった。

このため，土浦市手野町の台地に送水管埋設工事が実施される事になり，それに伴って水資源公団は，昭和58年８月に土浦市教育委員会に対し，建設用地内における埋蔵文化財の有無について照会を求めた。土浦市教育委員会は，同年10月に埋蔵文化財の所在することを回答した。更に水資源公団は，茨城県教育委員会に対し建設用地内の埋蔵文化財の有無について照会を求めた。茨城県教育委員会は，同59年６月に土浦市教育委員会と連絡を取り，建設用地内に五斗落遺跡（1706㎡）・大儘遺跡（1559㎡）・弁ノ内遺跡（946㎡）・原ノ内遺跡（442㎡）・ゴリン山遺跡（774㎡）・真木ノ内遺跡（548㎡）の合計６遺跡（5975㎡）が所在することを回答した。そこで，水資源公団は，茨城県教育委員会と建設用地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果，現状保存が困難であるため，発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。

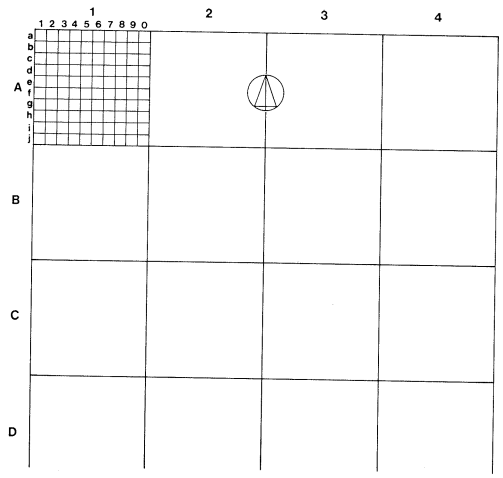
これにより，水資源公団は財団法人茨城県教育財団（以下・県教育財団と言う）と詳細な調整を行い，建設用地内の６遺跡について，昭和61年４月１日から同年９月30日までの期間で，埋蔵文化財発掘調査を実施することで業務委託を締結した。教育財団は，調査体制を整え，同年４月から調査に着手したが，途中において，五斗落遺跡から多数の遺構が検出されたため，同年７月２日に県教育委員会，水資源公団，県教育財団との三者協議を行い，調査面積304㎡(遺跡内農道分）の追加と，１ヶ月間の調査期間延長で話し合いが一致した。これにより，調査は同年10月31日まで実施し，６遺跡の発掘調査が終了した。さらに同年11月１日から昭和62年３月31日までの５ヶ月間にわたって，出土遺物等の整理を実施し，ここに本報告書を刊行する運びとなった。

※　なお五斗落遺跡については，農道部が追加され，最終的な調査面積は，2010㎡となった。

第２節　調査方法

１　地区設定

五斗落遺跡他５遺跡の地区設定は，日本平面直角座標・第Ⅸ座標系，Ｘ軸（南北），Ｙ軸（東西）を基準線として，40ｍ四方の大調査区に分割し，さらに大調査区内を４ｍ四方の小調査区に細分割した。調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，大調査区においては北から南へＡ・Ｂ・Ｃ，西から東へ１・２・３・４とし，「A1区」，「Ｂ2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は北から南へａ・ｂ・ｃ……ｊ，西から東へ１・２・３……０とし，小調査区の名称は大調査区の名称を冠し「$A1b_2$」，「$B2e_7$」のように呼称した。



第１図　五斗落他５遺跡大調査区・小調査区名称図

各遺跡における基準点は次のとおりである。

(1)　五斗落遺跡……Ｘ軸（南北）－11,200.00ｍ　Ｙ軸（東西）＋36,080.00ｍ

(2)　大儘遺跡……Ｘ軸（南北）－11,160.00ｍ　Ｙ軸（東西）＋36,360.00ｍ

(3)　弁ノ内遺跡……Ｘ軸（南北）－11,040.00ｍ　Ｙ軸（東西）＋36,560.00ｍ

(4)　原ノ内遺跡……Ｘ軸（南北）－10,960.00ｍ　Ｙ軸（東西）＋36,800.00ｍ

(5)　ゴリン山遺跡……Ｘ軸（南北）－10,840.00ｍ　Ｙ軸（東西）＋37,280.00ｍ

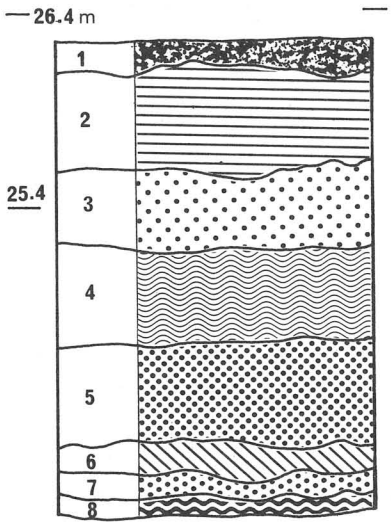
(6)　真木ノ内遺跡……Ｘ軸（南北）－10,760.00ｍ　Ｙ軸（東西）＋37,520.00ｍ

２　基本層序

６遺跡は手野台地縁辺部の最北端部に位置し，台地の西から東へ五斗落遺跡・大儘遺跡・弁ノ内遺跡・原ノ内遺跡・ゴリン山遺跡・真木ノ内遺跡の順に所在し，台地の北側にある谷津との比高差や台地から谷津までの距離等は，６遺跡ともほぼ同様である。しかし，ゴリン山遺跡については，遺跡の北側から西側さらに南側へと支谷が入り込んでいるため小規模な舌状台地を呈しており，他の遺跡とは若干地形及び基本層序にちがいが見られる。基本層序では砂層が特に多く，全層に砂が含まれている。他の５遺跡の基本層序に見られる共通点は，おおよそ，次の様な事が上げられる。第１～３層は褐色ローム層，４～６層はハードローム層，７層以下は粘土層へと移っている。以下各遺跡の基本層序のモデル区を記述すると次の通りである。

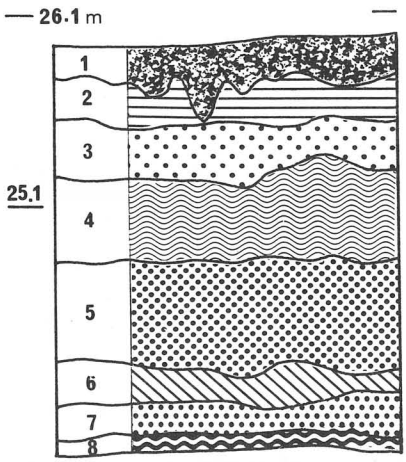
五斗落遺跡「B4g$_8$」，大儘遺跡「C3b$_2$」，弁ノ内遺跡「B2g$_8$」，原ノ内遺跡「A1g$_6$」，ゴリン山遺跡「B2b$_2$」，真木ノ内遺跡「B2c$_9$」。

6遺跡の基本層序柱状図



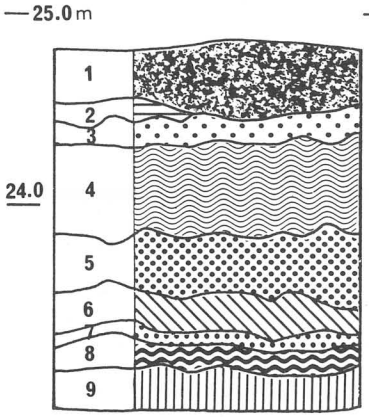
1	Hue	7.5YR	5/6	明褐色　ローム粒子多量含み締まり有り
2	Hue	7.5YR	5/8	明褐色　ローム粒子多量含み硬く締まり有り
3	Hue	7.5YR	4/6	褐色　ローム粒子多量含み硬い
4	Hue	7.5YR	5/4	にぶい褐色　ローム粒子多量含み硬い
5	Hue	10YR	4/6	褐色　ローム粒子多量含み硬い
6	Hue	7.5YR	4/6	褐色　ローム粒子多量含み硬く粘り有り
7	Hue	10YR	5/4	にぶい黄褐色　ローム粒子多量含み硬く粘り有り
8	Hue	10YR	6/6	明黄褐色　粘り有る粘土

第2図　五斗落遺跡土層柱状図



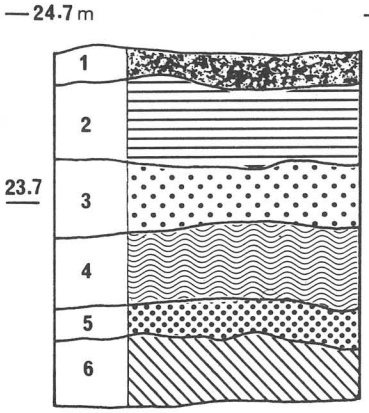
1	Hue	7.5YR	3/4	暗褐色　ローム粒子少量含み締まり有り
2	Hue	7.5YR	5/6	明褐色　ローム粒子多量含み締まり有り
3	Hue	7.5YR	5/4	にぶい褐色　ローム粒子多量含み締まり有り
4	Hue	7.5YR	5/6	明褐色　ローム粒子多量含み硬く締まり有り
5	Hue	10YR	4/6	褐色　ローム粒子多量含み硬い
6	Hue	7.5YR	5/6	明褐色　ローム粒子多量含み硬く締まり有り
7	Hue	10YR	4/6	褐色　ローム粒子多量含み硬い
8	Hue	10YR	6/6	明黄褐色　粘り有る粘土

第3図　大儘遺跡土層柱状図



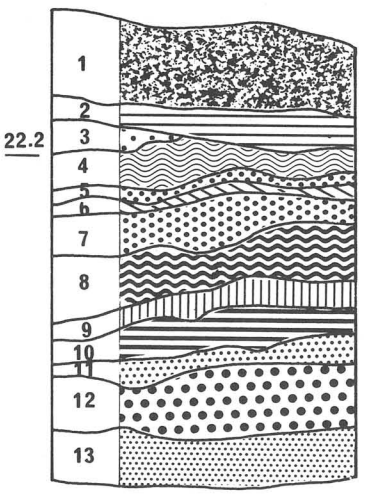
1	Hue	7.5YR	4/4	褐色	ローム粒子極少量含み締まり有り
2	Hue	7.5YR	2/2	黒褐色	ローム粒子少量含み締まり有り
3	Hue	7.5YR	5/6	明褐色	ローム粒子多量含み締まり有り
4	Hue	7.5YR	5/6	明褐色	ローム粒子多量含み硬く締まり有り
5	Hue	10YR	4/6	褐色	ローム粒子多量含み硬い
6	Hue	10YR	5/6	黄褐色	ローム粒子多量含み硬い
7	Hue	7.5YR	6/6	橙色	ローム粒子多量，粘土ブロック少量含み硬い
8	Hue	10YR	5/6	黄褐色	ローム粒子少量，粘土多量含み硬く粘り有り
9	Hue	10YR	6/4	にぶい黄橙色	粘土で硬く粘り有り

第4図　弁ノ内遺跡土層柱状図



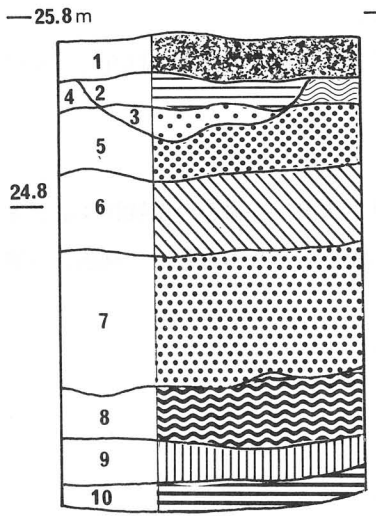
1	Hue	7.5YR	4/6	褐色	ローユ粒子多量含み軟らかい
2	Hue	7.5YR	5/6	明褐色	ローム粒子多量含み締まり有り
3	Hue	7.5YR	5/6	明褐色	ローム粒子多量含み硬く締まり有り
4	Hue	7.5YR	4/6	褐色	ローム粒子多量含み硬い
5	Hue	7.5YR	6/8	橙色	ローム粒子多量，粘土少量含み硬い
6	Hue	2.5Y	7/4	浅黄色	粘土で締まり有り

第5図　原ノ内遺跡土層柱状図



1	Hue	7.5YR	3/4	暗褐色	ローム粒子，山砂少量含み締まり有り
2	Hue	7.5YR	4/3	褐色	山砂，ローム粒子極少量含み締まり有り
3	Hue	7.5YR	5/6	明褐色	ローム粒子多量，山砂少量含み硬い極少量
4	Hue	7.5YR	5/4	にぶい褐色	ローム粒子・山砂多量，粘土粒子
5	Hue	5 YR	2/2	黒褐色	山砂・砂礫少量含み硬い
6	Hue	7.5YR	5/6	明褐色	山砂・ローム粒子多量，砂礫少量含み締まり有り
7	Hue	7.5YR	5/4	にぶい褐色	山砂多量，粘土粒子極少量含み硬く締まり有り
8	Hue	10YR	4/6	褐色	山砂多量，粘土粒子極少量含み硬く締まり有り
9	Hue	7.5YR	6/6	橙色	山砂多量，砂礫極少量含み硬く締まり有り
10	Hue	7.5YR	6/8	橙色	山砂・砂礫多量，粘土小ブロック少量含み硬い
11	Hue	10YR	5/4	にぶい黄褐色	山砂多量，砂礫少量含み硬く締まり有り
12	Hue	10YR	5/6	黄褐色	山砂・砂礫多量、粘土大ブロック少量含み硬い
13	Hue	10YR	5/4	にぶい黄褐色	山砂多量，粘土小ブロック極少量含み硬い

第6図　ゴリン山遺跡土層柱状図



1	Hue	7.5YR	3/3	暗褐色	ローム粒子を極少量含み軟らかい
2	Hue	7.5YR	1/6	褐色	ローム粒子多量，焼土粒子少量含み軟らかい
3	Hue	7.5YR	1/4	褐色	ローム粒子多量，焼土粒子極少量含み軟らかい
4	Hue	7.5YR	1/6	褐色	ローム粒子多量含み締まり有り
5	Hue	7.5YR	5/6	明褐色	ローム粒子多量，黒色粒子極少量含み締まり有り
6	Hue	7.5YR	5/6	明褐色	ローム粒子多量含み硬く締まり有り
7	Hue	7.5YR	1/6	褐色	ローム粒子多量含み硬く締まり有り
8	Hue	10YR	1/6	褐色	ローム粒子多量含み硬い
9	Hue	10YR	5/6	黄褐色	ローム中・小ブロック多量含む
10	Hue	10YR	1/6	褐色	砂粒極少量含む

第７図　真木ノ内遺跡土層柱状図

3　遺構確認

６遺跡とも調査エリアの幅が12ｍという狭い範囲であるため，各遺跡の左端に幅１ｍのトレンチを入れ，遺構の確認調査を実施した。その結果，原ノ内遺跡を除く５遺跡からは竪穴住居跡，土坑，溝等の遺構が検出されたため，重機による表土除去を実施し，ローム層上面で遺構の確認をした。五斗落遺跡からは，遺跡の中央部から西部にかけて，遺構の切り合いが解らない程の状態で，12ｍ幅いっぱいに竪穴住居跡等の遺構が検出された。大儘遺跡は，トレンチャーによる撹乱を受けていたが，遺跡全体から竪穴住居跡等の遺構が検出された。弁ノ内遺跡，真木ノ内遺跡からも竪穴住居跡，土坑，溝等の遺構が検出された。ゴリン山遺跡からは，中世の土坑，原ノ内遺跡からは，屋外炉が検出された。

4　遺構調査

遺構の調査方法は，次のようにして実施した。

竪穴住居跡は，平面プラン確認後，南北方向と東西方向の十字に土層観察用ベルトを設定し，ベルトによって区画された四つの区画を床面まで掘り下げることを原則とした。区画の名称は，北東部を始まりに時計回りに１～４区と呼称した。

土坑は，平面プラン確認後長径方向で二分し，先ず南または東側を掘り込み，土層観察後残りの２分の１を掘り込むことを原則とした。

溝は，適宜な位置に土層観察用のベルトを残し，底面まで掘り込んだ。

土層観察は，色相，含有物の種類と量，粘性等を観察した。色相の判定は「新版標準土色帖」

（小山正忠・竹原秀雄編著日本色研事業株式会社）を使用した。

遺物は，柱状に残して出土位置を保ち，遺構の掘り下げ終了後，遺構平面と共に図化し，レベルを測定後，取り上げた。

遺構平面図は，水糸方眼地張測量によって，20分の１の縮尺で図化した。

記録の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況平面図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順を基本とした。図面，写真等に記録できない事項については，遺構カードに記録した。

第３節　調査経過

五斗落遺跡・大儘遺跡・弁ノ内遺跡・原ノ内遺跡・ゴリン山遺跡・真木ノ内遺跡の合計６遺跡における発掘調査は，昭和61年４月１日から昭和61年10月31日までの７か月の間に渡って実施し，これらの遺跡における発掘調査の経過については，以下のとおりである。

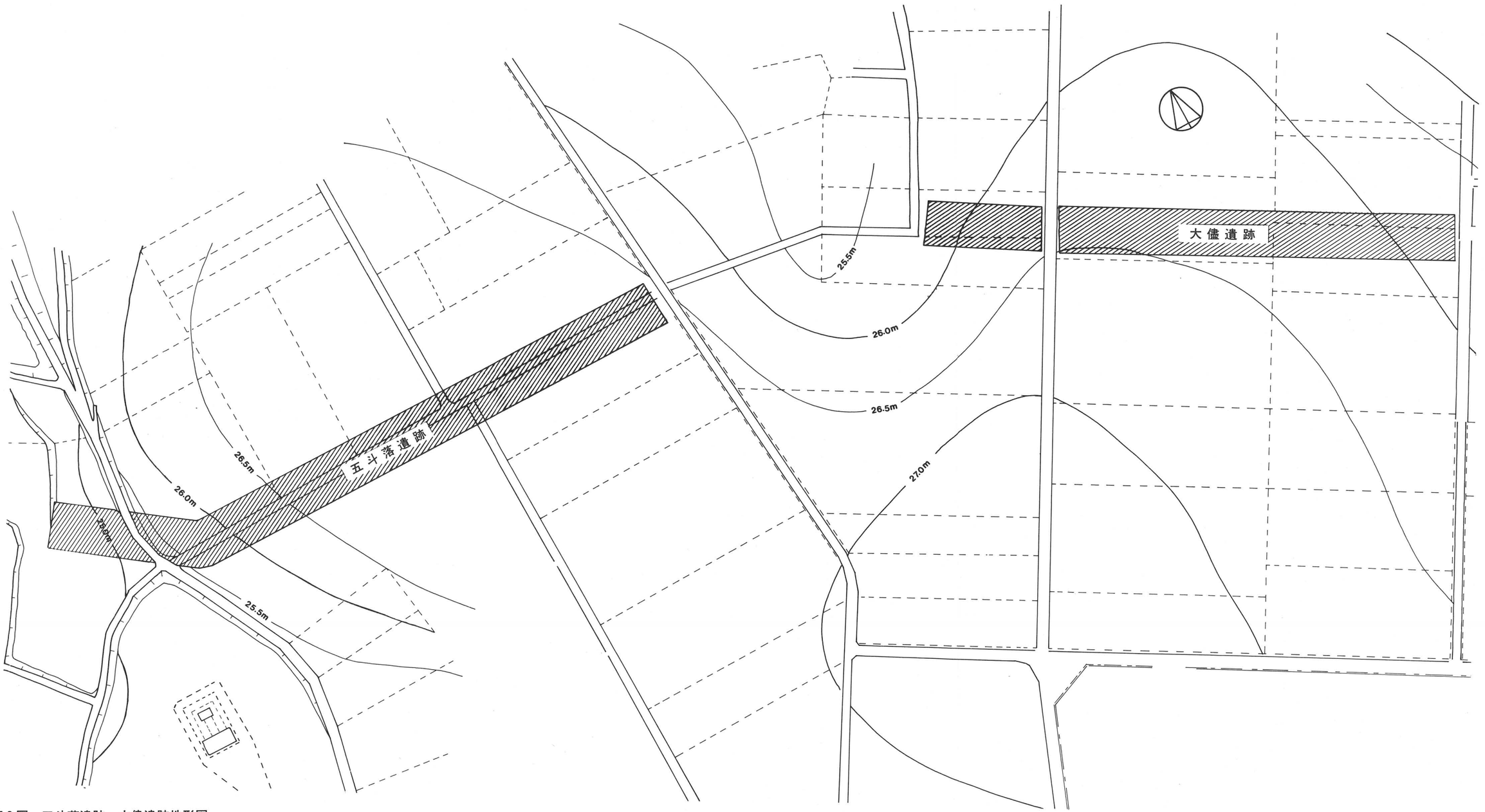
４　月　事務所及び発掘調査に必要な現場倉庫設置，調査器材，器具等の搬入を行う。

５　月　２日，真木ノ内遺跡に於いて作業の安全を願い，鍬入式を挙行する。６日から16日まで，五斗落遺跡他５遺跡の発掘調査前全景写真撮影と幅１ｍのトレンチ試掘を実施する。その結果，原ノ内遺跡からは縄文時代前期に比定する土器片が微量と，屋外炉と思われるファイヤーピットが２基検出され，ゴリン山遺跡からも縄文時代早・前期の土器片少量と土坑１基が検出された。他の４遺跡からは，それぞれ竪穴住居跡等の遺構が検出されたため，原ノ内遺跡を除く５遺跡を22日から27日まで重機により遺構確認面までの表土除去を行う。

６　月　２日から五斗落遺跡の第１号住居跡から発掘調査を開始する。五斗落遺跡中央部から西部にかけて，多数の遺構が検出される。

７　月　五斗落遺跡から多数の遺構が検出されたため，２日に茨城県教育委員会と水資源開発公団及び茨城県教育財団による三者協議が行われ，１ヶ月の調査期間延長と調査面積304㎡を追加する事で一致する。８日・９日，追加面積の表土除去を行う。

８　月　７日から五斗落遺跡と並行して，大儘遺跡の発掘調査を開始する。18日，五斗落遺跡の遺構分布が濃厚なため調査の進展を図る必要からステレオ写真測量を行う。19日から26日まで五斗落遺跡の補足調査を行う。27日，五斗落遺跡発掘調査後全景航空写真撮影を行い，五斗落遺跡の発掘調査を終了する。28日，水資源開発公団へ五斗落遺跡の引き渡しを行う。



第 8 図　五斗落遺跡・大儀遺跡地形図

9　月　1日から大儘遺跡と並行して弁ノ内遺跡の発掘調査を開始する。19日，大儘遺跡他4遺跡の航空写真撮影を行い，20日，五斗落遺跡・大儘遺跡・弁ノ内遺跡の現地説明会を実施する。22日から大儘遺跡・弁ノ内遺跡の補足調査に入り，並行してゴリン山遺跡の発掘調査を開始する。25日に大儘遺跡，29日に弁ノ内遺跡の発掘調査を終了する。30日，水資源開発公団へ大儘遺跡・弁ノ内遺跡の引き渡しを行う。

10　月　1日，真木ノ内遺跡を，9日に原ノ内遺跡の発掘調査を開始する。22日に原ノ内遺跡及びゴリン山遺跡，23日には，真木ノ内遺跡の発掘調査がそれぞれ終了する。31日，水資源開発公団へ原ノ内遺跡・ゴリン山遺跡・真木ノ内遺跡の引き渡しを行い，6遺跡における発掘調査の全てを終了した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

五斗落遺跡他5遺跡は，土浦市手野町字五斗落4,674ほかに所在する。土浦市は，茨城県の中央部よりやや南寄りに位置し，北は新治郡千代田村，東は同郡出島村に接するとともに，更に霞ヶ浦の土浦入に面し，南は稲敷郡阿見町，牛久市，南西は筑波郡谷田部町，西は新治郡桜村，北西は同郡新治村に接する。市域は，東西約9.9km，南北12.5km，面積約92㎢で，人口は120,477人，（昭和61年11月1日現在）を数える。市街地は，桜川が霞ヶ浦に注ぐ河口付近に形成されたデルタ上に営まれており，国鉄常磐線土浦駅付近を中心にして東西・南北約1.4kmの幅で広がっている。近年，桜川河口の埋立事業に伴い市街地が広がっているが，他は水田となっており稲や蓮根の栽培が行われている。土浦市は，首都東京から60km圏内に位置することから，周辺の牛久市等とともに東京のベットタウン化が進み，また，首都圏衛星都市の工業生産都市として大企業等の工場進出をみるに至っている。更に現在建設が進められている筑波研究学園都市の玄関口として，また，周辺町村のショッピングセンターとしてこれまで以上に発展することが予想されている。

土浦市の周辺地形は，西茨城郡岩瀬町の鏡池に源を発して筑波山の西側を南流して霞ヶ浦の土浦入に注ぐ桜川による沖積低地によって，新治台地と呼ばれる北部の台地と，筑波稲敷台地と呼ばれる南部の台地とに分けられる。新治台地は，筑波山塊の東方に延び，標高25～27m，筑波稲敷台地はやや低く24m前後の洪積台地である。地質は，成田層群上部を主体とし，その上に灰白色の常総粘土，更にその上を厚さ2.3mほどの関東ローム が不整合に覆っている。五斗落遺跡他5遺跡は，この新治台地の南端で，手野町下郷から東側に延びた幅0.5km，標高24m前後の台地の北側，東西約1.6kmにわたって所在している。当遺跡の北側は，桜川の北東側を流れる境川の支流に沿って手野町下郷から白鳥町にかけて支谷が入り込んで急斜面を呈し，南側は，急傾斜をしながら霞ヶ浦沿岸の沖積低地へと続いている。

五斗落遺跡他5遺跡の調査面積は，6,279㎡で，五斗落遺跡は2,010㎡，大儘遺跡は1,559㎡，弁ノ内遺跡は946㎡，原ノ内遺跡は442㎡，ゴリン山遺跡は774㎡，真木ノ内遺跡は548㎡である。調査前の現況は，五斗落遺跡，大儘遺跡，弁ノ内遺跡は畑，原ノ内遺跡，ゴリン山遺跡，真木ノ内遺跡は山林である。

第2節　歴史的環境

茨城県南部，とりわけ霞ヶ浦沿岸を中心に利根川下流域は，古くから人々の絶好の居住地で，数多くの遺跡が所在している。県内で発見された縄文時代の貝塚は350か所ほどであるが，なかでも霞ヶ浦周辺からは集中して発見され，明治12年に飯島魁・佐々木忠次郎博士によって調査された陸平貝塚(1)（美浦村）を筆頭に安食平貝塚(2)（出島村），若海貝塚(3)（玉造町），椎塚貝塚(4)（江戸崎町），上高津貝塚(5)（土浦市）等は早くから知られた著名な遺跡である。とりわけ国指定史跡の上高津貝塚は，古くは明治39年に江見水蔭により調査されたのを初めとし，近年の調査の成果から縄文時代の後・晩期にわたって馬蹄形状に形成された，ヤマトシジミを主とする貝塚遺跡であることが判明している。このように霞ヶ浦周辺は，縄文時代を中心とした遺跡の宝庫である。

さて，五斗落遺跡他5遺跡は，土浦市の東部，新治台地の南端に位置しており，当遺跡の周辺は，沖積低地と洪積台地が複雑に入りくみ，海の幸・山の幸に恵まれた自然環境を有しているため生活に好条件を備えていたことと思われる。原始時代には平地林や波静かな入江を利用して狩猟・採集・漁撈活動が営まれ，古代になると沖積低地を利用しての水稲耕作が行なわれ多くの遺跡が残されている。

先土器時代の遺跡は，県内において90遺跡ほど報じられている(6)が，土浦市内においては発掘調査はなされておらず，わずかに「土浦の遺跡(7)」の中で，先土器時代の可能性があると思われる石器6点が報告されているのみである。

縄文時代になると，前述の上高津貝塚を含めて早期から晩期にかけての遺跡が146か所確認されている。早期の遺跡は「土浦の遺跡」によると花輪台式土器片が出土している座王遺跡や今回調査したゴリン山遺跡〈42〉，原ノ内遺跡〈39〉，真木ノ内遺跡〈43〉等である。前期から中期にかけては遺跡数も増加し，当遺跡周辺でも同様の傾向がみられる。前期の遺跡では，花積下層式土器を出土する下ノ山遺跡(8)，浮島式土器が出土している清水遺跡(9)〈57〉やゴリン山遺跡がある。中期の遺跡は，加曽利Ｅ式土器や阿玉台式土器の散乱している上縄遺跡(10)，加曽利Ｅ式土器主体の神立遺跡(11)〈3〉等である。後・晩期になると遺跡数は激減し，富士塚遺跡(12)（後期）〈41〉，加曽利Ｂ式土器等が出土している上高津貝塚（後・晩期）等である。

弥生時代の遺跡は少なく，永国遺跡(13)や今回調査した弁ノ内遺跡(14)〈28〉等があげられるが，弥生時代単独のものではなく，前者は，縄文から古墳時代にかけて，後者は，弥生と平安時代の複合遺跡である。

古墳時代の遺跡としては，愛宕山古墳群(15)，市指定の王塚古墳(16)〈59〉，后塚古墳(17)〈58〉と今回調査して複合遺跡であることが判明した五斗落遺跡(18)〈25〉，大儘遺跡(19)〈26〉等がある。この他に調査された遺跡としては，昭和47～49年度に茨城県住宅供給公社の開発に伴って調査された烏山遺

跡群[20]や，昭和54年度に土浦市教育委員会により調査された池の台遺跡[21]がある。前者からは，勾玉・管玉が多量に出土した工房跡や土師器，須恵器等を伴う遺構が多数検出されている。

時代が進んで律令制下の奈良・平安時代の土浦市は，茨城郡大津郷，筑波郡清水・佐野郷，信太郡高来・島津・阿弥郷，河内郡大村郷に所属していたようである[22]。この時代の遺跡は，発掘調査された烏山遺跡群，永国遺跡の他に五斗落遺跡，大儘遺跡等も含まれる。特に，平安時代になると集落が増加していることが遺跡の分布調査で確認されている[23]。

中世の城館跡としては，太鼓櫓，鐘楼が現存し，昭和60年度土浦市教育委員会により調査された土浦城[24]の他に，木田余城[25]，今泉城[26]，神立館[27]等が所在している。

以上のように土浦市内の洪積台地及び沖積低地上には原始，古代から中世の各時代にわたり多くの遺跡が点在しており，古代文化の繁栄が推察される。

註

(1) I,IIJIMA,AND C.SASAKI,「OKADAIRA SHELL MOUNDS AT HITACHI」(『TŌKYŌ DAIGAKU.SCIENCE DEPARTMENT』MEMOIR VOL.1.PART1) TŌKYŌ DAIGAKU 明治16年

(2), (3), (4) 茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』 茨城県教育委員会 昭和52年

(5) 「土浦市史」 土浦市史縄さん委員会 昭和50年

(6) 茨城県史料 考古資料編先土器・縄文時代

(7) 「土浦の遺跡」 土浦市教育委員会 1984

(8)～(19) (7)に同じ

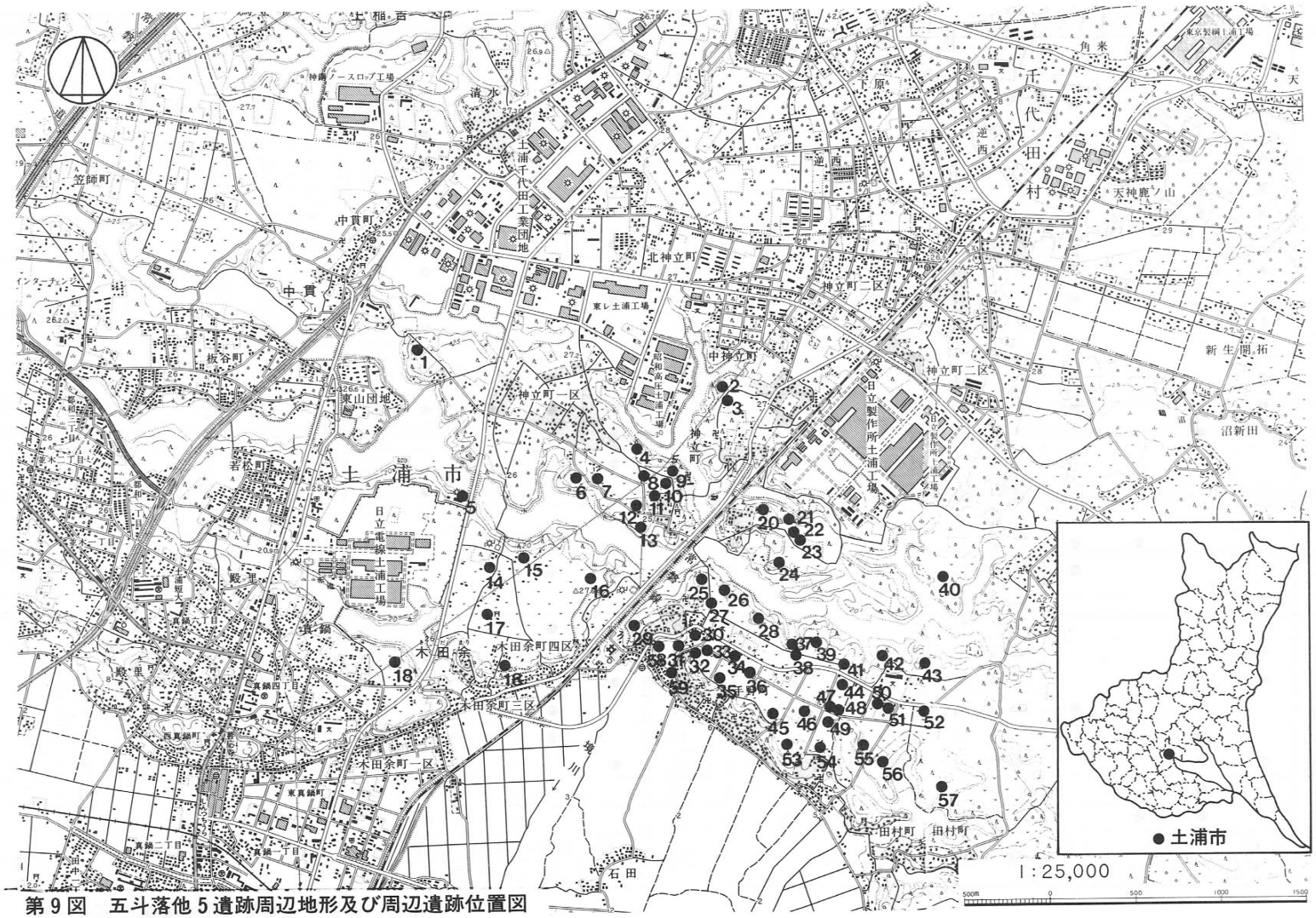
(20) 「土浦市烏山遺跡群」 茨城県住宅供給公社 昭和50年

(21) 「池の台遺跡調査報告」 土浦市教育委員会 昭和56年

(22) (5)に同じ

(23) (7)に同じ

(24)～(27) (5)に同じ



第９図　五斗落他５遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図

表1　五斗落遺跡他5遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代			
			縄文	弥生	古墳	歴史
1	前山遺跡	包蔵地	●			
2	セイベイ山遺跡	包蔵地	●			
3	神立遺跡	包蔵地	●			●
4	松山遺跡	包蔵地	●		●	
5	一丁田台遺跡	包蔵地			●	
6	前神田遺跡	包蔵地				●
7	中道遺跡	包蔵地	●			●
8	八幡遺跡	包蔵地	●		●	
9	青木遺跡	包蔵地	●			
10	天神平遺跡	包蔵地			●	●
11	坪内遺跡	包蔵地	●			
12	蟹久保遺跡	包蔵地	●			
13	花輪遺跡	包蔵地	●			
14	宮崎遺跡	包蔵地				●
15	宮脇遺跡	包蔵地				●
16	宝積遺跡	包蔵地	●	●	●	●
17	籾買場遺跡	包蔵地			●	●
18	八坂前遺跡	包蔵地	●		●	
19	御霊遺跡	包蔵地	●			
20	根本西遺跡	包蔵地	●			●
21	根本東遺跡	包蔵地	●			
22	前原北遺跡	包蔵地	●			●
23	不動塚	塚跡				
24	前原遺塚	包蔵地				●
25	五斗落遺跡	集落跡	●		○	○
26	大儘遺跡	集落跡	●		○	○
27	羽田亦遺跡	包蔵地			●	●
28	弁ノ内遺跡	包蔵地		○		○
29	立遺跡	包蔵地	●			●
30	手野宮脇遺跡	包蔵地			●	●

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代			
			縄文	弥生	古墳	歴史
31	姫塚遺跡	包蔵地		●	●	
32	ドンドン塚古墳跡	古墳跡			●	
33	上大津西小学校前遺跡	包蔵地			●	●
34	平外遺跡	包蔵地			●	
35	久保上遺跡	包蔵地	●		●	
36	長堀遺跡	包蔵地				●
37	薬師遺跡	包蔵地				●
38	薬師塚	塚跡				
39	原ノ内遺跡	包蔵地	○			●
40	中台西遺跡	包蔵地	●			
41	富士塚遺跡	包蔵地	●	●		
42	ゴリン山遺跡	包蔵地	○			○
43	真木ノ内遺跡	集落跡			○	○
44	天王後遺跡	包蔵地	●			
45	坂の上遺跡	包蔵地			●	
46	天王前遺跡	包蔵地	●		●	●
47	八坂東遺跡	包蔵地				●
48	井戸山遺跡	井戸跡				
49	宿後遺跡	包蔵地				●
50	天王場遺跡	貝塚	●			
51	手野原口遺跡	包蔵地	●			●
52	戍開供養塚	塚跡				
53	手野・天神遺跡	包蔵地	●		●	●
54	平遺跡	包蔵地			●	●
55	吉池遺跡	包蔵地				●
56	向原遺跡	包蔵地	●			
57	清水遺跡	包蔵地	●			
58	后塚古墳	古墳			●	
59	王塚古墳	古墳			●	

○印は，今回発掘調査した遺跡である。

第３章　遺構・遺物の記載方法

第１節　遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は，下記の要領で統一した。

1　使用記号

竪穴住居跡―ＳＩ　　土坑－ＳＫ　　溝－ＳＤ　　屋外炉－ＦＰ　　ピット－Ｐ

2　遺構に伴う施設等の表示方法

3　土層の分類

土層観察は，『新版標準土色帖』（小山忠正・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用し，整理の段階で土層を次のように分類記号化し，図中にその記号をもって載せた。

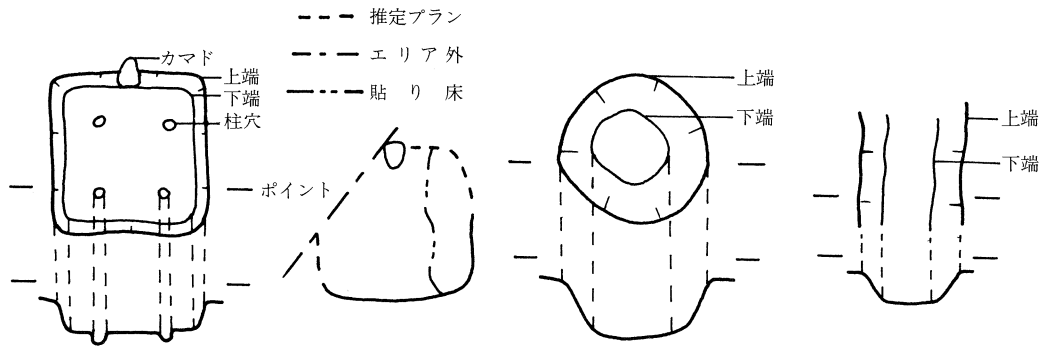
番号	土色名	色相	明度／彩度	含有物
1	黒色	Hue 7.5YR	2/1	a・ ローム粒子多量
2	黒褐色	Hue 7.5YR	3/2　2/2　3/1	a　 ローム粒子中量
3	極暗褐色	Hue 7.5YR	2/3	a′ ローム粒子少量
4	暗褐色	Hue 7.5YR	3/4　3/3	a″ ローム粒子極少量
5	褐色	Hue 7.5YR	4/6　4/4　4/3	b・ ローム小ブロック多量
6	灰褐色	Hue 7.5YR	5/2　4/2	b　 ローム小ブロック中量
7	にぶい褐色	Hue 7.5YR	5/4　5/3	b′ ローム小ブロック少量
8	明褐色	Hue 7.5YR	5/8　5/6	b″ ローム小ブロック極少量
9	橙色	Hue 7.5YR	6/8　6/6	c・ ローム中ブロック多量
10	黄橙色	Hue 7.5YR	7/8	c　 ローム中ブロック中量
11	暗褐色	Hue 10YR	3/4　3/3	c′ ローム中ブロック少量
12	にぶい黄褐色	Hue 10YR	5/4	c″ ローム中ブロック極少量
13	褐色	Hue 10YR	4/6　4/4	d・ ローム大ブロック多量
14	黄褐色	Hue 10YR	5/6	d　 ローム大ブロック中量
15	にぶい黄橙色	Hue 10YR	7/4　6/4	d′ ローム大ブロック少量
16	明黄褐色	Hue 10YR	7/6　6/6	d″ ローム大ブロック極少量
17	赤黒色	Hue 10R	2/1	e・ 焼土粒子多量
18	極暗赤褐色	Hue 10R	2/3　2/2	e　 焼土粒子中量
19	暗赤褐色	Hue 10R	3/3　3/2	e′ 焼土粒子少量
20	暗赤色	Hue 10R	3/6	e″ 焼土粒子極少量
				f・ 焼土ブロック多量
				f　 焼土ブロック中量
				f′ 焼土ブロック少量
				f″ 焼土ブロック極少量

番号	土色名	色相	明度／彩度				含有物	
21	赤色	Hue	10R	4/8			g•	炭化粒子多量
22	赤黒色	Hue	2.5YR	2/1			g	炭化粒子中量
23	極暗赤褐色	Hue	2.5YR	2/2	2/4	2/3	g′	炭化粒子少量
24	暗赤褐色	Hue	2.5YR	3/4	3/6	3/3 3/2	g″	炭化粒子極少量
25	赤灰色	Hue	2.5YR	4/1			h•	炭化物多量
26	灰赤色	Hue	2.5YR	5/2			h	炭化物中量
27	赤褐色	Hue	2.5YR	4/6	4/8		h′	炭化物少量
28	明赤褐色	Hue	2.5YR	5/8	5/6		h″	炭化物極少量
29	にぶい橙色	Hue	2.5YR	6/3			i•	粘土多量
30	黒褐色	Hue	5YR	2/2	3/1		i	粘土中量
31	極暗赤褐色	Hue	5YR	2/3	2/4		i′	粘土少量
32	暗赤褐色	Hue	5YR	3/4	3/2	3/3 3/6	i″	粘土極少量
33	灰褐色	Hue	5YR	5/2	4/2		j•	砂粒多量
34	にぶい赤褐色	Hue	5YR	4/3	4/4		j	砂粒中量
35	赤褐色	Hue	5YR	4/8	4/6		j′	砂粒少量
36	明赤褐色	Hue	5YR	5/8	5/6		j″	砂粒極少量
37	にぶい橙色	Hue	5YR	6/3			k•	灰多量
38	橙色	Hue	5YR	7/8	6/8		k	灰中量
39	浅黄色	Hue	2.5Y	7/4			k′	灰少量
40	灰オリーブ色	Hue	5Y	5/3			k″	灰極少量
							l•	砂礫多量
							l	砂礫中量
							l′	砂礫少量
							l″	砂礫極少量
							m	ソフトローム
							n	撹乱

4　遺構実測図と作成方法

本書における遺構実測図の作成方法は，次のとおりである。

住居跡　　土坑　　溝



・住居跡は，縮尺1/20の原図をトレースして版組みし，それをさらに大きさに応じて，1/3・1/4に縮小して掲載した。

・土坑は，縮尺1/20の原図をトレースして版組みし，それをさらに1/3に縮小して掲載した。

・炉・カマドは，縮尺1/10の原図をトレースして版組みし，それをさらに大きさに応じて，1/3・

¼に縮小して掲載した。

・溝は，縮尺1/20の原図をトレースして版組みし，それをさらに⅓に縮小して掲載した。

・遺構からの出土遺物は，遺構平面図及び断面図に出土位置を下記のドットで表示し，接合できた土器は実線で結んだ。出土遺物に付したＰ番号は，遺物実測図の番号を指す。

●－土器片

・遺構実測図の掲載については，遺構番号順にした。

5　一覧表の見方について

(1) 住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向（長軸方向）	平面形	規模		床面	ピット数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							

・住居跡番号は，調査途中で住居跡と認められず調査を中止したものについては表から削除した。

・位置は，遺構が占める面積の割合が最も大きい小調査区名をもって表示した。

・主軸方向（長軸方向）は，座標北と主（長）軸のなす角度で示した。

・平面形は，掘り込み上面の形状を記した。

・規模の長軸×短軸は上面の計測値，壁高は残存壁高の計測値を記し，推定値については（　）を付した。なお，規模の欄で，長軸・短軸のいずれであるか不明のものは中央に記した。

・床面は，「平坦」，「凹凸」，「緩い起伏」に分類して表記した。

・ピット数は，その住居跡に伴うと考えられるピット数を記した。

・炉とカマドは，その種類を記し，検出されない住居跡については「――」を付した。

・覆土は，堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」，人為堆積の場合は「人為」，撹乱を受けている場合は「撹乱」，不明の場合は「不明」と記した。

・出土遺物は，出土量や主な遺物名を記した。

・時期は，出土遺物から時期判定の可能な範囲で，土器型式によって記した。

・備考は，重複関係等について記した。

第２節　遺物の記載方法

遺跡によって遺物の出土量は異なるが，可能なかぎり復元，実測，拓本等をして，できるだけ多く掲載した。

1　実測図の作成方法と掲載方法

(1)　作成方法

・土器は，四分割法を用い，中心線を挟んで左側に外面，右側に内面及び断面を実測した。

・石器，石製品は展開図法を基本とした。

・上記以外の遺物については，効果的と思われる方法で実測した。

(2)　掲載方法

・実測図の掲載にあたっては，⅓・¼に縮小したものを掲載の基準としたが，大きさによりそれ以外の縮尺を使用して掲載した図版もある。

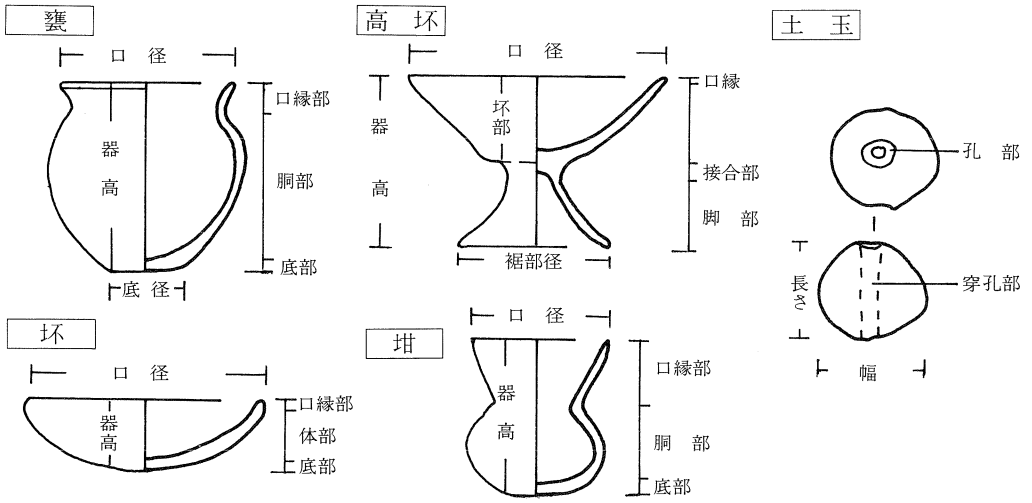
・実測図中の½・⅙の表示は原寸に対しての縮尺である。

・土器拓影図は，右側に断面を載せ，縮尺⅓で掲載した。なお，繊維を混入するものについては，断面に点を付加した。

・敲きの範囲は，←□□→（＝ ═ ＝）で表し，磨りの範囲は，←○○→（====）で表した。

2　出土遺物解説表について

遺構ごとの遺物を次のような表にまとめた。なお，遺物解説にあたっては，下記のような名称を用いて解説した。



(1)　出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　　考

・図版番号は，実測図中の番号と同じものである。

・法量は，A－口径，B－器高，C－底径・裾部径，D－高台径とし，単位はcmである。なお，

Ａ・Ｃ・Ｄの(　)は推定値であり，Ｂの(　)は残存高である。

・胎土・色調・焼成の欄は，上から胎土，色調，焼成の順で記した。色調については，前節の土層の分類と同じ土色帖を使用した。焼成については，良好，普通，不良に分類し，焼き締まって硬いものは良好，焼成があまく手でこすると器面が剥落するものを不良とし，その中間のものを普通とした。

・備考は，土器の完存率や土器の台帳番号（Ｐ番号）等を表示した。

(2) 球状土錘・管状土錘・土製品・石製品・石器一覧表

・球状土錘・管状土錘一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考

・土製品・石製品一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	大きさ（cm） 長さ×幅×厚さ	孔径(cm)	重量(g)	備　考

・石器一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	出土地点	大きさ（cm） 長さ×幅×厚さ	重量(g)	石　質

・図版番号は，実測図中の番号である。

・名称は，遺物の種類名を表示した。

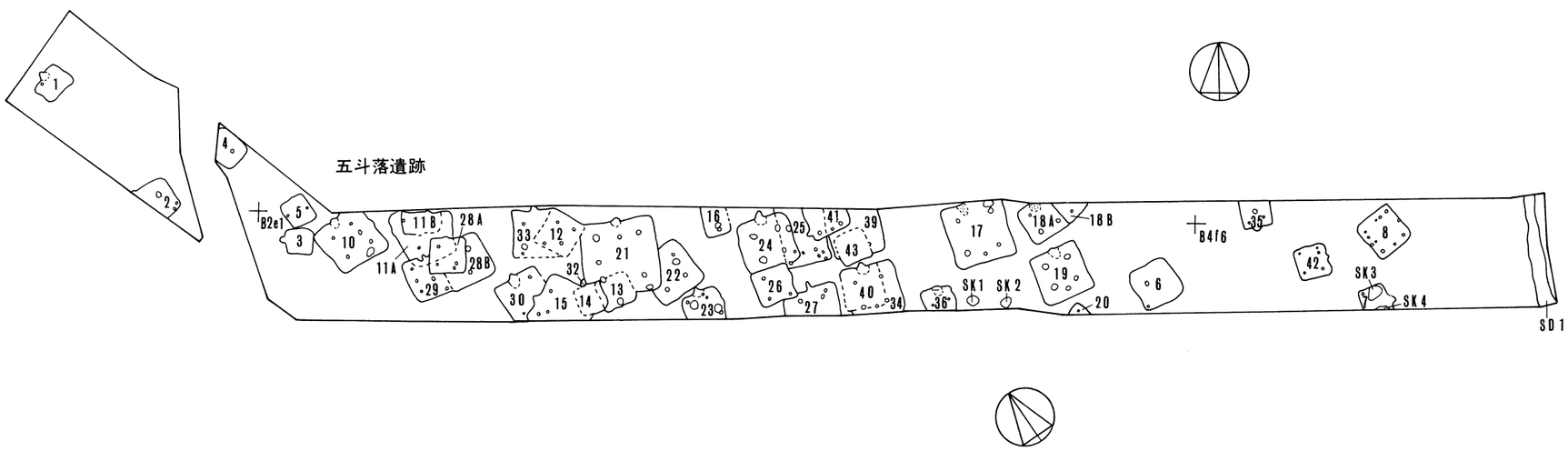
・台帳番号は，遺物の個別番号である。

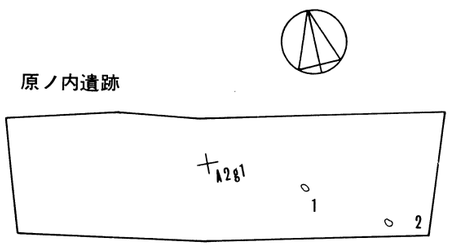
・出土地点は，出土した遺構あるいは小調査区名を記した。

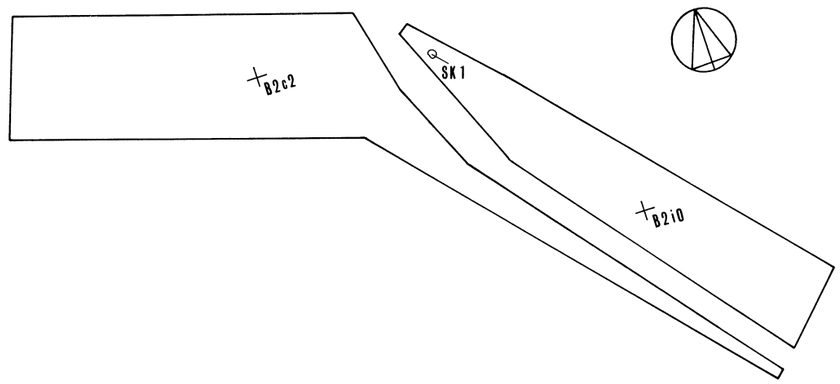
・大きさの欄の長さ・幅・厚さは，それぞれ最大長・最大幅・最大厚の計測値である。また，大きさ，重量の欄の(　)内数値は欠損した球状土錘・管状土錘・土製品・石製品・石器の残存値である。

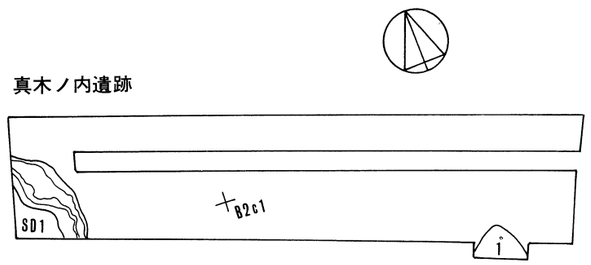
・石質の欄は，その石器を作る母岩の岩石名を表示した。

・備考の欄は，完存率等を表示した。









0 40m

第10図　五斗落遺跡他５遺跡全体図

第４章　遺跡の調査結果

第１節　五斗落遺跡

１　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県土浦市大字手野町字五斗落4,674ほかに所在し，調査面積は2,010㎡である。現況は平坦な畑である。遺跡は，台地の北西端部に位置し，東方約70ｍに大儘遺跡が存在する。遺構は，調査区域全体から古墳時代，奈良・平安時代に比定される竪穴住居跡42軒，土坑４基，溝１条が検出された。特に遺跡の中央部から西側部にかけて重複する住居跡が多く検出された。遺物は，土師器や須恵器が主で，甕形土器，壺形土器，坏形土器，高台付坏形土器，盤形土器，提瓶等が出土し，その他の遺物としては，土製品，磨製石斧，紡錘車，鉄鏃等が住居跡及び遺構外から出土した。土坑及び溝に伴う遺物は出土しなかった。

２　遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

第１号住居跡（第11図）

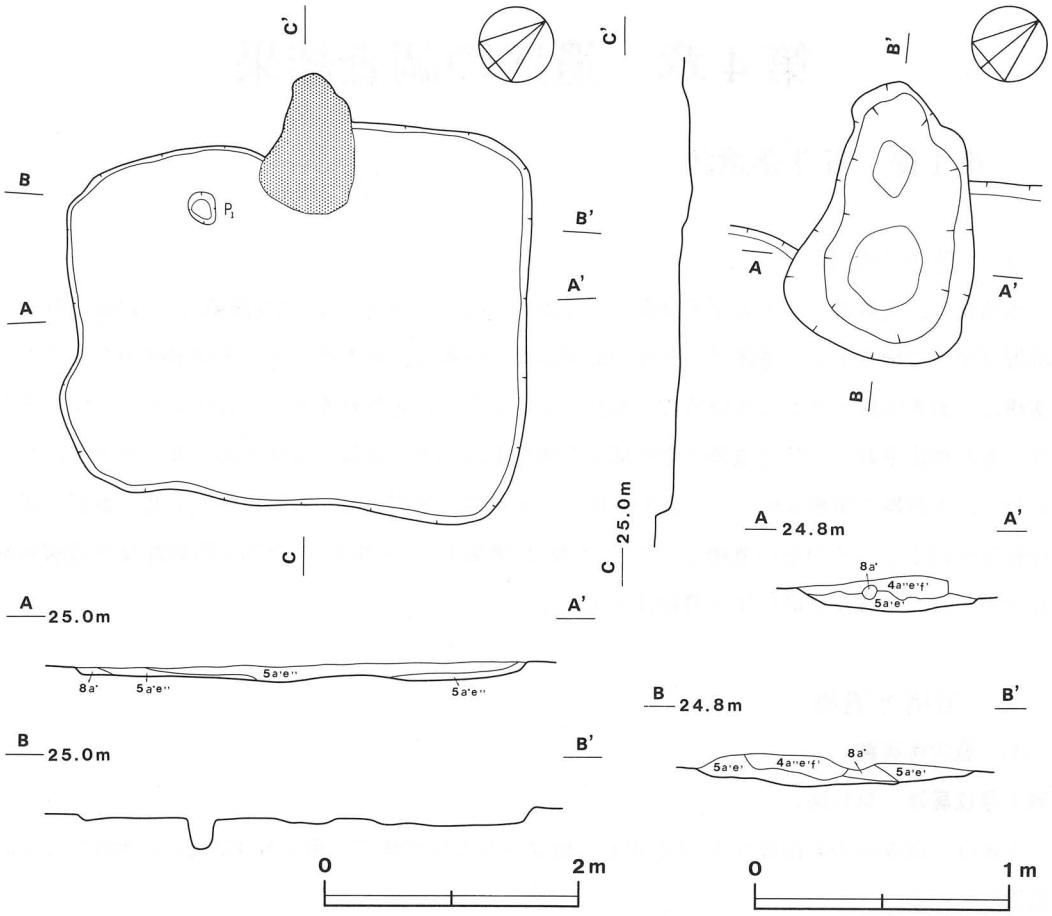
本跡は，調査区の北西部B1b$_5$区を中心に確認された住居跡で，第２号住居跡の北西側13.1ｍに位置している。

平面形は，長軸3.56ｍ・短軸3.0ｍの隅丸長方形を呈し，主軸方向はＮ－48°－Ｗを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は５～11cmである。床面は，全体的に平坦で，カマドの前面及び中央部は硬く踏み固められている。ピットは，西コーナー部寄りに長径26cm・短径21cm・深さ23cmの規模を有するものが１か所検出されただけである。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設されていたが崩れており，天井部・袖部の構造等は不明である。長さは110cm，幅73cmである。掘り方は，壁を幅56cmで48cmほど切り込んでいる。火床は，長径34cm・短径28cmの楕円形を呈し，床面を７cmほど掘り込んでいる。

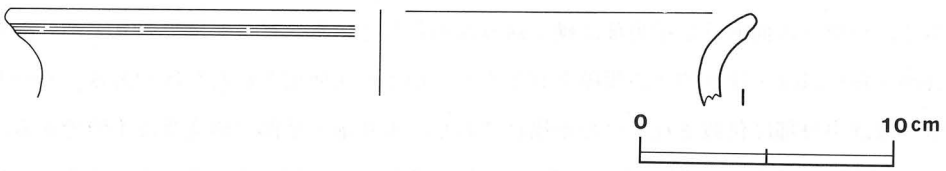
覆土は２層から成り，上層はローム粒子を少量含む褐色土，下層はローム粒子を多量，焼土粒子を極少量含む褐色土が凹レンズ状に自然堆積している。

遺物は，全体にまばらに散らばって，覆土下層から床面にかけて土師器片22点が出土しただけである。

本跡は，出土遺物や規模・形状及びカマドを有することなどから古墳時代の鬼高期以降に比定されるものと思われる。



第11図　第１号住居跡実測図



第12図　第１号住居跡出土遺物実測図

第１号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第12図 1	甕形土器 土師器	A (29.2) B (3.3)	口縁部は外反して立ち上がる。	内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母 灰褐色 普通	5％ P１

第２号住居跡（第14図）

本跡は，調査区の西部B1e$_8$区を中心に確認された住居跡で，第１号住居跡の南東側13.1ｍに位置している。

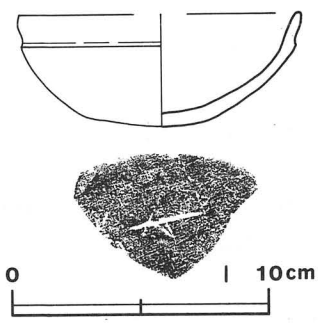
本跡は，南西側がエリア外にかかっているため，平面形・規模等の詳細は不明である。

調査した部分から推定すると，平面形は，長方形を呈し，北東壁の長さは3.75ｍで，主軸方向はＮ－33°－Ｗを指しているものと思われる。壁は，締まりのあるロームで，北西壁・北東壁はほぼ垂直に，南東壁は外傾して立ち上がっている。壁高は，８～13cmである。壁下には，壁溝が北西壁から北東壁にかけて，上幅23～31cm，深さ７～８cmの規模で周回している。床面は，中央部に多少凹凸がみられ，ロームが硬く踏み固められている。ピットは，５か所検出された。P$_5$は，長径95cm・短径82cm・深さ64cmの規模を有し，位置から主柱穴の一部と思われる。P$_1$～P$_4$は，長径24～29cm，短径19～27cm，深さ14～27cmの規模を有し，壁際に位置するピットで，補助柱穴的なものと思われる。カマドは，北西壁の西コーナー寄りに付設されていたが，崩れており，天井部・袖部の構造等は不明である。規模を推定すると，長さ120cm・幅76cmほどである。掘り方は，壁を幅65cmで，22cmほど丸く切り込んでいる。火床は，長径40cm・短径24cmほどの楕円形を呈し，床面を12cmほど掘り込んでいる。

覆土は２層からなり，上層にローム粒子・焼土粒子を極少量含む暗褐色土が，下層にローム粒子を少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，土師器片105点，須恵器片２点が出土している。これらの土器片は，カマドの北東側のほぼ床面及びP$_1$の覆土内から大半が出土している。

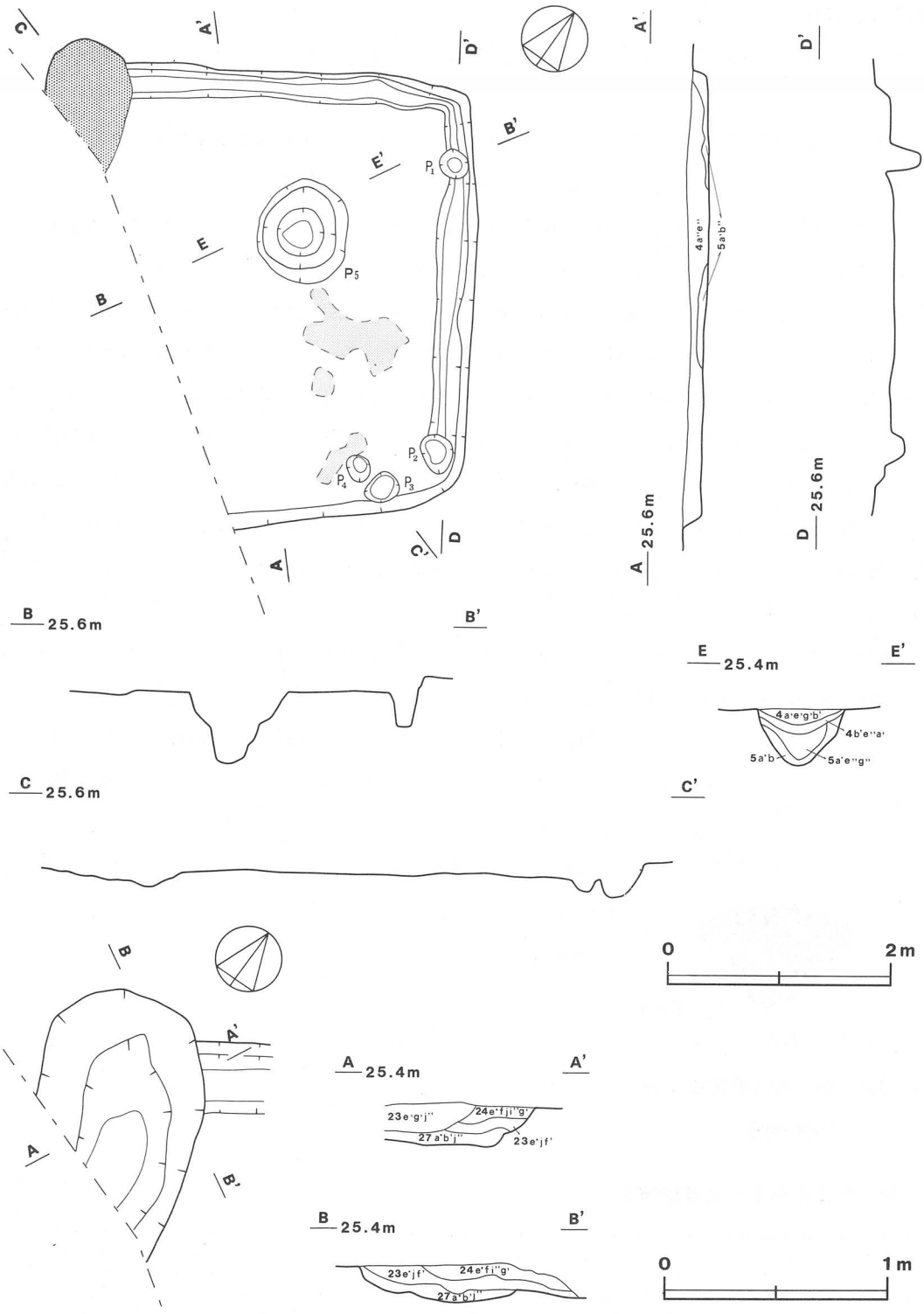
本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



第13図　第２号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第13図 1	坏形土器 土師器	A（11.0） B　4.4	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	30% Ｐ２ 内面黒色処理



第14図　第２号住居跡実測図

第３号住居跡（第15図）

本跡は，調査区の西部B2f2区に確認された住居跡で，第５号住居跡の南側0.1ｍに位置している。

平面形は，長軸3.10ｍ・短軸2.85ｍの不整長方形を呈し，主軸方向は，Ｎ－93°－Ｗを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は浅く３～５cmである。床面は，全体的に平坦で，比較的良く踏み固められている。ピットは，北壁際から壁外にかけて２か所検出されており，直径はいずれも24cm・深さ27cmの規模を有している。カマドは，西壁のやや北西コーナー寄りに付設されているが，崩れており，天井部・袖部の構造等は不明である。規模を推定すると，長さは88cm・幅63cmほどである。掘り方は，壁を幅54cmで74cmほど切り込んでいる。火床は，長径38cm・短径20cmほどの楕円形を呈し，床面を18cmほど掘り込んでいる。

覆土は２層からなり，上層にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を極少量含む暗褐色土が，下層にローム粒子を多量含む明褐色土がレンズ状に自然堆積している。本跡は，ほぼ中央部の覆土下層から床面にかけて少量の焼土粒子と炭化材が検出されていることから焼失家屋と考えられる。

遺物は少なく，わずかに土師器片10点，土製品１点が出土しているだけである。

本跡は，時期判定する出土遺物がないが，形状・規模及びカマドを有することなどから古墳時代の鬼高期以降に比定されるものと思われる。

第４号住居跡（第17図）

本跡は，調査区の北西部B1d0区を中心に確認された住居跡で，第５号住居跡の北西側6.5ｍに位置している。本跡は，北西側が農道建設時に削平されて失われているため，平面形・規模等の詳細は不明である。

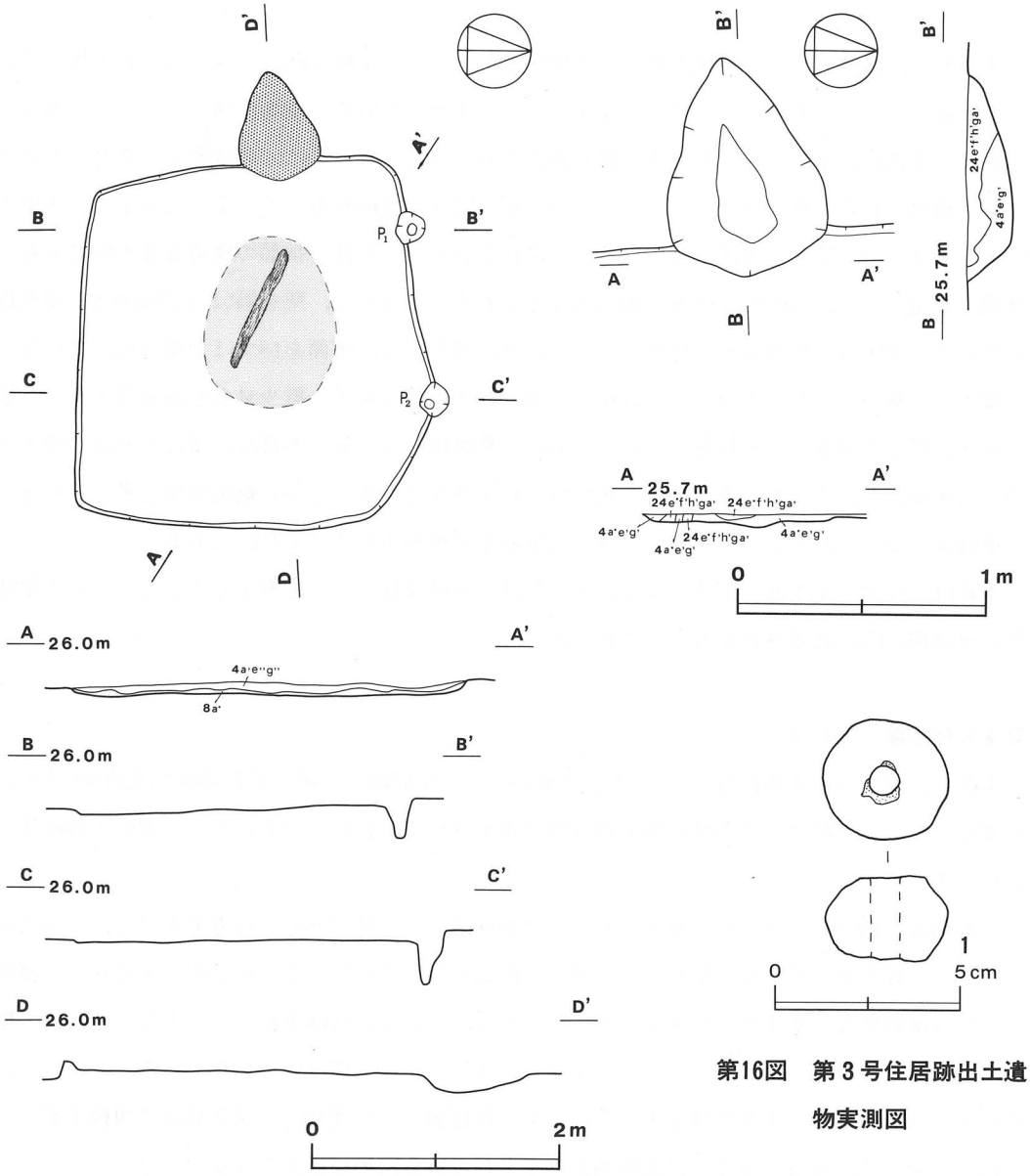
平面形は，調査した部分から推定すると，長軸4.01ｍ・短軸3.16ｍの長方形を呈し，主軸方向はＮ－46°－Ｗを指していると思われる。壁は北西部が削平されているため不明であるが，一部残っている南西壁及び北東壁・南東壁は締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は12～42cmである。床面は，全体的に平坦で，ロームが硬く踏み固められている。ピットは，やや東コーナー寄りに１か所検出されただけで，長径44cm・短径40cm・深さ48cmの規模を有している。カマドは，前述したように北西側が削平されているために検出できなかった。

覆土は３層からなり，上層にローム粒子・焼土粒子を極少量含む褐色土が，中層から下層もローム粒子を少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，土師器片157点，縄文式土器片２点が出土している。縄文式土器片は，周囲からの流れ込みと思われ，本跡に伴う土師器片は，住居跡の中央部より若干西側寄りの覆土下層から床面にかけて出土している。大形の甕形土器（第18図１）が，中央部よりやや南側の床面より若干浮

いて出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

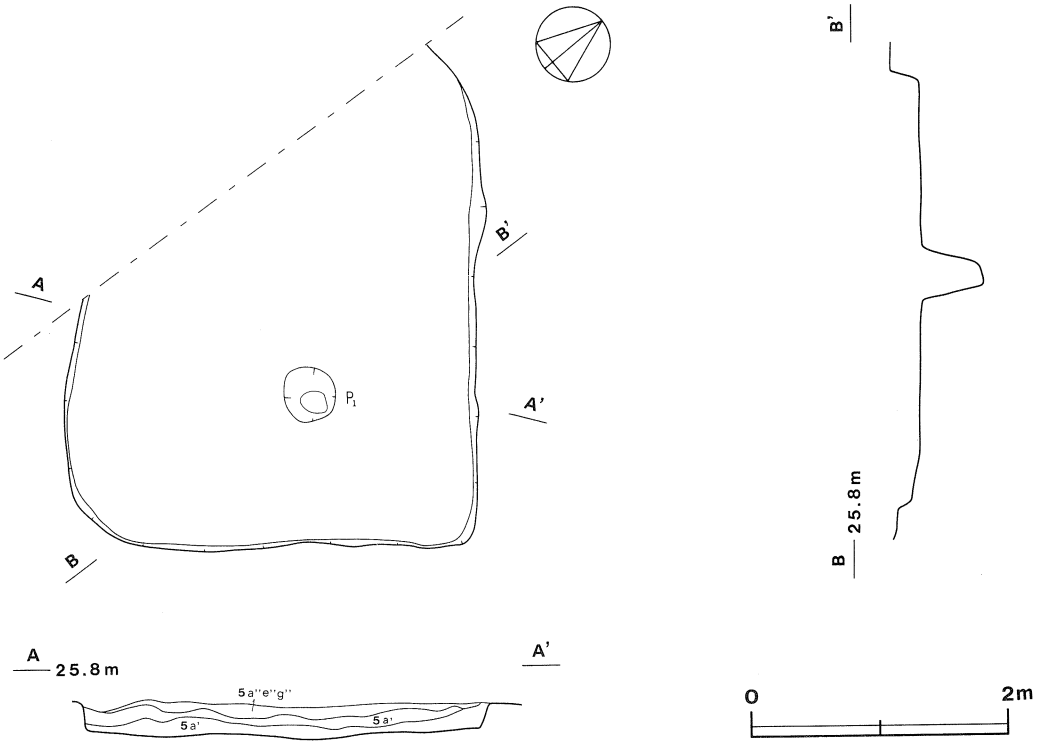


第15図　第３号住居跡実測図

第16図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名　　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(ｇ)	備　　考
第16図 1	球状土錘	ＤＰ２	3.4×2.2	0.8	23	100% 両方穿孔



第17図　第４号住居跡実測図

第５号住居跡（第19図）

本跡は，調査区の西部B2e2区を中心に確認された住居跡で，第10号住居跡の北西側1.2ｍに位置している。

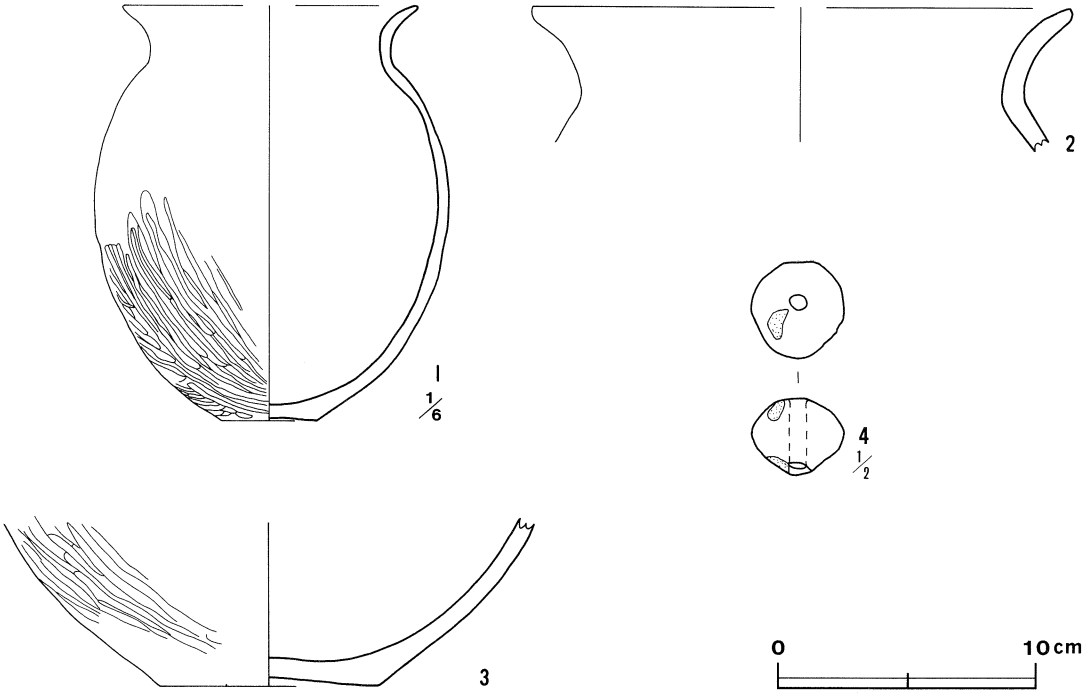
平面形は，一辺3.02ｍの方形を呈し，主軸方向はＮ－33°－Ｗを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，12～27cmである。壁溝は，上幅17～27cm・深さ３～５cmでカマドを除いて全周している。床面は，東コーナー側がやや低くなっているが，ほぼ平坦で，カマドの手前部分から中央部にかけては特に硬く踏み固められている。ピットは，北東壁・南西壁際のほぼ中央部に２か所検出され，長径24・27cm・短径21・24cm・深さ20・28cmの規模を有している。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設されているが崩れており，天井部・袖部の構造等は不明である。規模を推定すると，長さ66cm・幅52cmほどである。掘り方は，壁を幅42cmで11cmほど切り込み，奥壁を煙道にしている。火床は，床面を２cmほど掘り込んでいる。

覆土は，自然堆積の様相を呈している。上層にローム粒子を少量含む褐色土が，下層にローム粒子・ローム小ブロックを少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は少なく，土師器片４点，石１点が点在して出土している。中央部からやや東側寄りの床

面から坏形土器（第20図１）が，東コーナー部寄りの床面から若干浮いた状態で坏形土器（第20図２）が出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



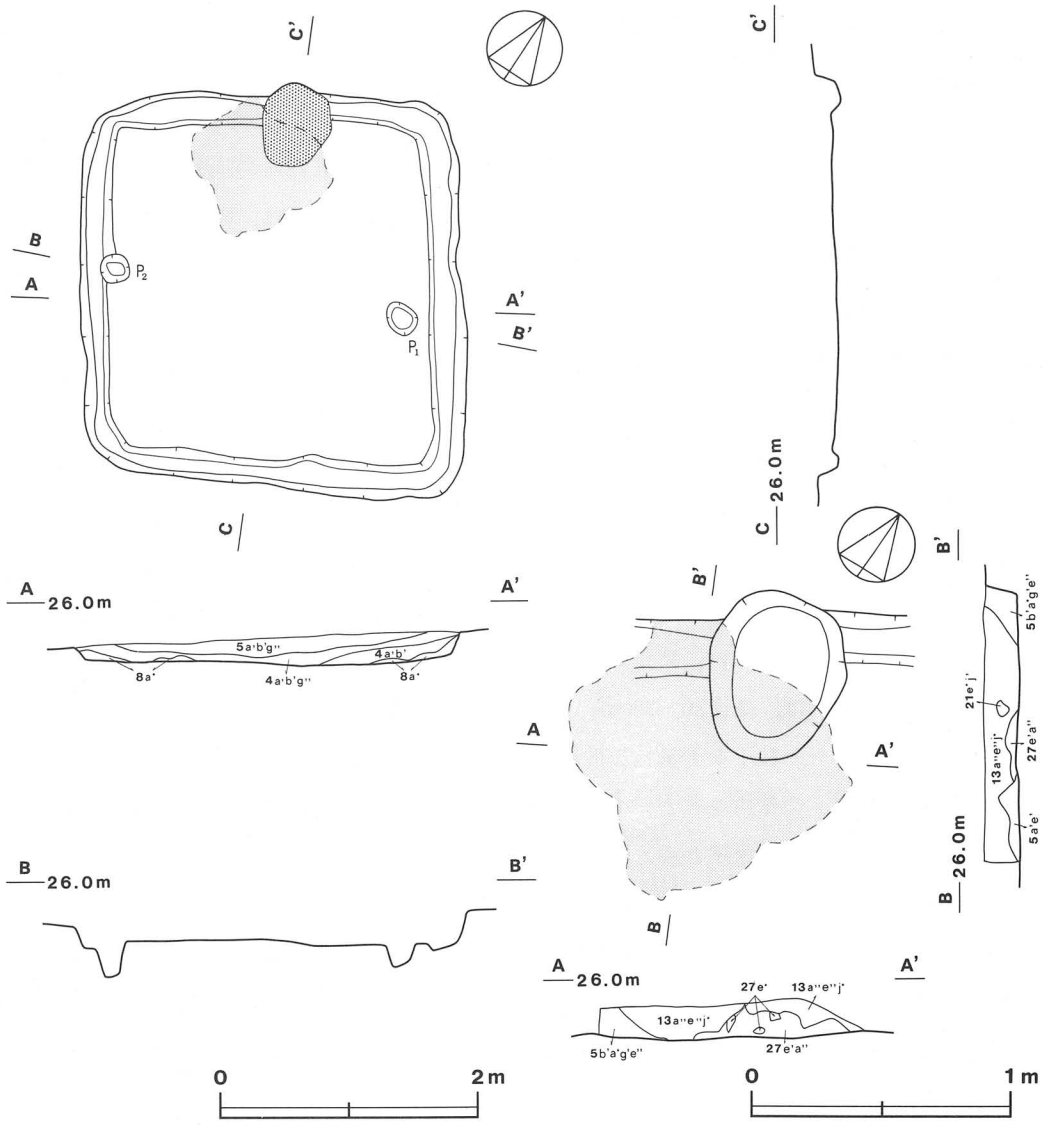
第18図　第４号住居跡出土遺物実測図

第４号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	甕形土器 土師器	A (23.0) B 32.7 C 7.4	底部は平底で，胴部は長胴を呈し，胴部中位に最大径を有する。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ，胴部外面下位斜位のヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 暗赤褐色 普通	70% P３
2	甕形土器 土師器	A (21.2) B (5.3)	口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 普通	５% P４
3	甕形土器 土師器	B (6.4) C (8.6)	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面は縦位のヘラ磨き，内面はヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	10% P５

第４号住居跡出土土製品解説表

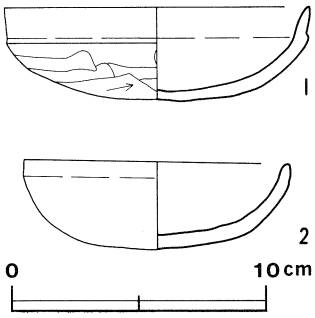
図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
第18図 4	球状土錘	DP３	2.0×2.5	0.4	10	100% 一方穿孔



第19図　第５号住居跡実測図

第５号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	坏形土器 土師器	A　12.0 B　3.7	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	95% P６
2	坏形土器 土師器	A（10.5） B（ 3.5）	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	砂粒 明褐灰色 普通	85% P７



第20図　第５号住居跡出土遺物実測図

第６号住居跡（第21図）

本跡は，調査区の東部B4g$_4$区を中心に確認された住居跡で，第19号住居跡の東側4.1ｍに位置している。

平面形は，長軸4.75ｍ・短軸4.72ｍの隅丸方形を呈し，長軸方向はＮ－59°－Ｅを指している。壁は，締まりのあるロームで，南西壁は外傾して立ち上がっており，その他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は17～34cmである。床面は，多少凹凸がみられ，中央部に向かってやや低くなり，皿状を呈している。炉の東側及び中央部はロームが極めて硬く踏み固められている。

炉は，中央から西側に位置し，平面形は，長径83cm・短径71cmの楕円形を呈し，床面を深さ10cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉の北東側から南西側にかけての周囲は，５～10cmの幅で，高さ２～３cmほどの帯状の高まりがみられる。炉内には，焼土粒子・焼土ブロックが多量に堆積し，炉床は，ロームが熱を受け，レンガ状に赤化している。ピットは，東・南・西コーナーに接して３か所検出されており，規模や配列からいずれも主柱穴と考えられる。主柱穴は，長径26～29cm・短径22～28cm・深さ26～39cmの規模を有している。

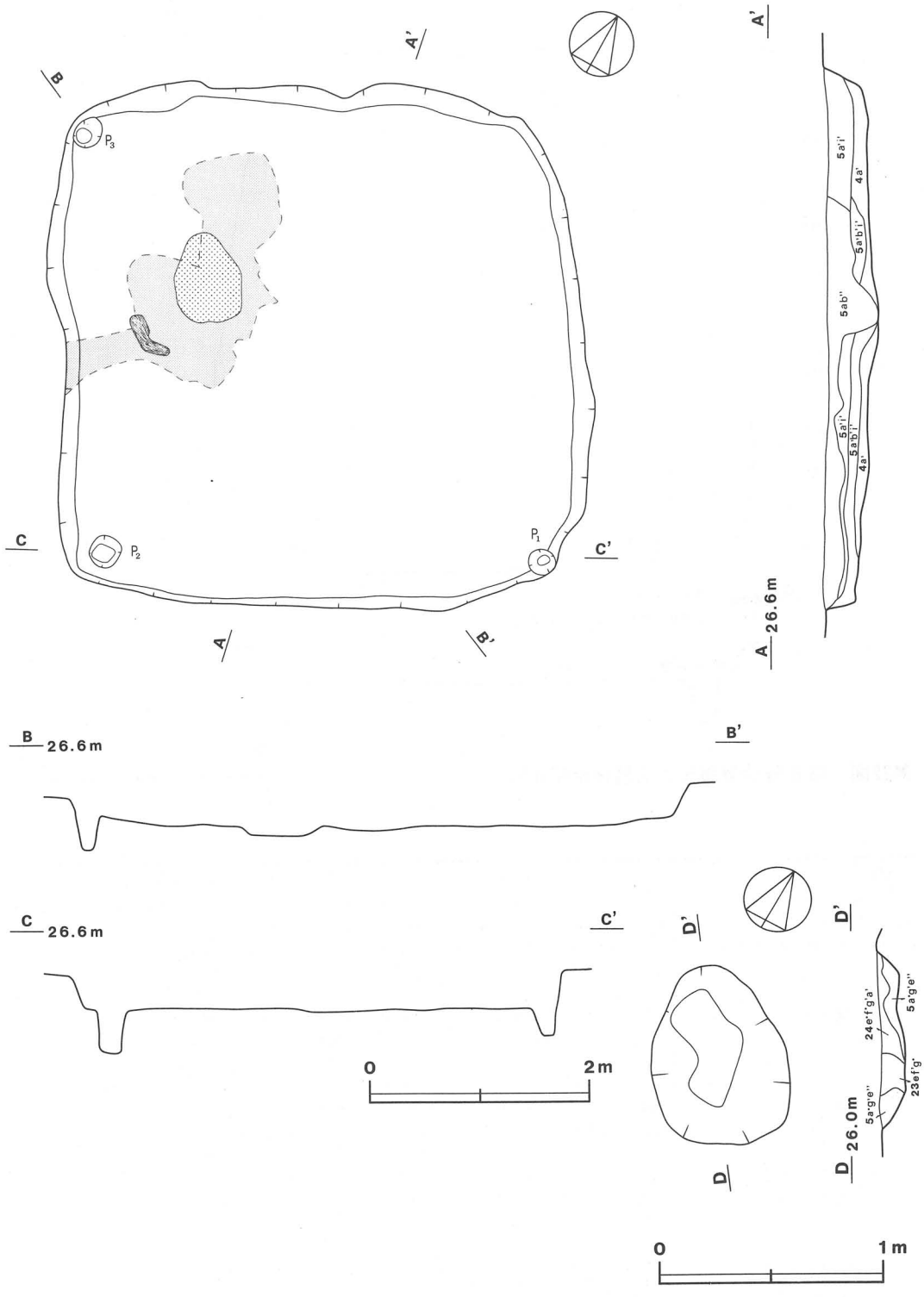
覆土は，上層にローム粒子を少量含む褐色土が，下層にローム粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。また，やや西コーナー寄りの床面から覆土中層にかけて多量の焼土と，少量の炭化材が検出されており焼失家屋と考えられる。

遺物は，土師器片107点，須恵器片11点が出土している。須恵器片は，覆土上層から出土しており，周囲からの流れ込みと思われる。本跡に伴う土師器片は，壁際の覆土上層から下層にかけて出土している。南コーナー部の覆土中層から完形の器台形土器（第23図８）が，西コーナー部の覆土中層から底部を欠いた甕形土器（第23図２），半完形に近い甕形土器（第23図１），器台形土器（第23図９）の脚部が出土している。

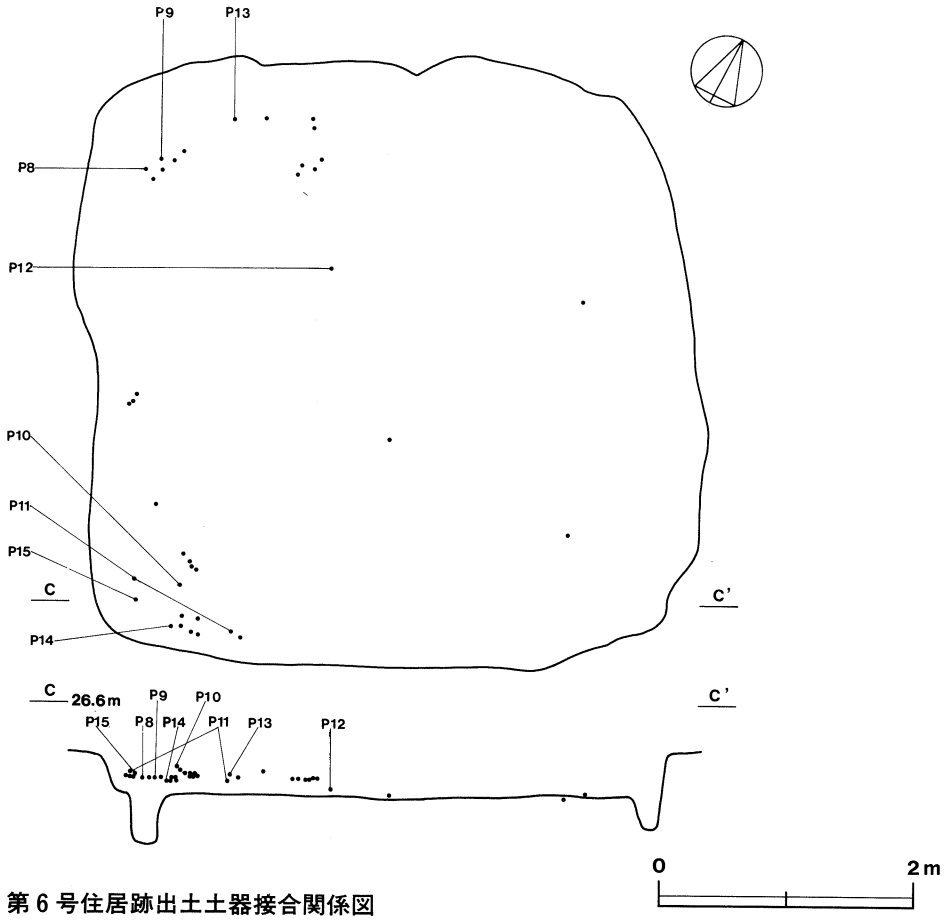
本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定されたものと思われる。

第６号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第23図 1	甕形土器 土師器	A（16.2） B（19.4）	胴部は扁平な球形を呈し，口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面斜位のハケ目，内面ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	40% P９



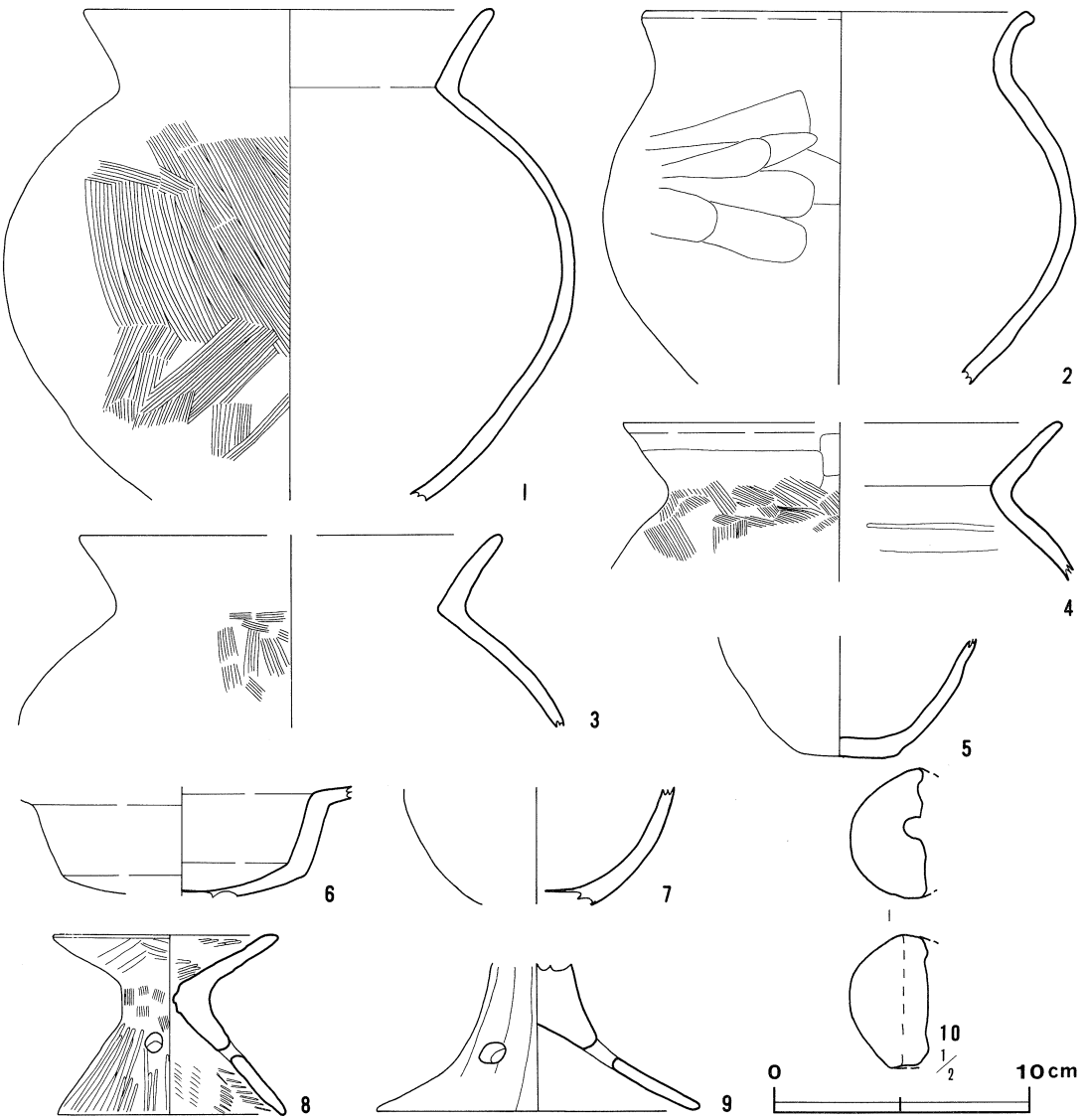
第21図　第6号住居跡実測図



第22図　第６号住居跡出土土器接合関係図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第23図 2	甕形土器 土師器	A 15.4 B (14.7)	胴部はほぼ球形を呈し，口縁部は「く」の字状を呈する頸部より外反しながら立ち上がる。	口縁部外面横ナデ，内面ヘラナデ，胴部外面ヘラナデ，胴部内面ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	70% P８
3	甕形土器 土師器	A (16.7) B (7.6)	胴部は丸く張り，口縁部は「く」の字状に開き，端部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面ハケ目，内面ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	5% P11
4	甕形土器 土師器	A (17.0) B (5.8)	口縁部は「く」の字状を呈する頸部よりほぼ外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面斜位のハケ目，胴部内面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	5% P10
5	埦形土器 土師器	B (4.7) C 4.1	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	内・外面ヘラナデ。	砂粒 褐灰色 普通	40% P16
6	高坏形土器 土師器	B (4.5)	坏底部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，体部は外傾して立ち上がる。口縁部は横に開く。	坏部内・外面横ナデ。	石英・長石 にぶい赤褐色 普通	40% P14

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第23図 7	高坏形土器 土師器	B（4.6）	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	内・外面横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	50% P12
8	器台形土器 土師器	A　8.9 B　7.1 D　9.1	脚部は「ハ」の字状に開き，器受部は外傾して立ち上がる。脚部上位3か所に孔が穿たれ，接合部に中央孔がある。	器受部内・外面雑な横位のヘラ磨き，脚部外面縦位のヘラ磨き，脚部内面横位の雑なハケ目。	砂粒 明赤褐色 普通	100% P15
9	器台形土器 土師器	B（5.9） D（12.6）	脚部裾部は大きく開いている。脚部下位には直径 1.2cmほどの孔が3か所に穿たれている。	脚部内・外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P13



第23図　第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第23図 10	球状土錘	DP4	3.4×(2.0)	0.6	(18)	50% 一方穿孔

第7号住居跡（第25図）

本跡は，調査区の東部B4g0区を中心に確認された住居跡で，第42号住居跡の南東側3.5mに位置している。本跡は，北側で第3号土坑，南側で第4号土坑により切られている。

本跡は，南側の3分の1程度がエリア外にかかっているため推定であるが，平面形は，長方形を呈し，北壁の長さ2.84mで，主軸方向はN－73°－Eを指しているものと思われる。壁は，締まりのあるロームで，外傾して立ち上がっている。壁高は6～9cmである。床面は，残存する中央部が若干低くなり多少凹凸がみられ，ロームが硬く踏み固められている。ピットは，北西コーナー部に1か所検出され，長径36cm・短径47cm・深さ39cmの規模を有している。カマドは，東壁のほぼ中央部と思われるところに付設され，天井部，袖部は崩れているため規模・構造等の詳細は不明である。長さ129cm・幅98cmで，掘り方は，壁を幅102cmで78cmほど切り込んでいる。

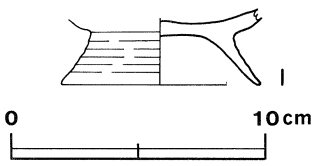
覆土は，自然堆積の様相を呈し，上層にはローム粒子・焼土粒子を極少量含む暗褐色土が，下層にはローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む褐色土が堆積している。

遺物は少なく，土師器片25点，須恵器片7点が出土している。

本跡は，出土遺物から平安時代の10世紀初頭に比定されるものと思われる。

第7号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第24図 1	高台付坏形土器 土師器	B（2.6） D　7.8	高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	高台は貼り付け，高台水挽き。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P17

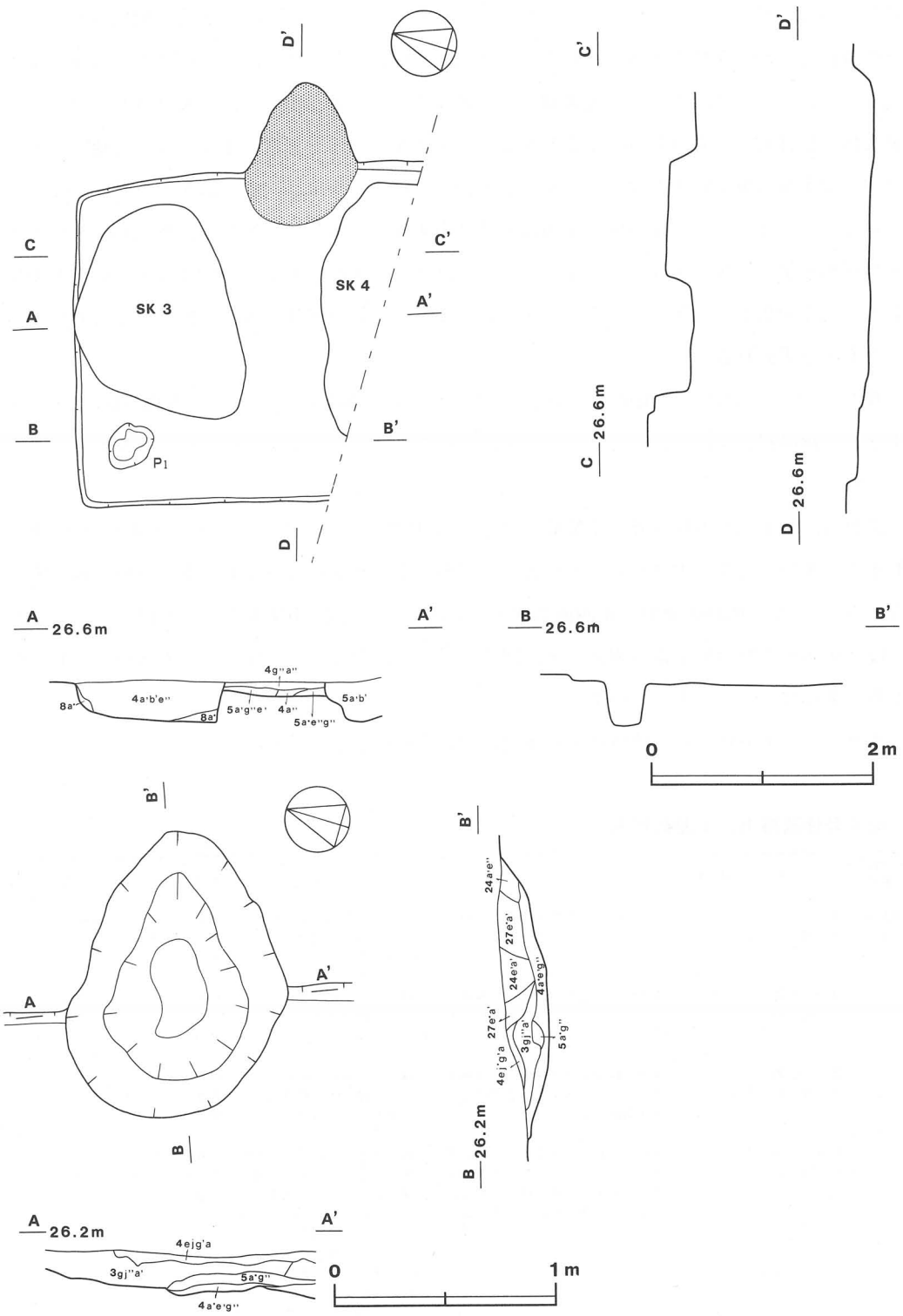


第24図　第7号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡（第26図）

本跡は，調査区の東部B5f1区を中心に確認された住居跡で，第7号住居跡の北側2.7mに位置している。

平面形は，長軸4.6m・短軸4.5mの隅丸方形を呈し，長軸方向はN－39°－Wを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は13～24cmである。床面は，ピットの内側に多少凹凸がみられ，ロームが硬く踏み固められており，特に，炉の周囲は堅緻である。ピットは，11か所検出



第25図　第７号住居跡実測図

されている。P_2・P_4・P_8・P_{11}は，P_{11}の深さが9cmと浅いが，ほぼ方形状に配列されていることや規模などから主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径30～57cm・短径25～47cm・深さ9～32cmである。炉は，中央から北東側に2基検出されている。炉aは，北東壁寄りに位置し，平面形は，長径42cm・短径40cmの不定形を呈し，床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には中量の焼土粒子を含む明褐色土が堆積している。炉床は，ロームが熱を受けて赤く焼けている。炉bは，炉aの南西側，住居跡のほぼ中央部に位置し，平面形は，長径55cm・短径39cmの楕円形を呈し，床面を8cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には焼土粒子を多量に含んだ暗赤褐色土が堆積している。炉床は，炉aよりもレンガ状に焼けており，使用頻度が高かったものと思われる。

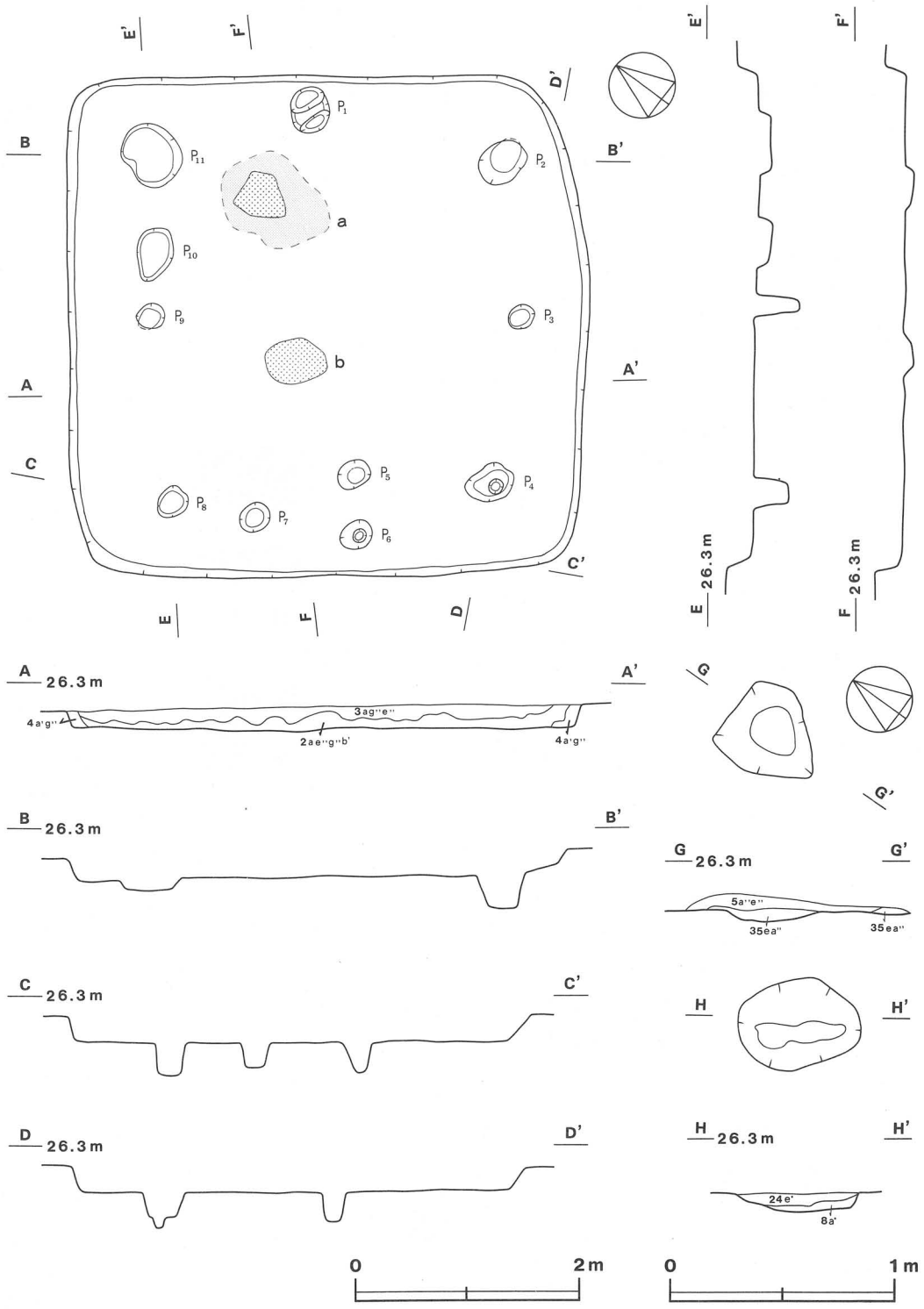
覆土は，凹レンズ状に自然堆積しており，ローム粒子を中量，焼土粒子・炭化粒子を極少量含んでいる。上層には極暗褐色土が，下層には黒褐色土が，壁際には暗褐色土がそれぞれ締まりをおびて堆積している。

遺物は，弥生式土器片6点，土師器片113点，須恵器片11点出土している。須恵器片は，覆土上層から出土しており，周囲からの流れ込みと思われる。頸部を欠いた土師器の壺形土器（第27図4－A・B）が住居跡の東側と南西側の床面から出土している。中央部よりやや西コーナー部寄りのほぼ床面から器台形土器の脚部（第27図7・9）が，北コーナー部のほぼ床面から小形の甕形土器（第27図3）が出土している。

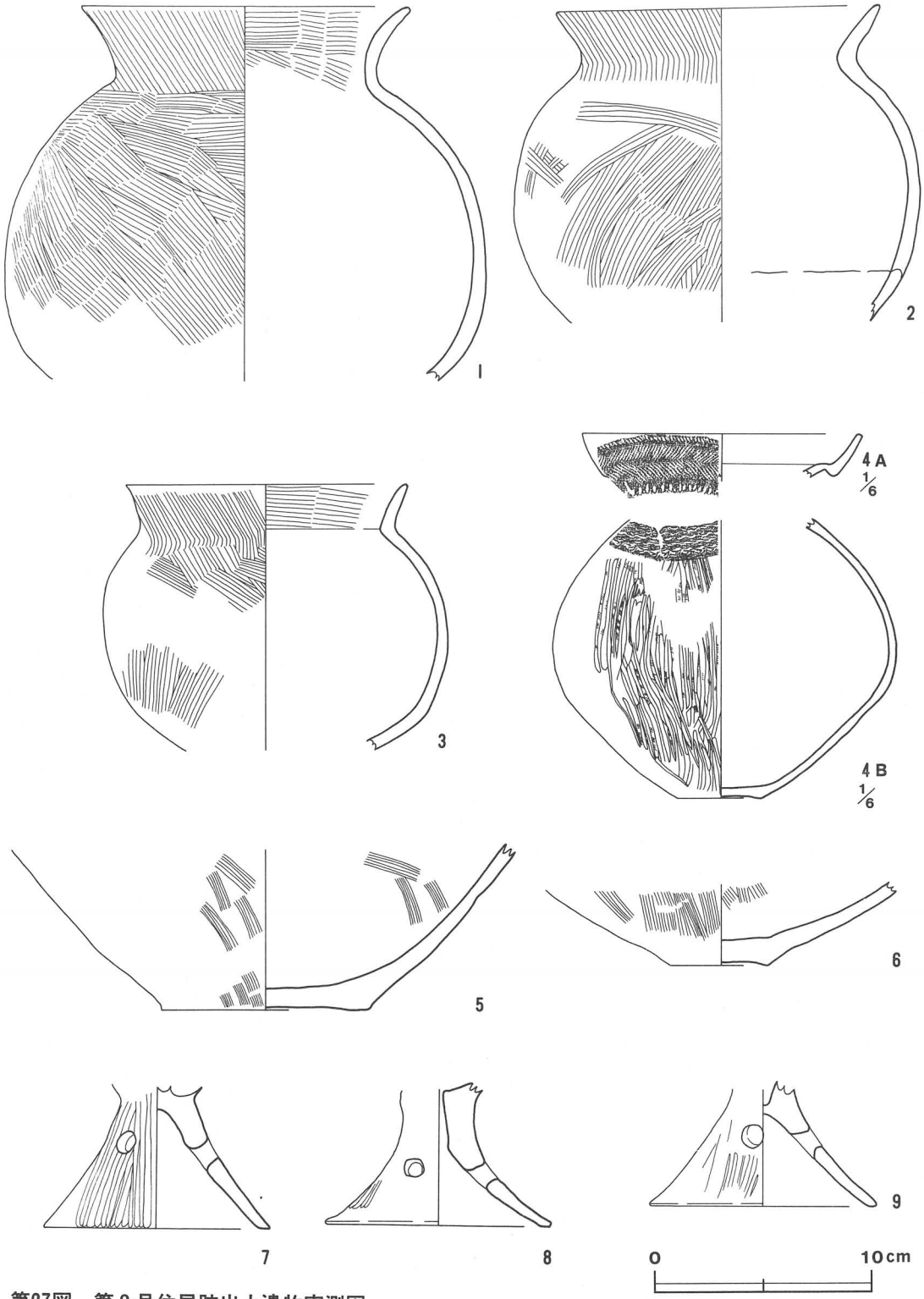
本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定されるものと思われる。

第8号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図1	甕形土器 土師器	A 15.1 B (17.5)	胴部は扁平な球形を呈し，口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部から胴部外面斜位のハケ目，口縁部内面横位のハケ目，胴部内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	65% P18
2	甕形土器 土師器	A 14.9 B (14.7)	胴部はほぼ球形を呈し，口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外傾して立ち上がる。	口縁部から胴部外面斜位のハケ目，口縁部内面横ナデ，胴部内面ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	70% P19
3	甕形土器 土師器	A 13.0 B (12.4)	胴部は扁平な球形を呈し，口縁部は「く」の字状を呈する頸部より外反気味に立ち上がる。	口縁部から胴部外面斜位のハケ目，口縁部内面横位のハケ目，胴部内面ヘラナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	70% P20
4-A・B	壺形土器 土師器	A 25.9 C 7.8	底部は平底で，胴部はソロバン玉状を呈して立ち上がり，胴部中位よりやや上位に最大径を有する。口縁部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	口縁部外面LRの縄文を横位に施文，その下にRLの縄文を横位に施文し，羽状縄文となっている。口唇部にRL縄文を施文，口縁部下端に絡条体をスリット状に押圧。口縁部内面横ナデ。胴部上位外面に結節回転文が施文，以下ハケ目の後縦位のヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	70% P23－A・B

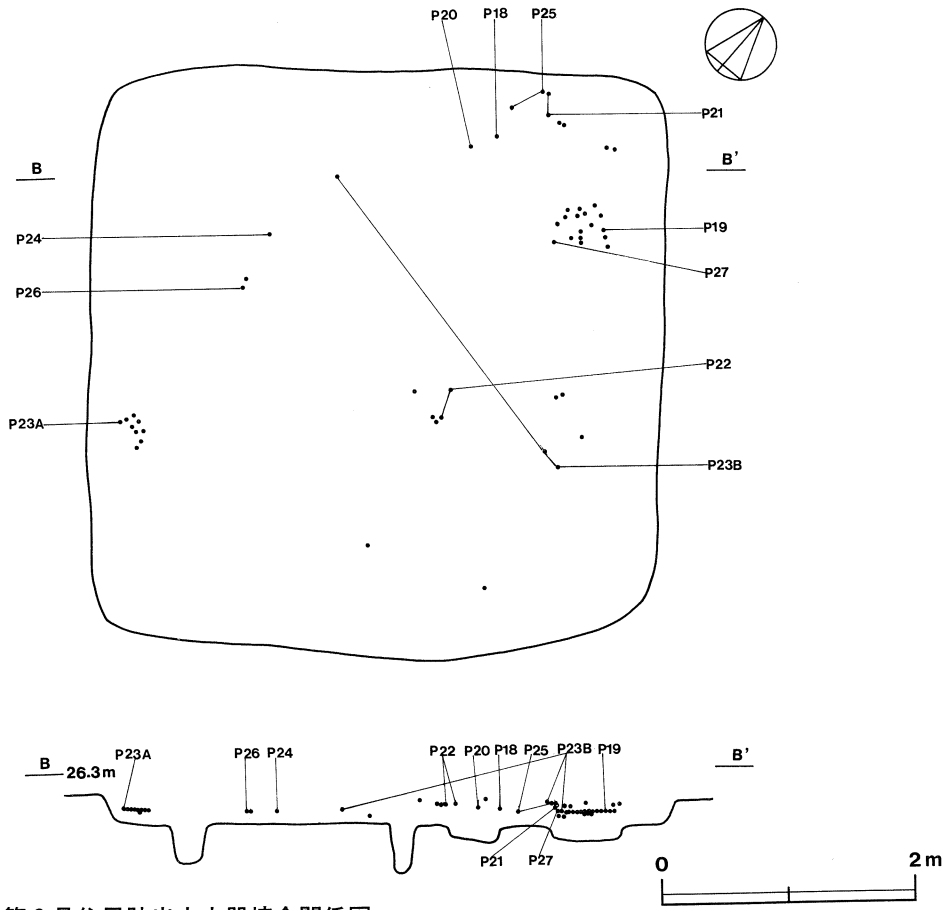


第26図　第８号住居跡実測図



第27図　第８号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第27図 5	甕形土器 土師器	B (7.3) C　9.6	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面雑なハケ目の後ヘラナデ，胴部内面雑なハケ目。	砂粒・長石 橙色 普通	20% P21
6	甕形土器 土師器	B (3.7) C　4.5	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内・外面斜位のハケ目。	砂粒 黒褐色 普通	10% P22
7	器台形土器 土師器	B (6.5) D　10.4	脚部は「ハ」の字状に開き，上位に3孔が穿たれている。	脚部外面縦位のヘラ磨き，脚部内面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	60% P24
8	器台形土器 土師器	B (6.2) D　10.5	脚部は「ハ」の字状に開き，脚部中位に3孔，接合部に中央孔が穿たれている。	脚部外面部分的にヘラ磨き，脚部内面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	60% P25
9	器台形土器 土師器	B (5.7) D　10.5	脚部は「ハ」の字状に開き，脚部上位に3孔が穿たれている。	脚部外面縦位のヘラ磨き，脚部内面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	60% P26



第28図　第8号住居跡出土土器接合関係図

第10号住居跡（第29図）

本跡は，調査区の西部B2f$_3$区を中心に確認された住居跡で，第11－A号住居跡の西側1.1mに位置している。

平面形は，長軸5.98m・短軸5.84mの不整隅丸方形を呈し，主軸方向はN－39°－Wを指している。壁は，締まりのあるロームで，南西壁は外傾して立ち上がり，その他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は10～38cmである。床面は，よく踏み固められて硬く，多少凹凸がみられる。特に，南東壁際のほぼ中央部のP$_3$とP$_5$の間の床面は若干高く盛り上がっている。貯蔵穴は，やや東コーナー寄りの南東壁際に検出され，P$_4$に接している。平面形は，長軸103cm・短軸71cmの隅丸長方形を呈し，床面を55cm掘り込んで構築されている。壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，底面は，ほぼ平坦で硬い。覆土は，上層に暗褐色土，下層に褐色土が堆積している。ピットは，6か所検出されており，規模や配列からP$_1$・P$_3$・P$_5$・P$_6$の4か所が主柱穴と考えられる。主柱穴は，長径38～42cm・短径36～41cm・深さ19～30cmの規模を有している。出入口は，カマドの位置やピットの配列等から南東壁側のP$_4$とP$_5$の間が考えられる。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設されている。天井部は崩れているが，袖部は少量の礫を含む粘土で構築され，内側は熱を受けてレンガ状に焼けている。長さ106cm・幅96cm・焚口部幅38cmである。掘り方は，壁を幅22cmで12cmほど切り込んでいる。火床は，長径39cm・短径28cmの楕円形を呈し，床面を5cmほど掘りこんでいる。

覆土は，上層にローム粒子・ローム小ブロックを少量含む極暗褐色土が，下層にローム粒子中量，焼土粒子を極少量含む暗褐色土が自然堆積している。

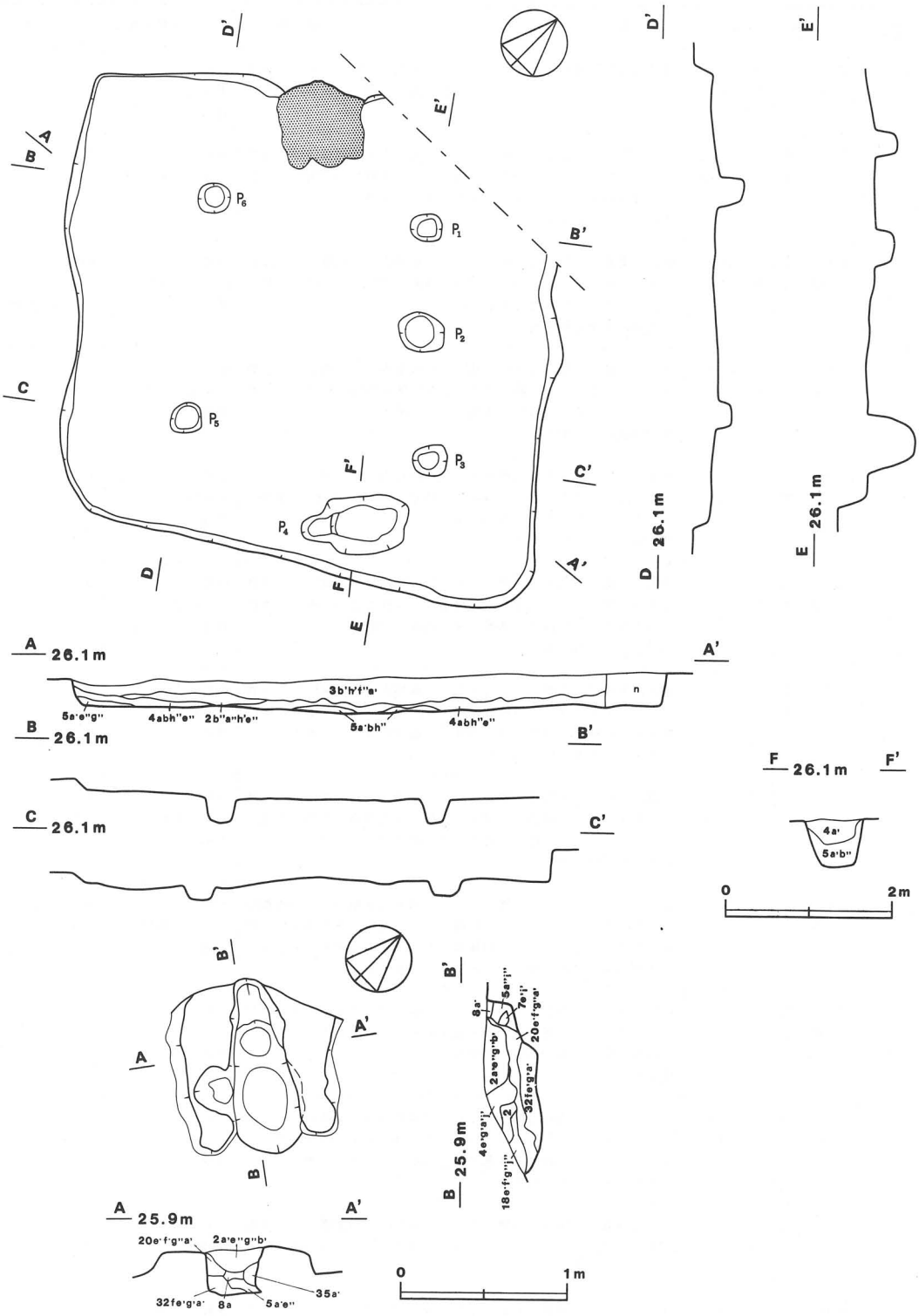
遺物は，土師器片385点，須恵器片4点，土製品5点，石2点が出土している。貯蔵穴近くのほぼ床面から土師器の坏形土器（第30図9）が，貯蔵穴内壁際より坏形土器（第30図8）が出土している。南コーナー部の床面より若干浮いた状態で坏形土器（第30図10）が，カマドの袖部に接してほぼ床面から坏形土器（第30図11）が，また，カマド内覆土から坏形土器（第30図12）が出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

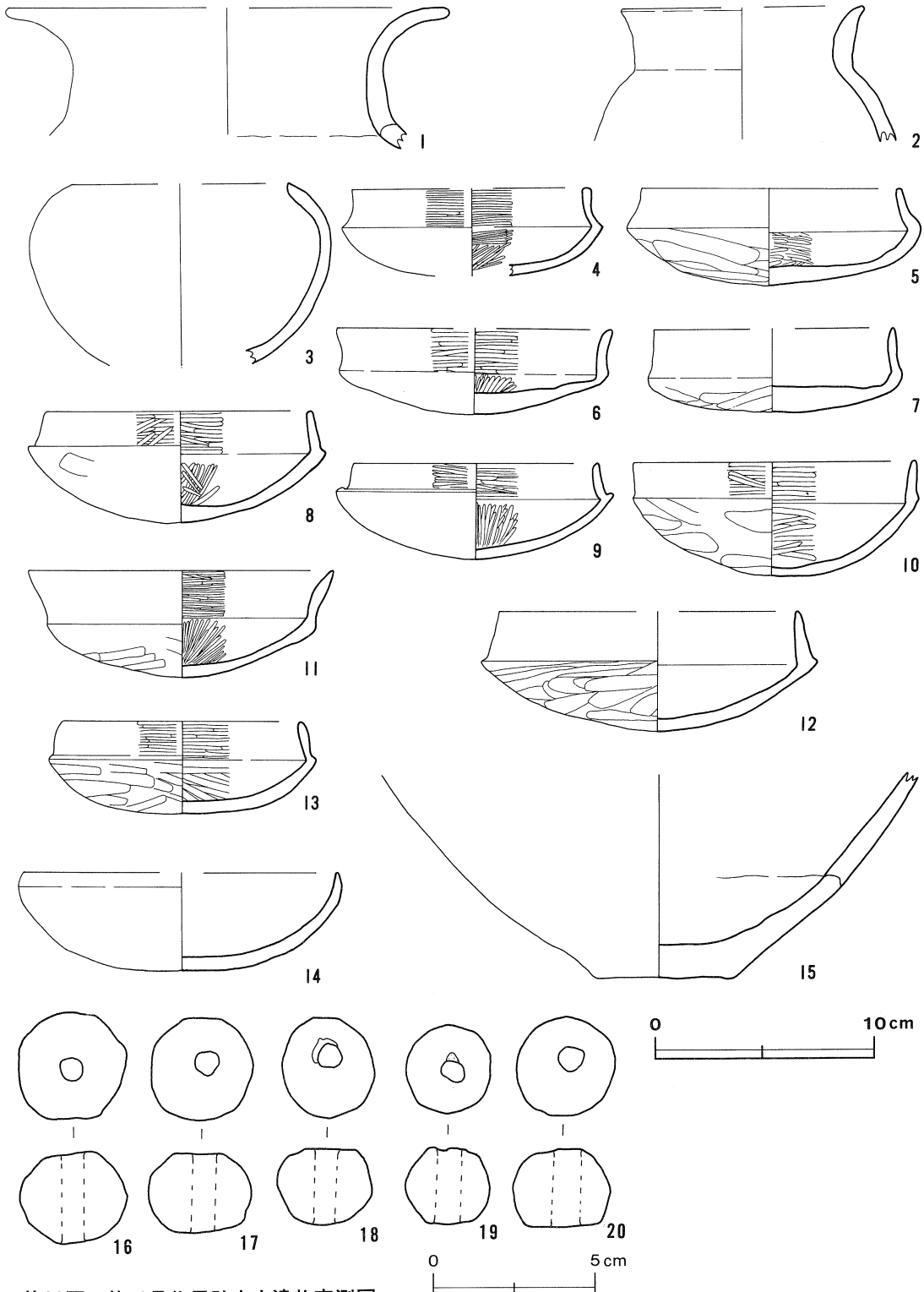
第10号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	甕形土器 土師器	A（20.4） B（5.9）	口縁部は「コ」の字状を呈する。	内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	5% P28
2	甕形土器 土師器	A（11.2） B（6.3）	口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	5% P29

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第30図 3	塊形土器 土師器	A (10.0) B (8.4)	体部は扁平な球形を呈する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	30% P31
4	坏形土器 土師器	A (11.0) B (4.1)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部はほぼ直立する。口縁部と体部の境の外面に稜を有する。	口縁部内・外面横位のヘラ磨き，体部外面ヘラ削り，体部内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	35% P39
5	坏形土器 土師器	A 11.9 B 4.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。口縁部と体部の境の外面に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	80% P35 内・外面剥離がみられる。
6	坏形土器 土師器	A (12.6) B 4.0	底部は丸底で，体部は内彎気味に開いて立ち上がり，口縁部は外反して立ち上がる。口縁部と体部の境の外面に稜を有する。	口縁部内・外面横位のヘラ磨き，体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	60% P37
7	坏形土器 土師器	A (11.1) B 3.9	底部は丸底で，体部は内彎気味に大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに内傾する。口縁部と体部の境の外面に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き。	砂粒 暗褐色 普通	40% P41
8	坏形土器 土師器	A 12.5 B 5.2	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。口縁部と体部の境の外面に稜を有する。	口縁部内・外面横位のヘラ磨き，体部外面ヘラ削り，体部内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	90% P32
9	坏形土器 土師器	A 11.2 B 4.5	底部は丸底で，内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。口縁部と体部の境の外面に突出した明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面横位のヘラ磨き，体部外面ヘラ削り，体部内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	95% P33
10	坏形土器 土師器	A 13.1 B 5.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立して立ち上がる。口縁部と体部の境の外面に稜を有する。	口縁部内・外面横位のヘラ磨き，体部外面ヘラ削りの後ヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	80% P42
11	坏形土器 土師器	A 14.1 B 5.0	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反して立ち上がる。口縁部と体部の境の外面に稜を有する。	口縁部外面横ナデ，内面横位のヘラ磨き，体部外面ヘラ削り，体部内面放射状の丁寧なヘラ磨き。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	80% P34
12	坏形土器 土師器	A (13.9) B 5.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾する。口縁部と体部の境の外面に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き。	砂粒 黒色 普通	70% P36
13	坏形土器 土師器	A 11.0 B 4.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。口縁部と体部の境の外面に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面横位のヘラ磨き，体部外面ヘラ削りの後ヘラ磨き，内面ヘラ磨き。	砂粒 黒褐色 普通	55% P38
14	坏形土器 土師器	A (14.6) B 4.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	40% P40
15	甕形土器 土師器	B (9.4) C 7.3	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石 暗赤褐色 普通	20% P30



第29図　第10号住居跡実測図



第30図　第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名　　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　　考
第30図 16	球状土錘	DP 6	2.9×3.4	0.7	30	100% 両方穿孔
17	〃	DP 7	2.5×3.2	0.7	25	100% 一方穿孔
18	〃	DP 8	2.4×2.9	0.7	21	100% 両方穿孔
19	〃	DP 9	2.5×2.6	0.7	17	100% 一方穿孔
20	〃	DP10	2.5×3.0	0.8	22	100% 両方穿孔

第11－A号住居跡（第31図）

本跡は，調査区の西部B2f$_5$区を中心に確認された住居跡で，第10号住居跡の東側1.2mに位置している。北側で第11－B号住居跡に切られ，南側では第29号住居跡のカマドが本跡の床面上に構築されていることから，本跡の方が古い。更に南東側では第28－A・28－B号住居跡ともそれぞれ重複しているが，出土遺物から本跡の方が古い遺構と判断される。

本跡は，北側がエリア外にかかっているため平面形・規模等の詳細は不明である。平面形は，推定で不整隅丸方形を呈し，東西軸長6.12mで，主軸方向はN－22°－Wを指すものと思われる。壁は，東壁の南側が耕作による撹乱のため，また，南壁は重複のためそれぞれ検出できなかった。西壁及び残存している東壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，東壁が34～50cm，西壁が低くなり10～22cmである。床面は，南北にトレンチャーによる撹乱を激しく受けているが，一部残っている部分は硬く，ロームが踏み固められている。ピットは，3か所検出されている。本跡に伴うピットは，P$_2$・P$_3$の2か所と思われ，P$_2$・P$_3$の規模は，長径30・36cm・短径29・32cm・深さ44・52cmである。P$_1$は，重復している第11－B号住居跡に伴うものと思われる。カマドは，当遺跡から検出された他の住居跡のカマドの位置から推定するとエリア外に付設されていると思われ，検出できなかった。

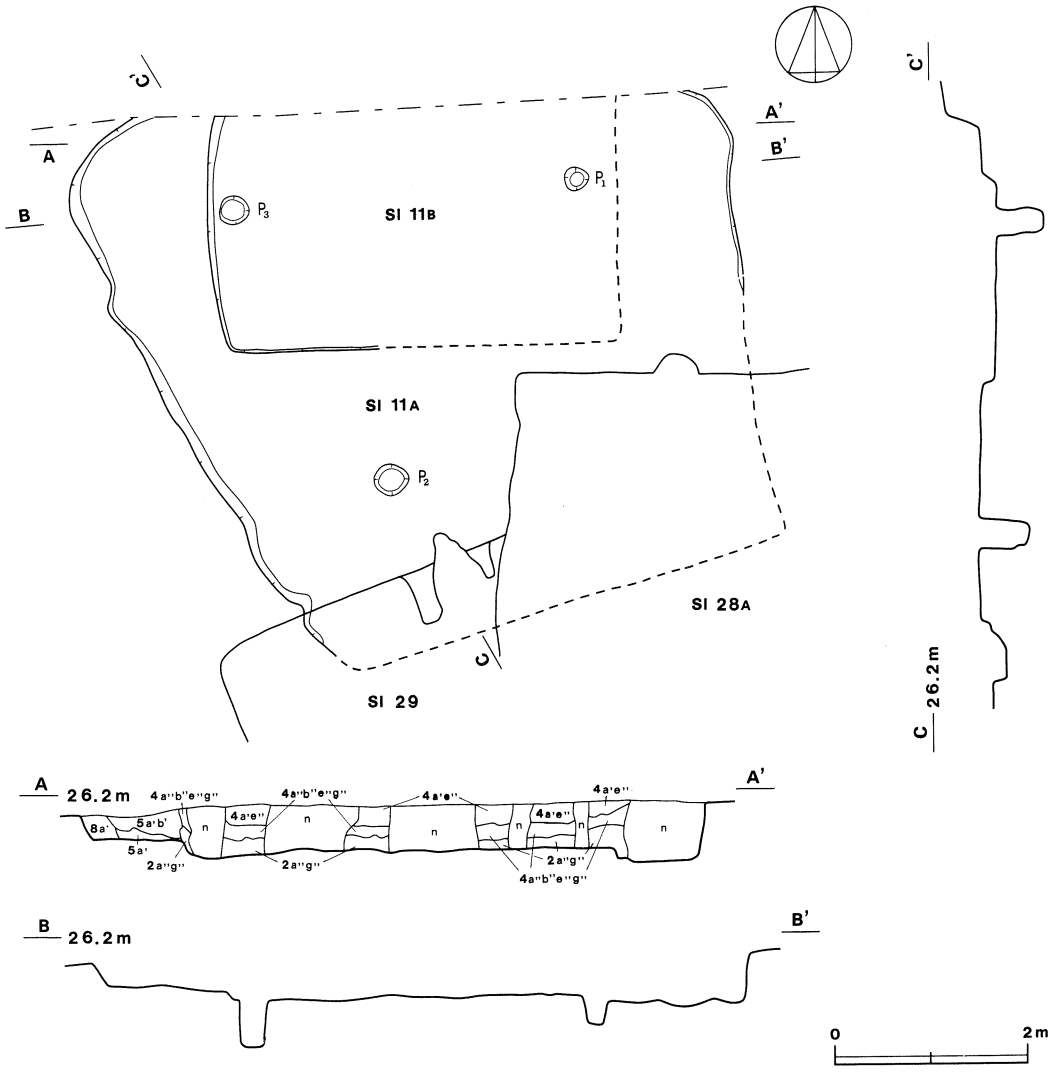
覆土は，大半が第28－B号住居跡に切られたり撹乱されているが，上層にローム粒子・ローム小ブロックを少量含む褐色土が，下層にローム粒子を少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は多く，重複している第11－B号住居跡と合せて土師器片593点，須恵器片21点，石1点が出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第11－B号住居跡（第31図）

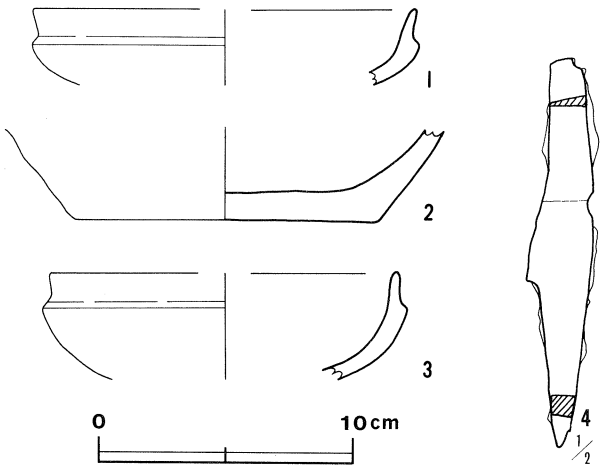
本跡は，調査区の西部B2f$_5$区を中心に確認された住居跡で，第10号住居跡の東側2.5mに位置している。本跡は，第11－A号住居跡の中央部から北側にかけての床面を切って構築されている。



第31図　第11－A・B号住居跡実測図

本跡は，北側がエリア外にかかっているため平面形・規模等の詳細は不明である。平面形は，推定で方形を呈し，東西軸長4.21ｍで，主軸方向はＮ－0°を指していると思われる。壁は，トレンチャーによる撹乱を受けているため東壁から南壁の大半を検出できなかったが，残存している南壁と西壁は，締まったロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は６～15cmである。床面は全体的に平坦で，撹乱をうけていない部分は硬く踏み固められている。ピットは，本跡内に２か所検出されているが，本跡に伴うピットは，位置からＰ１のみと思われ，直径24cm・深さ30cmの規模を有している。カマドは，検出することができなかった。

覆土は，３層からなり，上層にローム粒子を少量含む暗褐色土，中層にローム粒子・焼土粒子・



第32図　第11－A号住居跡出土遺物実測図

炭化粒子を極少量含む暗褐色土，下層にローム粒子・炭化粒子を極少量含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物は，重複している第11－A号住居跡と合せて土師器片593点，須恵器片21点，石1点が出土している。本跡に伴う遺物は，住居跡中央部より北東側のほぼ床面から土師器の甕形土器の胴下半部（第33図2）及び口縁部片（第33図1）が，また，北西側の覆土から坏形土器（第33図4・5）の破片が出土している。

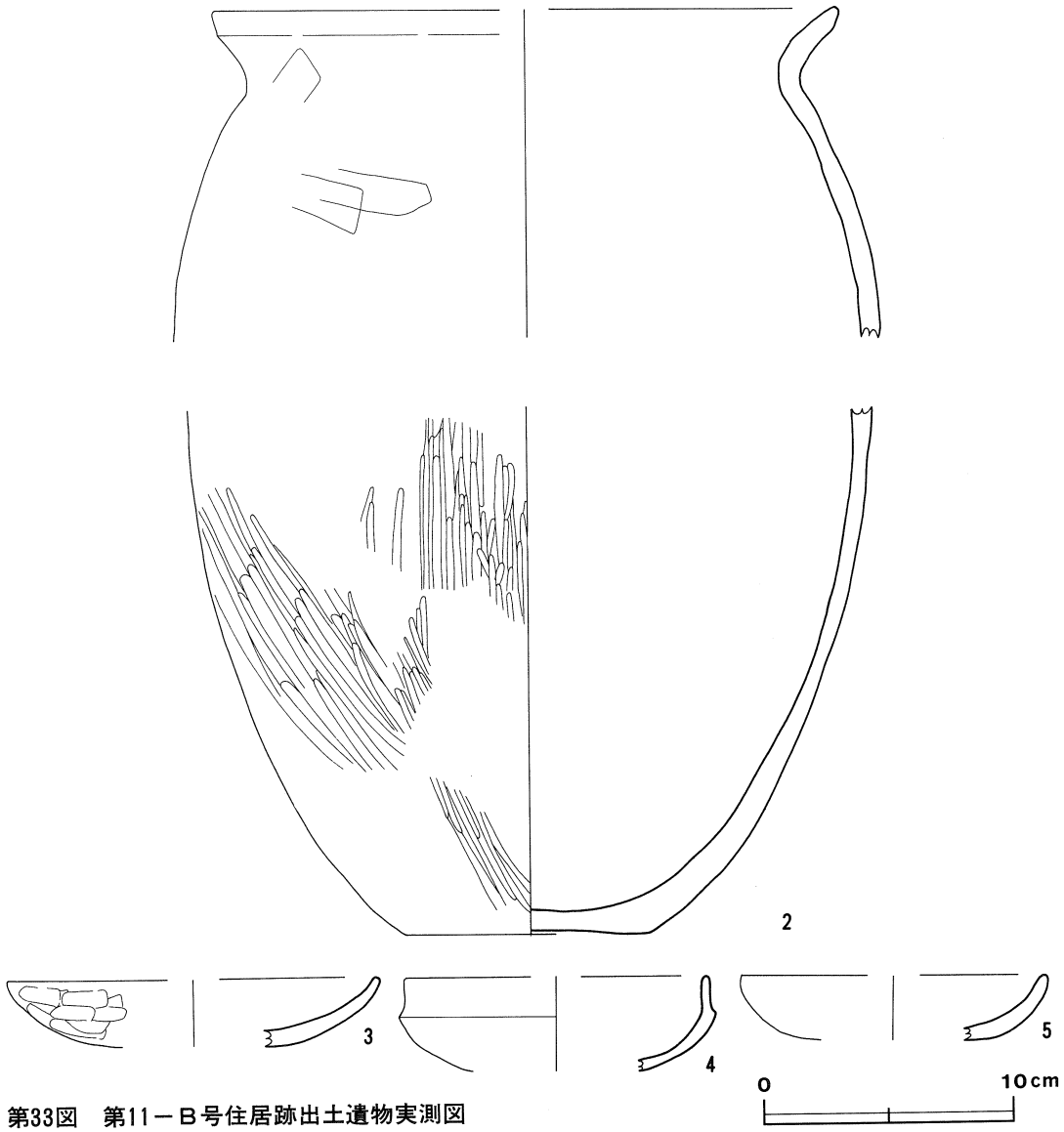
本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第11－A号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	坏形土器 土師器	A（15.0） B（3.0）	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。口縁部と体部の境の外面に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 暗赤灰色 普通	5％ P50
2	坏形土器 土師器	B（3.6） C（11.8）	底部は平底で，胴部下位は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内・外面ナデ。	砂粒・石英 褐灰色 普通	5％ P45
3	坏形土器 土師器	A（13.8） B（4.2）	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。口縁部と体部の境外面に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 明褐灰色 普通	5％ P49

鉄製品（第32図）

4は刀子で，両端部は欠損する。刀の側に区（まち）を有し，刀身部が折れ曲がっている。法量は現存長10.3cm・刀幅 1.1cm・身幅 0.3cm・重さ22.1ｇである。



第33図　第11－Ｂ号住居跡出土遺物実測図

第11－Ｂ号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	甕形土器 土師器	A（25.0） B（13.3）	胴部は長胴を呈し，口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	10% P44
2	甕形土器 土師器	B（21.1） C　10.0	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面縦位のヘラ磨き，胴部内面ヘラナデ。	砂粒 灰赤色 普通	30% P43

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第33図 3	坏形土器 土師器	A (14.8) B 2.7	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短くほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 黒色 普通	10% P47
4	坏形土器 土師器	A (12.2) B (3.8)	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は直立する。口縁部と体部の境の外面に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	30% P46
5	坏形土器 土師器	A (12.3) B (2.6)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	10% P48

第12号住居跡（第34図）

本跡は，調査区の中央部よりやや西側B2f$_9$区を中心に確認された住居跡で，第11－A号住居跡の東側10.5mに位置している。本跡は，東側で第21号住居跡と重複しているが新旧関係は不明であり，また，西側では第33号住居跡に切られている。

本跡は，重複やトレンチャーによる撹乱のため平面形・規模等の詳細は不明であるが，調査した部分から推定すると，一辺4.34mほどの方形を呈し，主軸方向はN－58°－Wを指すものと思われる。壁は，北東壁のみしか残存せず，締まりのあるロームで，外傾して立ち上がっている。壁高は46～54cmである。床面は，全体的に凹凸が激しく，全面にわたり約50cmの間隔で井桁状にトレンチャーによる撹乱を受けている。本跡に伴うピットは，P$_6$～P$_9$の4か所検出されている。主柱穴は，規模や配列からP$_6$・P$_8$・P$_9$の3か所と思われ，長径30～40cm・短径26～28cm・深さ26～36cmである。P$_7$は，長径38cm・短径33cm・深さ24cmで，やや中央部に位置していることから補助柱穴と考えられる。

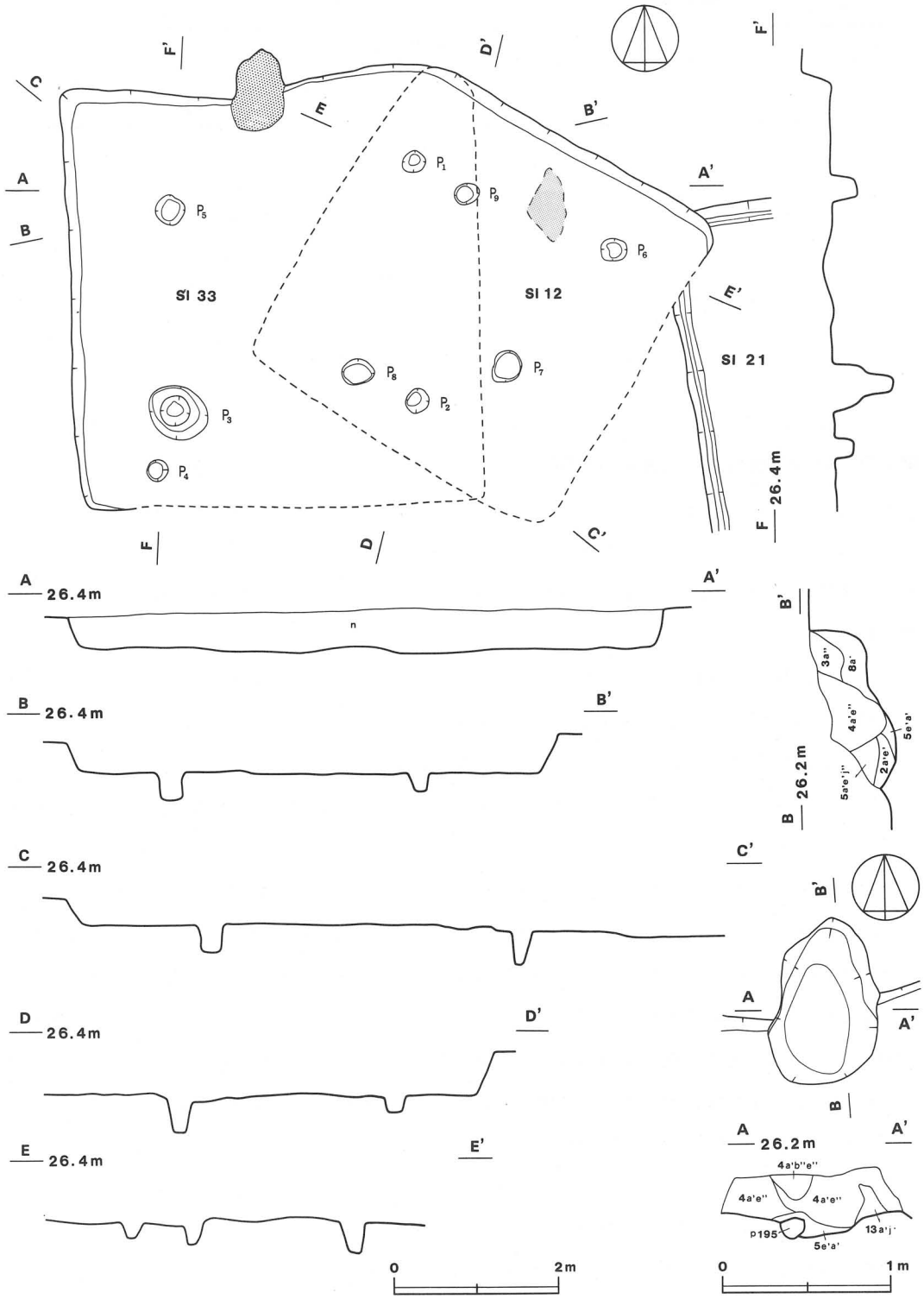
覆土は，撹乱が著しく，堆積状況は不明である。

遺物は，重複している第33号住居跡と合せて土師器片858点，須恵器片50点，土製品2点が出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第12号住居跡出土土器観察表

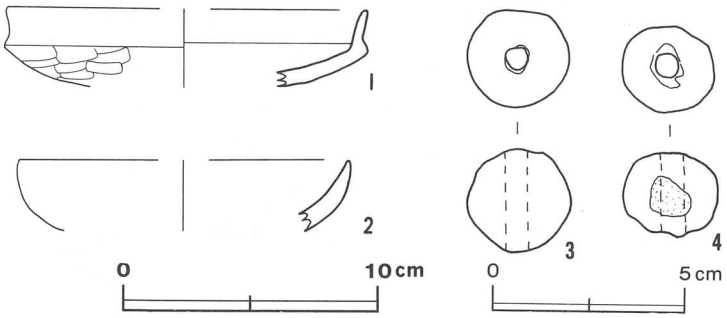
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第35図 1	坏形土器 土師器	A (14.2) B (3.1)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に立ち上がる。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 黒色 普通	10% P52
2	坏形土器 土師器	A (13.0) B (2.8)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	5% P53



第34図　第12・33号住居跡実測図

第12号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名　　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔 径 (cm)	重量(g)	備　　考
第35図 3	球状土錘	ＤＰ11	2.7× 2.7	0.6	15	100% 一方穿孔
4	〃	ＤＰ12	2.3× 2.5	0.6	10	100%，一方穿孔 ひび割れあり



第35図　第12号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡（第36図）

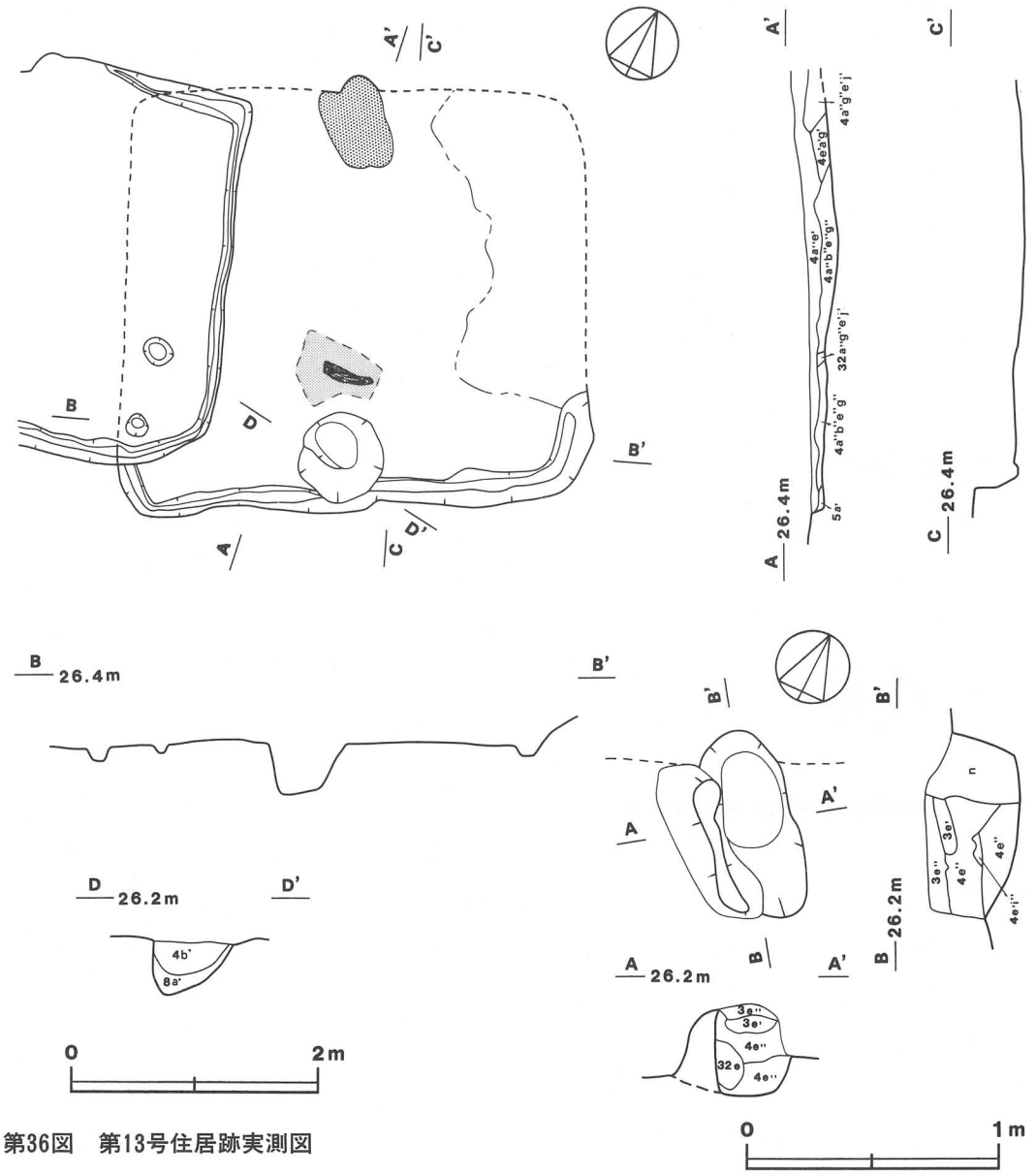
本跡は，調査区のやや西部 B2h$_0$ 区を中心に確認された住居跡で，第22号住居跡の西側11.9ｍに位置している。本跡は，西側で第14号住居跡と，北側で第21号住居跡とそれぞれ重複している。本跡との新旧関係については，本跡が，第14号住居跡により床面を切られていることと出土遺物等から本跡の方が古く，また，第21号住居跡の床面より約40cm上面に本跡の貼り床が明瞭に検出され，更に本跡のカマドも構築されていることから本跡の方が新しい遺構と判断される。

平面形は，推定で長軸3.66ｍ・短軸3.54ｍの隅丸方形を呈し，主軸方向はＮ－25°－Ｗを指すものと思われる。壁は，北東・南西壁の一部と南東壁が締まりのあるロームで，外傾して立ち上がっているが，他の壁は重複のため不明である。壁高は25～32cmである。前述した壁下には，上幅12～20cm・深さ３～８cmの壁溝が周回している。床面は，第21号住居跡の覆土上にみられる貼り床で，ロームとロームブロックが硬く踏み固められており，この貼り床の部分はそうでない南東壁側の床面に比べ若干低くなっている。南東壁側は平坦でロームが締まっている。本跡に伴うピットは検出されなかった。貯蔵穴は，南東壁際のほぼ中央部に検出されている。平面形は，長径72cm・短径66cmの楕円形を呈し，床面から底面までの深さは42cmほどである。貯蔵穴の覆土は，上層に暗褐色土が，下層に明褐色土が自然堆積している。カマドは，北西壁のほぼ中央部と思われる所に付設されているが，東側半分は耕作による撹乱を受けているため天井部と東側の袖部は不明である。残存する西側の袖部は粘土で構築されている。規模は，長さ78cm・幅48cm・焚口部幅27cmであり，火床は，長径37cm・短径23cmの楕円形を呈し，床面を８cmほど掘りくぼめている。

覆土は，上層にローム粒子・焼土粒子を極少量含む暗褐色土が，下層にはローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を極少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は破片が多く，土師器片565点，須恵器片44点が住居跡の全域から出土している。

本跡は，出土跡物から平安時代の９世紀前半に比定されるものと思われる。



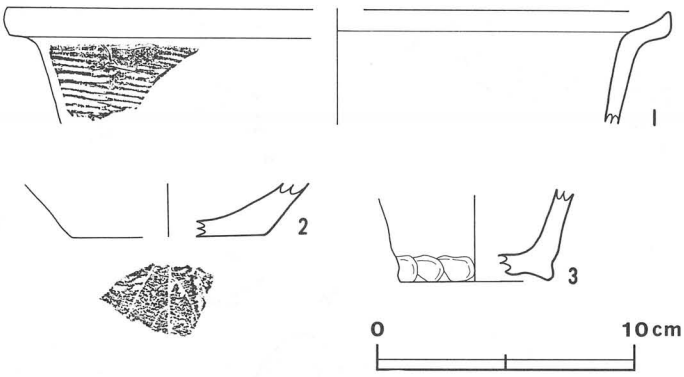
第36図　第13号住居跡実測図

第14号住居跡（第38図）

本跡は，調査区の西部B2h$_9$区を中心に確認された住居跡で，第22号住居跡の西側5.5mに位置している。本跡は北東側で第13・21号住居跡，西側で第15号住居跡と重複している。本跡は，第13号住居跡の床面を切っており，更に本跡の床面が，第15号住居跡の床面上約25cm，第21号住居跡の床面上25～30cmのところに明瞭な貼り床として検出されていることや出土遺物等から，本跡は，第13・15・21号住居跡のいずれよりも新しい遺構と判断される。

第13号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	甕 須恵器	A (25.7) B (4.5)	口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面平行叩き，胴部内面ナデ。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	5% P57
2	甕形土器 土師器	B (2.1) C (7.6)	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	内・外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	5% P56
3	甕形土器 土師器	B (3.3) C (5.8)	胴部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	胴部内・外面ナデ，外面の胴部下端に指圧痕有り。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	5% P55

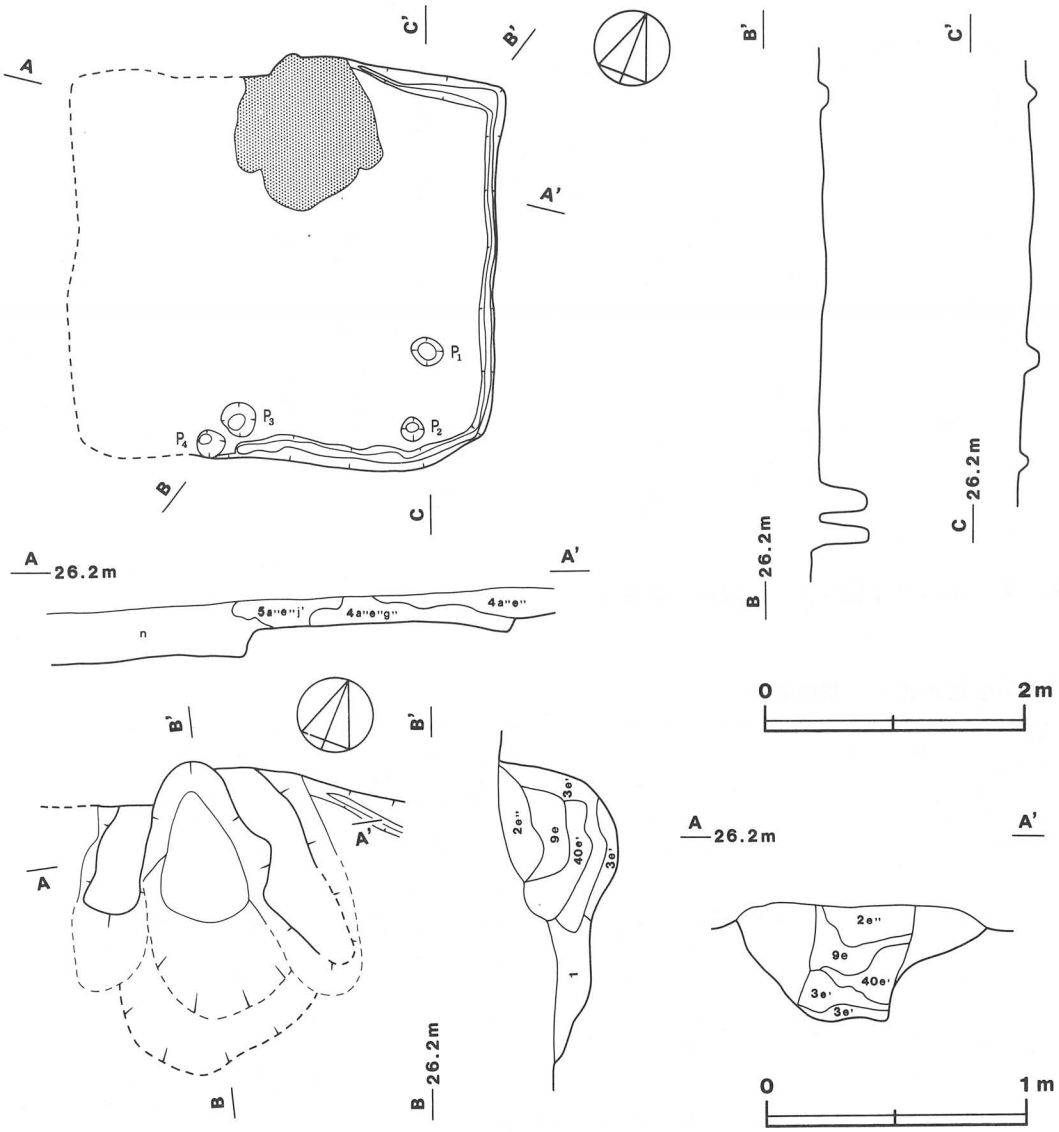


第37図　第13号住居跡出土遺物実測図

ところで本跡は，当遺跡の中で重複が激しい遺構のひとつのため南東壁の一部しか立ち上がりを検出することができなかったが，カマドと本跡の東側半分にわたって壁溝を検出することができたので，平面形を推定することができた。平面形は，長軸3.24m・短軸3.15mの方形を呈するものと思われ，主軸方向はN－21°－Wを指している。壁は，南東壁の一部がほぼ垂直に立ち上がり，壁高は7cmほどである。壁溝は，本跡のほぼ東側半分にわたって上幅9～19cm・深さ5～8cmで周回している。床面は，前述したとおり大半が貼り床の部分で，ローム及びロームブロックが硬く踏み固められており，南側の貼り床でない部分はロームが硬く踏み固められている。ピットは，南東コーナー寄り及び南東壁のやや南西コーナー寄りにそれぞれ2か所ずつ検出され，直径18～23cm・深さ10～38cmの規模を有している。カマドは北西壁のほぼ中央部に付設され，袖部は，砂質粘土で構築されていたが，天井部及び袖部の一部は崩れている。長さ122cm・幅110cm・焚口部幅44cmである。掘り方は，壁を幅29cmで37cmほど切り込んでいる。火床は，床面を13cmほど掘り込んでいる。

覆土は，撹乱を受けている部分も多いが，上層から下層にかけてローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を極少量含む暗褐色土が自然堆積している。

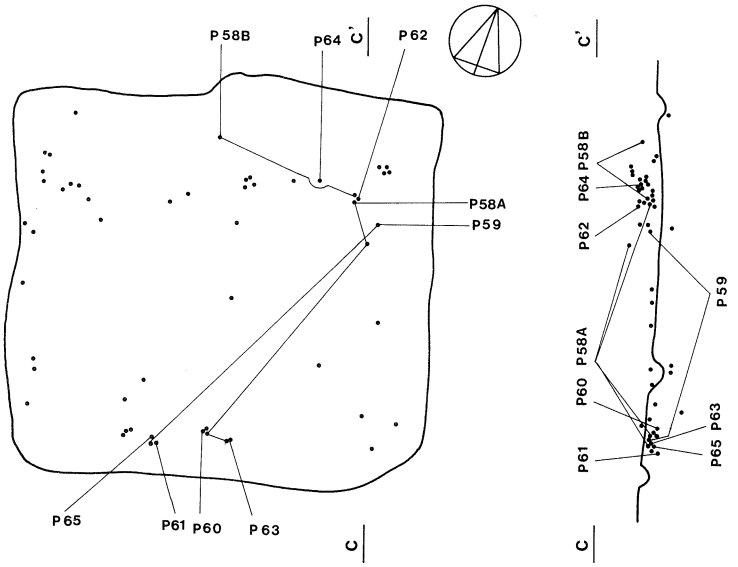
遺物は，土師器片84点，須恵器片24点が出土している。カマド内の覆土と北東及び南側のほぼ床面上から土師器の甕形土器（第40図1－A・B），北東コーナー部寄りのほぼ床面からほぼ完形



第38図　第14号住居跡実測図

の須恵器の坏（第40図６）が正位で，南東壁際のほぼ中央部の床面から半完形の坏（第40図４），完形の坏（第40図５）が正位で出土している。

本跡は，出土遺物から平安時代の９世紀後半に比定されるものと思われる。

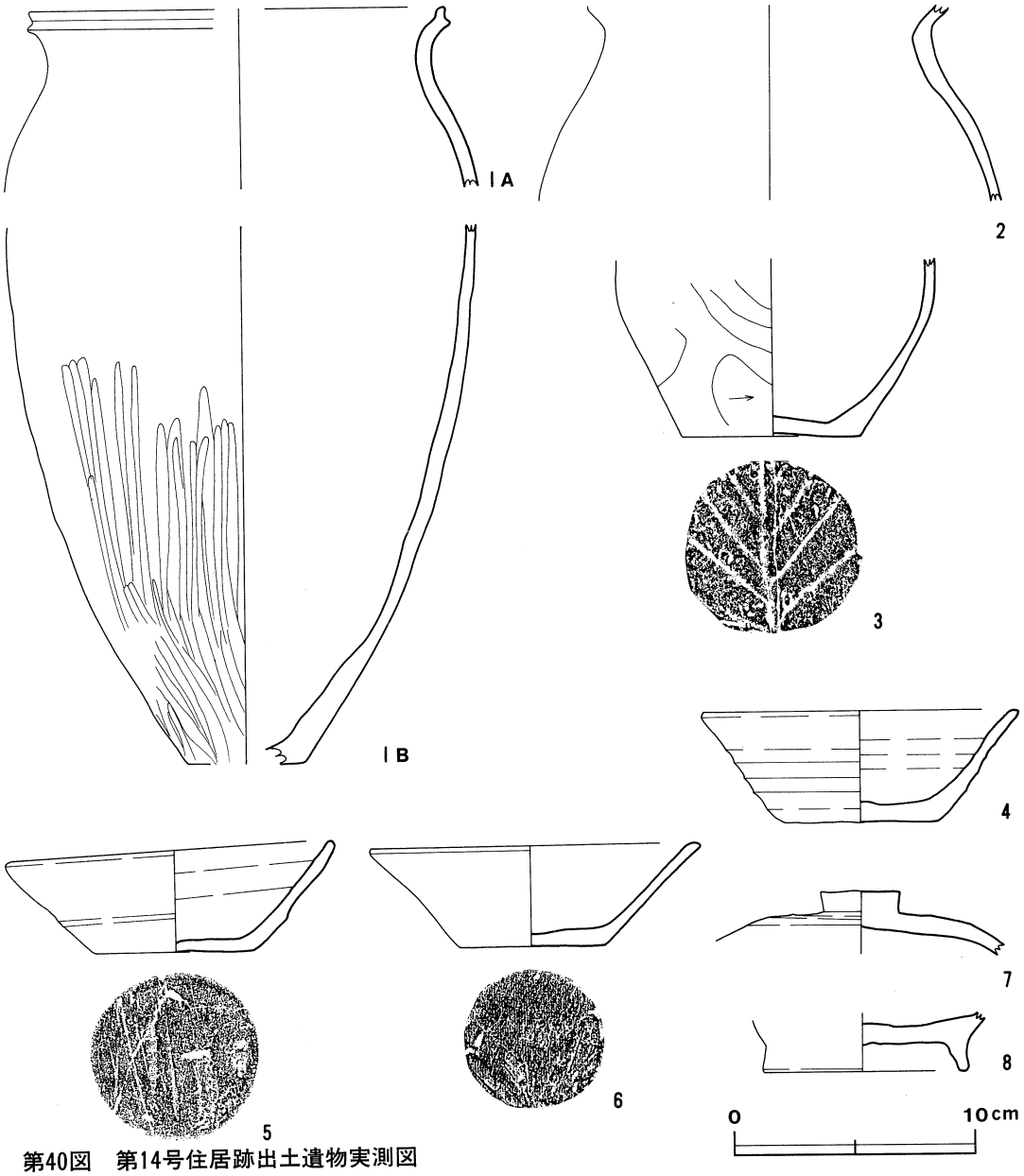


第39図　第14号住居跡出土土器接合関係図

第14号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1－A・B	甕形土器 土師器	A（17.3） B（29.9） C（5.0）	胴部は長胴を呈し，口縁部は外反しながら開き，端部をわずかに外上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面ナデ，下位縦位ヘラ磨き，胴部内面ナデ。	砂粒・礫・長石・雲母 褐色 普通	30% P58－A・B
2	甕形土器 土師器	B（8.1）	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，頸部に至る。	胴部内・外面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	5% P60
3	甕形土器 土師器	B（7.4） C（7.3）	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り，胴部内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 灰黄褐色 普通	30% P59 底部に木葉痕
4	坏 須恵器	A 13.1 B 4.6 C 6.5	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へのび，口縁部は外反気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。	底部回転ヘラ切り，体部水挽き。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	40% P63
5	坏 須恵器	A 13.9 B 4.4 C 6.9	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き。体部下端手持ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	95% P61
6	坏 須恵器	A 13.8 B 4.2 C 6.1	底部は平底で，体部は外反しながら外上方へのび，口縁端部は丸い。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	90% P62
7	蓋 須恵器	B（2.7）	天井部は弧状を呈し，つまみは扁平で，上部は平坦である。	天井部回転ヘラ削り，天井部内・外面水挽き，ロクロ回転方向は右。	砂粒・石英 黄灰色 普通	80% P65

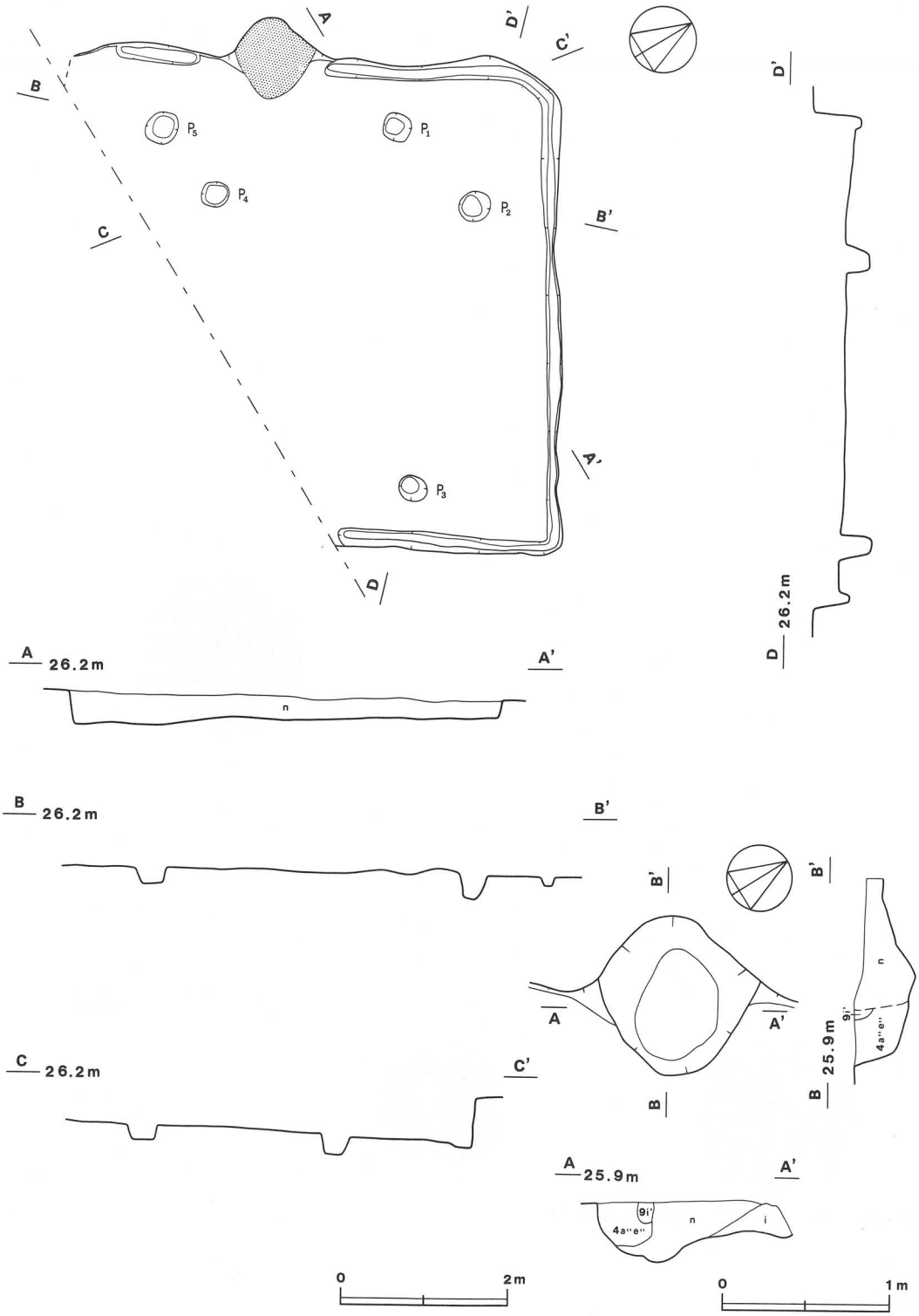
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第40図 8	高台付坏 須恵器	B (2.2) D　8.6	高台は外下方へのびる。	高台は貼り付け，高台内・外面横ナデ	砂粒・長石 灰白色 普通	20% P64



第40図　第14号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡（第41図）

本跡は，調査区の西部B2h9区に確認された住居跡で，第33号住居跡の北側1.7mに位置している。



第41図　第15号住居跡実測図

本跡は，北側で第32号住居跡，北東側で第14・21号住居跡，西側で第30号住居跡とそれぞれ重複している。本跡の大半は，トレンチャー等による撹乱を受けていたため重複している他の住居跡との新旧関係を土層断面から把握することは難かしかったが，出土遺物，カマドの位置，貼り床の状況等から検討すると次のとおりである。本跡と第14号住居跡については，本跡の西側の床面上25cmほどに第14号住居跡が明瞭な貼り床をして構築されていたことから本跡の方が古い。次いで，本跡と第21・32号住居跡については，出土遺物を検討した結果，本跡の方が新しく，同じく第30号住居跡については，本跡のカマドが第30号住居跡のほぼ中央部に構築されて残っていることから，本跡の方が新しい。

本跡は，南側がエリア外にかかっているため，平面形・規模等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると，平面形は，方形を呈するものと思われる。北東壁の長さは5.75mで，主軸方向はN－60°－Wを指している。壁はトレンチャーによる撹乱のため北西壁の一部及び北東壁の立ち上がりは不明であるが，その他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，北西壁が約50cm，南東壁が25～29cmである。壁溝は，上幅7～30cm・深さ7～12cmでカマドを除いて周回している。床面は，住居跡全域にわたってトレンチャーによる撹乱を30cmほどの間隔で帯状に受けており，また，中央部はやや高く，凹凸が激しいが，ピットに囲まれた内側の撹乱を受けていない部分は硬く踏み固められている。ピットは，5か所検出され，P_1・P_3・P_5は，長径35～42cm・短径30～36cm・深さ19～37cmの規模を有し，配列からいずれも主柱穴と考えられる。カマドは，北西壁のほぼ中央部と思われるところに付設されていたが，撹乱を受けて崩れているため天井部・袖部は不明であり，わずかに袖部の痕跡と思われる粘土の塊りが一部残存するだけである。長さ99cm・幅96cmほどである。掘り方は，壁を幅96cmで44cmほど切り込んでいる。火床は，床面を20cmほど掘り込んでいる。

覆土は，全面にわたり撹乱を受けていて，堆積状況は不明である。

遺物は，破片が多く土師器片186点，須恵器片45点が出土している。

本跡は，出土遺物から平安時代の8世紀末～9世紀初頭に比定されるものと思われる。

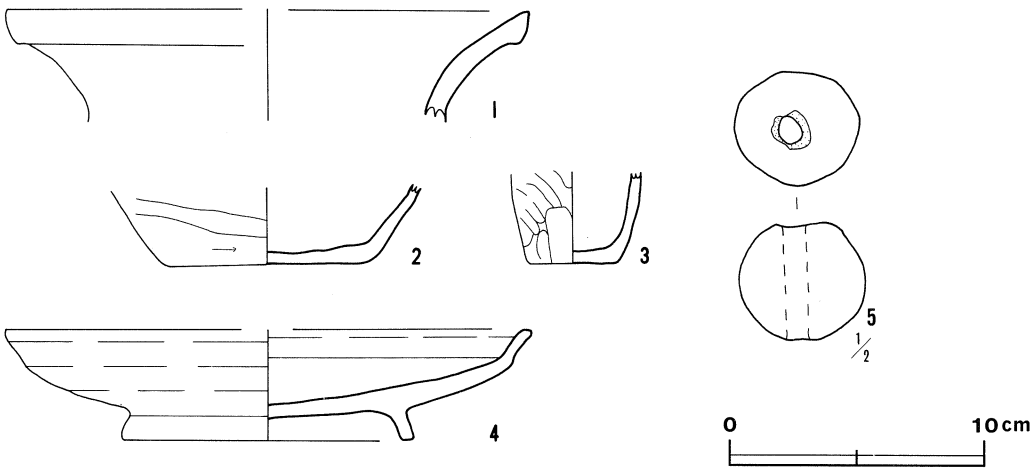
第15号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	甕 須恵器	A (20.5) B (4.3)	口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	5% P67
2	坏 須恵器	B (3.1) C (7.8)	底部は平底で，体部は外傾して外上方へ立ち上がる。	底部ヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	10% P68

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第42図 3	ミニチュア土器 土師器	B（3.5） C（3.4）	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	30% P66
4	盤 須恵器	A（20.7） B（4.4） D 10.5	体部は直線的に外上方へ立ち上がり，口縁部は外傾し，端部は丸い。高台は外下方へのびる。	底部回転ヘラ削りの後高台貼り付け，体部水挽き。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	30% P69

第15号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第42図 5	球状土錘	DP13	3.0× 3.3	0.6	28	100% 一方穿孔



第42図　第15号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡（第43図）

本跡は，調査区のほぼ中央部B3f$_3$区を中心に確認された住居跡で，第24号住居跡の西側0.5mに位置している。

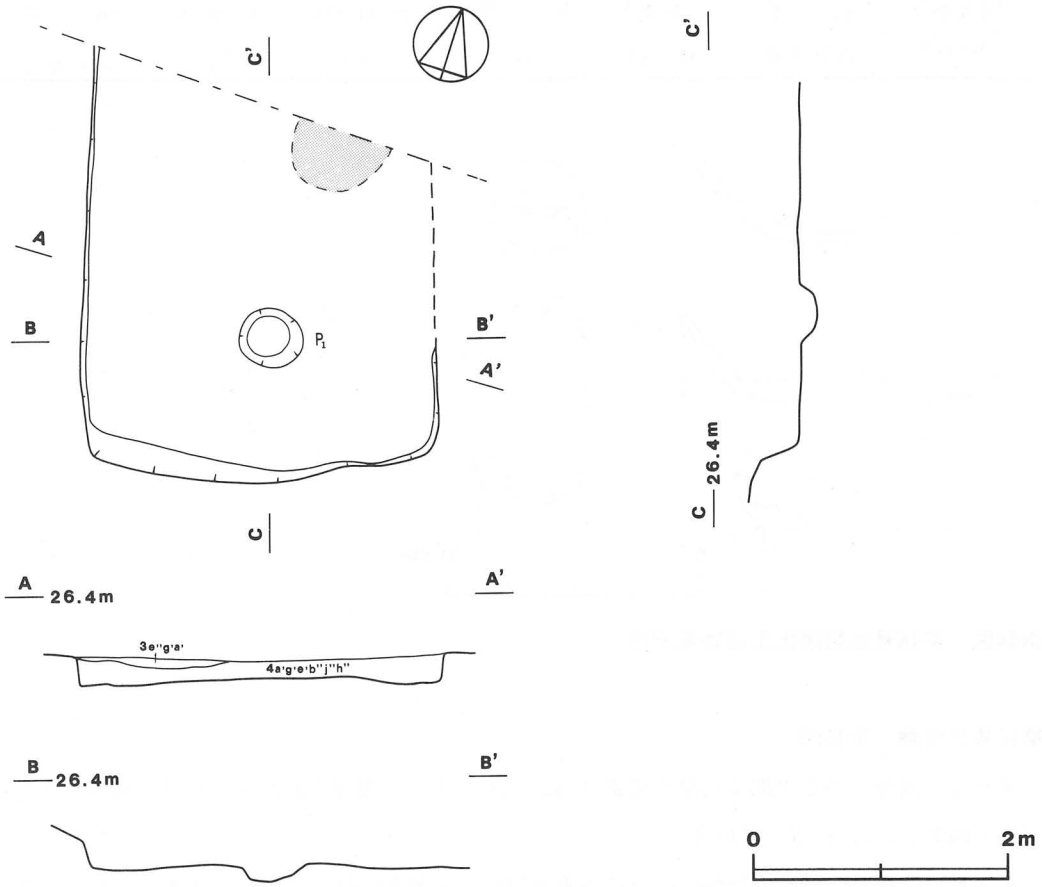
本跡は，北西側がエリア外に延びているため，平面形は，推定で長方形を呈し，南東壁の長さは2.75m，主軸方向はN－17°－Wを指しているものと思われる。壁は北東壁の大半がトレンチャー等による撹乱のため不明である。なお，残存する南東・南西壁は，締まりのあるロームで，外傾して立ち上がっている。壁高は22～30cmである。床面は，全体的に平坦で，ほぼ中央部の直径約1.8mの円形の範囲内はロームが硬く踏み固められている。ピットは，南東壁寄りのほぼ中央部に1か所検出され，長径50cm・短径46cm・深さ12cmの規模を有しているが，主柱穴とは判断できなかった。なお，中央部よりやや北側の床面上に厚さ8cmほどの山砂を少量含んだ焼土が堆積

していたので，カマドを想定して調査を進めたが，カマドの痕跡は確認できなかった。

覆土は，上層に極暗褐色土，下層に暗褐色土がローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含み，自然堆積している。

遺物は破片が多く，土師器片160点，須恵器片25点が覆土から出土している。

本跡は，出土遺物から平安時代の９世紀中頃に比定されるものと思われる。



第43図　第16号住居跡実測図

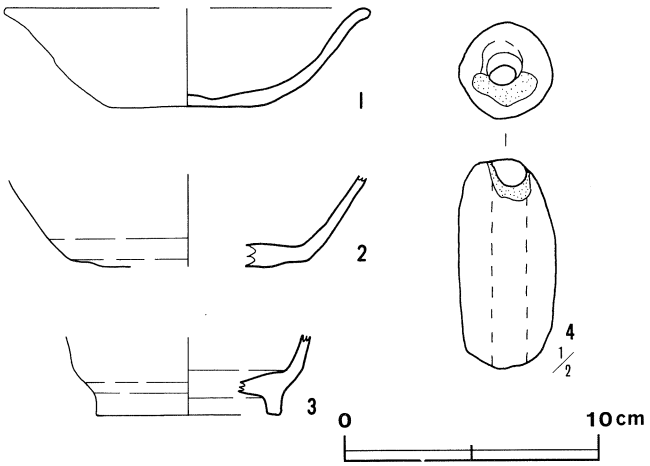
第16号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第44図 1	坏形土器 土師器	A (14.4) B 3.9 C 6.3	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は外反し，端部は丸い。	底部回転ヘラ切り，体部水挽き。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P70
2	坏 須恵器	B (3.6) C (9.6)	底部は平底で，体部は外傾して外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ削り，体部水挽き。	砂粒 灰白色 普通	10% P71

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第44図 3	高台付坏 須恵器	B（3.1） D（7.2）	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，高台は外下方へ伸びる。	体部水挽き，高台は貼り付け，高台内・外面横ナデ	砂粒 黄灰色 普通	5％ P72

第16号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第44図 4	管状土錘	DP14	5.5× 2.5	0.6	(25)	90％ 両方穿孔

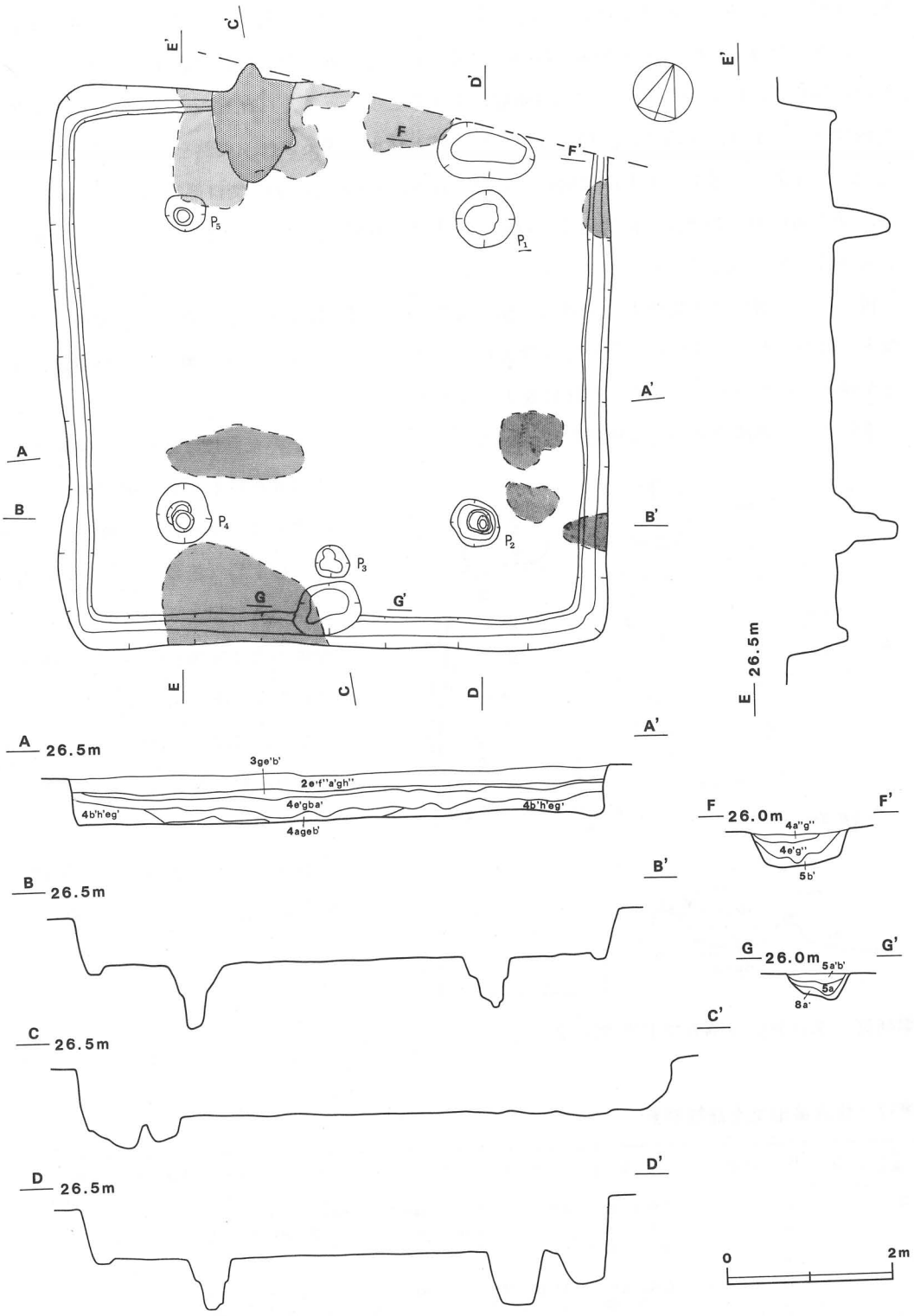


第44図　第16号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡（第45図）

本跡は，調査区の中央部よりやや東寄りB3f$_0$区を中心に確認された住居跡で，第18－A号住居跡の西側1.2mに位置している。

平面形は，長軸6.82m・短軸6.62mの方形を呈し，主軸方向はN－18°－Wを指している。なお，本跡の北東コーナーは一部エリア外にかかっている。壁は，締まりのあるロームで，垂直に立ち上がっており，壁高は53～65cmである。壁下には，上幅17～22cm・深さ6～9cmの壁溝がカマドを除いて全周している。床面は平坦で，カマドの手前部分及びピットに囲まれた内側は農家の土間のように硬く踏み固められている。貯蔵穴は，北西壁際の北東コーナー寄りに検出され，平面形は，長径117cm・短径63cmの楕円形を呈し，床面から底面までの深さは40cmで，覆土は，暗褐色土，褐色土の順に自然堆積している。P$_3$の南側に接して検出された落ち込みは，規模や位置から貯蔵穴的な機能をもつものと思われる。平面形は，長径84cm・短径63cmの不整楕円形を呈し，底面の東側は36cm，西側はやや浅く24cmほどすり鉢状に掘り込まれている。ピットは，5か所検出さ



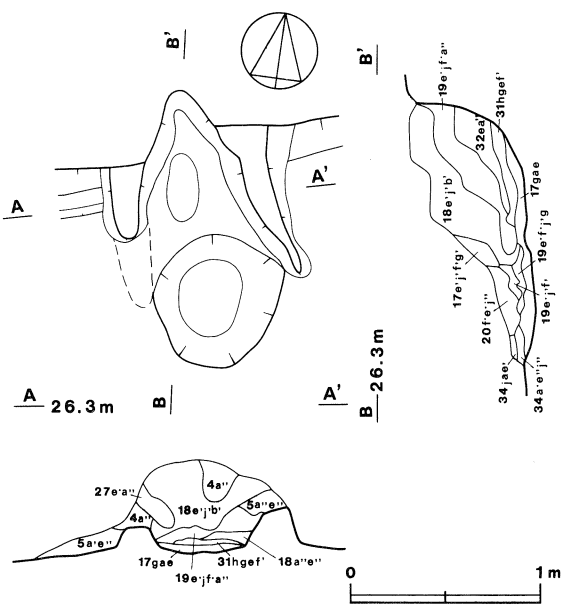
第45図　第17号住居跡実測図 (1)

れ，主柱穴は，規模や配列からP_1・P_2・P_4・P_5の４か所と思われる。これらの主柱穴は，長径50～73cm・短径41～67cm・深さ60～74cmの規模を有している。P_3は，長径44cm・短径41cm・深さ22cmの規模で，位置からすれば出入口施設に関するピットと考えられる。カマドは，北西壁のやや北西コーナー寄りに付設され，袖部は褐色で山砂と粘土で構築され，火熱をうけて焼土化していたが，天井部及び袖部の前方部は崩れていた。長さは146cm・幅95cm・焚口部幅70cmである。掘り方は，壁を幅42cmで26cmほど切り込んでいる。火床は，直径70cmほどの不整円形を呈し，床面を深さ６cmほど掘り込んでいる。

覆土は，上層には黒褐色土，中層には極暗褐色土，下層には暗褐色土の順で自然堆積している。覆土には焼土粒子・炭化粒子がかなり含まれており，また，床面上からも焼土粒子や少量の炭化材が検出されていることから，本跡は焼失家屋と考えられる。

遺物は，土師器片969点，須恵器片12点が出土している。カマドの東側ほぼ床面から完形に近い土師器の坏形土器（第47図３）が，中央部より東側寄りの覆土から完形の坏形土器（第47図１）と須恵器の提瓶（第47図８）が出土している。南側のほぼ床面から完形の土師器の坏形土器（第47図４），半完形の坏形土器（第47図６），西側の床面から半完形の坏形土器（第47図７）が出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



第46図　第17号住居跡カマド実測図 2)

第17号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	坏形土器 土師器	A 15.7 B 5.4	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 赤黒色 普通	100% P73 内面黒色処理
2	坏形土器 土師器	A 15.4 B 4.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	70% P76

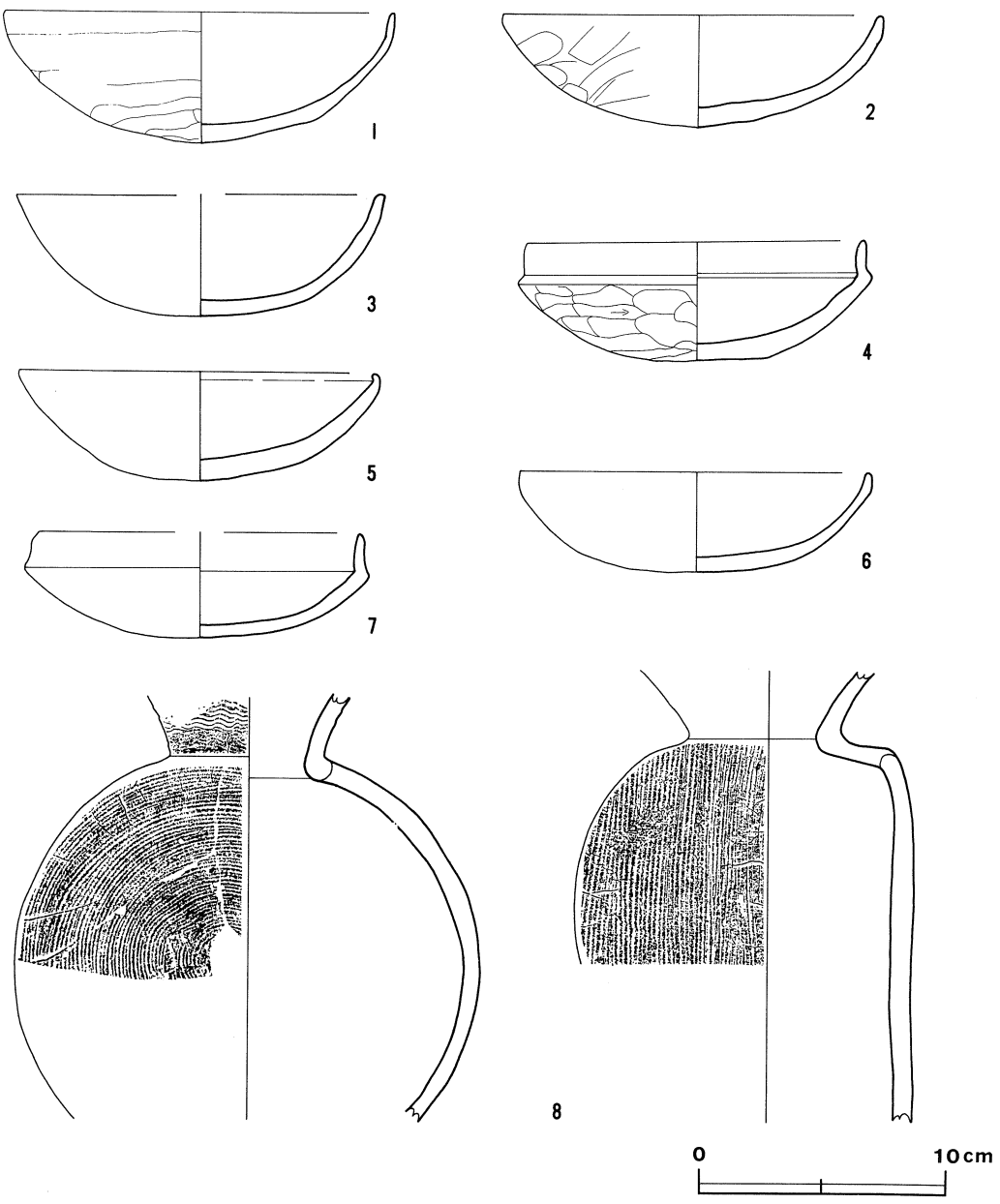
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 3	坏形土器 土師器	A 14.7 B 5.0	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	80% P77
4	坏形土器 土師器	A 13.6 B 4.9	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	90% P74
5	坏形土器 土師器	A 14.5 B 4.5	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	95% P75
6	坏形土器 土師器	A 14.0 B 4.1	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 暗褐色 普通	60% P78
7	坏形土器 土師器	A (13.1) B 4.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	70% P79
8	提瓶 須恵器	B 18.3	体部前面は丸い膨らみをもち，体部背面は平らである。口縁部は外反気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，外面上位に櫛描波状文を施文，体部外面カキ目調整，体部内面ナデ。	砂粒・長石 灰色 良好	60% P80

第18－A号住居跡（第48図）

本跡は，調査区の東部B4e1区を中心に確認された住居跡で，第17号住居跡の東側1.2mに位置している。本跡は，北東側で第18－B号住居跡と重複しているが，土層断面図や出土遺物を検討した結果，本跡の方が新しい遺構と判断される。

本跡は，北コーナー部がエリア外にかかっており，また，前述したように第18－B号住居跡と重複していることから平面形は推定であるが，長軸4.35m・短軸4.25mの方形を呈するものと思われる。主軸方向はN－34°－Wである。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっており，壁高は，29～46cmである。壁下には，上幅13～15cm・深さ6～8cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面は平坦で，ロームが硬く踏み固められている。ピットは，3か所検出され，規模や配列から主柱穴と思われる。主柱穴の規模は，長径36～53cm・短径35～48cm・深さ30～71cmである。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設されているが，煙道部がエリア外にかかっているため規模等は不明である。天井部は崩れているが，袖部は，山砂と粘土に少量の礫を混ぜて構築されており，内側は焼けて赤化している。幅122cm・焚口部幅60cmほどで，掘り方は，壁を幅50cmほど切っているが前述したように煙道部は不明である。火床は，長径41cm・短径30cmの楕円形を呈し，床面を7cmほど掘り込んでいる。

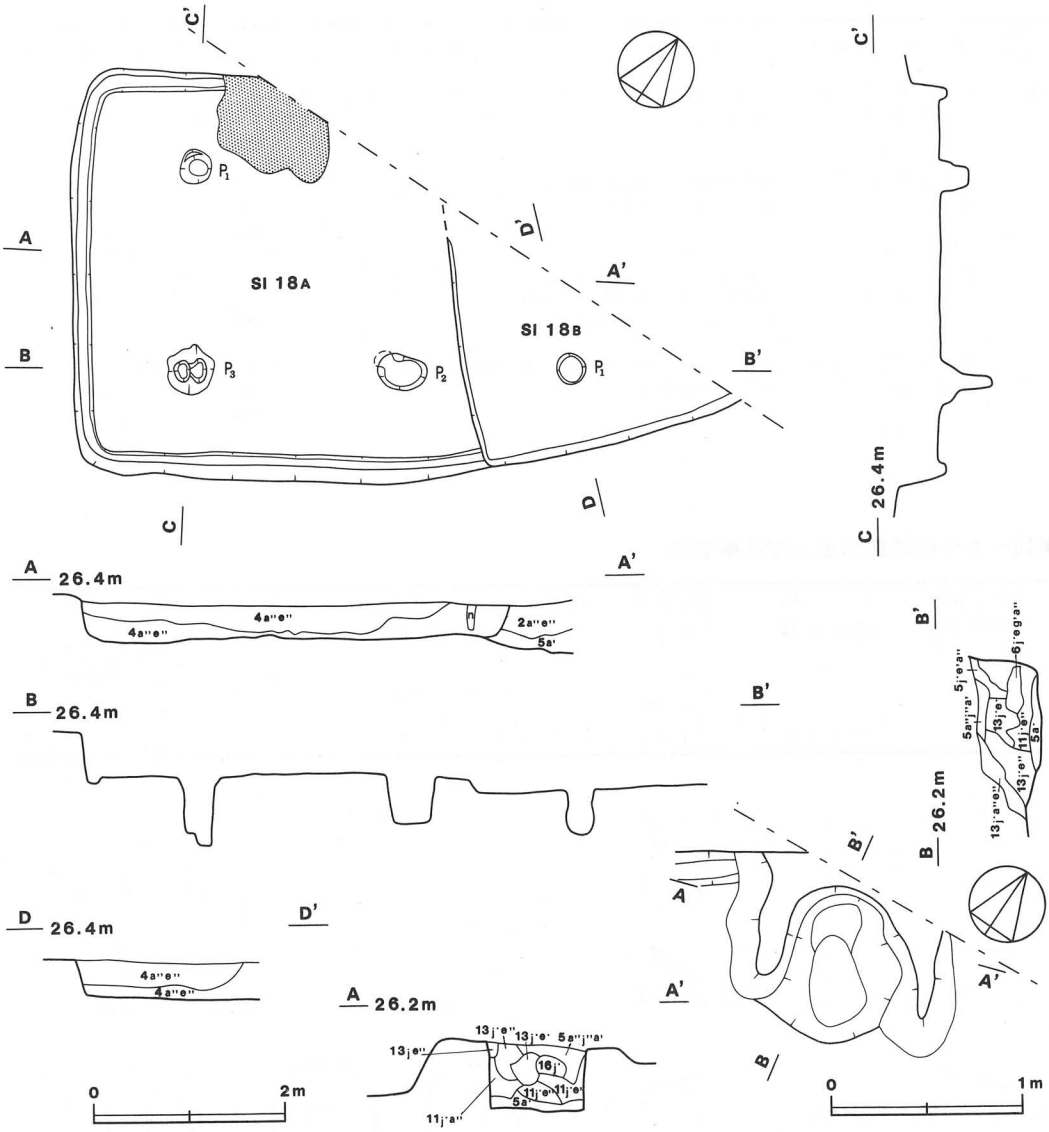
覆土は，2層からなりローム粒子・焼土粒子を極少量含む暗褐色土が自然堆積している。



第47図　第17号住居跡出土遺物実測図

遺物は破片が多く，土師器片466点，須恵器片11点，縄文式土器片15点，土製品４点が出土している。縄文式土器片は，覆土上層から出土しており，周囲からの流れ込みと思われる。本跡に伴う土師器片，須恵器片は，住居跡全域の覆土下層から床面にかけて出土している。

本跡は，出土遺物から奈良時代の８世紀前半に比定されるものと思われる。



第48図　第18－A・B号住居跡実測図

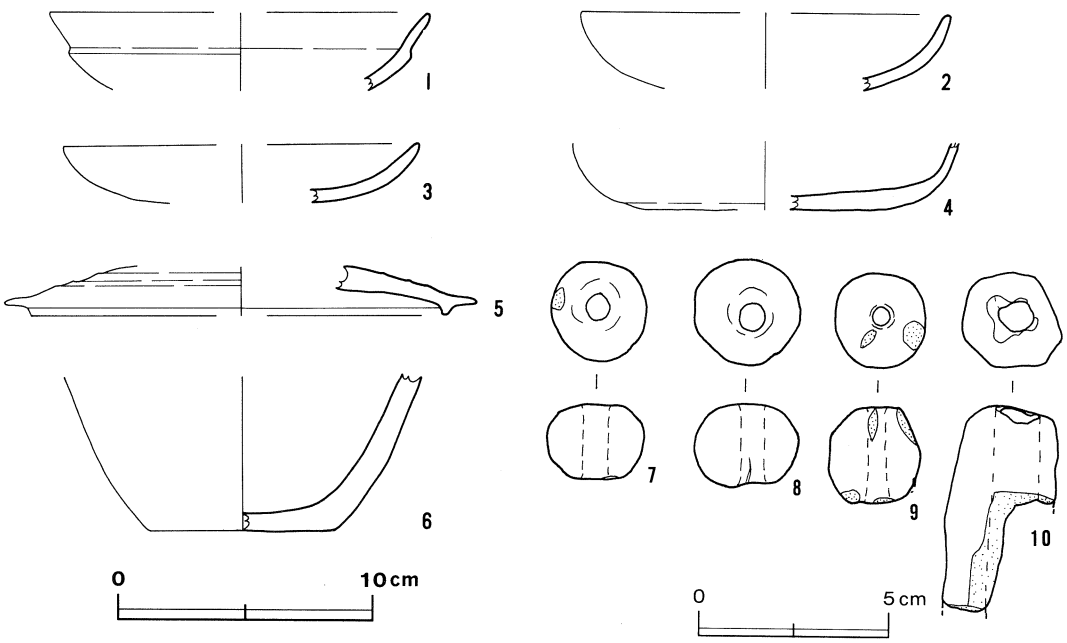
第18－A号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	坏形土器 土師器	A (15.0) B (3.1)	体部は内彎気味に大きく開いて立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外両ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	5％ P84
2	坏形土器 土師器	A (14.5) B 3.0	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	10％ P85

図版番号	器種	法量(cm)	器種の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 3	坏形土器 土師器	A (14.0) B 2.3	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	5% P83
4	坏形土器 須恵器	B (2.7) C (9.5)	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	底部はヘラ削り，体部水挽き。	砂粒・石英 灰色 普通	10% P88
5	蓋 須恵器	A (18.6) B (2.0)	天井部は外下方へなだらかにのび，口縁部は外反気味に開く。口縁部には「かえり」がみられる。	天井部内・外面水挽き。	砂粒・雲母 灰白色 普通	5% P87
6	甕形土器 土師器	B (6.1) C (7.2)	底部は平底で，胴部は内彎して外上方へ立ち上がる。	胴部内・外面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	5% P82

第18－A号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
第49図 7	球状土錘	DP17	2.0× 2.5	0.7	13	100% 両方穿孔
8	〃	DP15	2.1× 2.8	0.7	16	100%，両方穿孔 一部ひび割れ
9	〃	DP16	2.6× 2.4	0.4	(15)	90% 一方穿孔
10	管状土錘	DP18	(5.5)×2.8	0.9	(26)	50% 両方穿孔



第49図　第18－A号住居跡出土遺物実測図

第18－Ｂ号住居跡（第48図）

本跡は，調査区の東部Ｂ4e2区を中心に確認された住居跡で，第19号住居跡の北側２ｍに位置している。本跡は，南西側で第18－Ａ号住居跡と重複しているが，土層断面図や出土遺物から本跡の方が古く，また，本跡の大半は，北側のエリア外に延びているため規模等は不明である。

平方形は，推定で方形かまたは長方形を呈するものと思われる。壁は，締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。残存する壁は，南東壁が50～54cm，南西壁は第18－Ａ号住居跡と重複しているため低く10～13cmである。床面は，全体的に平坦で，ロームが硬く踏み固められている。ピットは，南コーナー部に１か所のみ検出され，長径32cm・短径31cm・深さ47cmの規模を有していることと位置から主柱穴の一部と思われる。

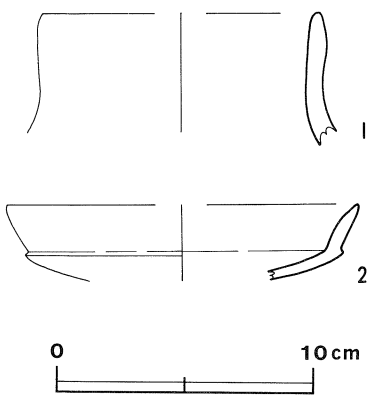
覆土は，上層にローム粒子・焼土粒子を極少量含む暗褐色土が，下層にローム粒子を少量含む褐色土が堆積している。

遺物は少なく，土師器片24点，須恵器片２点が覆土から出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第18－Ｂ号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	壺形土器 土師器	A (10.8) B (4.7)	口縁部はほぼ直立気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 赤橙色 普通	5％ P81
2	坏形土器 土師器	A (13.9) B (3.0)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に立ち上がる。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ナデ，体部内面横ナデ。	砂粒，雲母 明赤褐色 普通	5％ P86



第50図　第18－Ｂ号住居跡出土遺物

実測図

第19号住居跡（第51図）

本跡は，調査区の西部B4g$_2$区を中心に確認された住居跡で，第17号住居跡の南東側1.7mに位置している。

平面形は，長軸5.5m・短軸5.45mの方形を呈し，主軸方向はN－24°－Wを指している。壁は，締まりのあるロームで，各壁ともほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は52～66cmで，当遺跡の中では比較的深い掘り込みである。壁下には，上幅13～20cm・深さ6～10cmの壁溝がカマドを除いて全周している。床面は平坦で，カマドの前方部，P$_1$～P$_5$に囲まれた内側及びP$_2$とP$_3$，P$_3$とP$_4$の間は硬く踏み固められている。ピットは，5か所検出され，規模や配列からP$_1$・P$_2$・P$_4$・P$_5$の4か所が主柱穴と考えられる。主柱穴は，直径51～78cm・深さ40～49cmの規模を有し，ほぼ方形状に規則的に配列されている。出入口としては，ピットの配列や，床面の踏み固められている状態から，P$_2$とP$_3$或いはP$_3$とP$_4$の間が考えられる。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設され，天井部は崩れているが，袖部は山砂・粘土に礫を少量混ぜて構築されており，内側は熱を受けて赤化している。長さ145cm・幅118cm・焚口部幅50cmである。掘り方は，壁を幅30cmで，18cmほど切り込み，奥壁を煙道としている。火床は長径60cm・短径30cmの不整楕円形を呈し，床面を12cmほど掘り込んでいる。カマド内の煙道部近くから坏形土器（第53図7）を入れた大形甕形土器（第53図3）と小形甕形土器（第53図1）がともに正位で火床より若干浮いた状態で，また右袖部前方から，粘土を固めて製作した支脚が出土している。

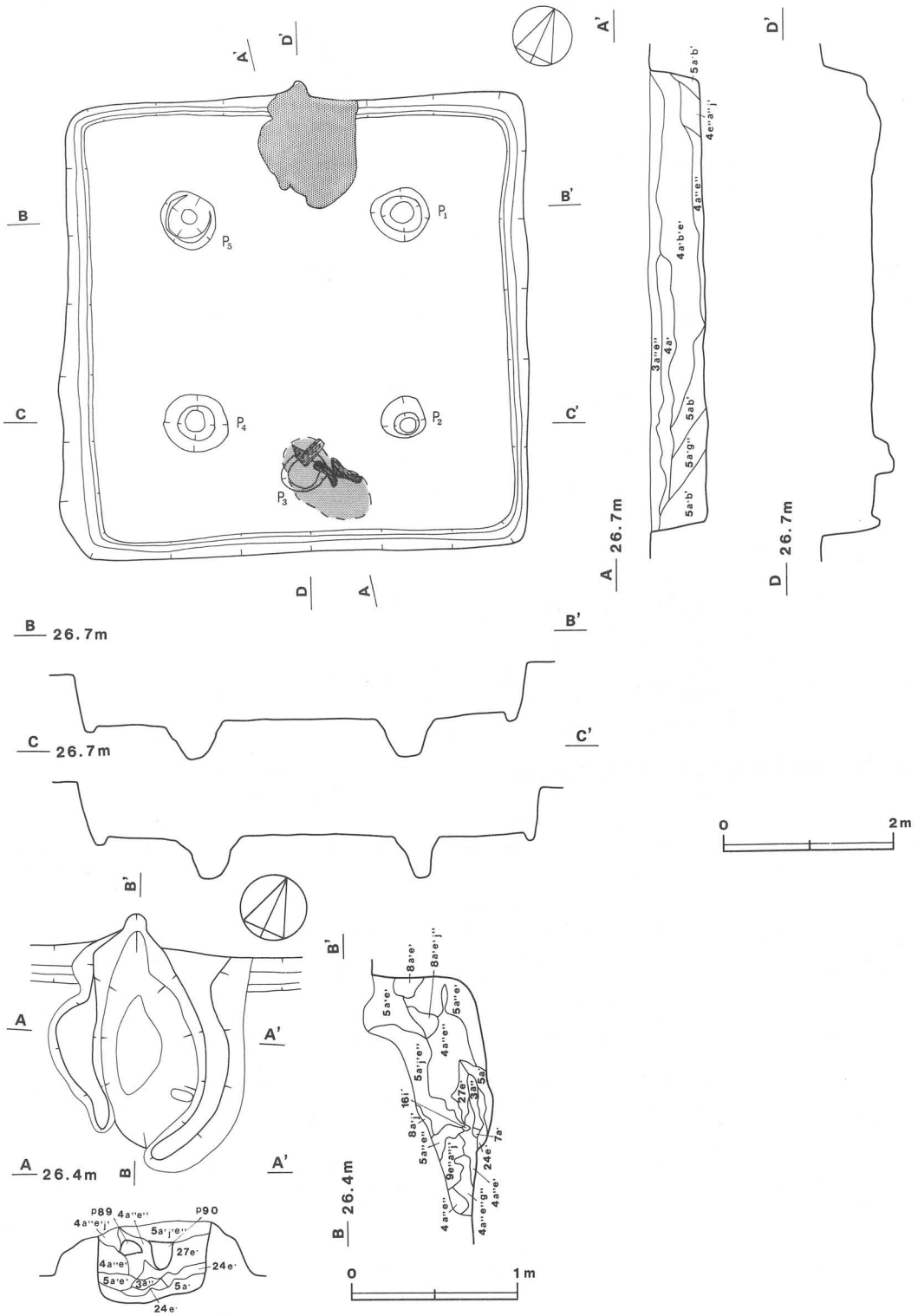
覆土は，上層にローム粒子・焼土粒子を極少量含む極暗褐色土が，中層から下層にかけてはローム粒子・焼土粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。本跡は，覆土に少量の焼土粒子が含まれていることや南東壁寄りの床面上に多量の焼土粒子や少量の炭化材が検出されていることから焼失家屋と考えられる。

遺物は，土師器片463点，須恵器片14点，縄文式土器片45点が出土している。縄文式土器片は周囲からの流れ込みと思われ覆土上層から出土している。住居跡の中央部と北東壁寄りの破片が床面より若干浮いた状態で出土して接合した土師器の甕形土器（第53図2）が出土している。中央部と南東壁際の覆土から出土した破片が接合した坏形土器（第54図10）が出土している。南西壁寄りのほぼ中央の床面から坏形土器（第53図8）が，北西コーナー部の覆土から甕形土器（第53図6）が出土している。

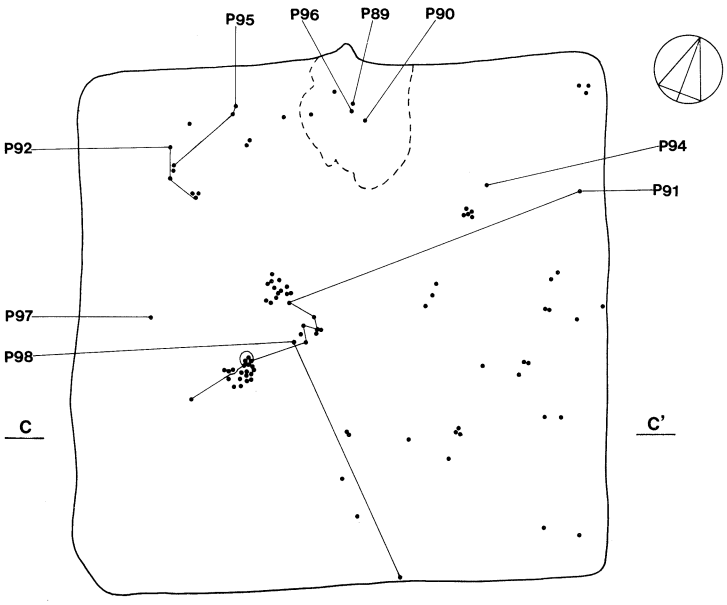
本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

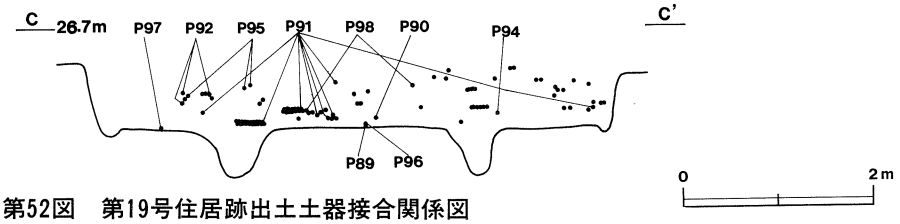
第19号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図1	甕形土器 土師器	A 14.8 B 19.8 C 7.5	底部は平底で，胴部は長胴を呈し，胴部上位に最大径を有する。口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面ナデ後下位は縦位のヘラ磨き，胴部内面へラナデ。	砂粒・石英・雲母にぶい橙色 普通	100% P90



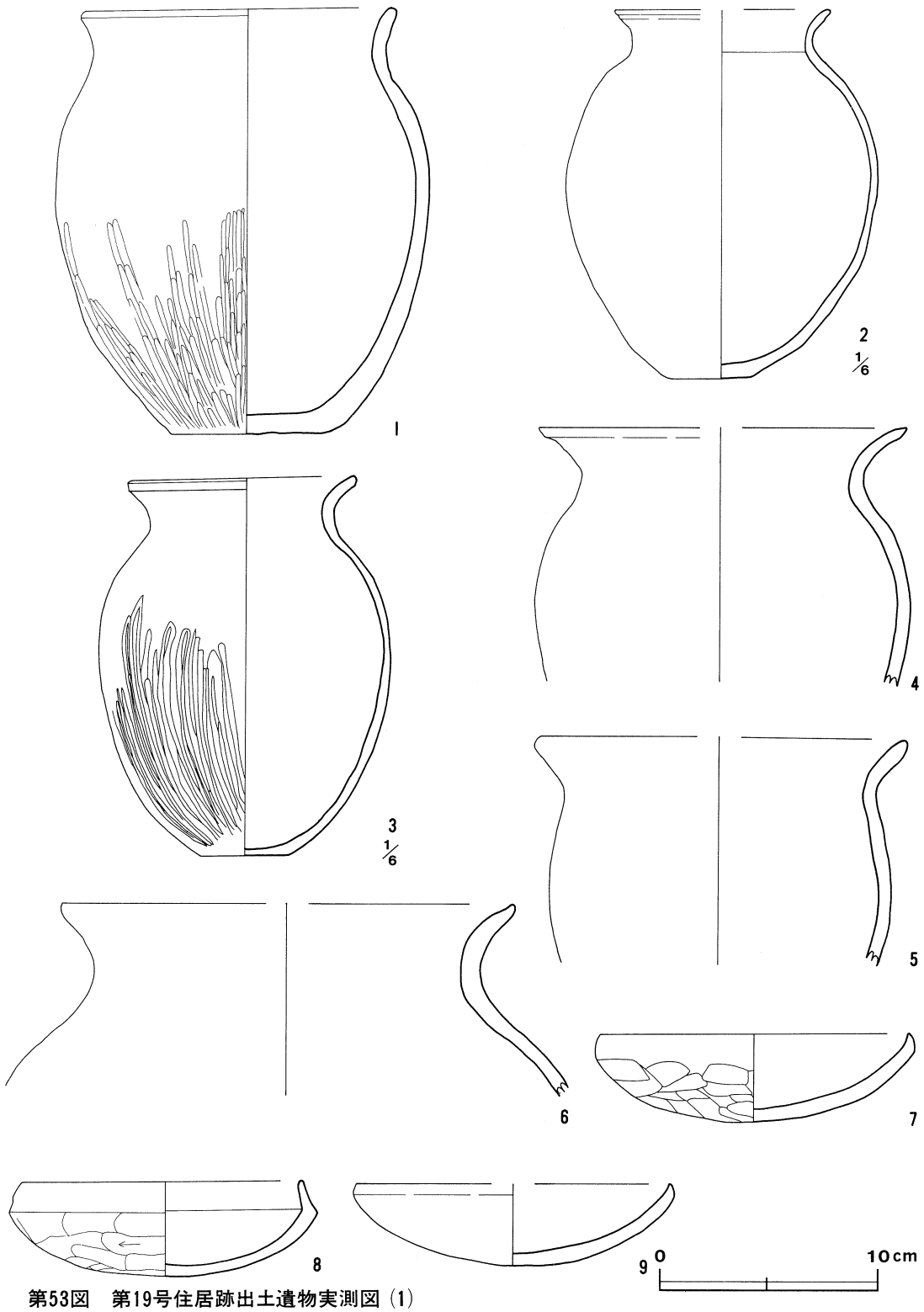
第51図　第19号住居跡実測図



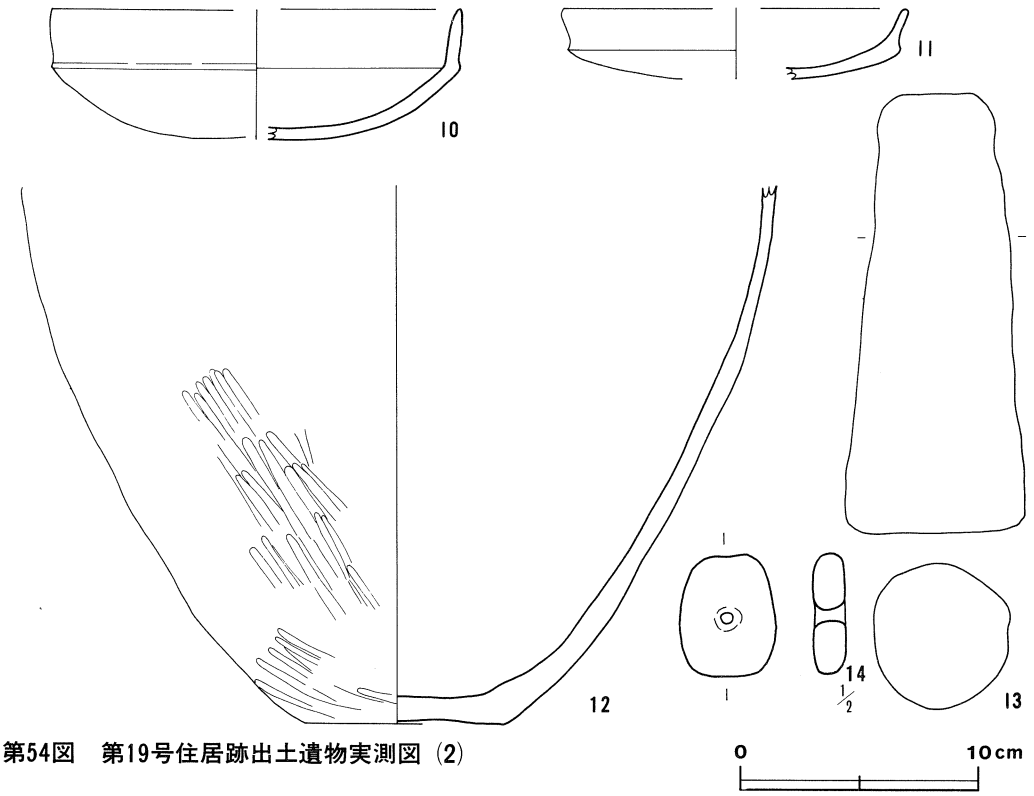


第52図　第19号住居跡出土土器接合関係図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第53図 2	甕形土器 土師器	A 19.7 B 34.3 C 7.5	底部は平底で，胴部は長胴を呈し，胴部中位に最大径を有する。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 不良	80% P91
3	甕形土器 土師器	A 21.4 B 35.5 C 8.2	底部は平底で，胴部は長胴を呈し，胴部中位よりやや上に最大径を有する。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面ナデ後中位から下位に縦位のヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	100% P89
4	甕形土器 土師器	A (17.0) B (11.8)	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	10% P94
5	甕形土器 土師器	A (16.6) B (10.6)	胴部は長胴を呈し，口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	20% P93
6	甕形土器 土師器	A (20.8) B (9.0)	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら立ち上がり，端部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・スコリア・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	20% P92



第53図　第19号住居跡出土遺物実測図（1）



第54図　第19号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼土	備考
第53図 7	坏形土器 土師器	A 14.2 B 4.2	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	100% P96
8	坏形土器 土師器	A 13.1 B 4.5	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒・石英 にぶい赤褐色 普通	95% P97
9	坏形土器 土師器	A (14.6) B 3.9	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	砂粒 褐色 普通	20% P99
第54図 10	坏形土器 土師器	A (17.0) B (5.5)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面ヘラ削り，胴部内面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	30% P98
11	坏形土器 土師器	A (14.3) B (3.0)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	スコリア・雲母 にぶい褐色 普通	10% P100

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第54図 12	甕形土器 土師器	B (22.8) C 8.7	底部は平底で，胴部は内彎して外上方へ立ち上がる。	胴部外面縦位のヘラ磨き，胴部内面ヘラナデ。	砂粒 黒褐色 普通	20% P95 外面剝離

第19号住居跡出土土製品解説表

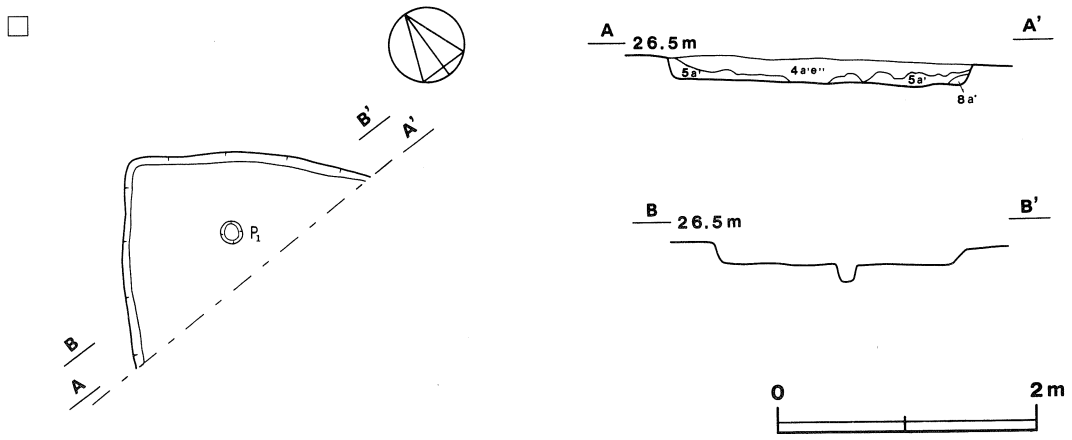
図版番号	名　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第54図 13	支　脚	DP38	(18.5)×7.6	—	(872)	60%
14	土　板	DP19	3.2×2.5×0.9	0.3	9	90% 両方穿孔

第20号住居跡（第55図）

本跡は，調査区の東部B4h$_2$区を中心に確認された住居跡で，第19号住居跡の南東側0.7mに位置している。大部分が調査エリア外にあるため，平面形・規模等の詳細は不明であるが，北側にコーナーを認めることができることから方形または長方形を呈するものと思われる。調査した部分の壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は7～15cmである。床面は，ロームが硬く締まっている。ピットは，1か所のみ検出され，長径18cm・短径16cm・深さ13cmの規模を有している。

覆土は，上層にローム粒子を少量含む暗褐色土が，下層にローム粒子を少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物はわずかに土師器片5点，須恵器片2点が検出されただけである。



第55図　第20号住居跡実測図

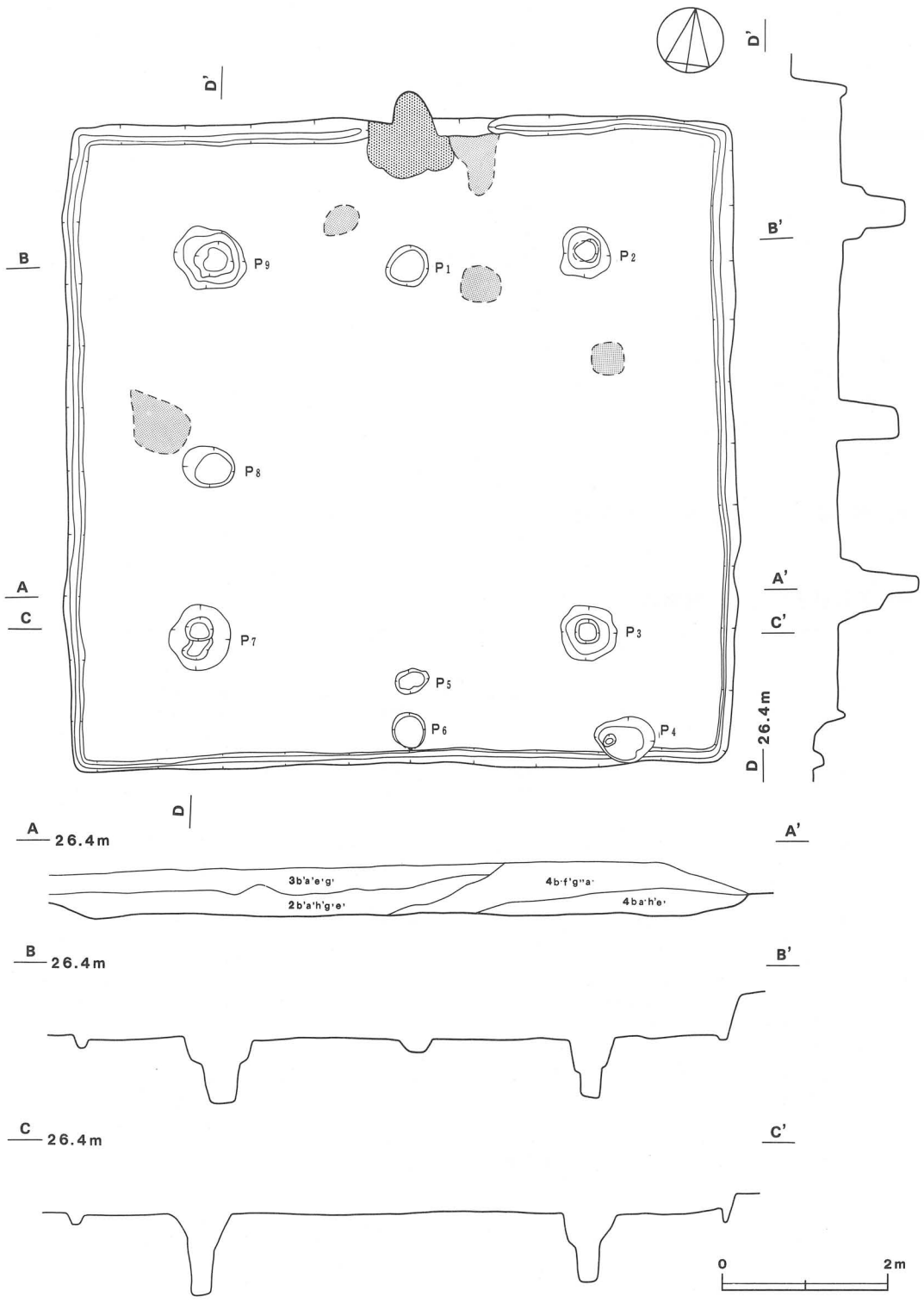
第21号住居跡（第56図）

本跡は，調査区の中央部よりやや西寄りのB2g$_0$区を中心に確認された住居跡で，第16号住居跡の西側5.4mに位置している。本跡は，当遺跡の中でも最も重複の激しい住居跡の一つで，東側で第22号住居跡，南側で第13号住居跡，南西コーナーで第14・15号住居跡，西側で第32号住居跡，北西コーナーで第12号住居跡とそれぞれ重複している。本跡と第13・14号住居跡との新旧関係については，本跡の床面上25～40cmに第13・14号住居跡の明瞭な貼り床が検出され，出土遺物からも本跡の方が古く，第15号住居跡についても，出土遺物から本跡の方が古い遺構と判断される。更に本跡は，第22号住居跡の床面とカマドを切っていることから，また，炉だけ検出された第32号住居跡とは，出土遺物から，本跡の方がそれぞれ新しい遺構と判断されるが，第12号住居跡とについては不明である。

平面形は，長軸8.0m・短軸7.86mの方形を呈し，当遺跡から検出された遺構の中でも最大の住居跡である。主軸方向はN－8°－Wを指している。壁は，北壁にトレンチャーによる部分的な撹乱がみられるほかは締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，北壁が57～61cm，東壁は第22号住居跡と重複している部分が18cm前後で，その他は45～48cm，南壁は28～41cm，西壁は低く3～6cmである。壁下には，上幅9～19cm・深さ3～16cmの規模を有する壁溝がカマドを除いて周回している。床面は，全体的に平坦で，カマドの手前部分及びピットに囲まれた内側はロームが硬く踏み固められており，ピットの外側もよく踏み締められている。ピットは，9か所検出され，その中でP$_2$・P$_3$・P$_7$・P$_9$が規模や配列から主柱穴と思われる。主柱穴は，直径64～85cmのほぼ円形を呈し，深さ73～98cmの規模である。P$_4$～P$_6$は，長径41～73cm・短径28～56cm・深さ17～26cmで，規模や配列から出入口施設に関するピットと思われる。なお，P$_1$・P$_8$は，位置から補助柱穴と思われ，前者は，直径50cm・深さ15cm，後者は，長径64cm・短径51cm・深さ74cmの規模をそれぞれ有している。カマドは，北壁のほぼ中央部に付設され，天井部は崩れて不明であるが，袖部は，少量の礫を含む粘土により構築され，内側は熱を受けて赤化している。長さ110cm・幅106cm・焚口部幅50cmほどである。掘り方は，壁を幅55cmで43cmほど切り込んでいる。火床は，長径55cm・短径50cmの楕円形を呈し，床面を7cmほど掘り込んでいる。火床は，長期間使われたものと思われ，ロームが火熱を受けて焼土ブロック化している。

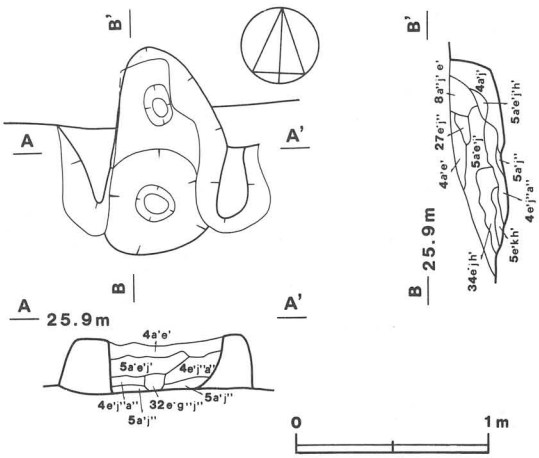
覆土は，自然堆積の様相を呈し，上層に極暗褐色土，下層に黒褐色土が，ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を少量含み堆積している。

遺物は，土師器片1,573点，須恵器片56点，縄文式土器片13点，弥生式土器片10点が出土している。縄文式土器片と弥生式土器片は，周囲からの流れ込みと思われ覆土上層から出土している。本跡に伴う土師器片は，破片が多く覆土中層から下層にかけて出土している。住居跡の中央部よりやや北西側の床面より若干浮いた状態で，甕形土器（第58図2）の口縁部片が出土している。



第56図　第21号住居跡実測図（1）

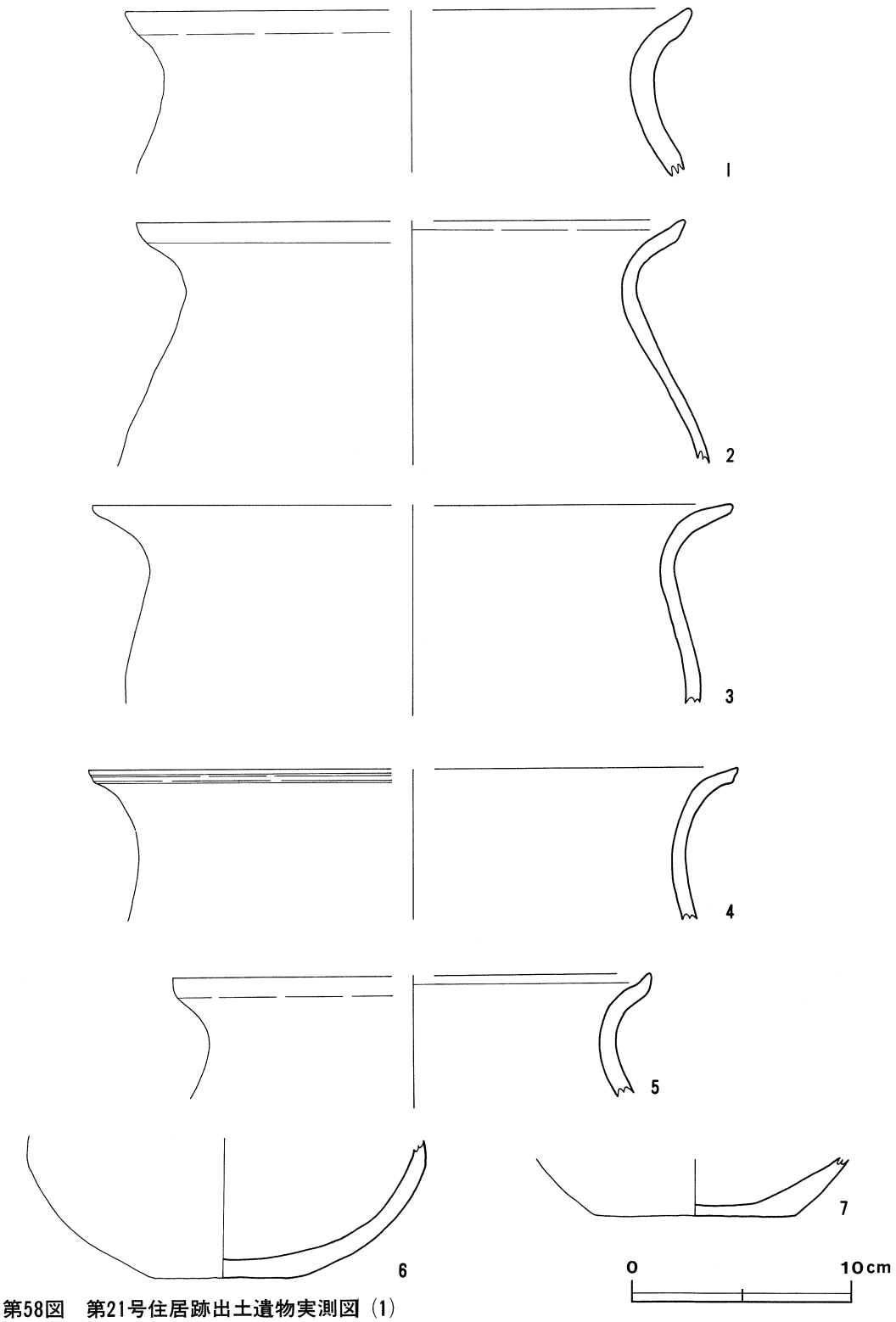
本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



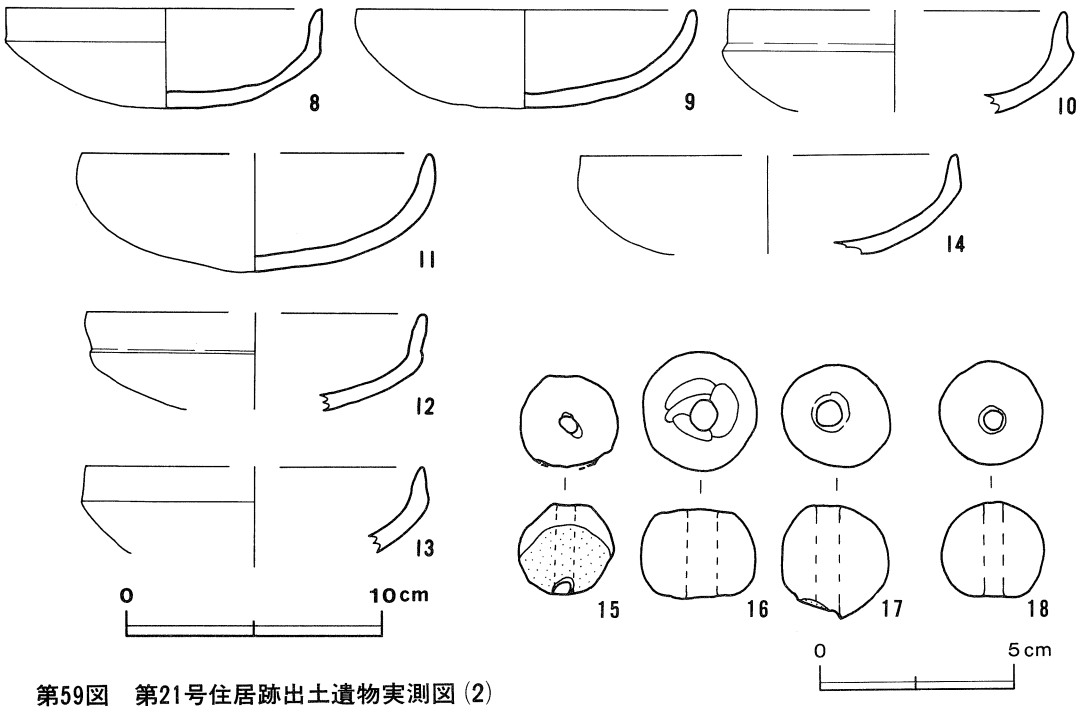
第57図　第21号住居跡カマド実測図 (2)

第21号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼土	備　考
第58図 1	甕形土器 土師器	A (26.1) B 7.2	胴部は丸く張り，口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	5% P101
2	甕形土器 土師器	A (25.2) B (11.3)	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら立ち上がり，端部はややおき上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・石英・雲母 灰褐色 普通	10% P102
3	甕形土器 土師器	A (29.4) B (9.2)	胴部はわずかに張り，口縁部は大きく外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	5% P104
4	甕形土器 土師器	A (29.8) B (7.0)	口縁部は外反しながら立ち上がり，端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	5% P103
5	甕形土器 土師器	A (22.0) B (5.5)	口縁部は外反しながら立ち上がり，端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 淡橙色 普通	5% P105
6	甕形土器 土師器	B (6.6) C 6.0	底部は平底で，胴部は丸く張る。	胴部外面ヘラナデ，胴部内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	20% P106
7	甕形土器 土師器	B (2.6) C 9.0	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・スコリア・雲母 にぶい褐色 普通	5% P107



第58図　第21号住居跡出土遺物実測図（1）



第59図　第21号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 8	坏形土器 土師器	A 12.4 B 4.0	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	90% P108 内・外面剝離
9	坏形土器 土師器	A 13.2 B 3.9	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	80% P109 内・外面剝離
10	坏形土器 土師器	A (13.0) B (4.0)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	5% P115
11	坏形土器 土師器	A (13.6) B 4.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	40% P111
12	坏形土器 土師器	A (14.6) B (3.9)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面ナデ。	砂粒 橙色 普通	30% P112
13	坏形土器 土師器	A (13.2) B (3.8)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面ナデ。	砂粒 赤灰色 普通	10% P114
14	坏形土器 土師器	A (13.2) B (4.4)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	5% P113

第21号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名　　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　　考
第59図 15	球状土錘	ＤＰ５	2.4×2.5	0.5	(13)	70% 一方穿孔
16	〃	ＤＰ20	2.4×3.0	0.8	22	100% 一方穿孔
17	〃	ＤＰ21	3.0×2.8	0.6	19	100% 一方穿孔
18	〃	ＤＰ22	2.5×2.7	0.5	16	100% 両方穿孔

第22号住居跡（第60図）

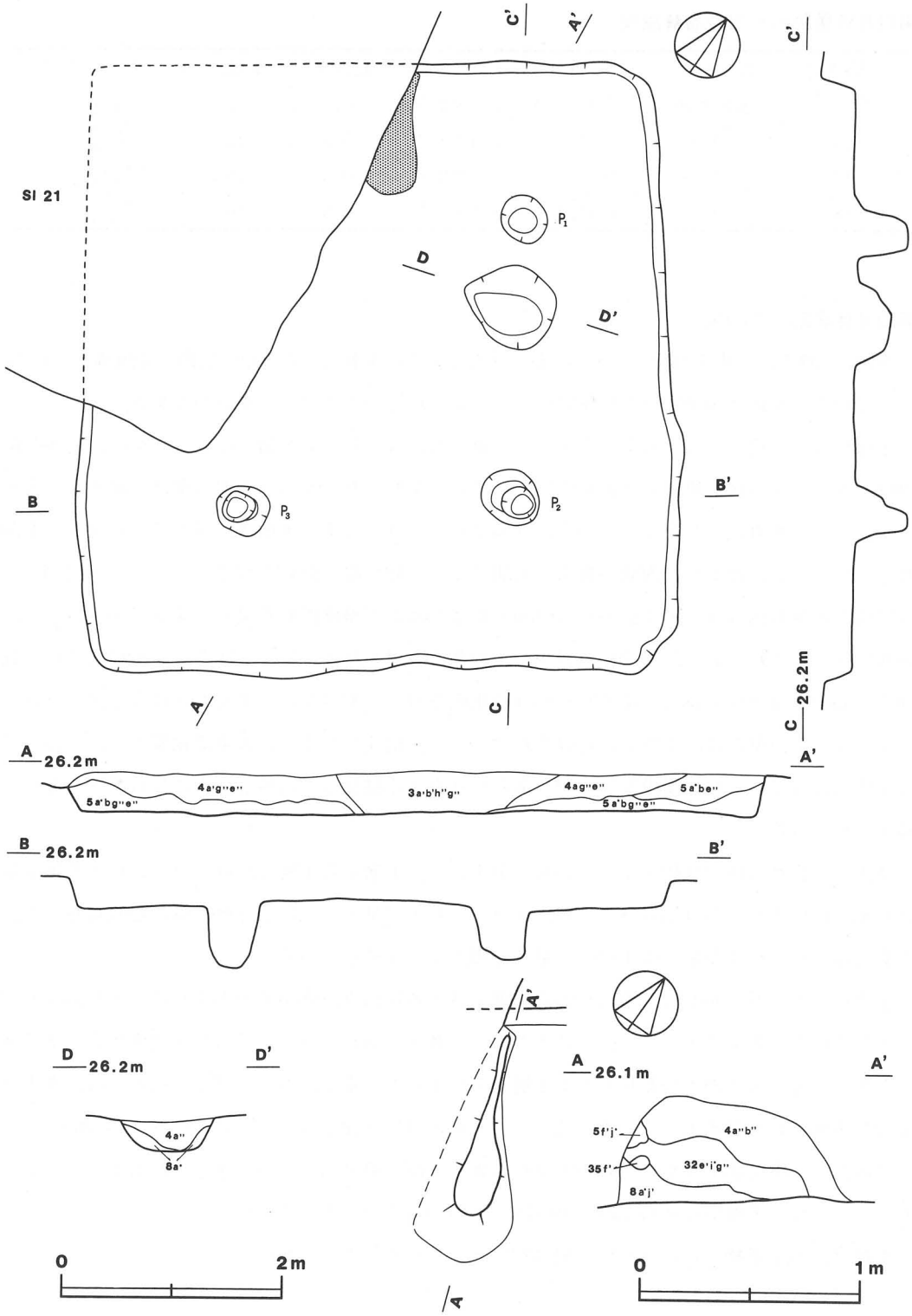
本跡は，調査区の中央部Ｂ3g_2区を中心に確認された住居跡で，第23号住居跡の北西側0.5ｍに位置している。本跡は西側で第21号住居跡により切られていることから本跡の方が古い。

平面形は，一辺が5.47ｍの方形を呈し，主軸方向はＮ－38°－Ｗを指している。壁は，北西・南西壁の西コーナー側が第21号住居跡に切られていて不明であるが，その他の壁は，締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は25～31cmである。床面は，平坦で，カマドの手前部分及びピットに囲まれた内側が農家の土間のように硬く踏み固められている。P_1の南東側0.2ｍに接する落ち込みは，平面形が長径84cm・短径73cmの不整楕円形を呈し，深さは30cmほどで，鍋状に掘り込まれており，規模や位置から，貯蔵穴と思われる。ピットは，３か所検出され，長径45～55cm・短径40～48cm・深さ45～57cmの規模を有し，配列からいずれも主柱穴と思われる。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設されているが，前述したように南東側袖部の一部を除いて大半が切られているため規模等は不明である。残存する袖部は，山砂と粘土に少量の礫を混ぜて構築されている。

覆土は，自然堆積の様相を呈している。中央部は，上層から下層にかけてローム粒子を極少量含む極暗褐色土が，中央部以外の上層にはローム粒子中量・炭化粒子を極少量含む暗褐色土が，下層にはローム粒子多量・焼土粒子少量含む褐色土が堆積している。

遺物は，土師器片462点，須恵器片29点，縄文式土器片15点，弥生式土器片10点，土製品１点が出土している。縄文式土器片，弥生式土器片は，覆土上層から出土しており，周囲からの流れ込みと思われる。大半の土師器片も覆土上層から出土しているが，本跡に伴う土師器片は，覆土下層及び床面から少量出土している。北コーナー部のほぼ床面から，土師器の甕形土器（第61図１）の口縁部と，中央部からやや南側の床面から甕形土器（第61図２）の口縁部片が出土している。南コーナー部の床面から坏形土器（第61図５）の坏部片が出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



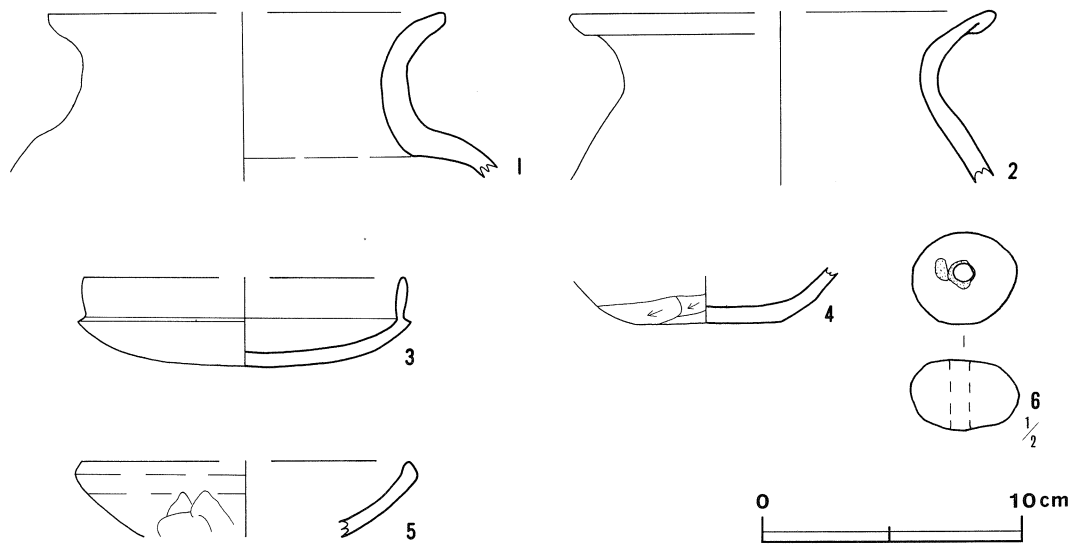
第60図　第22号住居跡実測図

第22号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第61図 1	甕形土器 土師器	A (15.6) B (6.1)	口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	10% P117
2	甕形土器 土師器	A (16.2) B (6.8)	胴部は丸く張り，口縁部は折り返し口縁で，外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 浅黄橙色 普通	5% P118
3	坏形土器 土師器	A (12.4) B 3.5	底部は丸底で，体部は内彎気味に大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	50% P110
4	坏 須恵器	B (1.8) C 5.7	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 灰色 普通	10% P120
5	坏形土器 土師器	A (13.0) B (3.0)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	5% P119

第22号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第61図 6	球状土錘	DP24	1.9×2.6	0.7	10	100% 一方穿孔



第61図　第22号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡（第62図）

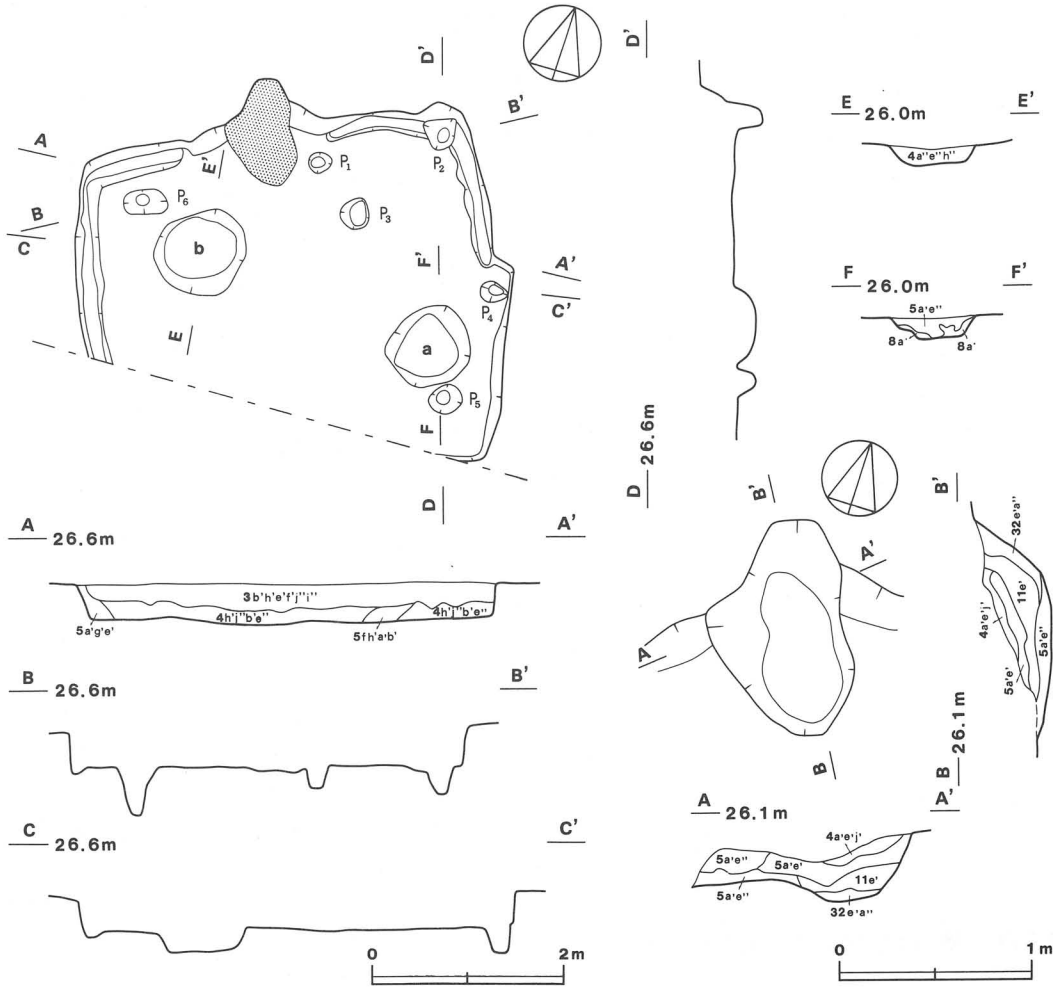
本跡は，調査区のほぼ中央部B3h2区を中心に確認された住居跡で，第22号住居跡の南東側0.3mに位置している。

平面形は，本跡の南側の一部がエリア外にかかっているため，調査した部分から推定すると，長軸4.32m・短軸3.74mの方形を呈するものと思われる。主軸方向はN－26°－Wを指している。壁は，東コーナー付近を除いた南東壁から南西壁の半分ほどにかけて，前述したようにエリア外にかかっているため検出できなかったが，他の壁は，締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁高は34～40cmである。壁下には，壁溝が北東壁のP_4に近い場所からカマドを除いた北西壁及び南西壁にかけて検出され，上幅21～33cm・深さ6cmほどの規模を有している。床面は，全体的に平坦で，カマドの手前部分及び住居跡の中央部は農家の土間のように硬く踏み固められている。規模や位置から貯蔵穴と思われる施設が東（a）と西コーナー寄り（b）に2か所検出された。貯蔵穴aの平面形は，長径92cm・短径81cmの楕円形を呈し，床画から底面までの深さは22cmである。覆土は，上層に褐色土が，下層に明褐色土が堆積している。貯蔵穴bの平面形は，長径96cm・短径87cmの楕円形を呈し，床面から底面までの深さは24cmで，覆土は，1層で暗褐色土である。ピットは，6か所検出されているが，規模や配列から主柱穴は，P_3・P_5・P_6の3か所と思われる。主柱穴の規模は，長径34～44cm・短径26～35cm・深さ20～51cmである。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設されているが崩れており，天井部・袖部の構造等は不明である。規模を推定すると長さは114cm・幅70cmほどである。掘り方は，壁を幅75cmで34cmほど切り込み，奥壁を煙道としている。火床は，床面を16cmほど掘り込んでいる。

覆土は，上層に黒褐色土，下層に暗褐色土が自然堆積している。覆土には，少量のローム粒子・ローム小ブロック，極少量の焼土粒子・炭化粒子を含み締まっている。

遺物は，土師器片303点，須恵器片60点が住居跡中央部の覆土から出土している。土師器の甕形土器（第63図1）が北東コーナー部床面から，須恵器の蓋（第63図4）が中央部の覆土から出土している。

本跡は，出土遺物から奈良時代の8世紀後半に比定されるものと思われる。

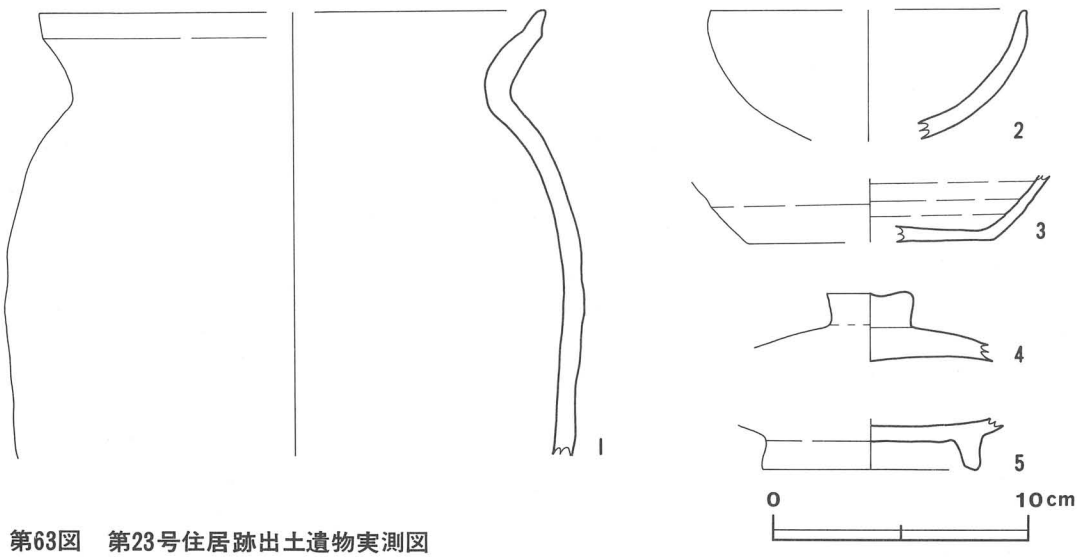


第62図　第23号住居跡実測図

第23号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 1	甕形土器 土師器	A (19.8) B (17.5)	胴部は長胴を呈し，口縁部は外反しながら立ち上がる。端部は上方へつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面ナデ，胴部内面ヘラナデ。	砂粒・雲母にぶい橙色普通	20% P121
2	坏形土器 土師器	A (12.4) B (5.1)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面ナデ。	砂粒・雲母にぶい褐色普通	10% P122

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第63図 3	坏 須恵器	B（2.5） C（9.6）	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ削り，体部水挽き。体部下端回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰色 普通	10% P125
4	蓋 須恵器	B（2.8）	天井部は内彎気味にひろがり，天井中央部に扁平なボタン状のつまみが付く。	天井部内・外面水挽き。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	30% P123
5	高台付坏 須恵器	B（1.7） D（8.4）	高台は外下方へのびる。	高台は貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒 暗オリーブ灰色 普通	40% P124

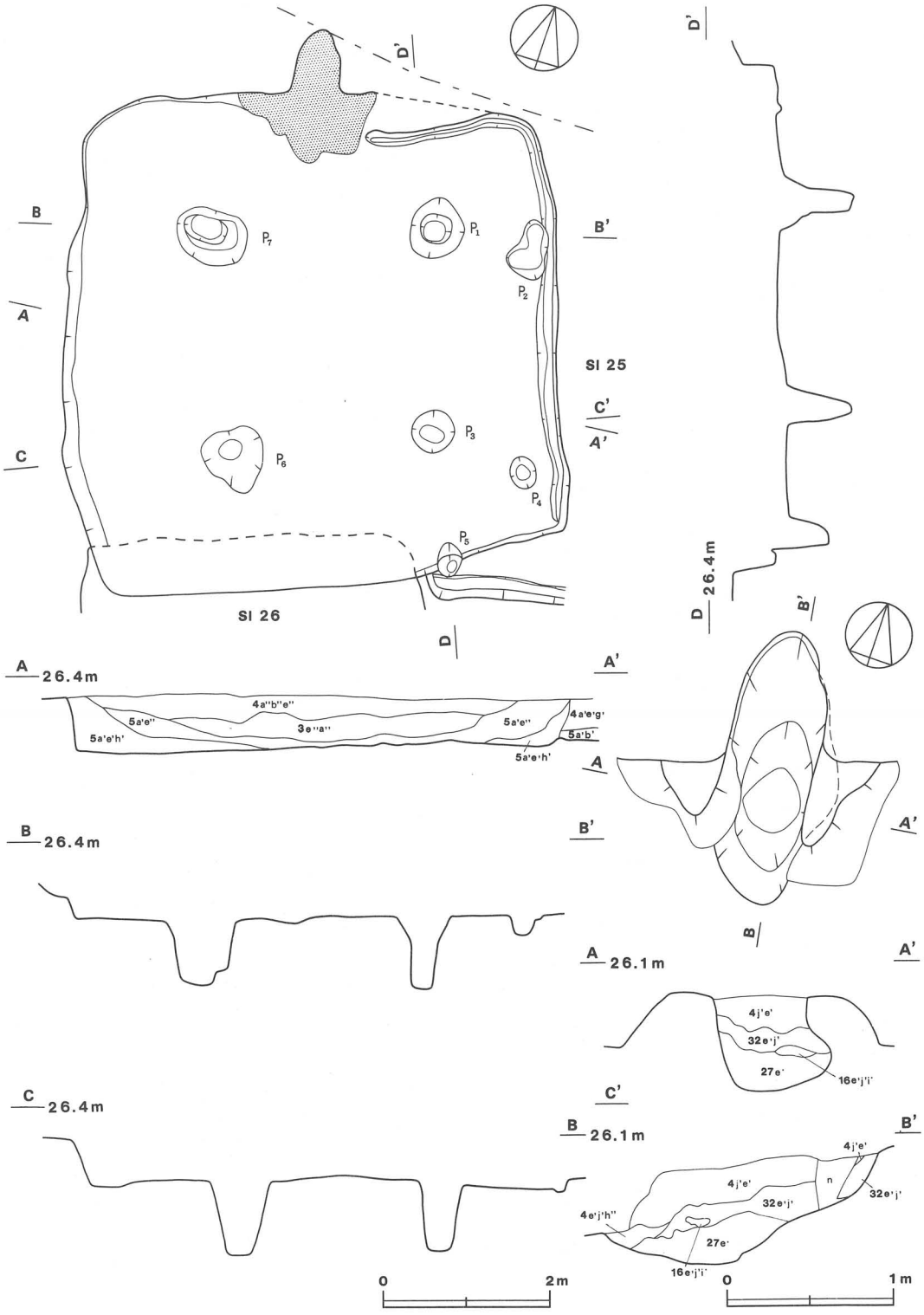


第63図　第23号住居跡出土遺物実測図

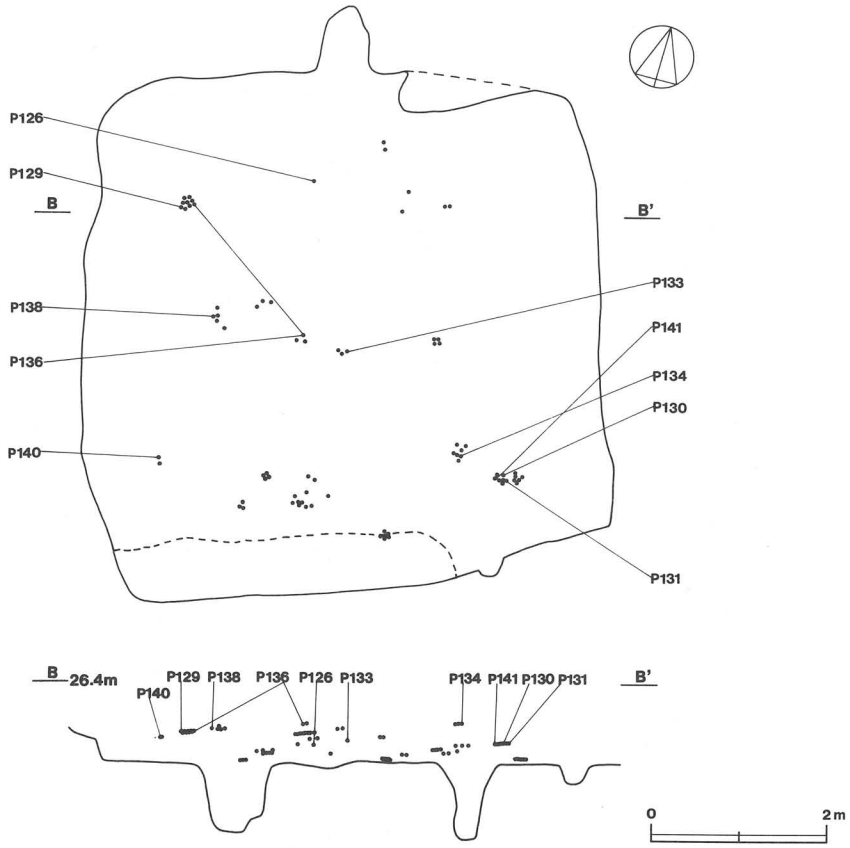
第24号住居跡（第64図）

本跡は，調査区の中央部B3f₄区を中心に確認された住居跡で，第16号住居跡の東側0.4mに位置している。本跡は，東側で第25号住居跡を切っており，また，南側でも第26号住居跡と重複しているが出土遺物から本跡の方が新しい遺構である。

平面形は，長軸6.03m・短軸5.87mの方形を呈し，主軸方向はN－19°－Wを指している。壁は，一部撹乱を受けている部分もあるが，締まりのあるロームで，南西壁の一部に外傾して立ち上がっている部分もみられるが，その他はほぼ垂直に立ち上がっている。北西壁は，カマドの北東側が撹乱され，更に第25号住居跡と重複しているため立ち上がりは不明であるが，北西側の壁高は25cm前後である。北東壁から南東壁の東コーナー寄りは重複のため浅く5～14cmである。南西壁は25～65cmである。壁溝は，北西壁のカマド北東側から北東壁下にかけて周回しており，上幅10～15cm・深さ3～5cmの規模を有している。床面は，中央部から東側にかけて多少凹凸がみられ



第64図　第24号住居跡実測図



第65図　第24号住居跡出土土器接合関係図

るが，ピットに囲まれた内側は，農家の土間のようにロームが硬く踏み固められている。ピットは，7か所検出されているが，規模や配列から本跡に伴うピットはP_1・P_3・P_6・P_7の4か所で，いずれも主柱穴と思われる。これらの主柱穴は，直径52～87cm・深さ78～89cmの規模を有している。カマドは，当遺跡の中で最大規模を有し，北西壁の中央部に付設されているが，天井部は崩れている。袖部は，山砂により構築されており，内側は熱を長期間受けたため赤化し，覆土からは多量の焼土粒子が検出されている。長さ168cm・幅168cm・焚口部幅40cmほどである。掘り方は，壁を幅64cmで75cmほど切り込んでいる。火床は，長径92cm・短径41cmの楕円形を呈し，床面を深さ23cmほど掘り込んでいる。

覆土は，3層からなり，凹レンズ状に自然堆積している。上層には暗褐色土が，中層にも暗褐色土が，下層には褐色土がローム粒子・焼土粒子を極少量含み，壁際にはローム粒子を少量含む褐色土が堆積している。

遺物は多く，土師器片1,104点，須恵器片265点，縄文式土器片3点，土製品4点が出土してい

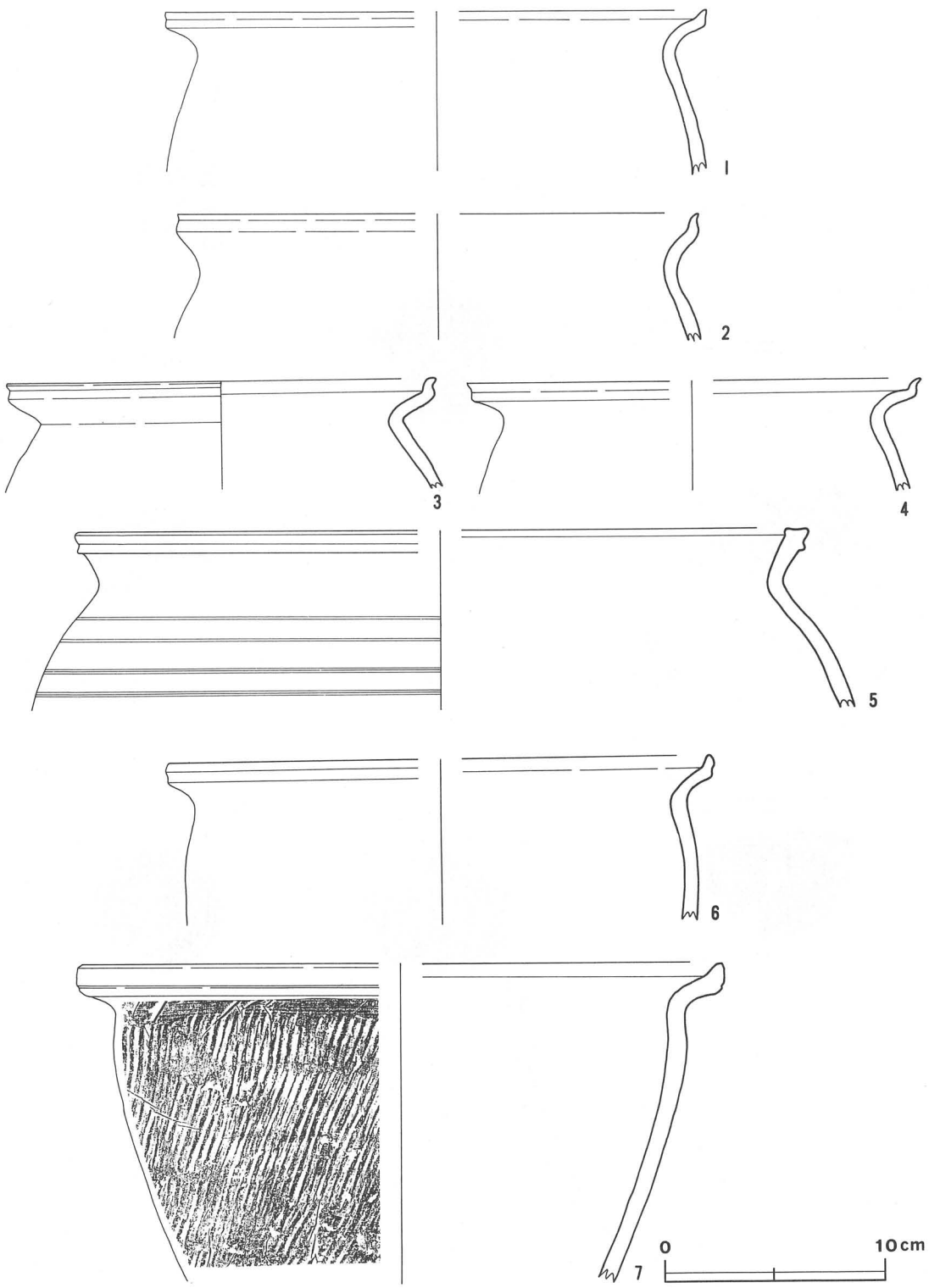
る。縄文式土器片は，周囲からの流れ込みと思われ，本跡に伴う土師器片は，住居跡全域の覆土下層から床面にかけて出土している。住居跡のほぼ中央部と北西側の覆土から土師器の坏形土器（第67図12）が，更に南東側床面より浮いた状態で須恵器の壺（第67図23）が出土している。

本跡は，出土遺物から平安時代の９世紀後半に比定されるものと思われる。

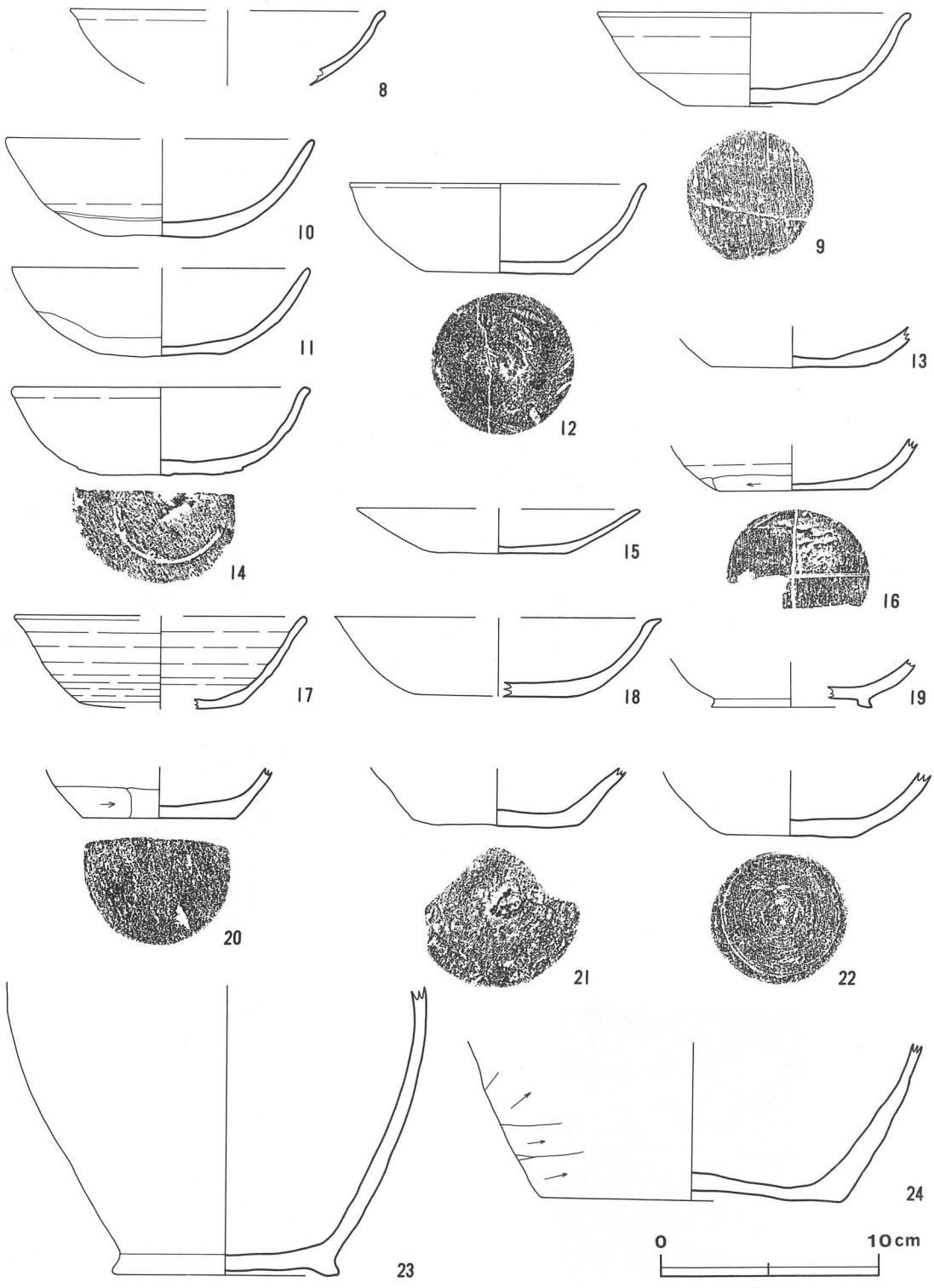
第24号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 1	甕形土器 土師器	A（24.8） B（ 7.4）	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	5％ P127
2	甕形土器 土師器	A（24.0） B 5.9	口縁部は外反しながら立ち上がり，端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	5％ P128
3	甕形土器 土師器	A 19.5 B（ 5.1）	口縁部は外反しながら立ち上がり，端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	10％ P144
4	甕形土器 土師器	A（20.8） B（ 5.1）	口縁部は外反しながら立ち上がり，端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	5％ P126
5	甕 須恵器	A（33.8） B（ 8.3）	胴部は丸く張り，口縁部は外反して立ち上がる。口縁端部外面に稜を有し，口唇部は平らである。	口縁部内・外面横ナデ，胴部水挽き，内面横ナデ。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	5％ P140
6	甕 須恵器	A（25.0） B（ 7.6）	胴部は長胴を呈し，口縁部は外反しながら立ち上がり，端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面斜位の平行叩き，胴部内面ナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	5％ P154
7	甕 須恵器	A（29.9） B（14.8）	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部は外反する。口縁端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面斜位の平行叩き，胴部内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 普通	20％ P139
第67図 8	坏形土器 土師器	A（14.4） B（ 3.4）	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反する。	体部水挽き。	砂粒・雲母 明褐灰色 普通	10％ P242 内面黒色処理
9	坏形土器 土師器	A 14.3 B 4.2 C 6.2	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり口縁部はわずかに外反する。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	65％ P149 内面黒色処理
10	坏形土器 土師器	A（14.1） B 4.5 C 5.2	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 灰赤色 普通	50％ P148 内面黒色処理
11	坏形土器 土師器	A（13.6） B 4.0 C（ 5.8）	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	30％ P138 内面黒色処理
12	坏形土器 土師器	A 13.6 B 4.2 C 6.6	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁端部はやや外反する。	底部回転ヘラ切り，体部水挽き。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	80％ P136 内面黒色処理

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第67図 13	坏形土器 土師器	B (1.3) C 7.4	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	20% P153 内面黒色処理
14	坏 須恵器	A 13.8 B 4.1 C 7.6	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ切り，体部水挽き。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	50% P141
15	坏形土器 土師器	A (12.8) B 2.1 C (6.1)	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，端部は丸い。	底部回転ヘラ切り，体部水挽き。	スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	40% P151
16	坏形土器 土師器	B (2.1) C 6.6	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	20% P243 内面黒色処理 底部に「＋」の線刻
17	坏 須恵器	A (13.6) B 4.3 C (7.6)	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部回転ヘラ切り，体部水挽き。	砂粒 褐灰色 普通	15% P156
18	坏形土器 土師器	A (15.0) B 3.6 C 7.2	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き，横ナデ，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 明褐灰色 普通	30% P150 内面黒色処理
19	高台付坏 灰釉陶器	B (2.1) D (7.4)	体部は内彎しながら立ち上がり，高台は短く「ハ」の字状に開いている。	体部内・外面水挽き。	砂粒 灰白色 良好	10% P143 内面に施釉
20	坏形土器 土師器	B (2.2) C 7.0	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部は手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	20% P244 内面黒色処理
21	坏 須恵器	B (2.7) C (7.6)	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ切り，体部水挽き。	砂粒・石英 灰黄褐色 普通	25% P137
22	坏 須恵器	B (2.9) C 5.9	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ削り，体部水挽き，体部下端回転ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	40% P142
23	壺 須恵器	B (13.3) C 10.5	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，底部が突出している。	胴部面・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 灰褐色 普通	20% P130
24	甕形土器 土師器	B (7.2) C (13.6)	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り，胴部内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 赤褐色 普通	10% P129
第68図 25	高台付坏形 土器 土師器	B (1.9) D 8.3	高台は外下方へのびる。	高台は貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	40% P131 内面黒色処理
26	高台付坏形 土器 土師器	B (3.2) D 7.1	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	体部水挽き，高台貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	30% P134 内面黒色処理
27	高台付坏形 土器 土師器	B (1.8) D 5.9	高台は外下方へのびる。	高台貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 灰褐色 普通	20% P133



第66図　第24号住居跡出土遺物実測図（1）

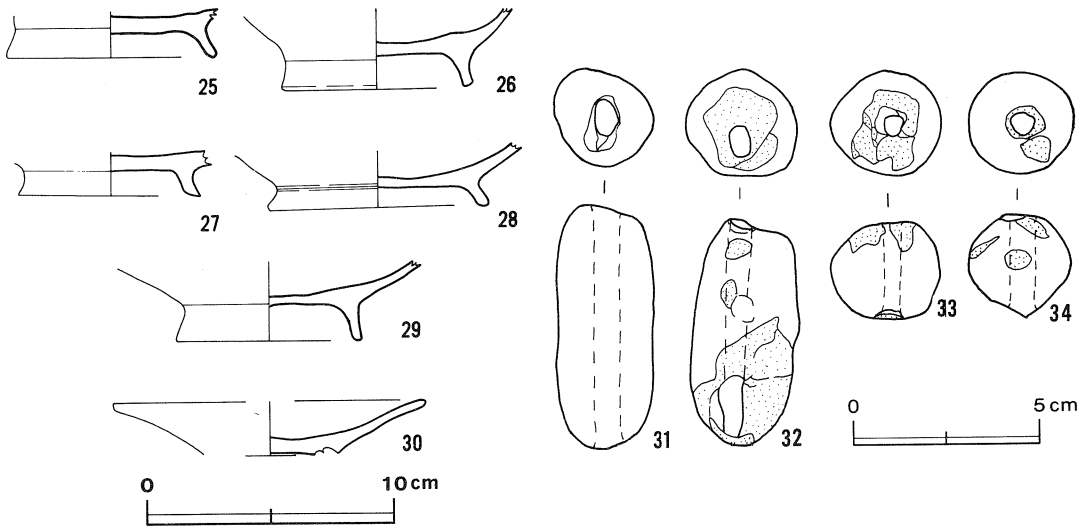


第67図　第24号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第68図 28	高台付坏形土器 土師器	B（2.3） D　8.8	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	体部水挽き，高台は貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 明褐灰色 普通	40% P135 内面黒色処理
29	高台付坏形土器 土師器	B（3.0） D　7.4	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	体部水挽き，高台貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 雲母 橙色 普通	40% P132
30	高台付坏形土器 土師器	A（12.6） B（2.2）	体部は外反しながら大きく開いて立ち上がる。	体部水挽き。	砂粒・石英 淡橙色 普通	40% P241 内面黒色処理

第24号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量（g）	備　考
第68図 31	管状土錘	DP27	6.6×2.6	0.7	37	100% 両方穿孔
32	〃	DP28	6.2×2.9	0.5	40	80% 一方穿孔
33	球状土錘	DP25	2.7×3.0	0.9	19	100% 一方穿孔
34	〃	DP26	2.8×2.8	0.7	16	100% 一方穿孔

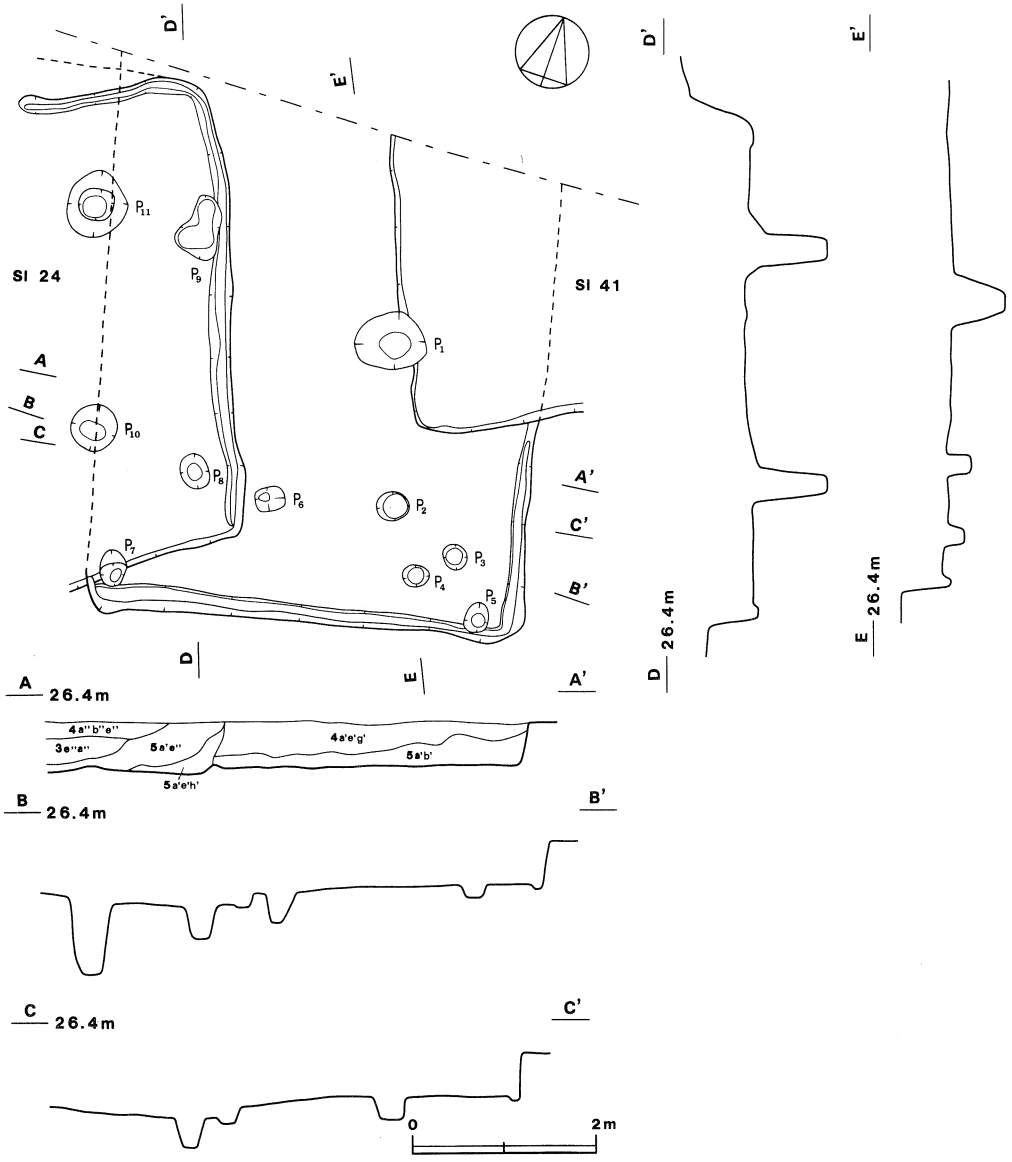


第68図　第24号住居跡出土遺物実測図（3）

第25号住居跡（第69図）

本跡は，調査区のB3f$_5$区を中心に確認された住居跡で，第27号住居跡の北側2.5mに位置している。本跡は，北東側で第41号住居跡と西側では第24号住居跡と重複しているが，いずれも本跡の床面が切られていることと出土遺物から本跡の方が古い遺構である。

平面形は，本跡の北側がエリア外にかかっているため推定となるが，長方形を呈し，南壁の長さ4.75mで，主軸方向はN－12°－Wを指すものと思われる。壁は，前述したように他の遺構との重複とエリア外にかかっているため東壁の南側部分から南壁しか明確にできなかった。東壁・南壁は締まりのあるロームで，垂直に立ち上がっている。壁高は45～48cmである。壁下には，壁溝が上幅11～14cm・深さ５～８cmの規模で周回している。床面は，東側と西側の一部が，前述したように，重複のため切られているが，残存する床面は，ロームが硬く踏み固められており，農家の土間のように硬い。ピットは，11か所検出されているが，本跡に伴うピットは，P_1～P_9の９



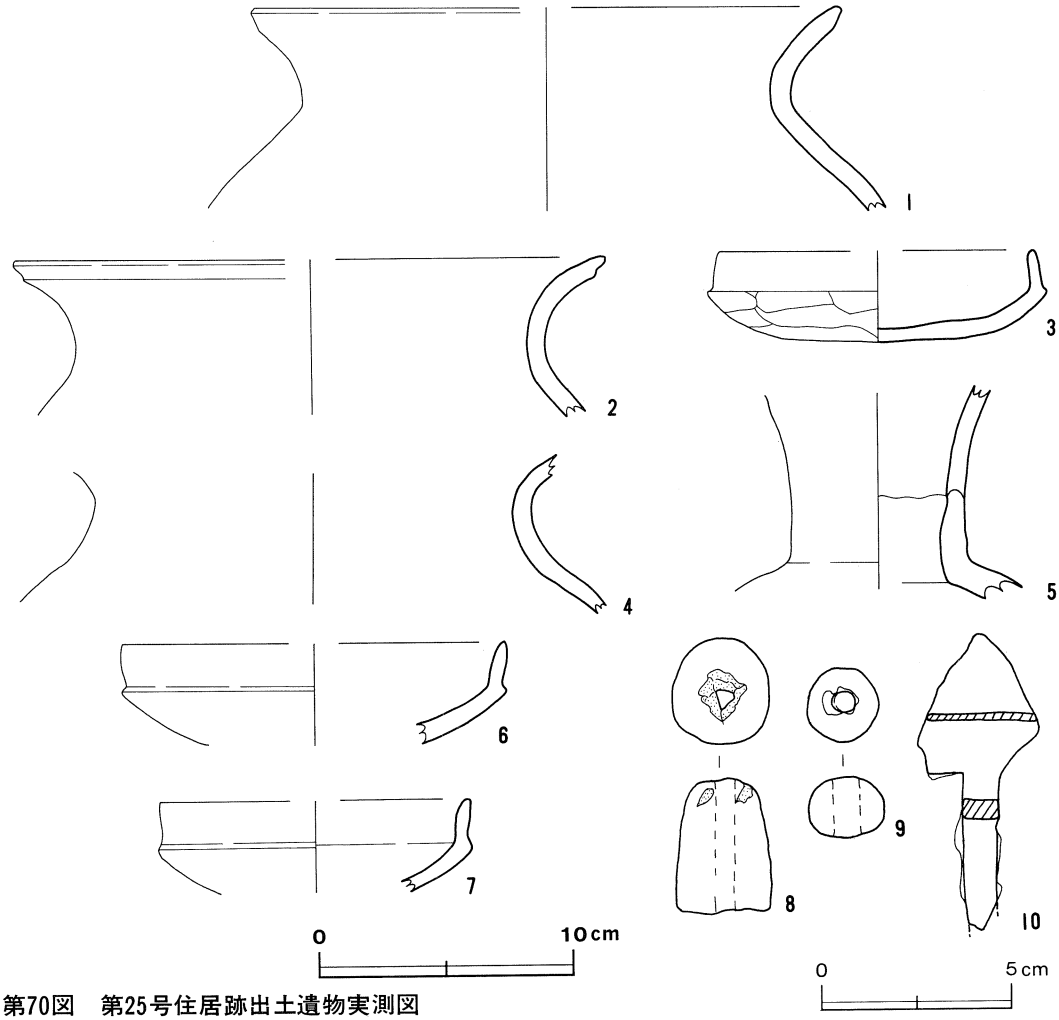
第69図　第25号住居跡実測図

か所で，P_{10}・P_{11}は，重複する第24号住居跡のピットである。P_2・P_8・P_9は，配列や規模から主柱穴と思われ，長径36～70cm・短径31～47cmの規模を有している。P_3～P_7は，長径28～40cm・短径25～31cm・深さ14～32cmで，規模や配列から補助柱穴と思われる。中央部からやや東側に位置するP_1は，長径80cm・短径64cm・深さ57cmで，本跡内でも最大規模を有するピットであるが性格は不明である。

覆土は，2層からなり，上層にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を極少量含む暗褐色土が，下層にローム粒子・ローム小ブロックを極少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は破片が多く，土師器片710点，須恵器片150点，鉄製品1点，土製品2点が出土している。本跡の南東コーナー部の床面から土師器の甕形土器（第70図1）の口縁部片と坏形土器（第70図3）が出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



第70図　第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 1	甕形土器 土師器	A (23.0) B (8.0)	胴部は丸く張り，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	5% P145
2	甕形土器 土師器	A (23.0) B (6.1)	口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	5% P146
3	坏形土器 土師器	A (12.3) B 3.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面へラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	45% P147
4	甕形土器 土師器	B (5.1)	口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 浅黄橙色 普通	5% P246
5	長頸壺 須恵器	B (7.7)	頸部は外反しながら外上方へ立ち上がり口縁部へ至る。	頸部水挽き。	砂粒 灰色 普通	5% P155
6	坏形土器 土師器	A (15.0) B (4.0)	体部は内彎しながら大きく開き，口縁部は外反気味に立ち上がる。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面へラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	10% P247
7	坏形土器 土師器	A (12.2) B (3.6)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面へラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	10% P152

第25号住居跡出土土製品解説表

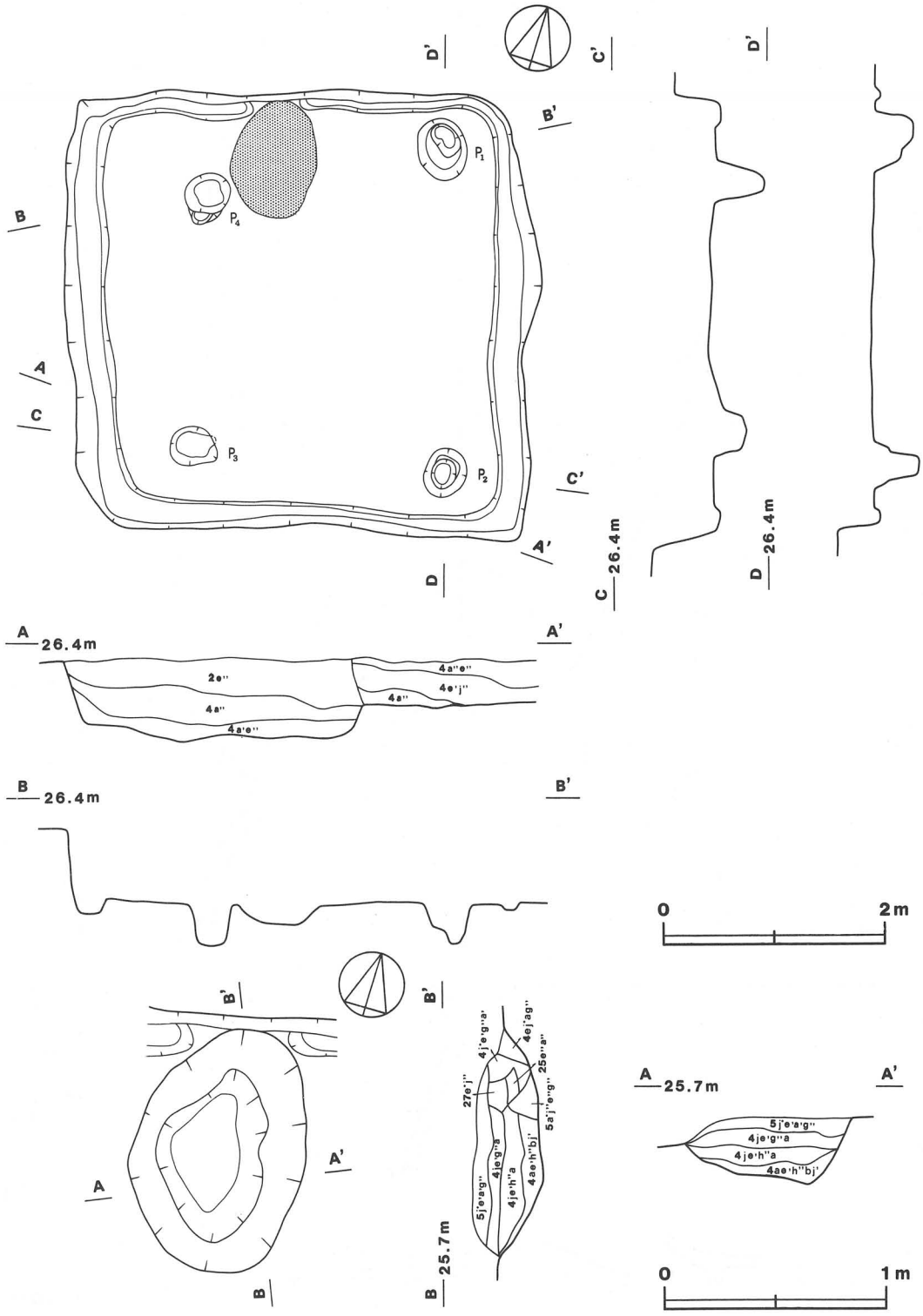
図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第70図 8	管状土錘	DP30	(3.5)×2.5	0.5	(24)	40%
9	球状土錘	DP29	1.6×1.9	0.7	5	100% 一方穿孔

鉄製品 (第70図)

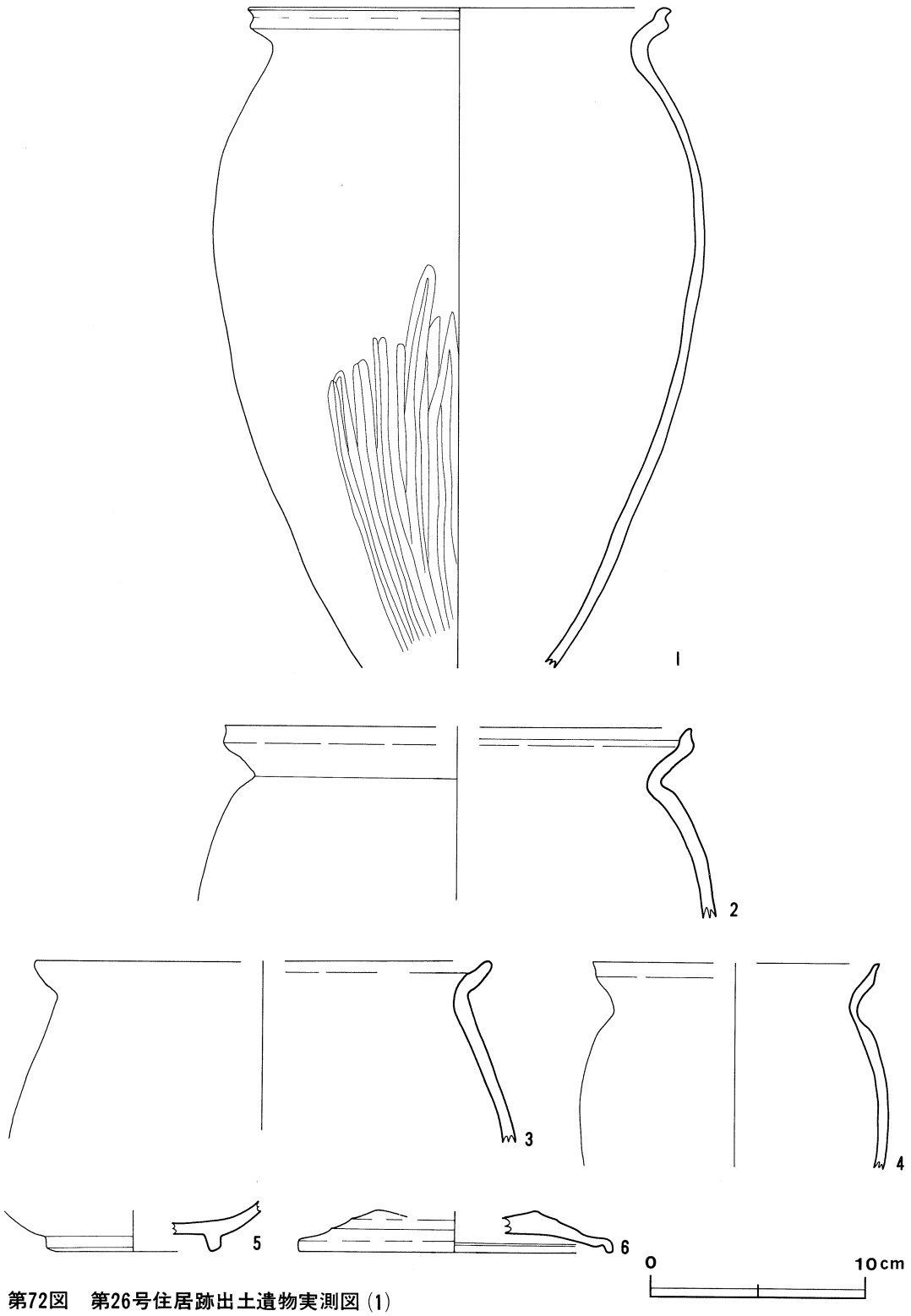
10は鏃で，茎部及び穂の下部は欠損している。法量は現存長7.8cm・重さ18.5gである。

第26号住居跡 (第71図)

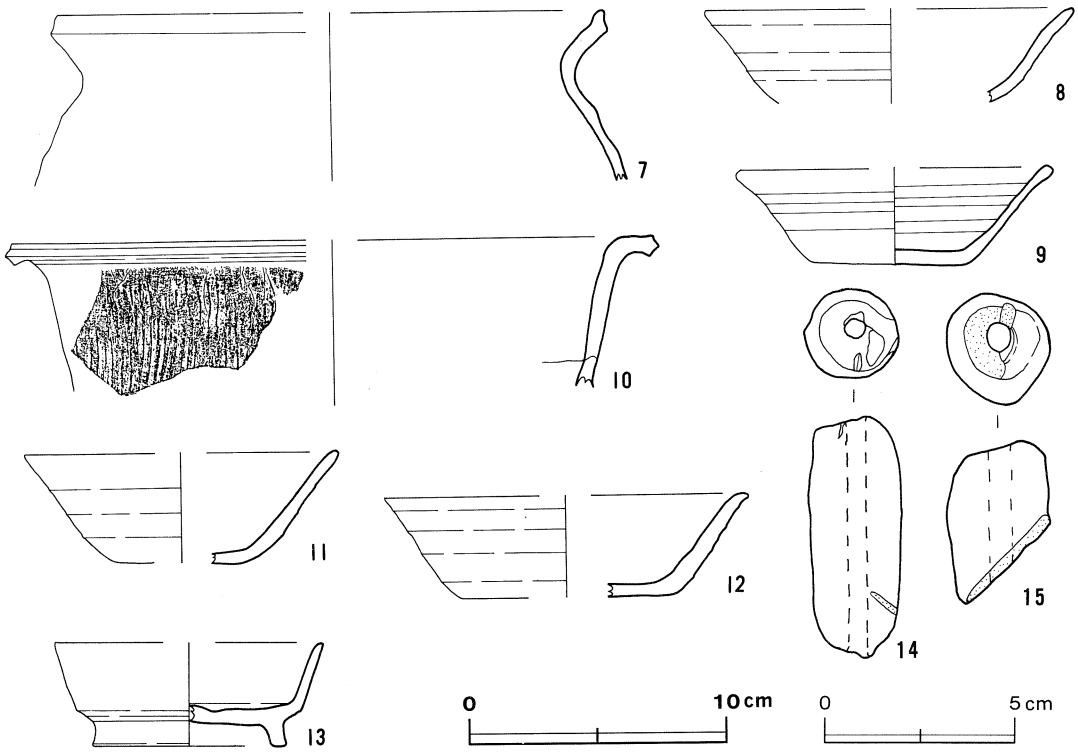
本跡は，調査区の中央部B3g4区を中心に確認された住居跡で，第23号住居跡の北東側3.7mに位置している。本跡は，東コーナー部で第27号住居跡と，北側で第24号住居跡と重複している。本跡との新旧関係については，出土遺物や土層断面図を検討した結果，いずれも本跡の方が古い遺構と判断される。



第71図　第26号住居跡実測図



第72図　第26号住居跡出土遺物実測図 (1)



第73図　第26号住居跡出土遺物実測図 (2)

平面形は，長軸4.04m・短軸3.92mの方形を呈し，主軸方向はN－18°－Wを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。北東壁・南東壁の一部は，前述したように第27号住居跡と重複しており，その部分の壁高は36～39cm，その他の北東壁から南東壁，更に南西壁は53～56cmである。北西壁は，第24号住居跡と重複しているため検出できなかった，壁下には，上幅14～40cm・深さ6～14cmの壁溝が全周している。床面は，全体的に平坦で，ピットに囲まれた内側はロームが硬く踏み固められている。ピットは，4か所検出され，長径43～55cm・短径36～45cm・深さ31～44cmの規模を有している。P_4は，ややカマド寄りに位置しているが，P_1～P_4は，規模や配列から，いずれも主柱穴と思われる。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設されていたが，天井部・袖部は調査時には崩れており，規模等は不明である。規模を推定すると，長さは110cm・幅77cmである。火床は，長径79cm・短径43cmの不整楕円形を呈し，床面を深さ19cmほど掘り込んでいる。

覆土は，3層からなり，凹レンズ状に自然堆積している。上層には焼土粒子を極少量含む黒褐色土が，中層にはローム粒子を極少量含む暗褐色土が，下層にはローム粒子少量・焼土粒子極少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は，土師器片614点，須恵器片216点，土製品２点，縄文式土器片５点，弥生式土器片２点が出土している。縄文式土器片，弥生式土器片は周囲からの流れ込みと思われ，覆土上層から出土しており，本跡に伴う土器片は，壁寄りの覆土下層から床面にかけて出土している。

本跡は，出土遺物から平安時代の９世紀中頃に比定されるものと思われる。

第26号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 1	甕形土器 土師器	A 19.7 B (30.8)	胴部は長胴を呈し，胴部上位に最大径を有する。口縁部は外反して立ち上がり，口縁端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面ナデ。下位縦位のヘラ磨き，胴部内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石 雲母 暗赤褐色 普通	40% P157
3	甕形土器 土師器	A (21.7) B 8.6	胴部は丸く張り，口縁部は「く」の字状に開き，口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	5% P161
4	甕形土器 土師器	A (21.0) B (7.9)	胴部は丸く張り，口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	10% P158
4	甕形土器 土師器	A (13.4) B (10.6)	胴部は丸く張り，口縁部は「く」の字状に開き，端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰赤色 普通	15% P160
5	高台付坏 陶器	B (1.9) D (8.1)	体部は内彎して外上方へ立ち上がる。高台は外下方へのびる。	体部水挽き。高台は貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 良好	10% P169
6	蓋 須恵器	A (14.6) B (1.9)	天井部は口縁部に向かってなだらかに下降し，口縁部は外下方に屈曲する。	天井部回転ヘラ削り，内・外面水挽き，ロクロ回転は右。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	20% P165
第73図 7	甕形土器 土師器	A (21.2) B (6.6)	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら立ち上がり，口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	5% P159
8	坏 須恵器	A (14.5) B (3.7)	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	体部水挽き。	砂粒・石英・雲母 明褐灰色 普通	30% P162
9	坏 須恵器	A (12.0) B 3.8 C 6.1	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部は手持ちヘラ削り，体部は水挽き。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	40% P166
10	甕 須恵器	A (25.0) B (5.8)	胴部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，口縁部は横に開く。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面縦位の平行叩き，胴部内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	5% P163
11	坏 須恵器	A (12.2) B 4.4 C (5.1)	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き。	砂粒・長石 褐灰色 普通	20% P168
12	坏 須恵器	A (14.2) B 4.0 C (8.0)	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 明褐灰色 普通	40% P167

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第73図 13	高台付坏 須恵器	A (10.4) B 4.1 D (7.4)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。高台は外下方へのびる。	体部水挽き，高台貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	30% P164

第26号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第73図 14	管状土錘	DP31	6.4×2.5	0.5	35	100% 一方穿孔
15	〃	DP32	(4.3)×2.7	0.7	(23)	30%

第27号住居跡（第74図）

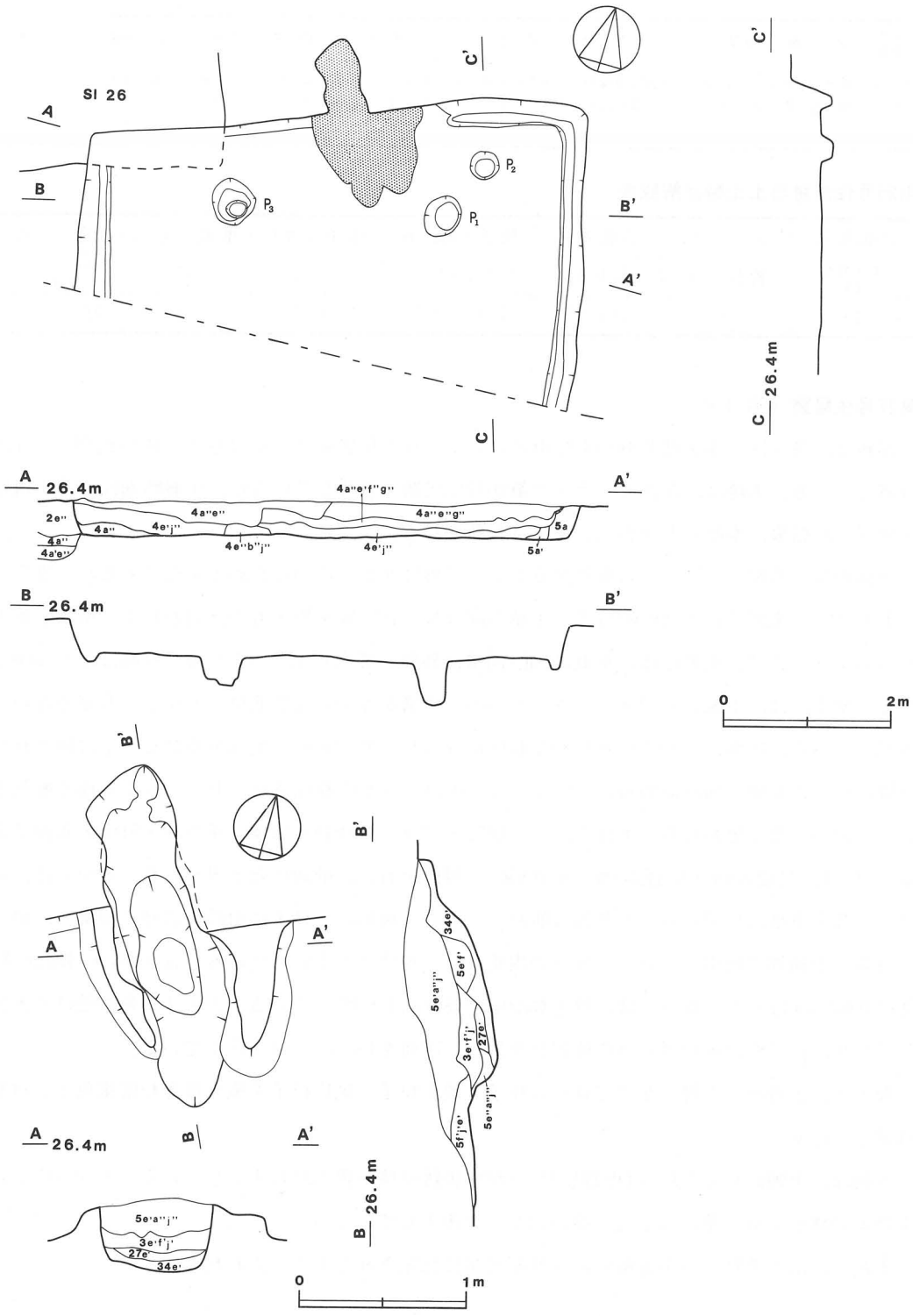
本跡は，調査区の中央部B3h5区を中心に確認された住居跡で，第34号住居跡の西側0.5mに位置している。本跡は，北西コーナーで第26号住居跡と重複しているが，土層断面図や出土遺物を検討した結果，本跡の方が新しい遺構と判断される。

平面形は，本跡の中央部から南側半分がエリア外にかかっているため不明確であるが，推定で方形を呈し，東西の長さは6.03mで，主軸方向はN－15°－Wを指すものと思われる。壁は，締まりのあるロームで，東壁はほぼ垂直に，北・西壁は外傾して立ち上がっている。壁高は35～43cmである。壁下には，上幅17～22cm・深さ7～15cmの壁溝がカマド及び北壁のカマドの左側を除いて周回している。床面は，ややゆるやかな起伏がみられ，カマドの手前部分及びピットに囲まれた内側はロームが硬く踏み固められている。ピットは，3か所検出され，P_2・P_3が規模や配列から主柱穴の一部と思われる。主柱穴は，長径52・57cm・短径43・52cm・深さ33・51cmの規模である。P_1は，長径36cm・短径34cm・深さ15cmの規模を有し，補助柱穴と思われる。カマドは，北壁のほぼ中央部に付設され，天井部は崩れているが，袖部は，粘土に山砂を混ぜて構築し，更に土師器片を補強に使用している。袖部の内側はよく焼けて焼土化している。長さ207cm・幅126cm・焚口部幅54cmほどで，掘り方は，壁を幅50cmで89cmほど切っている。火床は，熱を受けて赤化しており，長径87cm・短径37cmの楕円形を呈し，床面を18cmほど掘り込んでいる。

覆土は，上層から下層にかけてローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を極少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，土師器片524点，須恵器片217点が住居跡全域の覆土から出土している。カマド内から土師器の甕形土器（第75図1），（第75図2）が出土している。

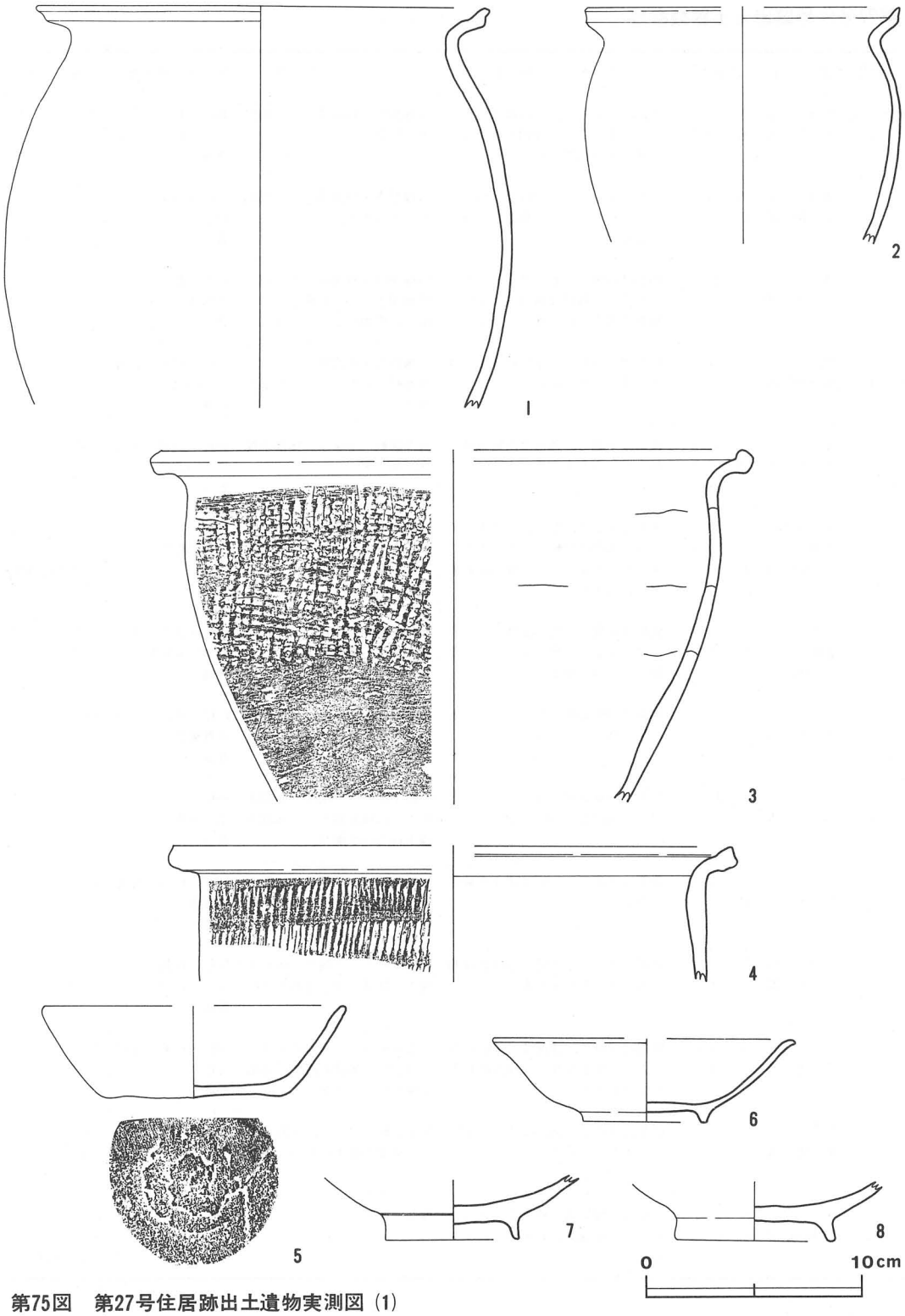
本跡は，出土遺物から平安時代の9世紀後半に比定されるものと思われる。



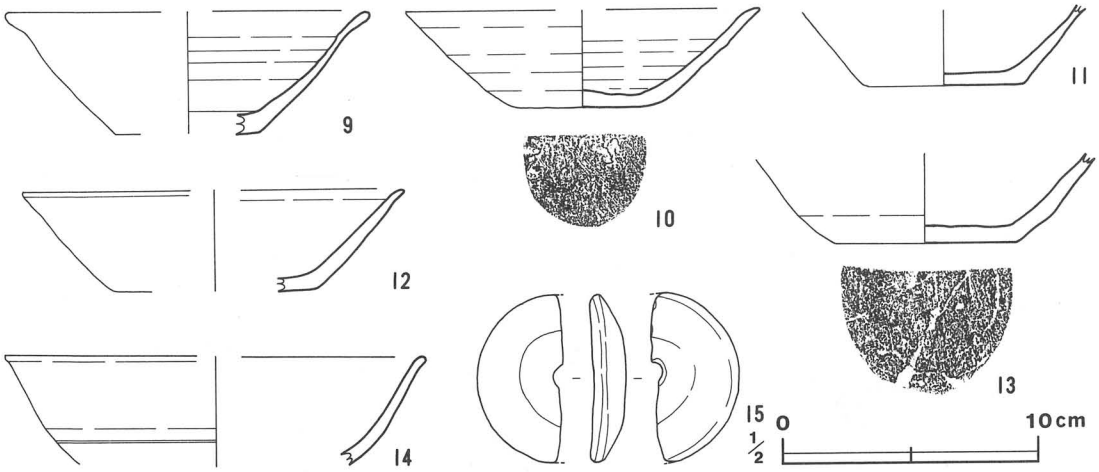
第74図　第27号住居跡実測図

第27号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 1	甕形土器 土師器	A 20.7 B (18.6)	胴部は丸く張り，口縁部は外反して立ち上がる。口縁端部は上方へつまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	50% P170
2	甕形土器 土師器	A (14.4) B (11.0)	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら立ち上がり，端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	25% P171
3	甕 須恵器	A (27.0) B (16.5)	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部は横に短く開き，端部を内側に折り返している。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面叩き目，下位横位のヘラ削り，内面横ナデ，輪積痕。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	40% P174
4	甕 須恵器	A (25.9) B (6.2)	胴部はほぼ長胴を呈し，口縁部は横に開き，外側に面を有する。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面縦位の平行叩き，胴部内面横ナデ。	砂粒・石英・雲母 灰黄褐色 普通	5% P175
5	坏 須恵器	A 13.8 B 4.3 C (8.0)	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部水挽き，横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	50% P177
6	高台付坏形土器 土師器	A 13.7 B 3.4 D 5.8	底部は平底で，高台は外下方へのびる。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	体部水挽き，体部内面ヘラ磨き，高台は貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	80% P172 内面黒色処理
7	高台付坏形土器 土師器	B (2.9) D (6.3)	底部は平底で，高台は外下方へのびる。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	体部水挽き，高台は貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	40% P173
8	高台付坏 須恵器	B (2.7) D 7.6	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	体部水挽き，高台は貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	40% P176
第76図 9	坏 須恵器	A (13.2) B 5.8 C (5.6)	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き，口縁部横ナデ，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 暗灰黄色 普通	20% P245
10	坏 須恵器	A (13.8) B 3.9 C (5.3)	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・石英 褐灰色 普通	40% P238
11	坏形土器 土師器	B (3.0) C (6.2)	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・石英 にぶい褐色 普通	30% P239
12	坏 須恵器	A (14.8) B 4.0 C (8.0)	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部回転ヘラ切りの後手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	20% P178
13	坏 須恵器	B (3.5) C 7.1	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ切り，体部水挽き，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	30% P179
14	坏 灰釉陶器	A (16.4) B (4.3)	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁端部はわずかに外反する。	体部水挽き。	砂粒 灰白色 普通	10% P180 内面に施釉



第75図　第27号住居跡出土遺物実測図（1）



第76図　第27号住居跡出土遺物実測図 (2)

第27号住居跡出土土製品解説表

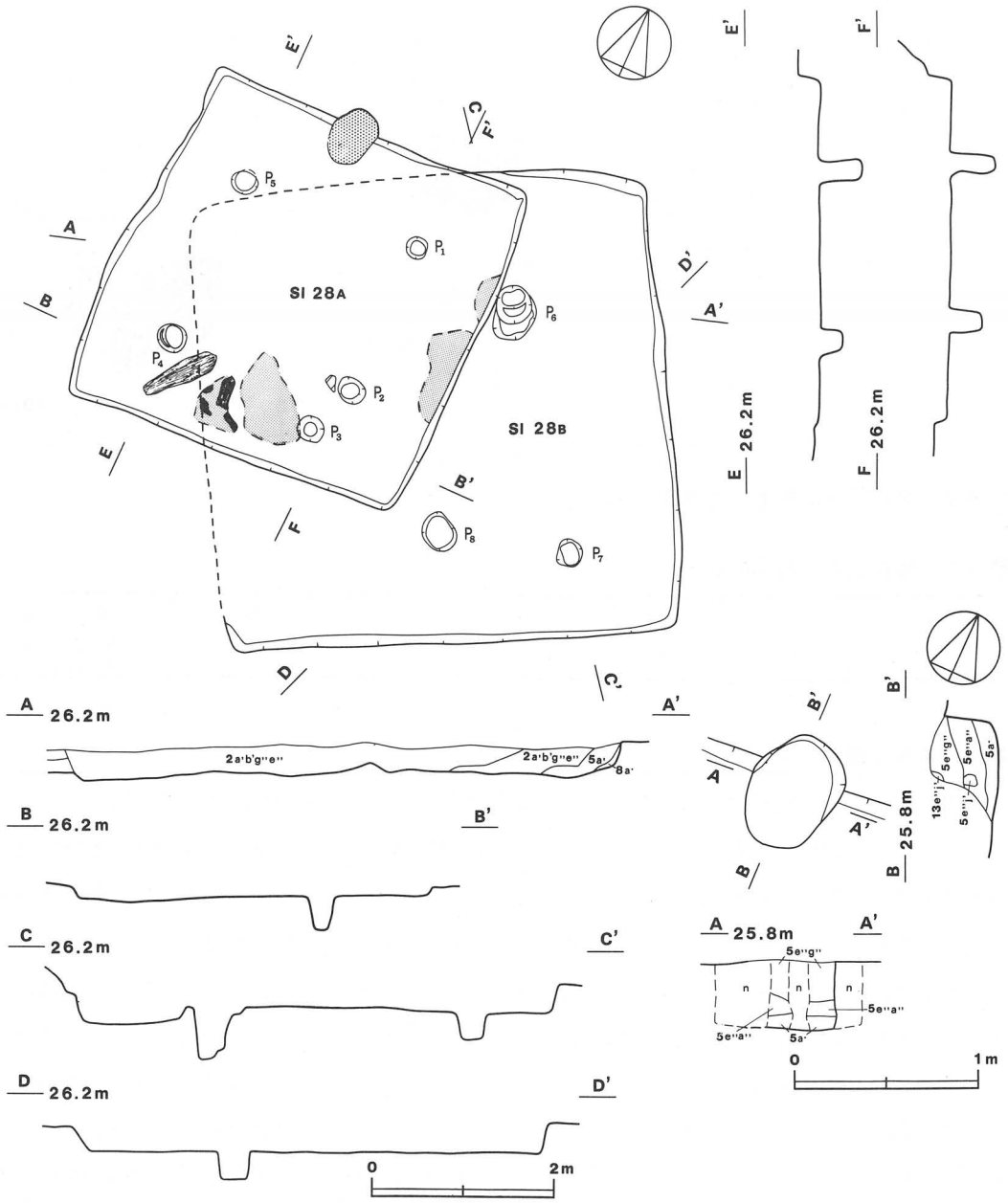
図版番号	名　　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径（cm）	重量（g）	備　　考
第76図 15	紡 錘 車	ＤＰ39	(6.6)×1.4	(0.8)	(24)	50% 須恵器 灰白色

第28－Ａ号住居跡（第77図）

本跡は，調査区の西部Ｂ2g6 区を中心に確認された住居跡で，第10号住居跡の東側4.6ｍに位置している。本跡は，当遺跡の中でも重複の激しい住居跡の一つで，東側で第28－Ｂ号住居跡，南西側で第29号住居跡の床面を切っていることから，本跡の方が新しく，北西側でも第11－Ａ号住居跡と重複しているが，出土遺物から本跡の方が新しい遺構と判断される。

平面形は，長軸3.96ｍ・短軸3.86ｍの方形を呈し，主軸方向はＮ－0°を指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，北壁が25cm前後で，その他の壁は若干低く５～15cmである。床面は平坦で，特に，ピットに囲まれた内側はロームが硬く踏み固められている。ピットは，５か所検出され，P_1 ・P_2 ・P_4 ・P_5 は，ほぼ方形状に配列され，規模からも主柱穴と考えられる。主柱穴は，長径24～32cm・短径23～31cm・深さ24～49cmの規模を有している。P_3 は，長径31cm・短径28cm・深さ36cmの規模で，位置から出入口施設に関するピットと思われる。カマドは，北壁のほぼ中央部に付設されていたと思われるが，トレンチャー等の撹乱のため山砂・焼土粒子が少量残っているだけで，規模等については不明である。確認できた長さは65cm・幅48cmである。

覆土は，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量含む黒褐色土が堆積している。本跡は，覆土中層から下層にかけて焼土粒子・炭化材が少量検出されていることから焼失家屋と考えられる。



第77図　第28－A・B号住居跡実測図

遺物は，土師器片364点，須恵器片10点，縄文式土器片１点，弥生式土器片５点，土製品１点が出土している。縄文式土器片，弥生式土器片は，覆土の上層から出土しており周囲からの流れ込みと思われる。本跡に伴う土器片は，住居跡の中央部の覆土下層から床面にかけて出土している。北東コーナー部のほぼ床面から土師器の甑形土器（第78図２）が，北西コーナー部の床面から小

形の坏形土器（第78図４）が出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第28－Ａ号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第78図 1	甕形土器 土師器	A（21.8） B 36.6 C 10.0	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり上位から内傾する。口縁部は「コ」の字状を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	70% P182 磨滅気味
2	甑形土器 土師器	A 25.0 B 29.2 C 10.9	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部は外反しながら立ち上がる。底部は正円状に抜けている。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面ナデ後縦位のヘラ磨き，胴部内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 浅黄橙色 普通	95% P184
3	甕形土器 土師器	B（22.9） C（ 9.0）	底部は平底で，胴部は丸く張り，最大径は胴部中位よりやや上にある。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	70% P181 磨滅気味
4	坏形土器 土師器	A 8.4 B 4.5	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	95% P185
5	甕形土器 土師器	B（15.6） C（11.1）	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面斜位のヘラ磨き，胴部内面ナデ。	砂粒・石英・長石 灰褐色 普通	20% P183

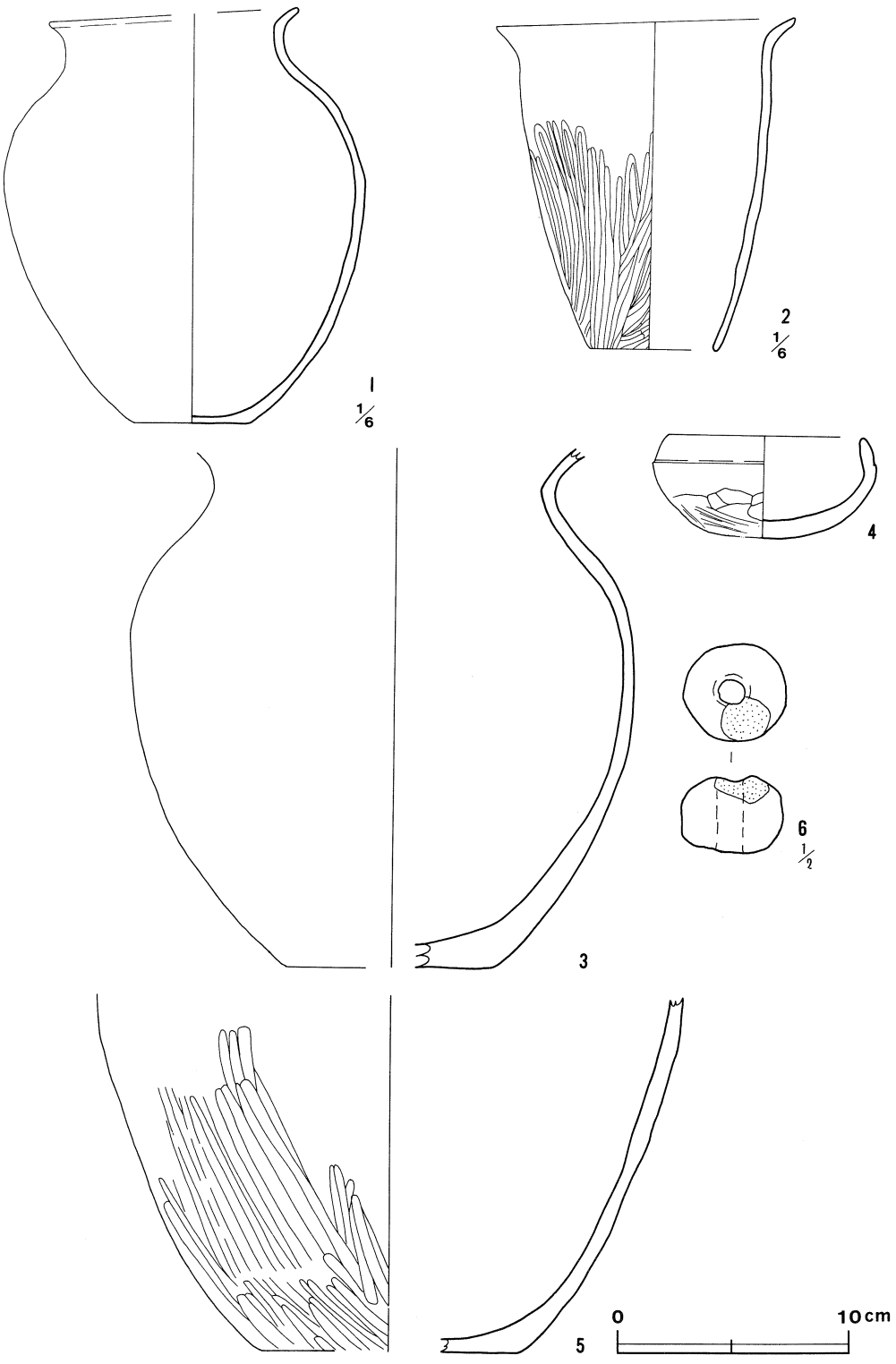
第28－Ａ号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径（cm）	重量（ｇ）	備考
第78図 6	球状土錘	ＤＰ33	2.3×3.0	0.6	（17）	95% 一方穿孔

第28－Ｂ号住居跡（第77図）

本跡は，調査区の西部Ｂ2g_6区を中心に確認された住居跡で，第30号住居跡の北西側1.3ｍに位置している。本跡は，西側で第28－Ａ号住居跡に切られている。更に南西側で第29号住居跡，北西側で第11－Ａ号住居跡とも重複しているが，出土遺物から本跡の方が新しい遺構と判断される。

平面形は，推定で長軸5.16ｍ・短軸5.05ｍの方形を呈し，主軸方向はＮ－28°－Ｗを指すものと思われる。壁は，北西壁の北東コーナー部側，北東壁・南東壁が締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっているが，その他の壁は，重複や撹乱のため不明である。壁高は25～40cmである。床面は，トレンチャーによる撹乱を南北に30cmほどの間隔で受けているが，撹乱されていない床面は，多少凹凸がみられ，ロームが硬く踏み固められている。本跡に伴うピットは，３か所検出



第78図　第28－A号住居跡出土遺物実測図

され，配列や規模からP_6・P_7が主柱穴と考えられる。主柱穴は長径31・59cm・短径29・46cm・深さ31・57cmの規模を有している。

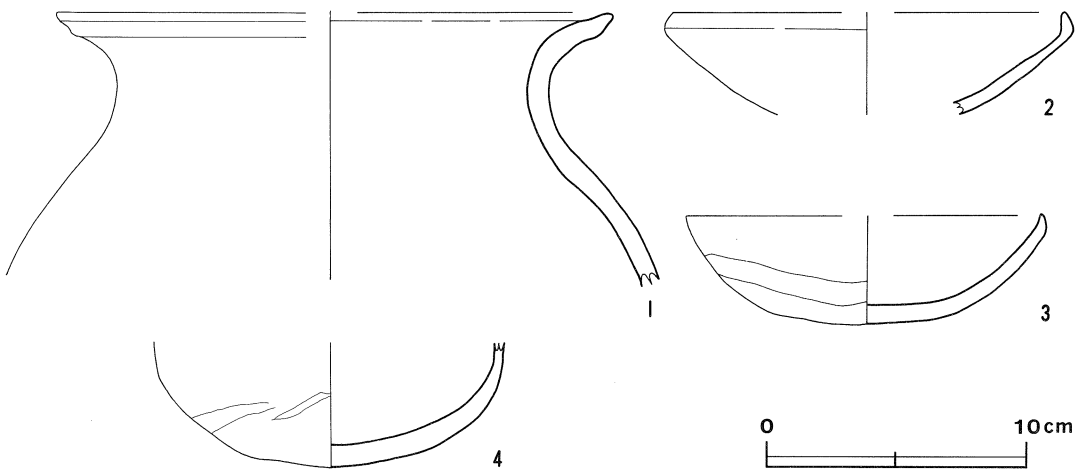
覆土は，自然堆積の様相を呈している。ローム粒子を少量，焼土粒子・炭化粒子を極少量含む黒褐色土を主体に，壁際にはローム粒子を少量含む褐色土が堆積している。

遺物は少なく，土師器片24点が出土しただけで，中央部からやや北側コーナー部寄りの床面から土師器の坏形土器（第79図３）が出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第28－Ｂ号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 1	甕形土器 土師器	A (21.8) B (10.4)	胴部は丸く張り，口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	20% P186
2	坏形土器 土師器	A (15.3) B (4.0)	体部は内彎気味に大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	20% P189
3	坏形土器 土師器	A (13.8) B 4.2	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短くほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面ナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	80% P187
4	坏形土器 土師器	B (4.9)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	60% P188



第79図　第28－Ｂ号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡（第81図）

本跡は，調査区の西部B2g$_5$区を中心に確認された住居跡で，第10号住居跡の南東側2.3mに位置している。本跡のカマドが第11－A号住居跡の南側に構築されていることから本跡の方が新しい。更に本跡の北東側が第28－A号住居跡に切られていることから，本跡の方が古く，また，同じ北東側で第28－B号住居跡とも重複しているが，出土遺物から，本跡の方が古い遺構と判断される。

調査した部分から推定すると，平面形は，方形を呈するものと思われ，南西壁の長さ4.53mで，主軸方向はN－23°－Wを指している。壁は，トレンチャーにより撹乱されている部分が多いが，それ以外は締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は23～27cmである。床面は，全体的に撹乱されている部分が多く，凹凸がみられるが，撹乱されずに残存する床面は硬く踏み固められている。ピットは，5か所検出されている。P$_2$がやや南東壁寄りであるが，P$_3$・P$_5$とともに主柱穴と思われ，長径24～40cm・短径23～34cm・深さ33～46cmの規模を有している。P$_4$は，直径30cm・深さ54cmの規模を有しているが，位置から補助柱穴と思われる。住居跡中央部のP$_1$は，長径48cm・短径34cm・深さ53cmの規模を有しているが性格は不明である。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設され，天井部は崩れている。袖部は，一部崩れているが，山砂に礫を少量混入させて構築し，内側は，熱を受けて焼土化して硬く，一部炭化材も検出されている。規模は，長さ120cm・幅97cm・焚口部幅41cmである。掘り方は，壁を幅33cmで25cmほど切り込んでいる。火床は，床面を20cmほど掘り込んでいる。

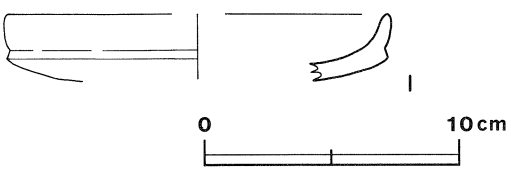
覆土は，2層からなり，上層にローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子を極少量含む黒褐色土が，下層に焼土粒子中量，山砂・ローム粒子極少量を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，土師器片153点，弥生式土器片2点が覆土から出土している。

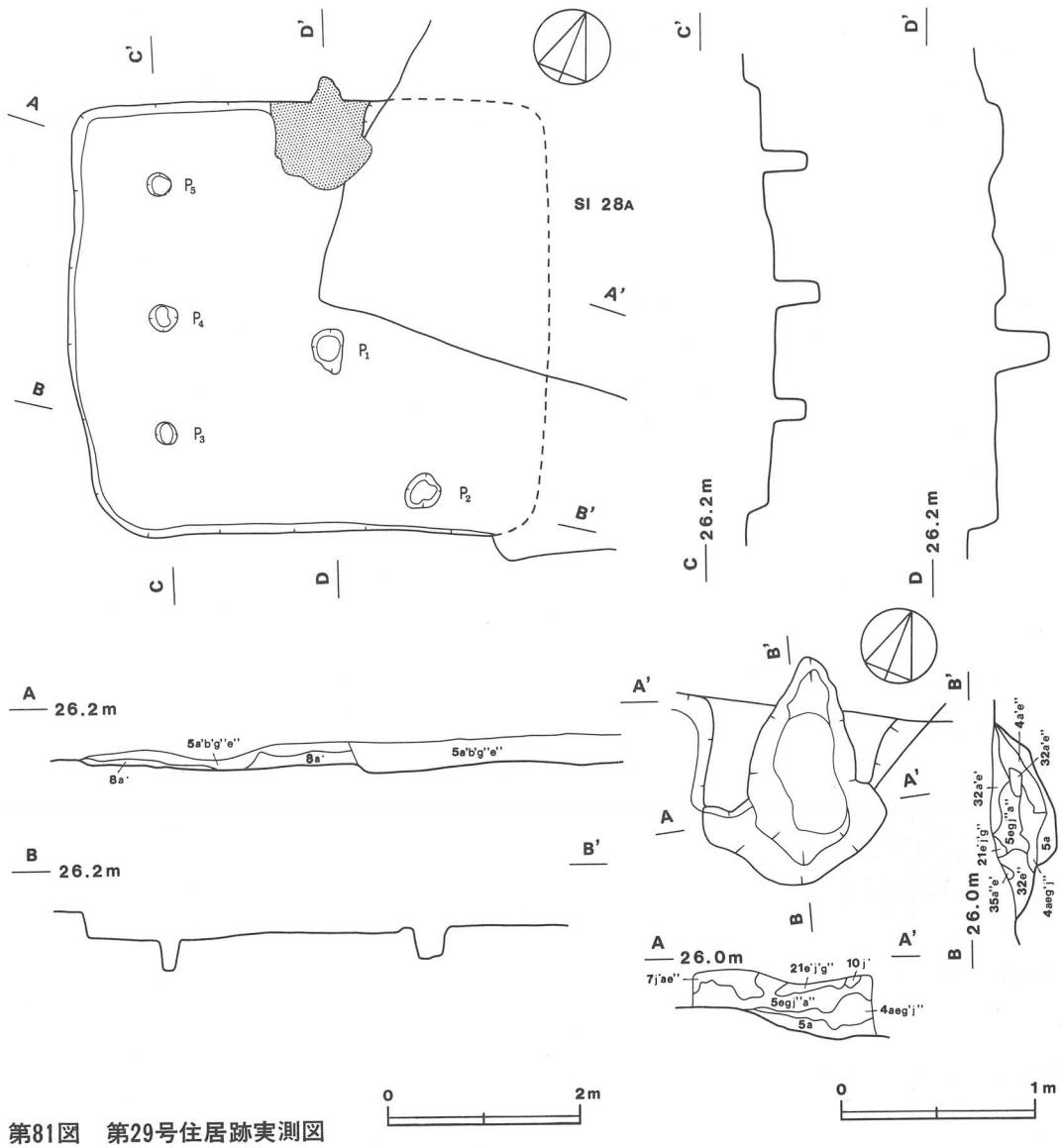
本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第29号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図1	坏形土器 土師器	A（15.0） B（2.6）	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	10% P190



第80図　第29号住居跡出土遺物実測図



第81図　第29号住居跡実測図

第30号住居跡（第83図）

本跡は，調査区の中央部よりやや西側のB2h8区を中心に確認された住居跡で，第28－B号住居跡の南東側1.3mに位置している。本跡は，南東側で第15号住居跡と重複しているが，本跡の床面上に第15号住居跡の撹乱を受けたカマドが検出されていることから本跡の方が古い遺構と判断される。

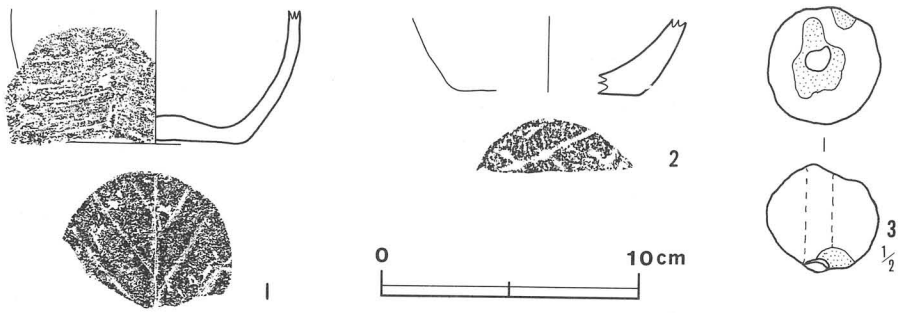
本跡の平面形は，重複とトレンチャーによる撹乱のため推定となるが，方形を呈し，北西壁の長さが5.22mで，主軸方向はN－32°－Wを指すものと思われる。壁は，撹乱などを受けている部

分が多く，北コーナー部から北西壁及び南西壁にかけてしか確認できなかった。壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は19～23cmである。床面は，多少凹凸がみられ，撹乱を受けていない部分は比較的硬く踏み固められている。ピットは，６か所検出されているが，本跡に伴うピットは，P_1・P_4・P_6の３か所と思われ，長径24～38cm・短径24～36cm・深さ24～68cmの規模を有している。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設され，天井部は崩れているが，袖部は，少量の山砂を含む粘土で構築されている。長さ140cm・幅118cm・焚口部幅58cmである。掘り方は，壁を幅68cmで33cmほど切り込んでいる。火床は，床面を13cmほど掘り込んでいる。

覆土は，撹乱を受けている部分がみられるが，自然堆積の様相を呈している。上層にはローム粒子・焼土粒子を極少量含む暗褐色土が，下層にはローム粒子・焼土粒子を極少量含む黒褐色土が堆積している。

遺物は破片が多く，土師器片144点，須恵器片43点，陶器片１点，土製品１点が覆土から出土している。

本跡は，規模やカマドが付設されていることから古墳時代の鬼高期以降と思われる。



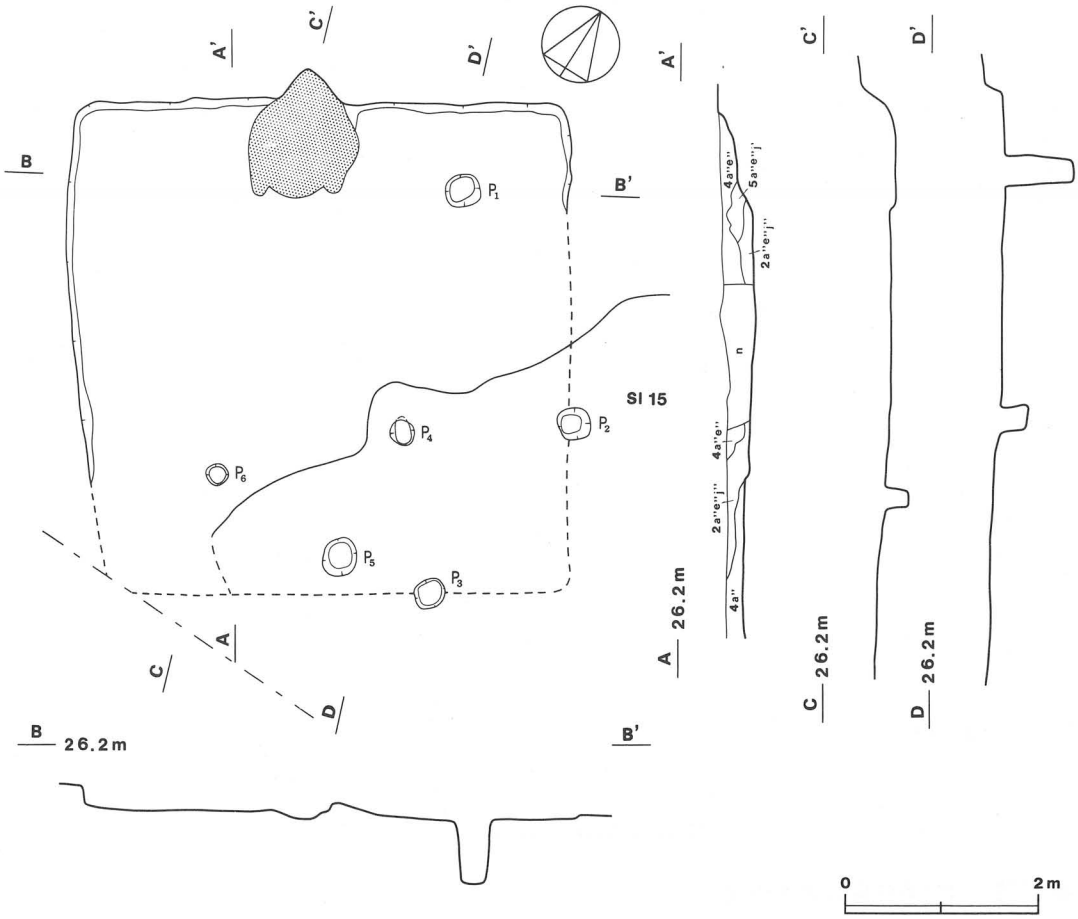
第82図　第30号住居跡出土遺物実測図

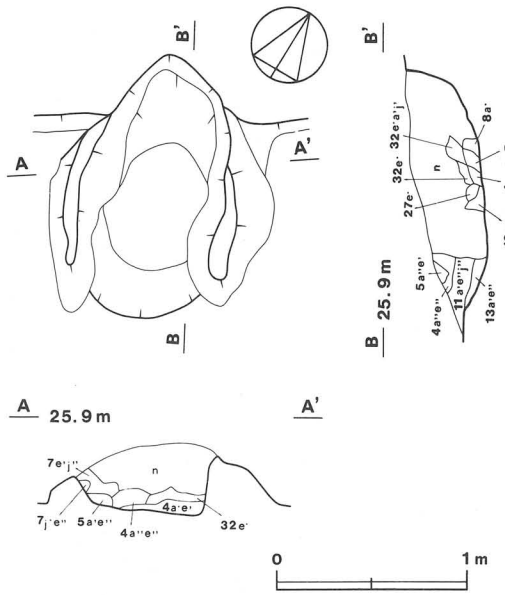
第30号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第82図 1	甕形土器 土師器	B（5.1） C（6.9）	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り，胴部内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	10% P191 底部に木葉痕
2	甕形土器 土師器	B（3.0） C（7.0）	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り。胴部内面ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	5% P192 底部に木葉痕

第30号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径（cm）	重量（g）	備考
第82図 3	球状土錘	DP34	2.9×3.0	0.7	(21)	95% 一方穿孔





第83図　第30号住居跡実測図

第32号住居跡（第84図）

本跡は，調査区の中央部からやや西側のB2g9区を中心に確認された住居跡である。本跡は，北東側で第21号住居跡，東側で第13号住居跡，南東側で第14号住居跡，南西側で第15号住居跡とそれぞれ重複しており，出土遺物から，本跡はいずれの住居跡よりも古い遺構であると判断される。

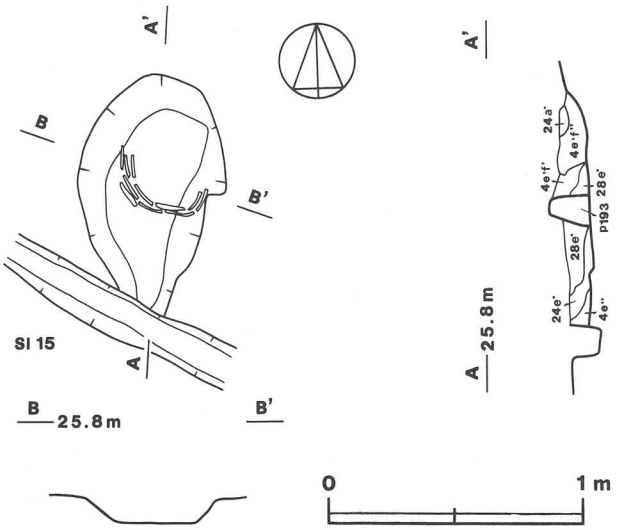
本跡は，これらの重複のため壁は不明で，ピットも検出されず，炉が検出されているだけで，平面形・規模等は不明である。炉は，南側の一部が第15号住居跡により切られてい

るが，平面形は，推定で長径92cm・短径58cmの不整楕円形を呈し，床面を深さ13cmほど皿状に掘りくぼめ，炉の中央部には土師器片を半円形状に二重から三重に廻らした『土器片囲い炉』である。炉内には，上層に焼土粒子・焼土小ブロックを少量含む暗褐色土が，下層に焼土粒子を多量含む明赤褐色土が堆積している。炉床は，ロームが熱を受けて焼土ブロック化しており，炉壁も赤化している。

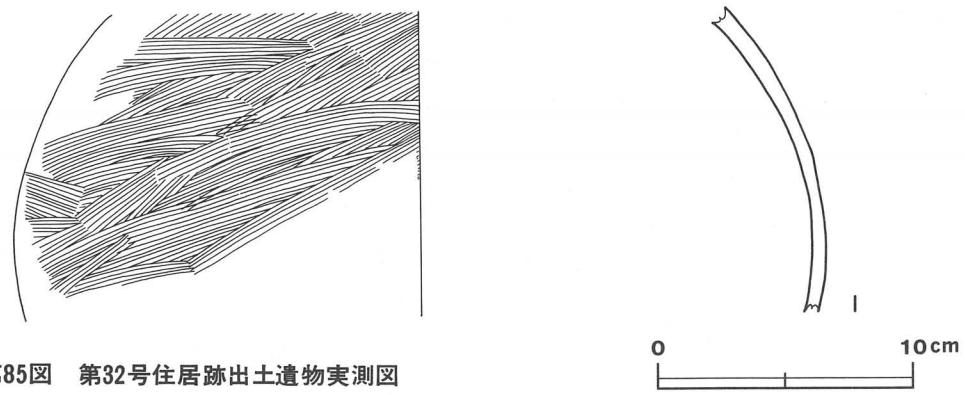
なお，本跡は，炉だけしか確認できなかったが，出土遺物から時期等を判別することができたため住居跡とした。

遺物は，炉内から土師器片23点が出土している。これらの土師器片は，いずれも『土器片囲い炉』に使用された土師器の大形甕形土器（第85図1）の胴部片である。

本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定されるものと思われる。



第84図　第32号住居跡炉実測図



第85図　第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第85図1	甕形土器 土師器	B（12.0）	胴部は丸く張る。	胴部外面斜位のハケ目，胴部内面ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	10% P193

第33号住居跡（第34図）

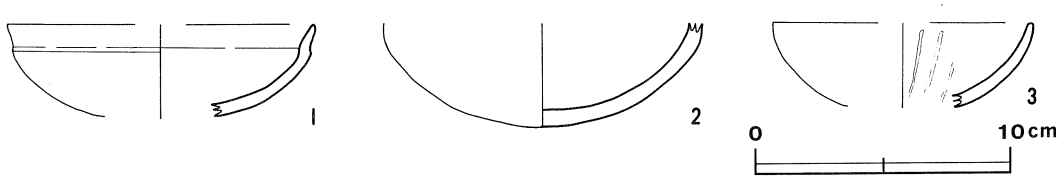
本跡は，調査区の中央部よりやや西寄りのB2f8区を中心に確認された住居跡で，第30号住居跡の北側0.8mに位置している。本跡の東側には，第12号住居跡が重複している。

平面形は，推定で，長軸5.09m・短軸4.92mの方形を呈し，主軸方向はN－0°を指している。壁は，締まりのあるロームで，大半がトレンチャー等による撹乱を受けているが，北壁及び西壁から南壁の南西コーナー部は比較的原形を保っており，外傾して立ち上がっている。壁高は，北壁が36cm前後，西壁及び南西コーナー部は21～36cmである。また，東壁及び南壁の大半は，前述したように第12号住居跡と重複しているため明確にできなかった。床面は，全体的に凹凸がみられ，住居跡全域にわたりほぼ50cm間隔で井桁状に撹乱されている。撹乱を受けない床面は，明瞭にロームが硬く踏み固められている。本跡に伴うピットは，5か所検出され，P_3はやや規模が大きいが，P_1～P_3・P_5は規模や配列から主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径27～75cm・短径26～62cm・深さ22～74cmである。カマドは，北壁のほぼ中央部に付設されていた。天井部・袖部は砂質粘土で構築されたと思われるが，崩れて規模・形状等の詳細は不明である。長さ102cm・幅65cmで，掘り方は，壁を幅30cmで29cmほど切り込んでいる。火床は，床面を4cmほど掘り込んでおり，ロームが熱を受けて焼土ブロック化している。

覆土は，撹乱されているため堆積状況は不明で，ローム大・小ブロックが多量に混じり，やわらかい状態である。

遺物は，重複している第12号住居跡と合せて土師器片858点，須恵器片50点が覆土から出土している。また，カマド内の覆土から土師器の坏形土器（第86図1）が出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



第86図　第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 1	坏形土器 土師器	A（12.0） B（3.6）	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	20% P195
2	坏形土器 土師器	B（4.1）	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	30% P196

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第86図3	坏形土器 土師器	A (10.2) B (3.3)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁端部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面ナデ後縦位のヘラ磨き。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	30% P194

第34号住居跡（第87図）

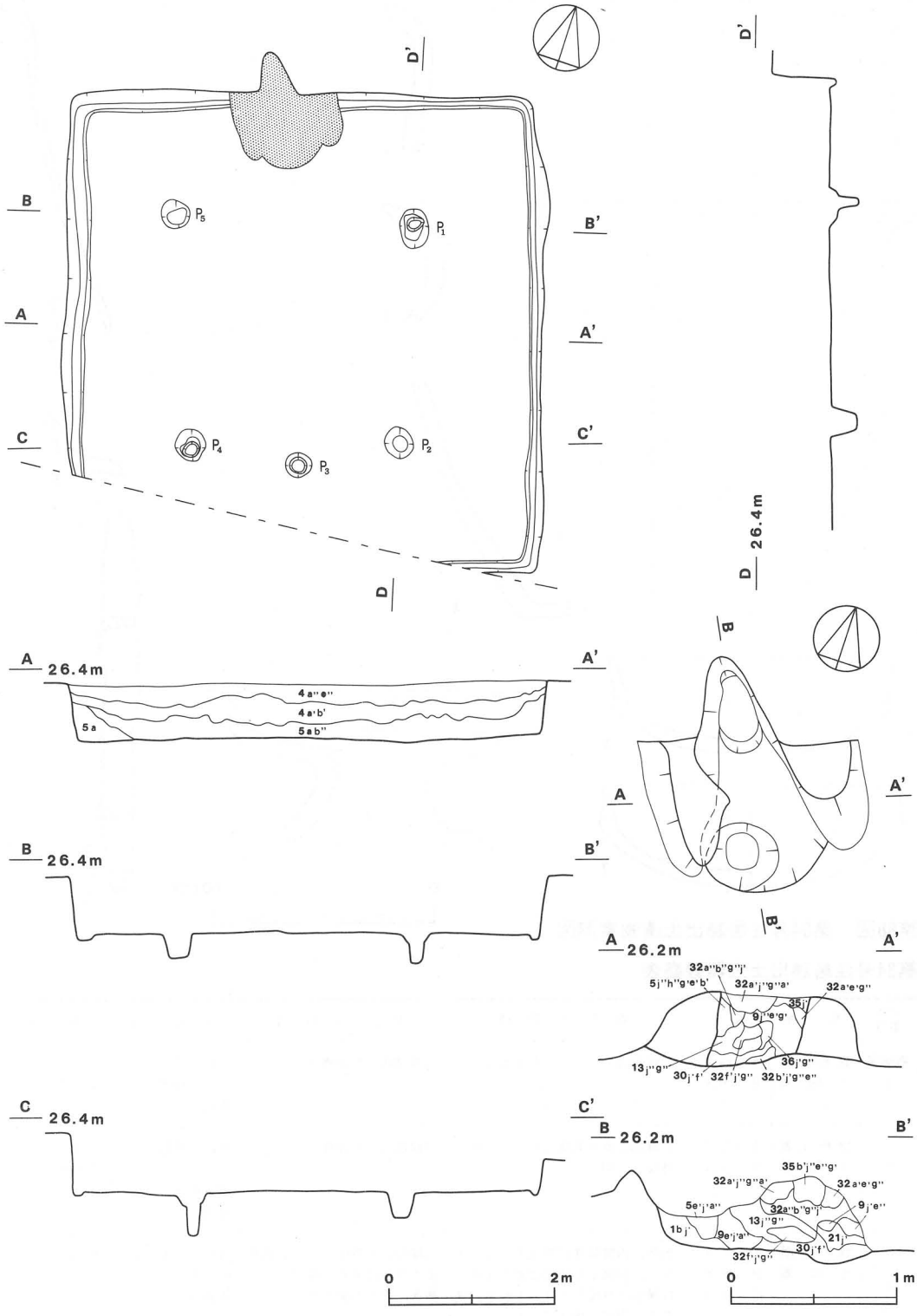
本跡は，調査区のほぼ中央部B3g7区を中心に確認された住居跡で,第27号住居跡の北東側0.5mに位置している。本跡の中央部から北西コーナー部にかけての約45cm床面上には，第40号住居跡がほぼ重なるように重複している。本跡は，覆土上層に第40号住居跡の貼り床が一部検出され，また，本跡のカマド直上に同住居跡のカマドが構築されていることから本跡の方が古い遺構と判明した。

本跡は，南西コーナー部を含む南側の一部がエリア外に延びているが，平面形は，一辺が5.74mの方形を呈するものと思われ，主軸方向はN－19°－Wを指している。壁は，締まりのあるローム で，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，北東壁が38～71cm，北西壁から南西壁及び南東壁の一部が54～72cmである。壁下には，上幅13～22cm・深さ３～７cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面は平坦で，特に，ピットに囲まれた内側はロームが硬く踏み固められている。ピットは，５か所検出され，配列や規模からP_1・P_2・P_4・P_5が主柱穴と考えられる。主柱穴は，長径36～47cm・短径33～36cm・深さ30～51cmの規模である。P_3は，直径31cm・深さ33cmの規模を有し，位置などから出入口施設に関連するピットと考えられる。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設されていたが，前述したように本跡のカマドの上部に第40号の住居跡のカマドが構築されていたため，天井部は崩れている。袖部は，山砂を多量に含む粘土で構築され，内側はよく焼けて焼土粒子や焼土小ブロックが多量に付着している。長さ146cm・幅129cm・焚口部幅72cmである。掘り方は，壁を幅49cmで50cmほど切り込んでいる。火床は，直径42cmほどの円形を呈し，床面を７cmほど掘り込んでいる。

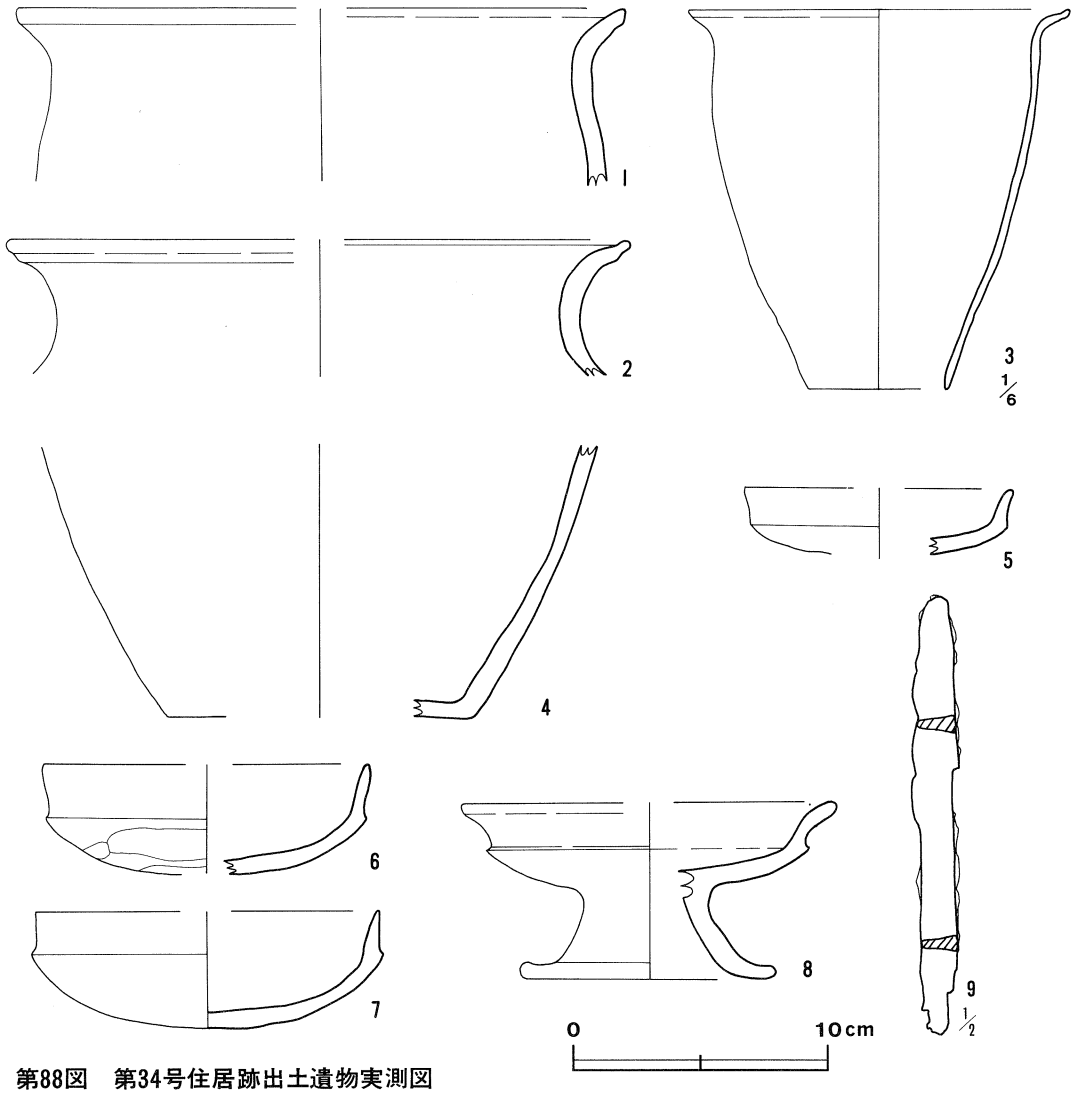
覆土は，３層からなり凹レンズ状に自然堆積している。上層にはローム粒子・焼土粒子を少量含み，中層にはローム粒子・ローム少ブロックを少量含む暗褐色土が，下層にはローム粒子中量・ローム小ブロックを極少量含む褐色土がそれぞれ堆積している。

遺物は，住居跡全域から土師器片422点,須恵器片31点，縄文式土器片５点が出土している。縄文式土器片は，周囲からの流れ込みと思われ，覆土上層から出土している。本跡に伴う土師器片・須恵器片は，覆土中層から下層にかけて出土している。カマド内から土師器の坏形土器（第88図７）が，カマドの南東側の覆土から破砕された状態で甑形土器（第88図３）が，中央部より南側覆土から高坏形土器（第88図８）が出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



第87図　第34号住居跡実測図



第88図　第34号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 1	甕形土器 土師器	A (24.0) B 6.8	口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	5% P197
2	甕形土器 土師器	A (24.2) B (5.4)	口縁部は直立気味に立ち上がり，外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	5% P198
3	甑形土器 土師器	A 30.0 B 29.9 C (11.0)	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，胴部上位でほぼ直立する。口縁部は外反して立ち上がる。底部は正円状に抜けている。	口縁部内・外面ナデ。胴部外面ナデ後部分的に縦位のヘラ磨き，胴部内面ナデ。	砂粒・石英・長石 灰赤色 普通	80% P200

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第88図 4	甕形土器 土師器	B (10.7) C (12.0)	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部ヘラ削り，胴部外面ヘラ削り，胴部内面ヘラナデ。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	5% P199
5	坏形土器 土師器	A (10.6) B (2.6)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	5% P204
6	坏形土器 土師器	A (12.7) B 4.3	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に開く。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面はヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	30% P203
7	坏形土器 土師器	A 13.6 B 4.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒 明褐灰色 普通	80% P202
8	高坏形土器 土師器	A (14.5) B 6.9 D 10.0	脚部はラッパ状に開き，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は外反して開く。口縁部と体部外面の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ，脚部内・外面ナデ。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	60% P201

鉄製品（第88図）

9は刀子で，カマド内覆土から出土し，柄部を欠損している。法量は現存長11.6cm・刀幅 1.1cm・身幅0.4cm・重さ17.4ｇである。

第35号住居跡（第89図）

本跡は，調査区の東部B4e$_7$区を中心に確認された住居跡で，第42号住居跡の北西側3.7ｍに位置している。

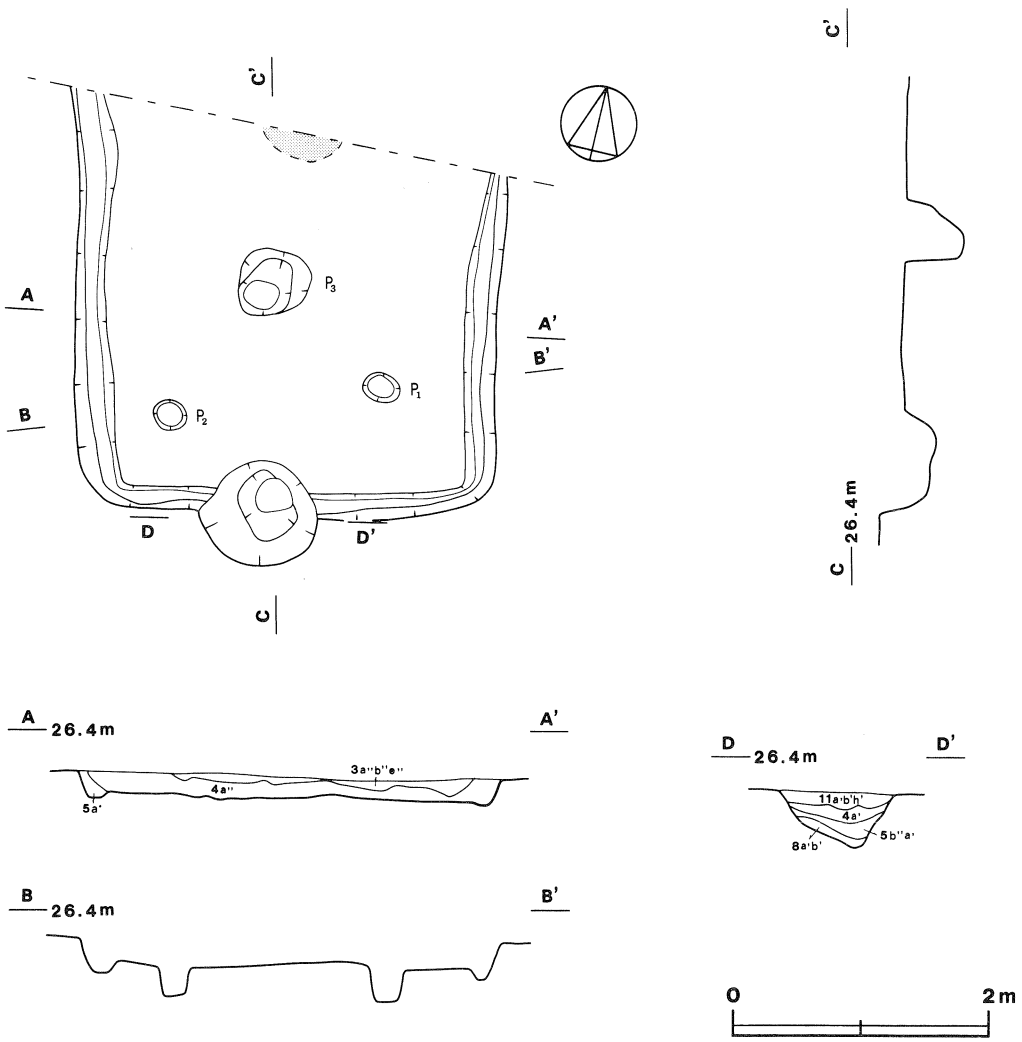
本跡は，北側がエリア外にかかっているため，平面形・規模等の詳細は不明である。平面形は調査した部分から推定すると，長方形を呈し，南壁の長さ3.27ｍで，主軸方向はＮ－11°－Ｗを指すものと思われる。壁は，締まりのあるロームで，東壁は外傾して立ち上がり，南壁・西壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は17～22cmである。壁溝は，南壁の貯蔵穴の部分を除いて，東・南・西壁下に検出され，上幅12～32cm・深さ８～10cmの規模を有している。床面は，中央部に多少凹凸がみられるが，その他は平坦で，ロームが硬く踏み固められている。貯蔵穴は，南壁のほぼ中央部を切って検出され，平面形は，直径82cm・深さ25cmの円形を呈し，鍋状に堀り込まれている。覆土は，上層から下層にかけてローム粒子・ロームブロックを少量含む暗褐色土・褐色土・明褐色土の順に自然堆積している。ピットは，３か所検出され，配列や規模からＰ$_1$・Ｐ$_2$が主柱穴と思われる。主柱穴は，長径27・29cm・短径22・24cm・深さ23・27cmの規模である。住居跡のほぼ中央部に位置するＰ$_3$は，長径60cm・短径55cm・深さ45cmの規模を有しているが性格は不明である。カマドは，検出できなかった。しかし，北側のほぼ中央部エリア外際の床面上に少

量の焼土粒子・山砂が検出されており，カマドは，北側のエリア外に構築されているものと思われる。

覆土は，２層からなり，上層にはローム粒子・焼土粒子を極少量含む極暗褐色土が，下層にはローム粒子を極少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，住居跡全域から点在して土師器片98点，土製品１点が出土している。住居跡中央部よりやや南側のほぼ床面から土師器の高台付坏形土器（第90図３）が出土している。

本跡は，出土遺物から平安時代の９世紀後半に比定されるものと思われる。



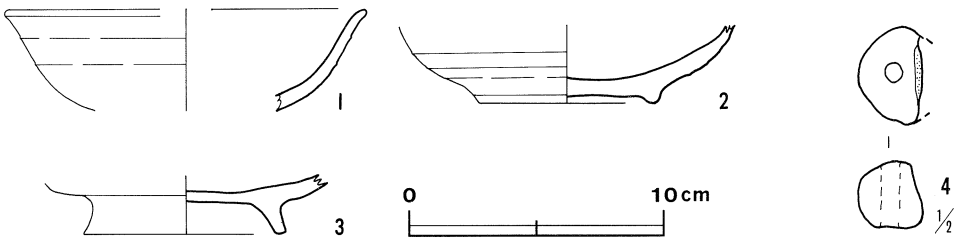
第89図　第35号住居跡実測図

第35号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 1	坏形土器 土師器	A (14.2) B (4.0)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	体部水挽き。	砂粒・石英・雲母 明褐色 普通	10% P206
2	高台付坏形土器 土師器	B (3.0) D 7.0	底部は平底で，高台は短く外下方へのび，体部は内彎しながら大きく開く。	体部水挽き，高台は貼り付け高台内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	10% P207 内面黒色処理
3	高台付坏形土器 土師器	B (2.3) D 7.9	高台は外下方へのびる。	高台貼り付け，高台内外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	40% P205

第35号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第90図 4	球状土錘	DP36	1.7×(1.7)	0.5	(6.4)	50% 両方穿孔

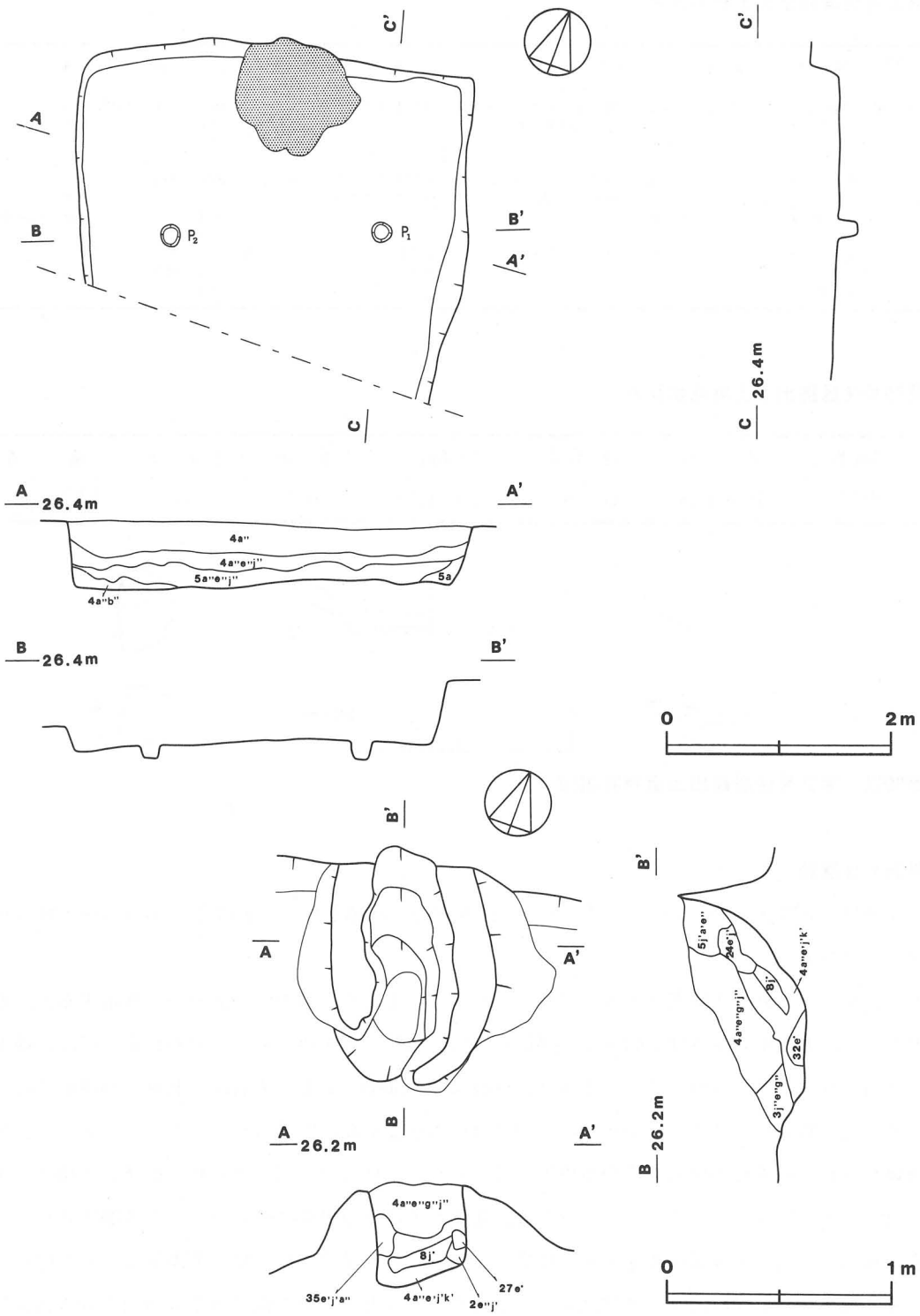


第90図　第35号住居跡出土遺物実測図

第36号住居跡（第91図）

本跡は，調査区の中央部やや東寄りB3h9区を中心に確認された住居跡で，第34号住居跡の東側２ｍに位置している。

平面形は，本跡の南側寄りがエリア外にかかっているため，調査した部分から推定すると，方形を呈し，北西壁の長さは3.44ｍで，主軸方向はＮ－17°－Ｗを指すものと思われる。壁は，締まりのあるロームで，外傾して立ち上がり，壁高は22～56cmである。床面は，北東・南西壁に向ってやや低く傾斜しているが，全体的に平担でロームがよく踏み固められている。ピットは，２か所検出され，いずれの位置もやや中央寄りであるが，主柱穴の一部と思われ，直径17・18cm・深さ11・20cmの規模を有している。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設され，天井部は崩れているが袖部は，山砂と少量の礫を混ぜて構築し，内側は熱を受けて焼土粒子を多量に含み赤化している。長さ104cm・幅102cm・焚口部幅40cmである。掘り方は，壁を幅77cmで10cmほど切り込み，奥壁を煙道としている。火床は，長径35cm・短径19cmの不整長楕円形を呈し，床面を12cmほど掘



第91図　第36号住居跡実測図

り込んでいる。

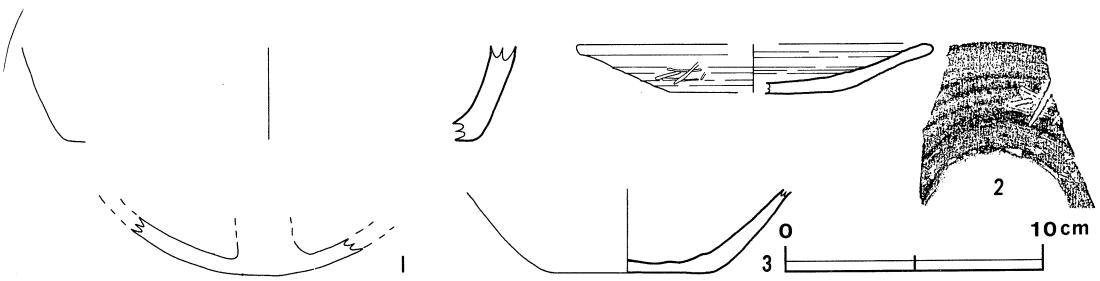
覆土は，自然堆積の様相を呈しており，上層にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を極少量含む褐色土が，下層にローム粒子・焼土粒子を極少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は破片が多く，土師器片143点，須恵器片30点，縄文式土器片１点が出土している。縄文式土器片は，覆土上層から出土しており，周囲から流れ込んだものと思われる。カマド内袖部から須恵器の坏（第92図３）が出土している。

本跡は，出土遺物から平安時代の９世紀中頃に比定されるものと思われる。

第36号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第92図 1	甑 須恵器	B（3.1） C（16.0）	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り，胴部内面ナデ。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	5％ P208
2	坏 須恵器	A（13.8） B 1.9 C（6.0）	底部は平底で，体部は内彎気味に大きく開き，口縁部はわずかに外反する。	底部は回転ヘラ削り，体部水挽き，体部下端回転ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	20％ P209 体部にヘラ書き
3	坏 須恵器	B（3.2） C（6.5）	底部は平底で，胴部は外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ切りの後手持ヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ヘラ削り。	砂粒・長石 灰黄褐色 普通	10％ P210

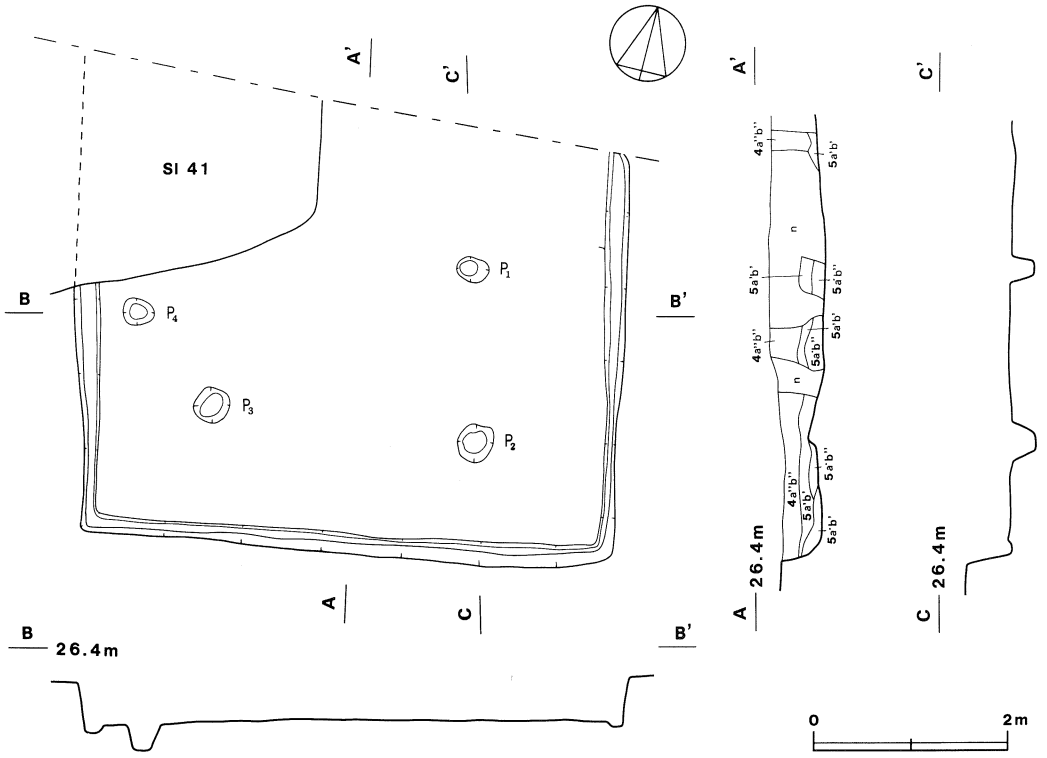


第92図　第36号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡（第93図）

本跡は，調査区のほぼ中央部B3f6区を中心に確認された住居跡で，第34号住居跡の北西側1.0ｍに位置している。本跡は，北西側で第41号住居跡と，南側では第43号住居跡と重複している。本跡との新旧関係については，本跡が，第41号住居跡に切られており，また，本跡の床面から約20cm上層に第43号住居跡のカマドが構築されていることから，本跡はいずれの住居跡よりも古い遺構である。

平面形は，本跡の北西側がエリア外に延びているため推定となるが，方形か長方形を呈し，南東壁の長さ5.71ｍで，主軸方向はＮ－14°－Ｗを指しているものと思われる。壁は，締まりのある



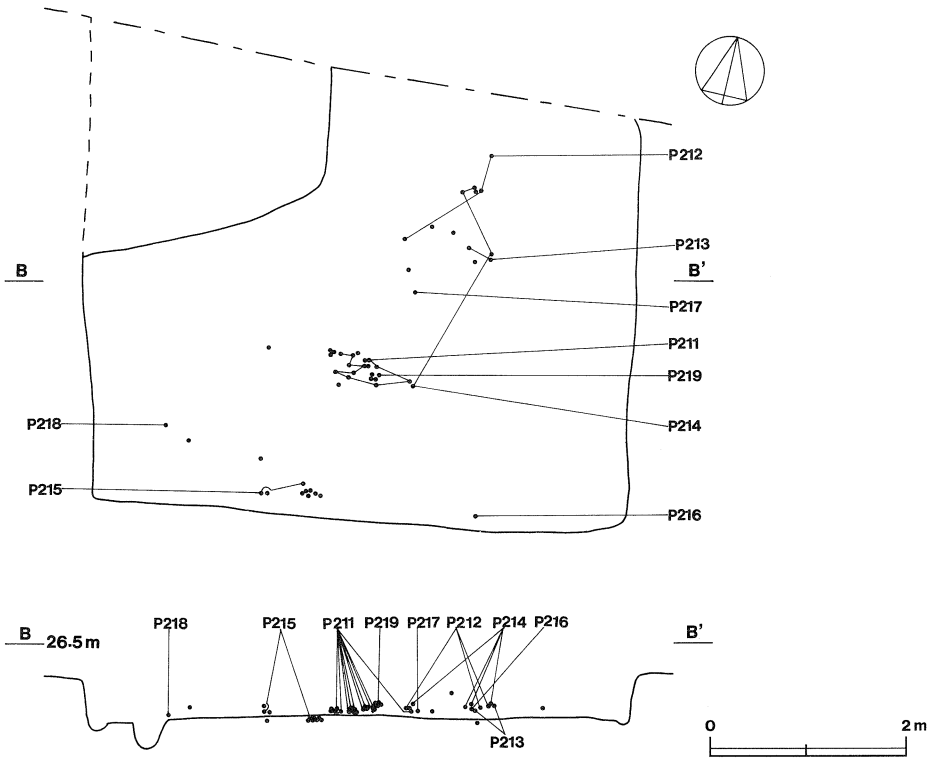
第93図　第39号住居跡実測図

ロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は42～47cmである。壁下には，上幅７～21cm・深さ２～８cmの壁溝が，第41号住居跡に切られている南西壁の一部を除いて周回している。床面は，中央部より北側にトレンチャーによる撹乱がみられるが，全体的に平坦で，ロームが硬く踏み固められている。ピットは，４か所検出され，P_2・P_3は，長径43・38cm・短径36・37cm・深さ25・31cmの規模を有し，配列から主柱穴の一部と思われる。P_1・P_4は，長径33・32cm・短径25・30cm・深さ25・27cmの規模を有し，配列から補助柱穴と思われる。

覆土は，撹乱を受けているが，自然堆積の様相を呈している。上層にはローム粒子・ローム小ブロックを極少量含む暗褐色土が，中層から下層にかけてはローム粒子・ロームブロックを少量含む褐色土が堆積している。

遺物は，土師器片310点，須恵器片39点，石製品１点出土している。中央部のほぼ床面から完形に近い土師器の坏形土器（第95図６）が，中央部からやや南側寄りのほぼ床面から半完形の大形の甕形土器（第95図３）と紡錘車（第95図９）が出土している。南東壁際のやや東コーナー部寄りの床面から坏形土器（第95図８）が，同じく南東壁際のほぼ中央部の床面から大形の甕形土器（第95図４）の胴部下半が出土している。

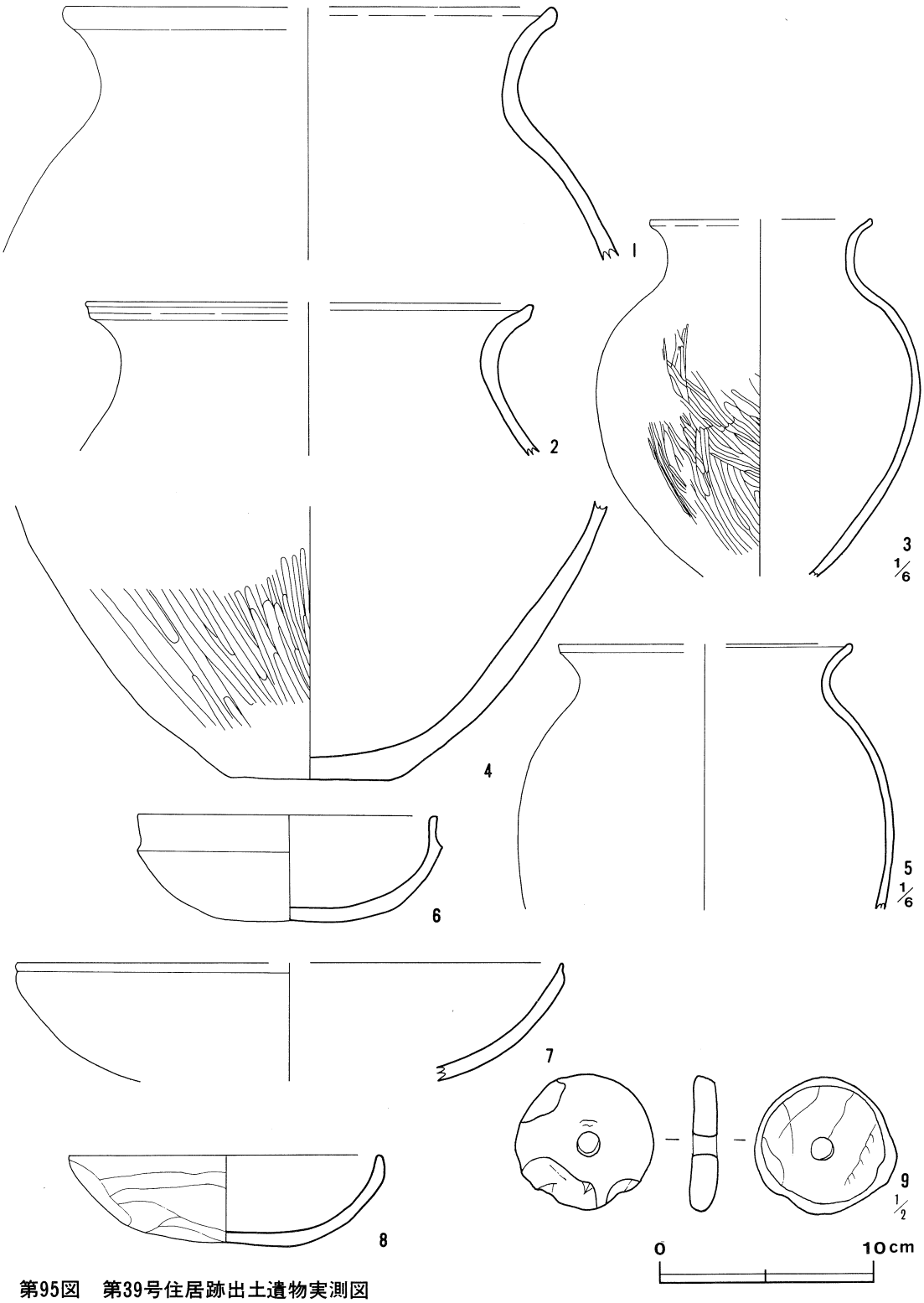
本跡，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



第94図　第39号住居跡出土土器接合関係図

第39号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 1	甕形土器 土師器	A (22.7) B (11.9)	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒 明赤灰色 普通	20% P212
2	甕形土器 土師器	A (10.9) B (7.0)	口縁部は外反して立ち上がり，端部は外上方へつまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	10% P213
3	甕形土器 土師器	A (20.8) B (34.5)	胴部は長胴を呈し，胴部上位に最大径を有する。口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面ナデ後ヘラ磨き，胴部内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	70% P211
4	甕形土器 土師器	B (12.8) C 7.7	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面縦位のヘラ磨き，胴部内面横ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 赤色 普通	20% P215



第95図　第39号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 5	甕形土器 土師器	A (27.3) B (25.0)	胴部は丸く張り，口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英 雲母 褐色 普通	20% P214
6	坏形土器 土師器	A 13.8 B 4.9	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ。	砂粒・雲母 黒色 普通	90% P217
7	坏形土器 土師器	A (25.4) B (5.5)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁端部は上方へつまみ出されている。	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面ナデ。	砂粒 黒色 普通	10% P218
8	坏形土器 土師器	A 14.4 B 4.1 C 5.1	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は短くほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り，体部内面横ナデ，底部ヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	90% P216

第39号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	直径×厚さ(cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第95図 9	紡錘車	Q 5	4.3×0.9	0.7	(21)	滑石

第40号住居跡 (第96図)

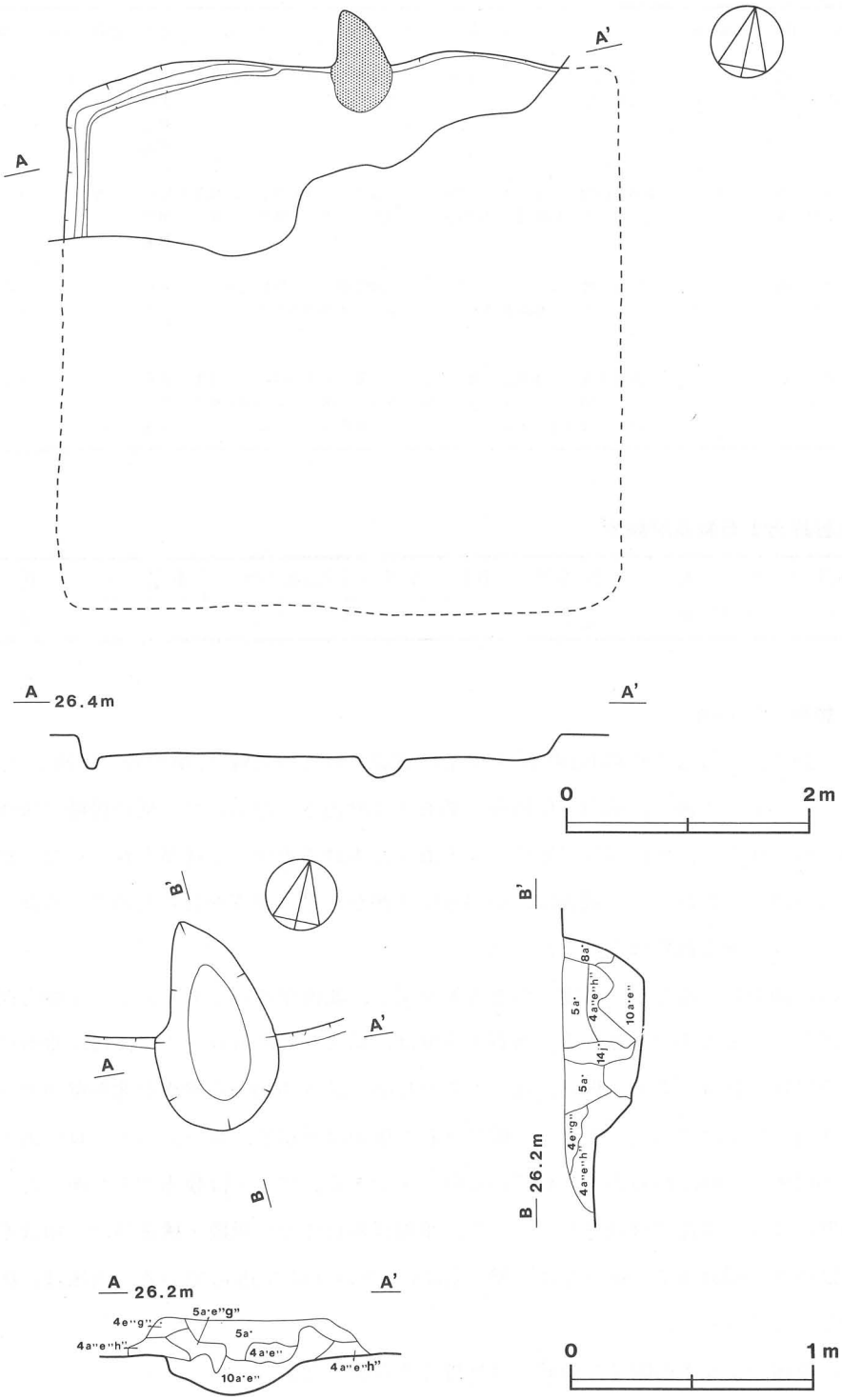
本跡は，調査区のほぼ中央部B3g7区を中心に確認された住居跡で，第27号住居跡の北東側0.5mに位置している。本跡は，第34号住居跡の調査中に検出されたもので，同住居跡の床面から約45cm上層に貼り床をし，更に同住居跡のカマド直上に本跡のカマドが構築されていた。従って，新旧関係は本跡の方が新しい。調査は，第34号住居跡から先に調査を行ったので，本跡の南側の大半については十分な観察はできなかった。

平面形は，調査した部分から推定すると方形を呈し，北西壁の長さ4.07mで，主軸方向はN－13°－Wを指しているものと思われる。残存する壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は16～18cmである。壁下には，上幅約15cm・深さ約10cmの壁溝が北西壁のカマドの北西側から南西壁にかけて周回している。確認された床面は平坦で，ローム粒子・ローム小ブロック混じりの褐色土が硬く踏み固められている貼り床である。ピットは検出できなかった。カマドは，北西壁のほぼ中央部に付設されているが，袖部は崩れており規模・構造等の詳細は不明である。長さは89cm・幅51cmで，掘り方は，壁を幅48cmで49cm切り込んでいる。火床は，床面を15cmほど掘り込んでいる。

覆土は，重複により不明瞭で，明確には把握できなかった。

遺物は少なく，土師器片57点，須恵器片3点，石1点が出土している。

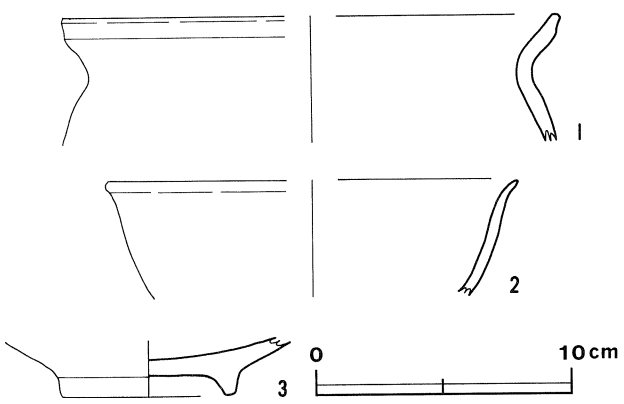
本跡は，出土遺物から平安時代の9世紀後半に比定されるものと思われる。



第96図　第40号住居跡実測図

第40号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第97図 1	甕形土器 土師器	A (19.5) B (5.0)	口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英 赤橙色 普通	5 % P220
2	坏形土器 土師器	A (16.0) B (4.6)	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外反する。	体部水挽き。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	10% P222
3	高台付坏形土器 土師器	B (2.2) D (6.9)	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	体部水挽き，高台は貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	20% P221 内面黒色処理



第97図　第40号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡（第98図）

本跡は，調査区のほぼ中央B3f6区を中心に確認された住居跡で，第34号住居跡の北西側4.1mに位置している。本跡は，南東側で第39号住居跡の床面を切っていることから本跡の方が新しい。また，南西側では，第25号住居跡と重複しているが，出土遺物を検討した結果，本跡の方が古い遺構と判断される。

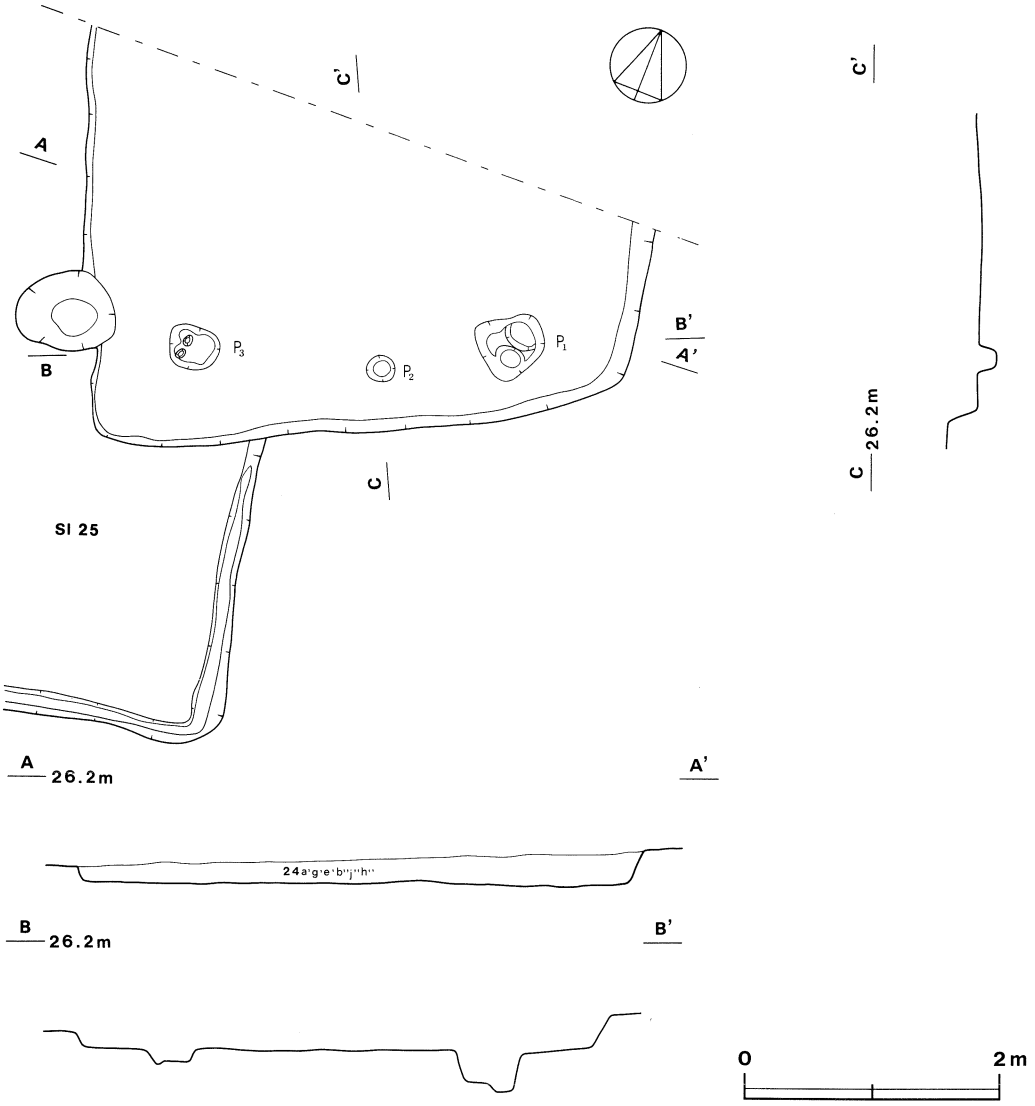
平面形は，中央部から北西側にかけてエリア外にかかっているために推定となるが，方形か長方形を呈し，南東壁の長さ4.14mで，主軸方向はN－21°－Wを指しているものと思われる。壁は，一部トレンチャー等による撹乱を受けているが，締まりのあるロームで，北東壁は外傾して立ち上がっており，南東壁，南西壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，北東壁から南東壁にかけては25～27cmであるが，南西壁はやや浅く12cm前後である。床面は，全体的に平坦で中央部から北側に4条のトレンチャーによる撹乱が50cmほどの間隔でみられる他は，農家の土間のように硬く踏み固められており，壁際は，ロームがよく締まっている。ピットは，3か所検出され，P_1・P_3は，主柱穴の一部と思われ，長径40・55cm・短径36・53cm・深さ11・32cmの規模を有している。P_2は，直径23cm・深さ14cmの規模で，位置から出入口施設に関するピットと考えられる。

覆土は，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含み締まりのある暗褐色土が堆積している。

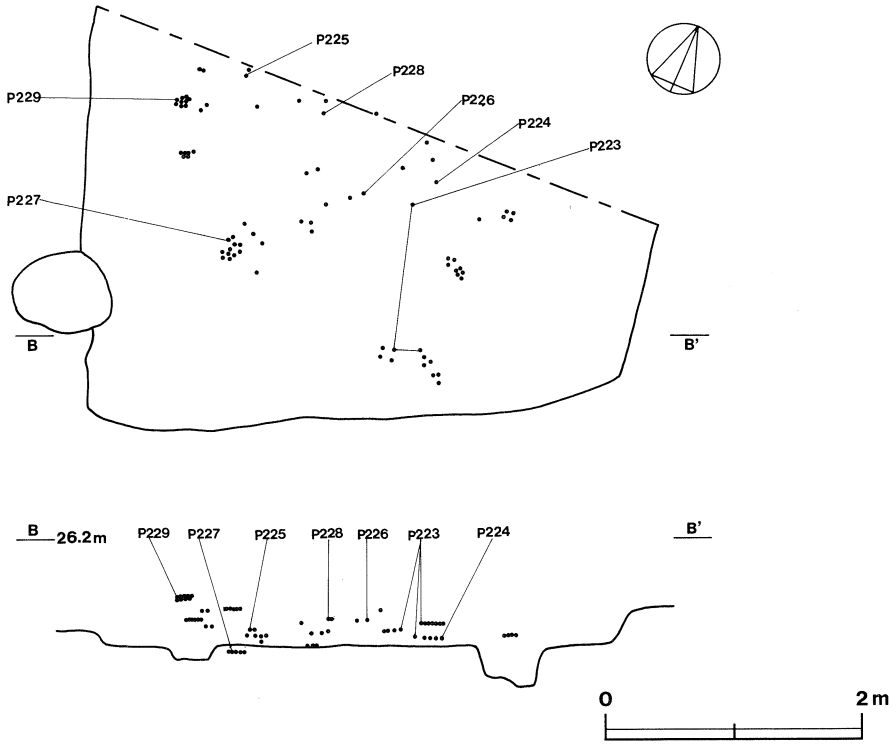
遺物は，土師器片565点，須恵器片58点，縄文式土器片1点が住居跡の全域から出土している。縄文式土器片は覆土上層から出土しており，周囲からの流れ込みと思われる。南東壁寄りの床面より若干浮いた状態で土師器の甕形土器（第100図3）の大形破片が，南側寄りの床面より半完形

の須恵器の坏（第100図5）が出土している。

本跡は，出土遺物から奈良時代の８世紀後半に比定されるものと思われる。



第98図　第41号住居跡実測図

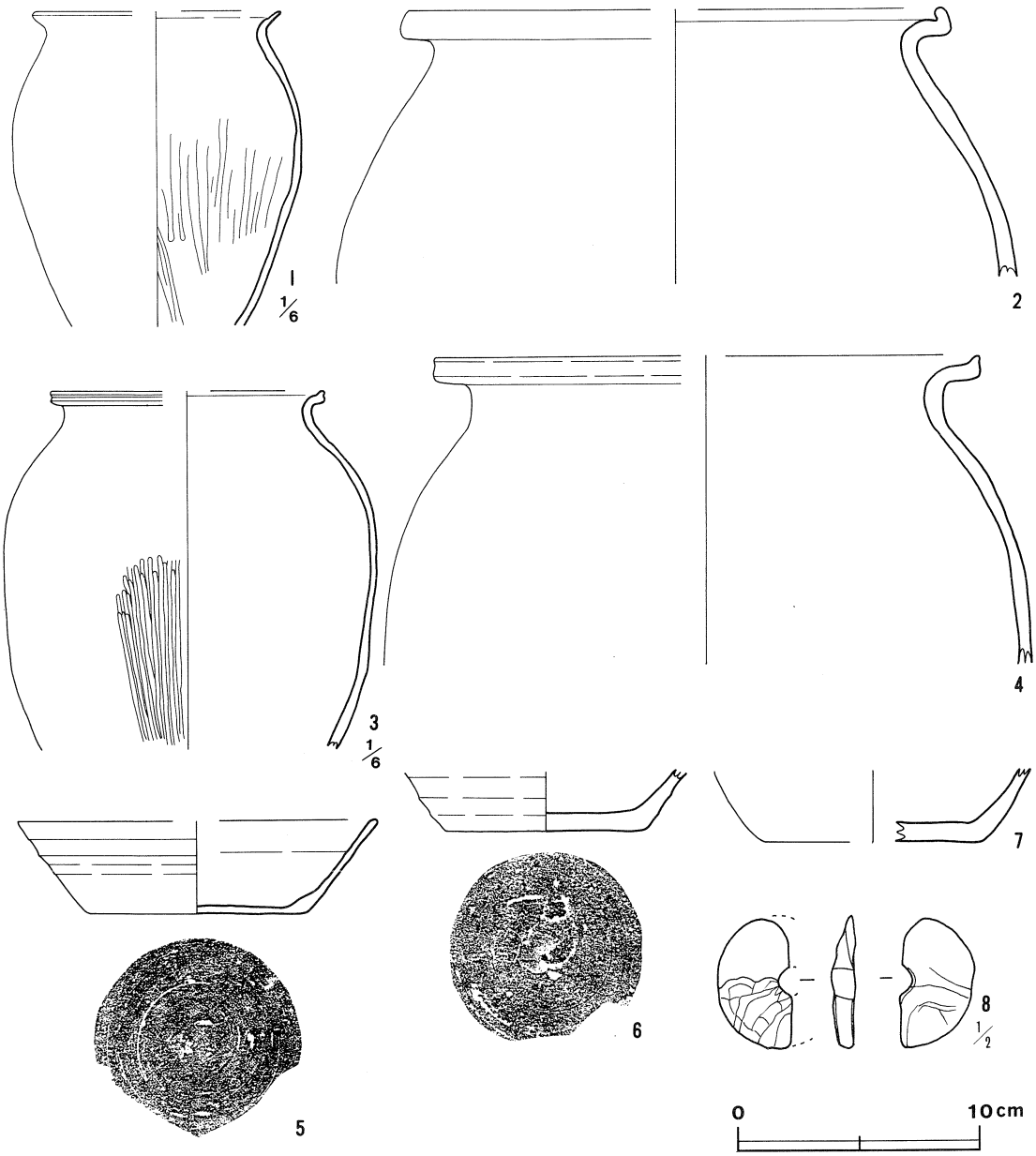


第99図　第41号住居跡出土土器接合関係図

第41号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 1	甕形土器 土師器	A (20.2) B (26.5)	胴部は長胴を呈し，胴部上位に最大径を有する。口縁部は外反しながら立ち上がり，口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面ナデ，胴下半部縦位のヘラ磨き，胴部内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	30% P224
2	甕形土器 土師器	A (22.0) B (11.3)	胴部は丸く張り，口縁部は横に開く。口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	10% P225
3	甕形土器 土師器	A (22.8) B (30.0)	胴部は長胴を呈し，口縁部は外反しながら立ち上がり，口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ，胴部外面ナデ，胴下半部縦位のヘラ磨き，胴部内面ナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい赤褐色 普通	30% P223
4	甕形土器 土師器	A (22.8) B (13.0)	胴部は丸く張り，口縁部はほぼ直立気味に立ち上がった後横に開く。口縁端部はわずかに上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 明褐色 普通	10% P226
5	坏 須恵器	A (15.0) B 3.9 C 9.2	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ削り，体部水挽き，体部下端回転ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母 黄灰色 普通	55% P227

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第100図 6	坏 須恵器	B (2.5) C　8.4	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ切りの後回転ヘラ削り，体部水挽き，横ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 普通	30% P228
7	坏 須恵器	B (3.0) C (9.0)	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ切り，体部水挽き。	砂粒・長石 褐灰色 普通	10% P229



第100図　第41号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考
第100図 8	紡錘車	Q 6	(3.6)×(0.7)	(0.8)	(6)	滑　石

第42号住居跡（第101図）

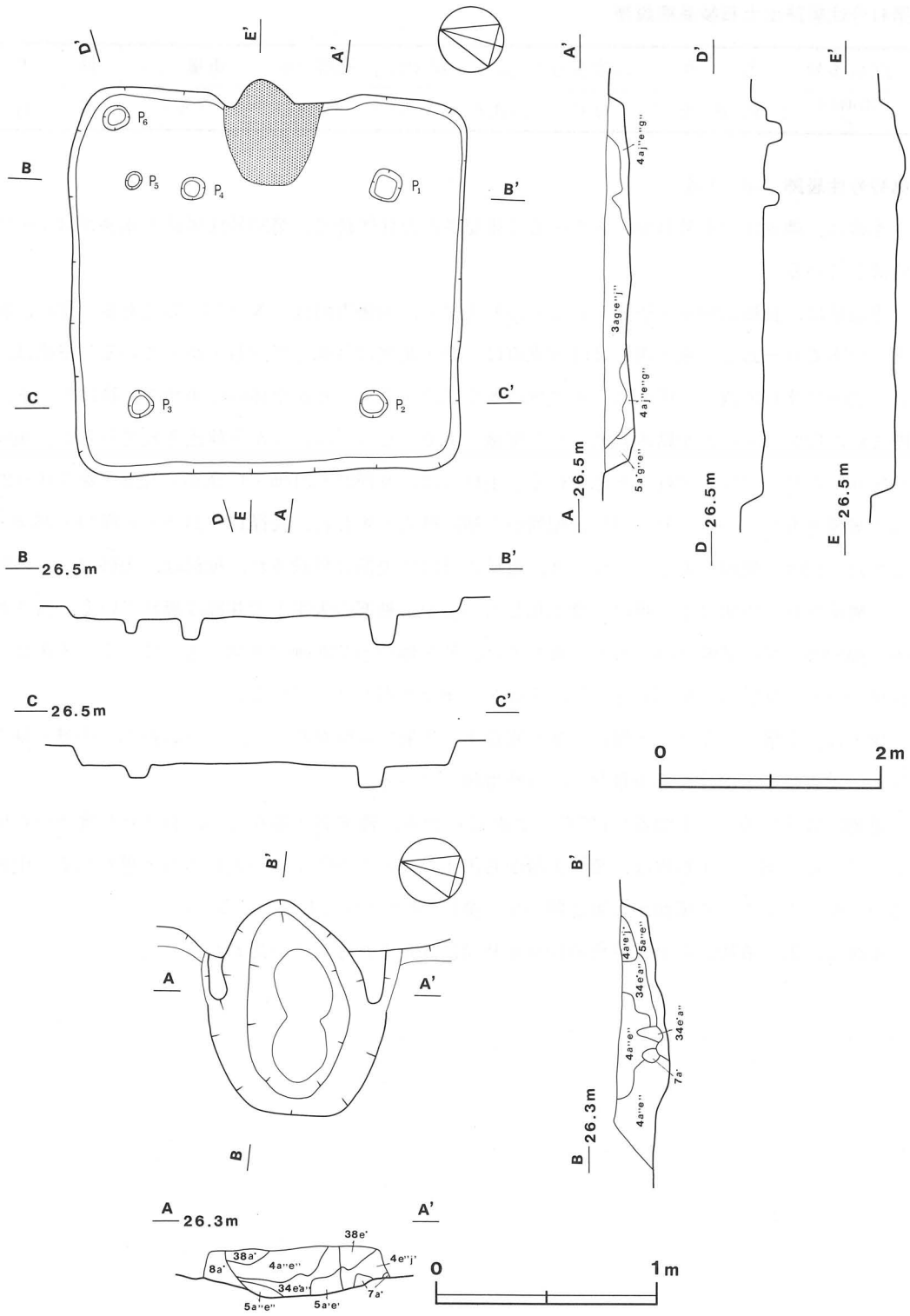
本跡は，調査区の東部B4g9区を中心に確認された住居跡で，第35号住居跡の南東側3.7mに位置している。

平面形は，長軸3.50m・短軸3.46mの方形を呈し，主軸方向は，N－73°－Eである。壁は，締まりのあるロームで，東・南壁はほぼ垂直に，西・北壁は外傾して立ち上がっている。壁高は，12～22cmで比較的浅い。床面は，中央部に多小凹凸がみられるが全体的に平坦で，特にピットに囲まれた内側はロームが踏み固められて堅緻である。ピットは，6か所検出されているが，規模や配列からP_1～P_4が主柱穴と思われる。主柱穴は，長径21～31cm・短径20～31cm・深さ10～27cmの規模を有している。P_5・P_6は配列から補助柱穴と思われ，長径17・24cm・短径14・23cm・深さ11・13cmの規模である。カマドは，東壁のほぼ中央部に付設され，袖部は，山砂混じりの粘土で構築され，内側はよく焼けて焼土化しているが，袖部の大半と天井部は崩れている。長さ99cm・幅80cm・焚口部幅58cmである。掘り方は，壁を幅57cmで26cmほど切り込んでいる。火床は，長径29cm・短径25cmの楕円形を呈し，床面を9cmほど掘り込んでいる。

覆土は，2層からなり，上層には極暗褐色土，下層には暗褐色土が，ローム粒子を中量・焼土粒子・炭火粒子・山砂を極少量含み，自然堆積している。

遺物は破片が多く，土師器片107点，須恵器片28点，縄文式土器片2点，石2点が覆土から出土している。縄文式土器片は，覆土上層から出土しており周囲からの流れ込みと思われる。中央部からやや南側寄りの床面から須恵器の坏（第102図3）が出土している。

本跡は，出土遺物から平安時代の10世紀初頭に比定されるものと思われる。



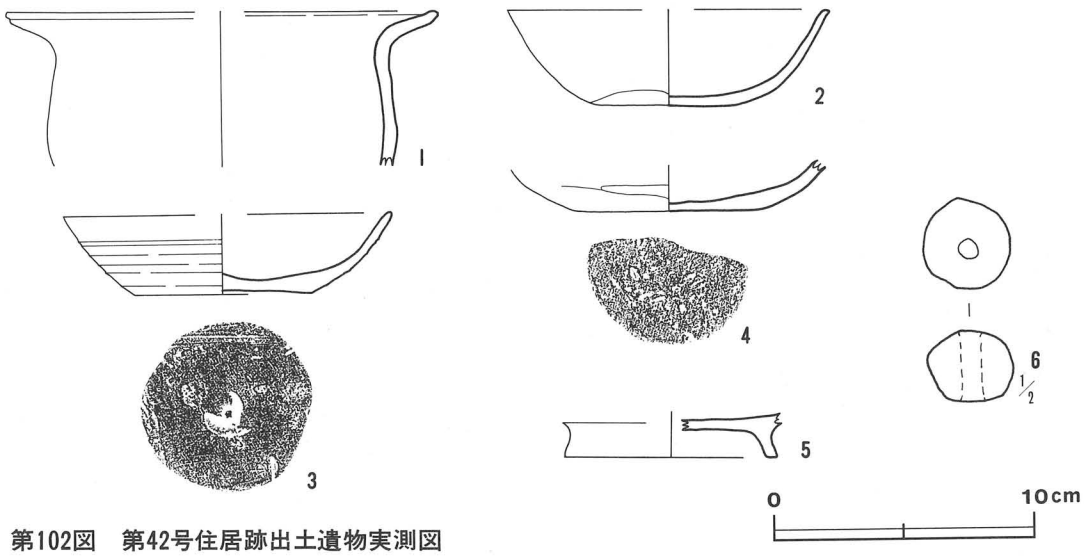
第101図　第42号住居跡実測図

第42号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 1	甕形土器 土師器	A (16.6) B (6.1)	胴部は長胴を呈し，口縁部は外傾しながら立ち上がり，口縁端部がわずかにつまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内・外面ナデ。	砂粒・石英 にぶい褐色 普通	5% P230
2	坏形土器 土師器	A (12.5) B 4.0 C 5.2	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	40% P233
3	坏 須恵器	A (12.8) B 3.0 C 6.9	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	80% P232
4	坏形土器 土師器	B (1.7) C 7.5	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き，体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 灰褐色 普通	30% P234
5	高台付坏形土器 土師器	B (1.8) D (8.3)	高台は外下方へのびる。	高台は貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	20% P231

第42号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
第102図 6	球状土錘	DP37	1.9×2.2	0.6	8.5	100% 一方穿孔



第102図　第42号住居跡出土遺物実測図

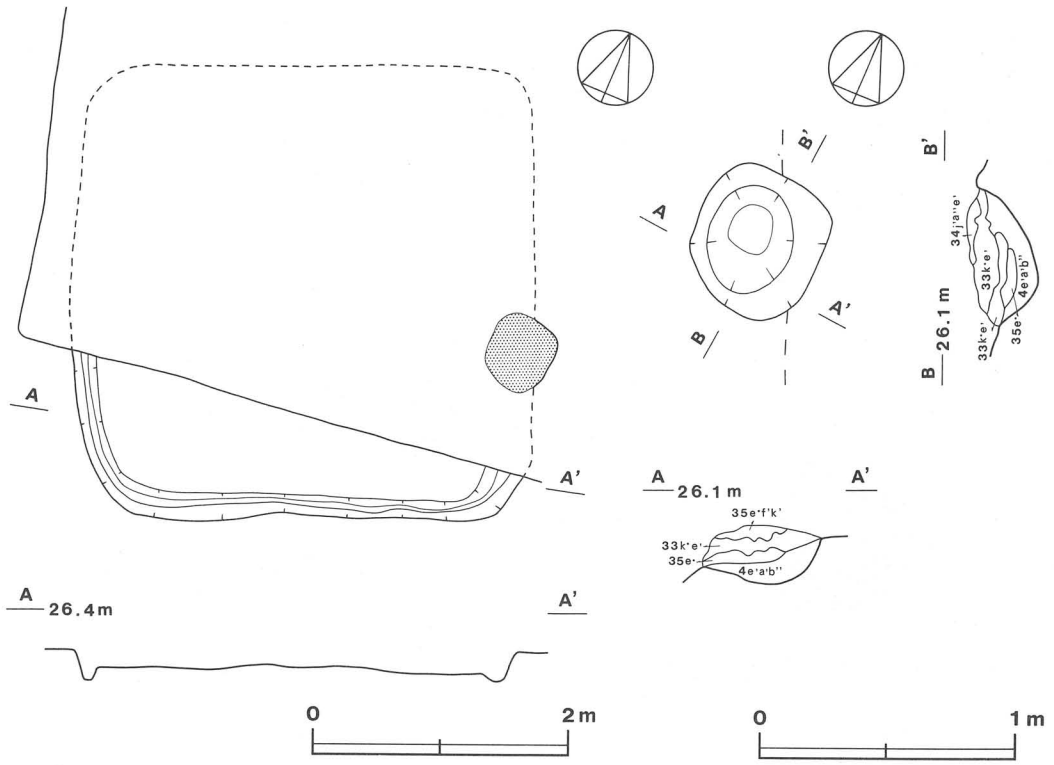
第43号住居跡（第103図）

本跡は，調査区のほぼ中央部B3f6区を中心に確認された住居跡で，第34号住居跡の北西側0.1mに位置している。本跡は，南側の一部を残して北側の大半が第39号住居跡の床面から30～35cm上層に覆土を掘り込んで構築されていたもので，本跡の方が新しい遺構である。本跡は，第39号住居跡を調査中に検出された遺構のため，カマドを除いた北側部分はプランを明確にできなかった。

平面形は，調査した部分から推定すると，方形か長方形を呈し，南東壁の長さは3.57mで，主軸方向はN－66°－Eを指しているものと思われる。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は14～18cmで，壁下には，上幅14～19cm・深さ6～10cmの壁溝が周回している。カマドは，北東壁のやや東コーナー寄りに付設されていたが，天井部・袖部は崩れているため規模等は不明である。長さ114cm・幅124cmである。火床は，床面を13cmほど掘り込んでいる。

覆土は，重複していた第39号住居跡の覆土を観察すると暗褐色土が堆積していたと思われる。

遺物は破片が多く，土師器片61点，須恵器片1点，灰釉陶器1点，縄文式土器片1点，石1点が出土している。縄文式土器片は，覆土上層から出土しており，周囲からの流れ込みと思われる。



第103図　第43号住居跡実測図

本跡は，出土遺物から平安時代の９世紀後半に比定されるものと思われる。

第43号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第104図 1	壺 灰釉陶器	B（4.0） C（17.0）	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ削り，胴部水挽き。	砂粒・長石 灰白色 普通	10% P237 底部内面施釉
2	坏 須恵器	B（2.2） C（5.8）	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り，体部水挽き。	砂粒・長石・石英・雲母 黒褐色 普通	10% P236
3	高台付坏形土器 土師器	B（2.2） D（8.7）	高台は外下方へのびる。	高台は貼り付け，高台内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	40% P235 内画黒色処理

第104図　第43号住居跡出土遺物実測図

(2)　土坑

第１号土坑（第105図）

本跡は，調査区の中央部からやや東側のB3h₀ 区を中心に確認された土坑で，第２号土坑の西側2.3ｍに位置している。

平面形は，長径1.31ｍ・短径1.21ｍの円形を呈し，長径方向はＮ－69°－Ｗを指している。遺構確認面から坑底までの深さは，38cmほどである。壁は，東側が外傾して立ち上がっているが，他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は，多少凹凸がみられる。ロームがよく締まっている。

覆土は，自然堆積の様相を呈しており，上層から下層にかけてローム粒子を少量含む褐色土が，壁際には，ローム粒子を多量含む明褐色土が堆積している。

遺物は，出土していない。

第2号土坑（第105図）

本跡は，調査区の中央部からやや東側のB3h0区を中心に確認された土坑で，第1号土坑の東側2.3mに位置している。

平面形は，長径1.25m・短径1.08mの不整楕円形を呈し，長径方向はN－37°－Eを指している。遺構確認面から坑底までの深さは，17cmほどである。壁は，北東側は外傾して立ち上がっているが，他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は，全体的に平坦で，ロームがよく締まっている。

覆土は，2層からなり，上層にローム粒子を少量含む褐色土が，下層にはローム粒子を多量含む明褐色土が自然堆積している。

遺物は，出土していない。

第3号土坑（第105図）

本跡は，調査区の西部B4g0区を中心に確認された土坑である。本跡は，平安時代の第7号住居跡内の北側床面を切って重複していることから，本跡の方が新しい遺構である。

平面形は，長径2.04m・短径1.43mの不整楕円形を呈し，長径方向はN－45°－Eを指している。坑底は段差がみられ，遺構確認面から坑底までの深さは，北東側が34cmほどで，南西側がやや浅く29cmほどである。壁は，外傾して立ち上がっている。底面は，ほぼ平坦で，ロームがよく締まっている。

覆土は，自然堆積の様相を呈しており，ローム粒子を少量，ローム小ブロック・焼土粒子を極少量含む暗褐色土を主体に，壁際にはローム粒子を多量含む明褐色土が堆積している。

遺物は，出土していない。

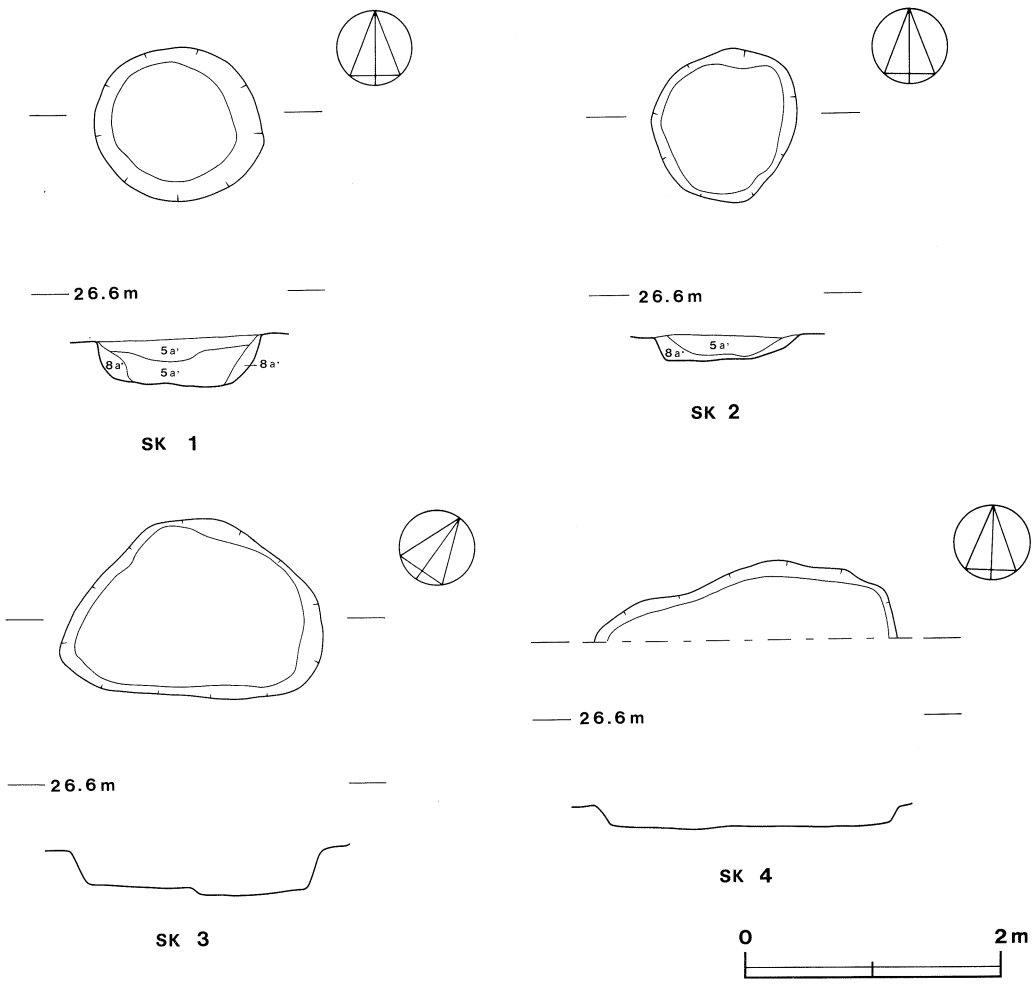
第4号土坑（第105図）

本跡は，調査区の西部B5h1区を中心に確認された土坑である。本跡は，平安時代の第7号住居跡内の南側床面を切っており，更に南側はエリア外に延びている。

平面形は，推定で方形か長方形を呈し，東西の長さ2.36mである。遺構確認面から坑底までの深さは，東側が17cm，西側が深くなり33cmほどである。壁は，外傾して立ち上がっている。底面は，ほぼ平坦で，ロームがよく締まっている。

覆土は，ローム粒子・ローム小ブロックを少量含む褐色土が堆積している。

遺物は，出土していない。



第105図　第１・２・３・４号土坑実測図

(3) 溝

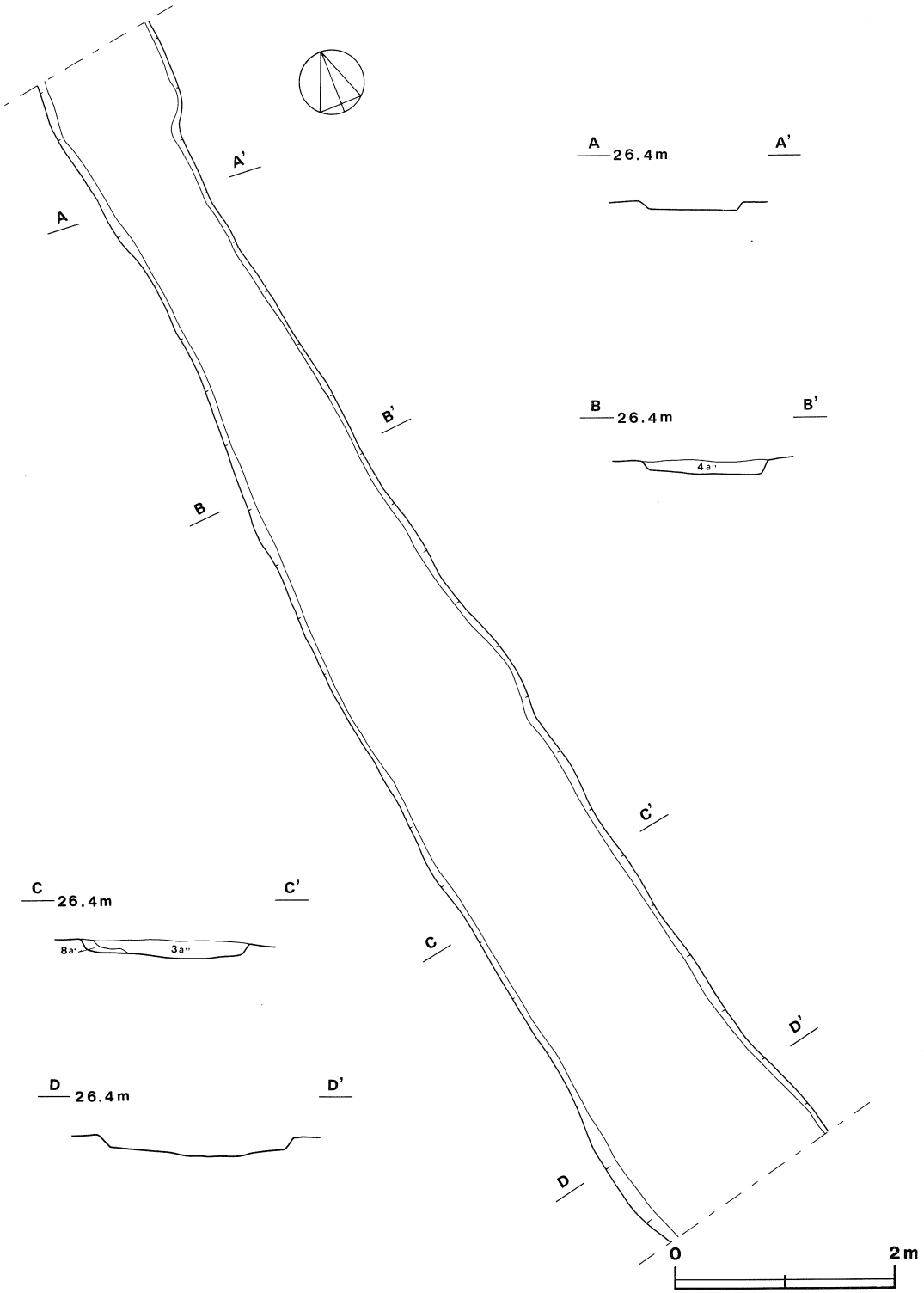
第１号溝（第106図）

本跡は，調査区の西部Ｂ5区に確認された溝で，第８号住居跡の東側12.6ｍに位置している。

検出された長さは，Ｂ5e4区からＢ5h5区迄の約12ｍで，主軸方向はＮ－9°－Ｗを指し，ほぼ直線的に南北に延びており，両端とも調査区外へ延びている。上幅83～184cm・下幅74～163cm・深さ８～18cmで，底面のレベル差はほとんどなく，断面は，「⌣」形を呈している。

覆土は，１層でローム粒子を極少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は，出土していない。



第106図　第１号溝実測図

(4) その他の遺物

当遺跡からは,表採やトレンチ試掘中に縄文式土器片49点,弥生式土器片20点，石器４点が出土している。縄文式土器片は，縄文時代前期から後期に,弥生式土器片は,弥生時代後期に比定されるものである。これらの土器のうち摩耗が著しかったり，細片などのために図示できない土器片を除いた57点を６群に分類して説明を加えた。

●土器

第１群土器〔縄文時代早期に比定される土器群〕（第107図）

１・２は三戸式に比定される胴部片で，細沈線が斜格子目状に施されている。

３～５は田戸下層式に比定される胴部片で，３・４は彫刻刀のようなものでえぐりとられたような太い凹線が横位に，５は斜位に施されている。

第２群土器〔縄文時代前期に比定される土器群〕（第107図）

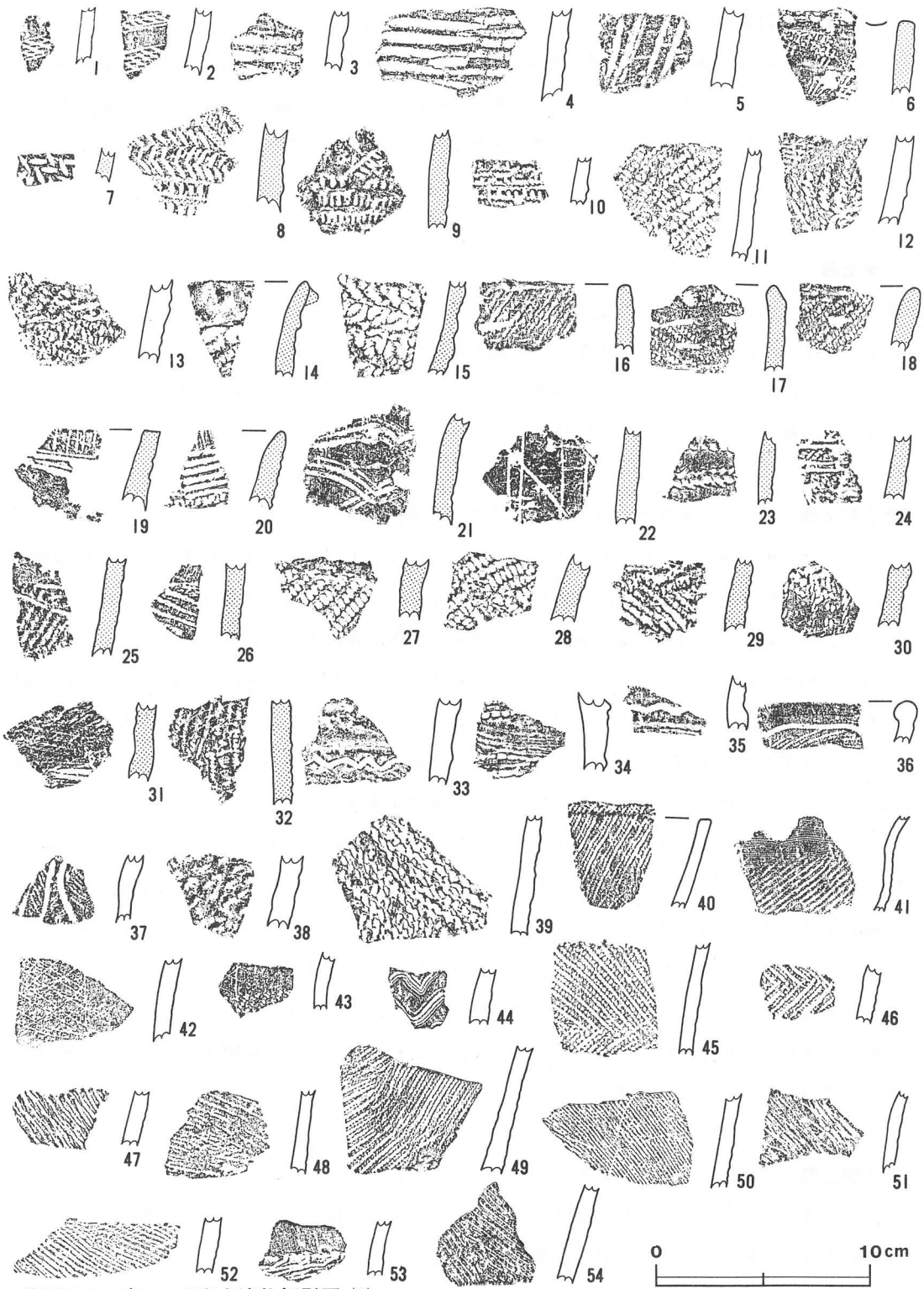
６～13は花積下層式に比定される土器片で，いずれも胎土に繊維が含まれている。6は口縁部片で，口唇部に棒状工具による押圧，口縁部にはハイガイの腹縁による押引施文がみられる。７～13は胴部片である。７は綾杉状の刺突文，８は縄文原体が押圧されている間にキザミ目を付した隆帯と綾杉状の刺突文が施されている。９は低い隆帯上にキザミ目が密に施されている。10は縄文原体が押圧されている間にキザミ目を付した隆帯が横位に巡る。11～13は縄文が施されている。

14・15は関山式に比定される土器片で，胎土には繊維が含まれている。14は口縁部片で，口縁部には瘤状突起が付されている。15は胴部片で，縄文が施されている。

16～32は黒浜式に比定される土器片で，いずれも胎土に繊維が含まれている。16～20は口縁部片で，16は無節縄文，17は単節縄文ＲＬ，18は単節縄文ＬＲが施されている。19は縦位の短い細沈線直下に数条の沈線が横位に，また，20は多条沈線が横位に施されている。21～32は胴部片である。21は３条の沈線が波状に，22は沈線が縦位・斜位に，23は爪形文が施されている。24は縄文地文上に半截竹管による平行沈線が，25は無節の縄文地文上に沈線が斜位に施されている。26は単節縄文ＬＲが押圧されている。27・28は単節縄文ＬＲが，29は単節縄文ＲＬが，30は縄文が施されている。31・32は無節縄文が施されている。

第３群土器〔縄文時代中期に比定される土器群〕（第107図）

33～35は阿玉台式に比定される胴部片である。33は波状沈線が横位に，34は隆帯に沿って一列の結節沈線文が施されている。35は隆帯に沿って波状沈線が施されている。



第107図　グリッド出土遺物拓影図 (1)

第4群土器〔縄文時代後期に比定される土器群〕（第107図）

36～38は称名寺式に比定される土器片である。36は口縁部片で，沈線による区画文が描かれ，区画内には縄文が施されている。37・38は胴部片で，37は沈線による曲線的モチーフが描かれ，区画内には縄文が施されている。38は刺突文が施されている。

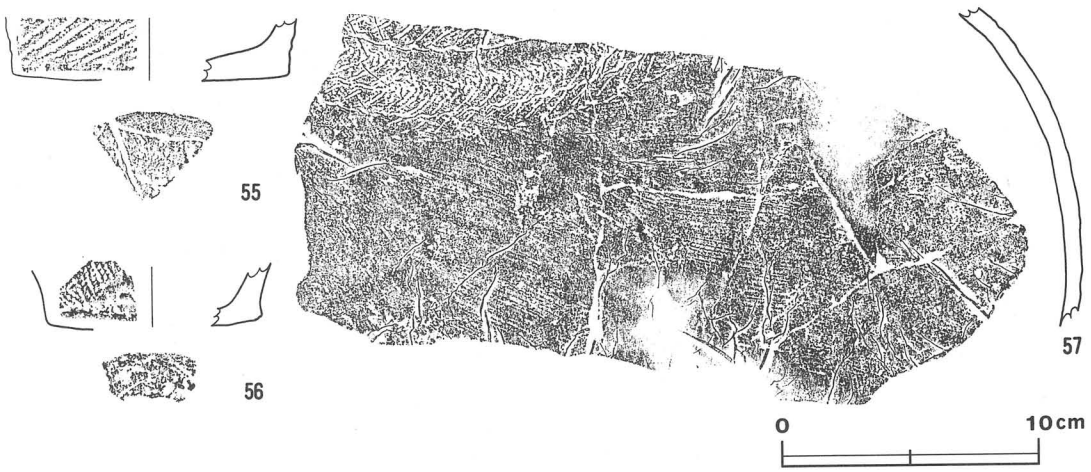
39は加曽利Ｂ式に比定される胴部片で，粗い単節縄文ＲＬが施されている。

第5群〔弥生時代後期に比定される土器群〕（第107・108図）

40～56は弥生式土器である。40は鉢形土器の口縁部片で，口唇部から口縁部にかけて撚糸文が施されている。41は壺形土器の頸部から胴部にかけての破片で，頸部には多条櫛目文が横位に，胴部には撚糸文が施されている。42～54は胴部片である。42・43はヘラ状工具によって縦区画をし，区画内に斜格子文を施している。44は多条櫛目文が波状に施されている。45・46は羽状縄文が施されている。47～54は撚糸文が施されている。55・56は底部片で，胴部に撚糸文が施され，底部には木葉痕がみられる。

第6群土器〔古墳時代前期に比定される土器群〕（第108図）

57は胴部の大破片で，胴部上位にＳ字状結節文が施され，以下ハケ目調整が斜位に，内面はヘラナデが施されている。

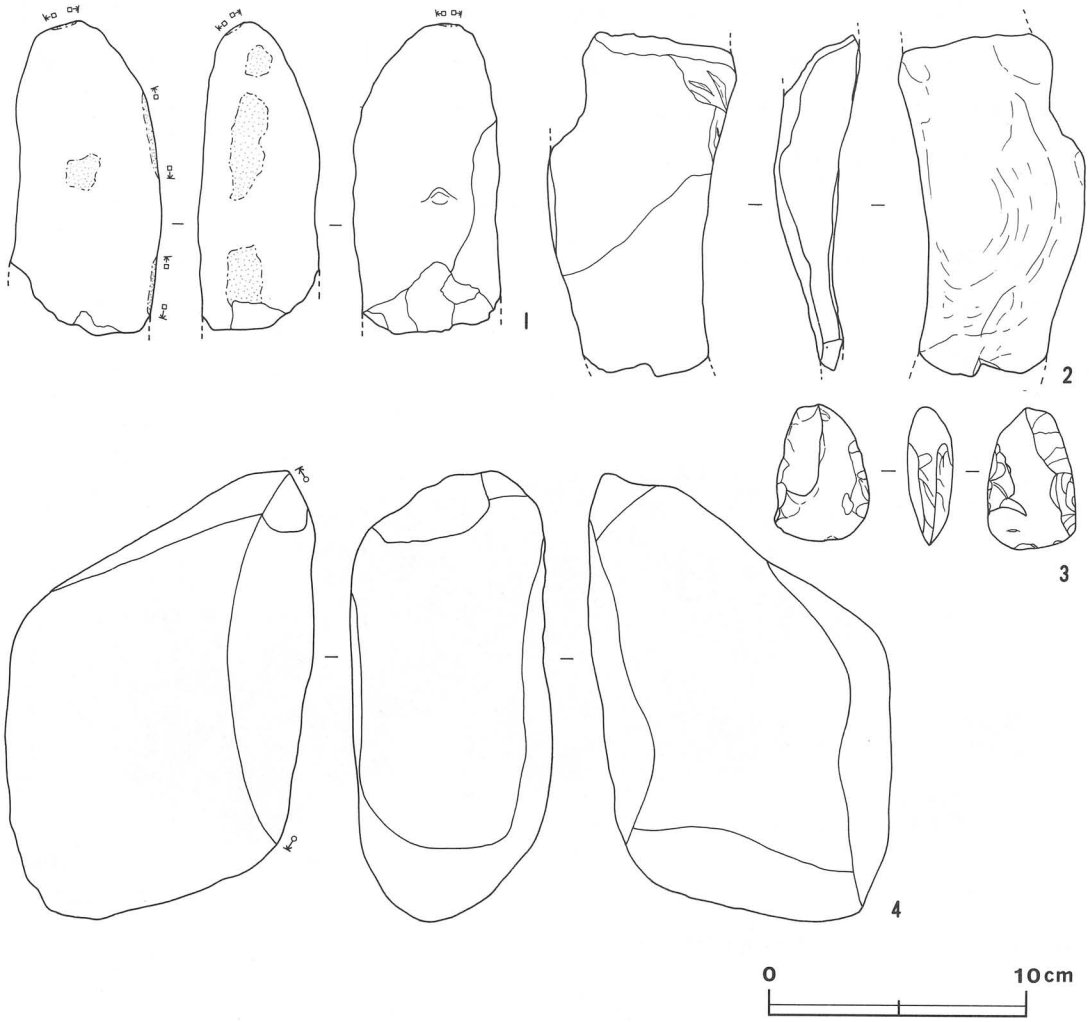


第108図　グリッド出土遺物拓影図(2)

●石器

表2　石器一覧表

図版番号	名　称	台帳番号	出土地点	大きさ(cm) 長さ・幅・厚さ	重量(g)	石　質
第109図 1	敲　石	Q 3	B2f6	(12.0)×5.2×4.8	(393)	流紋岩
2	砥　石	Q 1	B2f2	(13.5)×7.5×3.2	(228)	粘板岩
3	磨製石斧	Q 2	B2f9	5.3×3.7×1.8	43	砂　岩
4	石　皿	Q 7	B4g9	(17.8)×(12.1)×8.0	(2404)	雲母片岩



第109図　石器実測図

3　ま と め

五斗落遺跡からは，竪穴住居跡42軒，土坑４基，溝１条が検出され，遺物は，土師器，須恵器，土製品，石製品，鉄製品などが出土している。これらの遺物は，古墳時代前期の五領期から平安時代にかけてのものであるが，ほとんどが住居跡から出土した土器である。以下調査によって明らかになったことを遺構や遺物ごとに分けてまとめることにする。

(1) 竪穴住居跡について

竪穴住居跡は42軒で，出土した土器などをもとにして時期判定のできた住居跡は38軒である。時期不明の４軒を除き住居跡の形態・配置などを各時期ごとに検討を加え，集落の変遷をたどる。

古墳時代前期（五領期）

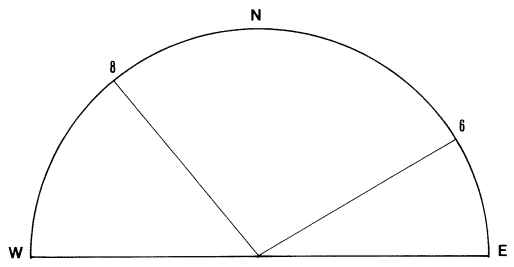
五領期に比定される竪穴住居跡は，調査区の東部に第６・８号住居跡の２軒とやや西側寄りに炉だけが検出された第32号住居跡の合わせて３軒が検出されており，これらの住居跡を出土遺物から下記の２期に分けることができる。

Ⅰ期　五領Ⅰ式に比定される住居跡（第８号住居跡）
Ⅱ期　五領Ⅱ式に比定される住居跡（第６号住居跡）

なお，第32号住居跡については，炉だけで出土遺物も甕形土器の胴部片だけであることから五領期のいずれに属するかは不明である。

Ⅰ期の住居跡は，調査区の中央部からやや東側に位置し，Ⅱ期の住居跡は，Ⅰ期より更に北東側約19ｍに位置している。平面形状及び規模については，Ⅰ期の住居跡は長軸が4.75ｍ，Ⅱ期が4.6ｍのいずれも隅丸方形を呈し，ほぼ同一規模である。長軸方向は，Ⅰ期が北西，Ⅱ期が北東を指している。主柱穴は，Ⅰ期では４か所，Ⅱ期では３か所検出されているが，特に，Ⅱ期の主柱穴はコーナー部から検出されている。炉についてみると，Ⅰ期の住居跡は，中央部と北東寄りに２か所の地床炉を，Ⅱ期の住居跡は，やや西寄りに１か所の地床炉を有している。

以上のことからⅠ・Ⅱ期の五領期の住居跡は，出土遺物から時期差は認められるが，形状・規模等については，差異がなく両者とも当時の一般的な住居跡と考えられる。



第110図　古墳時代住居跡（五領）長軸方向

古墳時代後期（鬼高期）

該期の住居跡は19軒で，調査区の中央部から西側にかけて検出されており，そのうち約68％にあたる13軒が同時期あるいは奈良・平安時代の住居跡と重複している。これらの住居跡を出土遺物から下記の３期に分けた。なお，II・III期は切り合いなどから更に細分されるものと思われるが，当遺跡では同一時期の範疇に入れることにした。

Ⅰ期　鬼高Ⅰ式に比定される住居跡（第10・22号住居跡）
II期　鬼高II式に比定される住居跡（第５・11－Ａ・18－Ｂ・25・29・34号住居跡）
III期　鬼高III式に比定される住居跡（第２・４・11－Ｂ・12・17・19・21・28－Ａ・28－Ｂ・33・39号住居跡）

住居跡分布（第119図）をみると，Ⅰ期の住居跡は，当遺跡の中央部から西側寄りに第22号住居跡，更に同住居跡から約26ｍ離れた西側部に第10号住居跡の合わせて２軒が検出されている。II期になると６軒の住居跡がほぼ２つのグループに分かれて検出され，Ⅰ期の第10号住居跡を挟むように３軒，同じくⅠ期の第22号住居跡の東側に３軒がそれぞれ検出されている。なお，前者のグループに属する第11－Ａ・29号住居跡の２軒は，重複していることから少なくとも２期に分かれることは確実である。III期になると，住居跡数は，更に増えて11軒となり，西側端部からほぼ遺跡全域にわたって検出されている。III期においても同期の住居跡同士の重複が第28－Ａ・28－Ｂ号住居跡と第12・21・33号住居跡の２か所においてみられ，II期同様に更に細分される。

以上のことから，東西に細長い当遺跡の調査区域からすると，集落の変遷については困難であるが，該期の集落は，時期が下がるほど隆盛となる傾向がみられる。

平面形状及び規模については，住居跡一覧表（表３）でも明らかのとおり，Ⅰ期の住居跡は，不整隅丸方形と方形を呈し，長軸は，5.0ｍ以上6.0ｍ未満の中に入る。II期の６軒については規模・形状不明の１軒を除いて，不整隅丸方形の第11－Ａ号住居跡を含めた第５・29・34号住居跡の合わせて４軒が方形を呈しており，長方形を呈するものは，わずかに１軒のみである。長軸(一辺）は，前記した不明の１軒を除くと，3.5ｍ未満１軒，4.5ｍ以上5.0ｍ未満，5.5ｍ以上6.5ｍ未満が各々２軒ずつである。III期は，11軒の住居跡中，第２・４号住居跡が長方形，第39号住居跡が方形か長方形か判明していないが，他の８軒は方形を呈している。長軸（一辺）は，3.5ｍ以上4.5ｍ未満が５軒，5.5ｍ以上6.0ｍ未満が４軒，6.5ｍ以上の大形住居跡は２軒である。特に，第21号住居跡は長軸が8.0ｍで，当遺跡では最大の住居跡である。主軸方向は，Ⅰ・II・III期の住居跡いずれも北あるいは北西を指している。これらのことから平面形状では，エリア外に延びいて方形か長方形か不明の２軒を除くと，74％の14軒が方形を呈している。規模については，Ⅰ期では同規模の中形の住居跡であるが，II期では，3.5ｍ未満の小形住居跡が１軒検出されている。III期になると，3.5ｍ以上4.5ｍ未満の比較的小形の住居跡が５軒と6.5ｍ以上の大形の住居跡が

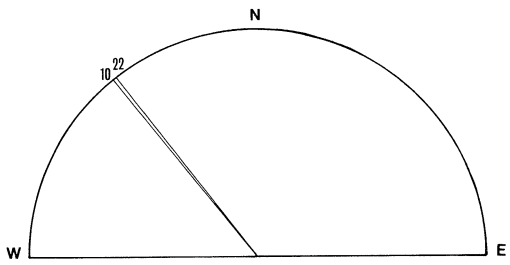
2軒検出され，同期の住居跡規模に大・小がみられるようになり，同等の規模を有する五領期の住居跡の様相とは異ってきている。

次に柱穴について観察してみると，Ⅰ期の第10号住居跡の主柱穴は，4か所検出されている。他の第22号住居跡も，本来は4か所の主柱穴を有するものと思われるが，本跡は，Ⅲ期の第21号住居跡との重複により北西側の1か所は消滅し，3か所しか検出されなかった。Ⅱ期の主柱穴は，第34号住居跡から4か所検出され，他の住居跡の主柱穴については，重複やエリア外に遺構が延びているため1～3か所しか検出できなかった。Ⅲ期の主柱穴は，第17・19・21・28－A・33号住居跡から4か所検出されており，他の住居跡からはⅡ期同様重複などのため1～3か所がそれぞれ検出されている。特に，Ⅱ期の第34号住居跡とⅢ期の第17・19号住居跡については，南側に配列されている2か所の主柱穴間に出入口施設に関すると思われるピットが1か所検出されている点で，3軒の住居跡のピットとも配列には共通性が認められる。

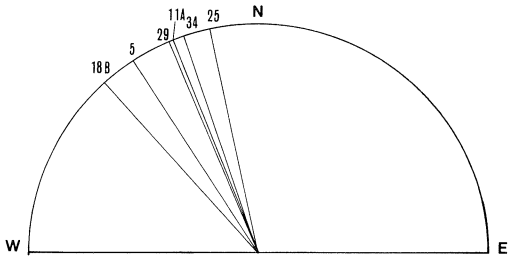
貯蔵穴は，Ⅰ期の住居跡2軒とⅢ期の第17号住居跡1軒からしか検出されなかった。

壁溝は，Ⅰ期の住居跡には検出されず，Ⅱ期の第5・25・34号住居跡と，Ⅲ期の第2・17・19・21・39号住居跡の8軒から検出されており，Ⅱ・Ⅲ期の約半数が壁溝を有している。

カマドは，11軒の住居跡が北壁や北西壁に付設されていたが，他の住居跡のカマドについては前記したように重複が激しく消失したり，遺構がエリア外に延びているため検出できなかった。なお，焼失家屋については，Ⅲ期の第17・19・28－A号住居跡の3軒が検出されている。

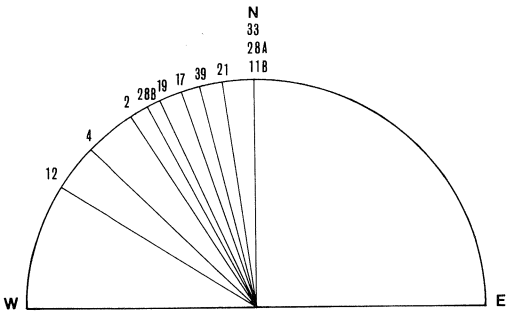


第111図　古墳時代住居跡(鬼高Ⅰ)主軸方向



第112図　古墳時代住居跡(鬼高Ⅱ)主軸方向

以上，鬼高期の竪穴住居跡について概述してきたが，平面形状は大半が方形を呈し，規模では長軸の最少が3.02m・最大が8.0m，平均5.12mで，後記する奈良・平安時代の住居跡よりは比較的大きいものがみられる。県内においても竜ヶ崎市外八代遺跡[(1)]，同屋代B遺跡[(2)]，千代田村中佐谷A遺跡[(3)]，石岡市餓鬼塚遺跡[(4)]，東海村小沢野遺跡[(5)]などで調査が行われ，鬼高期の住居跡が多数検出されている。外八代遺跡では長軸の最小3.68m・最大8.27m，平均5.7m。屋代B遺跡では長軸の最小3.9m・最大6.4m，平均5.6m。中佐屋A遺跡では長軸の最小4.85m・最大8.3m，平均5.9m。餓鬼塚遺跡では



第113図　古墳時代住居跡(鬼高Ⅲ)主軸方向

長軸の最小4.2m・最大8.8m，平均5.9m。小沢野遺跡では長軸の最小3.8m・最大8.3m，平均5.6mである。当遺跡の住居跡の規模で比べてみると，長軸の平均では，これらの遺跡の中では最も小さく，中佐谷A遺跡や餓鬼塚遺跡とは約0.8mの差が認められるが，その中でも小沢野遺跡とは比較的類似していることが窺える。

奈良時代

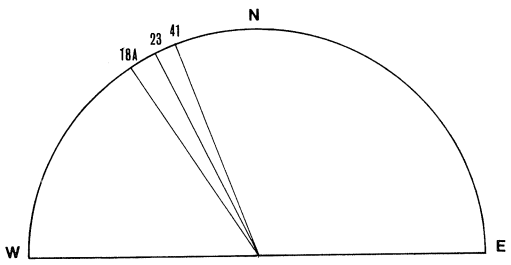
奈良時代に比定される住居跡は，調査区の中央部に2軒，やや東側寄りに1軒が検出されている。これら3軒の住居跡は，出土遺物などから2期に分けることができる。

Ⅰ期	8世期前半に比定される住居跡　（第18－A号住居跡）
Ⅱ期	8世紀後半に比定される住居跡　（第23・41号住居跡）

住居跡分布（第119図）をみると，Ⅰ期の住居跡は1軒で，当遺跡の中央部からやや東側に位置し，古墳時代の住居跡と重複して検出されている。Ⅱ期の住居跡は2軒で，当遺跡のほぼ中央部に位置し，Ⅰ期の住居跡の西側に存在している。第23号住居跡は単独で，第41号住居跡は古墳時代の住居跡と重複して検出されている。

平面形状及び規模についてみると，Ⅰ期の住居跡は，長軸4.35mの方形を呈し，主軸方向はN－34°－Wを指し，壁下には壁溝が周回している。Ⅱ期の住居跡は，前記した通り2軒で，長軸(一辺) 4.14・4.32mの方形と方形か長方形を呈しており，主軸方向はN－26°－W・N－21°－Wを指し，第23号住居跡が壁溝を有している。

主柱穴は，重複やエリア外に遺構がかかっているためにⅡ期の第41号住居跡からは2か所，他の住居跡からはいずれも3か所検出されている。



第114図　奈良時代住居跡主軸方向

カマドは，Ⅰ期の住居跡とⅡ期の第23号住居跡の北西壁のほぼ中央部に付設されており，Ⅱ期の第41号住居跡については検出されなかったが，北西側がエリア外にかかっていることと本期の住居跡形態から考えて同方向にカマドが付設されているものと思われる。

Ⅰ・Ⅱ期の住居跡は，ほぼ同じような平面形状及び規模などであり，主軸方向についても北西を指している。隣接する大儘遺跡や総和町北新田Ａ遺跡[6]などで検出された同時期の住居跡と比べてみてもそれほどの差はなく，全体的には鬼高期の住居跡と比べ小形化する傾向がみられる。

平安時代

竪穴住居跡は，調査区のほぼ中央部から東側に延びるように13軒検出されている。これらの住居跡は，出土遺物から８世紀末から10世紀初頭に比定され，下記のように５期に分けることが可能である。

Ⅰ期　８世紀末から９世紀初頭に比定される住居跡（第15号住居跡）
Ⅱ期　９世紀前半に比定される住居跡（第13号住居跡）
Ⅲ期　９世紀中頃に比定される住居跡（第16・26・36号住居跡）
Ⅳ期　９世紀後半に比定される住居跡（第14・24・27・35・40・43号住居跡）
Ⅴ期　10世紀初頭に比定される住居跡（第７・42号住居跡）

住居跡分布（第119図）をみると，Ⅰ期の住居跡は１軒だけで，平安時代に比定される住居跡の中では最も調査区の西側に存在し，中央部からやや西側に位置している。Ⅱ期の住居跡も１軒で，Ⅰ期の住居跡の東側にほぼ接するように位置している。Ⅲ期になると住居跡は３軒となり，Ⅱ期の住居跡より更に東側，調査区のほぼ中央部に弧形を描くように位置している。Ⅳ期の住居跡は６軒と多く，Ⅲ期の住居跡に囲まれるように４軒と，他の２軒については，これらの中の第43号住居跡から東側約40ｍと西側26ｍにそれぞれ位置している。Ⅴ期の住居跡は２軒と減り，平安時代の住居跡の中では最も東側に位置している。

該期の住居跡の平面形状及び規模等についてみるとⅠ期の第15号住居跡は，長軸5.75ｍの方形を呈し，主軸方向はＮ－60°－Ｗを指す中形の住居跡である。Ⅱ期の第13号住居跡は，長軸3.66ｍの隅丸方形を呈し，主軸方向はＮ－25°－Ｗを指す小形の住居跡である。Ⅲ期の住居跡は，第16・26・36号の３軒で，長軸（一辺）がそれぞれ2.75・3.44・4.04ｍで，第16号住居跡は，長方形を呈し，他は，方形を呈している。主軸方向はいずれもＮ－17°～18°－Ｗで，ほぼ同一方向を指し，Ⅱ期同様に小形の住居跡である。Ⅳ期の住居跡は，第14・24・27・35・40・43号の６軒と増加し，長軸（一辺）が3.24～4.04ｍの小形の住居跡が４軒，長軸がともに6.03ｍの大形の住居跡が２軒である。Ⅳ期のうち第14・24・27・40号住居跡の4軒が方形を呈し，他の2軒は長方形1軒と長方形と思われるもの１軒である。主軸方向はＮ－11°～21°－Ｗの範囲に５軒が入るが，第43号住居跡はＮ－66°－Ｅを指している。Ⅴ期の住居跡は２軒で，長軸（一辺）2.84・3.50ｍの長方形と方形を呈し，主軸方向がいずれもＮ－73°－Ｅを指している小形の住居跡である。

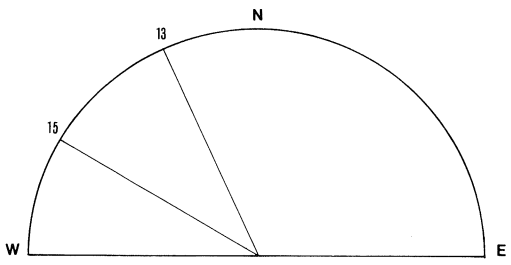
主柱穴は，Ⅲ期の第26号住居跡やⅣ期の第24号住居跡にみられるように基本的には４か所と思

われるが，重複や耕作による撹乱及び遺構の一部がエリア外に延びているため，１～２か所しか検出できなかったものが多い。なお，II期の小形の第13号住居跡はピットが１か所も検出されず，他の住居跡とは異っている。

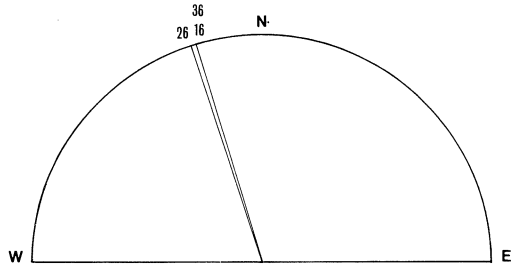
貯蔵穴については，検出された住居跡は少なく，II期の第13号住居跡とIV期の第35号住居跡の２軒のみであり，いずれも円形を呈している。

壁溝は，約70%の９軒の住居跡から検出されており，Ⅰ・II・IV期は全ての住居跡から検出されている。III期は，第26号住居跡１軒から検出されているが，V期の住居跡からは検出されなかった。

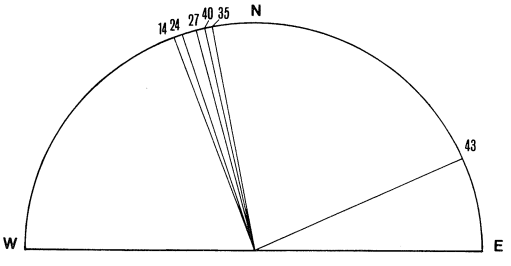
カマドは，第16・35号住居跡の２軒からは，遺構の北側がエリア外に延びているため検出できなかったが，他の11軒からは検出された。Ⅰ期からIV期の第43号住居跡を除いた９軒のカマドは，いずれも北・北西壁に付設されていたが，前記したIV期の１軒とV期の２軒の住居跡のカマドについては，北東・東壁に付設されており，これまでの住居跡が全て北・北西壁に付設されていることを考え合せると大きく異なり，更に周辺地域の調査によっては本期の集落構成を考える一つの手がかりになるものと考えられる。



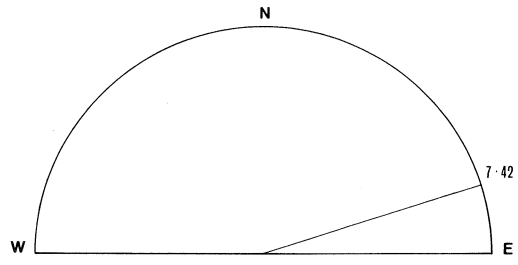
第115図　平安時代住居跡（Ⅰ・II）主軸方向



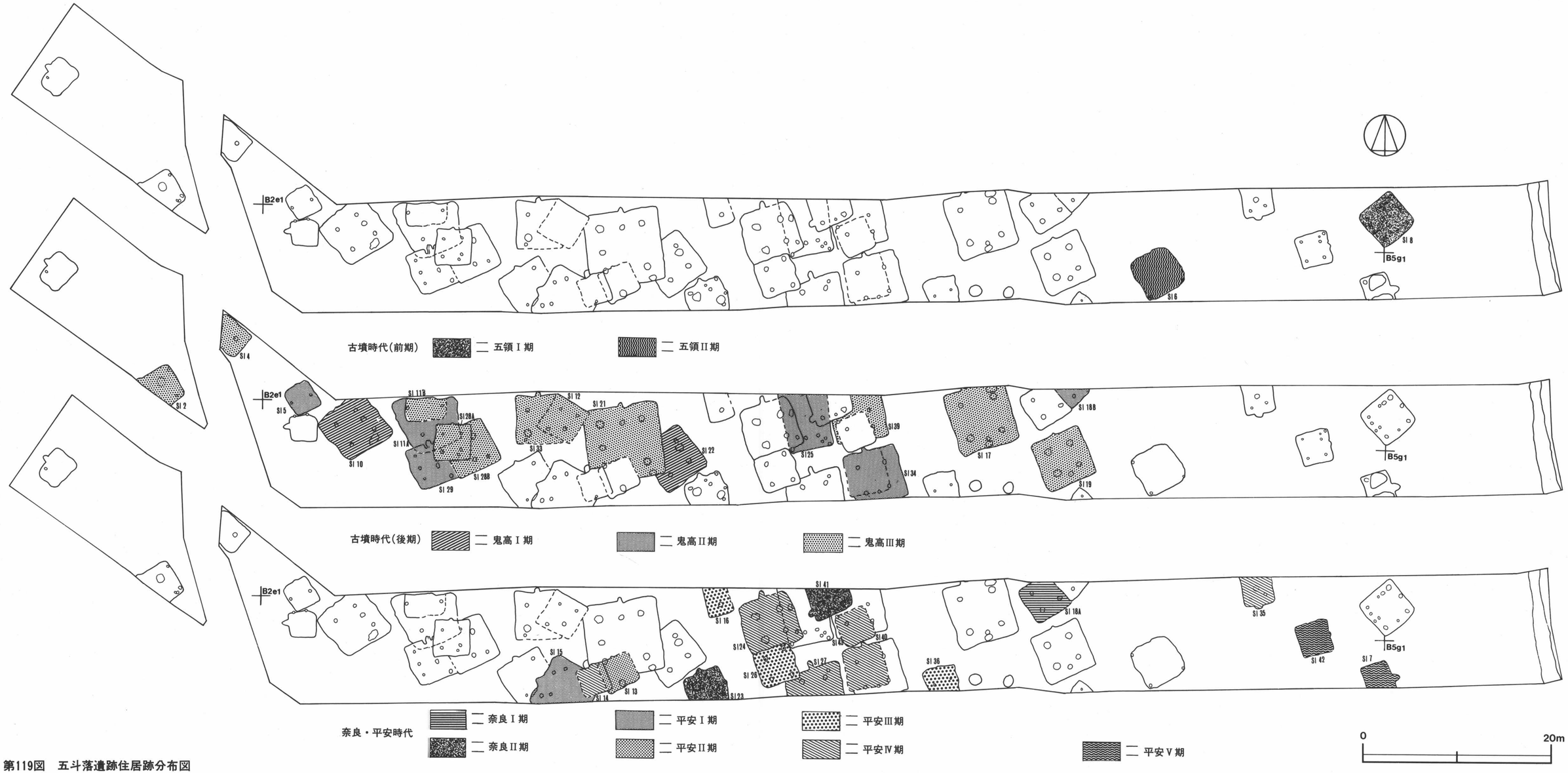
第116図　平安時代住居跡（III）主軸方向



第117図　平安時代住居跡（IV）主軸方向



第118図　平安時代住居跡（V）主軸方向



第119図　五斗落遺跡住居跡分布図

以上のことから，平安時代における各期の住居跡の位置関係は，時代が新しくなるに従い調査区の西側から東側に次第に移動している傾向が窺える。平面形状及び規模についてみると，平面形状は，大半の9軒が方形を呈し，主軸方向は，Ⅳ期の1軒とⅤ期の2軒が北東を指しているのを除くと，他は全ての住居跡が北西を指している。規模については，前記したようにⅣ期の大形に近い2軒とⅠ期の中形の1軒の他は，大半が3～4m前後の小形の住居跡である。これら小形の住居跡は，今回調査した隣接する大儀遺跡，弁ノ内遺跡の他に県内においては，水戸市松原遺跡[7]，東海村石神外宿A遺跡[8]，豊里町大境遺跡[9]，総和町北新田A遺跡[10]，大洗町長峯遺跡[11]，笠間市石井台遺跡[12]などで検出されているが，これらと比べてみると，当遺跡のものもほぼ同じような傾向の規模を有する住居跡と思われる。

なお，本項において当遺跡から検出された住居跡の中で，時代不明の4軒を除いた住居跡の形状・規模等と，それらの集落の変遷についてたどってみたが，調査区域が幅約12m，長さ170mという東西に細長い，いわゆる線上の調査のために集落を面としてとらえることができなかった。

表3　古墳時代前・後期住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向(長軸方向)	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
SI－8	B5f1	N－39°－W	隅丸方形	4.6×4.6	13～24	多少凹凸	11	炉	自然	土師器片113，須恵器片11 弥生式土器片6	五領Ⅰ	
6	B4g4	N－59°－E	隅丸方形	4.75×4.72	17～34	多少凹凸	3	炉	自然	土師器片107 須恵器片11	五領Ⅱ	焼失家屋
32	B2g9	－	－	－	－	－	－	炉	不明	土師器片23	五領	SI-13·14·15·21
10	B2f3	N－39°－W	不整隅丸方形	5.98×5.84	10～38	多少凹凸	6	カマド	自然	土師器片384，石2 須恵器片4，土製品5	鬼高Ⅰ	貯蔵穴
22	B3g2	N－38°－W	方形	5.47×5.47	25～31	平坦	3	カマド	自然	土師器片462，須恵器片29 縄文式土器片15，弥生式土器片10 土製品1	鬼高Ⅰ	貯蔵穴SI－21
5	B2e2	N－33°－W	方形	3.02×3.02	12～27	平坦	2	カマド	自然	土師器片4，石1 須恵器片3	鬼高Ⅱ	溝
11A	B2f5	(N－22°－W)	(不整隅丸方形)	6.12	東34～50 西10～22	多少凹凸	3	－	自然	SI－11Bと合わせて，土師器片593，須恵器片21，石1	鬼高Ⅱ	SI－11B·28－A·28－B·29
18B	B4e2	－	方形又は長方形	－	南東50～54 南西10～13	平坦	1	－	不明	土師器片24 須恵器片2	鬼高Ⅱ	溝，焼失家屋 SI－18－A
25	B3f5	(N－12°－W)	(長方形)	4.75	45～48	平坦	9	－	自然	土師器片710，土製品2 須恵器片148	鬼高Ⅱ	溝 SI－24·39
29	B2a5	N－23°－W	(方形)	4.53	23～27	凹凸	5	カマド	自然	土師器片153 弥生式土器片2	鬼高Ⅱ	SI－11－A，·28－A·28－B
34	B3a7	N－19°－W	方形	5.74×5.74	北東37～71 北西54～72	平坦	5	カマド	自然	土師器片422，須恵器片31 縄文式土器片5	鬼高Ⅱ	溝，SI－40
2	B1e8	N－33°－W	(長方形)	3.75	8～13	多少凹凸	5	カマド	自然	土師器片105 須恵器片2	鬼高Ⅲ	溝
4	B1d0	(N－46°－W)	(長方形)	4.01×3.16	12～42	平坦	1	－	自然	土師器片157 縄文式土器片2	鬼高Ⅲ	
11B	B2f5	(N－0°)	(方形)	(4.21)	6～15	平坦	2	－	自然	SI－11Aと合わせて土師器片593，須恵器片21，石1	鬼高Ⅲ	SI－11A
12	B2f9	(N－58°－W)	(方形)	(4.34)×(4.34)	46～54	凹凸	4	－	撹乱	SI－33と合わせて土師器片858，須恵器片50，土製品2	鬼高Ⅲ	SI－33
17	B3f0	N－18°－W	方形	6.82×6.62	53～65	平坦	5	カマド	自然	土師器片969 須恵器片12	鬼高Ⅲ	溝，貯蔵穴，焼失家屋
19	B4g2	N－24°－W	方形	5.5×5.45	52～66	平坦	5	カマド	自然	土師器片463，須恵器片14 縄文式土器片45	鬼高Ⅲ	溝，焼失家屋
21	B2g0	N－8°－W	方形	8.0×7.86	北57～61 南28～41	平坦	9	カマド	自然	土師器片1，574，須恵器片56 縄文式土器片13	鬼高Ⅲ	溝，SI－13·14·15·22·32
28A	B2g6	N－0°	方形	3.96×3.86	北25(前後) その他5～15	平坦	5	カマド	自然	土師器片364，須恵器片10 縄文式土器片1，弥生式土器片5 土製品1，	鬼高Ⅲ	SI－11－A·28－B·29，焼失家屋
28B	B2g6	N－28°－W	方形	5.16×5.05	25～40	多少凹凸	3	－	自然	土師器片24	鬼高Ⅲ	SI－11－A·28－A₁·29
33	B2f8	N－0°	(方形)	5.09×(4.92)	北36 西21～36	凹凸	5	カマド	撹乱	SI－12と合わせて土師器片858，須恵器片50，土製品2	鬼高Ⅲ	SI－12
39	B3f6	(N－14°－W)	方形又は長方形	5.71	42～47	平坦	4	－	自然	土師器片422，須恵器片31 縄文式土器片5	鬼高Ⅲ	溝，SI－41·43

表4　奈良時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
SI-18A	B4e1	N－34°－W	(方形)	4.35×4.25	29～46	平坦	3	カマド	自然	土師器片466，須恵器片11 縄文式土器片15，土製品4	奈良Ⅰ	溝，SI－18－B
23	B3h2	N－26°－W	方形	4.32×3.74	34～40	平坦	6	カマド	自然	土師器片303 須恵器片60	奈良Ⅱ	溝
41	B3f6	(N－21°－W)	方形又は長方形	4.14	北東・南東25～27，南西12	平坦	3	－	自然	土師器片565，須恵器片58 縄文式土器片1	奈良Ⅱ	SI－25・39

表5　平安時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
SI－15	B2h9	N－60°－W	(方形)	5.75	50	凹凸	5	カマド	撹乱	土師器片186 須恵器片45	平安Ⅰ	溝，SI－14・20・30
13	B2h0	N－25°－W	(隅丸方形)	3.66×(3.54)	35～32	平坦	－	カマド	自然	土師器片565 須恵器片44	平安Ⅱ	溝，貯蔵穴 SI－21・14
16	B3f3	(N－17°－W)	(長方形)	2.75	22～30	平坦	1	－	自然	土師器片160 須恵器片25	平安Ⅲ	
26	B3g4	N－18°－W	方形	4.04×3.92	36～56	平坦	4	カマド	自然	土師器片614，土製品2 須恵器片216，縄文式土器片5 弥生式土器片2	平安Ⅲ	溝，SI－24・27
36	B3h9	N－17°－W	(方形)	3.44	22～56	平坦	2	カマド	自然	土師器片143，須恵器片30 縄文式土器片1	平安Ⅲ	
14	B2h9	N－21°－W	(方形)	(3.24)×3.15	7	平坦	4	カマド	自然	土師器片84 須恵器片24	平安Ⅳ	溝，SI－15，13・21・32
24	B3f4	N－19°－W	方形	6.03×5.87	北東・南東5～14 北西・南西25～65	多少凹凸	4	カマド	自然	土師器片1,104，鉄鏃1 須恵器片265，土製品4 縄文式土器片3	平安Ⅳ	溝，SI－25・26
35	B4e7	N－11°－W	長方形	3.27	17～22	平坦	3	－	自然	土師器片98 土玉1	平安Ⅳ	溝，貯蔵穴
27	B3h5	N－15°－W	(方形)	6.03	35～43	多少凹凸	3	カマド	自然	土師器片524 須恵器片217	平安Ⅳ	溝，SI－26
40	B3g7	N－13°－W	(方形)	(4.07)	16～18	平坦	－	カマド	不明	土師器片57，石1 須恵器片3	平安Ⅳ	溝，SI－34
43	B3f6	N－66°－E	方形又は長方形	3.57	14～18	－	－	カマド	不明	土師器片61，須恵器片1 縄文式土器片1，石1 灰釉陶器1	平安Ⅳ	溝，SI－39
7	B4g0	N－73°－E	(長方形)	2.84	6～9	多少凹凸	1	カマド	自然	土師器片25 須恵器片7	平安Ⅴ	SK－3・4
42	B4g0	N－73°－E	方形	3.50×3.46	12～22	平坦	6	カマド	自然	土師器片107，須恵器片28 縄文式土器片2，石2	平安Ⅴ	

表6　時期不明住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
SI－1	B1b5	N－48°－W	隅丸長方形	3.56× 3.0	5～11	平坦	1	カマド	自然	土師器片22	鬼高以降	
3	B2f2	N－93°－W	不整長方形	3.10×2.85	3～5	平坦	2	カマド	自然	土師器片10 土製品1	鬼高以降	
30	B2h8	N－32°－W	(方形)	5.22	19～23	多少凹凸	3	カマド	自然	土師器片144，陶器片1 須恵器片43，土製品1	鬼高以降	SI－15
20	B4h2	－	方形又は長方形	－	7～15	平坦	1	－	自然	土師器片5 須恵器片2	不明	

(2)　土器について

五斗落遺跡から出土した土器は，大半が土師器で，そのほか須恵器及び少量の縄文式土器と弥生式土器である。土師器は，古墳時代の前期・後期から奈良・平安時代にかけてのもので，各住居跡から多量に出土している。遺構に伴う須恵器は，古墳時代後期の鬼高期以降の住居跡から出土している。ここでは，当遺跡から出土した土師器や須恵器について型式や整形技法及び住居跡の重複関係などを考慮して大きく4群に分け，その概略を述べることにする。なお，各群の個々

の土器については，各遺構ごとに掲載した実測図及び出土土器観察表を参照されたい。

第1群土器

第1群土器は，古墳時代前期の五領式に比定される土器群である。出土量は少ないが，器種は，甕形土器，壺形土器，器台形土器，高台付坏形土器，鉢形土器などがある。甕形土器をみると，五領式の特徴である口縁部が「く」の字状に開くものや胴部が扁平な球形を呈するものがみられる。整形技法としては，甕形土器には「ハケ目」整形が施されているものがほとんどである。これらの土器を器形や整形技法などで2類に分けて概略を説明することにする。

第1類〔五領Ⅰ式に比定される土器群〕

本類は，第8号住居跡出土土器をもとに構成される。

甕形土器（第27図1）は，胴部が扁平な球形を呈し，口縁部は外反しながら立ち上がるものと，第27図2のように胴部がほぼ球形を呈し，口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外傾して立ち上がるものなどがみられる。いずれも口縁部内・外面，胴部外面にハケ目整形が施されている。その他に器台形土器があげられ，裾部が「ハ」の字状に開くもの（第27図7・9）と裾部が大きく開くもの（第27図8）があり，いずれも脚部のみで，外面にはわずかに縦位のヘラ磨きが施されている。また，弥生式土器の特徴を残す壺形土器で，第27図4－A・Bは，胴部がソロバン玉状を呈し，複合口縁で，口縁部に羽条縄文が施され，胴部上位には結節回転文が数条施されている。更に胴部は，ハケ目整形後に縦位の丁寧なヘラ磨きが施されており，当遺跡では注目される土器の1つである。

第2類〔五領Ⅱ式に比定される土器群〕

本類は，第6号住居跡出土土器をもって構成される。

甕形土器（第23図1）は，胴部が扁平な球形を呈し，口縁部が「く」の字状に開く。口縁部内・外面横ナデ，胴部外面にはハケ目整形が施されている。また，第23図の2の甕形土器は，胴部がほぼ球形を呈し，口縁部が外反して立ち上がるが，胴部外面にはヘラナデが施されていてハケ目整形がみられない。高坏形土器（第23図6）は，坏部のみで，体部が外傾して立ち上がり，口縁部がやや上方に向けて開いており，器形としては珍しい土器の1つと思われる。器台形土器（第23図8）は，第8号住居跡のものと比べると脚部が直線的に開く傾向を示している。

第2群土器

第2群土器は，古墳時代後期の鬼高式に比定される土器群で，出土土器も多くなり，本群の時期に属する須恵器もわずかながら伴出している。器種は，土師器の甕形土器，壺形土器，甑形土器，坏形土器，高坏形土器，須恵器の甕，壺，甑，坏，高台付坏，提瓶などである。土師器をみ

ると，須恵器の坏を模倣した坏形土器や胴部が長胴を呈する甕形土器が出土している。これらの土器を器形や整形技法及び住居跡の重複関係などを考慮して３類にわけて概略を説明することにする。

第１類〔鬼高Ｉ式に比定される土器群〕

本類は，第10・22号住居跡のわずか２軒からの出土土器によったが，中でも前者からは完形に近い坏形土器の出土が多く，良好な資料である。器種は少なく，土師器の坏形土器を中心に甕形土器が少量出土している。

土師器の甕形土器は，口縁部が第61図１のように外反して立ち上がるものと，第61図２のようにわずかに折り返しが残るものがみられ，胴部外面はナデが施されている。坏形土器は，第30図９・８のようにいわゆる須恵器の模倣坏が主で，口縁部と体部外面の境に明瞭な稜を有し，口縁部そのものの幅も後記する第２類よりも大きく，全体的にシャープである。また，第30図14のように口縁部と体部外面の境に稜がほとんどみられず，口縁部がわずかに短く内傾するものが１点だけ出土している。整形技法としては，第30図８・13のように体部外面はヘラ削り，内面にはヘラ磨き，口縁部内・外面にもヘラ磨きが施されているものが多く，本類の特徴の１つである。

第２類〔鬼高II式に比定される土器群〕

本類は，第５・11－Ａ・18－Ｂ・25・29・34号住居跡出土土器によった。出土土器も少なく，器種は，土師器の甕形土器・坏形土器のほかに高坏形土器がある。

大形の甕形土器は，長胴を呈し，口縁部が外反して立ち上がるものが多い。胴下半部には，第18図１のように斜位のヘラ磨きが施されており，また，口縁端部がわずかに上方へつまみ出されている。高坏形土器（第88図８）は，脚部がラッパ状に開き，体部は内彎しながら大きく開き，口縁部と体部外面の境に明瞭な稜を有している。口縁部内・外面及び体部内面には横ナデ，体部外面にヘラ削りが施されている。坏形土器は，口縁部と体部外面の境に稜を有しているが，第70図３のように口縁部の幅が前記した第１類より若干狭くなる傾向があり，更に口縁部が第88図６・７のように外傾気味に立ち上がるものがみられる。整形技法としては，体部外面ヘラ削り，内面ナデ，口縁部内・外面横ナデである。

第３類〔鬼高III式に比定される土器群〕

本類は，第２・４・11－Ｂ・12・17・19・21・28－Ａ・28－Ｂ・33・39号住居跡出土土器によった。第２群土器を出土する住居跡の中では，最も数が多く，出土土器も他類よりは多い。器種は，土師器の甕形土器，甑形土器，坏形土器などがあり，第17号住居跡からは須恵器のほぼ器形の窺える提瓶１点が出土している。

土師器の大形の甕形土器（第53図３・第79図１）は，長胴を呈し，口縁部は「コ」の字状を呈

するか，外反して立ち上がり，口縁端部が上方へつまみ出されている。胴下半部には，第２類同様に縦位のヘラ磨きが施され，小形の甕形土器（第53図１）や甑形土器（第78図２）にも同様の手法が施されている。ところで，鬼高期の甕形土器で縦位のヘラ磨きが認められる類例を県内に求めてみると，竜ヶ崎市外八代遺跡[13]，同屋代Ａ遺跡[14]，同屋代Ｂ遺跡[15]，谷田部町ツバタ遺跡[16]，千代田村中佐谷Ａ遺跡[17]，石岡市餓鬼塚遺跡[18]など，県南部を中心とした遺跡の出土土器にみやれる。従って，これらに共通する縦位のヘラ磨きを施すという整形技法は，当遺跡の例にもあてはまり，１つの共通した整形手法を示すものと考えられる。坏形土器（第95図６）は口縁部と体部外面の境に稜を有し，口縁部はほぼ直立するが，口縁部に第１類でみられたようなシャープさが失われてきている。更に第53図７・第79図３のように口縁部と体部外面の境の稜が消失し，口縁部が体部から短く直立するものが多くなる。整形技法については第２類と差はみられず，体部外面はヘラ削り，内面は横ナデ，口縁部内・外面には横ナデが施されている。また，第47図１のように体部内面に一種の黒色処理が施されているものも特徴の１つである。須恵器の提瓶（第47図８）は，体部前面が丸い膨らみをもち，体部背面は平らである。口縁部は外反気味に立ち上がる。整形技法は，口縁部外面に櫛描波状文が施され，体部外面にはカキ目調整がみられる。

第３群土器

第３群土器は，奈良時代の所産と考えられる土器群で，当遺跡から検出された該期の住居跡は３軒であり出土土器も少ない。器種は，土師器の甕形土器，坏形土器，須恵器の坏，高台付坏，蓋である。これらの土器を器形や整形技法などをもとに２類に分類して概略を述べることにする。

第１類〔奈良時代前半に比定される土器群〕

本類は，第18－Ａ号住居跡出土土器と一部第24・25号住居跡出土土器によって構成される。

土師器の坏形土器（第49図２・３）は，鬼高期の特徴を残しているもので，口縁部と体部外面の境の稜は不明瞭である。整形技法については，口縁部内・外面は横ナデ，体部外面はヘラ削り，内面は横ナデが施されている。須恵器の坏（第49図４）は，破片で体部下半に丸味を持ち，切り離し手法は不明である。第67図14は，体部が内彎しながら大きく開き，第75図５は体部が外傾しながら立ち上がり，底部はいずれも回転ヘラ切りのままである。須恵器の蓋（第49図５）は破片で，天井部は外下方へなだらかにのび，口縁部は外反気味に開いている。

第２類〔奈良時代後半に比定される土器群〕

本類は，第23・41号住居跡出土土器によって構成される。

土師器の甕形土器（第100図４）は，口縁部が水平に開き，第100図３は，口縁部が短く水平に開いている。胴部は長胴形を呈し，胴上位に最大径を有し，胴下半部は，第２群土器の第３類土器同様に縦位のヘラ磨きが施されている。坏形土器（第63図２）は，口径12.4cmの小形の丸底で，

鬼高期の手法がまだ残っており，第１類同様に口縁部と体部外面の境の稜はなくなり，口縁部は体部からそのまま立ち上がっている。須恵器の坏(第100図５）は，体部がほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，口径は推定で15cm，底径は9.2cmで底部は回転ヘラ削りである。他の第63図３・第100図６も同様の調整方法が認められる。

第４群土器

第４群土器は，平安時代の８世紀末から10世紀初頭に属すると考えられる土器群で，須恵器の伴出は，第２・３群土器よりも多くなる。器種は，土師器の甕形土器，坏形土器，高台付坏形土器，須恵器の甕，坏，高台付坏，蓋，盤などである。これらの土器を器形や整形技法をもとに５類に分けて概略を説明することにする。

第１類〔８世紀末～９世紀初頭に比定される土器群〕

本類は，第15号住居跡出土土器によったが，遺構そのものが他時期の遺構との重複や耕作による撹乱を受けているため良好な資料が乏しい。須恵器の甕，坏，盤の他に土師器のミニチュア土器などがある。

須恵器の坏（第42図２）は破片で，体部は外傾して外上方へ立ち上がり，底部は手持ちのヘラ削り，体部下端にも手持ちのヘラ削りがなされている。盤（第42図４）は，体部が直線的に外上方へ立ち上がり，口縁部は外傾している。底部は回転ヘラ削りの後に高台が貼り付けられている。土師器のミニチュア土器（第42図３）は，平底の底部で，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。胴部内・外面にヘラナデが施されている。

第２類〔９世紀前半に比定される土器群〕

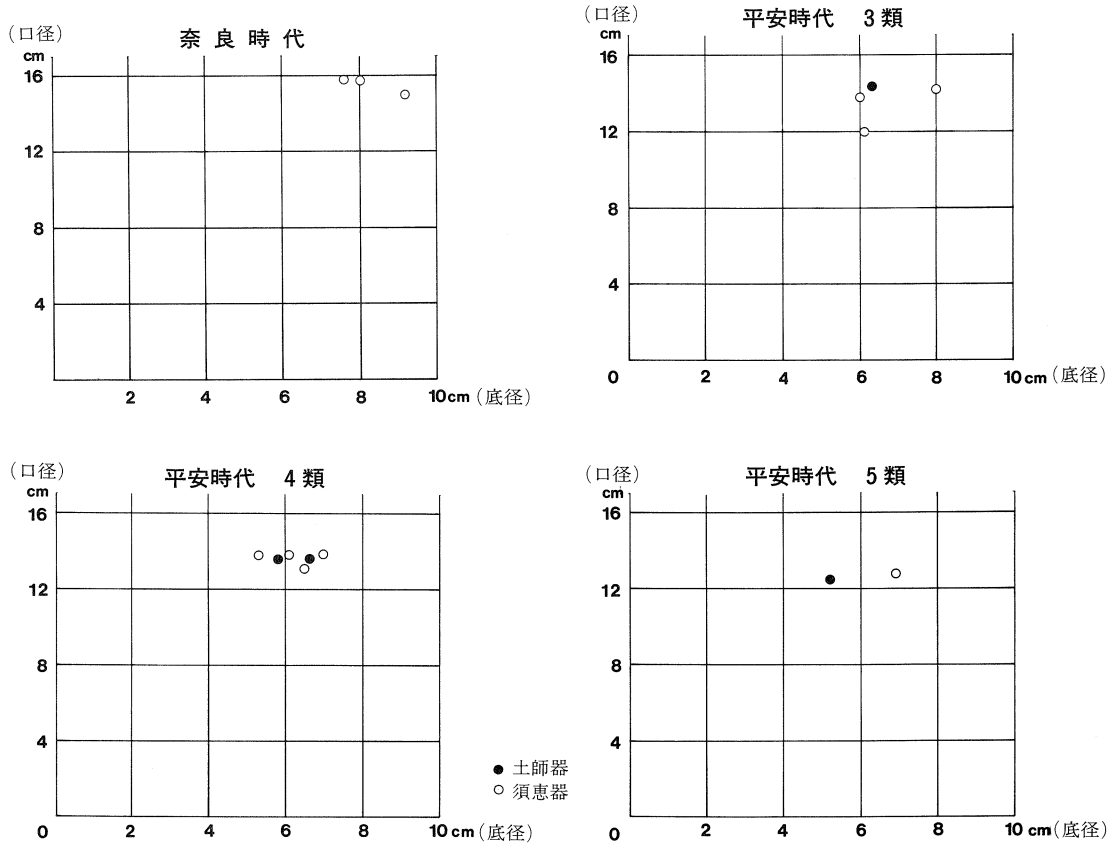
本類は，第13号住居跡出土土器によったが，図示できる良好な資料が少なく明確にはできないが，ほぼこの時期と思われる。

土師器の甕形土器（第37図２）は，平底の底部片であり，須恵器の甕（第37図１）は口縁部片で，口縁部は内彎気味に立ち上がり，胴部外面には平行叩きがなされている。

第３類〔９世紀中頃に比定される土器群〕

本類は，第16・26・36号住居跡出土土器によった。全体的に出土土器は破片が多く，図示できる資料が少ない。器種は，土師器では，甕形土器，坏形土器があり，須恵器では甑，坏，高台付坏，蓋などがある。他に灰釉陶器の高台付坏が若干みられる。

土師器の甕形土器（第72図１）は，長胴を呈し，胴部上位に最大径を有し，口縁部は外反して立ち上がり，口縁端部が上方につまみ出されている。整形技法としては，胴部下位に縦位のヘラ磨きがみられる。坏形土器（第44図１）は，体部は内彎しながら大きく開き，口縁部が外反する。底部は回転ヘラ切りがなされ，口径（14.4）cm・器高3.9cm・底径6.3cmである。須恵器の坏（第



第120図　土師器・須恵器の法量分布図

表7　土師器・須恵器の法量分布一覧表

奈　良　時　代

土師器の坏形土器須恵器の坏	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	底径/口径 (%)
○第63図3	—	(2.5)	9.6	—
○第100図6	—	(2.5)	8.4	—
○第100図5	(15.0)	3.9	9.2	61.3
○第67図14	13.8	4.1	7.6	55.0
○第75図5	13.8	4.3	(8.0)	57.9
平均値	14.2	4.1	8.6	58.2

平安時代第3類

土師器の坏形土器須恵器の坏	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	底径/口径 (%)
●第44図1	(14.4)	3.9	6.3	43.8
○第73図9	(12.0)	3.8	6.1	50.8
○第73図12	(14.2)	4.0	(8.0)	56.3
○第92図2	(13.8)	1.9	(6.0)	43.5
平均値	13.6	3.4	6.6	48.5

平安時代第4類

土師器の坏形土器須恵器の坏	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	底径/口径 (%)
●第67図11	(13.6)	4.0	(5.8)	42.6
●第67図12	(13.6)	4.2	6.6	48.5
○第76図10	(13.8)	3.9	5.3	38.4
○第40図4	(13.1)	4.6	6.5	49.6
○第40図5	13.9	4.4	6.9	49.6
○第40図6	13.8	4.2	6.1	44.2
平均値	13.6	4.2	6.2	45.5

平安時代第5類

土師器の坏形土器須恵器の坏	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	底径/口径 (%)
●第102図2	(12.5)	4.0	5.2	41.6
○第102図3	(12.8)	3.0	6.9	53.9
平均値	12.7	3.5	6.1	47.8

※但し，奈良時代の坏の平均値は，(第100図5)，(第67図14)，(第75図5)の3個に限った。
土師器……●，須恵器……○で表示した。

73図９・12）は，体部がほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，底部はいずれも手持ちヘラ削りが施され，それぞれ口径（12.0）・（14.2）cm・器高3.8・4.0cm・底径6.1・（8.0）cmである。更に第92図２は，口径（13.8）cm・器高1.9cm・底径（6.0）cmで，体部は内彎気味に大きく開き，底部は回転ヘラ削りされている。特に，体部に「中」とヘラ書きされており注目される土器の１つである。また，これらの土師器の坏形土器や須恵器の坏は，底径が口径の２分の１前後になり，資料は少ないが第３群土器に含まれる坏の底径が約５分の３であることから，本類の坏は口径に比して底径がやや狭くなる傾向が認められる（表７）。蓋（第72図６）は，天井部が口縁部に向かってなだらかに下降し，口縁部は外下方へ屈曲している。

第４類〔９世紀後半に比定される土器群〕

本類は，第14・24・27・35・40・43号住居跡出土土器によった。器種は，土師器の甕形土器，坏形土器，高台付坏形土器，須恵器の甕，壺，坏があり，他に灰釉陶器の坏などがあげられる。本類は，底径が口径の２分の１より小さくなる傾向を示す土師器の坏形土器や須恵器の坏に代表される（表７）。

土師器の甕形土器（第40図１－A・B）は，長胴を呈し，口縁端部が外上方へわずかにつまみ出され，胴部下位には縦位のヘラ磨きが施されている。坏形土器（第67図11・12）は，体部が内彎しながら大きく開いて立ち上がり，底部は，前者が手持ちヘラ削り，後者が回転ヘラ切りで，内面は黒色処理がされている。高台付坏形土器（第75図６）は，体部内面にヘラ磨きと黒色処理がみられるが，第68図29のように体部が水挽きのままのものもみられる。須恵器の甕は，胴部が内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁端部は外上方へつまみ出されている。胴部外面には斜位の平行叩きがなされている。坏（第40図５・６）は，体部がほぼ直線的にあるいは外反しながら立ち上がり，いずれも底部は切り離しの後手持ちヘラ削りが施され，体部下端にも手持ちヘラ削りが加えられている。また，第40図４のように底部が回転ヘラ切りのままで，調整が行われていないのもみられる。前記した土師器の坏形土器やこれらの須恵器の坏は，口径(13.1)～13.9cm・器高3.9cm～4.6cm・底径5.3cm～6.9cmで，口径に比して底径は，第３類の底径と比べるとやや小さくなる傾向がみられる。高台付坏（第40図８）は，土師器のものと作りも整形技法もほとんど変わらない。蓋（第40図７）は，天井部が弧状を呈し，扁平なつまみで上部が平坦である。

第５類〔10世紀初頭に比定される土器群〕

本類は，当遺跡における最も新しい時期に位置づけられ，第７・42号住居跡出土土器によった。図示できる資料はきわめて少なく，土師器の甕形土器，坏形土器，高台付坏形土器，須恵器の坏などである。

土師器の甕形土器は，口縁部が外傾して立ち上がり，口縁端部がわずかにつまみ出されている。高台付坏形土器（第24図１）は，高台が「ハ」の字状に開き，第２・３類の高台部と比べる

とやや高くなっている。坏形土器（第102図２）は，体部が内彎しながら立ち上がり，底部と体部下端は手持ちヘラ削りされている。口径（12.5）cm・器高4.0cm・底径5.2cmで，底径は，第４類よりやや小さくなっている。須恵器の坏（第102図３）は，体部が内彎しながら立ち上がる。底部は，回転ヘラ切りの後体部下端とともに手持ちヘラ削りされている。口径（12.8）cm・器高3.0cm・底径6.9cmで，器高が第３・４類と比べると低くなる傾向がみられる。また，本類の土師器の坏形土器や須恵器の坏の器肉は全体的に薄くなっているように思われる。

以上，五斗落遺跡の住居跡出土土器を古いものから順に４群に区分し，更に各群については第１群－２類，第２群－３類，第３群－２類，第４群－５類にそれぞれ細分して各類の土器の形態，技法の特徴などを記してきた。これらの土器の中には第１群第１類にみられる壺形土器が弥生式土器の手法を残すものとして，また，古墳時代後期の鬼高期になると甕形土器や甑形土器の外面の胴部下半に縦位のヘラ磨きがみられることは注目されることである。土師器の坏形土器や須恵器の坏は，底径が奈良時代では２分の１よりも若干大きく，平安時代になると２分の１前後から更に小さくなる傾向がみられる。整形技法ではこれら土師器の坏形土器や須恵器の底部が奈良時代には回転ヘラ削り調整が，平安時代には手持ちヘラ削り調整が一般的になるものと考えられる。更に出土土器は完形品及びそれに近い状態の出土は少なく，また，土師器と須恵器が伴出している。これらの破片の比率をみると，当遺跡全体としては土師器が90％，須恵器は10％であり，平安時代に限ってみると，土師器は80％，須恵器は20％となる。特にⅣ期の第27号住居跡の須恵器の出土割り合いが29％と当遺跡では最も高い出土率である。

最後に，これらの土器群の分類は他地域の編年資料などを参考にして，住居跡ごとに一括出土したものを検討したものである。個々の土器によっては若干時期が前後する場合も考えられるが，隣接する大儀遺跡などを含めた周辺地域の資料の増加とともに再分析されることを期待して今回のまとめを終えることにする。

参考文献

(1) 茨城県教育財団『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書２』　昭和55年

(2) 茨城県教育財団『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13』　昭和61年

(3) 茨城県教育財団『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』　昭和55年

(4) 茨城県道路公社『常陸国餓鬼塚遺跡調査報告』　1980

(5) 小沢野遺跡調査会『小沢野』（茨城県東海村須和間地区における古代集落の研究）昭和53年

(6) 茨城県教育財団『一般国道４号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書１（総和地区）』昭和61年

(7) 茨城県教育財団『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書III』 昭和56年
(8) 茨城県教育財団『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書７』 昭和58年
(9) 茨城県教育財団『研究学園都市計画手子生工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書』昭和61年
(10) (6)に同じ
(11) 大洗町教育委員会『茨城県大洗町長峯遺跡』 昭和48年
(12) 国士館大学文学部考古学研究室『石井台遺跡』 1973
(13) (1)に同じ
(14) 茨城県教育財団『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書６』 昭和57年
(15) (2)に同じ
(16) 茨城県教育財団『科学博関連道路谷田部明野線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』昭和58年
(17) (3)に同じ
(18) (4)に同じ

第２節　大儘遺跡

１　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県土浦市大字手野町字羽黒4625ほかに所在し，調査面積は1,559㎡である。現況は平坦な畑である。当遺跡の西方約70ｍに五斗落遺跡，東方約110ｍに弁ノ内遺跡が所在する。遺跡全体がトレンチャーにより地下約1.5ｍ位まで撹乱を受けていたが，古墳時代・奈良・平安時代に比定される竪穴住居跡21軒，土坑６基が検出された。遺物は，土師式土器や須恵器が主で，甕形土器，壺形土器，坏形土器，及び椀形土器が出土し，その他の遺物として，土玉，勾玉，鉄鏃，紡錘車が住居跡内より出土した。土坑内からは土師式土器片が出土した。当遺跡は，五斗落遺跡同様に遺跡の周囲には数多くの遺構，遺物が遺存しているものと思われる。

２　遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

第１号住居跡（第121図）

本跡は，調査区の西部 A1 j_5 区を中心に確認された住居跡で，重複している第３・４・７号住居跡の北側1.7ｍに位置し，本跡の北側２分の１は，第２号住居跡の南側と重複している。床面を精査した結果，第２号住居跡の上面に粘土，山砂等を使用して硬く踏み固められた本跡の貼り床が明瞭に検出された。したがって，本跡は，第２号住居跡よりも新しい遺構である。

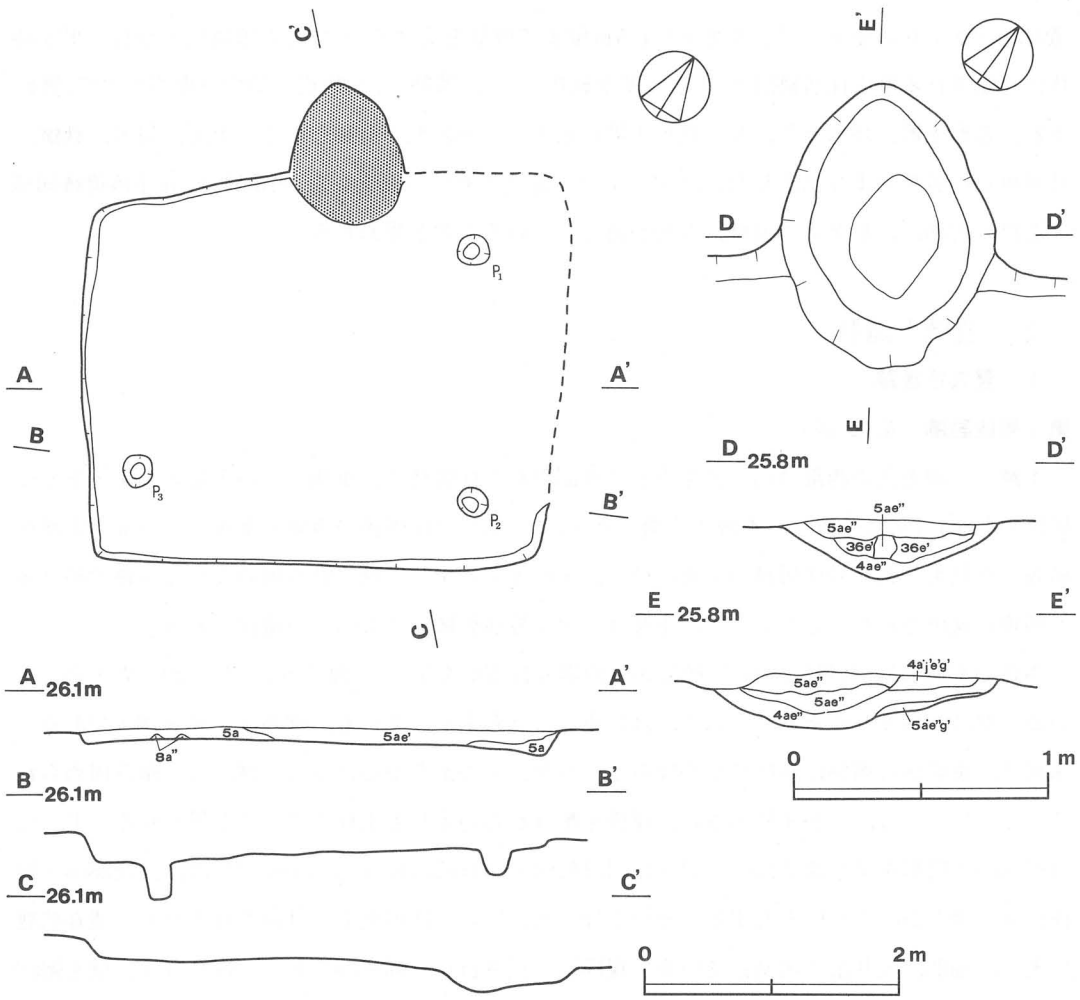
本跡の平面形は，長軸3.80ｍ・短軸3.10ｍの隅丸長方形を呈し，主軸方向は，Ｎ－29°－Ｗを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，８～18cmである。床面は，東側から西側にかけてやや傾斜しており，中央部を中心にほぼ全域が硬く踏み固められている。ピットは，３か所検出され，規模や配列からいずれも主柱穴であると思われる。P_1 は，直径26cmの円形を呈し深さ28cm，P_2 は，長径26cm・短径25cm，深さ32cm，P_3 は，長径28cm・短径25cm，深さ24cmの規模を有する。カマドは，北側壁のほぼ中央部に付設されており，遺存状態は悪く，袖部，天井部は消滅している。規模は，長さ111cm・幅85cmである。掘り方は，壁を幅80cmで，71cmほど外側に切り込んでいる。火床は，長径50cm・短径35cmの楕円形を呈し，床面を10cmほど掘り込んでいる。

覆土は，ローム粒子を主体に，焼土粒子・炭火粒子を微量含む褐色土が自然堆積の状態を呈している。

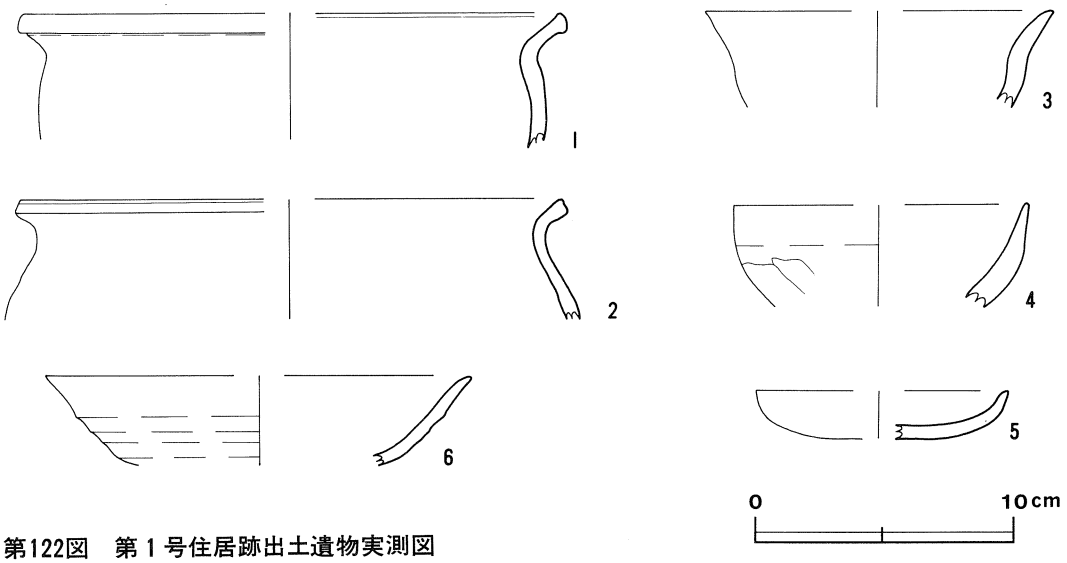
遺物は，土師式土器片80点，須恵器片16点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片16点が出土している。完形の遺物は無かった。第122図１は，南東コーナー部付近の壁際の床面から，正

位の状態で出土した土師式土器の甕口縁片である。第122図２は，北側壁中央部からやや東寄りの床面から，正位の状態で出土した土師式土器の甕口縁片である。第122図３は，床中央から約120cm南の床面から，正位の状態で出土した土師式土器の椀口縁片である。第122図４・５は，カマド内の覆土から出土した土師式土器の坏口縁片である。

本跡は，出土遺物から９世紀後半の平安時代前期に比定される遺構であると思われる。



第121図　第１号住居跡実測図



第122図　第１号住居跡出土遺物実測図

第１号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第122図 1	甕形土器 土師器	A（21.0） B（ 5.0）	口縁部は大きく外反して外上方に開き，端部に面をなす。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	5％ P１
2	甕形土器 土師器	A（11.2） B（ 4.7）	口縁部は大きく外反し外上方に開き，短い。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	5％ P２
3	塊形土器 土師器	A（11.6） B（ 3.8）	口縁部はやや外反気味に外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横位のヘラ磨き。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	5％ P３
4	坏形土器 土師器	A（11.4） B（ 4.0）	体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	10% P４
5	坏形土器 土師器	A（ 9.8） B（ 1.9）	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は外傾して立ち上がり，短い。	口縁部内・外面横ナデ。底部内面，体部内面ナデ。底部外面，体部外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	5％ P６
6	坏形土器 土師器	A（16.8） B（ 3.8）	体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部に至る。	水挽き痕あり。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	5％ P５

第２号住居跡（第123図）

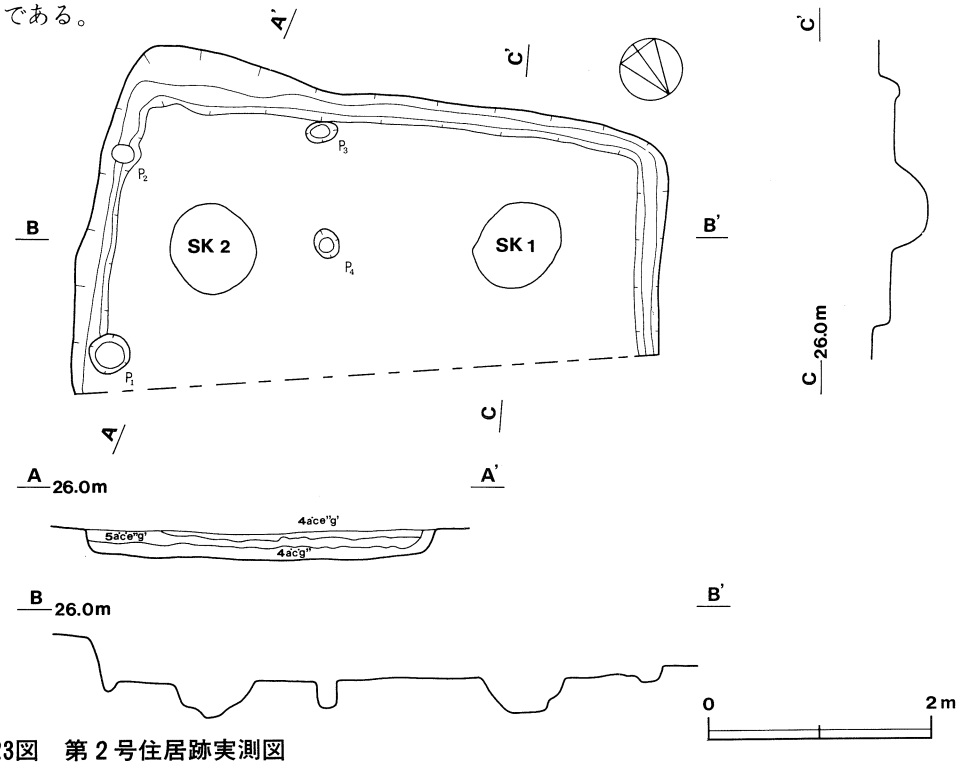
本跡は，調査区の西部A1j$_5$・A1j$_6$区を中心に確認された住居跡で，第８号住居跡の北西約14ｍに位置し，本跡の南側は第１号住居跡の北側と重複している。土層断面を検討した結果，本跡の上面に当る層から第１号住居跡の貼り床が明瞭に検出された。出土遺物からも本跡は，第１

号住居跡よりも古い遺構である。また，本跡は，北西側と南東側で，第１・２号土坑と重複している。

本跡は，北東側約２分の１が調査エリア外になっているため，平面形，規模等の詳細は不明である。平面形は，調査した部分から推定すると，一辺が5.20ｍ程の方形を呈し，主軸方向は，Ｎ－47°－Ｗを指しているものと思われる。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，10～40cmである。壁下には，幅10～25cm，深さ５～20cmの壁溝が検出され，現状から推定すると，全周していると思われる。床面は，全体的に平坦で，硬く踏み固められている。ピットは，４か所検出され，主柱穴は，規模や配列等からP_1・P_3と思われる。P_1は，直径38cmの円形を呈し，深さ26cm，P_3は，長径30cm・短径20cm，深さ19cmの規模を有している。カマドは，検出されないがエリア外の未調査部に付設されているものと思われる。

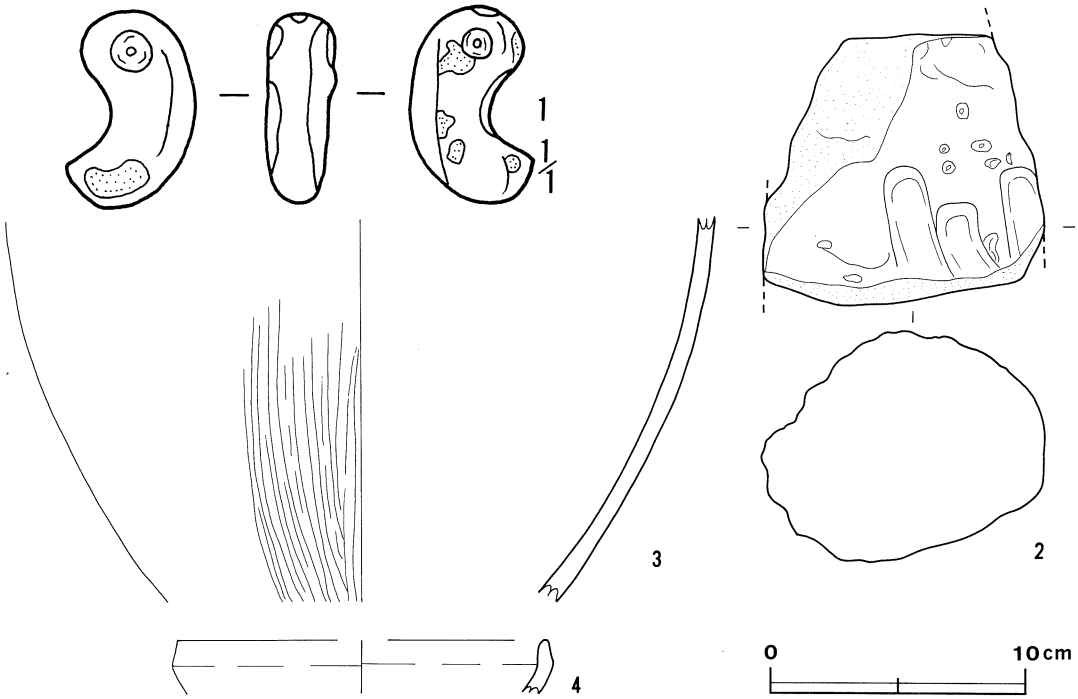
覆土は，ローム粒子を多量に含む褐色または暗褐色土が自然堆積の状態を呈している。

遺物は，土師式土器片51点，須恵器片16点，流れ込みと思われる縄文式土器片４点が出土している。完形の遺物は，本跡のほぼ中央部に位置する未調査区域との境の床面から第124図の１の勾玉が１点，横位の状態で出土した。第124図２は，勾玉とほぼ同じ位置の床面から横位の状態で出土した支脚の下半である。第124図３は，本跡の中央部から西部にかけて散在していた土師式土器の甕胴部片である。第124図4は，南西の壁寄りの覆土から正位の状態で出土した土師式土器の坏口縁部片である。



第123図　第２号住居跡実測図

本跡は，出土遺物から古墳時代後期の鬼高Ⅲ式期に比定される遺構であると思われる。



第124図　第２号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第124図 3	甕形土器 土師器	B (15.1)	胴部は内彎しながらゆるやかに立ち上がる。	胴部内面ナデ。外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・雲母・石英・長石・砂礫 褐灰色 普通	15% P７
4	坏形土器 土師器	A (14.6) B (2.1)	口縁部は短く，直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 普通	5% P133

第２号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第124図 2	支脚	DP16	(10.7)×(10.0)	—	(866.7)	50% 下位

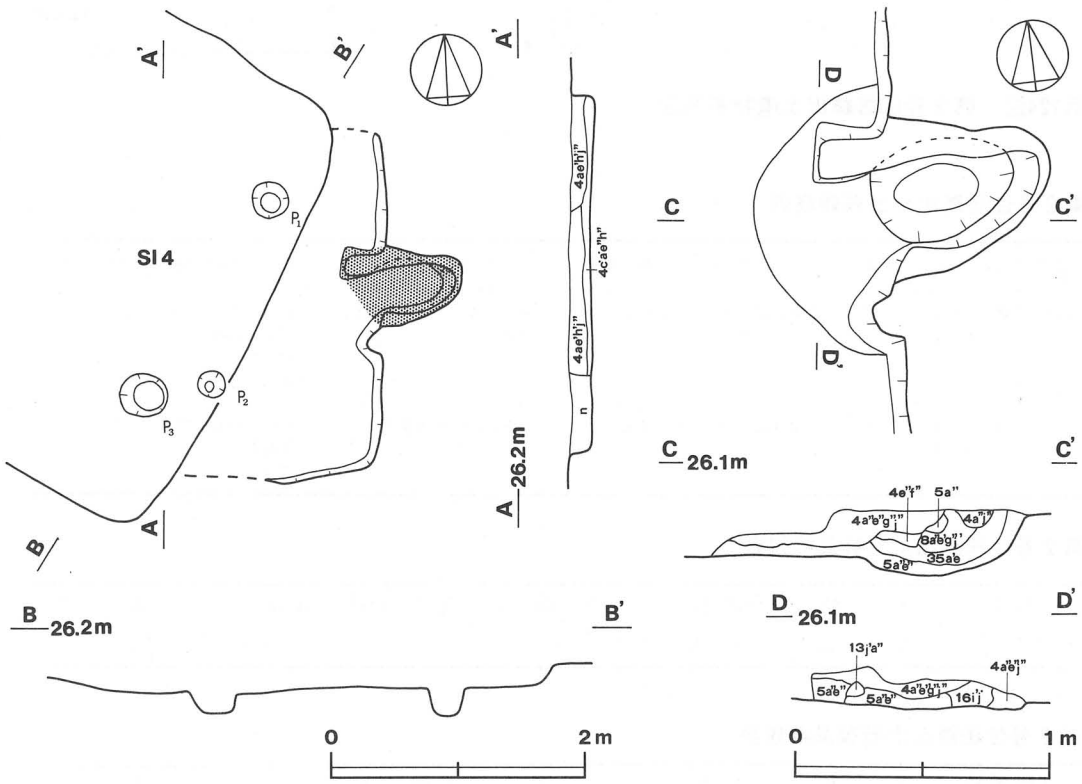
第２号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅×厚さ(cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第124図 1	勾玉	Q 1	2.6×1.1×0.8	—	4.1	メノウ

第３号住居跡（第125図）

本跡は，調査区の西部 B1b6 区を中心に確認された住居跡で，第１号住居跡の南側約４ｍ，第５号住居跡の北西側4.5ｍに位置し，本跡の西側は，第４号住居跡の東側と重複している。床面を精査した結果，第４号住居跡の東部上面に山砂混じりの本跡の貼り床が明瞭に検出された。したがって，本跡は，第４号住居跡よりも新しい遺構である。本跡の南側部は耕作のための撹乱を受けており，西側，北側の壁も不明確であるため，正確な平面形は検出できなかった。

平面形は，調査した部分から推定すると，一辺が2.70ｍの方形を呈し，主軸方向は，Ｎ－85°－Ｅを指す小形の住居跡と思われる。壁は，東側が明瞭に検出され，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，18cmである。床面は，ほぼ平坦で中央からカマドに向かって硬く踏み固められている。ピットは，３か所検出され，主柱穴は規模等から，Ｐ1 ・ Ｐ3と思われる。Ｐ1は，直径30cmの円形を呈し，深さ25cm，Ｐ3は，長径38cm・短径33cm・深さ17cmの規模を有している。カマドは，東壁の中央部に付設されている。東側の袖部は消滅しているが西側の袖部はほぼ遺存しており，壁から内側に30cmほど突き出している。カマドは，少量の礫を含



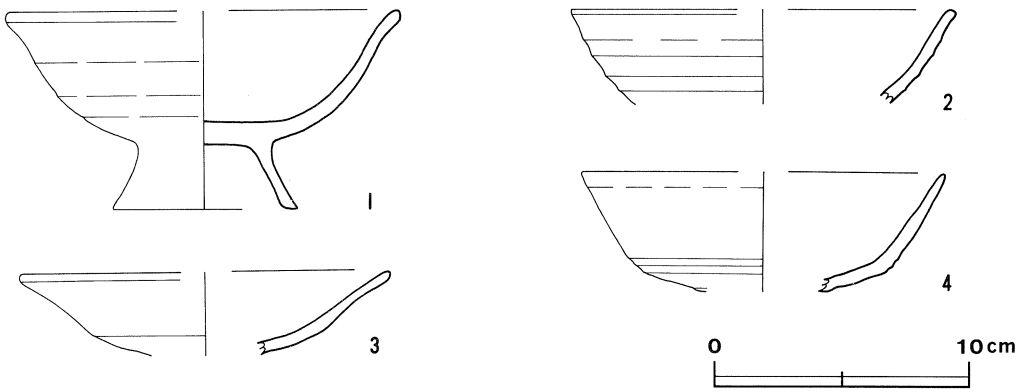
第125図　第３号住居跡実測図

む砂質粘土で構築されている。内側は熱を受けてレンガ状に焼けている。規模は，長さ95cm，幅70cm，焚口部幅55cmである。掘り方は壁を30cm幅で，65cmほど外側に掘り込んでいる。火床は，長径58cm・短径39cmの楕円形を呈し，床面を８cmほど掘り込んでいる。

覆土は，撹乱部を除きローム粒子を主体に焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，土師式土器片19点，須恵器片２点が出土している。第126図１は，カマド内より出土した土師式土器片９点を接合した高台付埦で，完存率は約40％である。第126図２・３は，カマド内より出土した土師式土器の坏口縁部である。第126図４は，カマド内から出土した土師式土器の高台付坏片である。

本跡は，出土遺物から10世紀初頭の平安時代中期に比定される遺構であると思われる。



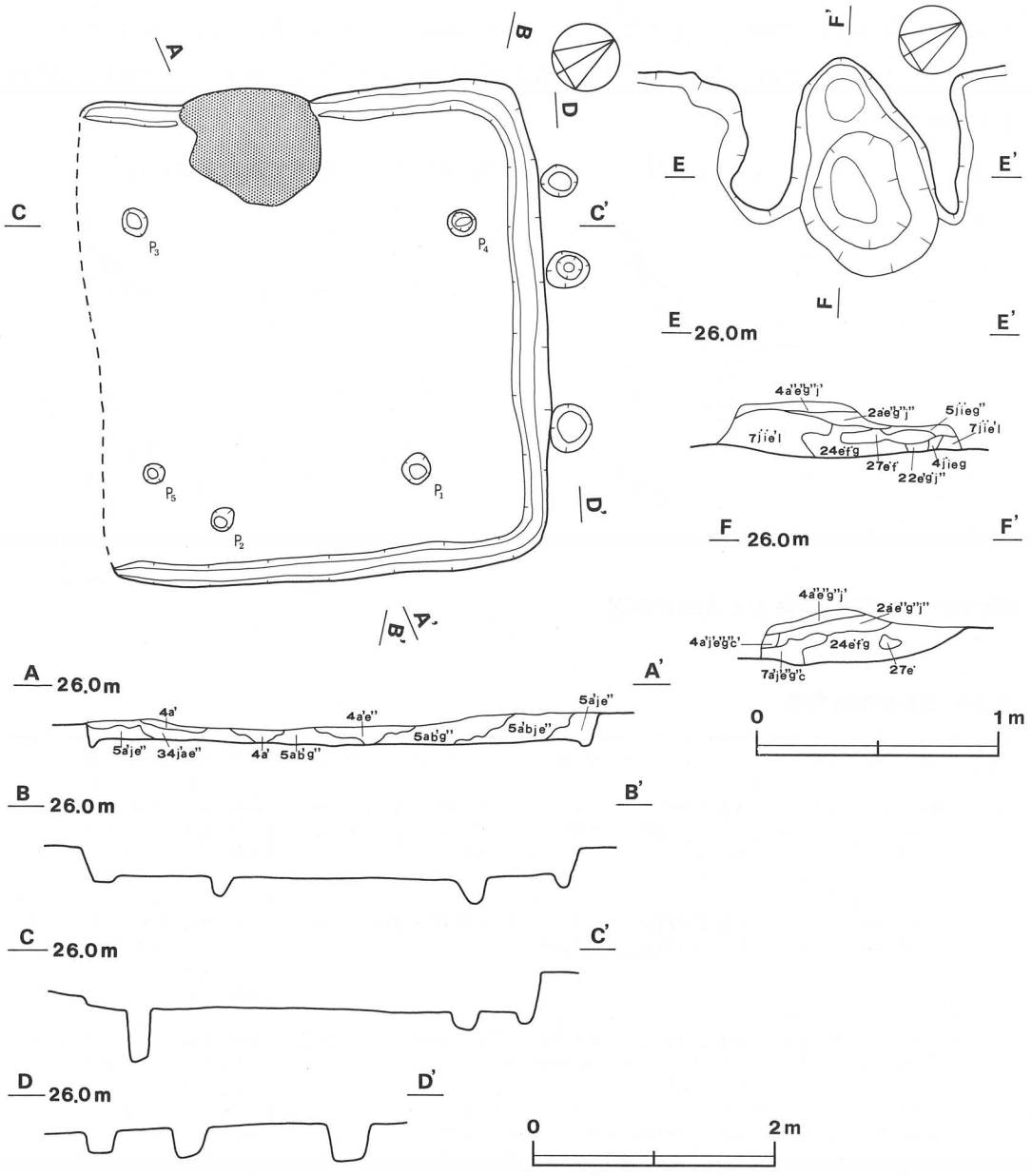
第126図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３号出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第126図 1	高台付坏形土器 土師器	A（15.4） B　7.8 D（7.2） E（2.5）	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はやや外反する。高台は外下方へ「ハ」の字状にのび，高い。	水挽き整形後内面へラ磨き。高台は貼り付け。高台内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	50％ P８
2	坏形土器 土師器	A（15.0） B（3.7）	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反している。	水挽き整形後内面へラ磨き。	砂粒・雲母・石英・スコリア にぶい褐色 普通	７％ P124
3	坏形土器 土師器	A（14.6） B（3.3）	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに外反している。	水挽き整形。ロクロ回転方向右。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	７％ P125
4	高台付坏形土器 土師器	A（14.3） B（4.7）	体部は内彎気味に外上方へ立ち上り，そのまま口縁部に至る。高台は剝離している。	水挽き整形。ロクロ回転方向右。高台は貼り付け。	砂粒・雲母・石英 にぶい褐色 普通	７％ P126

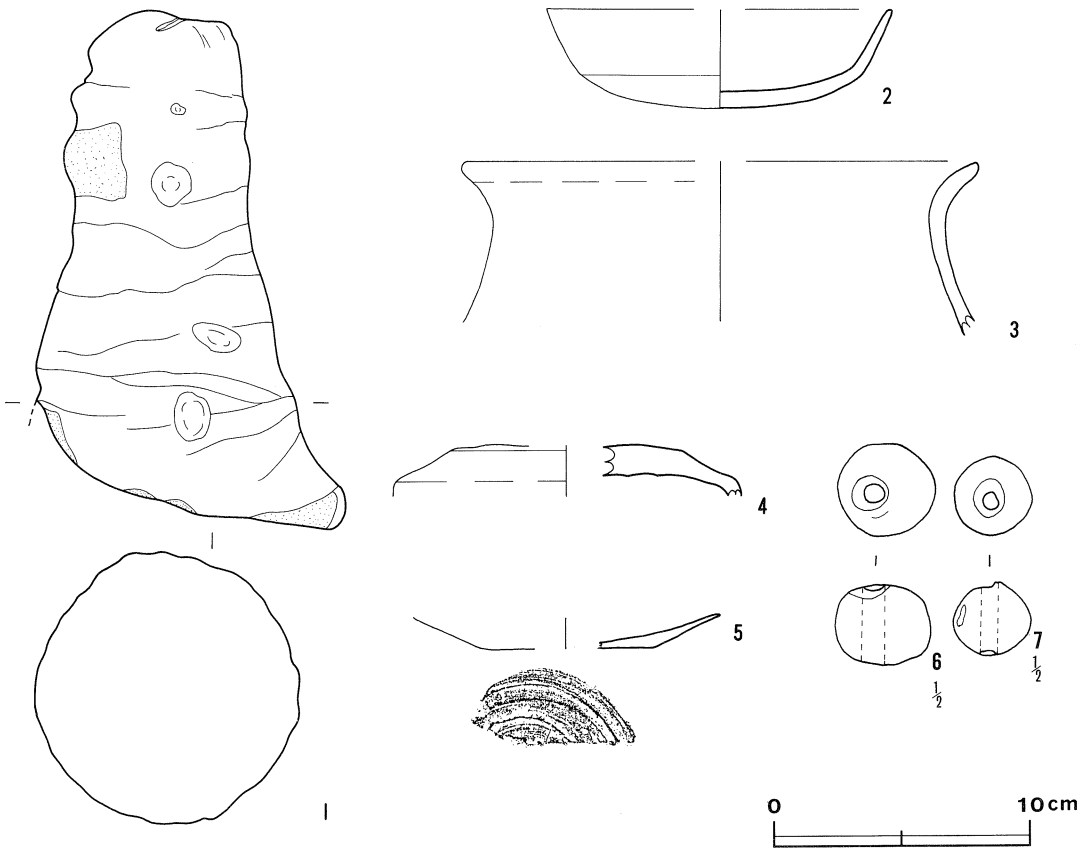
第４号住居跡（第127図）

本跡は，調査区の西部B1a5・B1b5区を中心に確認された住居跡で，第１号住居跡の南側約1.7mに位置している。本跡の東側は第３号住居跡と，南西側は第７号住居跡と重複している。土層断面を検討した結果，本跡の南西コーナー部と東部上面に当る層から山砂を少量含んだ第３・７号住居跡の貼り床が明瞭に検出された。したがって，本跡は，第３号住居跡及び第７号住居跡よりも古い遺構であると推定される。



第127図　第４号住居跡実測図

本跡は，南側部が耕作により撹乱を受けているため，平面形や規模等の詳細は不明である。平面形は，調査した部分から推定すると，一辺が4.10ｍの方形を呈するものと思われる。主軸方向は，Ｎ－58°－Ｗである。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，20～35cmである。壁下には，南側の撹乱部を除いて幅13～25cm，深さ５～10cmの壁溝が周回している。床面は，全体的に平坦で，硬く踏み固められている。ピットは，住居内に５か所，住居外の北側壁に接して３か所検出された。主柱穴は，やや不規則ではあるが，規模，配列から見て，Ｐ1・Ｐ3・Ｐ4・Ｐ5であると思われる。Ｐ1は長径25cm・短径23cm，深さ24cm，Ｐ3は，長径30cm・短径22cm，深さ45cm，Ｐ4は，直径24cmの円形を呈し，深さ18cm，Ｐ5は，長径17cm・短径15cm，深さ30cmの規模を有している。住居外のピット３本は補助柱として構築されたものではないかと推定され，住居外の南側にも同様の施設を有していた可能性が高い。カマドは，西側壁中央部に付設されており，上部は削り取られているが袖部は一部が残っており，砂質粘土で構築されている。規模は，長さ92cm，幅110cm，焚口部幅35cmである。掘り方は，壁を32cm幅で，12cmほど外側に掘り込んでいる。火床は，長径49cm・短径36cmの楕円形を呈し，床面を５cm掘り込んでいる。



第128図　第４号住居跡出土遺物実測図

覆土は，ローム粒子を主体に締まりのある暗褐色土が自然堆積の状態を呈している。

遺物は，土師式土器片151点，須恵器片14点，周囲からの流れ込みと思われる縄文土器片１点が出土した。

第128図１は，東側壁際のほぼ中央部から南北に横位の状態で出土したほぼ完形の支脚である。第128図２は，本跡の北コーナー部の床面に散在していた土師式土器片５点を接合した坏で，完存率は50％である。第128図３は，ほぼ中央部の床面から逆位の状態で出土した土師式土器の甕口縁部である。第128図４は，北コーナー付近の覆土から正位の状態で出土した須恵器の蓋である。完存率は約35％である。

本跡は，出土遺物から８世紀前半の奈良時代に比定される遺構であると思われる。

第４号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 2	坏形土器 土師器	A（13.4） B 3.9	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや直線的に外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。底部内面ナデ，外面手持ちヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	50％ P９
3	甕形土器 土師器	A（10.2） B（ 6.3）	口縁部は外上方へ外反しながら立ちあがる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	５％ P127
4	蓋 須恵器	B（ 2.0）	天井部中位はほぼ平坦で，口縁部は内彎しながら外下方にのびる。外面の天井部中位と口縁部の境に段を有する。	水挽き整形。外面天井部中位回転ヘラ削り。ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母・長石 灰黄色 普通	30％ P130
5	皿形土器 土師器	A（12.0） B 1.3	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	水挽き整形。底部外面回転ヘラ切り。ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母・石英 灰黄褐色 普通	５％ P131

第４号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径（cm）	重量（ｇ）	備考
第128図 1	球状土錘	ＤＰ４	19.4×10.4	—	1,354.4	95％
6	球状土錘	ＤＰ１	2.1× 2.5	0.6	13.9	100％穿孔 一方穿孔
7	球状土錘	ＤＰ２	1.9× 2.1	0.4	8.0	100％ 一方穿孔

第5号住居跡（第129図）

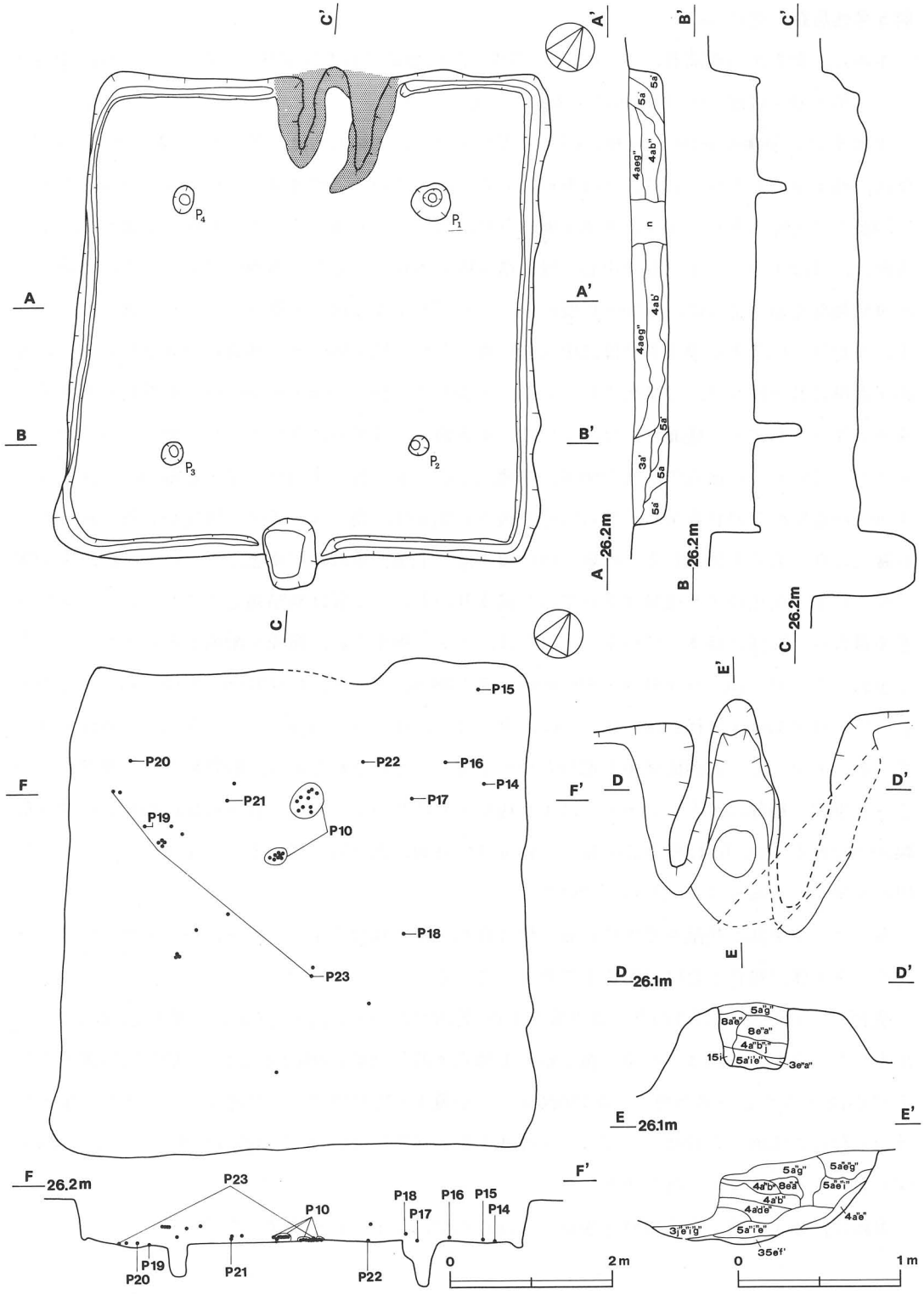
本跡は，調査区の西部B1c7・B1c8・B1d8区に確認された住居跡で，第3号住居跡の南東4.5m，第8号住居跡の南側3.5mに位置している。

平面形は，長軸6.00m・短軸5.65mの方形を呈し，主軸方向は，N－31°－Wを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，55～60cmである。壁下には，幅10～20cm，深さ6～10cmの壁溝が検出され，カマド，貯蔵穴のところを除き全周している。床面は，ほぼ平坦で，中央部を中心に硬く踏み固められているが，南西側壁から北方にカマドの北東側袖部を通るように，幅40cm程度のトレンチャーによる撹乱を受けている。貯蔵穴は，カマドの反対側に位置する南東側壁ほぼ中央部に検出され，壁を幅65cmで外側に63cm掘り込み，住居跡床面側に27cm掘り込んで構築されている。平面形は，長径90cm・短径65cmの不整長方形を呈し，深さは76cmを有する。底面は，ほぼ平坦で，南西側はほぼ垂直に立ち上がり，他はゆるやかに立ち上がっている。貯蔵穴の前面の床は，貯蔵穴を取りまく様に半円形を呈する幅30cm，深さ3～4cmのゆるやかな凹状を呈し，さらにその後方に幅40cm，高さ3～4cmの周提が設置されており貯蔵穴に伴うものと思われる。貯蔵穴内の覆土は，上部～中部が暗褐色土で，ローム粒子を主体に焼土粒子・炭化粒子が微量含まれており締まりがある。下部は極暗褐色土で炭化粒子・炭化材を多量含み，同様に締まっている。ピットは，4か所検出され，規模や配列からいずれも主柱穴と思われる。P_1は，長径51cm・短径49cm，深さ38cm，P_2は，長径27cm・短径25cm，深さ39cm，P_3は，長径30cm・短径29cm，深さ60cm，P_4は，長径35cm・短径25cm，深さ45cmの規模を有している。カマドは，北西側壁中央部からやや北寄りに付設されており，砂質粘土で構築されている。北東側の袖部は，トレンチャーにより撹乱を受けている。規模は長さ141cm，幅133cm，焚口部幅50cmである。掘り方は，壁を25cm幅で，13cmほど外側に掘り込んでいる。火床は，長径63cmの楕円形を呈し，床面を9cm掘り込んでいる。

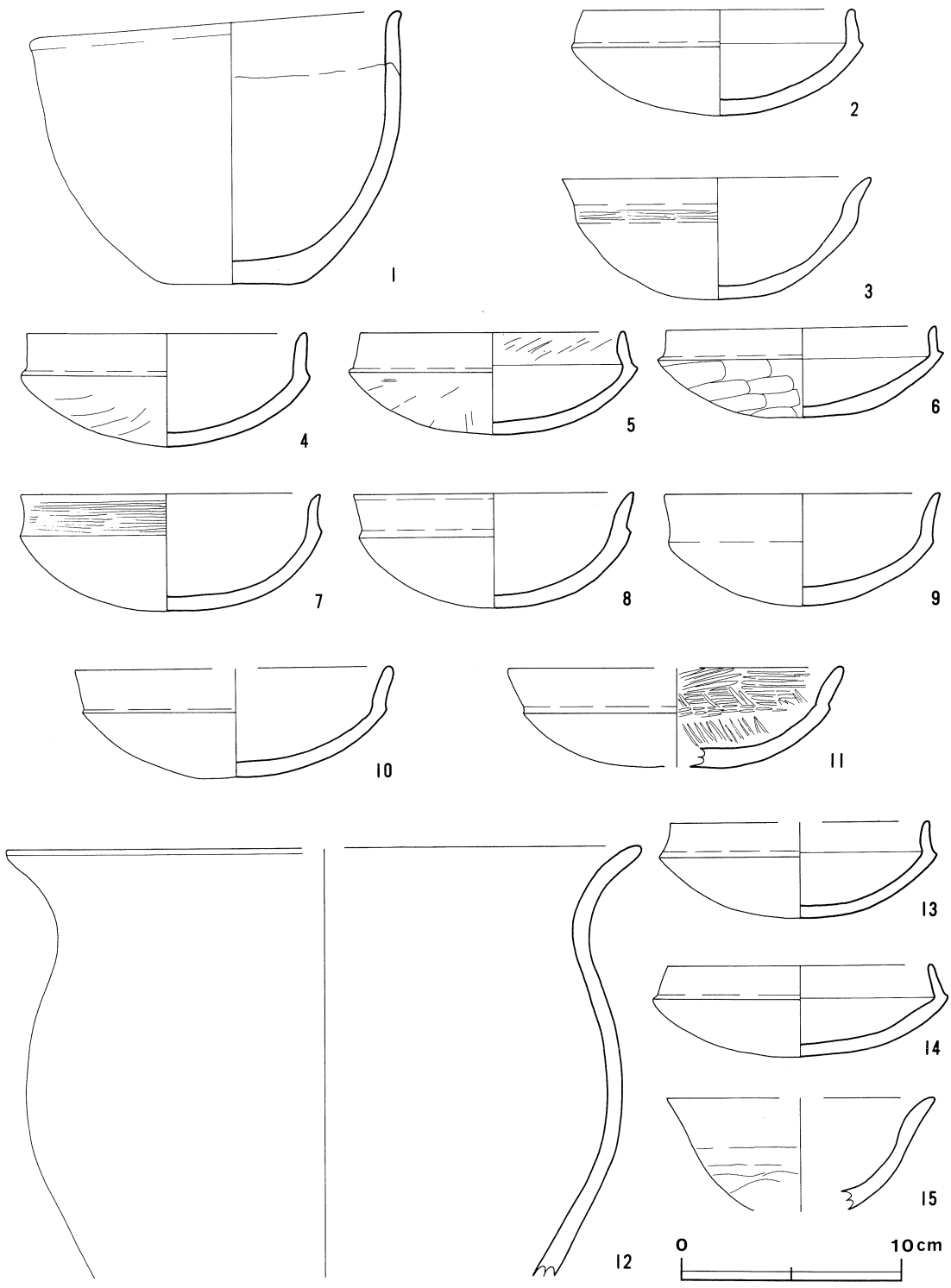
覆土は，中央部が撹乱を受けている。他は自然堆積の状態を呈し，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を主体に褐色または暗褐色土で締まっている。

遺物は，土師式土器片129点，須恵器片1点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片7点が出土した。完形の遺物は，貯蔵穴覆土から土師式土器の埦第130図1が正位の状態で，床面から坏第130図2～3が正位の状態で，第130図4～6が覆土から横位の状態で出土した。また，本跡のカマド付近の床面から貯蔵穴と同じく土師式土器の坏第130図7が，南西コーナー付近から第130図8がそれぞれ正位の状態で出土した。

本跡は，出土遺物から古墳時代後期の鬼高II式期に比定される遺構と思われる。



第129図　第５号住居跡実測図・出土土器接合関係図



第130図　第５号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土土器観察表

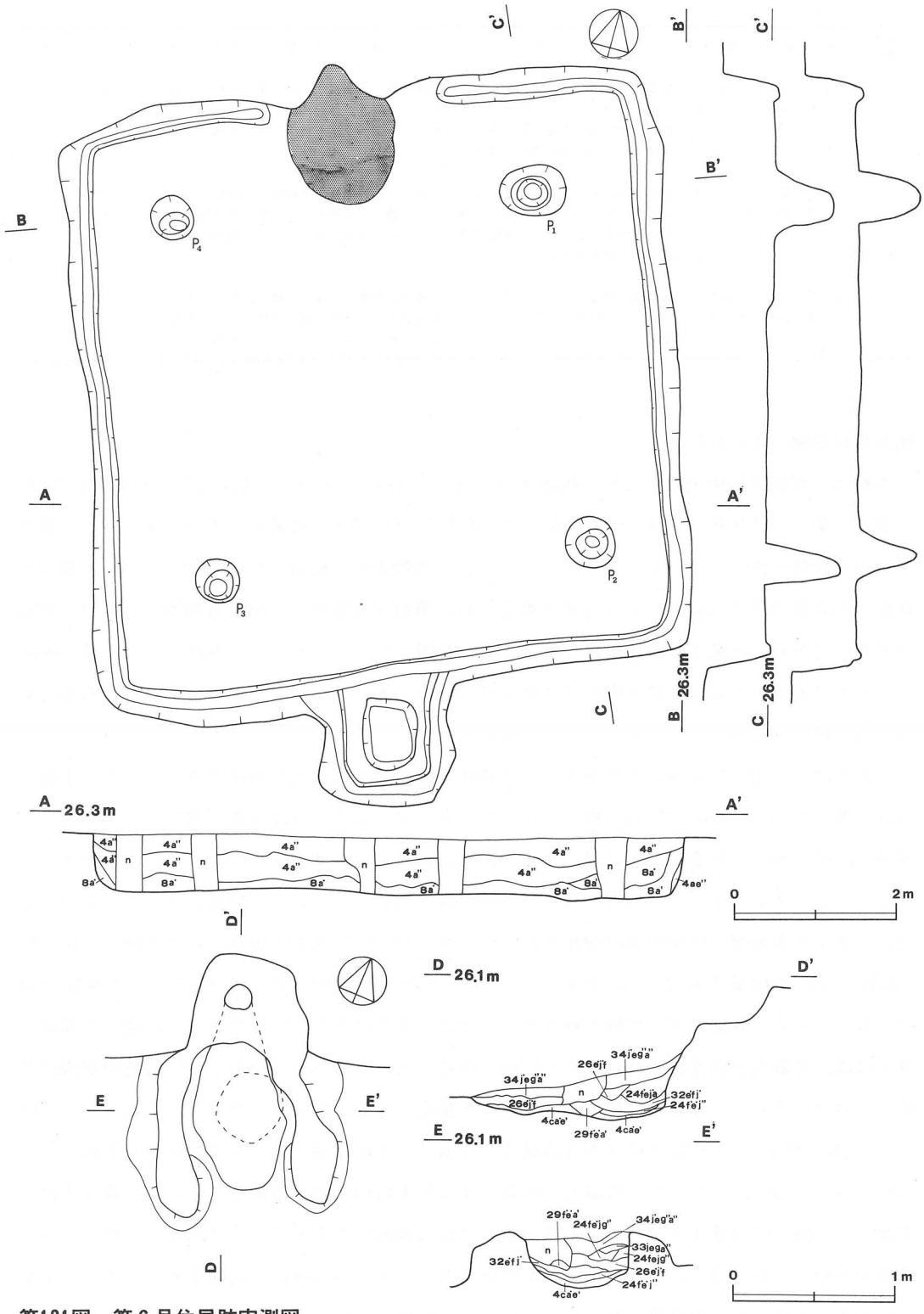
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 1	埦形土器 土師器	A 16.9 B 12.4 C 6.0	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。体部内面と口縁部内面の境に輪積痕を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石 明褐色 普通	100% P12
2	坏形土器 土師器	A 12.2 B 4.8	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面放射状ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア・石英・礫 橙色 普通	100% P13
3	坏形土器 土師器	A 14.0 B 5.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は外反気味である。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内面横ナデ後ヘラ磨き，外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・礫 にぶい赤褐色 普通	100% P18
4	坏形土器 土師器	A 12.7 B 5.1	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後，横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・石英 橙色 普通	100% P15
5	坏形土器 土師器	A 12.0 B 4.7	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。外面ヘラ磨き。体部内面放射状ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・石英・礫 にぶい橙色 普通	100% P16
6	坏形土器 土師器	A 12.3 B 4.1	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラナデ。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・雲母 黒褐色 普通	100% P17
7	坏形土器 土師器	A 13.7 B 5.4	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや外反している。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア 灰褐色 良好	95% P22
8	坏形土器 土師器	A 12.8 B 5.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや外傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面放射状ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	100% P19
9	坏形土器 土師器	A 12.6 B 5.1	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや外反して外上方に立ち上がる。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・石英 にぶい褐色 普通	100% P24
10	坏形土器 土師器	A (14.4) B 5.0	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや外傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ヘラナデ	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	55% P20
11	坏形土器 土師器	A (15.2) B 4.5	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石 灰褐色 普通	20% P21
12	甕形土器 土師器	A (24.2) B (20.6)	胴部は丸く張り，胴中位に最大径を有する。口縁部は外反して外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ。外面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 灰褐色 普通	20% P10

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
13	坏形土器 土師器	A (11.8) B　4.4	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後，横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	60% P14
14	坏形土器 土師器	A (12.0) B　4.2	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	45% P23
15	埦形土器 土師器	A (12.2) B (5.1)	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部内面横ナデ後ヘラ磨き，外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石にぶい赤褐色 普通	25% P11

第6号住居跡（第131図）

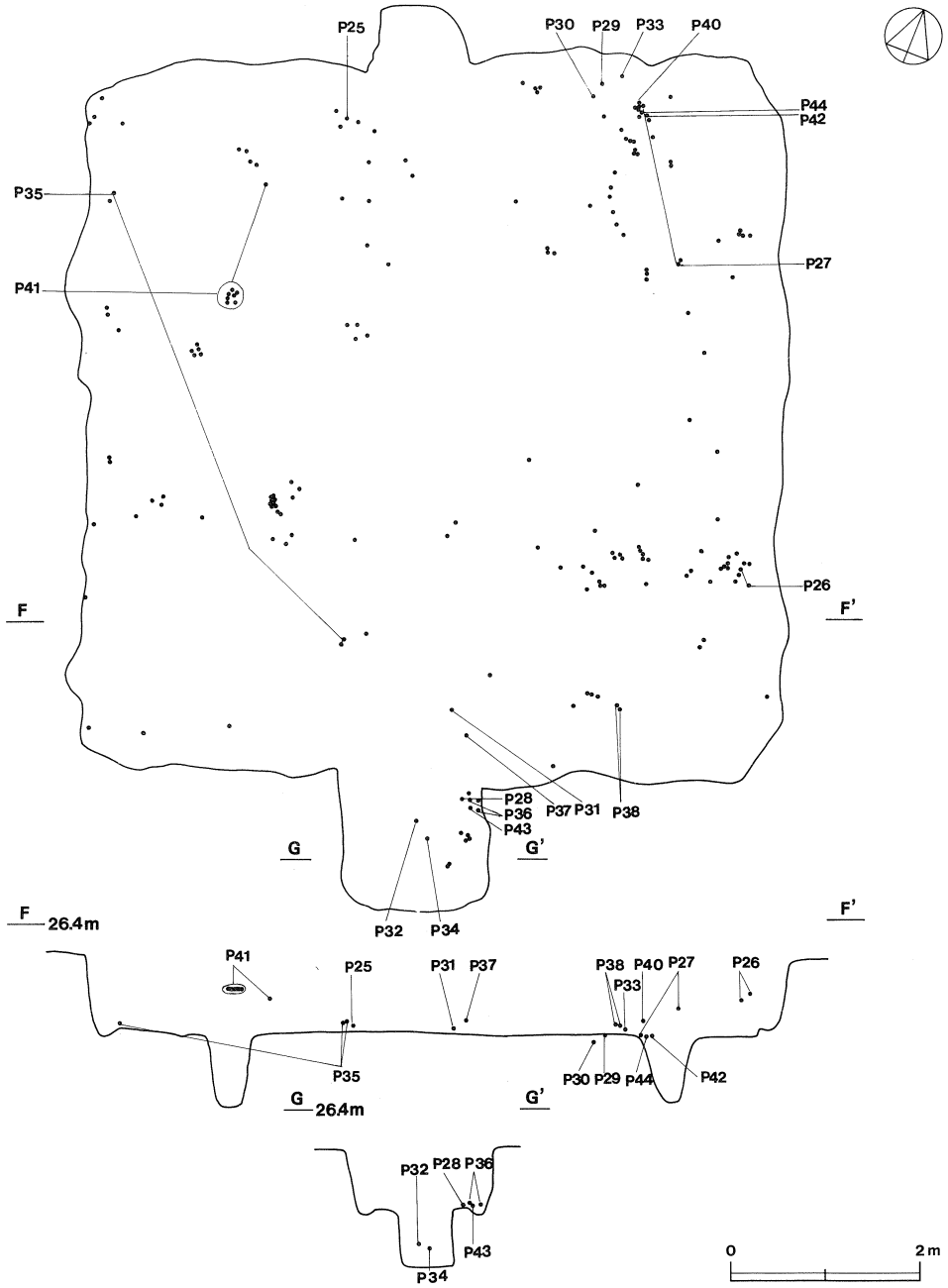
本跡は，調査区の中央部からやや西寄りのB2d1・B2d2・B2e1・B2e2区に確認された住居跡で，第5号住居跡の東側5.5m，第9号住居跡の南側3.5mに位置し，本跡の東コーナー部は第21号住居跡の西コーナー部と重複している。出土遺物等から検討した結果，本跡は，古墳時代後期の鬼高III式期に比定される住居跡と推定され，第21号住居跡は，出土遺物等から10世紀初頭の平安時代中期に比定される住居跡であることが判明した。したがって，本跡は，第21号住居跡よりも古い遺構である。本跡の南側には第4号土坑が位置し，貯蔵穴と重複している。本跡は東西方向に耕作のためのトレンチャーによる撹乱を受けている。

平面形は，一辺が7.50mの方形を呈し，当遺跡の住居跡では最大の規模を有している。主軸方向は，N－23°－Wを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，65～80cmを測る。壁下には，幅10～20cm，深さ10cmの壁溝がカマドのところを除き，全周している。床面は平坦で，四方の隅を残し硬く踏み固められている。貯蔵穴は，カマドの反対側に位置する南側壁ほぼ中央部に検出され，壁を幅約180cmで，床面の周溝から住居跡の外側に160cm掘り込んで構築されている。平面形は，長径90cm・短径60cmの方形を呈し，深さは，64cmを有している。底面は平坦で硬く締まり，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。貯蔵穴の周囲の壁下には，貯蔵穴を取りまく様に幅7～17cm，深さ5～9cmの壁溝が全周し，住居跡の壁溝に継続しており，明らかに貯蔵穴に伴う周溝であると推定される。貯蔵穴の覆土は，上層はローム粒子を主体に焼土粒子・炭化粒子を含み締まっており，下層は焼土粒子・炭化粒子を主体にローム粒子を含み締まっている。貯蔵穴の南側と第4号土坑の北側が重複しているが，調査当初の平面プラン確認時は第4号土坑は，本跡の出入口部の施設であると仮定して調査をした。しかし，調査が進むにつれ，出入口に伴う根拠が不明確であり，出入口部施設と判断することはできなかったので，土坑として取り扱った。ピットは，4か所検出され，規模や配列からいずれも主柱穴

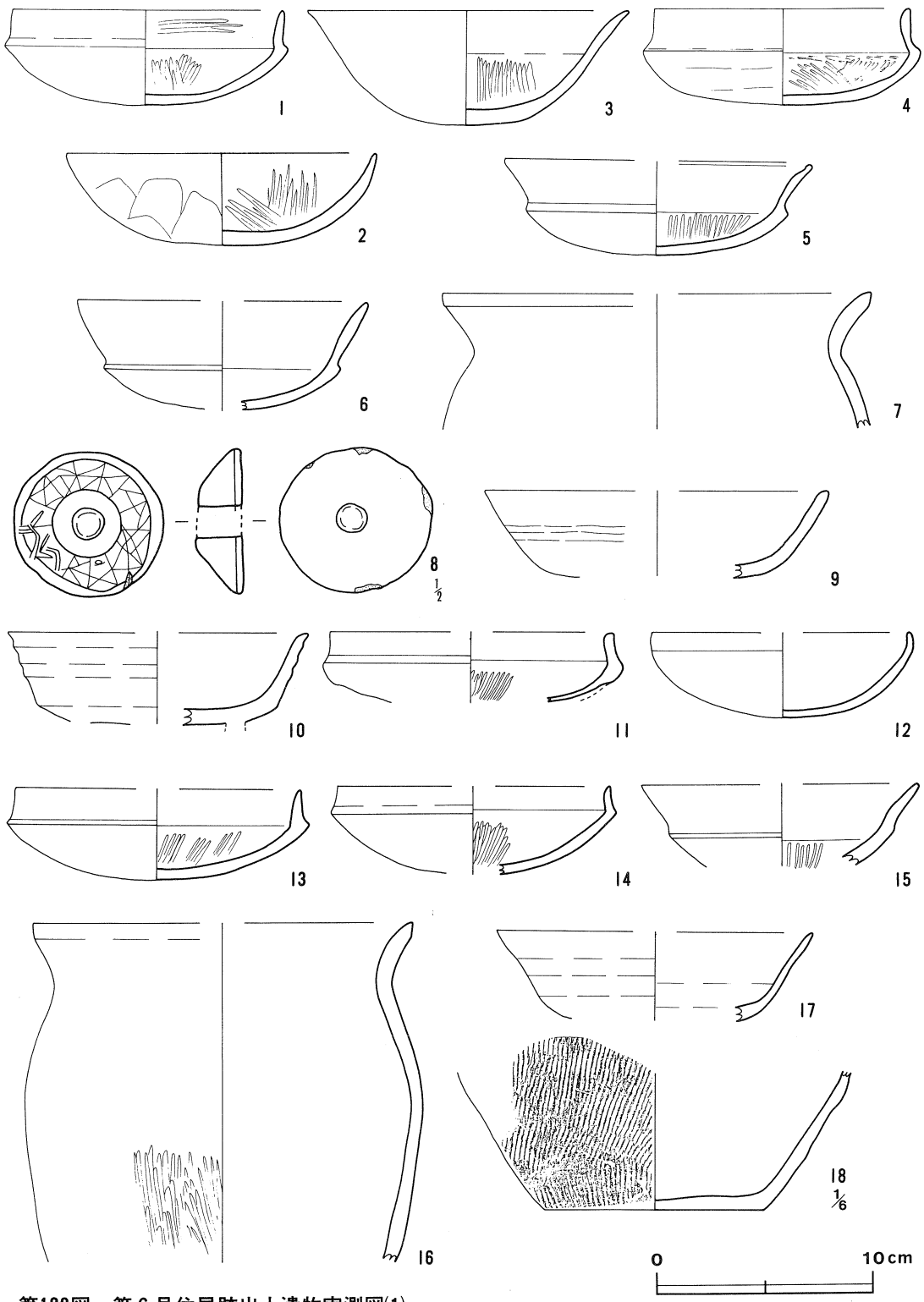


第131図　第6号住居跡実測図

と思われる。 P_1 は，長径83cm・短径64cm，深さ73cm， P_2 は，長径65cm・短径61cm，深さ76cm P_3 は，長径59cm・短径55cm，深さ78cm， P_4 は，長径55cm・短径51cm，深さ95cmの規模を有する。カマドは，北側壁中央部に付設されており，砂質粘土で構築されている。カマド内の一部はトレンチャーによる撹乱を受けているが，遺存状態はほぼ良好である。規模は，長さ173cm・幅13



第132図　第6号住居跡出土土器接合関係図



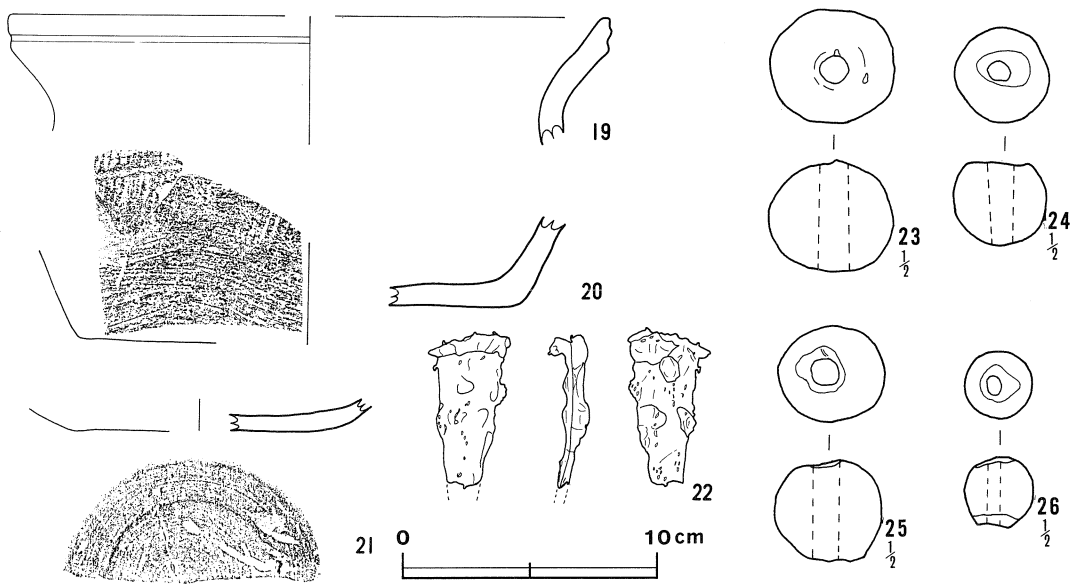
第133図　第6号住居跡出土遺物実測図(1)

0cm，焚口部幅45cmで当遺跡の住居跡では最大の規模を有するカマドである。掘り方は，壁を100cm幅で，48cmほど外側に掘り込んで煙道部に至っている。煙道部の平面形は直径16cmの円形を呈し，ほぼ垂直に掘り込まれている。内面は熱を受け，硬くレンガ状に焼けている。火床は，長径91cm・短径53cmの楕円形を呈し，床面を16cm掘り込んでいる。

覆土は，トレンチャーによる撹乱部を除き自然堆積の状態を呈し，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土で締まっている。床面に焼土や炭化物が散在しており，特に貯蔵穴付近には，多量の焼土・炭化材が検出され，焼失家屋である可能性が強い。

遺物は，土師式土器片1622点，須恵器片126点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片11点が出土した。完形の遺物は，貯蔵穴覆土から土師式土器の坏第133図１・２が，貯蔵穴底面から第133図３が，それぞれ正位の状態で出土した。第133図４～６は，貯蔵穴と住居跡の境に正位の状態で出土した坏片である。完存率は，約50％である。第133図７は，土師式土器の甕胴部片でカマドの南西側袖部から横位の状態で出土した。これは，袖部の補強材として使われた可能性が高い。第133図８は，滑石製の紡錘車で，P_3 から北方的100cmに位置する覆土から横位の状態で出土した。第134図22は，床面に近い覆土第３層から出土した鎌である。残存した部分から付け根側（刃元の方）で，全体の約３分の１と思われる。形状は，刃元部は幅が広く，刃先に伸びるにつれ狭くなっている。厚さは全体的に平均しているが，表・裏面に赤錆が著しい。法量は，長さ6.1cm・幅3.4cm・厚さ1.7cm・重さ15.9ｇである。

本跡は，前述した如く，出土遺物から古墳時代後期の鬼高Ⅲ式期に比定される。



第134図　第６号住居跡出土遺物実測図(2)

第6号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第133図 1	坏形土器 土師器	A 12.4 B 4.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて上ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面放射状ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	90% P28
2	坏形土器 土師器	A 14.0 B 4.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面放射状ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	95% P30
3	埦形土器 土師器	A 15.0 B 5.2	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部内面横ナデ後横位のヘラ磨き，外面横ナデ。体部内面放射状ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母・礫 赤色 普通	100% P29
4	坏形土器 土師器	A 11.8 B 4.4	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・礫 黒褐色 普通	70% P31
5	坏形土器 土師器	A (14.0) B 4.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。口唇部は内側につまみ上げられている。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内面横ナデ後横位のヘラ磨き，外面横ナデ。体部内面放射状ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・礫 赤色 普通	50% P32
6	坏形土器 土師器	A (13.4) B 5.2	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は外傾して立ち上がり長い。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	50% P33
7	甕形土器 土師器	A (19.8) B (6.3)	口縁部は外反して外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 長石・礫 にぶい褐色 普通	5% P26
9	坏 須恵器	A (16.0) B (4.0)	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き整形。底部外面回転ヘラ削り。ロクロ回転方向右。	砂粒・礫・雲母 褐灰色 普通	10% P42
10	高台付坏形土器 土師器	A (14.0) B (4.3)	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がる。高台は剝離している。	水挽き整形。	砂粒・雲母・礫 淡橙色 普通	5% P44 内面黒色処理
11	坏形土器 土師器	A (13.0) B (3.3)	体部外面は剝離している。体部内面は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面放射状ヘラ磨き，外面は剝離しているため手法不明。	砂粒・雲母 明褐灰色 普通	30% P37
12	坏形土器 土師器	A (12.0) B 4.0	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい赤褐色 普通	60% P35
13	坏形土器 土師器	A (11.5) B 4.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面放射状ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい褐色 普通	50% P34 体部から底部にかけて「十」字状の刻線を有する。
14	坏形土器 土師器	A (11.5) B 4.0	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや外反して内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面放射状ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	40% P36
15	坏形土器 土師器	A (14.0) B (4.0)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや外反して外上方に立ち上がる。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内面横ナデ後横位のヘラ磨き，外面横ナデ。体部内面放射状ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 赤色 普通	20% P38
16	甕形土器 土師器	A (17.5) B (15.8)	胴部は長胴を呈し，口縁部は外反しながら外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ。外面上部ナデ，下部縦位のヘラ磨き。	砂粒・雲母・石英・長石・礫 にぶい橙色，普通	20% P25

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
17	坏 須恵器	A (14.6) B (4.1)	体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部は外傾する。	水挽き整形。	砂粒・礫 灰色 普通	10% P41
18	甕 須恵器	B (12.6) C (20.0)	底部は平底で，胴部はわずかに内彎しながら外上方に立ち上がる。	底部内面ナデ，外面は剝離しているため不明。胴部内面ナデ，外面縦位の平行叩き。	砂粒・礫・雲母 灰色 普通	10% P39
第134図 19	甕形土器 土師器	A (23.6) B (5.0)	口縁部は外反して外上方に立ち上がり，外面に浅い沈線が横位に巡る。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英・長石・礫 にぶい橙色 普通	3% P27
20	甕 須恵器	B (4.2) C (16.7)	底部は平底で，胴部は外傾しながら立ち上がる。	底部内面ナデ，外面は剝離しているため不明。胴部内面ナデ，外面最下位横位のヘラ削り。	砂粒・礫・雲母 灰色 普通	7% P40
21	坏 須恵器	B (1.2) C (9.0)	平底。	水挽き整形・外面回転ヘラ削り。ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母・礫 明褐灰色 普通	5% P43

第6号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第134図 23	球状土錘	DP3	3.0×3.3	0.8	28.1	100% 一方穿孔
24	〃	DP4	2.2×2.5	0.7	13.0	100% 一方穿孔
25	〃	DP5	2.6×2.8	0.7	18.2	100% 両方穿孔
26	〃	DP6	1.8×1.8	0.35	5.2	100% 一方穿孔

第6号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第133図 8	紡錘車	Q 2	4.6×4.8×1.4	1.0	39.4	滑石

第7号住居跡（第135図）

本跡は，調査区の西部B1a4区を中心に確認された住居跡で，第1号住居跡の南側約3mに位置している。本跡の東コーナー部は，第4号住居跡と重複している。床面を精査した結果，第4号住居跡の南西部上面に山砂混じりの本跡の貼り床が明瞭に検出された。出土遺物からも本跡は，第4号住居跡よりも新しい遺構である。

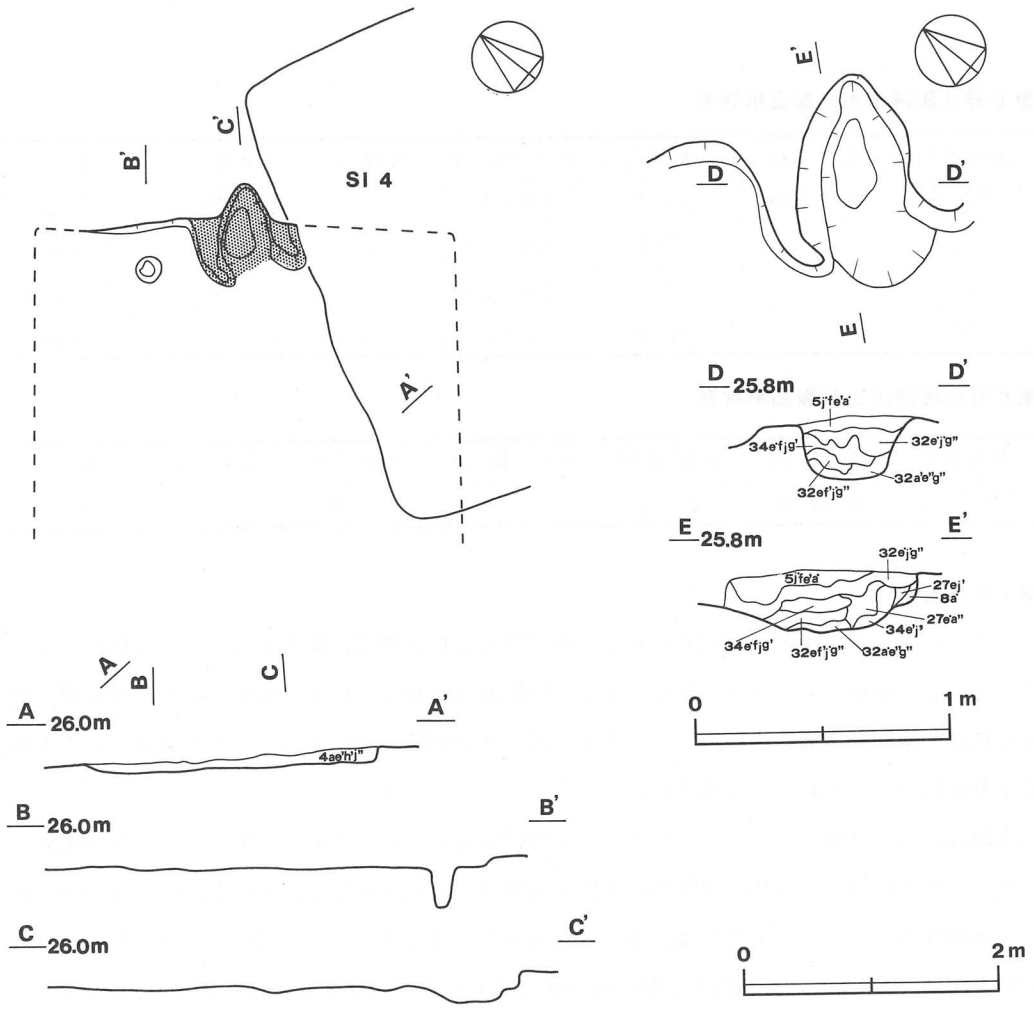
本跡は，遺存状態が悪く，カマドとカマドの付設されている北東部の壁2分の1及び床の一部を残し，他は消滅しており，住居跡の南側部は耕作による撹乱を受けているため，規模や平面形等の詳細は不明である。平面形は，調査した部分から推定すると，一辺が3.30mの方形を呈し，主軸方向は，N－52°－Eを指す小形の住居跡と思われる。残存する壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，7cmである。床面は，やや凸凹で中央部からカマド

にかけて硬く踏み固められている。ピットは，１か所検出され，主柱穴と思われる。規模は，直径20cmの円形を呈し，深さは33cmである。カマドは，北東側壁のほぼ中央部と思われる所に付設されており，砂質粘土で構築されている。内側は熱を受け，レンガ状に焼けている。長さ80cm，幅約85cm，焚口部幅31cmである。掘り方は，壁を幅約32cmで，26cmほど外側に掘り込んでいる。火床は，長径42cm・短径25cmの楕円形を呈し，床面を13cm掘り込んでいる。

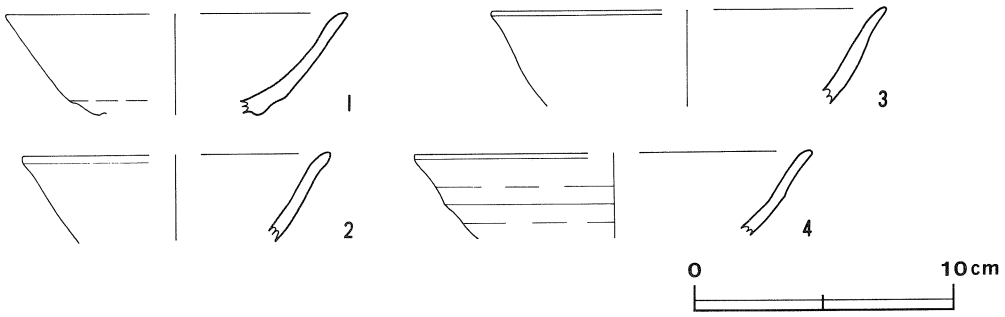
覆土は，ローム粒子を主体に含む暗褐色土で，締まりがあり，自然堆積と思われる。

遺物は，土師式土器片41点，須恵器片10点が出土した。完形の遺物は無く，第136図１は，カマド内の覆土から正位の状態で出土した土師式土器の高台付坏片，第136図２・３は坏の口縁部片である。

本跡は，出土遺物から９世紀後半の平安時代前期に比定される遺構であると推定される。



第135図　第７号住居跡実測図



第136図　第７号住居跡出土遺物実測図

第７号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第136図 1	坏形土器 土師器	A (13.4) B (4.0)	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	水挽き整形後内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母・石英 長石 にぶい褐色 普通	10% P45
2	坏形土器 土師器	A (12.0) B (3.4)	体部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	水挽き整形後内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	3% P46
3	坏形土器 土師器	A (15.4) B (3.8)	体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	内面横ナデ後横位のヘラ磨き，外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 スコリア にぶい赤褐色 普通	5% P128
4	坏形土器 土師器	A (15.6) B (3.4)	口縁部はわずかに外反して外上方に開く。	内面横ナデ後横位のヘラ磨き，外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 普通	5% P129

第８号住居跡（第137図）

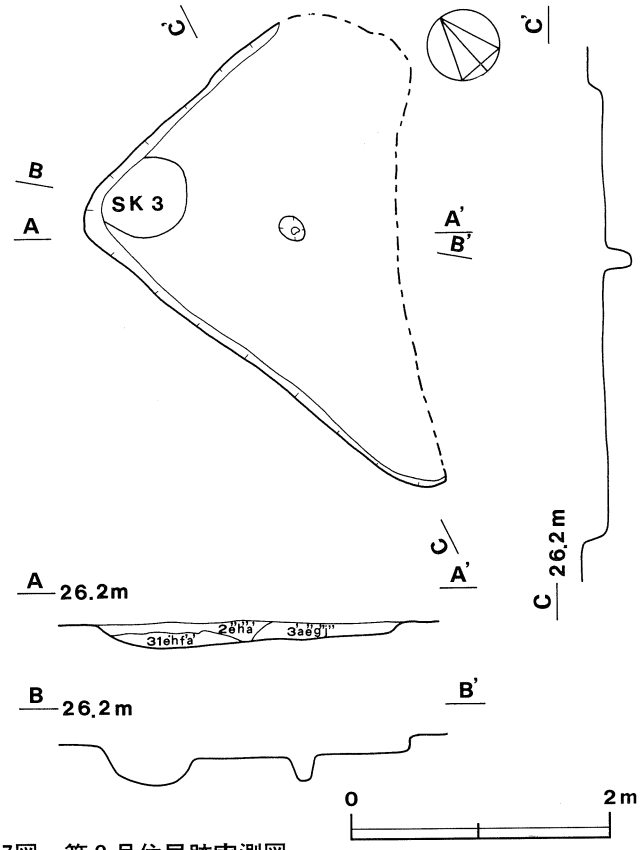
本跡は，調査区の西部B1b9区に確認された住居跡で，第５号住居跡の北東側約3.5m，第１号住居跡の南東側14mに位置し，第３号土坑と重複している。

本跡は，東側部約２分の１が調査エリア外になっているため，平面形・規模等詳細は不明である。平面形は，調査した部分から推定すると，一辺が3.60mの方形を呈する住居跡と思われる。主軸方向は不明である。壁は，良く締まったロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は10～14cmを測る。床面はほぼ平坦で，中央が硬く踏み固められている。ピットは，１か所検出され，規模は，長径21cm，短径19cm，深さ20cmである。カマドは，エリア外に付設されているものと思われる。

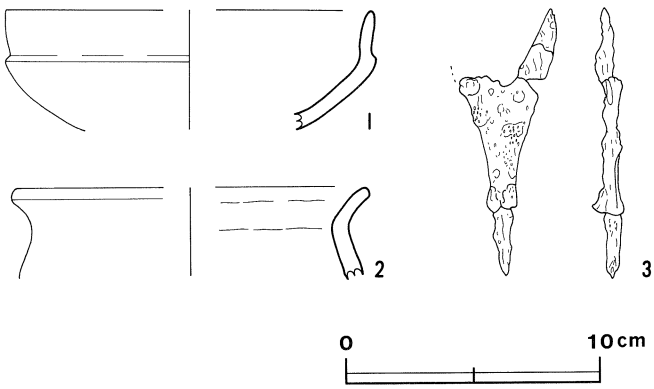
覆土は，自然堆積の状態を呈し，締まりの有る黒褐色土または極暗褐色土で，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含んでいる。住居跡の北西コーナー付近と北東側のエリアとの境，南側のエ

リアとの境に焼土や炭化物が散在していることから，本跡は，焼失家屋であると思われる。

遺物は，土師式土器片90点，須恵器片４点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片２点が出土しており，完形の遺物は無かった。第138図１は，土師式土器の坏口縁部である。第138図２は，土師式土器の甕口縁部である。第138図３は，本跡の北西コーナー付近の床面から出土した鉄製の雁股鏃である。形状は，「Y」字状を呈すると推定されるが，股を呈する片方の刃が欠損している。表・裏面に赤錆が著しい。法量は，長さ10.7cm・幅約5.0cm・厚さ1.2cm・重さ22.6ｇである。



第137図　第８号住居跡実測図



第138図　第８号住居跡出土遺物実測図

第８号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	坏形土器 土師器	A（14.4） B（4.5）	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ・外面ヘラ削り。	砂粒・長石 黒色 普通	5％ P48

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第138図 2	甕形土器 土師器	A (14.0) B (3.5)	口縁部は外反しながら外上方へ開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英・長石 にぶい赤褐色 普通	5% P47

第9号住居跡（第139図）

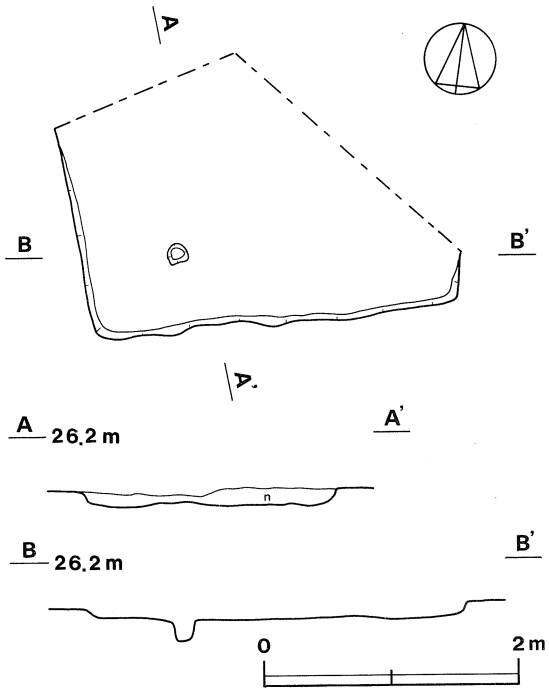
本跡は，調査区の西部B2c1区を中心に確認された住居跡で，第6号住居跡の北側3.5mに位置している。本跡の北側部は約2分の1がエリア外になっているため，平面形，規模等の詳細は不明である。また，耕作のため東西方向にトレンチャーによる撹乱を受けている。

平面形は，調査した部分から推定すると，一辺が3.00mの方形を呈する住居跡であると思われる。主軸方向は不明である。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，8～12cmである。床は，ほぼ平坦で，硬く踏み固められているが，トレンチャーによる撹乱部は帯状に凹んでいる。ピットは，1か所検出された主柱穴と思われる。規模は，長径17cm・短径16cm，深さ18cmを有している。カマドは，エリア外に付設されているものと思われる。

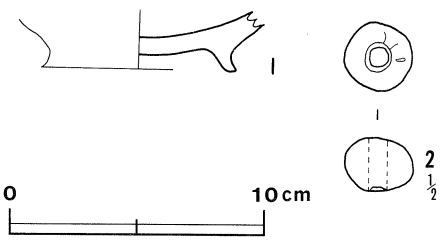
覆土は，ほとんどが撹乱を受け，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が混合している。

遺物は，土師式土器片25点が出土した。完形の遺物は無かった。第140図1は，南東コーナー部の覆土から正位の状態で出土した土師式土器の高台付坏の底部である。

本跡は，出土遺物から9世紀前半の平安時代前期に比定される遺構であると推定される。



第139図　第9号住居跡実測図



第140図　第9号住居跡出土遺物実測図

第９号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第140図 1	高台付坏形土器 土師器	B（1.9） C（7.7）	高台は外下方へのびる。	水挽き整形。高台は貼り付け。内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・スコリア・石英 にぶい橙色 普通	5％ P49

第９号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径（cm）	重量（g）	備考
第140図 2	球状土錘	DP７	1.5×1.8	0.5	4.4	100％ 両方穿孔

第10号住居跡（第141図）

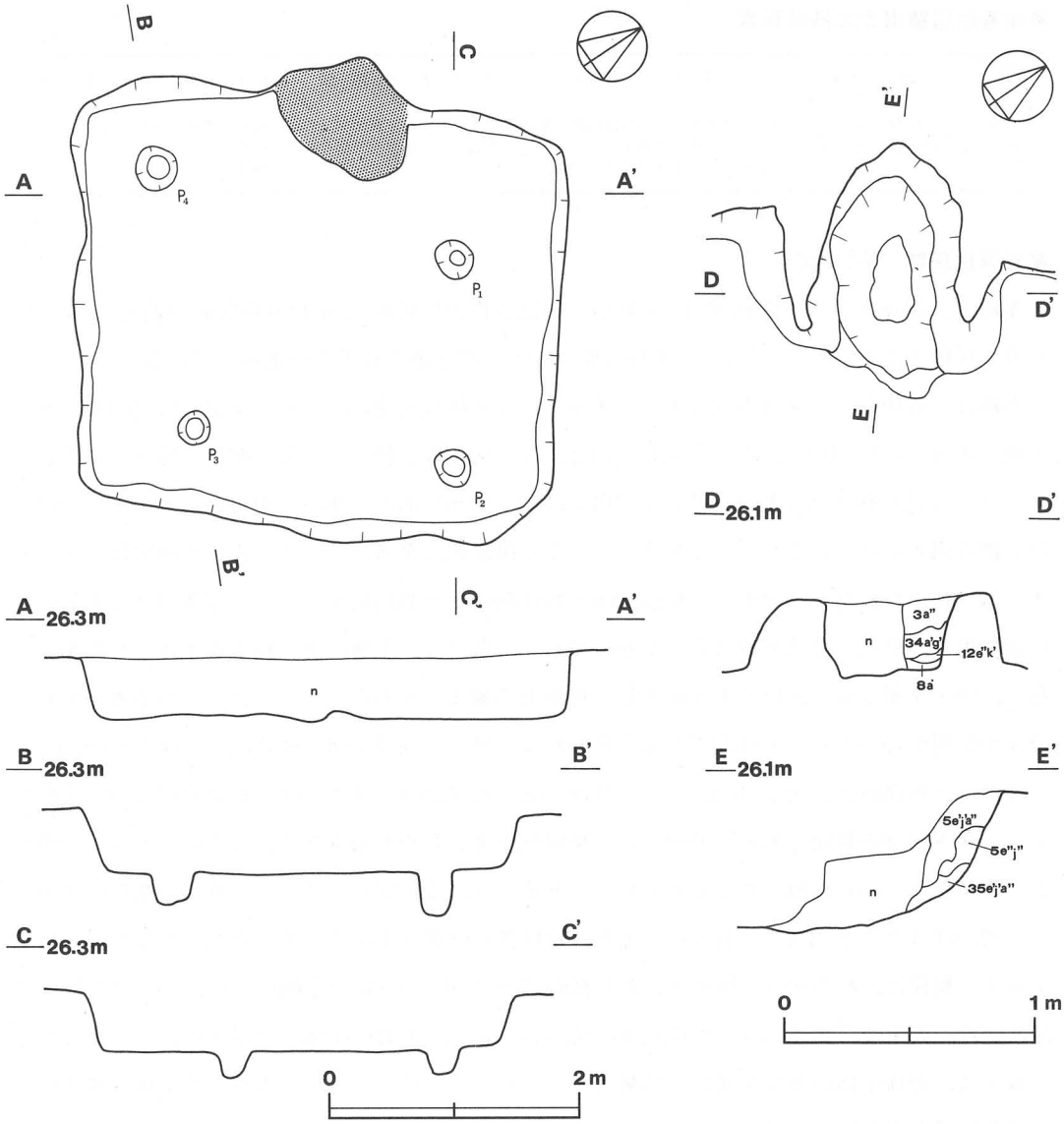
本跡は，調査区の中央部分からやや西寄りのB2e$_5$・B2f$_4$区を中心に確認された住居跡で，第21号住居跡の東方６ｍ，第11号住居跡の北西6.8ｍに位置している。

本跡は，耕作のため東西方向にトレンチャーによる撹乱を受けている。平面形は，長軸3.90ｍ・短軸3.60ｍの方形を呈し，主軸方向は，Ｎ－57°－Ｗを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，45～50cmを有する。床は，ほぼ平坦で，中央部からカマド付近にかけて，硬く踏み固められているが，トレンチャーによる撹乱部は帯状に凹んでいる。ピットは，４か所検出され，規模や配列からいずれも主柱穴であると思われる。P$_1$は，長径33cm・短径27cm，深さ23cm，P$_2$は，長径32cm・短径27cm，深さ20cm，P$_3$は，長径29cm・短径26cm，深さ35cm，P$_4$は長径37cm・短径35cm，深さ28cmの規模を有している。カマドは，西側壁中央からやや北寄りに付設されており，砂質粘土で構築されているが，カマドの中央と左右の袖部の外側は，縦方向にトレンチャーにより撹乱を受けているため遺存状態が悪く，平面形，規模等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると，規模は，長さ95cm・幅90cm，焚口部幅35cmで，掘り方は壁を幅55cmで，37cmほど外側に掘り込み，火床は，長径45cm・短径25cmの楕円形を呈し，床面を５cmほど掘り込んでいるものと思われる。

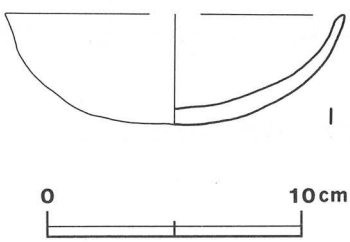
覆土は，遺構内全体が撹乱を受け，暗褐色土で，ロームブロック・ローム粒子を主体に焼土粒子，炭化粒子が微量混入している。

遺物は，土師式土器片25点，須恵器片２点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片１点が出土した。完形の遺物は出土しなかった。第142図１は，本跡の北コーナー部の床面から正位の状態で出土した土師式土器の坏である。完存率は約65％である。

本跡は，出土遺物から８世紀後半の奈良時代末期に比定される遺構と思われる。



第141図　第10号住居跡実測図



第142図　第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量m))	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第142図1	坏形土器 土師器	A (13.4) B 4.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	65% P50

第11号住居跡（第143図）

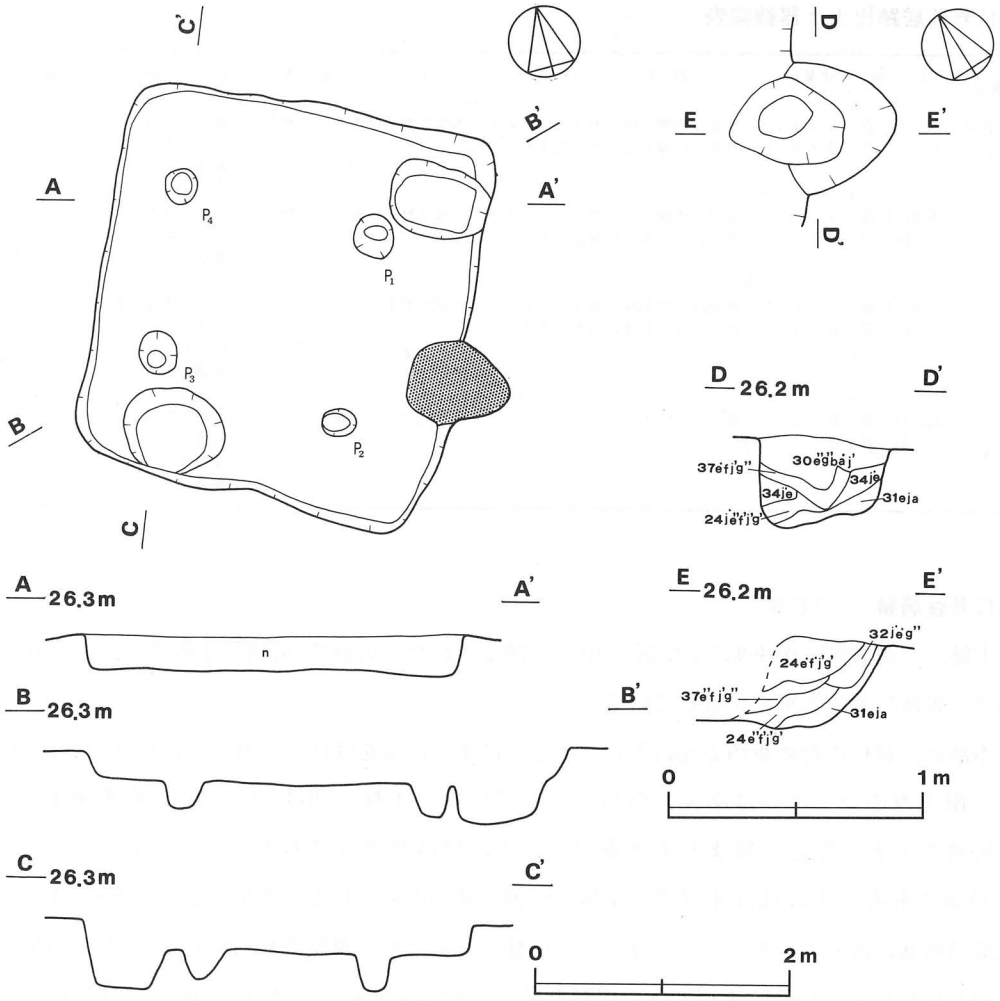
本跡は，調査区の中央部B2g$_7$区を中心に確認された住居跡で，第12号住居跡の西方1.5m，第10号住居跡の南東6.8mに位置し，本跡の西コーナー部と第5号土坑が重複している。

本跡は，耕作のため東西方向にトレンチャーによる撹乱を受けている。平面形は，長軸3.2m・短軸2.95mのやや方形を呈し，主軸方向は，N－66°－Wを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は23～30cmである。床は，中央からカマドにかけて硬く踏み固められているが，トレンチャーによる撹乱部は帯状に凹んでいる。貯蔵穴は，東コーナー部に検出された。平面形は，長径80cm・短径58cmの不整楕円形を呈し，深さ34cmである。底面は平坦で，壁は，ほぼ垂直に立ち上がっており，覆土は，上層に焼土粒子を主体とした極暗褐色土，中・下層はローム粒子を主体とした褐色土で締まりがある。ピットは，4か所検出され，規模や配列からいずれも主柱穴であると思われる。P$_1$は，長径37cm・短径32cm，深さ32cm，P$_2$は，長径27cm・短径21cm，深さ31cm，P$_3$は，長径35cm・短径32cm，深さ23cm，P$_4$は直径27cmの円形を呈し，深さ30cmの規模である。カマドは，東側壁中央からやや南寄りに付設されており，砂質粘土で構築されているが縦に約2分の1がトレンチャーによる撹乱を受けているため遺存状態が悪く，袖部はほとんど消滅しており，平面形，規模等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると，規模は，長さ80cm・幅62cm，焚口部幅27cmで，掘り方は，壁を幅60cmで，40cmほど外側に掘り込み，火床は，長径45cm・短径34cmの楕円形を呈し，床面を4cmほど掘り込んでいるものと

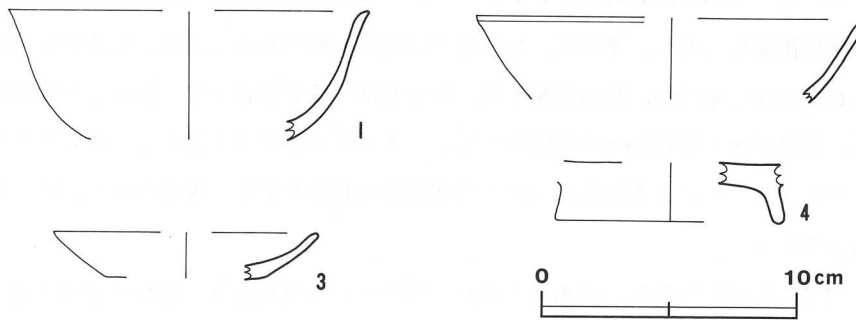
覆土は，遺構全体が撹乱を受け，暗褐色土で，ロームブロック・ローム粒子を主体に焼土粒子・炭化粒子が微量混入している。

遺物は，土師式土器片97点，須恵器片9点が出土した。完形の遺物は，出土しなかった。第144図1は，本跡の東部コーナー付近の覆土から逆位の状態で，第144図2は，床面から正位の状態で出土した土師式土器の坏口縁部片である。

本跡は，出土遺物から9世紀後半の平安時代の前期に比定される遺構と思われる。



第143図　第11号住居跡実測図



第144図　第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 1	坏形土器 土師器	A (14.2) B (5.1)	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部はやや外反する。	水挽き整形後内面ヘラ磨き。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	5% P51
2	坏形土器 土師器	A (15.2) B (3.3)	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	水挽き整形後内面ヘラ磨き。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	3% P52
3	坏形土器 土師器	A (10.4) B (1.8)	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	水挽き整形。	砂粒・雲母・長石・石英 褐灰色 普通	5% P53
4	高台付土器 土師器	B (2.3) C (9.0)	高台は外下方にのびる。	高台部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 淡橙色 普通	3% P54

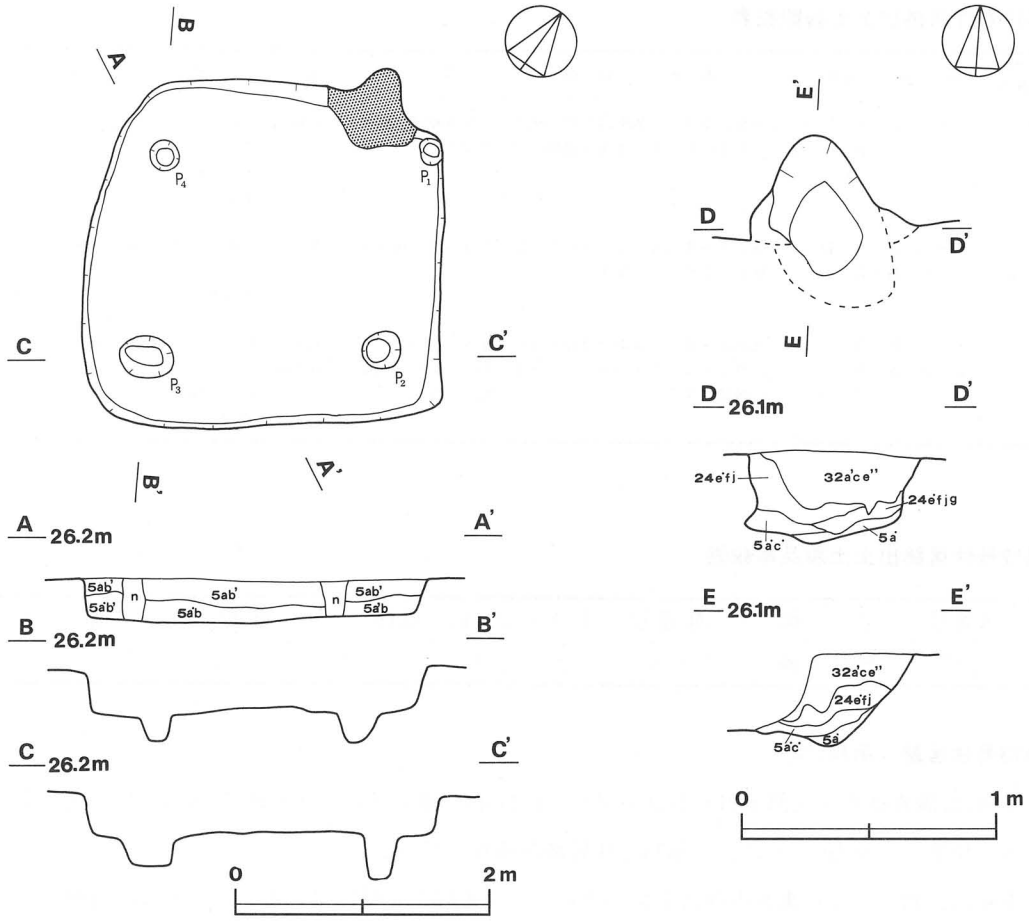
第12号住居跡（第145図）

本跡は，調査区の中央部B2g$_8$区を中心に確認された住居跡で，第11号住居跡の東方1.5m，第13号住居跡の北方3mに位置している。

本跡は，耕作のため東西方向にトレンチャーによる撹乱を受けている。平面形は，一辺が2.8mで，南と西のコーナーは隅丸方形状を呈している。主軸方向は，N－30°－Wを指す小形の住居跡である。壁は，締まりあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，21～29cmである。床はほぼ平坦で，全体的に固く踏み固められているが，トレンチャーによる撹乱部は帯状に凹んでいる。ピットは，4か所検出されたが，規模や配列からP$_2$・P$_3$・P$_4$が主柱穴と思われる。P$_2$は，直径32cmの円形を呈し，深さ45.5cm，P$_3$は，長径44cm・短径34cm，深さ31cm，P$_4$は，長径26cm・短径24cm，深さ28cmの規模である。カマドは，北コーナー部に付設されている。コーナー部にカマドが付設されている住居跡は，当遺跡に於いては，本跡一軒のみである。カマドは，約3分の2が斜めにトレンチャーにより撹乱を受けているため遺存状態が悪く，袖部，天井部は消滅しており，平面形，規模等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると，規模は長さ70cm・幅60cm，焚口部幅不明，掘り方は，壁を幅45cmで，45cmほど外側に掘り込み，火床は，長径38cm・短径29cmの楕円形を呈し，床を5cmほど掘り込んでいるものと思われる。

覆土は，トレンチャーによる撹乱部を除き自然堆積の状態を呈し，褐色のローム粒子を主体に締まりを有している。

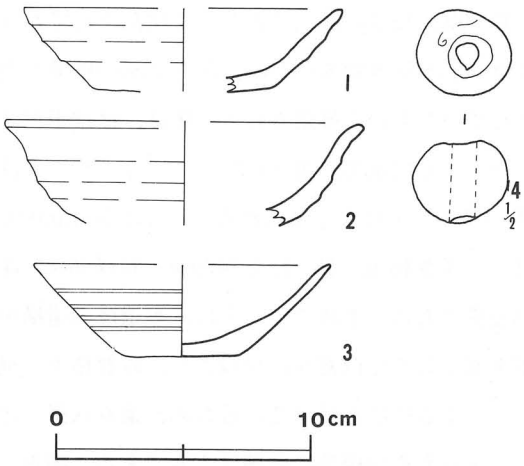
遺物は，土師式土器片87点，須恵器片4点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片2点が出土した。完形の遺物は出土しなかった。第146図1・2は，カマド内覆土から出土した土師式土器の坏片である。第146図3は，北東部壁際の床面から逆位の状態で出土した土師式土器の坏



第145図　第12号住居跡実測図

片である。

本跡は，出土遺物から10世紀前後の平安時代前期末から中期初頭に比定される遺構と推定される。



第146図　第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第146図 1	坏形土器 土師器	A (12.4) B (3.3)	底部は平底で，体部は内彎気味に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	水挽き整形。底部外面回転ヘラ切り。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	40% P55
2	坏形土器 土師器	A (14.2) B (4.1)	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	水挽き整形後内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	20% P56
3	坏形土器 土師器	A (11.6) B (3.6) C (4.5)	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	水挽き整形後内面ヘラ磨き。ロクロ回転方向は右。底部回転ヘラ切り。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	15% P57

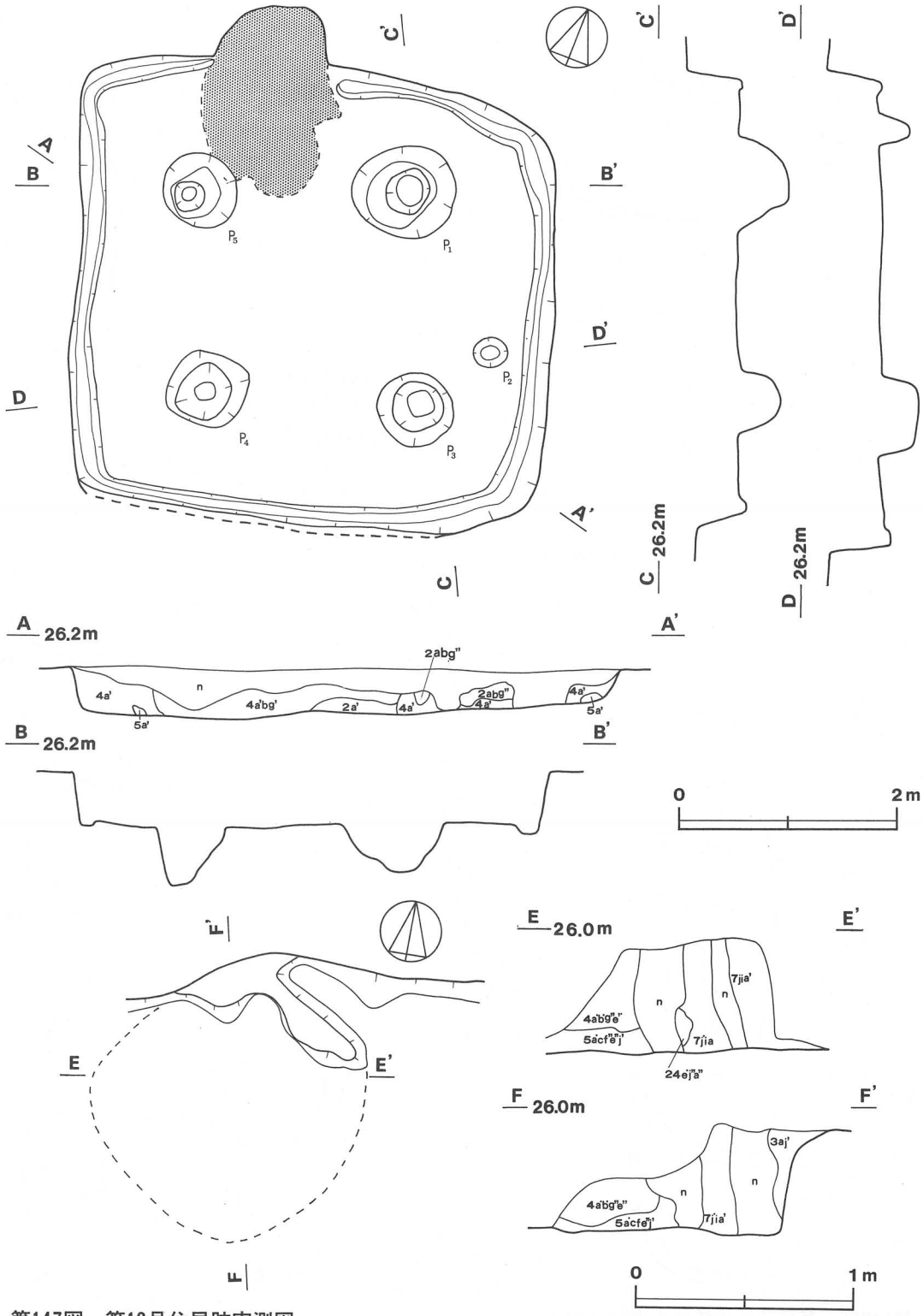
第12号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第146図 4	球状土錘	DP 8	2.2×2.5	0.7	11.6	100% 一方穿孔

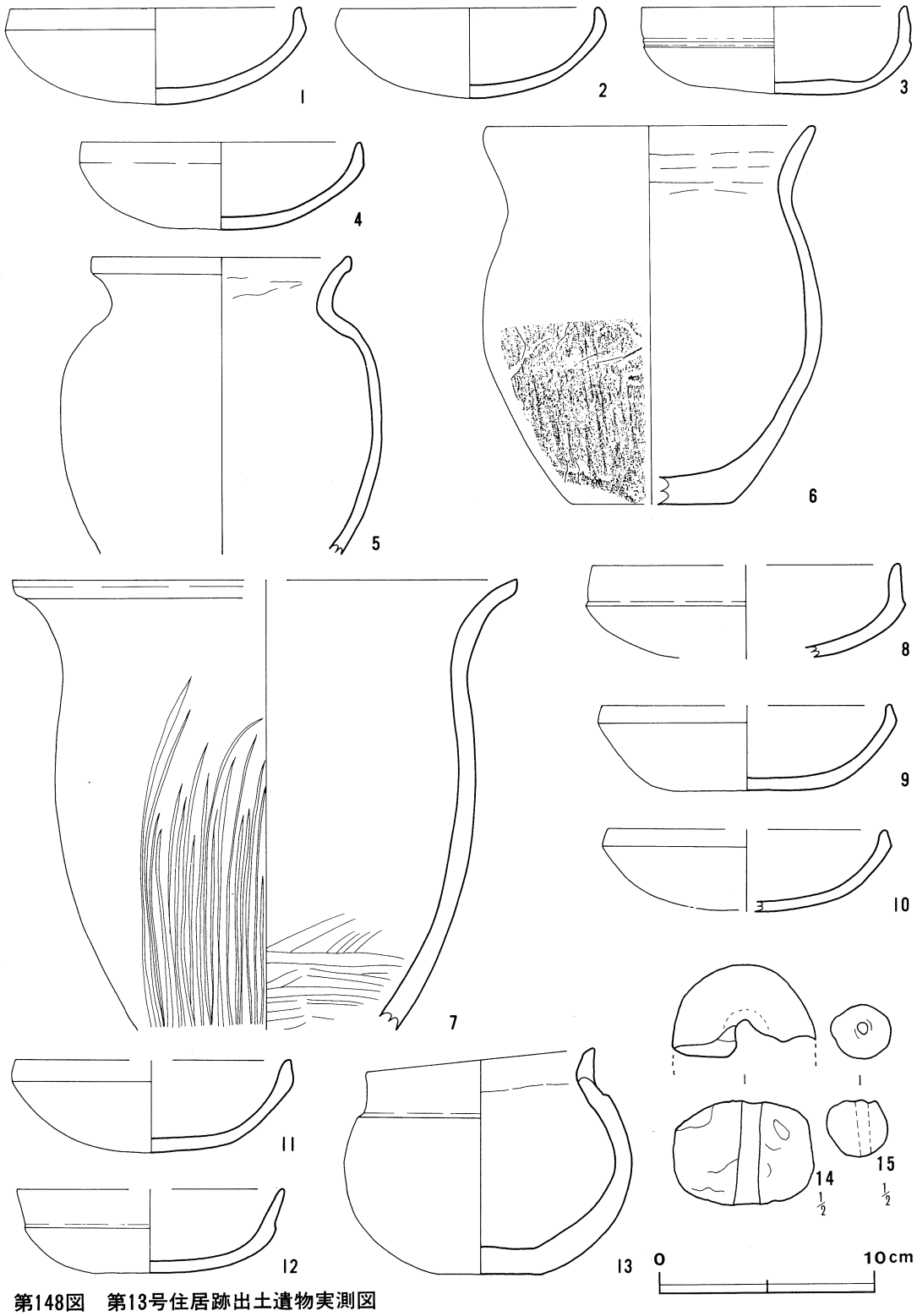
第13号住居跡 (第147図)

本跡は，調査区の中央部 B2h$_8$・B2h$_9$・B2i$_8$・B2i$_9$区に確認された住居跡で，第12号住居跡の南方3mに位置し，東方0.4mには，第14号住居跡が隣接している。

本跡は，耕作のため東西方向にトレンチャーによる撹乱を受けている。平面形は，長軸4.40m・短軸4.30mで，北東コーナー部は隅丸形をなしており不整方形を呈している。主軸方向は，N－19°－Wを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は45cmである。南側の壁は長さ3.30mにわたって撹乱されており，正確な壁の検出は不可能であったが，壁下にはカマドを除き幅5～20cm，深さ7cmの壁溝が全周していたので撹乱部の壁は壁溝に沿って構築されていたものと推定される。床は，ほぼ平坦で全体的に硬く踏み固められているが，トレンチャーによる撹乱部は帯状に凹んでいる。ピットは，5か所検出され，規模や配列からP_1・P_3・P_4・P_5が主柱穴と思われる。P_1は，長径100cm・短径87cm，深さ47cm，P_3は，直径70cmの円形を呈し，深さ46cm，P_4は，長径70cm・短径66cm，深さ47cm，P_5は，長径73cm・短径68cm，深さ56cmの規模である。本跡のピットは，当遺跡の遺構中，最大の規模を有している。カマドは，北側壁中央部からやや西寄りに付設され，砂質粘土で構築されているが縦方向に約3分の2がトレンチャーによる撹乱を受けているため，遺存状態が悪く，右袖部を残しては，ほとんどが消滅しており，平面形や規模等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると，長さ90cm，幅80cmを有するものと思われる。



第147図　第13号住居跡実測図



第148図　第13号住居跡出土遺物実測図

覆土は，上層部がほとんど撹乱を受けており，中・下層部は自然堆積状を呈し，ローム粒子を主体に炭化粒子を含む黒褐色土または暗褐色土で，締まっている。

遺物は，土師式土器片465点，須恵器片14点が出土した。完形の遺物第148図１・２・３・４は，カマド付近の床面から正位の状態で出土した土師式土器の坏である。第148図５は，南西コーナー部付近の床面から横位の状態で出土した土師式土器片を接合した甕の一部である。第148図６は，カマド付近の床面から正位の状態で出土した土師式土器の小形甕片で，70%の完存率である。第148図７は，南西コーナー付近の床面から正位の状態で出土した土師式土器の甑片である。完存率は約50%である。

本跡は，出土遺物から古墳時代後期の鬼高Ⅲ式期に比定される遺構と推定される。

第13号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第148図 1	坏形土器 土師器	A 13.6 B 4.5	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	95% P62
2	坏形土器 土師器	A 12.0 B 4.2	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 普通	100% P68
3	坏形土器 土師器	A 12.3 B 4.1	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに内彎気味に内傾して立ち上がる。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	100% P69
4	坏形土器 土師器	A 13.0 B 4.1	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	97% P70
5	甕形土器 土師器	A 12.0 B (14.0)	胴部は丸く張り，胴上位に最大径を有する。口縁部は外反して外上方に開き，端部に面をなす。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英 雲母 明褐灰色 普通	40% P59
6	甕形土器 土師器	A 15.2 B 17.7 C (7.3)	底部は平底で，胴部はやや長胴を呈し，中位が丸く張っている。口縁部は外反しながら外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ・外面上位ナデ，下位縦位のヘラ磨き。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい褐色 普通	75% P58
7	瓶形土器 土師器	A (23.5) B (21.0)	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部は外反しながら開き，口縁端部に面をなす。底部の孔は半円状を呈しているが，正円状に抜けるものと思われる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ，内面下位横位のヘラ削り・外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色 普通	45% P60
8	坏形土器 土師器	A (14.2) B (4.3)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ・外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	15% P67

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
9	坏形土器 土師器	A (13.6) B (4.0)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	60% P66
10	坏形土器 土師器	A (13.0) B (3.8)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	20% P64
11	坏形土器 土師器	A (12.8) B 4.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母・長石 黒褐色 普通	70% P63
12	坏形土器 土師器	A (12.4) B 3.9	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	20% P65
13	壺形土器 土師器	A 10.5 B 10.0 C 4.9	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，胴中位から内傾する。口縁部はわずかに外反して直立する。外面の胴部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ，外面はわずかにナデの痕跡を有するがほとんどが剝離している。底部外面ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 にぶい赤褐色 普通	95% P61

第13号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
第148図 14	球状土錘	DP9	3.4×4.5	0.8	(39.5)	50% 一方穿孔
15	球状土錘	DP10	1.7×2.0	0.35	5.8	100% 一方穿孔

第14号住居跡 (第149図)

本跡は，調査区の中央部B2i0区を中心に確認された住居跡で，第13号住居跡が西方0.4mに隣接し，第19号住居跡の北西コーナー部と本跡の南東コーナー部が重複している。土層や床面を検討した結果，本跡は，第19号住居跡の壁を切り込んで住居を構築したものと思われる。したがって，本跡は，第19号住居跡よりも新しい遺構である。

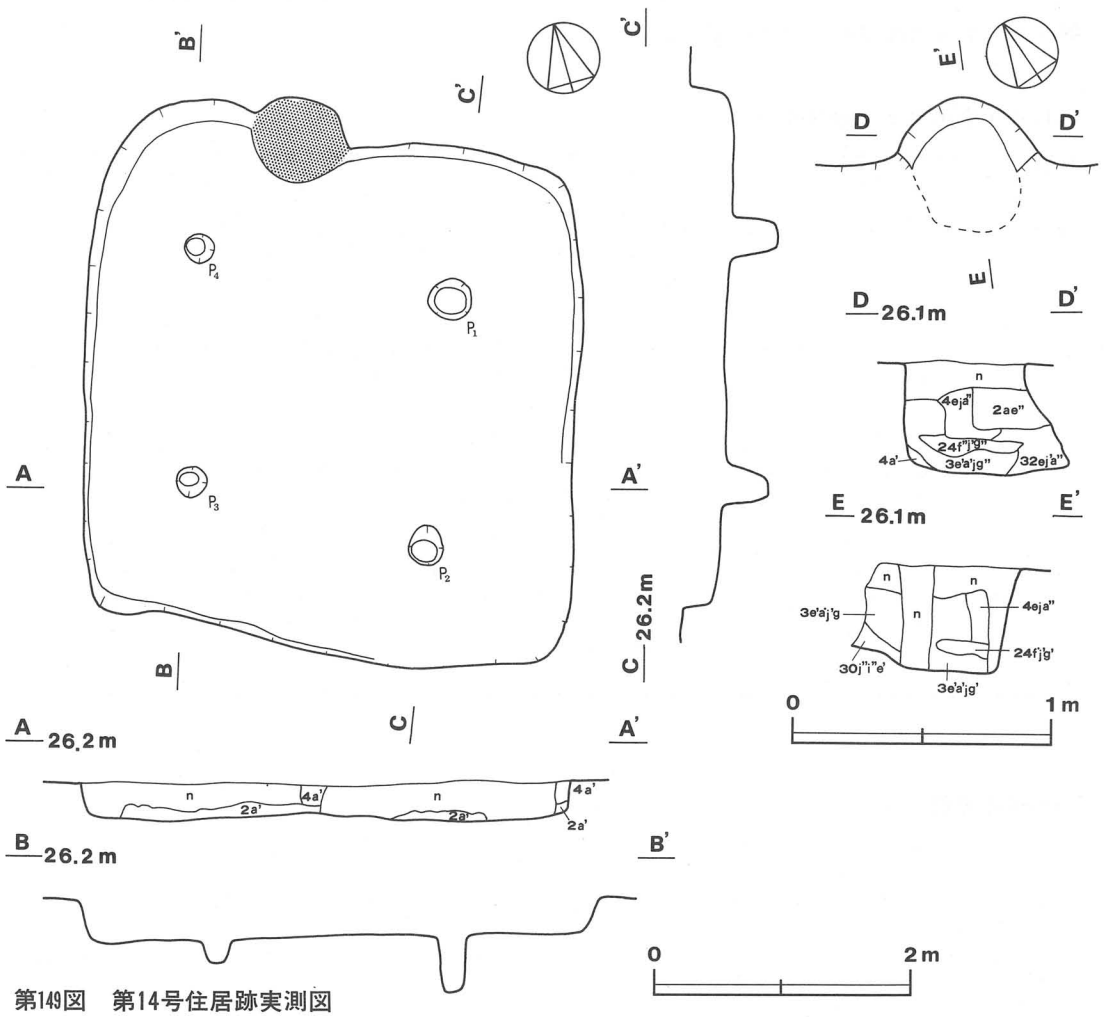
本跡は，耕作のため東西方向に，トレンチャーによる撹乱を受けている。平面形は，長軸4.10m・短軸3.90mのやや方形を呈し，主軸方向は，N－21°－Eを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は，30～37cmである。床は，ほぼ平坦で，中央部を中心に，ほぼ全域が硬く踏み固められているが，トレンチャーによる撹乱部は帯状に凹んでいる。ピットは4か所検出され，いずれも主柱穴と思われる。P_1は，直径34cmの円形を呈し，深さ38cm，P_2は，長径33cm・短径27cm，深さ38cm，P_3は，直径25cmの円形を呈し，深さ48cm，P_4は，長径25cm・短径23cmのほぼ円形を呈し，深さ20cmの規模である。カマドは，北側壁

中央からやや西寄りに付設され，砂質粘土で構築されているが，横方向に約３分の２がトレンチャーによる撹乱を受けているため，規模や平面形の詳細は不明である。調査した部分から推定すると，規模は長さ90cm・幅80cmを有するものと推定される。

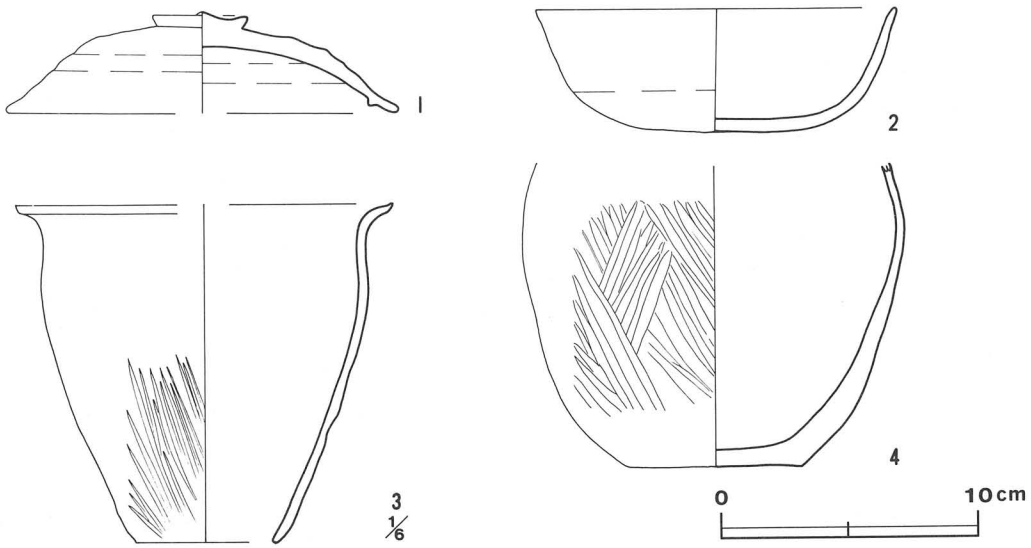
覆土は，上層部の遺構内全体が撹乱を受けており，下層部は，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子・焼土粒子を少量含む黒褐色土で，締まりを有している。

遺物は，土師式土器片90点，須恵器片５点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片19点が出土した。完形の遺物は無く，第150図１は，カマド内覆土から出土した須恵器片で，扁平な宝珠形のつまみを有する蓋である。第150図２は，カマド内覆土から出土した土師式土器の坏で，完存率は約70％である。第150図３は，カマドの直前の床面から正位の状態で出土した土師式土器の甑である。完存率は約50％である。

本跡は，出土遺物から８世紀初頭の奈良時代初期に比定されるものと推定される。



第149図　第14号住居跡実測図



第150図　第14号住居跡出土遺物実測図

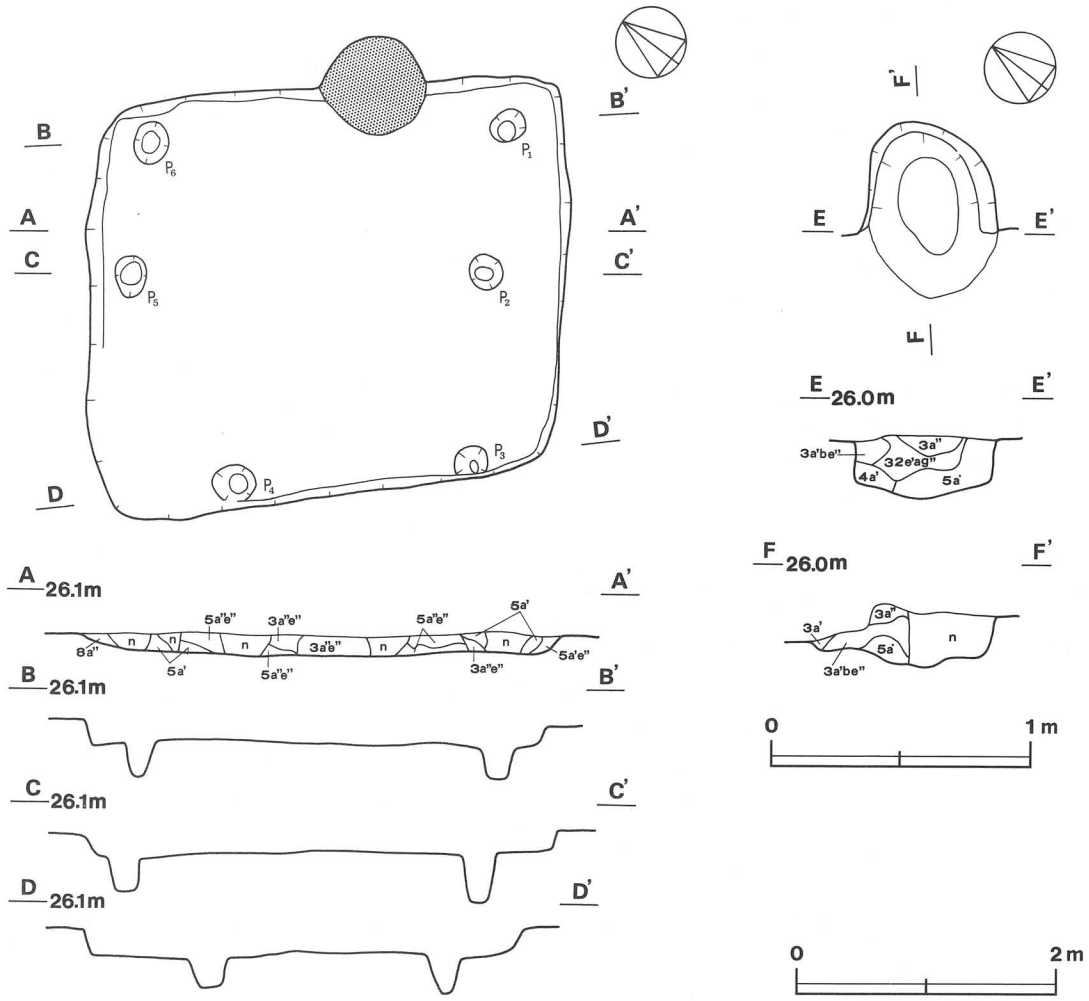
第14号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第150図 1	蓋 須恵器	A (15.6) B 4.0	天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部は丸く，口縁部はわずかに外反して外下方にのびる。口縁内部にかえりを有する。	水挽き整形で，天井頂部は回転ヘラ削り，つまみは横ナデ。ロクロ回転方向は右。	砂粒・長石・礫 灰色 普通	60% P74
2	坏形土器 土師器	A (14.3) B 4.8	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直線的に外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き，外面手持ちヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母・砂礫・スコリア にぶい橙色 普通	70% P73
3	甕形土器 土師器	A (29.6) B 26.7 C 11.0	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部は外反しながら開き端部に面をなす。底部の孔は正円状に抜ける。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ・外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英・雲母・礫 にぶい橙色 普通	40% P72
4	甕形土器 土師器	B (12.0) C 7.0	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，胴中位から内傾する。	胴部内面ナデ，外面斜位の交差ヘラ磨き。底部外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・石英・長石・砂礫 にぶい赤褐色 普通	20% P71

第15号住居跡（第151図）

本跡は，調査区の中央部B3i1・B3i2・B3j1・B3j2区に確認された住居跡で，第14号住居跡の東方約2m，第16号住居跡の北西12mに位置し，第19号住居跡の北東コーナー部付近と本跡の西コーナー部が重複している。土層や床面及び出土遺物から検討した結果，本跡は，第19号住居跡よりも新しい遺構である。

本跡は，耕作のため東西方向にトレンチャーによる撹乱を受けている。平面形は，長軸3.72m・短軸3.20mの方形を呈し，主軸方向は，N－56°－Eを指している。壁は，締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がり，壁高は，17～22cmである。床は，ほぼ平坦で，中央部が硬く踏み固められているが，トレンチャーによる撹乱部は帯状に凹んでいる。ピットは，6か所検出され，規模や配列からいずれも主柱穴と思われる。P_1は，長径30cm・短径25cm，深さ24cm，P_2は，長径28cm・短径27cmのほぼ円形を呈し，深さ40cm，P_3は，長径25cm・短径23cm，深さ31cm，P_4は，長径35cm・短径30cm，深さ27cm，P_5は，長径32cm・短径25cm，深さ29cm，P_6は，長径35cm・短径26cm，深さ28cmの規模である。P_3・P_4は，カマドの反対側にあたる南西側壁際に約1.5mの間を保ち構築されており，位置的に見ると出入口に伴なうものではないかと推定される。カマドは，北東側壁の中央からやや南寄りに付設され，砂質粘土で構築されているが，斜めにトレンチャーに



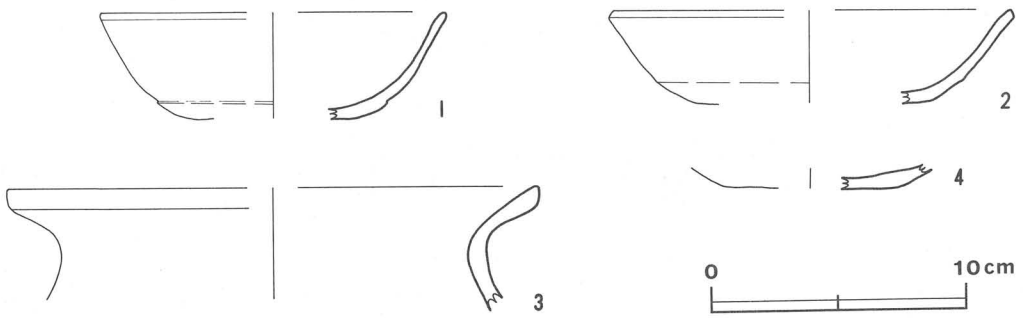
第151図　第15号住居跡実測図

よる撹乱を受けているため，袖部や天井部は消滅しており，規模や平面形の詳細は不明である。調査した部分から推定すると，規模は，長さ70cm・幅55cmを有するものと推定される。

覆土は，トレンチャーによる撹乱部を除き，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子を主体に含む褐色土で締まっている。

遺物は，土師式土器片39点，須恵器片３点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片１点が出土した。完形の遺物は無く，第152図１・２は，カマド内の覆土から出土した土師式土器の坏片である。

本跡は，９世紀後半の平安時代前期に比定される遺構であると推定される。



第152図　第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図 1	坏形土器 土師器	A（13.6） B（4.2）	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方にのび，そのまま口縁部に至る。外面の底部と体部の境にわずかに稜を有する。	口縁部及び体部内面横ナデ後横位のヘラ磨き，外面横ナデ。底部手持ちヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	7％ P76 内面黒色処理
2	坏形土器 土師器	A（15.8） B（4.2）	体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，そのまま口縁部へ至る。	口縁部及び体部内面横ナデ後横位のヘラ磨き・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・ にぶい褐色 普通	5％ P77 内面黒色処理
3	甕形土器 土師器	A（10.4） B（3.4）	口縁部は外反して大きく外上方へ開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 スコリア にぶい橙色 普通	5％ P75
4	坏形土器 土師器	B（0.8） C（6.8）	底部は平底である。	回転ヘラ削り。切り離しは不明。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	5％ P78

第16号住居跡（第153図）

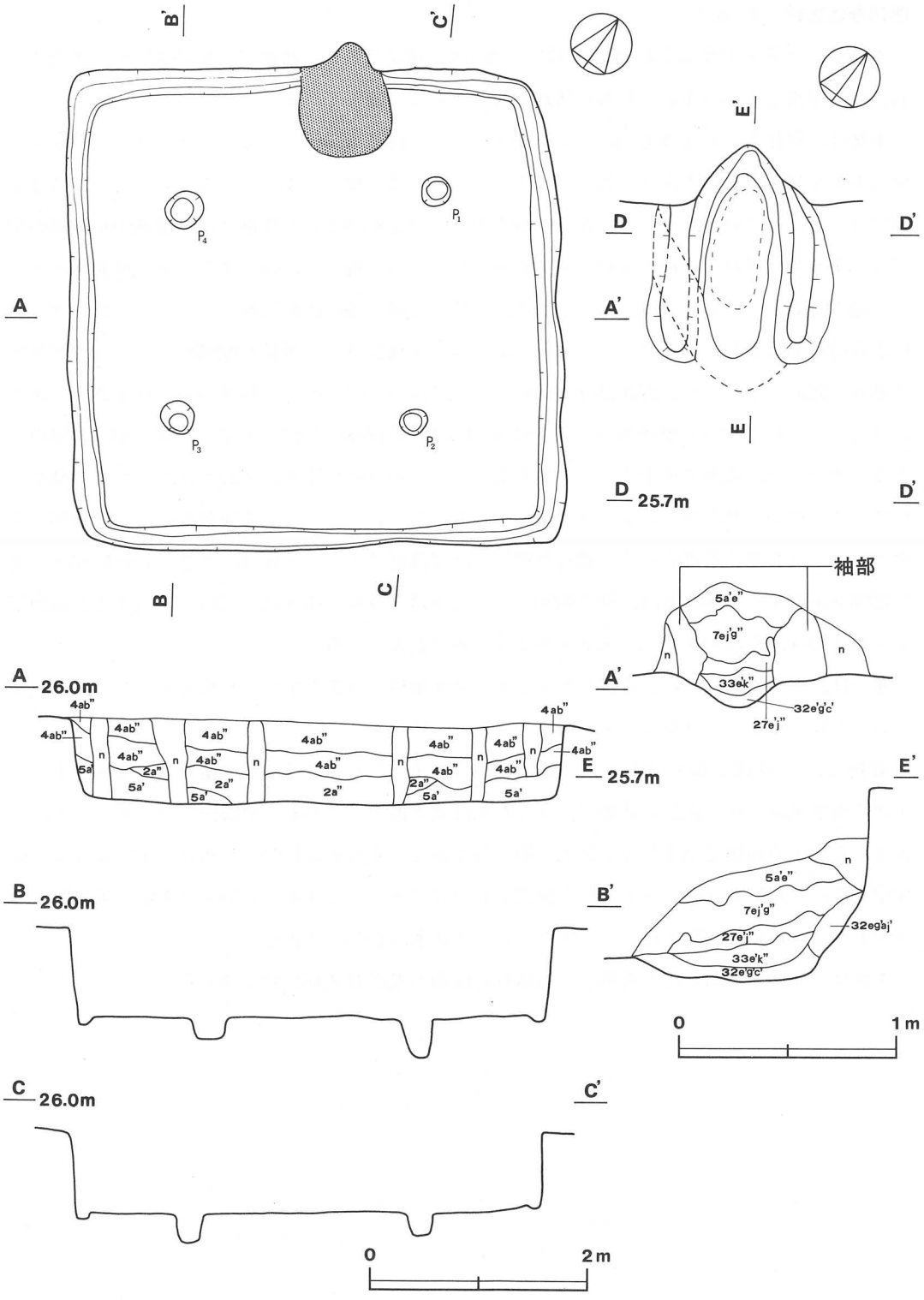
本跡は，調査区の東部C3b4・C3b5・C3c4・C3c5区に確認された住居跡で，第15号住居跡の南東，11.5m，重複している第17・18号住居跡の西方３ｍに位置している。

本跡は，耕作のため東西方向にトレンチャーによる撹乱を受けている。平面形は，一辺が4.50ｍの方形を呈し，主軸方向は，Ｎ－40°－Ｗを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，75～85cmを測り，75～85cmという壁高は，当遺跡の住居跡の中では，第６号住居跡と本跡の２軒のみである。壁下には，幅７～20cm，深さ８cmの壁側溝がカマドを除き全周している。床は，ほぼ平坦で，全体的に硬く踏み固められているが，トレンチャーによる撹乱部は帯状に凹んでいる。ピットは，４か所検出され，規模や配列からいずれも主柱穴であると思われる。P_1は，直径28cmの円形を呈し，深さ30cm，P_2は，長径25cm・短径23cm，深さ23cm，P_3は，長径32cm・短径29cm，深さ41cm，P_4は，直径36cmの円形を呈し，深さ23cmの規模である。カマドは，北西の壁中央部からやや北コーナー寄りに付設されており，砂質粘土で構築されている。内面は熱を受けレンガ状に焼けている。トレンチャーによる撹乱部は，左側袖部の中央とカマドの右側先端部のみで，遺存状態は，ほぼ良好である。規模は，長さ114cm・幅83cm，焚口部幅35cmである。掘り方は，壁を幅30cmで，27cmほど外側に掘り込んでいる。火床は，長径77cm・短径30cmの楕円形を呈し，床面を９cmほど掘り込んでいる。

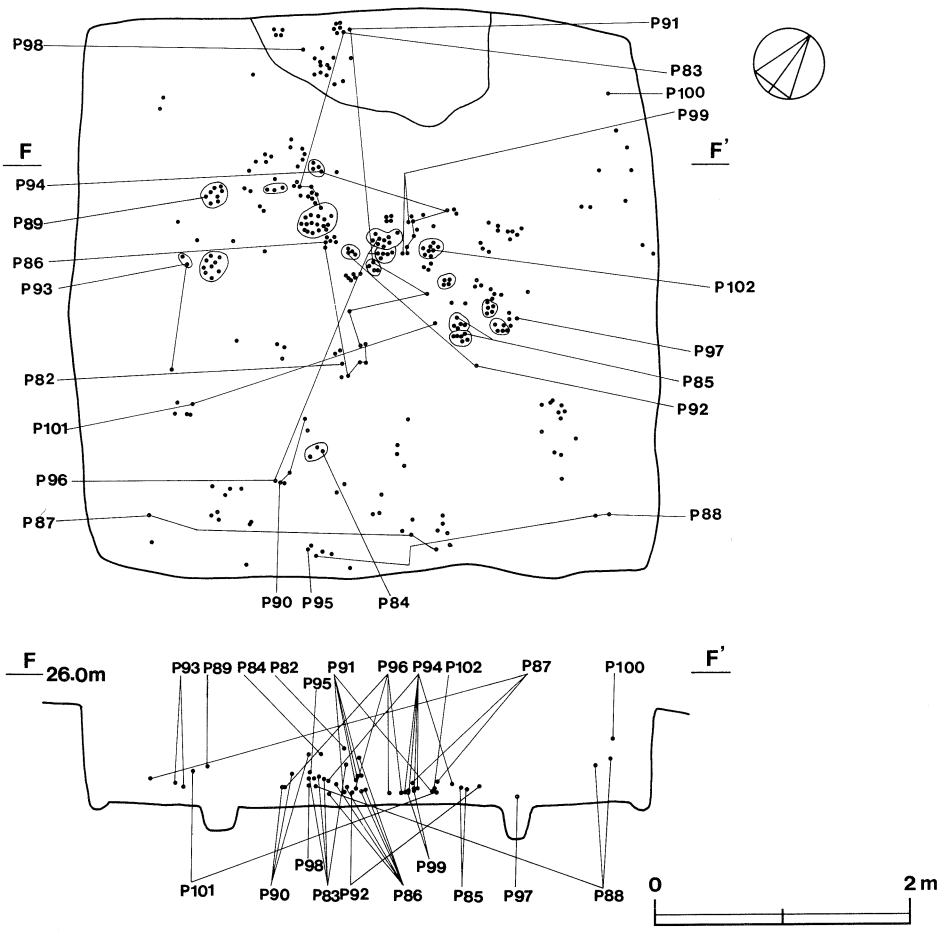
覆土は，トレンチャーによる攪乱部を除き，自然堆積の状態を呈し，暗褐色土または黒褐色土でローム粒子・ロームブロックを主体に含み締まっている。

遺物は，土師式土器片968点，須恵器片35点が出土した。ほぼ完形の遺物は，第155図１で，床面中央部東寄りから正位の状態で出土した土師式土器の坏である。第155図２は，北コーナーの床面から正位の状態で出土した土師式土器の坏である。完存率は約65％である。第155図３は，床面中央部から正位の状態で出土した土師式土器の坏である。完存率は約50％である。第155図４はカマド内より正位の状態で出土した甕である。完存率は約75％である。

本跡は，前述した如く出土遺物から古墳時代後期の鬼高Ⅱ式期に比定される。



第153図　第16号住居跡実測図



第154図　第16号住居跡出土土器接合関係図

第16号住居跡出土土器観察表

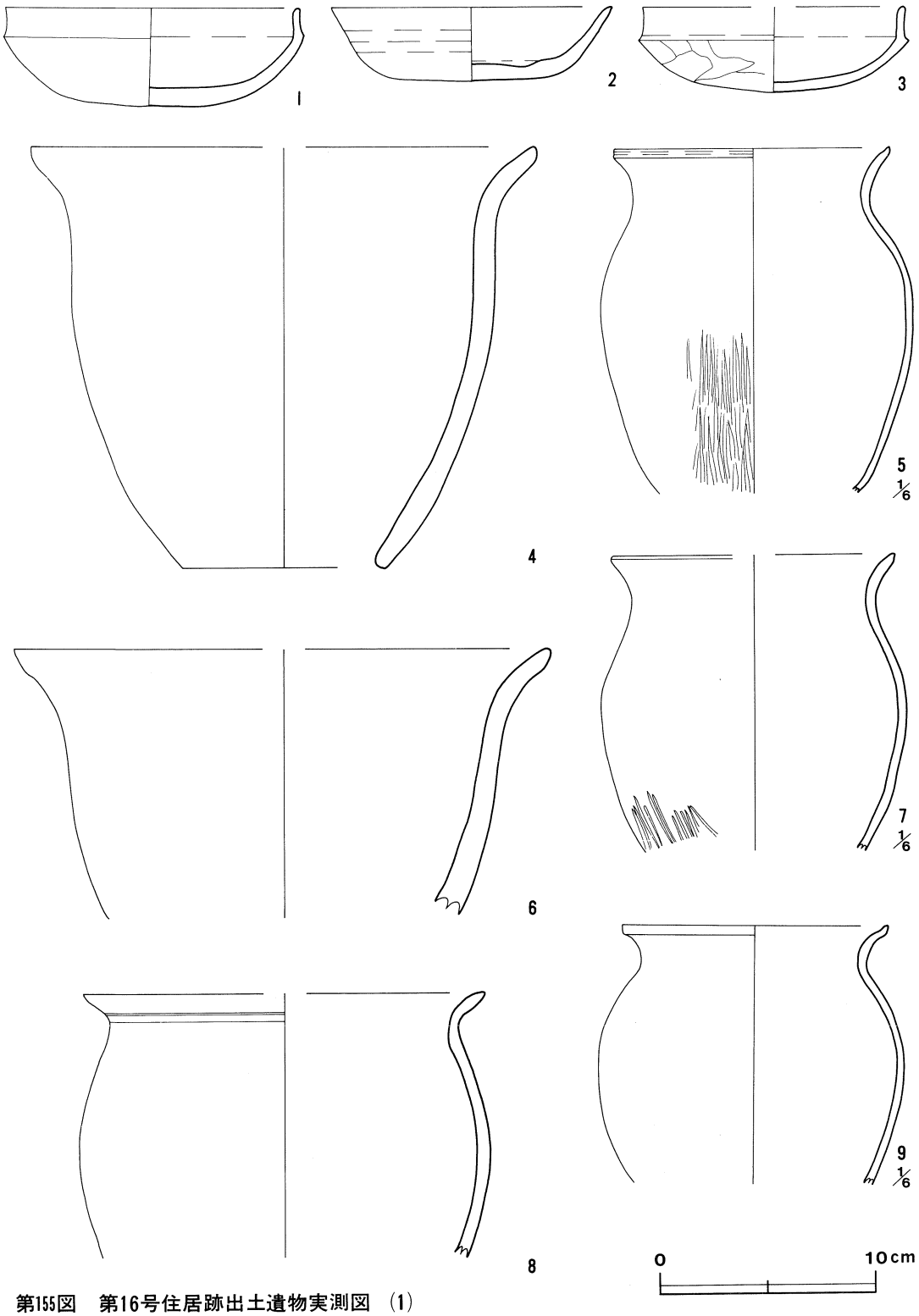
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第155図 1	坏形土器 土師器	A 14.4 B 4.8	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反してわずかに内傾する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ・外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	97% P97
2	坏形土器 土師器	A (13.0) B 3.4	底部は扁平な丸底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	水挽き整形。底部外面回転ヘラ切り。ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	60% P100
3	坏形土器 土師器	A (12.2) B (5.0)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ・外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石 にぶい赤褐色 普通	60% P102

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
4	甕形土器 土師器	A (23.4) B 19.6	底部は正円状に抜け，胴部はゆるやかに内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は外反して外上方へ開く。	口縁部内・外面横ナデ，胴部内面ナデ・外面縦位ヘラ磨き。底部内面横位ヘラ削り，外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・雲母・長石 礫 にぶい橙色 普通	35% P94
5	甕形土器 土師器	A 25.4 B (32.1)	胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，胴上位から内傾する。口縁部は外反しながら外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ・外面上位ナデ，下位縦位のヘラ磨き。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	70% P80
6	甕形土器 土師器	A (25.0) B (12.5)	胴部はわずかに内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外反して外上方へ開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母・長石 スコリア・礫 にぶい橙色 普通	25% P96
7	甕形土器 土師器	A (26.2) B (27.5)	胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，胴上位から内傾する。口縁部は外反しながら外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ，外面上位ナデ，下位縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英 褐灰色 普通	40% P81
8	甕形土器 土師器	A (18.6) B (12.3)	胴部は丸く張り，口縁部は外反して大きく開き，短い。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ・外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	10% P82
9	甕形土器 土師器	A 24.5 B (24.1)	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら外上方へ開き，端部に面をなす。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ・外面上位ナデ，下位縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	30% P79
第156図 10	坏形土器 土師器	A (15.0) B 4.5	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。外面の体部と口縁部の境にわずかに稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	40% P99
11	坏形土器 土師器	A (13.4) B 4.0	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに外傾する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい赤褐色 普通	50% P98
12	坏形土器 土師器	A (14.0) B (5.0)	体部は内彎しながら大きく開いて外上方に立ち上がり，口縁部は外傾する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	40% P101
13	甕形土器 土師器	A (17.2) B (19.0) C (8.0)	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，胴上位から内傾する。口縁部は外反して大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ，外面ナデ，下位ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	30% P86
14	甕形土器 土師器	A (13.0) B (5.5)	口縁部は外反して外上方に開く。口縁端部に沈線を有する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫・長石 にぶい褐色 普通	7% P87
15	甕形土器 土師器	B (9.3) C 6.6	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がる。	胴部及び底部内面ナデ。胴部外面斜位のヘラ磨き。	砂粒・礫・雲母・石英・長石 灰褐色 普通	10% P89
16	甕形土器 土師器	A (16.0) B (11.5)	胴部はわずかに内彎し，口縁部は外反して外上方へ開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	7% P95

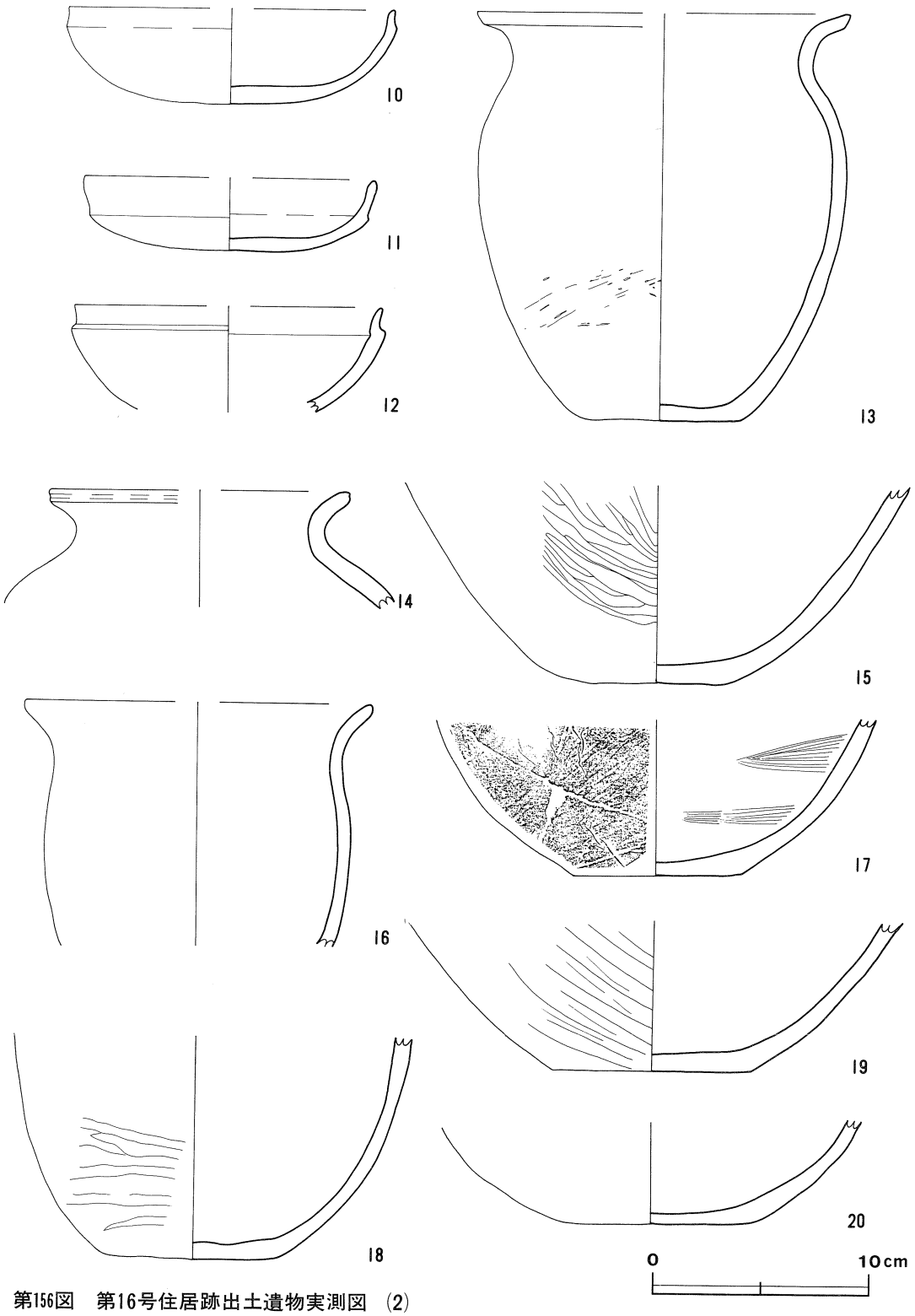
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
17	甕形土器 土師器	B（7.3） C　7.8	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部及び底部内面ナデ。胴部外面斜位のヘラ磨き。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	5％ P91
18	甕形土器 土師器	B（10.4） C　8.2	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がる。	胴部及び底部内面ナデ。胴部外面下位横位のヘラ磨き。	砂粒・砂礫・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	15％ P88
19	甕形土器 土師器	B（7.0） C　9.1	底部は平底で，胴部はわずかに内彎しながら外上方に立ち上がる。	胴部及び底部内面ナデ。胴部下位外面斜位のヘラ磨き。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい橙色 普通	5％ P85
20	甕形土器 土師器	B（4.4） C　8.2	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部及び底部内面ナデ。胴部外面斜位のヘラ磨き。	砂粒・雲母・長石・スコリア・礫 にぶい橙色 普通	7％ P90
第157図 21	甕形土器 土師器	A（22.4） B（17.0）	胴中位から内傾する。口縁部は外反しながら外上方へ開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	15％ P83
22	甑形土器 土師器	A（29.0） B（13.9）	胴部はわずかに内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部は外反して外上方へ開く。	口縁内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	5％ P92
23	甑形土器 土師器	A（28.4） B（21.0） C（13.8）	底部の孔は半円状を呈して抜けているが，正円状に抜けるものと思われる。胴部はやや内彎気味に外上方へ立ち上がる。	内面ナデ・外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・雲母・長石・スコリア にぶい橙色 普通	15％ P93

第16号住居跡出土土製品解説表

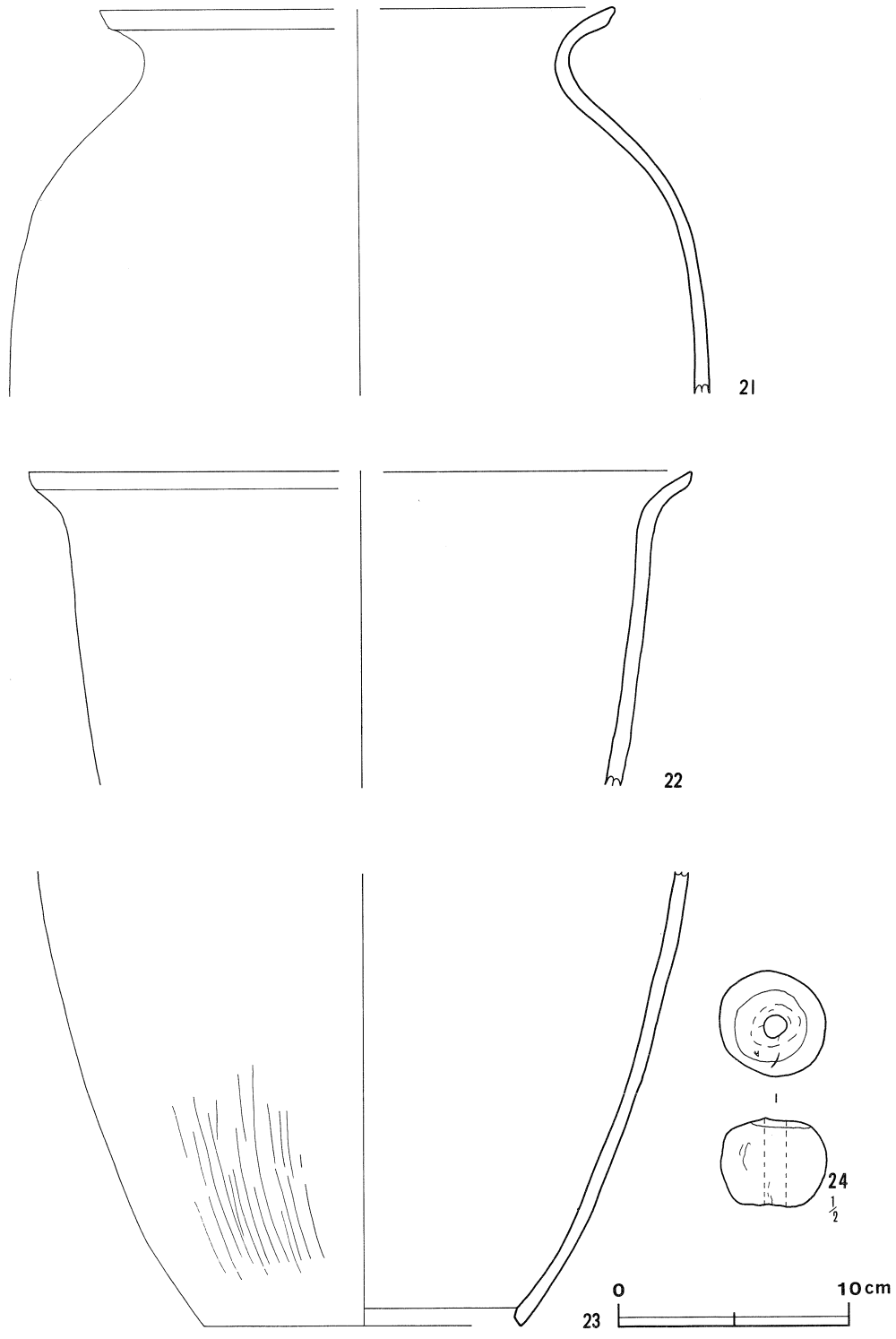
図版番号	名　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径（cm）	重量（cm）	備　考
第157図 24	球状土錘	DP11	2.6×3.2	0.7	27.3	100％ 一方穿孔



第155図　第16号住居跡出土遺物実測図　(1)



第156図　第16号住居跡出土遺物実測図　(2)

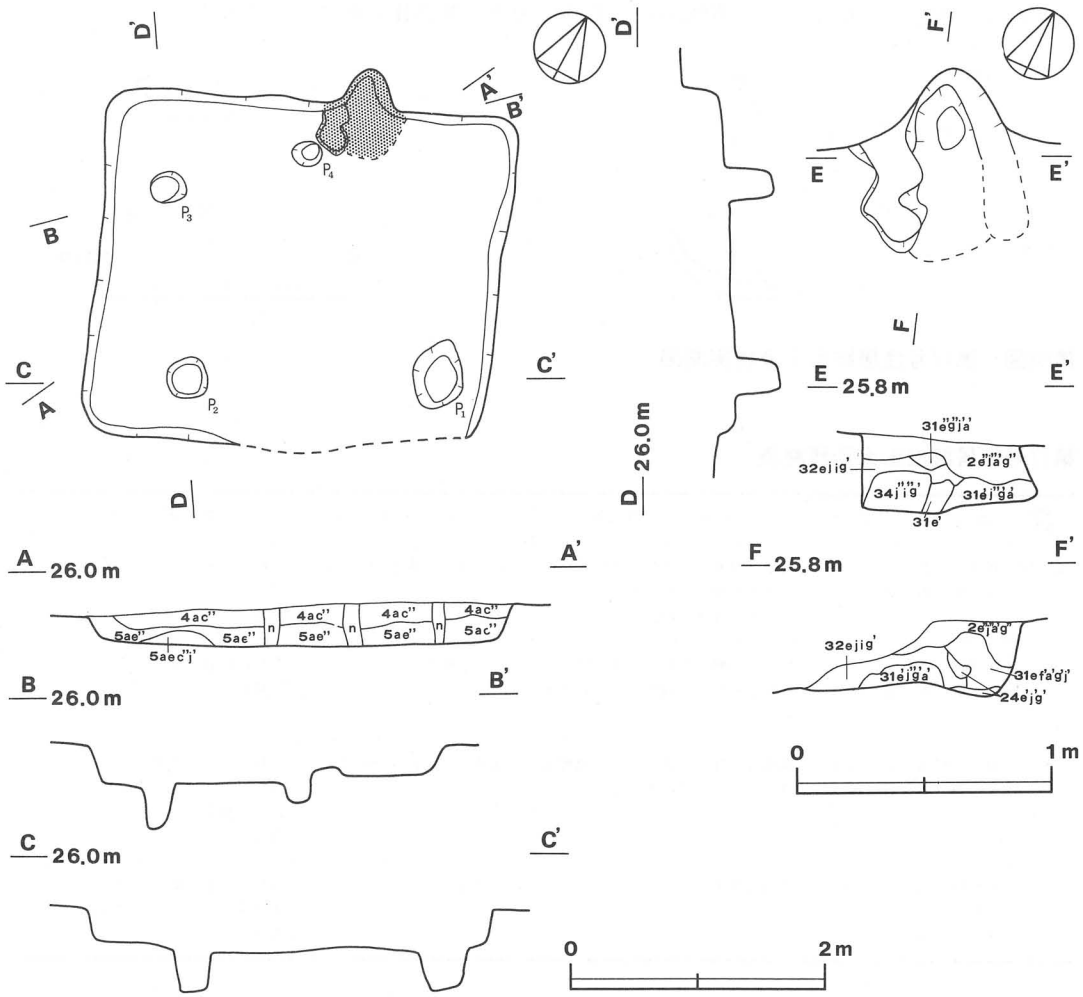


第157図　第16号住居跡出土遺物実測図　(3)

第17号住居跡（第158図）

本跡は，調査区の東部C3b6区を中心に確認された住居跡で，第16号住居跡の東方3mに位置し，本跡の南部と第18号住居跡の北部コーナー部が重複している。出土遺物等を検討した結果，本跡は，古墳時代後期の鬼高II式期に比定され，第18号住居跡は，9世紀後半の平安時代前期に比定される。したがって，本跡の方が古い遺構である。

本跡は，耕作のため東西方向にトレンチャーによる撹乱を受けている。平面形は，長軸3.16m・短軸2.75mの長方形を呈し，主軸方向は，N－26°－Wを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は，25～32cmを有する。床は，ほぼ平坦で，硬く踏み固められているが，トレンチャーによる撹乱部は帯状に凹んでいる。ピットは，4か所検出されたが，規模や配列等から，P_1・P_2・P_3が主柱穴と思われる。P_1は，長径55cm・短径41cm，深さ34cm，P_2は，



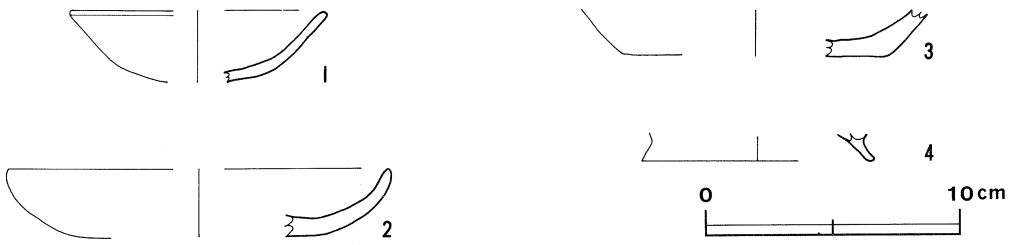
第158図　第17号住居跡実測図

長径34cm・短径33cm，深さ32cm，P_3は，長径30cm・短径28cm，深さ38cmの規模である。カマドは，北側壁の中央部からやや東コーナー寄りに付設され，砂質粘土で構築されているが，右側袖部とカマドの２分の１が，トレンチャーによる撹乱を受けているため，規模や平面形等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると，規模は長さ78cm・幅60cm，焚口部幅25cm程度と推定される。

覆土は，トレンチャーによる撹乱部を除き，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子・ロームブロックを主体に含む褐色土または暗褐色土で締まっている。

遺物は，土師式土器片26点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片２点が出土した。完形の遺物は無く，第159図１は，住居跡の西部に位置する床面から逆位の状態で出土した土師式土器の坏片である。

本跡は，前述した如く，出土遺物から古墳時代後期の鬼高II式期に比定される。



第159図　第17号住居跡出土遺物実測図

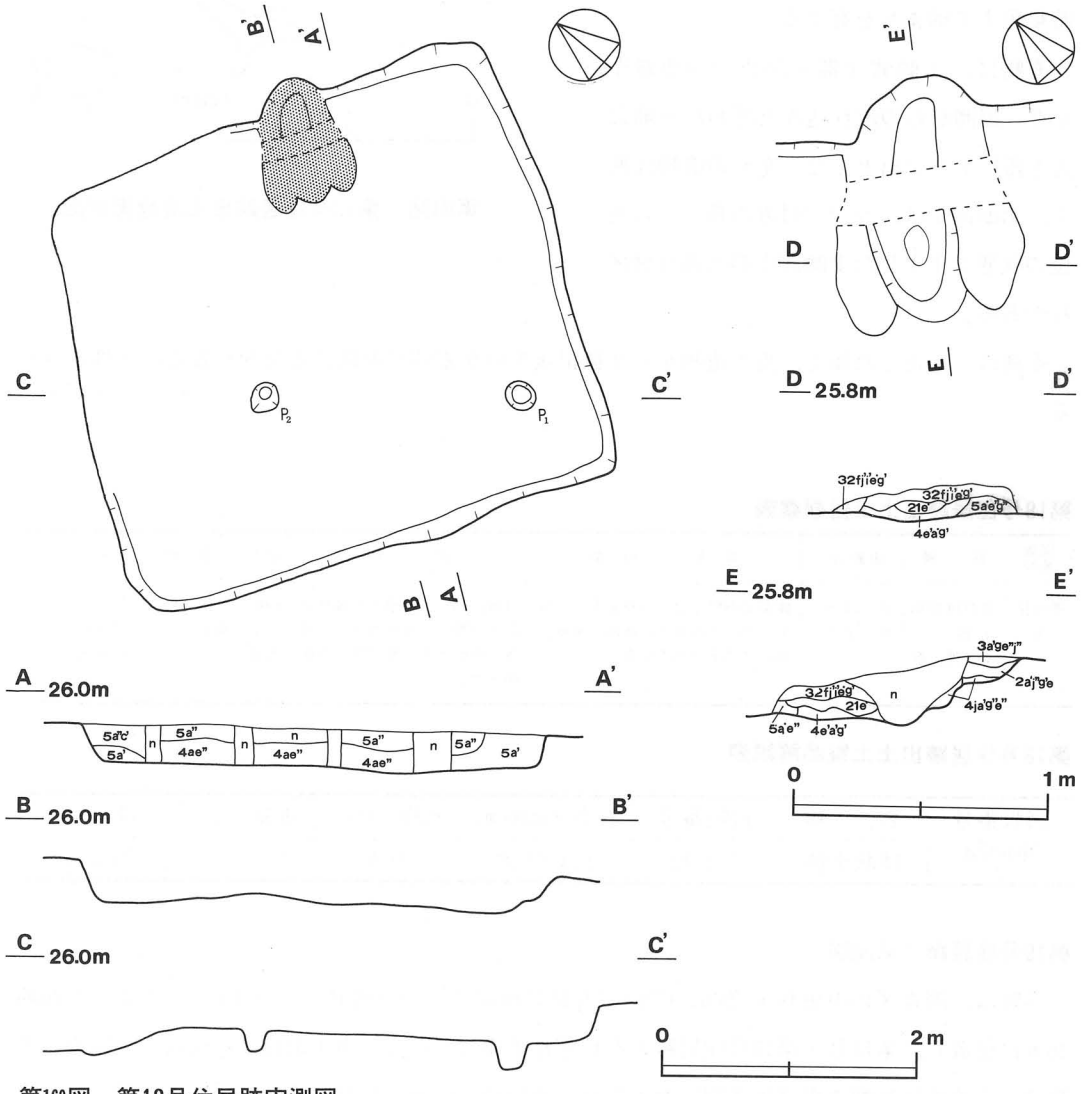
第17号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第159図 1	坏形土器 土師器	A (10.2) B (3.8)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて外上方に立ち上がり，そのまま口縁部へ至る。	水挽き整形。底部外面回転ヘラ切り。	砂粒・石英・長石 にぶい褐色 普通	5% P103
2	坏形土器 土師器	A (15.0) B 2.7	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	5% P104
3	甕形土器 土師器	B (1.8) C (10.2)	底部は平底で，体部はやや内彎気味に外上方へ立ち上がる。	内面ナデ。外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・石英 長石 にぶい褐色 普通	5% P105
4	高台付坏形土器 土師器	D (9.2) E (1.1)	高台は外下方にのびる。	内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	2% P107

第18号住居跡（第160図）

本跡は，調査区の東部C3c6・C3c7区を中心に確認された住居跡で，第16号住居跡の東方４ｍ，第22号住居跡の北西19ｍに位置し，第17号住居跡の南側と本跡の北コーナーが重複している。出土遺物等を検討した結果，本跡は，９世紀後半の平安時代前期に比定されるものと推定され，本跡の方が新しい遺構である。

本跡は，耕作のため東西方向にトレンチャーによる撹乱を受けている。平面形は，長軸４ｍ・短軸3.6ｍの方形を呈し，主軸方向は，Ｎ－34°－Ｅを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は，30～33cmである。床は，北西から南東にやや傾斜し，硬く踏み固められているが，トレンチャーによる撹乱部は帯状に凹んでいる。ピットは，２か所検出され

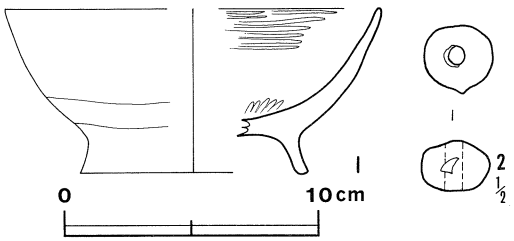


第160図　第18号住居跡実測図

不規則ではあるが，いずれも主柱穴と思われる。P_1は，直径が24cmの円形を呈し，深さ20cm，P_2は，直径22cmの円形を呈し，深さ18cmの規模である。カマドは，北東側壁の中央から東コーナー寄りに付設されているが，横方向にトレンチャーによる撹乱を受けているため，規模や平面形等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると，規模は，長さ97cm・幅75cm，焚口部幅30cm程度であると思われる。掘り方は，壁幅50cmで，外側に20cm掘り込んでいる。火床部は，不明である。

覆土は，トレンチャーによる撹乱部を除き，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子・ロームブロックを主体に含む褐色土または暗褐色土で締まりを有する。

遺物は，土師式土器片38点，須恵器片6点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片1点が出土した。完形の遺物は無く，第161図1は，カマド付近の覆土から逆位の状態で出土した土師式土器の高台付坏片である。



第161図　第18号住居跡出土遺物実測図

本跡は，前述した如く，出土遺物から9世紀後半の平安時代前期に比定されるものと推定される。

第18号住居跡出土土器観察表

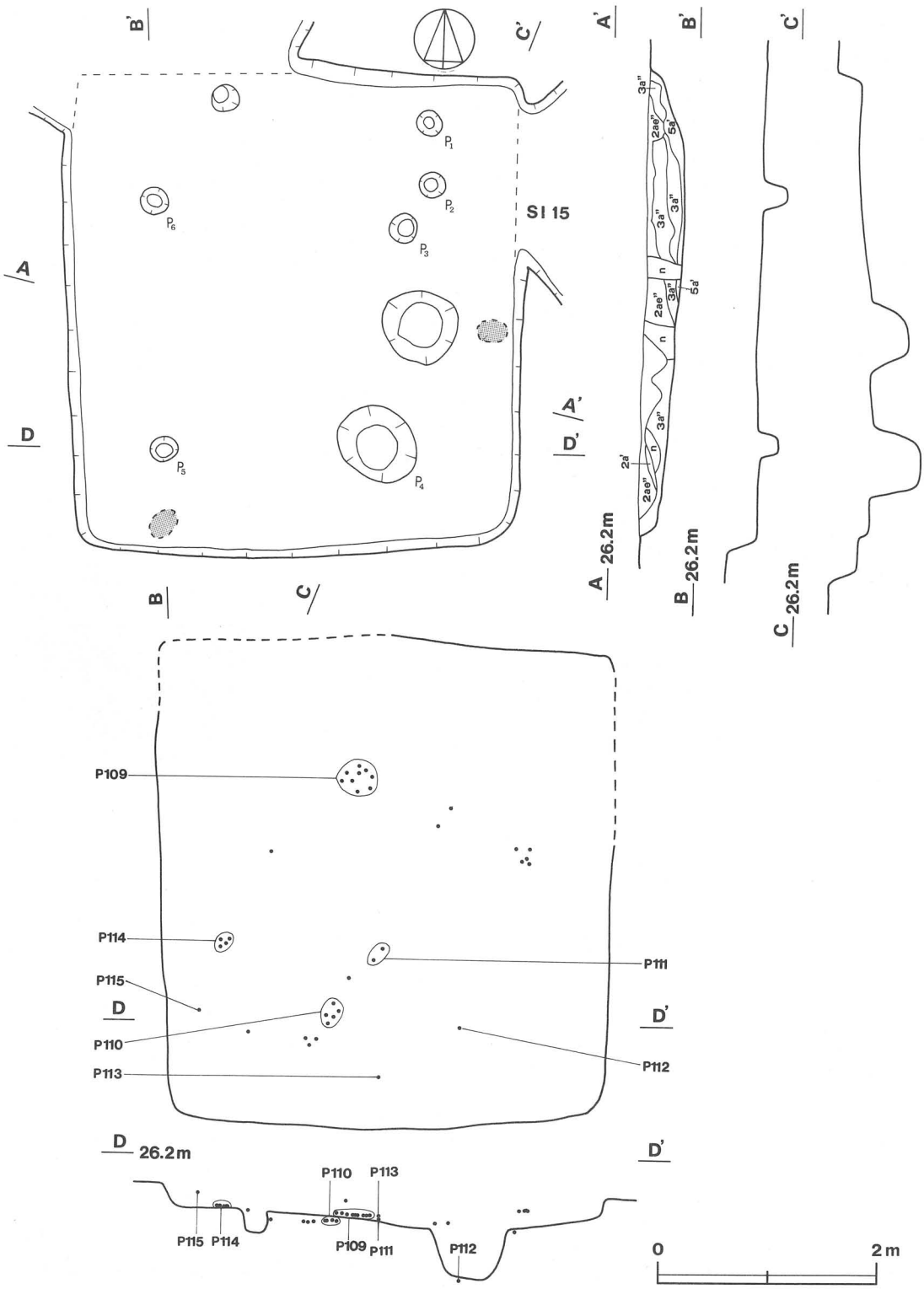
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第161図1	高台付埦形土器 土師器	A（14.8） B　6.5	体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。高台は外下方へのびる。	口縁部内・外面横ナデ後横位のヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き，外面ナデ。高台内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石にぶい褐色 普通	15% P108 内面黒色処理

第18号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径（cm）	重量（g）	備　考
第161図2	球状土錘	DP12	1.4×1.8	0.5	3.3	100% 一方穿孔

第19号住居跡（第162図）

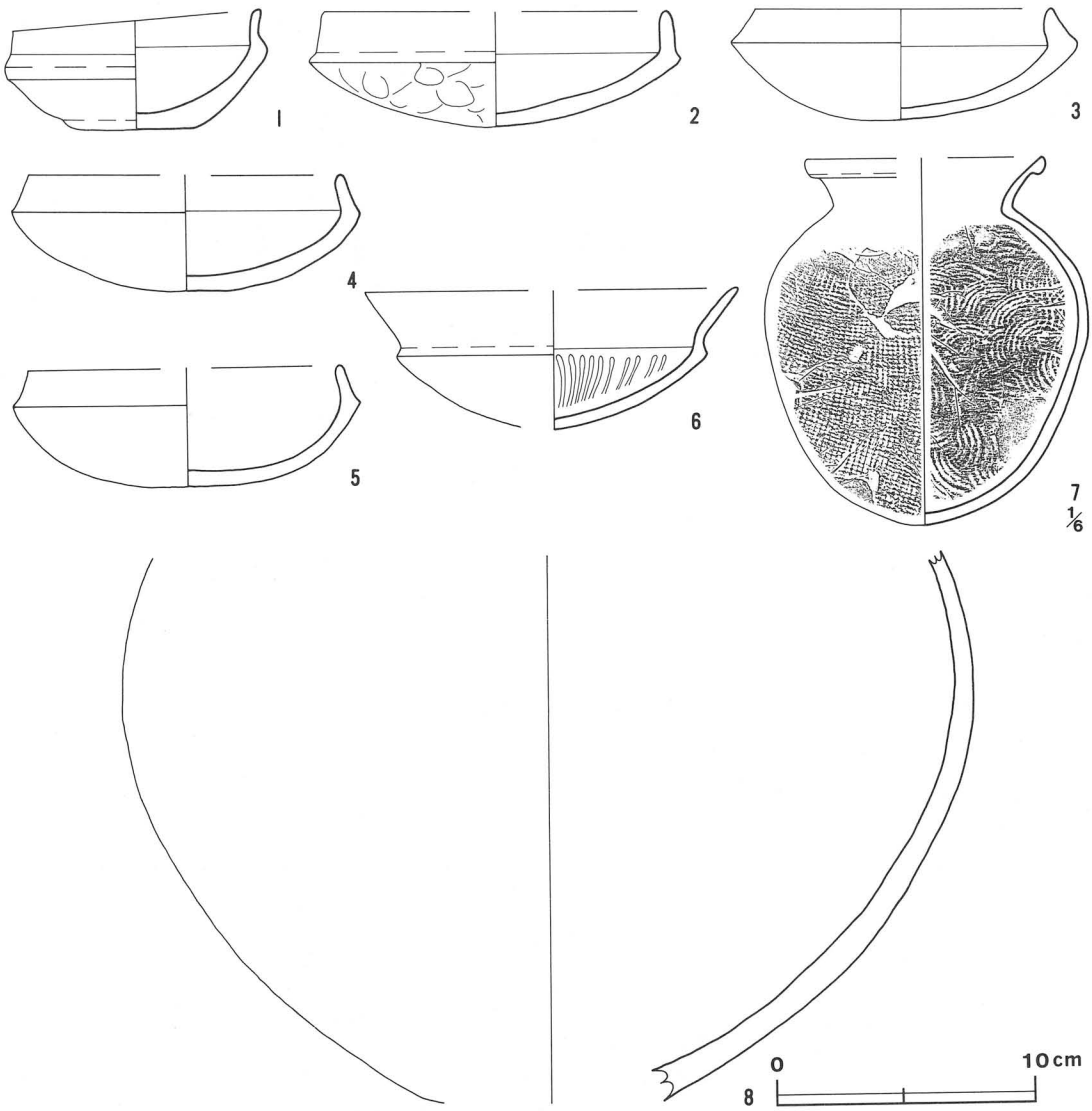
本跡は，調査区の中央$B2i_0$・$B3i_1$・$B2j_0$・$B3j_1$区に確認された住居跡で，第16号住居跡の北西約26mに位置し，第14号・第15号住居跡とそれぞれ重複している。出土遺物等を検討した結果，本跡は，古墳時代後期の鬼高Ⅲ式期に比定され，第14号住居跡は奈良時代初期に比定され，第15号



第162図　第19号住居跡実測図・出土接合関係図

住居跡は，平安時代前期に比定されるものである。したがって，本跡は，３軒のなかで最も古い遺構である。また本跡の東中央部は第６号土坑と重複している。

本跡は，耕作のため東西にトレンチャーによる撹乱を受けている。平面形は，長軸4.60ｍ・短軸4.25ｍの方形を呈し，主軸方向は，Ｎ－２°－Ｗを指しているものと思われる壁は，締まりのあるロームで，外傾して立ち上がり，壁高は，20cmを測る。床は，壁際から中央部に向かって，なだらかに傾斜し，擂鉢状を呈し，硬く踏み固められているが，トレンチャーによる撹乱部は帯状に凹んでいる。当遺跡における擂鉢状を呈する床面は，本跡のみである。ピットは，６か所検出され，規模や配列等から主柱穴は，P_2・P_4・P_5・P_6と思われる。P_2は，長径25cm・短径20cm，深さ18cm，



第163図　第19号住居跡出土遺物実測図

P_4は，長径80cm・短径52cm，深さ48cm，P_5は，直径25cmの円形を呈し，深さ18cm，P_6は，直径27cmの円形を呈し，深さ22cmの規模である。本跡のカマドは検出できなかったが，形状や方向性からみて北西コーナー部寄りに付設されていたものと推定され，第14号住居跡に切られたものと思われる。

覆土は，撹乱部を除き，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子を主体に焼土粒子を少量含み，褐色土または極暗褐色土で締まりを有している。

遺物は，土師式土器片83点，須恵器片９点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片２点が出土した。完形の遺物第163図１は，南側壁中央部から約40cm北方の床面から逆位の状態で出

第19号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第163図 1	坏形土器 土師器	A 9.7 B 4.7 C 5.2	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は直立する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。底部は後からハメ込んで整形したものと考えられ，一部高台状を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ，輪積痕有り。底部内面ナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	98% P113
2	坏形土器 土師器	A (13.4) B 4.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに内傾する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	90% P111
3	坏形土器 土師器	A 11.5 B 4.4	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	97% P110
4	坏形土器 土師器	A (12.4) B 4.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・石英 黒褐色 普通	30% P114
5	坏形土器 土師器	A (12.4) B 4.7	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	30% P112
6	坏形土器 土師器	A (14.6) B (5.5)	底部は丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は外傾する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内面横ナデ後横位のヘラ磨き，外面横ナデ。体部内面放射状ヘラ磨き，外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	30% P115
7	甕 須恵器	A (18.0) B (38.8)	底部は丸底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，胴上位で内傾する。口縁部は「く」の字状を呈し，外上方に開く。端部におりかえしを有する。	口縁部内・外面水挽き。体部内面は，叩きにより同心円文状を，外面は縦横に叩きの方向を変えた格子目状を施している。	砂粒・礫・長石 灰白色 普通	20% P116
8	甕形土器 土師器	B (21.6) C 8.8	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，胴中位から内傾する。	内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	5% P109

土した土師式土器の坏である。完存率は約85％である。第163図３は，南西部の床面から逆位の状態で出土した土師式土器の坏で，ほぼ完形である。第163図４は南西部コーナー付近の覆土から正位の状態で出土した土師式土器の坏片である。

本跡は，前述した如く，出土遺物から，古墳時代後期の鬼高Ⅲ式期に比定される。

第21号住居跡（第164図）

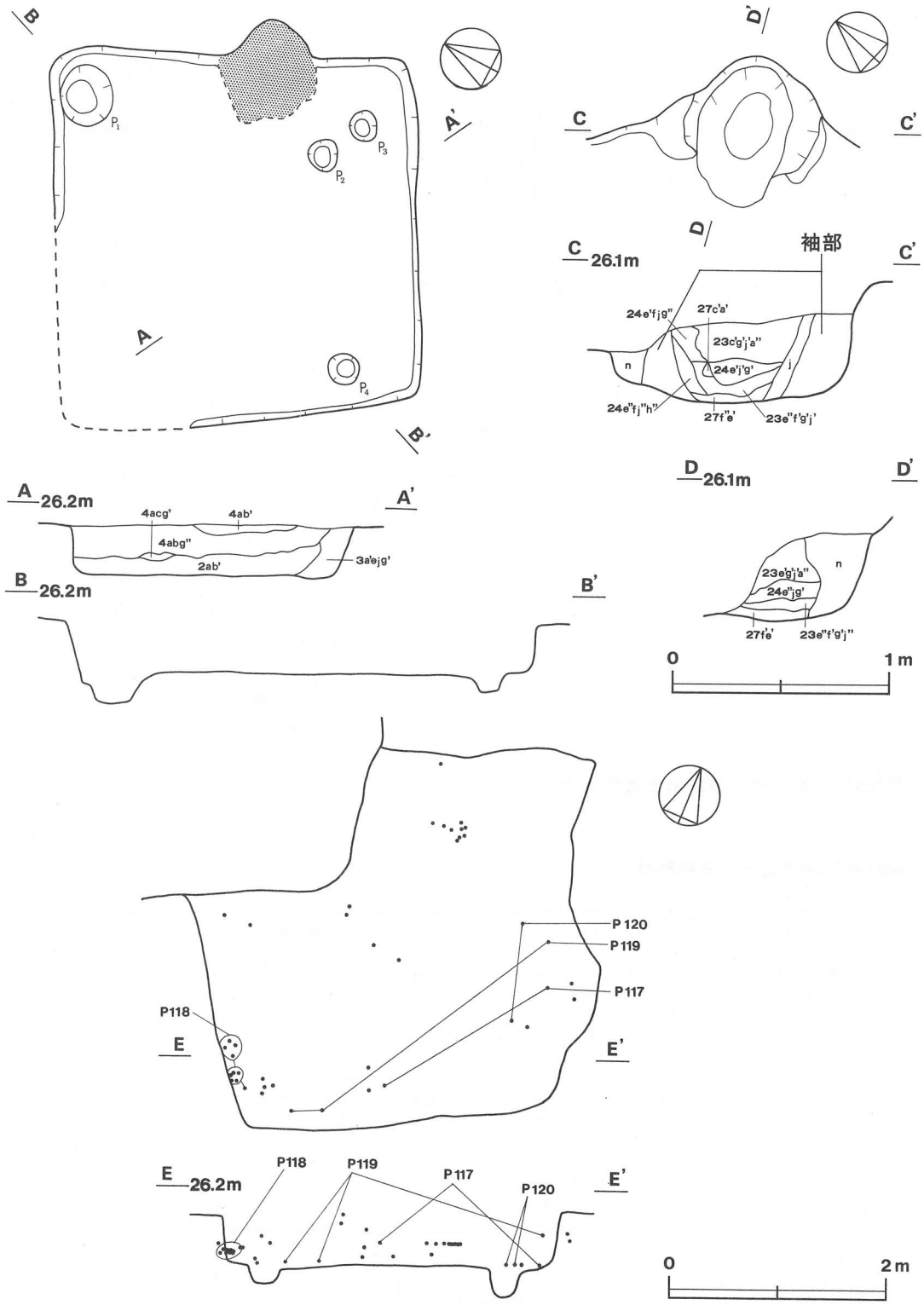
本跡は，調査区の西部B2e$_2$・B2e$_3$区を中心に確認された住居跡で，第10号住居跡の西方６ｍに位置し，第６号住居跡の東コーナー部と本跡の西コーナー部が重複している。遺物等を検討した結果，本跡は，10世紀初頭の平安時代中期に比定されるものと推定され，第６号住居跡よりも新しい遺構であるものと思われる。

本跡は，耕作のため東西方向にトレンチャーによる撹乱を受けている。平面形は，一辺が3.35ｍの方形を呈し，主軸方向は，Ｎ－61°－Ｅを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，46～55cmである。床は，ほぼ平坦で，硬く踏み固められているが，トレンチャーによる撹乱部は，帯状に凹んでいる。ピットは４か所検出され，不規則ではあるが，主柱穴は，Ｐ$_1$・Ｐ$_3$・Ｐ$_4$と思われる。Ｐ$_1$は，長径55cm・短径50cm，深さ22cm，Ｐ$_3$は，長径30cm・短径28cm，深さ26cm，Ｐ$_4$は，直径30cmの円形を呈し，深さ18cmである。カマドは，北東の壁中央からやや東部コーナー寄りに付設され，砂質粘土で構築されているが，横方向にトレンチャーによる撹乱を受けているため，袖部や，天井部は消滅しており，規模や平面形の詳細は不明である。調査した部分から推定すると，長さ100cm・幅80cm程度の規模を有するものと思われる。掘り方は，壁を幅60cmで，外側に22cm程度掘り込んでいるものと推定される。

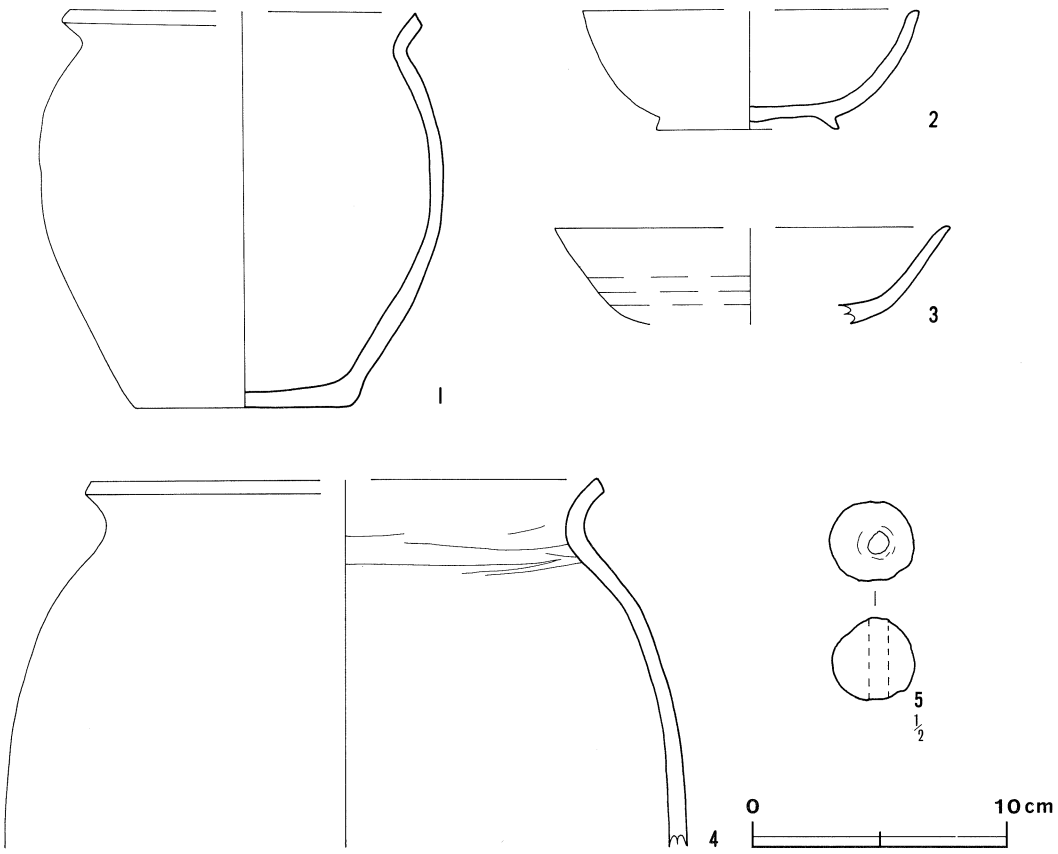
覆土は，撹乱部を除き自然堆積の状態を呈し，ローム粒子・ロームブロックを主体に焼土粒子・炭化粒子を含み，暗褐色土または黒褐色土で締まっている。

遺物は，土師式土器片181点，須恵器片23点が出土した。完形の遺物は無く，第165図１は，南部コーナーの床面から正位の状態で出土した土師式土器の小型甕である。完存率は，約70％である。第165図２は，カマド内の覆土から逆位の状態で出土した土師式土器の高台付坏片である。完存率は約55％である。第165図３は，カマド内の火床部と思われる所から正位の状態で出土した土師式土器の坏片である。完存率は約40％である。

本跡は，前述した如く，出土遺物から10世紀初頭の平安時代中期に比定されるものと推定される。



第164図　第21号住居跡実測図・出土土器接合関係図



第165図　第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 1	甕形土器 土師器	A (13.6) B 15.7 C 8.6	底部は平底で，胴部はやや内彎しながら外上方に立ち上がり，胴中位から内傾する。口縁部は外反して外上方へ開き短い。口縁端部に面をなす。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	80% P118
2	高台付坏形土器 土師器	A (13.2) B 4.7 C 7.3	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部に至る。高台は外下方に短くのびる。	水挽き整形後内面ヘラ磨き。高台内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	40% P119
3	高台付坏形土器 土師器	A (16.0) B (3.8)	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部に至る。高台部は剝離している。	水挽き整形。	砂粒・雲母・石英・長石 にぶい橙色 普通	30% P120
4	壺形，土器 土師器	A (20.0) B (14.5)	胴部上位は内彎し，口縁部は外反して外上方に開く。口縁端部に面をなす。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	5% P117

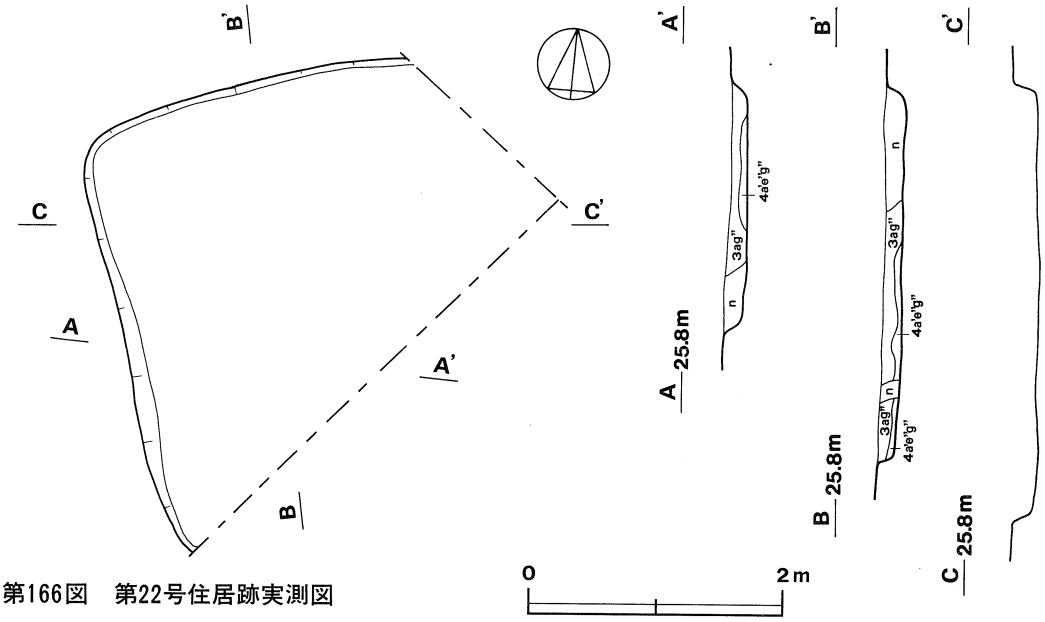
第21号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名　　称	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径（cm）	重量（g）	備　　考
第165図 5	球状土錘	ＤＰ13	2.1×2.2	0.5	7.4	100% 両方穿孔

第22号住居跡（第166図）

本跡は，調査区の東部最端の C4e2 区に確認された住居跡で，第18号住居跡の東方19ｍに位置している。本跡の北東部と南東部は，エリヤ外で未調査のため，規模や平面形等の詳細は不明である。

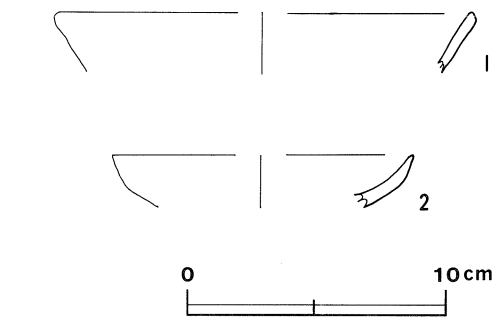
本跡は耕作のため東西方向にトレンチャーによる撹乱を受けている。調査された部分から推定すると，平面形は，方形を呈するものと思われる。主軸方向は不明である。壁は，締まりのあるローム で，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は，約20cmを測る。床は，ほぼ平坦で中央が硬く踏み固



第166図　第22号住居跡実測図

められており，西側と北東部は撹乱を受けている。トレンチャーによる撹乱部は帯状に凹んでいる。貯蔵穴，ピットは検出されなかった。

覆土は，撹乱部を除き，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子を主体に焼土粒子・炭化粒子を微量含み，暗褐色土または極暗褐



第167図　第22号住居跡出土遺物実測図

色土で締まっている。

遺物は，土師式土器片15点，須恵器片６点が出土した。完形の遺物は無く，第167図１は，南西部の床面から正位の状態で出土した土師式土器の坏の口縁部片である。

本跡は，出土遺物から，９世紀中葉以後の平安時代前期の遺構であると推定される。

第22号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第167図 1	坏形土器 土師器	A (16.0) B (2.4)	口縁部は直線的に外上方へ立ち上がる。	内・外面横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	4％ P121
2	坏形土器 土師器	A (11.8) B (2.1)	口縁部は外傾する。	内・外面横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	5％ P122

(2) 土坑

第１号土坑（第168図）

本跡は，調査区の西部A1i$_5$区に確認された土坑で，第２号土坑の北西1.9ｍに位置し，第２号住居跡の南西部と重複している。平面形は，長径87cm・短径66cmの楕円形を呈し，長径方向は，Ｎ－76°－Ｅを指している。確認面から底面までは32cmを測り，底面はほぼ平坦で硬く締まっている。壁は，締まったロームでややゆるやかに外傾して立ち上がっている。

覆土は，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土が主体で締まっている。

遺物は，覆土から土師武土器片が６点出土しているが，第２号住居跡の出土遺物と同時期のものと思われ，直接本跡に伴う遺物であるか否かは不明である。

第２号土坑（第168図）

本跡は，調査区の西部A1j$_5$・A1j$_6$区にかけて確認された土坑で，第１号土坑の南東1.9ｍに位置し，第２号住居跡の南東部と重複している。平面形は，長径80cm・短径75cmの円形を呈し，長径方向は，Ｎ－３°－Ｅを指している。深さは33cmである。底面は丸底を呈し，硬く締まっている。壁は締まったロームで，やや内彎しながら外上方へ立ち上がっている。

覆土は，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土及び明褐色土が主体で締まっている。

出土遺物は無かった。

第3号土坑（第168図）

本跡は，調査区の西部B1b$_9$区に確認された土坑で，第2号土坑の南東約15mに位置し，第8号住居跡の北西コーナー部と重複している。平面形は，長径75cm・短径57cmの楕円形を呈し，長径方向はN－80°－Wを指している。深さは19cmである。底面は西部がやや深い丸底を呈しており，硬く締まっている。壁は，やや締まりのあるローム，南西側は急に外傾して立ち上がり，他はなだらかに外傾して立ち上がっている。

覆土は，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む褐色土及び暗褐色土が主体で締まっている。

出土遺物は無かった。

第4号土坑（第168図）

本跡は，調査区の西部B2e$_2$・B2f$_2$区にかけて確認された土坑で，第21号住居跡の西方1mに位置しており第6号住居跡の貯蔵穴の東部と本跡の西部が重複しているため，規模や平面形等の詳細は不明である。本跡は，平面プラン確認時には，第6号住居跡の出入口部施設の一部と仮定し，調査を進めたが，出入口に伴なう施設とは判定できなかった。

調査した部分から推定すると，平面形は，長径120cm・短径104cmの不整楕円形を呈し，長径方向はN－76°－Eを指しているものと思われる。深さは45cmである。底面は丸底を呈し東部がやや底く下がっており，締まったロームである。壁は，北側が急に外傾して立ち上がり，他は，ややゆるやかに外傾して立ちあがっている。

覆土は，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子を含む暗褐色土が主体で締まっている。

出土遺物は無かった。

第5号土坑（第168図）

本跡は，調査区の中央部B2g$_7$・B2h$_7$区にかけて確認された土坑で，第12号住居跡の西方約15mに位置し，第11号住居跡の南西部と重複している。平面形は，長径82cm・短径66cmの楕円形を呈し，長径方向は，N－64°－Wを指している。深さは31cmである。底面は，ほぼ平坦で締まりのあるロームである。壁は，外傾して立ち上がっている。

覆土は，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む褐色土及び暗褐色土が主体で締まっている。

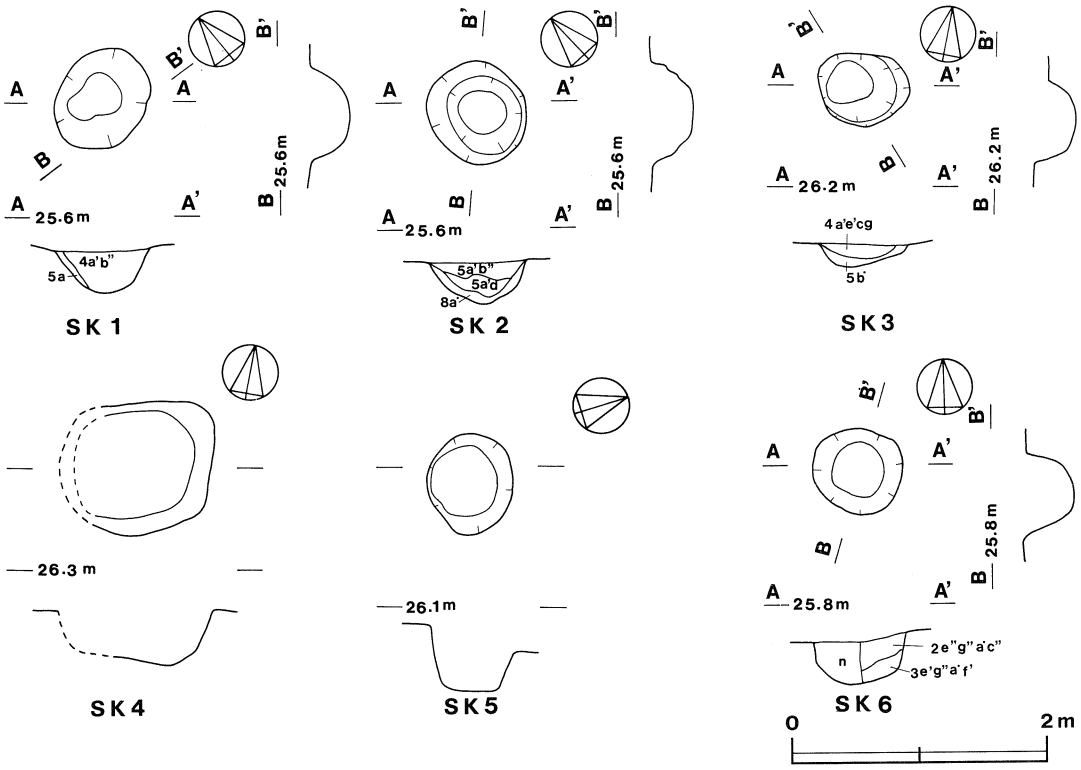
出土遺物は無かった。

第６号土坑（第168図）

本跡は，調査区の中央からやや東寄りのＢ３ｊ１区に確認された土坑で，第15号住居跡の南西約１ｍに位置し，第19号住居跡の東部と重複している。平面形は，長径72cm・短径70cmのほぼ円形を呈し，長径方向は，Ｎ－41°－Ｗを指している。深さは40cmである。底面は丸底を呈し，締まりを有するロームである。壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土は，遺構の約２分の１に当たる西側が撹乱を受けているが他は自然堆積の状態を呈し，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土及び極暗褐色土で締まっている。

出土遺物は無かった。



第168図　土坑実測図

（3）その他の遺物

第169図に掲載した土器は，当遺跡から検出された竪穴住居跡の覆土中から出土したものであるが，遺構に伴うものではなく流れ込みと考えられることから，遺構外出土遺物として取り上げ，時期ごとに分類し一括掲載したものである。

当遺跡から出土した土器は，時代や時期から以下のⅠ～Ⅷ群に分けることができる。各群ごとにその特徴を述べることにする。

第Ⅰ群　縄文時代早期中葉の土器

第Ⅰ群に属する土器は１点出土している。１は第５号住居跡の覆土から出土したもので，三戸式または田戸式に比定されるものと思われる。胎土に繊維を含み，器面には太めの平行する凹線が施されている。

第Ⅱ群　縄文時代早期後葉の土器

第Ⅱ群に属する土器は２・３の２点である。２は第８号住居跡，３は第６号住居跡の覆土から出土したもので，いずれも茅山式に比定され，胎土に繊維を含み，表裏に条痕文が施されている。

第Ⅲ群　縄文時代前期前葉の土器

第Ⅲ群に属する土器は４～17の14点である。いずれも黒浜式に比定されるものと思われ，４は第４号住居跡，５は第18号住居跡，６・８・14は第17号住居跡，７・11・15は第２号住居跡９は第19号住居跡，10は第10号住居跡，12は第６号住居跡，13は第１号住居跡，16・17は第５号住居跡のそれぞれ覆土から出土したものである。

４・５は口縁部片で，胎土に繊維を含み，４は器面に斜位の平行沈線が，５は半截竹質による刺突文が施されている。６～17はいずれも胴部片で，一般に焼きの悪く胎土に繊維を含んでいる。６～13・15・16は地文に縄文を施し，14は条痕文，15は縄文地文上に半截竹管による区画が見られる。17は櫛歯状工具による横位の波状沈線が施されている。

第Ⅳ群　縄文時代前期後葉の土器

第Ⅳ群に属する土器は１点出土している。18は浮島式に比定される口縁部片で，第13号住居跡の覆土から出土したものである。器面には爪形状の貝殻文が連続して施されている。

第Ⅴ群　縄文時代中期前葉の土器

第Ⅴ群に属する土器は19・20の２点出土しており，いずれも五領ヶ台式に比定される。第６号住居跡の覆土から出土したもので，19は器面に半截竹管による平行沈線や山形状の沈線が施されている。20は竹管による山形状の区画内に，平行沈線が施されている。

第Ⅵ群土器　縄文時代後期前葉の土器

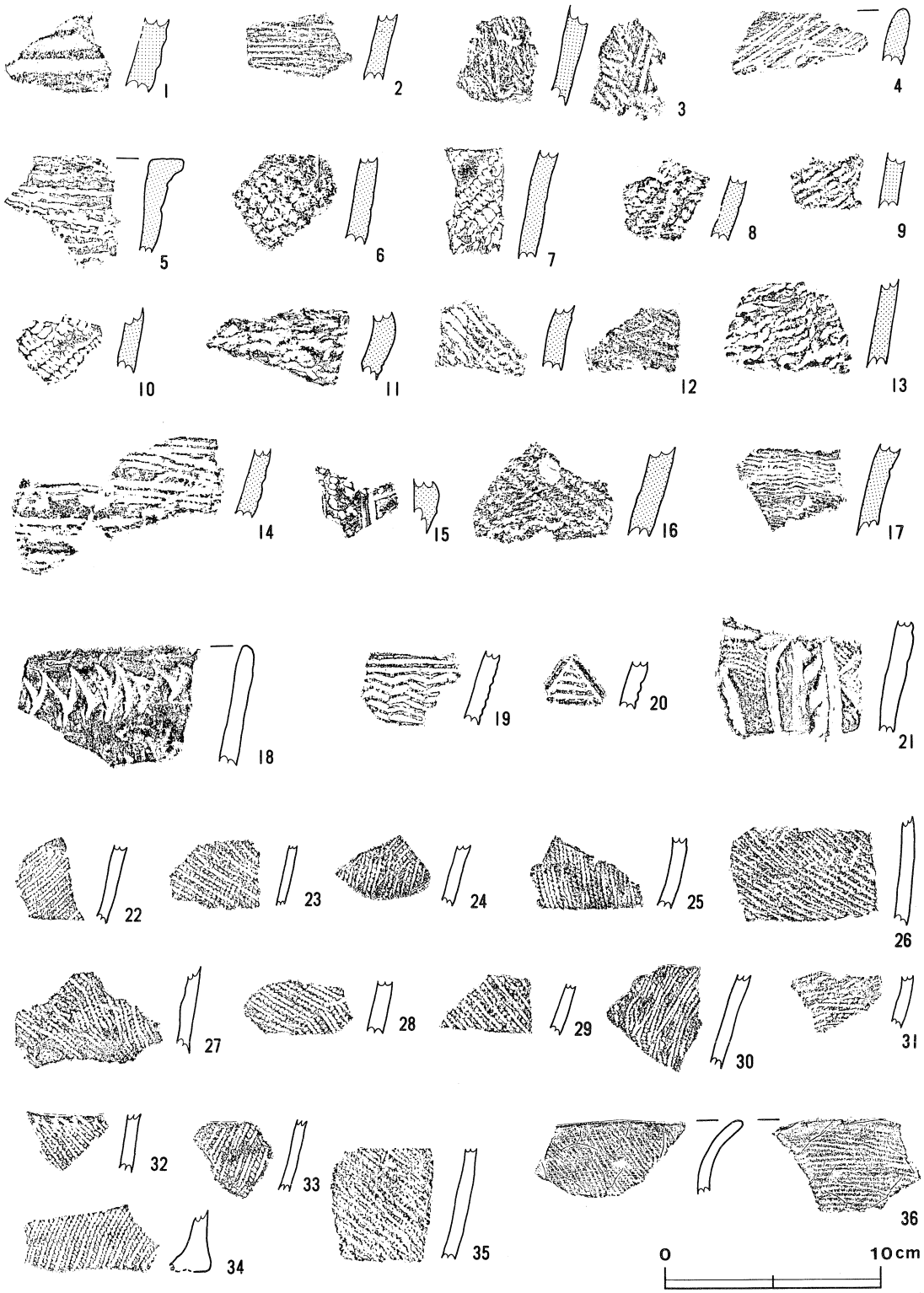
第Ⅵ群に属する土器は１点出土している。21は第６号住居跡の覆土から出土したもので，称名寺式に比定される。細い単節ＬＲの縄文上に，沈線による区画がなされている。垂下する貼付隆帯の上面には，棒状工具による押圧が加えられている。

第Ⅶ群土器　弥生時代後期の土器

第Ⅶ群に属する土器は22～34の13点出土しており，いずれも弥生時代の後期に比定されるものと思われる。22・29・30は第６号住居跡，23～28・32・34は第14号住居跡，31は第19号住居跡，33は第４号住居跡のそれぞれ覆土から出土したものである。22は頸部～胴部，23～33は胴部，34は底部片である。いずれも器面には付加条の縄文が施されている。

第Ⅷ群土器　古墳時代前期の土器

第Ⅷ群に属する土器は１点出土している。35は第８号住居跡の覆土から出土したもので，五領期に比定される甕の口縁部片と思われる。内面には横位，外面には斜位方向の刷毛目が見られる。



第169図　遺構外出土遺物拓影図

3　まとめ

当遺跡は，古墳時代から奈良・平安時代の集落跡として発掘調査を実施した。調査した結果，遺構は，竪穴住居跡21軒，土坑６基が検出された。遺物は，土師式土器が主であるが，少量の須恵器と土製品・鉄製品・石製品が出土した。また，当遺跡の遺構に直接的には伴わないが，少量の縄文式土器片が出土した。縄文式土器片は，当遺跡の東西に隣接する五斗落・弁ノ内・原ノ内・ゴリン山・真木ノ内の各遺跡からも出土しているが，住居跡等の遺構は確認されていないため当遺跡はもとより，周辺遺跡も当時の人々の生活圏であったものと考えられる。また，当遺跡は，調査幅12ｍという限られた範囲であるため，集落全体について述べることはできないが，調査した範囲内で住居跡内から出土した土器を古い順に分類し，各遺構の時期をより明確にすることによって，集落の概略についてふれることにする。

(1)　竪穴住居跡について

当遺跡から検出された竪穴住居跡は，古墳時代後期に比定される鬼高式期の住居跡８軒，奈良時代に比定される住居跡３軒，平安時代に比定される住居跡10軒の合計21軒である。これらの住居跡は，出土土器からそれぞれ何期かに細分することが可能であり，ここでは，細分した各期の住居跡の形態や，その特徴を概述して行きたい。

古墳時代後期（鬼高式期）

鬼高式期の竪穴住居跡は，当遺跡のほぼ全域から検出され，全体の約38％にあたる。出土土器をもとに，これらを３期に分けて説明を加えることにする。

Ⅰ期　鬼高Ⅰ式期に比定される住居跡（無し）
Ⅱ期　鬼高Ⅱ式期に比定される住居跡（第５・８・16・17号住居跡）
Ⅲ期　鬼高Ⅲ式期に比定される住居跡（第２・６・13・19号住居跡）

住居跡分布状況を見ると，Ⅱ期の住居跡は，当遺跡の北西部に第５・８号住居跡の２軒が隣接しており，更に24ｍ離れた南東部にも第16・17号住居跡の２軒が３ｍ以内に隣接して存在する。これらⅡ期の住居跡は，遺跡の南東部・北西部の２つに分かれてそれぞれの集落を構成しているものと考えられる。

Ⅲ期の住居跡は，当遺跡のほぼ中央部に第13・19号住居跡の２軒が隣接している。北西部には第２・６号住居跡が存在しており，Ⅲ期の住居跡は遺跡の中央部から北西部にかけて点在している。前述した如く，調査幅が12ｍと言う限られた範囲であるため，周辺のエリア外区域にも，こ

れらの集団に加えられる住居跡が存在するものと思われる。

平面形は，II期の１軒（第17号住居跡）のみが長方形を呈しており，他はII，III期の全ての住居跡が方形を呈している。規模については，II期では，長軸が3.16～4.5ｍが一般的であり，最大の住居跡は長軸が6.0ｍである。III期では，長軸が4.4ｍ～5.2ｍが一般的であり，最大の住居跡は長軸が7.5ｍである。

以上のことから，II期よりもIII期の方が全体的に大形の住居跡になっている。主軸方向は，II・III期ともに北西方向を指している。貯蔵穴は，II，III期に１軒ずつ，それぞれ南東側壁のほぼ中央部に掘り込まれている。壁溝は，II期では２軒，III期では３軒検出された。カマドはII・III期の各住居跡とも北西側の壁に付設されている。主柱穴は，II・III期とも基本的には，４本柱で構築されたものと思われる。

奈良時代

奈良時代の竪穴住居跡は，当遺跡の中央部から北西部にかけて検出され，全体の14.3%にあたる。出土土器をもとに，これらを３期に分けて説明を加えることにする。

Ⅰ期	８世期初頭の奈良時代前期に比定されると思われる住居跡（第14号住居跡）
II期	８世期前半の奈良時代前期に比定されると思われる住居跡（第４号住居跡）
III期	８世期後半の奈良時代後期に比定されると思われる住居跡（第10号住居跡）

住居の分布を見ると，Ⅰ期の住居跡は当遺跡のほぼ中央部に位置し第19号住居跡と重複している。II期の住居跡は北西部に位置し第３・７号住居跡と重複している。III期の住居跡は中央から北西寄りに位置している。

Ⅰ・II期の住居跡は，他の住居跡と重複しているが，集落構成上における特別な理由は無いものと思われる。III期の住居跡を中心にすると，南東21ｍに１期の住居跡が存在し，北西39ｍにII期の住居跡が存在しており，住居跡の位置は，それぞれまばらである。

平面形は，Ⅰ・II・III期とも全て方形を呈している。規模は，ⅠとII期の住居跡が長軸4.10ｍ，III期の住居跡は長軸3.90ｍを有し，それぞれ同様の大きさである。主軸方向は，II期とIII期の住居跡は北西を指しており，Ⅰ期の住居跡は北東を指している。カマドは，II期とIII期の住居跡は北西側壁に付設しており，Ⅰ期の住居跡は北東に付設している。壁溝はII期の住居跡にのみ検出された。主柱穴は，基本的には，それぞれが４本である。補助柱穴と思われる住居跡外柱穴がII期の住居跡に３本検出された。

以上のことから，Ⅰ・II・III期の住居跡は，わずかな相異は見られるが，奈良時代の一般的な住居跡である。

平安時代

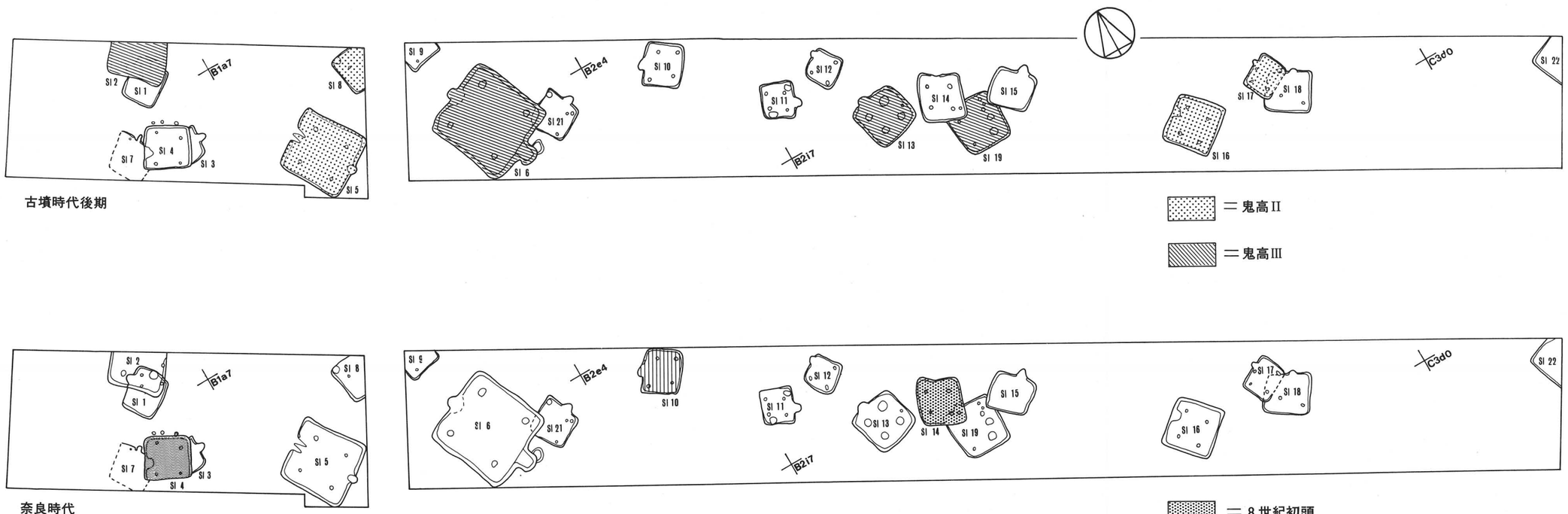
平安時代の竪穴住居跡は，当遺跡全域から検出され，全体の約47.7%にあたる。出土土器をもとに，これらを５期に分けて説明を加えることにする。

Ⅰ期	９世紀前半に比定されると思われる住居跡（第９号住居跡）
Ⅱ期	９世紀中頃に比定されると思われる住居跡（第22号住居跡）
Ⅲ期	９世紀後半に比定されると思われる住居跡（第１・７・11・15・18号住居跡）
Ⅳ期	10世紀初頭に比定されると思われる住居跡（第３・21号住居跡）
Ⅴ期	10世紀前半に比定されると思われる住居跡（第12号住居跡）

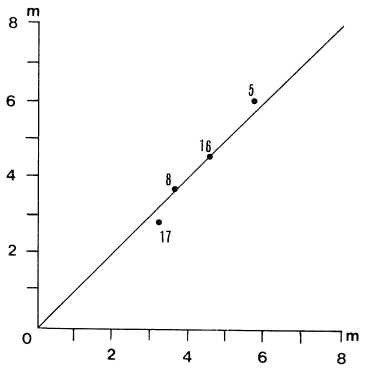
住居跡分布からⅠ～Ⅴ期の住居跡の分布状況を見ると，Ⅰ期の住居跡は，当遺跡の中央部から北西寄りに１軒，Ⅱ期の住居跡は，最南東部に１軒，Ⅲ期の住居跡は，北西部に２軒が３ｍ以内の距離で隣接し，中央部にも２軒，更に中央部から南東寄りに１軒存在する。Ⅳ期の住居跡は，北西部に１軒，中央部から北西寄りに１軒，Ⅴ期の住居跡は，中央部に１軒存在する。

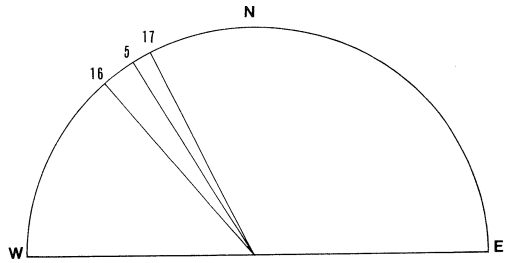
平面形は，Ⅲ期で２軒（第１・15号住居跡）のみが長方形を呈しており，他は，Ⅰ～Ⅴ期の全ての住居跡が隅丸も含めて方形を呈している。規模は，長軸3.2～4.0ｍで全体的に小形の住居跡が多く，最小の住居跡は，Ⅳ期の第３号住居跡で長軸2.70ｍ，次いでⅤ期の第12号住居跡で，長軸2.8ｍである。最大の住居跡は，Ⅲ期の第８号住居跡で，長軸4.0ｍである。主軸方向は，Ⅰ・Ⅱ期は不明で，Ⅲ期の住居跡２軒とⅤ期の住居跡１軒が北西を指しており，他のⅢ・Ⅳ期の残り５軒は南東を指している。カマドは，Ⅰ・Ⅱ期の住居跡は不明で，Ⅲ期の第１号住居跡は北西側の壁に付設され，Ⅴ期の第12号住居跡は北コーナー部に付設されている。Ⅲ・Ⅳ期の残り６軒は北東壁または東側壁に付設されている。主柱穴は，基本的には４か所であるが，Ⅲ期の第15号住居跡は６か所，Ⅴ期の第12号住居跡は３か所である。第15号住居跡は，南西壁際に２か所規則正しくピットを有することから，出入口部のピットとも考えられる。第12号住居跡は，北コーナー部にカマドが付設されていることから，カマドの付設されている北側を除いて３か所で構築されたものと思われる。

以上のことから，集落の形態を時期毎に述べることは困難であるが住居跡の平面形は，Ⅰ～Ⅴ期とも，殆どが方形を呈している。規模については，全体的に小形化している。これは，隣接する五斗落遺跡においても同様なことが言える。主軸方向は，北西を指す住居跡３軒と北東を指す住居跡５軒に２分されており，北東を指す住居跡がやや多い。カマドは，Ⅲ～Ⅳ期にかけて北東または東側壁に付設されている。全体的な傾向として，平安時代における一般的な住居跡である。

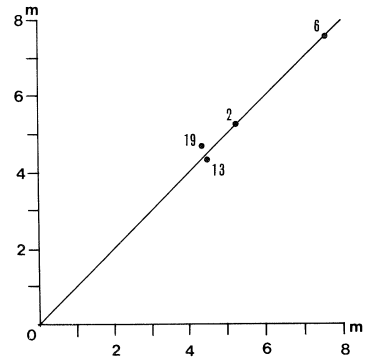


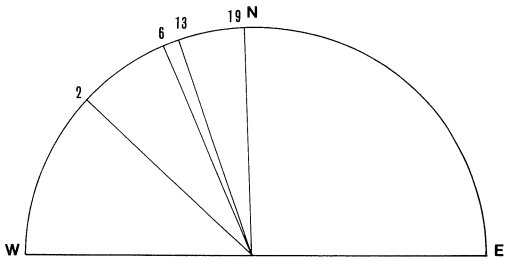
第170図　大儀遺跡住居跡分布図



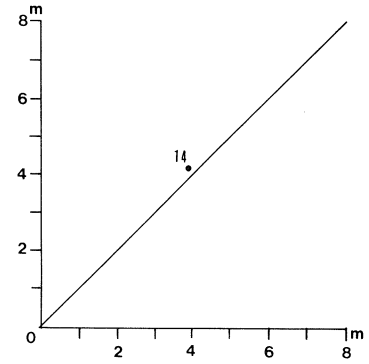


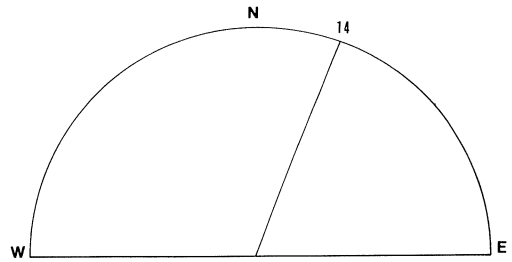
古墳時代後期(鬼高II式)



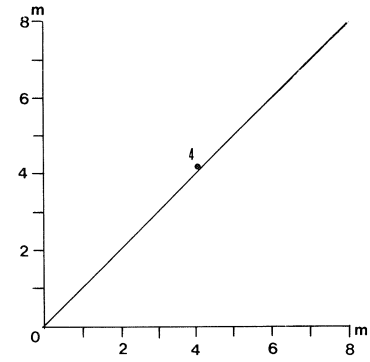


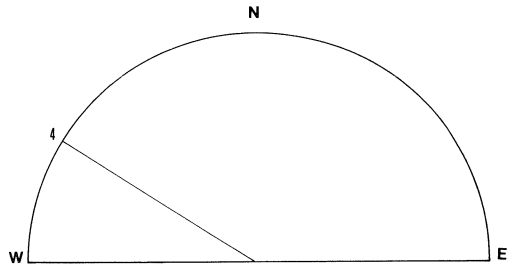
古墳時代後期（鬼高III式）





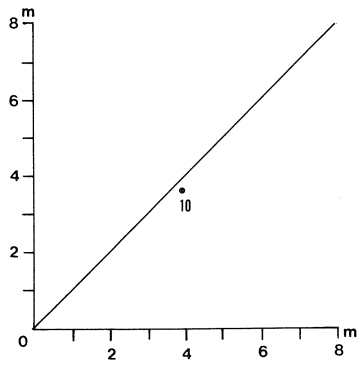
奈良時代前期（８世紀初頭）

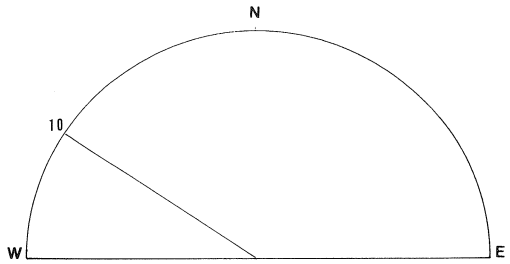




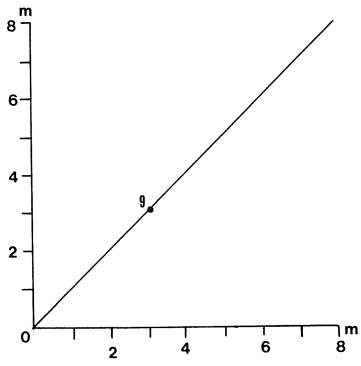
奈良時代前期（８世紀前半）

第171図　大儀遺跡時期別住居跡規模・主軸方向(1)



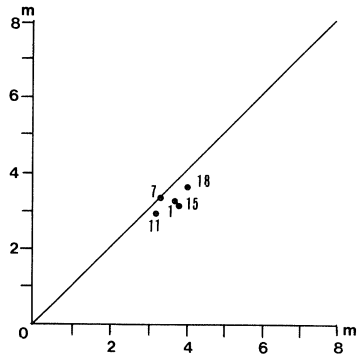


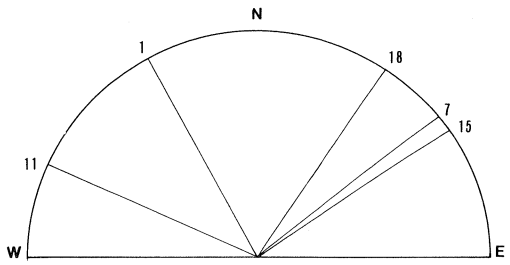
奈良時代前期（8世紀後半）



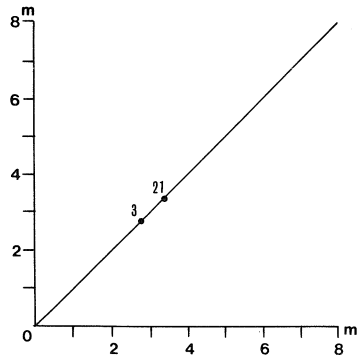
平安時代前期（9世紀前半）

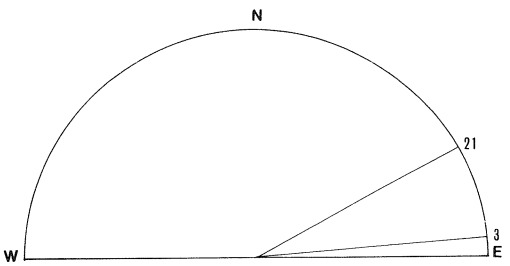
平安時代前期（9世紀中頃）…不明





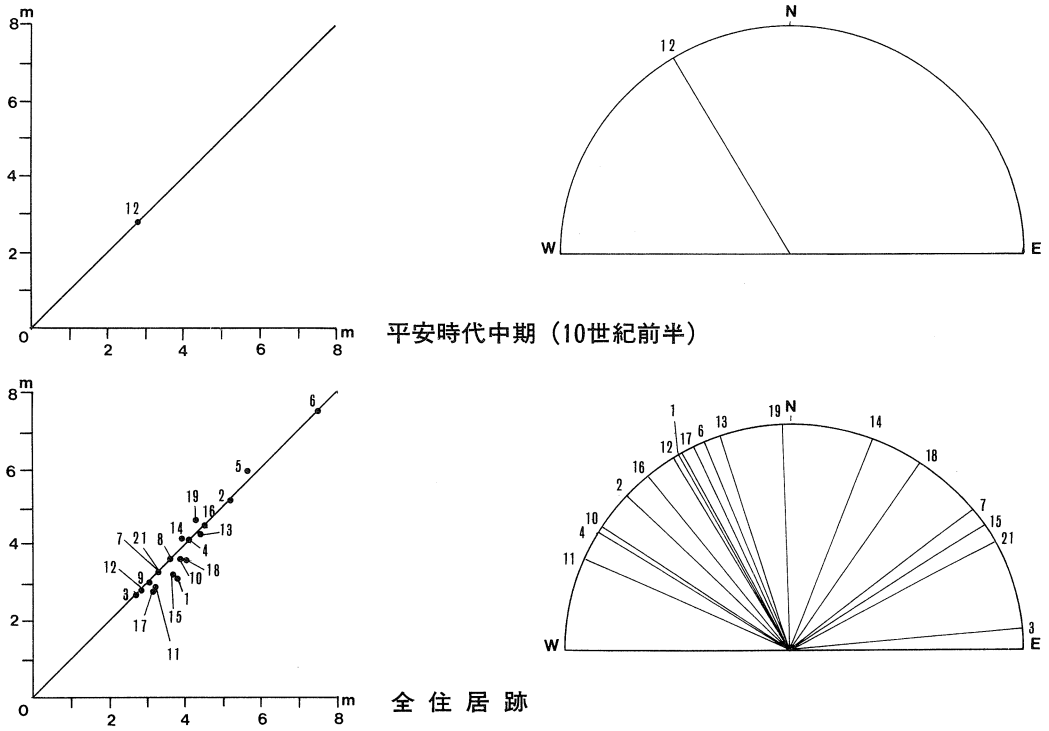
平安時代前期（9世紀後半）





平安時代中期（10世紀初頭）

第172図　大儀遺跡時期別住居跡規模・主軸方向(2)



第173図　大儘遺跡時期別住居跡規模・主軸方向(3)

表8　古墳時代後期住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主長軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
5	B1C7・C8 B1d8	N－31°－W	方形	6.00×5.65	55～60	平坦	4	カマド	自然	土師器129，須恵器1 縄文式土器7	鬼高II式期	
8	B1b9	－	方形	3.60×3.60	10～14	平坦	1	(カマド)	自然	土師器90，須恵器4 縄文式土器2	鬼高II式期	
16	C3b4・b5 C3C4・C5	N－40°－W	方形	4.50×4.50	75～85	平坦	4	カマド	自然	土師器968 須恵器35	鬼高II式期	
17	C3b6	N－26°－W	長方形	3.16×2.75	25～32	平坦	4	カマド	自然	土師器26 縄文式土器2	鬼高II式期	
2	A1j5 A1j6	N－47°－W	隅丸方形	5.20×5.20	20～26	平坦	4	カマド	自然	土師器51 須恵器16	鬼高II式期	
6	B2d1・d2 B2e1・e2	N－23°－W	方形	7.50×7.50	65～80	平坦	4	カマド	自然	土師器1622，須恵器126 縄文式土器11	鬼高III式期	
13	B2h8・h9 B2i8・i9	N－19°－W	不整方形	4.40×4.30	45	平坦	5	カマド	自然	土師器465 須恵器14	鬼高III式期	
19	B2i0・j0 B3i1・j1	N－2°－W	方形	4.60×4.25	20	傾斜	6	カマド	自然	土師器83，須恵器9 縄文式土器2	鬼高III式期	

表9　奈良時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主長軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
14	B2i0	N－21°－E	方形	4.10×3.90	30～37	平坦	5	カマド	自然	縄文式土器19 土師器90，須恵器5	奈良	8C初
4	B1a5 B1b5	N－58°－W	方形	4.10×4.10	20～35	平坦	住内5 住外3	カマド	自然	土師器151，須恵器14 縄文式土器1	奈良	8C前
10	B2e5 B2f4	N－57°－W	方形	3.90×3.60	45～50	平坦	4	カマド	撹乱	土師器25，須恵器2 縄文式土器	奈良末	8C後半

表10　平安時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主長軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
9	B2c1	－	方形	3.00×3.00	8～12	平坦	1	(カマド)	撹乱	土師器25	平安前期	9C前半
22	C4e2	－	方形	－	20	平坦	－	(カマド)	自然	土師器15，須恵式6	平安前期	9C中頃
1	A1j5	N－29°－W	隅丸長方形	3.80×3.10	8～18	ほぼ平坦	3	カマド	自然	縄文式土器4	平安前期	9C後半
7	B1a4	N－52°－E	方形	3.30×3.30	10	凹凸	1	カマド	自然	土師器41，須恵器10	平安前期	9C後半
11	B2g7	N－66°－W	方形	3.20×2.95	23～30	ほぼ平坦	4	カマド	自然	土師器97，須恵器9	平安前期から中期	9C後半
15	B3i1・i2 B3j1・j2	N－56°－E	長方形	3.72×3.20	17～22	平坦	6	カマド	自然	土師器39，須恵器3 縄文式土器1	平安前期	9C後半
18	C3c6 C3c7	N－34°－E	方形	4.00×3.60	30～33	傾斜	2	カマド	自然	土師器38，須恵器6 縄文式土器1	平安前期	9C後半
3	B1b5 B1b6	N－85°－E	隅丸方形	2.70×2.70	18	平坦	3	カマド	自然	土師器19，須恵器2	平安中期	10C初
21	B2e2 B2e3	N－61°－E	方形	3.35×3.35	46～55	平坦	4	カマド	自然	土師器181，須恵器23	平安中期	10C初
12	B2e3 B2g8	N－30°－W	隅丸方形	2.80×2.80	21～29	平坦	4	カマド	自然	土師器87，須恵器4 縄文式土器2	平安前期～中期初	10C前半

(2)　土器について

大儀遺跡から出土した土器は，殆どが土師式土器で，次いで少量の須恵器が出土している。また，当遺跡の遺構に直接伴わないが，少量の縄文式土器片，弥生式土器片が出土している。土師式土器は，古墳時代後期から奈良・平安時代の竪穴住居跡21軒から出土している。遺構に伴う須恵器は，古墳時代後期の鬼高式期の住居跡と奈良時代の住居跡から出土している。住居跡内から出土した土器の器種は，土師式土器では甕形土器・甑形土器・埦形土器・高台付埦形土器・坏形土器・高台付坏形土器等で，須恵器では甕・坏・蓋等である。これらを従来の編年資料を参考にしながら，五斗落遺跡に準じて3群に分けその器形・技法などから区分し，概略を述べることにする。

第１群土器　古墳時代後期（鬼高式期）
第２群土器　奈良時代
第３群土器　平安時代

第１群土器

第１群土器は，古墳時代後期の鬼高式期に比定される土器群で，土師式土器が殆どである。器種は甕形土器・甑形土器・埦形土器・高台付坏形土器・坏形土器で，須恵器は少量であるが甕片・坏片・蓋片等が出土している。これらの土器を器形や整形技法等から３類に分けて概略を説明する。

第１類〔鬼高Ⅰ式期に比定される土器群〕(該当する土器無し)

第２類〔鬼高Ⅱ式期に比定される土器群〕

本類は，第５・16号住居跡から出土した土器をもって構成した。器種としては，土師式土器の甕形土器・甑形土器・埦形土器・坏形土器がある。

甕形土器（第174図１・２・３）は，全体的に胴部がやや長胴を呈し，わずかに内彎しながら立ち上がり，口縁部はゆるやかに外反して開いている。整形技法は，口縁内・外面は横ナデ整形で，胴部内面はナデ，外面上位はナデ，外面下位は縦位のヘラ磨きが施されている。

甑形土器（第174図４・５）は，底部は正円状に抜け，胴部はわずかに内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は外反して開いている。整形技法は，口縁部内・外面は横ナデ整形で，胴部内面はナデており，外面は縦位のヘラ磨きが施されている。

埦形土器（第174図６）は，底部は平底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がっている。口縁部はほぼ垂直に立ち上がっている。整形技法は口縁部の内・外面は横ナデ整形で，体部内面はナデ，外面はヘラ削りで整形されている。

坏形土器（第174図７～16）は，殆どが底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がっている。外面の体部と口縁部の境に明瞭な稜を有する。整形技法は，口縁部は，内傾・外傾・直立するの３種類が見られる。口縁部の内・外面は横ナデ整形後，横位のヘラ磨きが施されている。体部内面はヘラ磨き，外面はヘラ削り，あるいはヘラ削り後ヘラナデが施されている。

第３類〔鬼高Ⅲ式期に比定される土器群〕

本類は，第６・13・19号住居跡から出土した土器をもって構成した。器種としては，須恵器の甕と土師式土器の甕形土器，甑形土器・埦形土器・坏形土器がある。

土師式土器の甕（第175図１・２・３・４）では，底部は平底を呈し，胴部は全体的にやや長胴

を呈している。口縁部は外反しながら外上方に立ち上がっている。整形技法は，口縁部の内・外面は横ナデ整形で，胴部内面はナデ，外面中位から縦位のヘラ磨きが施されている。

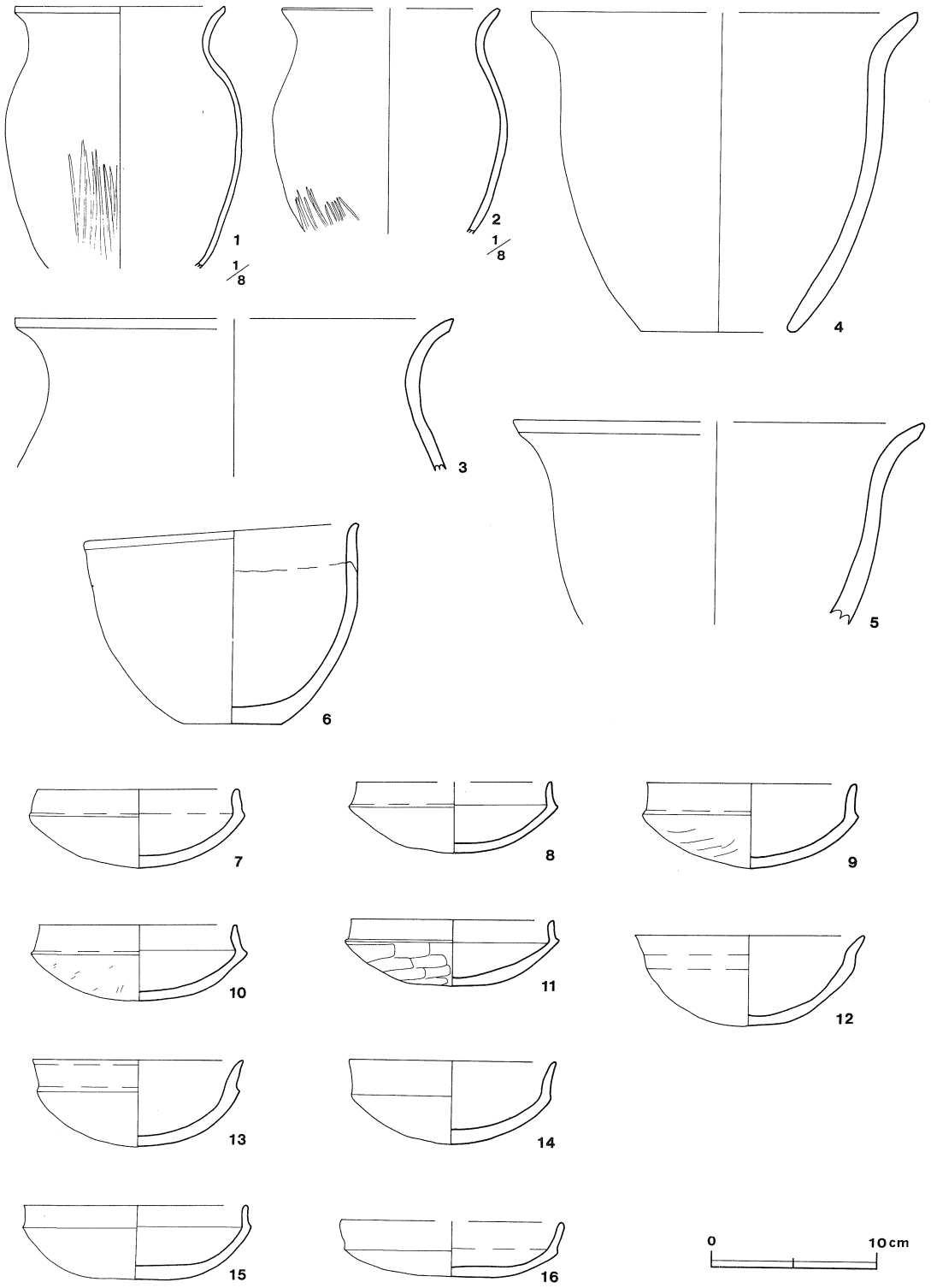
須恵器の甕（第175図５）は，底部は丸底を呈しており，胴部は内彎しながら立ち上がり，胴部上位で内傾し，口縁部は「く」の字状を呈し外上方に開いている。口縁端部に折り返しを有する。整形技法は，口縁部内・外面は横ナデ整形で，胴部内面に同心円文の叩きを有している。胴部外面は，縦・横に叩きの方向を変え，格子目状を施している。

甑形土器（第175図６）は，底部は正円状に抜け，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がっている。口縁部は外反しながら開き，口縁端部に面をなす。整形技法は，口縁部の内・外面は横ナデ整形で，胴部内面はナデ，外面は縦位のヘラ磨きが施されている。

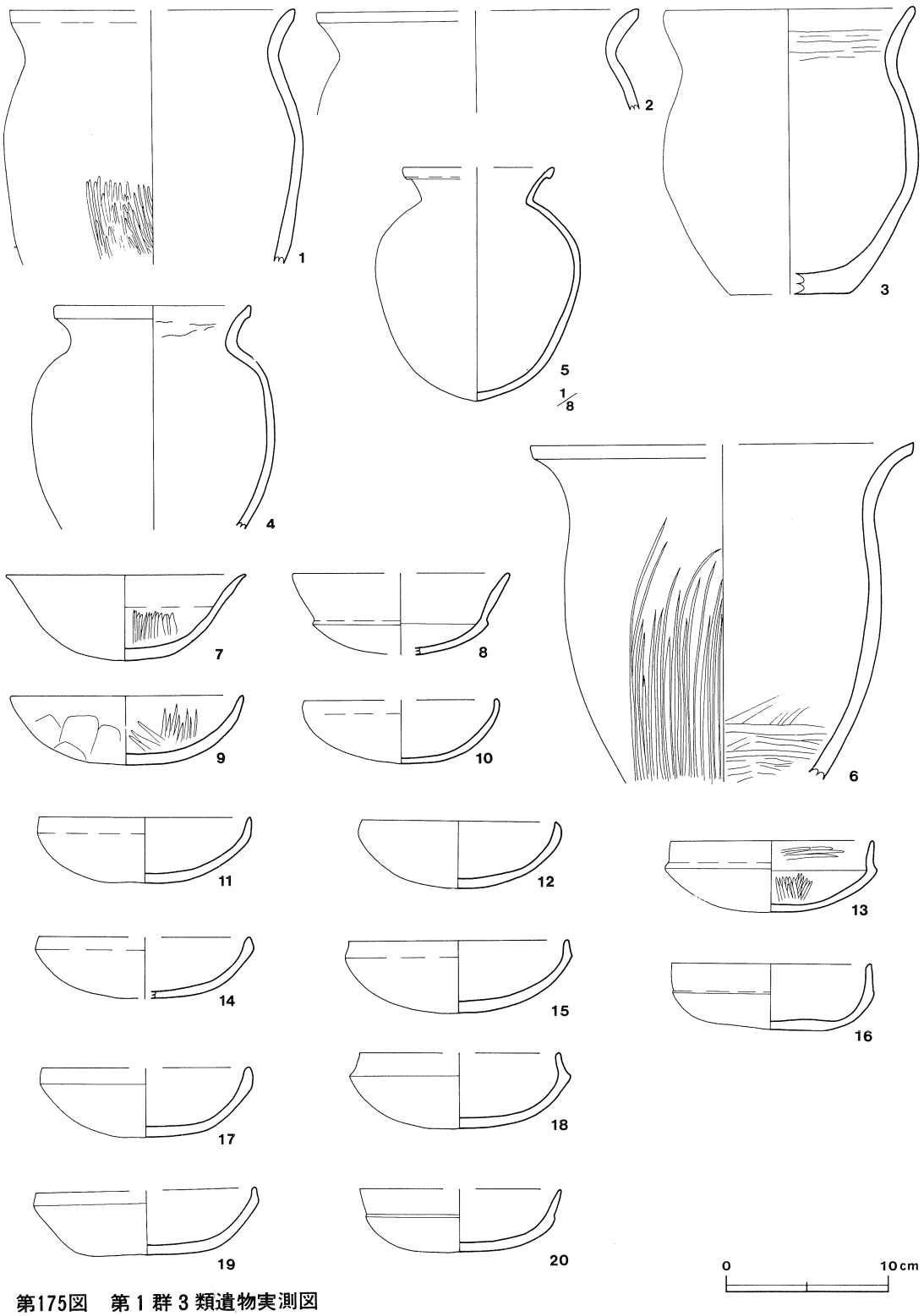
埦形土器（第175図７）は，底部は丸底を呈しており，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がっている。口縁部はわずかに外反している。整形技法は，口縁部の内・外面は横ナデ後横位のヘラ磨きが施されている。体部内面は放射状ヘラ磨きが施されている。外面はヘラ削り後ヘラナデ整形を施している。

坏形土器（第175図８～20）は，底部は全て丸底を呈している。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立するものが多く見られる。整形技法は，口縁部の内・外面は横ナデ後横位のヘラ磨きが施されている。体部内面は全てヘラ磨きが施されている。体部外面はヘラ削り，または，ヘラ削り後ヘラナデ整形を施している。

以上が第１群土器の概略であるが，２類と３類の土器を比較すると，甕形土器は全体的に長胴を呈しており，整形技法は，胴部外面に縦位のヘラ磨きを施している。坏形土器では須恵器模倣坏が見られ，２類では，体部外面と口縁部の境に明瞭な稜を有し，口縁部の幅が広い。３類では，稜の無いものと，わずかに有するが前者ほどに明瞭ではなく，口縁部の幅も狭いものが多い。底部は2・3類ともに丸底である。整形技法については両者の差は殆ど見られない。



第174図　第１群２類遺物実測図



第175図　第1群3類遺物実測図

第２群土器

第２群土器は，奈良時代に比定される土器群である。出土量は非常に少なく，器種は土師式土器の甕形土器，甑形土器，坏形土器及び須恵器の蓋である。これらの土器を器形や整形技法から３類に分けて概略を説明する。

第１類〔奈良時代初頭に比定される土器群〕

本類は，第14号住居跡から出土した土器をもって構成した。

器種としては，土師式土器の甕形土器，甑形土器，坏形土器及び須恵器の蓋である。

甕形土器（第176図１）は，底部は平底を呈しており，胴部は内攣しながら外上方へ立ち上がり，胴中位から内傾している。整形技法は，胴部内面はナデ，外面は斜位交差ヘラ磨きが施されている。

甑形土器（第176図２）は，底部は正円状に抜け，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がっている。口縁部は外反しながら開き，口縁端部に面をなしている。整形技法は，口縁部の内・外面が横ナデ整形で，体部内面はナデ，外面は縦位のヘラ磨きが施されている。

坏形土器（第176図３）は，底部は丸底を呈しており，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がっている。口縁部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がっている。整形技法は，口縁部内・外面が横ナデ整形で，体部内面はヘラ磨きが施され，外面は手持ちヘラ削り後ナデている。全体的に薄手である。

須恵器の蓋（第176図４）は，天井部中央に扁平な宝珠形のつまみがつき，天井部は丸く，口縁部はわずかに外反して，外下方にのびている。口縁内部にはかえりを有している。整形技法は，水挽き整形で，頂部は回転ヘラ削りが施されている。つまみは横ナデ整形である。

第２類〔奈良時代前期に比定される土器群〕

本類は，第４号住居跡から出土した土器をもって構成した。

器種は土師式土器の甕形土器，坏形土器及び須恵器の蓋である。

甕形土器（第176図１）は，口縁部は外反しながら外上方へ開いている。整形技法は，口縁内・外面は横ナデ整形である。

坏形土器（第176図２）は，底部は丸底を呈しており，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がっている。口縁部はやや直線的に外上方へ立ち上がっている。整形技法は，口縁部の内・外面は横ナデ整形で，体部内面はナデており，外面はヘラ削り後ナデている。

蓋（第176図３）は，天井部はほぼ平坦で，口縁部は内彎しながら外下方にのびている。外面の天井部中位と口縁部の境に段を有する。整形技法は水挽き整形で，天井中位は回転ヘラ削りが施されている。

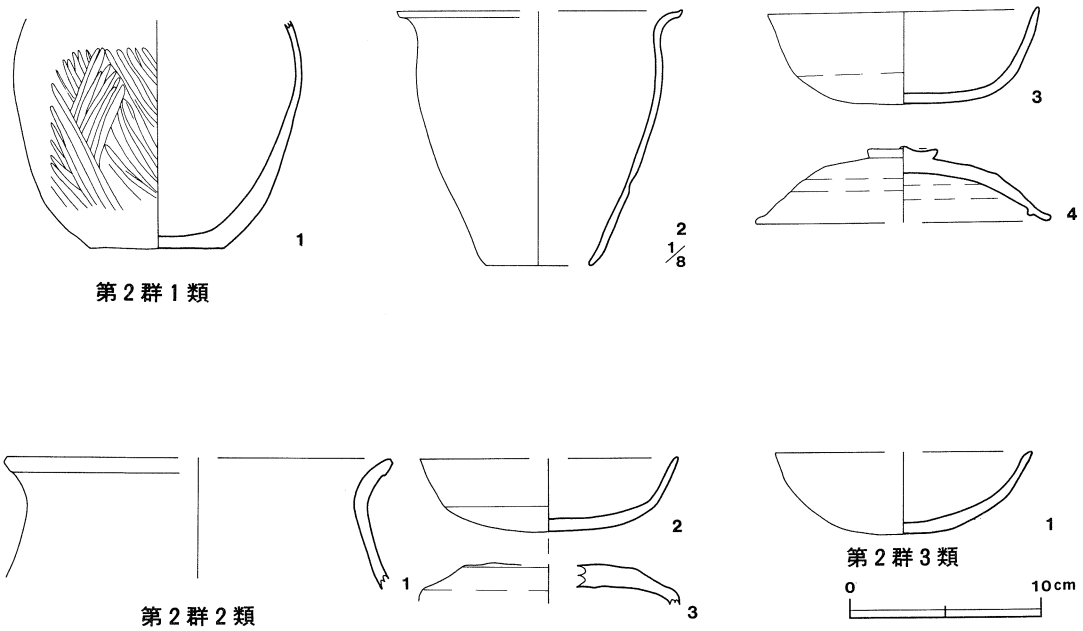
第３類〔奈良時代後期に比定される土器群〕

本跡は，第10号住居跡から出土した土器で構成した。

器種は，土師式土器の坏形土器である。

坏形土器（第176図１）は，底部は丸底を呈しており，体部は内彎しながら大きく開いて外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至っている。整形技法は，口縁部の内・外面は横ナデ整形で，体部内面はナデ，外面はヘラ削り後ナデをしている。

以上が第２群土器の概略であるが，１～３類ともに出土土器が希少なため，土器編年は坏形土器，甕形土器を中心とした。整形技法については１～３類とも殆ど同様であり，坏形土器では全体的に器厚が薄い。



第176図　第２群１類・２類・３類遺物実測図

第3群土器

第3群土器は，平安時代に比定される土器群である。出土土器は非常に希少である。器種は土師式土器の甕形土器，埦形土器，高台付埦形土器，坏形土器，高台付坏形土器である。これらの土器を器形や整形技法から5類に分けて概略を説明する。

第1類〔平安時代前期前半に比定される土器群〕

本類は，第9号住居跡から出土した土器群で構成した。

器種は，土師式土器の高台付坏形土器（第177図1）の底部片で，高台は外下方へ短くのびている。整形技法は水挽き整形で，高台は貼り付けている。高台の内・外面は横ナデ整形をしている。

第2類〔平安時代前期中頃に比定される土器群〕

本類は，第22号住居跡から出土した土器群で構成した。

器種は，土師式土器の坏片（第177図1・2）で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾するものと，直線的に外上方へ立ち上がっているものがある。整形技法は，内・外面横ナデ整形をしている。

第3類〔平安時代前期後半に比定される土器群〕

本類は，第1・7・11・15・18号住居跡から出土した土器によって構成した。

器種は，土師式土器の甕形土器口縁部片，高台付坏形土器片，坏形土器片である。

甕形土器の口縁部は，外反しながら短かく立ち上がっており，口縁端部に面をなし，口唇部は外上方へつまみあげられているもの（第177図1・2）と，口縁部は外反して大きく外上方へ開いているもの（第177図3）とがある。整形技法は，口縁内・外面横ナデ整形をしている。

高台付埦形土器（第177図4）は，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部に至っている。高台部は外下方へのびている。整形技法は，口縁部内・外面横ナデ整形後横位のヘラ磨きが施されている。体部内面は黒色処理をしている。外面はナデている。高台は貼り付けで，内・外面横ナデ整形をしている。

高台付坏形土器（第177図5）は，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反している。(高台部欠損)。整形技法は，水挽き整形で内面は黒色処理をしている。

坏形土器は，次の4種類の形態が見られる。①体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部はやや外反するもの（第177図6・7・11)。②そのまま口縁部に至るもの（第177図8・9・10)。③体部は直線的に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反するもの(第177図12・13)。④体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾して短いもの(第177図14)。整形技法は，内・外面水挽き整形のものと口縁部内・外面横ナデ後横位ヘラ磨きが施されているものがある。体部は内面に黒色処理が施されているものもある。

第4類〔平安時代中期初頭に比定される土器群〕

本類は，第3・21号住居跡から出土した土器によって構成した。

器種は，土師式土器の甕形土器，高台付埦形土器，高台付坏形土器，坏形土器である。

甕形土器（第177図1・2）は，底部は平底で，胴部はやや内彎しながら外上方へ立ち上がり，胴中位から内傾する。口縁部は外反しながら外上方へ開き短い。口縁端部に面をなす。整形技法は，口縁部内・外面横ナデ整形で，体部内・外面はナデている。

高台付埦形土器（第177図3）は，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反している。高台は外下方へ「ハ」の字状に長くのびている。整形技法は，水挽き整形後，内面をヘラで磨いている。高台は貼り付けで，内・外面横ナデしている。

高台付坏形土器は，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部に至るもの（第177図4・5）と，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり口縁部はわずかに外反するもの（第177図6）とがある。高台部は外下方へ短くのびている。整形技法は，水挽き整形で，内面は黒色処理をしているものもある。高台部は貼り付けで，内・外面横ナデ整形をしているものと，剝離しているものがある。

坏形土器は，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がるもの（第177図8）と，内彎しながら大きく開いて外上方へ立ち上がるもの（第177図7）がある。口縁部はわずかに外反している。整形技法は，水挽き整形で，内面は横位のヘラ磨きをしてあるものもある。

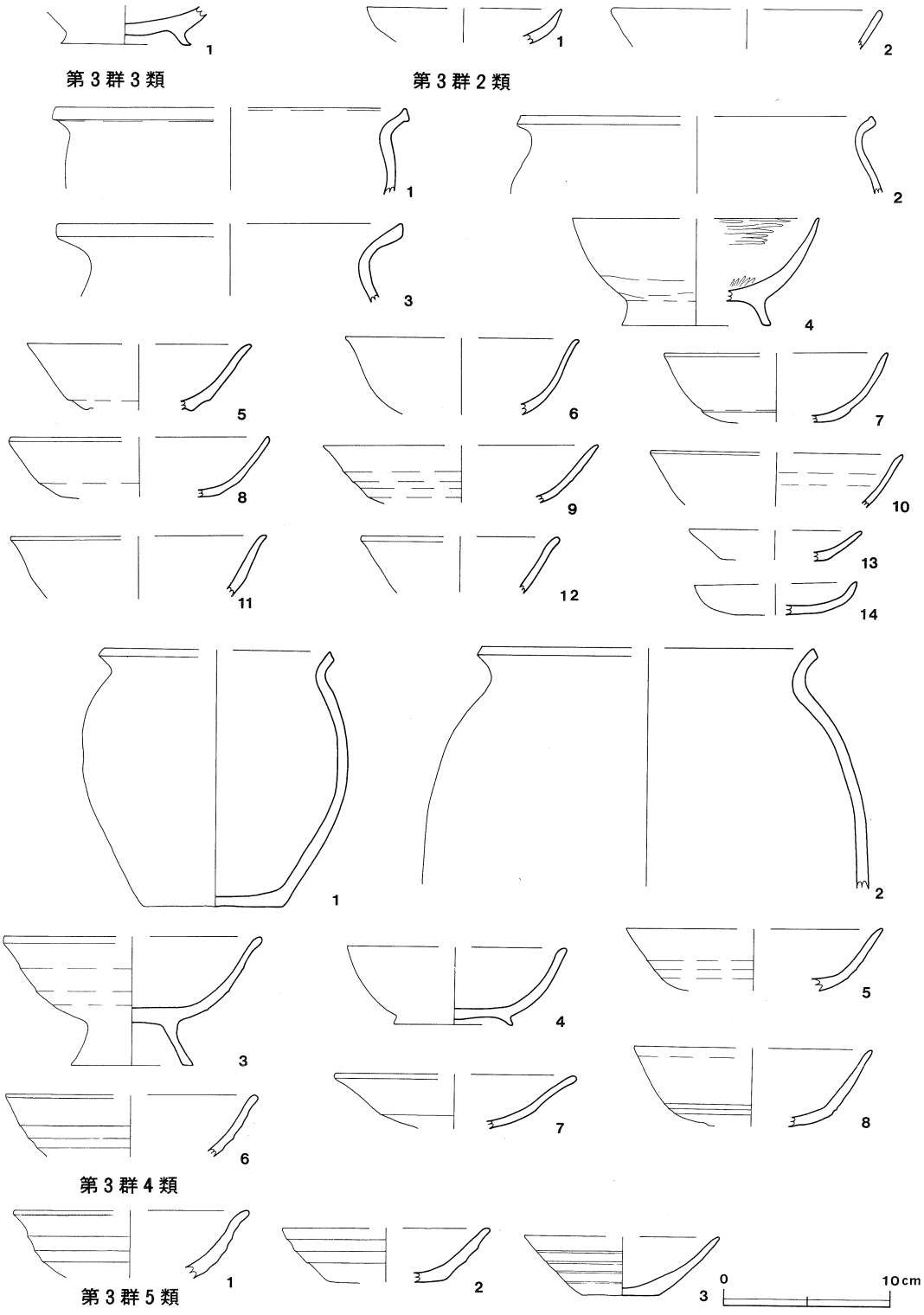
第5類〔平安時代中期前半に比定する土器〕

本類は，第12号住居跡から出土した土器で構成した。

器種は，土師式土器の坏形土器で，底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部に至っているもの（第177図3）と，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部に至っているもの（第177図2）と，口縁部はわずかに外反するもの（第177図1）の3種類がある。整形技法は，水挽き整形である。

以上が第3群土器の概略であるが，本群では，甕形土器を除き整形技法は水挽き整形が主である。また，高台付埦形土器や高台付坏形土器は，内面黒色処理が施されているものが多い。出土土器は，実測図を見てもわかるように，殆どが耕作のためのトレンチャーにより破片と化したものであるため，詳細については説明が加えられない点もある。しかし，基本的には，西方約70mに隣接する五斗落遺跡と，器形や整形技法等は同様である。同一台地であり隣接する遺跡であるため，出土土器はもとより集落としても関連するものと思われる。

以上当遺跡における古墳時代後期，奈良・平安時代に比定される出土土器の概略である。これらの土器の器種別出土量を見ると，第11表の様な結果となる。

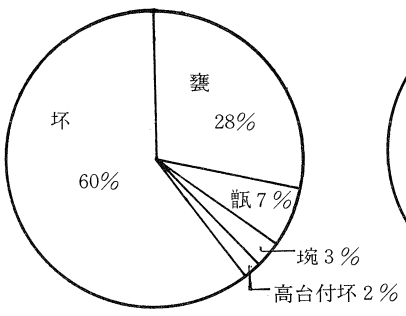


第177図　第3群1類・2類・3類・4類・5類遺物実測図

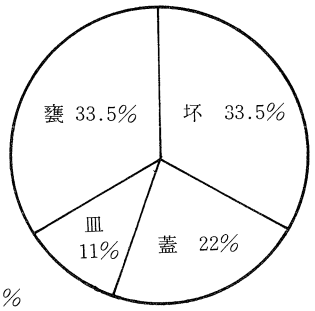
第11表　時期別出土土器一覧表（形土器省略）……（　）中は須恵器

	時　　期		甕	甑	椀	高台付椀	坏	高台付坏	皿	蓋	合計
I	II類	古墳時代後期	鬼高II式期	15	5	1		23	1			45
群	III類	古墳時代後期	鬼高III式期	7 (3)	1	2		27 (3)	1			44
II	I類	奈良時代前期	8世紀初頭	2				1			(1)	4
	II類	奈良時代前期	8世紀前半	1				1		1	(1)	4
群	III類	奈良時代前期	8世紀後半					1				1
III	I類	平安時代前期	9世紀前半						1			1
	II類	平安時代前期	9世紀中頃					2				2
	III類	平安時代前期	9世紀後半	4		1	1	11	2			19
群	IV類	平安時代中期	10世紀初頭	2		1		3	2			8
	V類	平安時代中期	10世紀前半					3				3
	合　　計			34	6	5	1	75	7	1	2	131

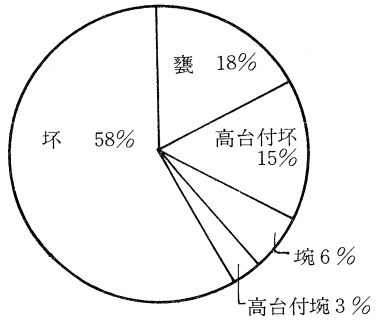
※完形の土器のみでなく，破片も器形の窺えるものは1個体とした。



I群土器出土率（古墳時代）



II群土器出土率（奈良時代）



III群土器出土率（平安時代）

第11表時期別出土土器一覧表から器種別に出土量を見ると，I～III群を通して坏形土器が一番多く，次いで甕形土器が出土している。したがって甕形土器や坏形土器は，当時の日常生活の中でいかに使用度が大きかったかが窺える。なお，当遺跡の時期判断は，出土量の多い，坏形土器，甕形土器をもって，ほぼ基準とし構成した。しかし，これらの土器群は1軒の住居跡から出土したものであり，個々の土器によっては時期が前後する場合もあり得る。また，この土器分類は，当遺跡における分類の結果であり，必ずしも他の遺跡に及ぶものではない。

第3節　弁ノ内遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県土浦市大字手野町字長堀4575ほかに所在し，調査面積は946㎡である。現況は南側から北側に向かって，やや傾斜を呈する畑であるが，遺跡のほぼ中央北側の一部が支谷へ続く急傾斜を呈し，篠及び雑木林である。当遺跡の西方約110ｍに大儘遺跡が所在し，谷津を挟んで東方約200ｍに原ノ内遺跡が所在する。発掘調査の結果，検出された遺構は，弥生時代の竪穴住居跡１軒，平安時代の竪穴住居跡２軒，土坑１基である。出土した遺物は，土師式土器及び弥生式土器片である。

2　遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

第１号住居跡（第178図）

本跡は，調査区の最西端部 A1i$_5$ ・ A1i$_6$ ・ A1j$_5$ ・ A1j$_6$ 区に確認された住居跡で，第２号住居跡の北西約16ｍに位置している。

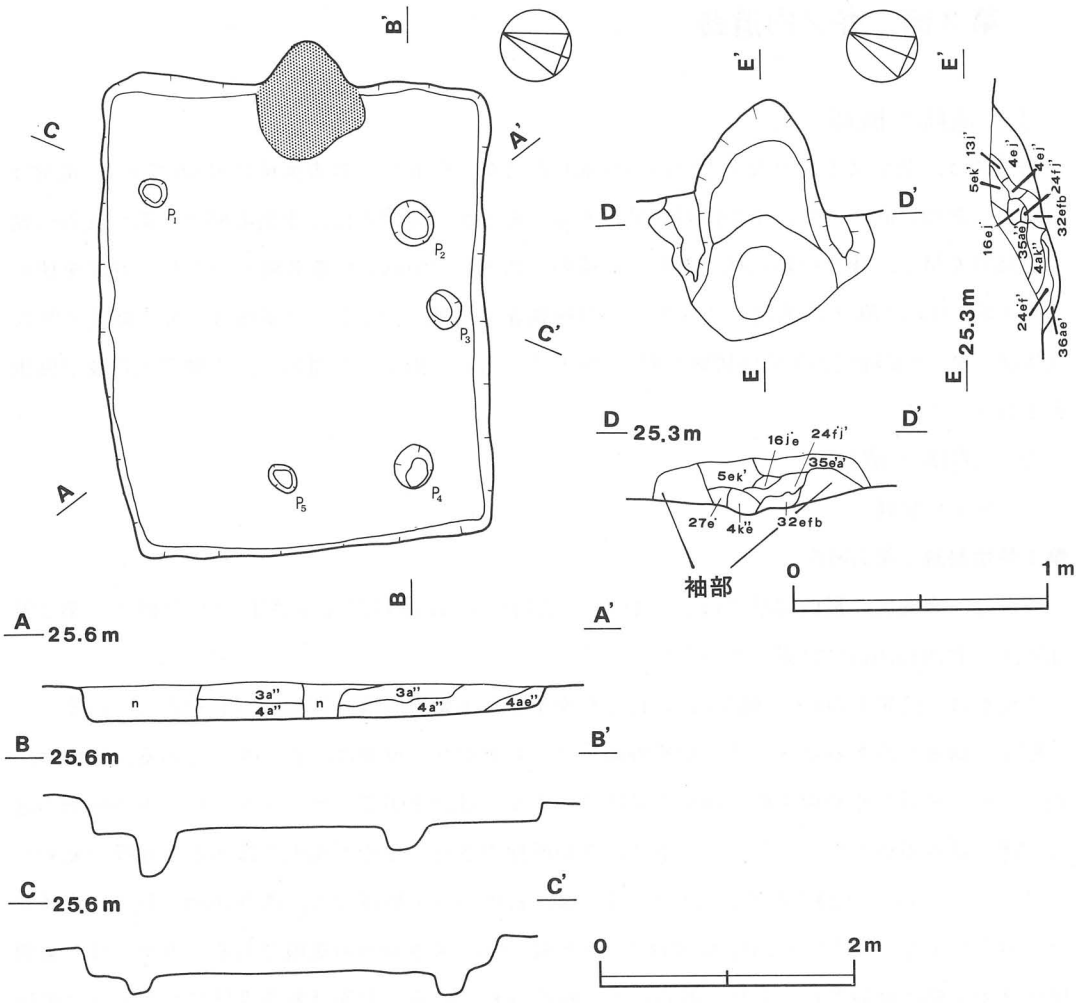
平面形は，長軸3.7ｍ・短軸3.0ｍの長方形を呈し，主軸方向は，Ｎ－64°－Ｅを指している。

壁は，締まりのあるロームで，やや外傾して立ち上がり，壁高は，25～30cmである。床面は，西コーナー付近とやや中央部に撹乱を受けているが，ほぼ平坦で，カマドからピットの内側の区域が硬く踏み固められている。ピットは，５か所検出され，やや不規則ではあるが規模や配列からＰ$_1$ ・Ｐ$_2$ ・Ｐ$_4$ が主柱穴と考えられる。Ｐ$_1$ は，長径25cm・短径22cm，深さ16cm，Ｐ$_2$ は，直径33cmの円形を呈し，深さ22cm，Ｐ$_4$は，長径32cm・短径27cm，深さ30cmの規模である。カマドは，東側壁ほぼ中央部に付設されており，砂質粘土で構築されている。内面は熱を受けてレンガ状に焼けている。袖部は，左右とも約３分の２が消滅している。規模は，長さ95cm・幅75cmを測り，焚口部は消滅しているため不明である。掘り方は，壁を幅50cmで，外側に40cm掘り込んでいる。火床は，長径50cm・短径25cmの楕円形を呈し，床面を７cm掘り込んでいる。

覆土は，撹乱部を除き自然堆積の状態を呈し，ローム粒子を主体に焼土粒子を含む暗褐色土で，締まっている。

遺物は，土師式土器片103点，須恵器片31点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片２点が出土した。完形の遺物は無く，第179図１は，南部コーナー付近の壁際の床面から逆位の状態で出土した土師式土器の坏である。完存率は約85％である。第179図２は，カマド内から出土した土師式土器の小型の坏である。第179図３は，カマドの袖部の中に立てた状態で出土した土師式土器の甕片である。袖部の補強材として使われたものと思われる。

本跡は，出土遺物から11世紀末の平安時代後期に比定される遺構と推定される。

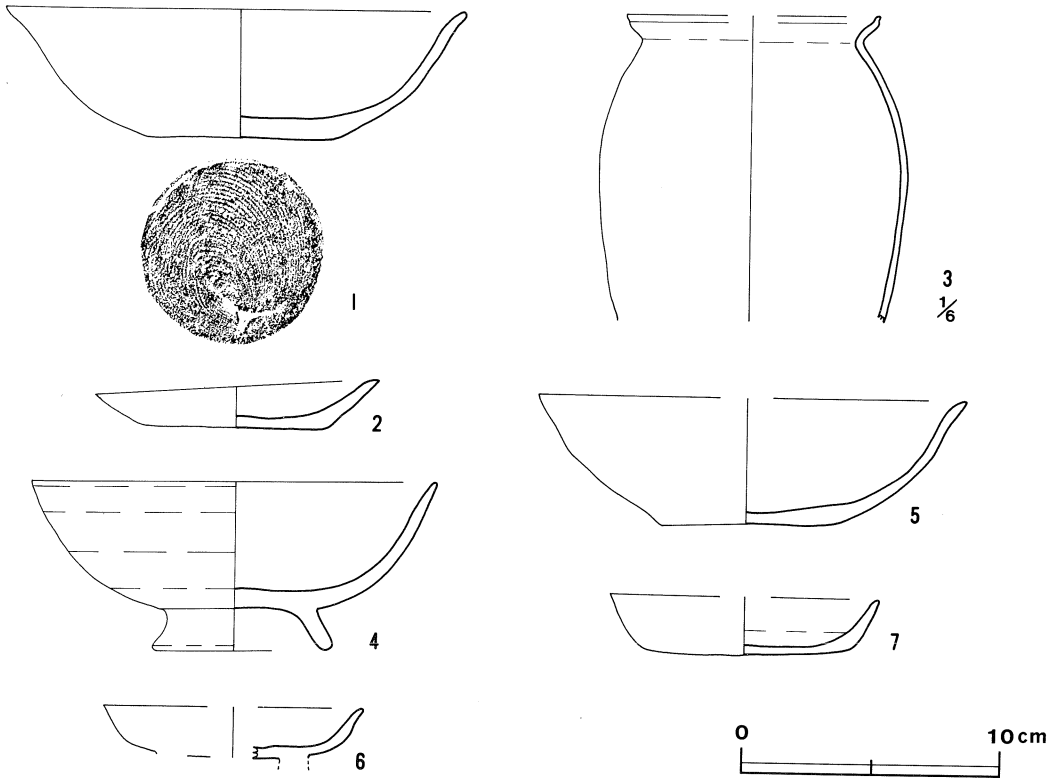


第178図　第１号住居跡実測図

第１号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第179図 1	坏形土器 土師器	A 18.0 B 4.8 C 7.0	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	水挽き整形。底部外面回転糸切り。ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母・礫・スコリア にぶい褐色 普通	90% P９
2	坏形土器 土師器	A 11.1 B 1.8 C 7.2	底部は平底で，体部はやや内彎気味に外上方へ立ち上がる。	水挽き整形。底部の切離しは不明。ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	98% P13
3	甕形土器 土師器	A (19.5) B (24.0)	胴部は長胴を呈し，やや内彎しながら立ち上がり，胴中位から内傾する。口縁部は「く」の字状に外上方に開き，口唇部はやや外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面上位ナデ。下位ヘラ削り。	砂粒・礫・雲母・長石 にぶい橙色 普通	10% P１

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
4	高台付坏形土器 土師器	A　15.8 B　6.6 D　7.0	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	水挽き整形。高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	97% P 6 内面黒色処理
5	坏形土器 土師器	A (17.0) B　5.1 C　6.8	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	水挽き整形。底部外面回転糸切り。ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母・石英 にぶい褐色 普通	40% P10
6	高台付坏形土器 土師器	A (10.2) B　2.0 D　5.9	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。底部は一度回転糸切りで切り離した後高台を貼り付けている。	水挽き整形，高台底部外面回転糸切り。ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母・石英 にぶい褐色 普通	40% P11
7	坏形土器 土師器	A (10.6) B　2.3 C (7.8)	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	水挽き整形。底部外面回転ヘラ切り。ロクロ回転方向右。	砂粒・長石・石英・雲母・礫 にぶい橙色 普通	40% P12



第179図　第1号住居跡出土遺物実測図

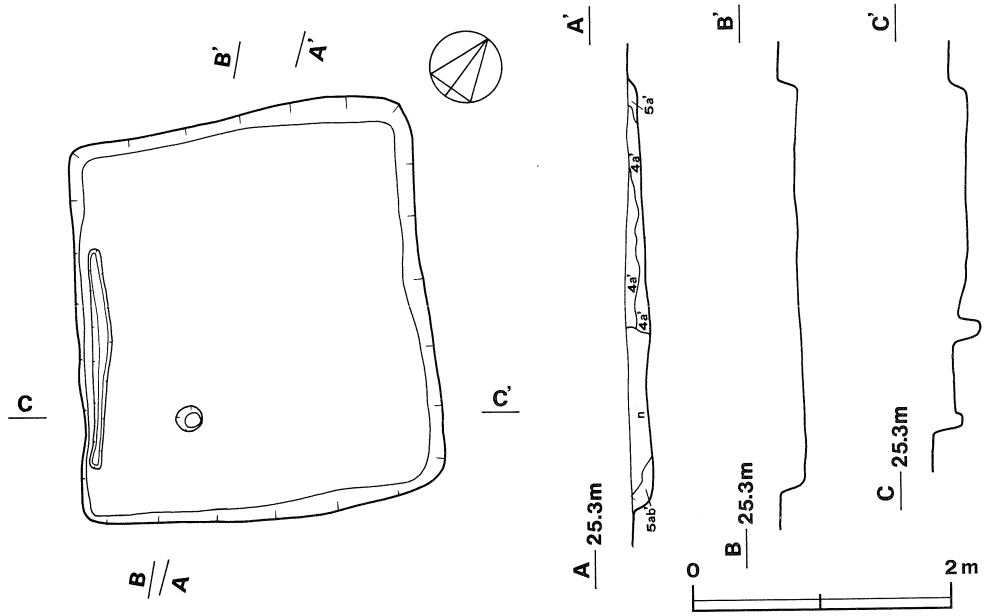
第２号住居跡（第180図）

本跡は，調査区の西部B1b$_9$・B1b$_0$区を中心に確認された住居跡で，第１号住居跡の南東約16m，第３号住居跡の北西約52.5mに位置している。本跡は，北西部・北東部・南東部に撹乱を受けている。

平面形は，長軸3.2m・短軸2.75mの長方形を呈しており，比較的小形の住居跡である。主軸方向は，N－49°－Eを指しているものと思われる。壁は，締まりのあるロームで，やや外傾して立ち上がり，壁高は，10～20cmである。床面は，住居跡の約２分の１が撹乱を受けており，北西部・北東部・南東部はやや凹んでおり，南西部は，硬く踏み固められ，やや高くなっている。南西の壁際には，幅７～15cm，深さ５cm・長さ1.75mの溝を有している。ピットは，床面が撹乱されているため検出困難であったが１か所検出され，主柱穴と思われる。規模は，直径20cmの円形を呈し，深さは20cmを有している。カマドは形状や方向から見て撹乱部の北東壁に付設されていたものと思われるが，消滅している。

覆土は，撹乱部を除き自然堆積の状態を呈し，ローム粒子を主体に含む暗褐色土で，締まりを有している。

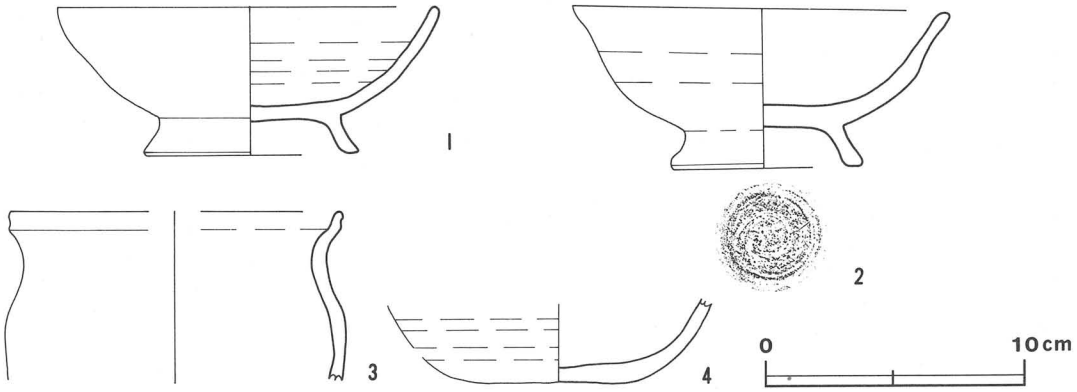
遺物は，土師式土器片28点，須恵器片15点，周囲からの流れ込みと思われる縄文式土器片１点が出土した。完形の遺物第181図１は，南西部の覆土から正位の状態で出土した土師式土器の坏である。第181図２は，南コーナー付近の覆土から正位の状態で出土した土師器の器の坏である。完存率は95％である。第181図３は，南西部の覆土から逆位の状態で出土した土師式土器の小



第180図　第２号住居跡実測図

型甕片である。

本跡は，出土遺物から９世紀末の平安時代前期に比定される遺構であると推定される。



第181図　第２号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡出土土器観察表

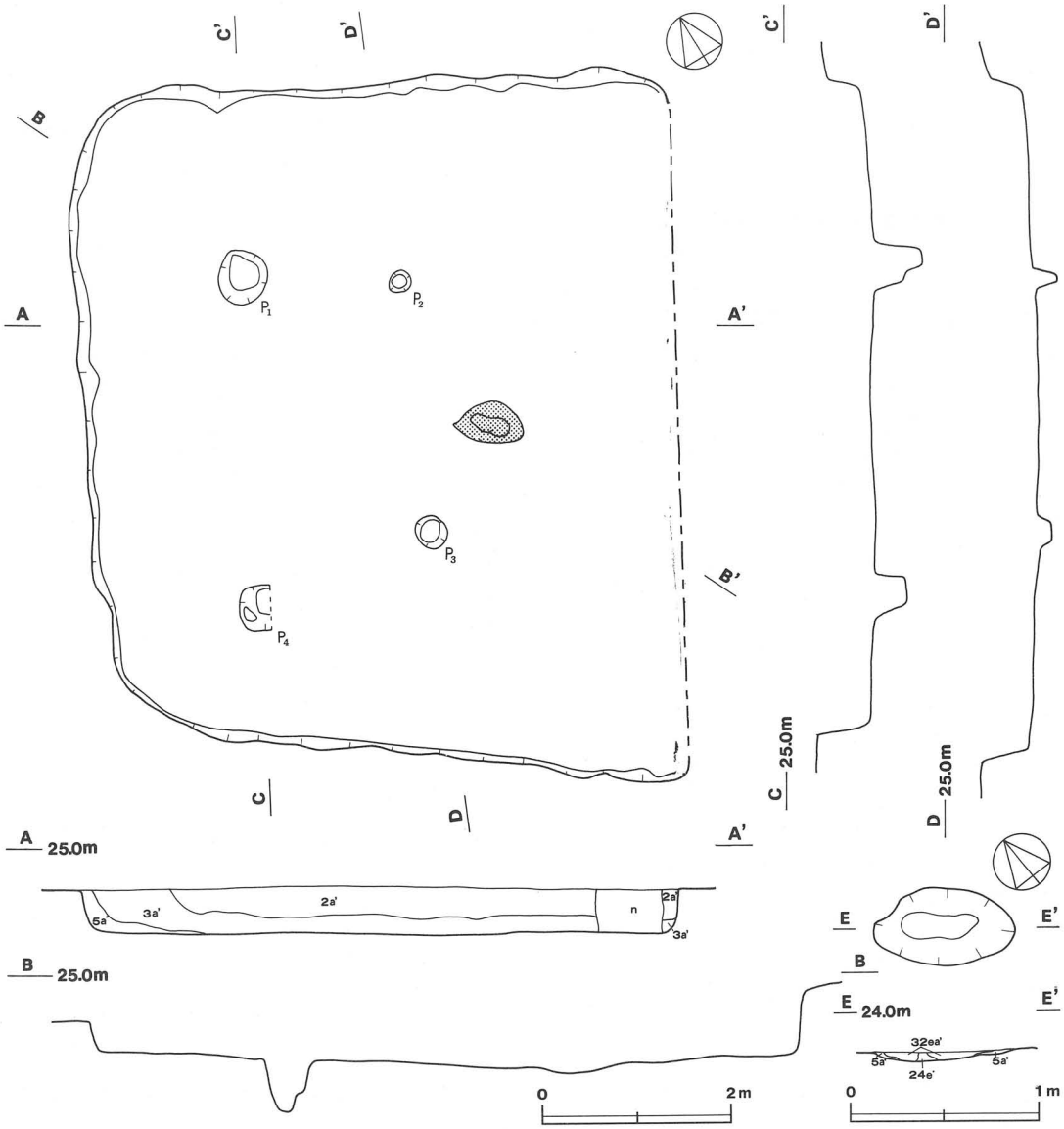
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第181図 1	高台付坏形土器 土師器	A 15.0 B 5.9 D 8.4	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	水挽き整形。高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	97% P７ 内面黒色処理
2	高台付坏形土器 土師器	A 14.8 B 6.3 D 7.5	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。高台は外下方へのびる。	水挽き整形。高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・礫・雲母・長石 にぶい橙色 普通	98% P８ 内面黒色処理
3	甕形土器 土師器	A (13.0) B (6.7)	口縁部は外反して外上方に開き，口唇部は外上方につまみ上げられ，おりかえしを有する。内面の口縁部と胴部の境に輪積痕を有する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい赤褐色 普通	10% P２
4	坏形土器 土師器	B (3.0) C 6.0	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がっている。	水挽き整形。内面ヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り。ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	30% P14

第３号住居跡（第182図）

本跡は，調査区の最東端部 $B3h_2$ ・ $B3h_3$ ・ $B3i_3$ 区を中心に確認された住居跡で，第２号住居跡の南東約52.5ｍに位置している。

本跡の東部は，調査エリア外のため規模や平面形等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると，平面形は，長軸不明・短軸７ｍ，ピットの配列や炉の位置から見て，更に東方に延びる隅丸長方形を呈する比較的大形の住居跡であると思われる。主軸方向は，Ｎ－57°－Ｗを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は，35～55cmである。床は，

凹凸が無くなだらかで，中央に向かってゆるやかに傾斜しており，鍋底状を呈している。床面は，やや軟弱である。ピットは，４本検出され規模や配列等から主柱穴は，P_1・P_4と思われる。P_1は，長径59cm・短径53cm，深さ55cm，P_4は，長径54cm・短径50cm，深さ35cmの規模である。その他の主柱穴は，東側のエリア外に有するものと思われる。炉跡は，住居跡のほぼ中央部と思われる位置に検出され，長径76cm・短径41cmの不整楕円形を呈している。炉床は，床を長径76cm・短径41cmの楕円形に７cmほど掘り込み，焼けてブロック状を呈しており暗赤褐色の焼土粒子が主体に堆積している。

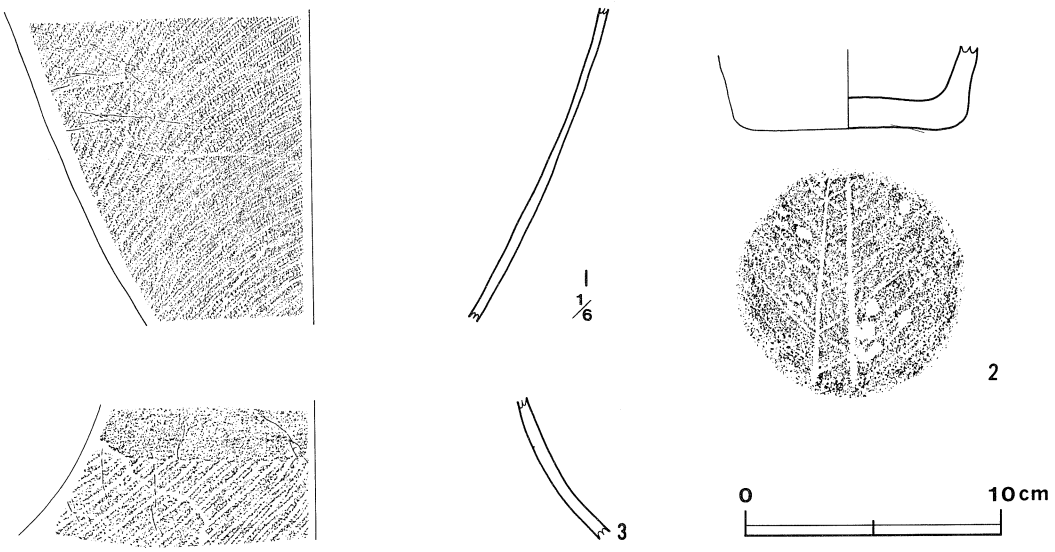


第182図　第３号住居跡実測図

覆土は，中央よりやや南西部と南東部端に撹乱を受けているが，その他は，自然堆積の状態を呈し基本的には２層に大別され，上層は，黒褐色土，下層は，極暗褐色土で共にローム粒子を含み締まっている。

遺物は，比較的少量ではあるが，弥生式土器片46点，土師式土器片５点，須恵器片２点が出土した。完形の遺物は無く，第183図１は，住居跡の南西部の床面から正位の状態で出土した弥生式土器の甕胴部片である。第183図２は，北西部の床面から正位の状態で出土した擬似木葉痕を有する弥生式土器の壺の底部である。

本跡は，出土遺物から弥生時代後期前半に比定される住居跡と推定される。



第183図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第183図 1	甕形土器 弥生式土器	B（24.3）	胴部はわずかに内彎気味に外上方に立ち上がる。	胴部内面ナデ。外面付加条縄文。	砂粒・礫・雲母・長石 にぶい橙色 普通	5％ P３
2	甕形土器 弥生式土器	B（ 3.0） C　8.2	底部は平底で，胴部は外傾しながら外上方へ立ち上がる。	底部内面ナデ。外面擬似木葉痕。胴部下端外面付加条縄文。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	5％ P５
3	甕形土器 弥生式土器	B（ 5.2）	胴上位から口頸部にかけて，わずかに外反する。	口頸及び胴上位内面ナデ。口頸外面横ナデ。胴部外面付加条縄文。	砂粒・長石・雲母・石英・スコリア 橙色 普通	5％ P４

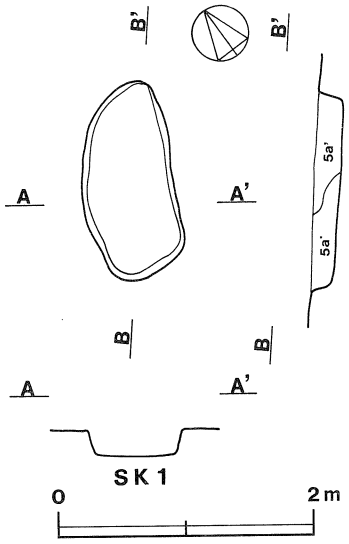
(2) 土坑

第1号土坑（第184図）

本跡は，調査区の西部B1a$_8$区に確認された土坑で，第1号住居跡の南東約9.8m，第2号住居跡の北西約5.5mに位置している。平面形は，長径157cm・短径73cmの不整楕円形を呈し，長径方向はN－39°－Eを指している。深さは20cmで，底面は平坦でやや硬く締まっている。壁は締まったロームで，外傾して立ち上がっている。

覆土は，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子を多量に含む褐色土で締まっている。

本跡に伴なう出土遺物は無く，時期等については不明である。



第184図　第1号土坑実測図

3　まとめ

当遺跡は，古墳時代から奈良・平安時代の集落跡として発掘調査を実施したが，調査した結果遺構の分布状態は薄く，検出した遺構は竪穴住居跡３軒，時期不明の土坑１基のみである。また，調査面積も946㎡という小範囲であるため，集落全体を述べることはできないが，調査した範囲内で住居跡内から出土した遺物を古い順に分類し，各遺構の時期をより明確にしたい。なお，当遺跡の遺構に直接的には伴わないが，極少量の縄文式土器片が出土しているが，東西に隣接する五斗落・大儘・ゴリン山・原ノ内・真木ノ内の各遺跡からも縄文式土器片が出土していることから，当時の人々の生活圏であったものと考えられる。

(1) 竪穴住居跡について

当遺跡の竪穴住居跡を区分すると，弥生時代後期前半に比定されるもの１軒，平安時代に比定されるもの２軒である。平安時代については２期に分けて概略を述べることにする。

弥生時代

弥生時代後期前半に比定される住居跡は，当遺跡の東部最端のB3h_2区を中心に１軒検出された。弥生時代後期前半に比定される住居跡（第３号住居跡）

平面形は，隅丸長方形を呈するが，特にコーナー部がゆるやかな隅丸形を呈することと，なだらかに傾斜した床面は当遺跡の住居跡に於いては類例がない。出土土器は，この時期に見られる弥生式土器片が主である。

平安時代

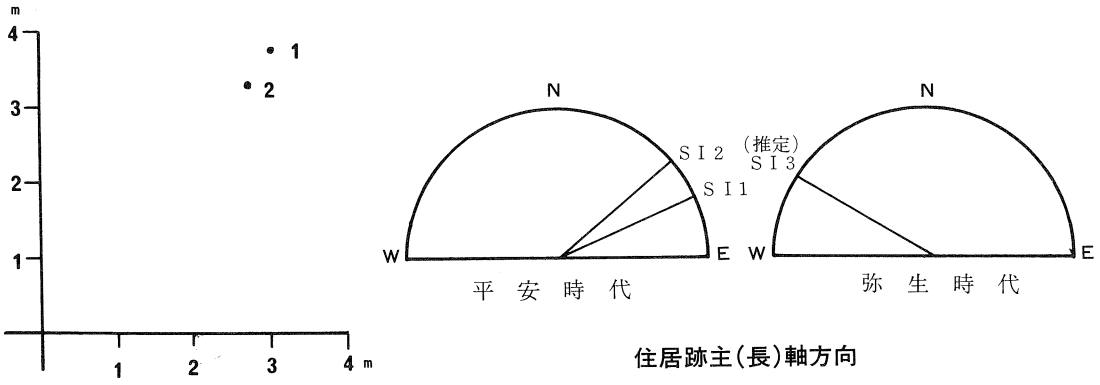
平安時代に比定される住居跡は，当遺跡の西部A1i_5区とB1b_9区を中心に２軒検出された。これらの住居跡を出土遺物から下記の２期に分けて説明をくわえる。

Ⅰ期　９世紀末の平安時代前期に比定されると思われる住居跡（第２号住居跡）
Ⅱ期　11世紀末の平安時代後期に比定されると思われる住居跡（第１号住居跡）

Ⅰ期の住居跡は，第10図の住居跡分布図を見ると当遺跡の西部に位置し，16ｍ西方の西部最端にはⅡ期の住居跡が位置している。Ⅰ・Ⅱ期を比較すると，平面形・規模・主軸方向等は，ほぼ同様の形態を呈しており，出土遺物からは時期差が認められるが，Ⅰ期・Ⅱ期とも平安時代の一般的な住居跡と考えられる。

表12　住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模 長軸×短径(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
3	B3 h2・h3 B3 i3	(N－57°－W)	隅丸長方形	－× 7.0	35～55	傾斜	4	炉	自然	土師式土器片5，須恵器片2 弥生式土器片46	弥生後期	前半
2	B1 b9 B1 b0	N－49°－E	長方形	3.2×2.75	10～20	傾斜	1	(カマド)	自然	土師式土器片28，須恵器片15 縄文式土器片1	平安前期	9C
1	A1 i5・i6 A1 j5・j6	N－64°－E	長方形	3.7× 3.0	25～30	平坦	5	カマド	自然	土師式土器片103，須恵器片31 縄文式土器片2	平安後期	11C



住居跡主(長)軸方向

(2)　土器について

第1・2号住居跡から出土した土器は，大部分が土師式土器で，須恵器は破片のみである。

第3号住居跡からは，弥生式土器が主で土師式土器は数片である。

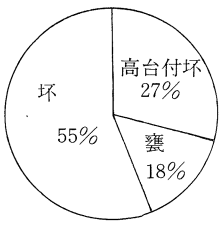
遺跡全体では，弥生式土器は甕形土器接合片3点であるが，平安時代に比定される土師式土器は，坏形土器が一番多く55%，次いで高台付坏形土器27%，甕形土器18%の順になっている。土器の分類にあたっては，従来の編年資料を参考にしながら五斗落・大儘遺跡に順じて各住居跡から出土した土器を中心に，その形態・技法などから弥生式土器・土師式土器（平安時代前期・後期）に区分して概略を述べることにする。

出土遺物数

第1号住居跡……甕形土器1・高台付坏形土器1・坏形土器5

第2号住居跡……甕形土器1・高台付坏形土器2・坏形土器1

第3号住居跡……甕形土器3



平安時代遺物出土率

弥生式土器

（甕形土器）

胴部は，わずかに内彎気味に立ち上がり，内面はナデており，外面は付加条縄文が施されている。底部は平底で，擬以木葉痕が施されている。

土師式土器

（甕形土器）

前期　口縁部は外反して外上方に開いている。口唇部は外上方につまみ上げられ，折り返しを有する。口縁部は内・外面とも横ナデ整形をしている。胴部は内・外面ともナデている。

後期　胴部は長胴を呈しており，やや内彎しながら立ち上がっている。口縁部は「く」の字状に外上方に開き，口唇部はやや上方につまみ上げられている。口縁部は内・外面とも横ナデ整形をしている。胴部は内・外面ともナデているが胴部外面下位はヘラ削りが施されている。

（高台付坏形土器）

前期　体部は内彎しながら外上方へ立ち上がっている。口縁部はわずかに外反している。高台は外下方にのび端部に面をなしている。水挽き整形で，体部内面黒色処理をしている。

後期　体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部に至っている。高台端部は丸い。水挽き整形で，体部内面黒色処理をしている。

（坏形土器）

前期　底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がっている。水挽き整形で内面をヘラで磨いている。

後期　底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反するものもある。水挽き整形で，底部の切り離しは，回転ヘラ切りと回転糸切りの２種類が見られる。

第4節　原ノ内遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県土浦市大字手野町字原ノ内3391ほかに所在し，調査面積は442㎡である。現況は，南側から北側に向かってやや傾斜を呈する山林である。当遺跡の西方約200ｍに谷津を挟んで弁ノ内遺跡が所在し，東方約450ｍに谷津を挟んでゴリン山遺跡が所在する。発掘調査の結果検出した遺構は，屋外炉２基，出土した遺物は縄文式土器片５点のみである。なお，地元の古老の話によると，当遺跡は昔罪人の処刑場であったと言い伝えられており，エリア外の南方約15ｍのところには石造の阿弥陀如来像があるが，この事に関する文献資料は現時点では発見されていない。

2　遺構と遺物

(1)　屋外炉

第１号外炉（第185図）

本跡は，調査区の東部第２トレンチの西方に当たるA2g_3・A2h_3区にかけて確認された屋外炉で，第２号屋外炉の北西約８ｍに位置している。確認した焼土の範囲は，長径約130cm・短径約80cmの不整楕円形を呈している。

炉の平面形は，長径96cm・短径47cmの不整楕円形を呈し，長径方向は，Ｎ－45°－Ｗを指している。炉床は，11cmほどの浅い掘り込みを有し，熱を受けて赤化している。壁は，擂鉢状を呈し，ゆるやかに立ち上がり，熱を受けてレンガ状に硬く焼けている。特に西側２分の１がよく焼けている。

覆土は自然堆積の状態を呈し，３層に分けられる。第１・３層は，明褐色土でローム粒子を主体に焼土粒子を含み，締まっている。第２層は，暗赤褐色土で焼土粒子を多量に含み，締まっている。炉の周囲は，ロームが締まっており，南東側がやや高くなっている。

本跡からの出土遺物は無かった。

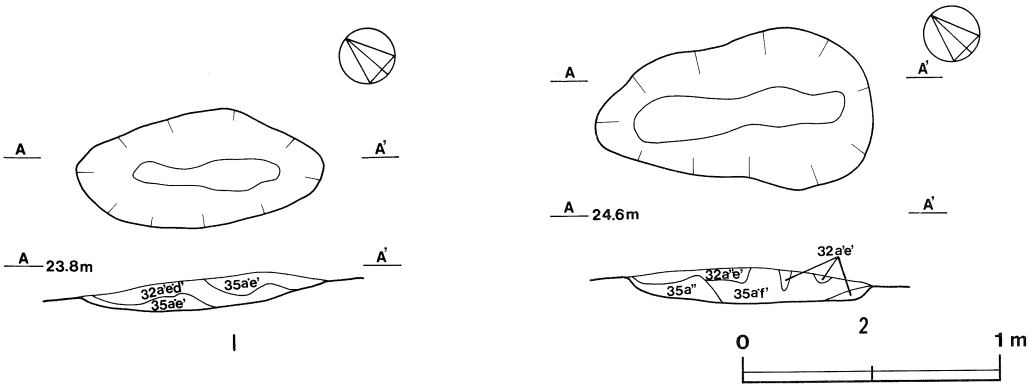
第２号屋外炉（第185図）

本跡は，調査区の東部第３トレンチの東方に当たるA2i_5区に確認された屋外炉で，第１号屋外炉の南東約８ｍに位置している。確認した焼土の範囲は，長径約130cm・短径約90cmの不整楕円形を呈している。

炉の平面形は，長径108cm・短径62cmの不整楕円形を呈し，長径方向は，Ｎ－48°－Ｗを指している。炉床は，12cmほどの浅い掘り込みで熱を受けて焼土ブロック化している。壁は擂鉢状を呈し，ゆるやかに立ち上がり，熱を受けてレンガ状に硬く焼けている。特に炉底面は硬く焼けている。

覆土は，自然堆積の状態を呈し，４層に分けられる。第１・３層は，暗赤褐色土で，焼土粒子を主体にローム粒子を含み，締まっている。第２層は，赤褐色土でローム粒子を主体に焼土小ブロックを含み，締まっている。第４層は，明褐色土で焼土粒子を少量含み，締まっている。

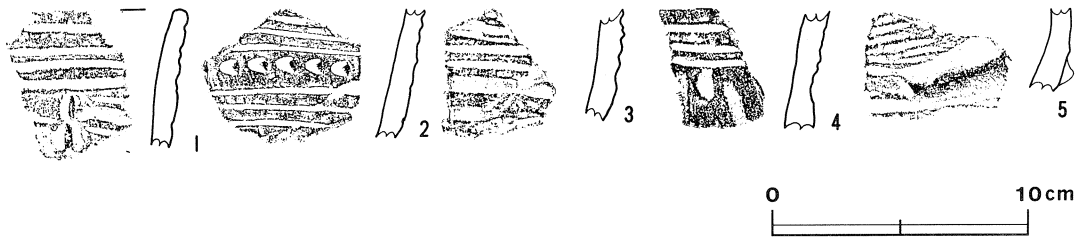
本跡からの出土遺物は無かった。



第185図　屋外炉実測図

(2)　その他の遺物（第186図）

第186図１～４は，当遺跡のトレンチ発掘の際に出土した縄文時代早期の田戸下層式に比定される土器片である。１は調査区の南西部に位置するA1g$_7$区の覆土から正位の状態で出土した口縁部片で，横位の平行沈線文下部に弧状を呈する刺突文が組み合わされている。胎土は，砂粒・雲母・石英粒を含み，色調は，にぶい赤褐色である。２は調査区の南西部A1f$_8$の覆土から正位の状態で出土した胴部片で，横位の平行沈線文間に半截竹管による刺突文が横一列に施されている。胎土，色調は１に同じである。３は調査区の西部A1g$_9$区の覆土から正位の状態で出土した胴部片で，横位の平行沈線文と凹線文が組み合わされている。胎土は１と同じで，砂粒・雲母・石英を含み，色調は橙色である。４は調査区の西部A1f$_8$区の覆土から横位の状態で出土した胴部片で，横位の平行沈線文と縦位の凹線が組み合わされ，更に，平行沈線文の下位と縦位の凹線の左上位にえぐり込むような弧状の刺突文が加えられている。胎土は，砂粒・雲母・石英粒を含み，色調は橙色である。５は縄文時代中期後半の加曽利Ｅ式に比定される土器の口辺部片である。文様帯を隆帯と沈線によって区画し，区画内に無節縄文ｒが斜位に施されている。胎土は，砂粒・雲母・石英粒を含み，色調は，にぶい赤褐色である。



第186図　遺跡出土遺物拓影図

3　まとめ

当遺跡は，縄文時代早・前期の遺物包含地として発掘調査を実施したが，調査の結果，遺構，遺構，遺物は極めて薄く，遺構は，屋外炉２基を検出したのみである。遺物は，縄文時代早期の田戸下層式に比定される土器片４点と縄文時代中期後半の加曽利Ｅ式に比定される土器片１点が出土した。これらの遺物は，直接２基の屋外炉からの出土ではなかったが，出土遺物は，これら数片の土器にすぎなかったので，屋外炉の時期は，縄文時代早期に比定されるかと思われる。

当遺跡からは，住居跡等の遺構は検出できなかったが，２基の屋外炉や数点の縄文式土器片が出土したこと，また，当遺跡の東西に隣接する五斗落・大儘・弁ノ内・ゴリン山・真木ノ内の各遺跡からも同時期の縄文式土器片が出土していることから，当時の人々の生活圏であったものと考えられる。遺跡の詳細については，調査面積が442㎡という小範囲でもあり，遺跡全体を述べる事ができないため，今後の周辺遺跡の調査結果を待ちたい。

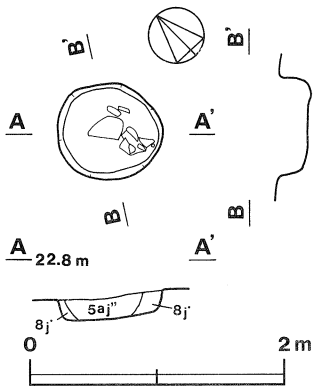
第5節　ゴリン山遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県土浦市大字手野町字谷川3,793の3ほかに所在し，調査面積は774㎡である。

現況は，遺跡の南側から北側にかけてやや傾斜を呈した山林である。遺跡の地形は北側の谷津から西側に，さらに南側へと支谷が入り込み，小規模な舌状台地状を呈している。遺跡の西方約450mに谷津を挟んで原ノ内遺跡が所在し，東方170mに真木ノ内遺跡が所在する。遺構は，中世の焙烙（ほうろく）を伴う土坑が1基検出されたのみである。遺物は，縄文時代草創期から後期に比定される土器片が，遺跡の南東部を中心に出土した。

2　遺構と遺物



第187図　第1号土坑実測図

(1)　土坑

第1号土坑（第187図）

本跡は，調査区のほぼ中央部B2c6区に確認された土坑である。

平面形は，長径83cm・短径77cmの円形を呈し，長径方向はN－45°－Wを指している。遺構確認面から坑底までの深さは，24cmほどで，壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は，平坦で，硬く締まっている。

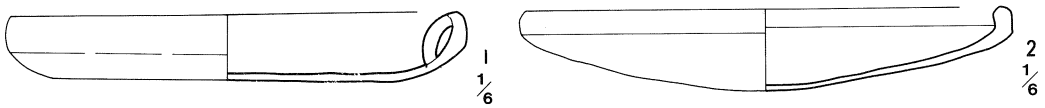
覆土は，ローム粒子・山砂を極少量含む褐色土主体に，壁際には，山砂を多量含む明褐色土が自然堆積している。

遺物は，焙烙（第188図1・2）が，一括投棄された状態で底面直上から出土している。

本跡は，出土遺物から中世に比定されるものと思われる。

第1号土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第188図 1	焙烙 土師器	A 35.0 B 5.2 C 26.8	底部は平らで，口縁部はほぼ直立する。内耳は2か所残っているが，配列から1か所欠損していると思われる。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ナデ。体部内面横ナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	75% P1 口縁部に2個の補修孔有り。
2	焙烙 土師器	A 42.0 B 6.5	体部は内彎気味に大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ナデ，体部内面横ナデ。	砂粒・雲母 淡橙色 普通	70% P2



第188図　第１号土坑出土遺物実測図

(2)　その他の遺物

遺構外からは，縄文式土器片374点，石器７点が出土している。縄文式土器片はいずれも破片で，摩耗しているものが多く器形をうかがえるものはない。拓本が可能なものだけを掲載し，５群に分類して説明を加え，石器については実測可能な７点を掲載した。

●縄文式土器

第１群土器〔縄文時代草創期に比定される土器群〕（第189図）

１～７は無文の土器片で，胎土に繊維は含まれない。１～４は口縁部片である。１は薄手で，口唇部が丸い。内・外面に横ナデが施されている。２も薄手で，小形土器の口縁部片と思われ，内・外面ナデである。３・４は口唇部が内そぎ状を呈し，内・外面ナデである。５～７はやや厚手の胴部片で，５は内・外面ナデ，６・７は外面縦位のナデ，内面ナデである。

８～12は夏島式に比定される土器片で，撚糸文が施されている。

第２群土器〔縄文時代早期に比定される土器群〕（第189図）

13～20は三戸式に比定される土器片である。13は口縁部片で，多条沈線が２段に施され，その間には刺突文が充填されている。14～20は胴部片である。14・15は横位の多条沈線文間に刺突文が充填されている。16は斜格子目文が，17・18は斜位の沈線文が施されている。19は太い沈線が横位に施されている。20は２条の沈線間にキザミ目を施し，梯子状の文様を呈している。

21・22は田戸上層式に比定される胴部片である。21は貝殻腹縁文が縦位に施されている。22は刺突文の施された２条の沈線文と貝殻腹縁文が組み合わされている。

23は田戸下層式に比定される胴部片で，沈線文が縦位・斜位に施されている。

24～27は茅山式に比定される胴部片で，いずれも胎土に繊維を含み条痕文が施されている。

28・29は早期末に比定される胴部片で，胎土に繊維が含まれている。28は短い縄文原体が押圧され，29は絡条体圧痕文が施されている。

第3群土器〔縄文時代前期に比定される土器群〕（第189・190図）

30～37は黒浜式に比定される土器片で，いずれも胎土に繊維を含んでいる。30・31は口縁部片で，単節縄文ＬＲが施されている。32～37は胴部片で，32は爪形文が横位に，33～37は縄文が施されている。

38～52は浮島式に比定される土器片である。38は口縁部片で，沈線による弧状文が施されている。39・40は胴部片で，39は多条沈線が波状に，40は沈線が横位に施されている。41は口縁部片で，爪形文が横位に施されている。42～52は胴部片である。42は爪形文が横位に施され，その直下に斜位の沈線文が施されている。43は変形爪形文が施されている。44は輪積みした後，指で縦位にナデている。45～51は貝殻腹縁文が施されている。52は三角刺突文が施されている。

53は興津式に比定される胴部片で，貝殻腹縁文が施されている。

54・55は諸磯式に比定される胴部片である。54は弧状に爪形文が施され，55はキザミ目を付した隆帯が文様を区画している。

第4群土器〔縄文時代中期に比定される土器群〕（第190図）

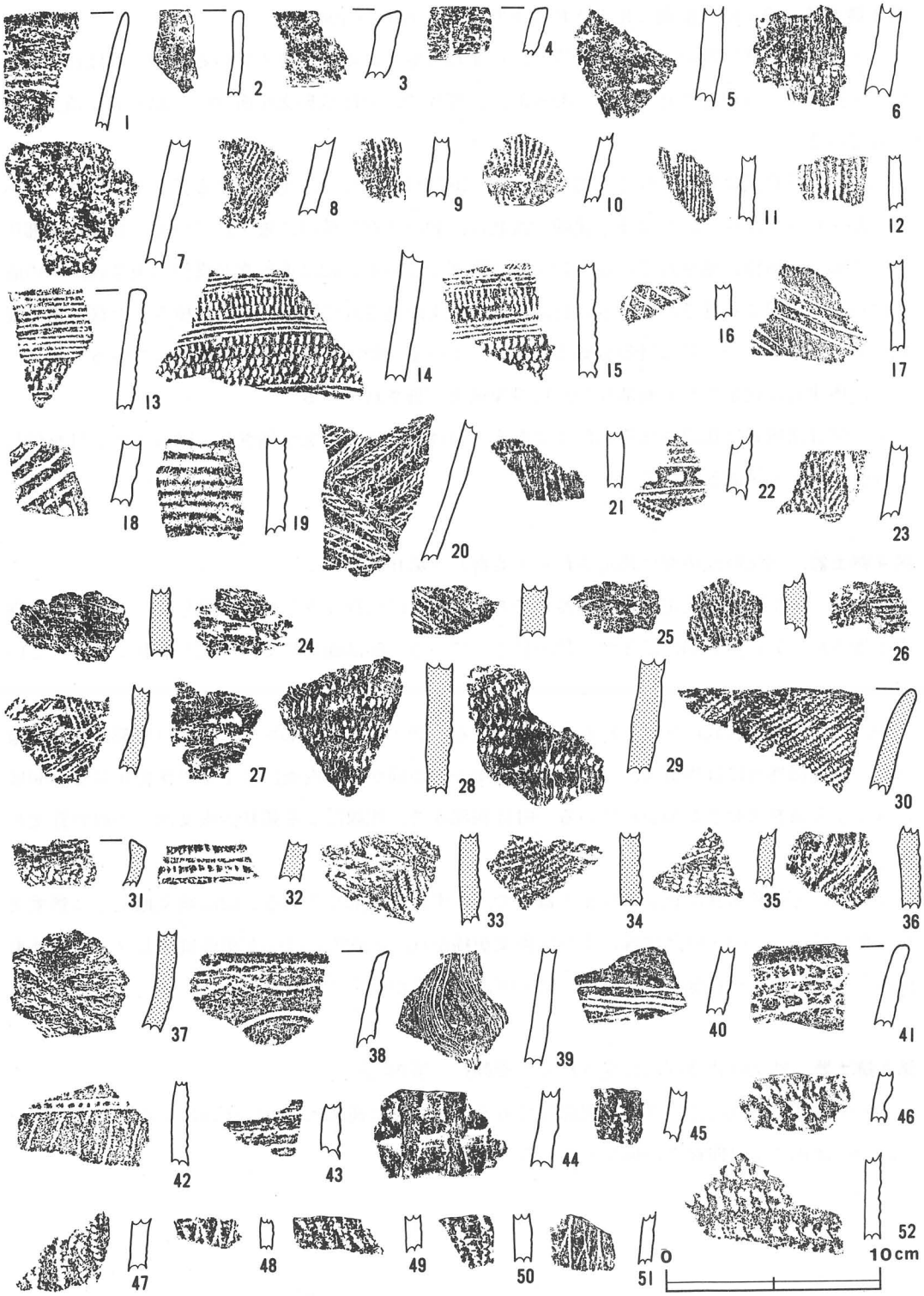
56～58は下小野式に比定される土器片である。56・57は折り返し口縁を呈している。56には縄文が施され，57の口唇部にはキザミ目が付されている。58は胴部片で，縄文が羽状に施されている。

59～61は五領ケ台式に比定される土器片である。59・60は口縁部片で，59は口唇部に縄文が施され，口縁部外面には押引文，三叉文，渦巻文などが描かれ，内面には１条の沈線が巡る。60は沈線による渦巻文などが描かれている。61は胴部片で，沈線による弧状区画文内に半截竹管文が施されている。

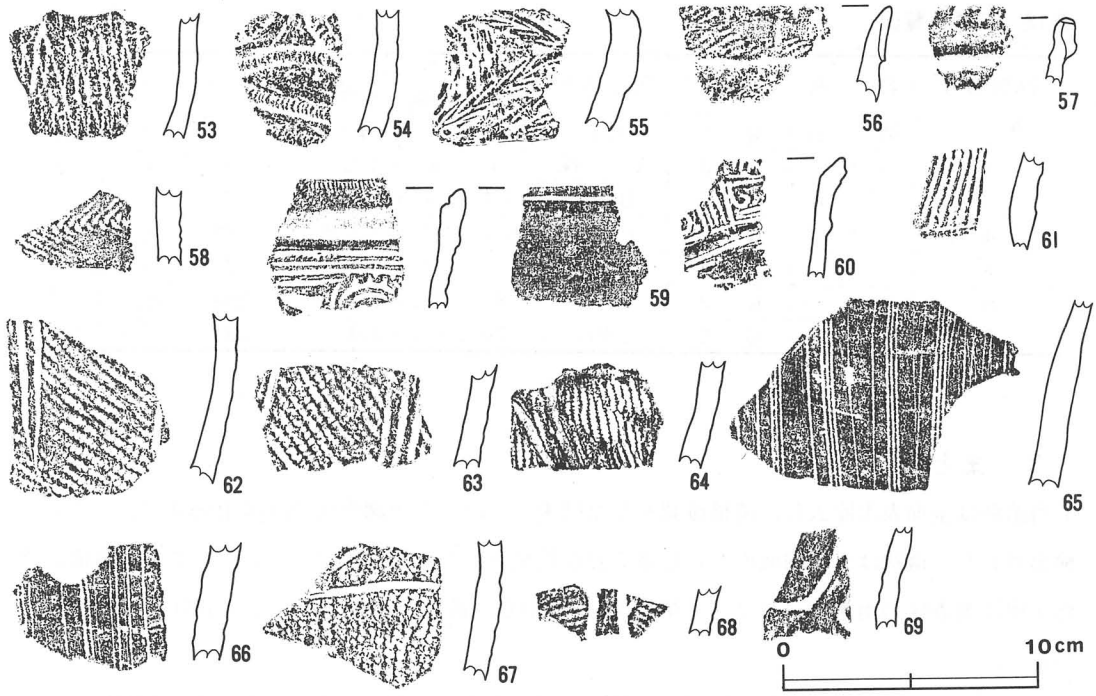
62～66は加曽利Ｅ式に比定される土器片で，いずれも胴部片である。62は縄文地文上に懸垂文が垂下している。63・64は沈線により区画文が描かれ，区画内には63が単節縄文ＬＲを，64は単節縄文ＲＬがそれぞれ施されている。65・66は条線文が縦位に施されている。

第5群土器〔縄文時代後期に比定される土器群〕（第190図）

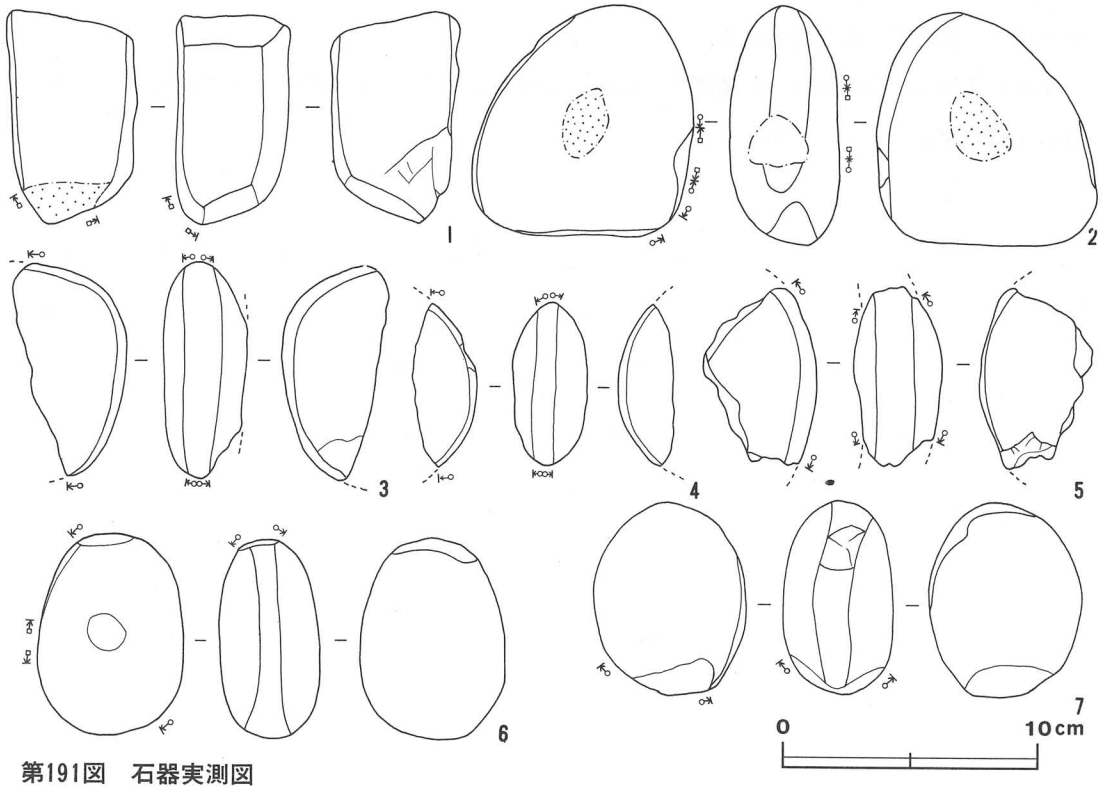
67～69は堀之内式に比定される胴部片である。67・68は縄文地文上に沈線による区画文が描かれ，69は沈線による曲線文が描かれている。



第189図　グリット出土遺物拓影図(1)



第190図　グリッド出土遺物拓影図(2)



第191図　石器実測図

表13　石器一覧表

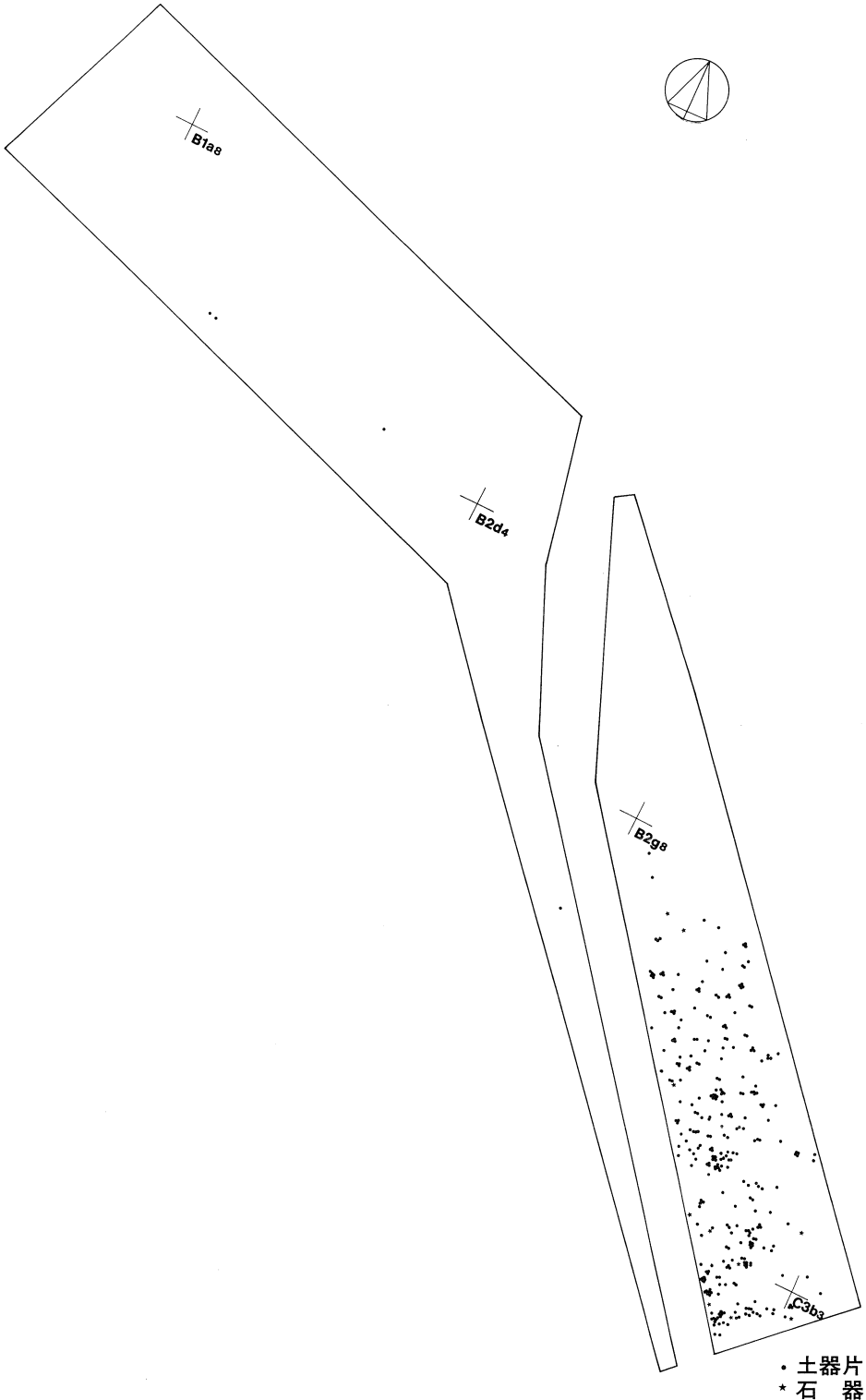
図版番号	名　称	台帳番号	出土地点	大きさ（cm） 長さ・幅・厚さ	重量（g）	石　質
第191図 1	磨　石	Q　1	B2h$_9$	(8.4)×4.9×4.5	(302)	石英斑岩
2	〃	Q　5	表　採	9.3×8.6×4.3	502	流紋岩
3	〃	Q　6	B2i$_0$	(8.4)×(4.6)×3.4	(129)	安山岩
4	〃	Q　7	C3a$_2$	(6.3)×(2.5)×2.9	(39)	安山岩
5	〃	Q　4	B2b$_1$	(7.0)×(4.4)×3.5	(125)	流紋岩
6	〃	Q　3	C3b$_2$	8.0×5.7×4.1	264	流紋岩
7	〃	Q　2	C3b$_3$	7.6×6.0×4.4	281	アプライト

3　まとめ

当遺跡は全面表土除去し，遺構確認をした結果，土坑１基が調査区のほぼ中央部B2c$_6$区から検出された。遺物は土坑内底面から焙烙２点が投棄された状態で出土している。また，遺構確認作業中に調査区の南東部，Ｂ２区（第192図）を中心に縄文式土器片374点，石器10点が出土している。

縄文式土器片は，縄文時代草創期から後期の堀之内式に比定されるもので，細片や摩耗しているものが大半である。当遺跡は，当遺跡の東側170ｍに所在する真木ノ内遺跡同様，往時の人々の生活圏の一部であったと思われる。

第１号土坑は，当遺跡唯一の遺構で，底面から出土した焙烙から中世に比定されるものと思われるが，性格については不明である。



第192図　遺物平面分布図

第６節　真木ノ内遺跡

１　遺跡の概観

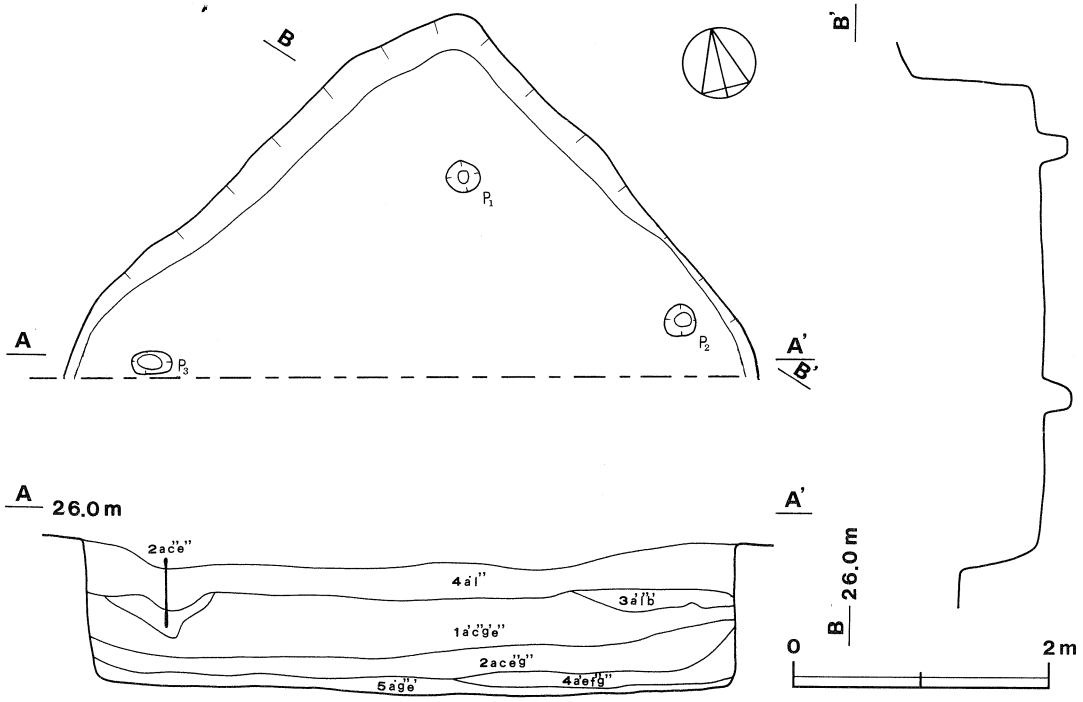
当遺跡は，茨城県土浦市大字手野町字真木ノ内3,876ほかに所在し，調査面積は548m²である。現況は，ほぼ平坦な山林である。当遺跡は６遺跡の中で最東部に位置し，遺跡の西方約170ｍにゴリン山遺跡が所在する。発掘調査の結果，検出された遺構は，古墳時代の竪穴住居跡１軒，溝１条である。出土した遺物は縄文式土器片数点・土師式土器・内耳土器片である。

２　遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

第１号住居跡（第194図）

本跡は，調査区の東部 B2e$_6$・B2e$_7$ 区に確認された住居跡で，本跡の南部は調査エリア外のため，規模や平面形の詳細は不明である。本跡は北コーナー部を中心に調査した。調査した部分から推定すると，平面形は，方形または長方形を呈するものと思われる。主軸方向は不明である。壁は，締まりのあるロームで，やや外傾して立ち上がっている。壁高は，60～65cmを測る。床は，平坦で軟弱である。ピットは，３か所検出され，いずれも主柱穴と思われる。P$_1$ は，直径29cmの



第193図　第１号住居跡実測図

円形を呈し，深さ22cm，P_2は，直径25cmの円形を呈し，深さ24cm，P_3は，長径32cm・短径19cm，深さ32cmの規模である。炉は，未調査区に存在するものと思われる。

覆土は，自然堆積の状態を呈し，ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む黒色土または黒褐色土が主体で締まっている。

遺物は，調査した小範囲にしては，多量に出土し，土師式土器片は41点で，その他は殆どが復元可能な土師式土器である。完形及びほぼ完形の遺物は，甕3個・壺1個・坩4個・高坏4個である。北コーナーから約1.7m西方の床面からは，坩の口縁部を取り除いた(第195図1)部分を下向きにし，3方から坩を取りまく様に支脚(第195図2･3･実測不可のもの1個)3個が立位の状態で出土した。第195図5は，コーナー付近の床面から斜位の状態で出土した甕である。第196図6は，北コーナーから約2.0m南方のほぼ床面から斜位の状態で出土した壺である。第196図7・8・9は，北コーナーから約3.0mの東壁際の床面から横位の状態で出土した高坏である。第196図10は，コーナー付近の床面から横位の状態で出土した坩である。

本跡は，出土遺物から古墳時代中期の和泉式期の遺構と推定される。

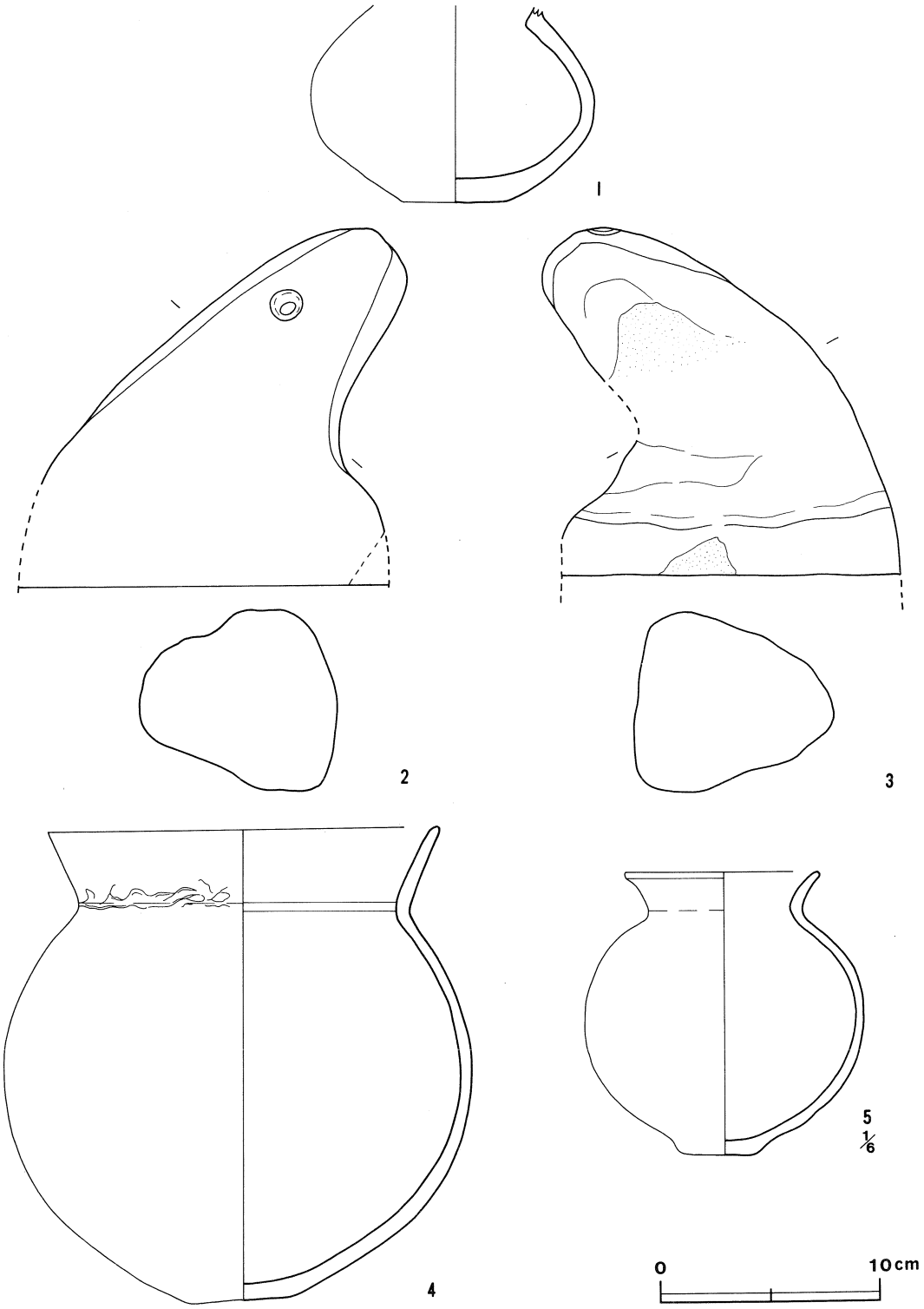
第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第195図 1	坩形土器 土師器	B (9.0) C 4.6	底部は平底で，胴部は扁平な球形を呈する。口縁部は欠損している。	胴部内面ナデ，外面ヘラ削り後ヘラ磨き。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	90% P16
4	甕形土器 土師器	A 17.9 B 21.9 C 4.7	底部は平底で，胴部は丸く張り，口縁部は直線的に外上方へ立ち上がる。外面の体部と口縁部の境に輪積痕が見られる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	100% P 4
5	壺形土器 土師器	A 18.8 B 25.1 C 7.0	底部は突出した平底で，胴部は球形を呈する。口縁部は外反しながら外上方へ開く。	口縁部内面横ナデ後ヘラ磨き，外面横ナデ。胴部内面ナデ。外面上位ナデ・中・下位ヘラ削り。頸部に輪積痕有り。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	100% P 3
第196図 6	高坏形土器 土師器	A 18.8 B 15.0 D 14.5	体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。体部外面下位にわずかに稜を有する。脚部はラッパ状を呈し，坏部と裾部の接点に継ぎ目を有する。裾端部はわずかにせり上がっている。全体的に薄手である。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラナデ。脚部内面ナデ，外面縦位のヘラナデ。裾部内面横ナデ，外面横ナデ後縦位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	95% P 6
7	高坏形土器 土師器	A 19.0 B 14.5 D 14.5	体部は，ほぼ直線的に外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至る。体部外面下位に脚部との継ぎ目を有する。脚部はラッパ状を呈する。全体的に薄手である。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラナデ。脚部縦位のヘラナデ。裾部内面横ナデ，外面横ナデ後縦位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	90% P 7

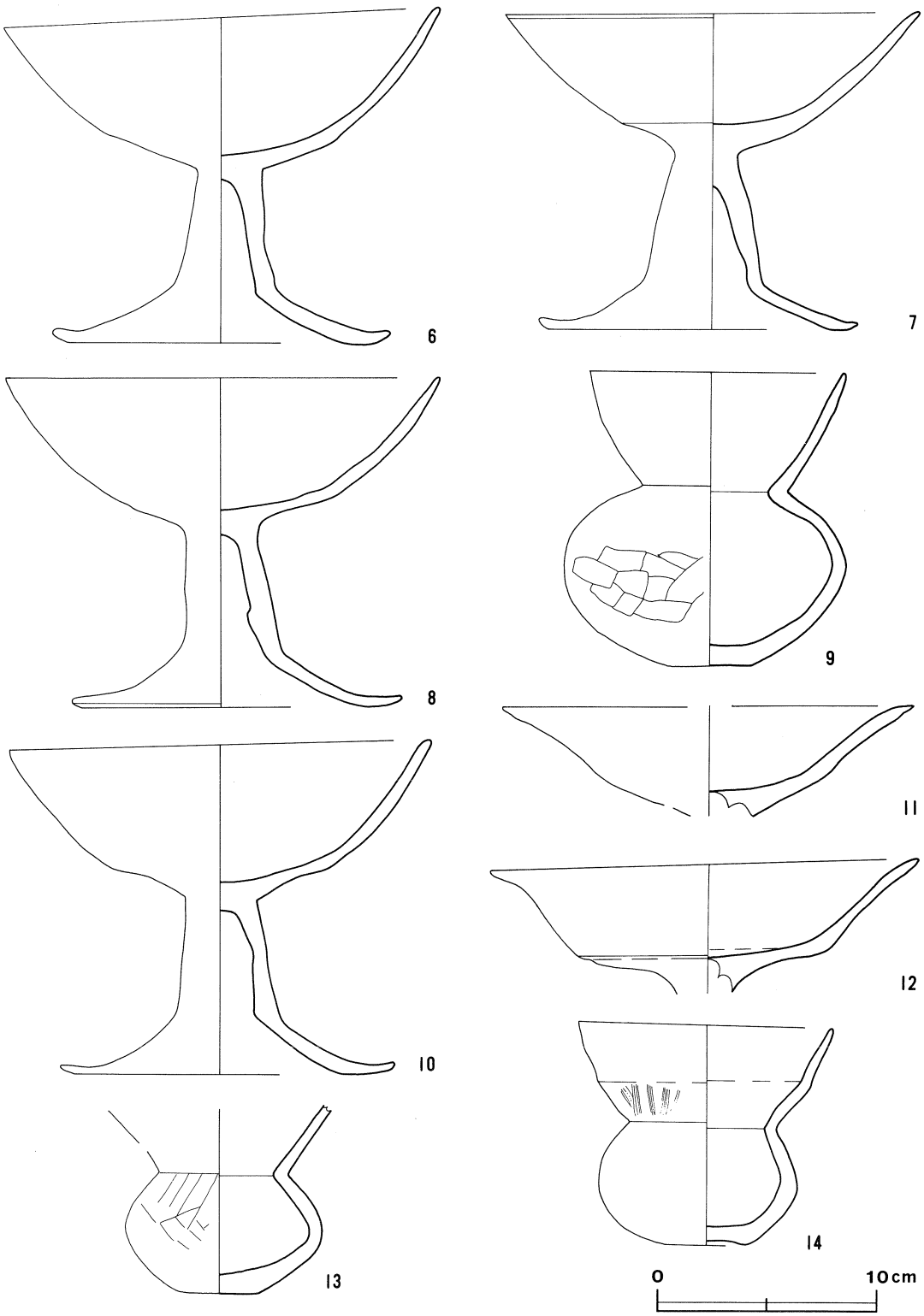
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
8	高坏形土器 土師器	A 19.8 B 15.2 D (15.0)	体部は内彎気味に大きく開き，そのまま口縁部に至る。脚部はラッパ状に開き，坏部と裾部の接点に継ぎ目を有する。全体的に薄手である。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラナデ。脚部内面ナデ，外面縦位のヘラナデ。裾部内面横ナデ，外面横ナデ後横位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石 明赤褐色 普通	80% P 8
9	坩形土器 土師器	A 11.6 B 13.5 C 3.8	底部は平底で中央部がやや凹み，胴部は扁平な球形を呈し，口縁部は内彎気味に外上方に長く立ち上がる。	口縁内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面上位ナデ，中・下位ヘラ削り。底部ヘラ削り	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	95% P13
10	高坏形土器 土師器	A 19.2 B 15.4 D 15.3	体部は内彎気味に広がり，そのまま口縁部に至る。体部外面下位に稜を有する。脚部はラッパ状を呈し，坏部と裾部の接点に継ぎ目を有する。裾端部はせり上っている。全体的に薄手である。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラナデ。裾部内面横ナデ。脚部・裾部外面横ナデ後縦位のヘラナデ。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	95% P 5
11	高坏形土器 土師器	A (13.7) B (6.0)	体部はほぼ直線的に外上方に開き，口縁部はわずかに外反する。脚部は欠損している。	口縁部内面横ナデ後横位のヘラ磨き，外面横ナデ後縦位のヘラ磨き，体部内面ヘラ磨き，外面ヘラ削り後縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	30% P10
12	高坏形土器 土師器	A 19.5 B (7.0)	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり，口縁部は外反する。体部外面下位に脚部と体部の継ぎ目が見られる。脚部は欠損している。	口縁部内面横ナデ後横位のヘラ磨き，外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き，外面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 赤色 普通	50% P 9
13	坩形土器 土師器	B (8.5) C 3.5	底部は平底で，胴部は扁平な球形を呈し，口縁部は直線的に外上方に立ち上がっている。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ，外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	85% P15
14	坩形土器 土師器	A 11.2 B 10.4 C 3.8	底部は平底で，中央部がやや凹み，胴部は扁平な球形を呈する。口縁部は外傾して外上方に立ち上がり，中位に稜を有し，稜を境にやや内側へ直線的に立ち上がる。	口縁部内面横ナデ，外面上位横ナデ，下位縦位のナデ。胴部内面ナデ。外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい褐色 普通	98% P14
第197図 15	甕形土器 土師器	A 19.7 B 24.4 C 5.5	底部は中央部をヘラで削られ，浅く凹んでいる。胴部は丸く張り，胴中位に最大径を有する。口縁部は「く」の字状に外上方へ開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面上位ナデ・下位不定方向のヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・礫 にぶい橙色 普通	90% P 1
16	甕形土器 土師器	A (18.6) B 25.9 C (4.6)	底部は平底で，胴部は丸く張り，胴中位に最大径を有する。口縁部は外反しながら外上方へ開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ。外面上位ナデ・中・下位不整方向のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	65% P 2

第1号住居跡出土土製品解説表

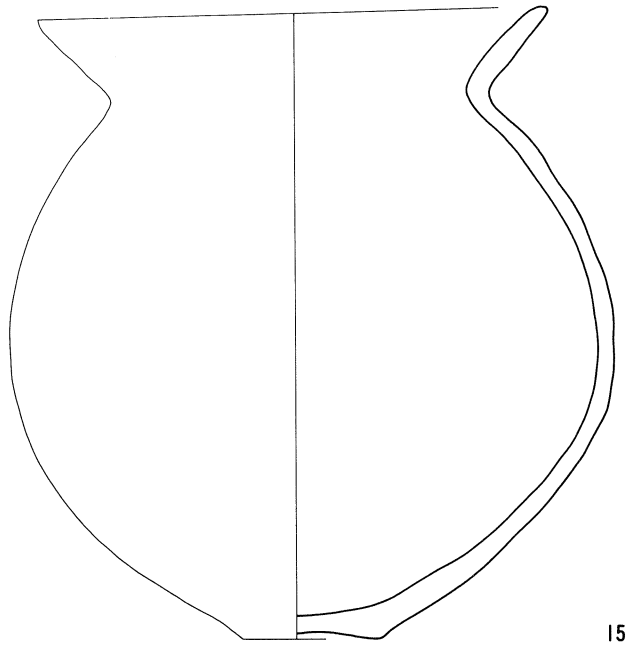
図版番号	名称	台帳番号	出土地点	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
第194図	支脚	DP－18	SI－1	(16.0)×9.0	—	(1200.0)	60%上位
〃	〃	DP－19	〃	〃	—	(900.0)	50%上位

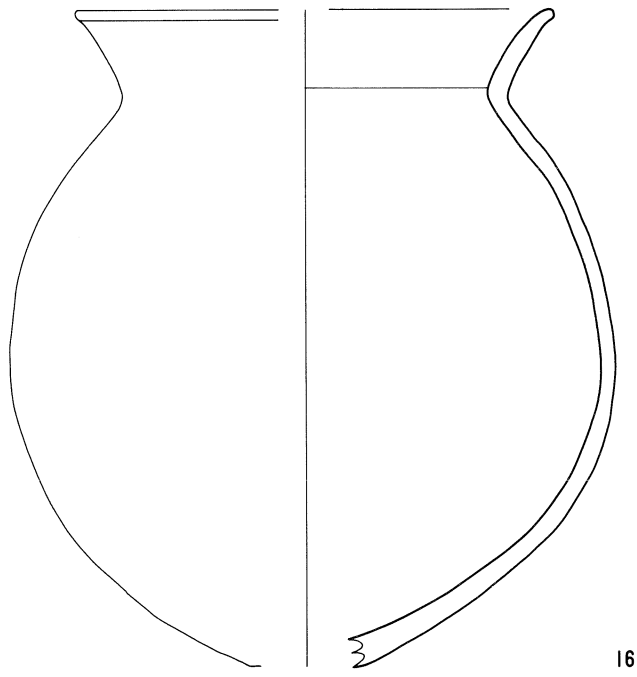


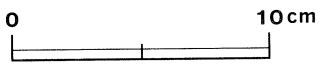
第194図　第１号住居跡出土遺物実測図（１）



第195図　第１号住居跡出土遺物実測図（２）







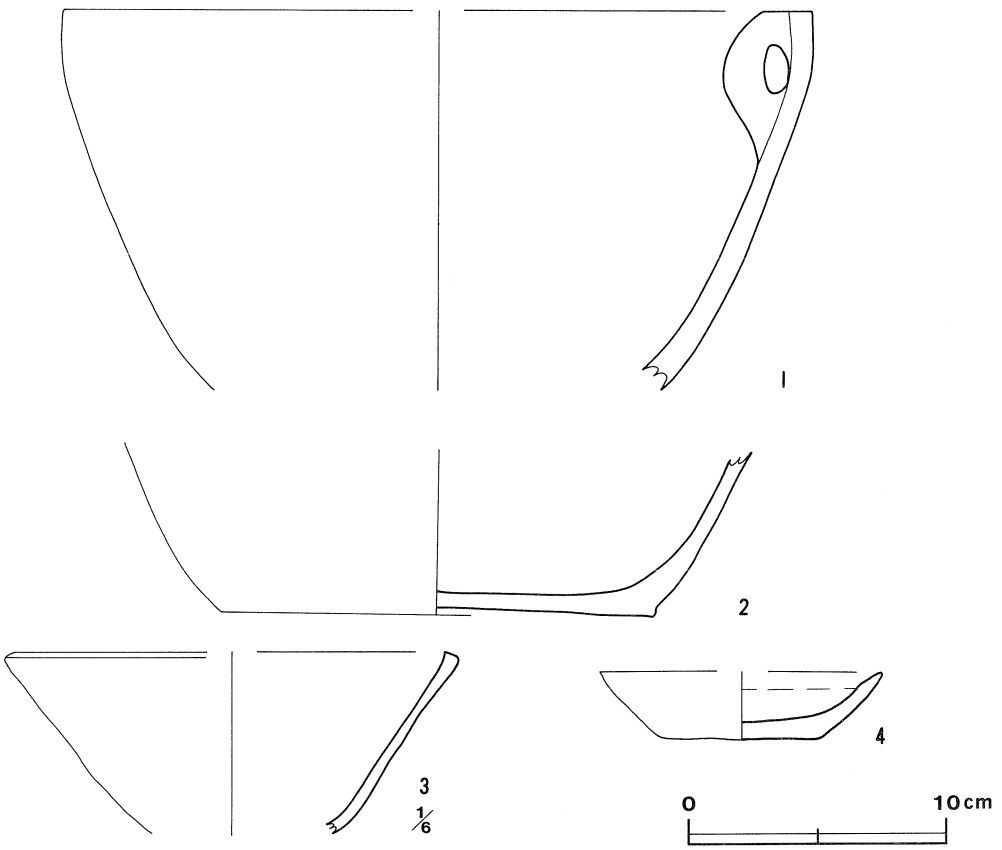
第196図　第１号住居跡出土遺物実測図（３）

(2) 溝

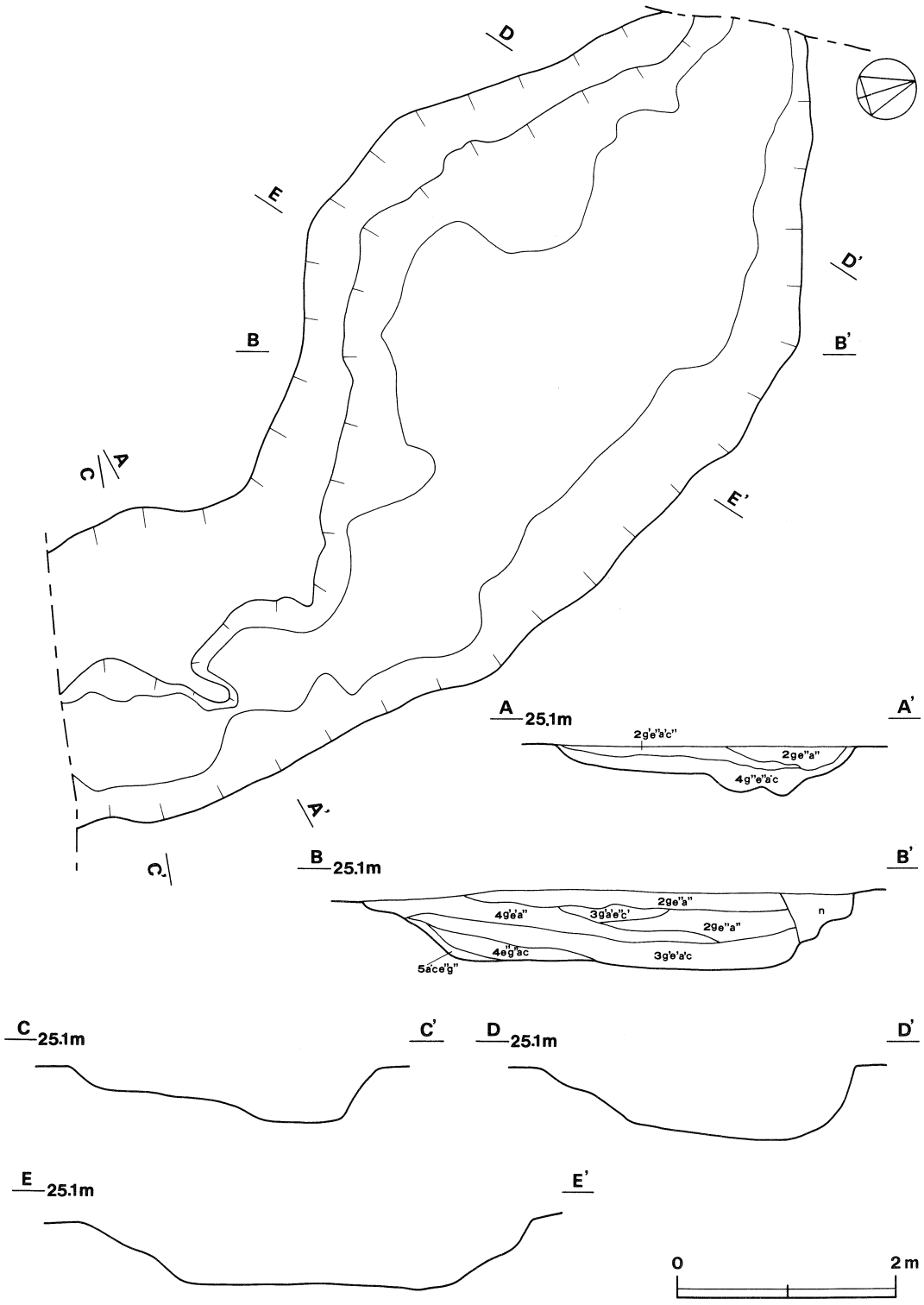
第1号溝（第199図）

本跡は，調査区の最西端部A1j$_6$・B1a$_6$・B1a$_7$・B1b$_7$区にかけて検出された溝で，本跡の南側と西側は調査エリア外となっているため，規模や性格等の詳細は不明である。主軸方向は，N－2°－WからN－39°－Wを指しており，南から北西の方向にカーブして延びている。検出された溝の長さは，約11mである。南側から北方に向かって2.5mまでは，上幅約1.5～2.9m・下幅約0.8m，確認面から底面までの深さは0.5mである。西側の壁は，なだらかな傾斜で，東側の壁は，急に落ち込んで，断面形は「⌒」状を呈している。更に北西に向かって池状に広がり上幅約4.3m・下幅約2.4m，深さは0.65mで，両壁ともほぼ同様な傾斜で落ち込んでいる。断面形は「⌒」状を呈している。北西端は，上幅約2.1m・下幅約0.5m，深さ0.69mを有し，南側壁はなだらかに傾斜し，北側壁は急に落ち込んで「⌒」状を呈している。南端と北西端のレベル差は約19cmで，北西端が低い。

覆土は，自然堆積の状態を呈し，炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子を含み，黒褐色土，暗褐色



第197図　第1号溝出土遺物実測図



第198図　第１号溝実測図

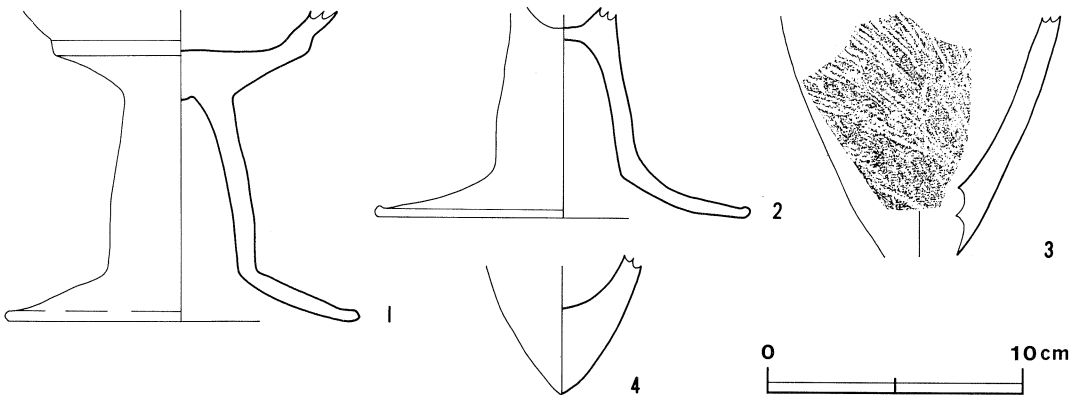
土，極暗褐色土で締まっている。

遺物は，土師式土器片14点，須恵器片４点，内耳土器の底部片（第198図１），胴部片（第198図２）が遺構全域の覆土から出土した。

本跡は，内耳土器片が覆土から多量に出土している事から，内耳土器前後に位置する時期の遺構であると思われるが，明確ではない。内耳土器は，14世紀後半から15世紀の室町時代後期に比定される。溝の性格等については，調査した部分もわずかであるので不明である。

第１号溝出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第198図 1	内耳形土器	A（29.4） B（15.0）	体部は，内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部は内彎気味に直立する。口縁端部に面をなす。内面の口縁部に内耳が１か所付されている。頸部内面に幅の広い浅い凹帯が見られる。	内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 黒色 普通	７％ P19 外面鍋墨付着
2	内耳形土器	B（ 6.6） C　16.8	底部は平底で，胴部は外上方に立ち上がる。	内面ナデ。体部外面横ナデ。底部静止ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	５％ P20 内耳底部片
3	内耳形土器	A（35.4） B（14.4）	体部は，ほぼ直線的に外上方に立ち上がり，口縁部は内彎気味に直立する。口縁端部は面をなし，外側にやや傾斜する。頸部内面に幅の広い浅い凹帯が見られる。	内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 灰褐色 普通	35％ P18 外面鍋墨付着
4	坏形土器 土師器	A（11.0） B　5.0 C　6.0	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	水挽き整形。底部回転糸切り。ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 普通	30％ P17



第199図　グリット出土遺物実測図

グリッド出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第200図 1	高坏形土器 土師器	B (12.5) D (14.0)	脚部は太めで短く，裾部は屈曲して外下方にのびる。坏部は欠損している。	脚部内面ナデ，外面縦位のヘラナデ。裾部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	10% P11
2	高坏形土器 土師器	B (8.0) D (14.8)	脚部は太めで短く，裾部は外下方に大きく開き，端部は丸くおさめている。坏部は欠損している。	脚部内面横位のナデ，外面縦位のナデ。裾部内面横ナデ，外面横ナデ後縦位のナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	8% P12
3	尖底土器 縄文式土器	B (9.5)	底部から胴部へ内彎気味に外上方に立ち上がる。	内面ナデ。外面縦位の貝殻条痕文。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	5% P21
4	尖底土器 縄文式土器	B (5.6)	底部内面は丸味をおび，外面は鋭く尖る。	内・外面ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	5% P22

(3) その他の遺物

第201図に掲載した土器は，当遺跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。古墳時代中期の住居跡の覆土に流れ込んだものやグリッド出土の土器を一括し，時期ごとに分類し掲載した。

第Ⅰ群　縄文時代早期の土器

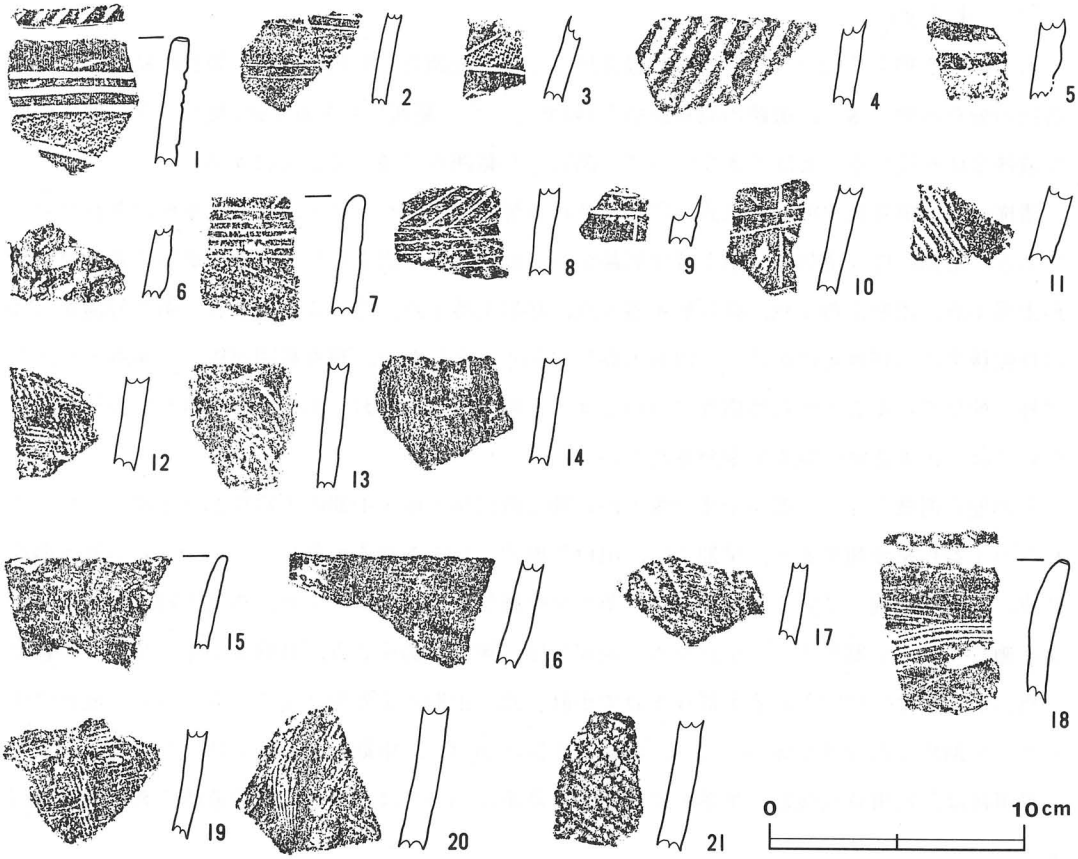
第１群に属する土器は１～14の14点が出土している。１・７は口縁部，他は胴部片である。１～３は器面を沈線によって区画し，区画内は貝殻腹縁文が充填されている。４～６は太目の平行沈線，７～10は細目の沈線が施されている。11は条痕文，12は刺突文が施されている。13・14は無文土器である。

第Ⅱ群　縄文時代前期の土器

第Ⅱ群に属する土器は15～20の６点が出土している。15・18は口縁部，他は胴部片である。15・16は無文，17は貝殻腹縁文である。18は口縁部に押圧が加えられ，器面には平行沈線が施されている。19は平行沈線が格子状に施され，20は貝殻条痕文が見られる。

第Ⅲ群　縄文時代中期の土器

第Ⅲ群に属する土器は21の１点が出土しているにすぎない。21は胴部片で，単節ＬＲの横位回転縄文が施されている。



第200図　遺構外出土遺物拓影図

3　まとめ

当遺跡は，縄文時代早・前期の遺物包含地として発掘調査を実施したが，調査の結果，遺構・遺物の分布状態は薄く，遺跡の調査面積も548㎡という小範囲でもあるため，集落やその他について遺跡全体を述べることはできないので，調査した範囲内で述べることにする。

遺構は，古墳時代中期の和泉式期に比定される竪穴住居跡が１軒と，溝が１条検出されたのみである。遺構に伴う遺物は，第１号住居跡から土師式土器が出土した。器種は甕形土器３点，壺形土器１点，坩形土器４点，高坏形土器８点，坏形土器１点，支脚３点である。第１号溝からは，14世紀後半から15世紀にかけての内耳土器片が36点出土したが，調査範囲が短く，両端ともエリア外に伸びていることから性格等については，不明である。なお，出土土器の器形や整形技法については，出土遺物一覧表を参照されたい。

その他の遺物として，遺跡全体の覆土から縄文時代早・前・中期の土器片23点が出土した。これらの土器片を分類すると，早期では，田戸下層式に比定される土器片６点，三戸式尖底土器片２点，沈線文を施している土器片３点，条痕文を施している土器片１点，無文土器片２点，刺突文を施している土器片１点の小計15点。前期では，無文土器片２点，貝殻文を施している土器片１点，前期後半に比定される土器片４点の小計７点，中期の土器片は１点のみである。割合にすると，早期の土器片は全体の65.2%，前期の土器は30.4%，中期の土器は4.4%である。

当遺跡は，古墳時代後期の集落ではあるが，詳細については，今後の周辺遺跡の調査結果を待ちたい。

終　章　むすび

土浦市手野町の台地上に,「県西用水事業」の送水管が埋設されることになり，埋設事業地内の分布調査の結果，五斗落遺跡ほか５遺跡が確認された。そのため，６遺跡の送水管埋設部分について，昭和61年４月１日から同年10月31日にかけて発掘調査を実施した。本書は，その調査結果をまとめたものであるが，幅12mという限られた範囲の線状の調査であるため，遺跡の性格が僅かに把握できた程度のものである。遺構・遺物及び地形的にみると，６遺跡は谷津を挟んで，２つの台地に分けられる。北西側台地に五斗落遺跡，大儘遺跡，弁ノ内遺跡が，南東側台地に原ノ内遺跡，ゴリン山遺跡，真木ノ内遺跡が所在している。北西側台地上には，弥生時代，古墳時代奈良・平安時代の住居跡が多数発見され，台地全体が大きな一つの遺跡のような観すらみうけられる。３遺跡について概覧すると，五斗落遺跡，大儘遺跡，弁ノ内遺跡にかけて奈良・平安時代の住居跡が，五斗落遺跡，大儘遺跡にかけて古墳時代の住居跡が多数検出され，その集落の中心は大儘遺跡から西側ではないかと考えられる。弁ノ内遺跡からは，１軒ではあるが弥生時代後期前半の住居跡が検出されたことは注目される。南東側の原ノ内遺跡，ゴリン山遺跡，真木ノ内遺跡の所在する台地は，北西側台地に比べ遺構・遺物とも希薄である。ゴリン山遺跡，真木ノ内遺跡を中心に縄文時代草創期から後期の土器片が比較的多数出土し，原ノ内遺跡からは，屋外炉２基が検出されたことも注目されるところである。また，真木ノ内遺跡からは，古墳時代中期の住居跡１軒と，溝１条が検出され，溝の覆土から室町時代に比定される内耳式土器が出土し，南東側台地では他の２遺跡とは異なった状況を呈している。

以上のように，今回の６遺跡の調査は，いずれの遺跡においても送水管埋設部分の調査のため集落の形態や変遷は殆どとらえることはできなかったが，手野台地の遺跡の分布や，その遺跡の性格については貴重な資料が得られたものと思われる。周辺遺跡との関連と相まって，本報告書が手野台地の考古学上の資料として活用いただければと願っている。

なお，本調査の結果をまとめるにあたり,関係各位の御指導や御協力があったことに対して,文末ではあるが，心から感謝の意を表したい。

写　真　図　版

五斗落遺跡
大儘遺跡
弁ノ内遺跡
原ノ内遺跡
ゴリン山遺跡
真木ノ内遺跡

発掘前全景

遺構確認

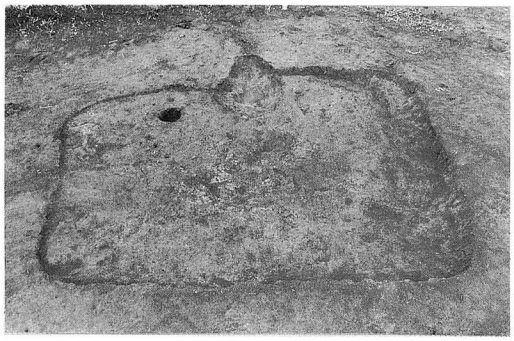
農道除去後遺構確認

五斗落遺跡

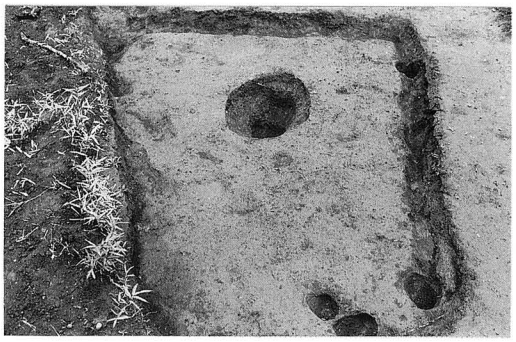
作業風景

見学者説明

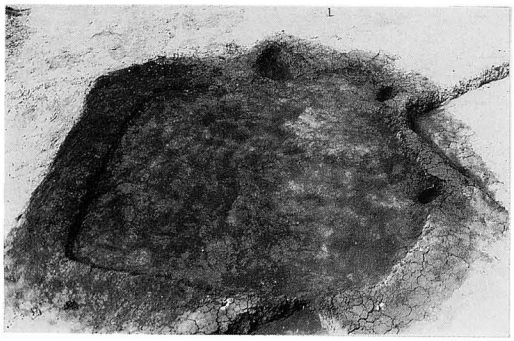
発掘後全景



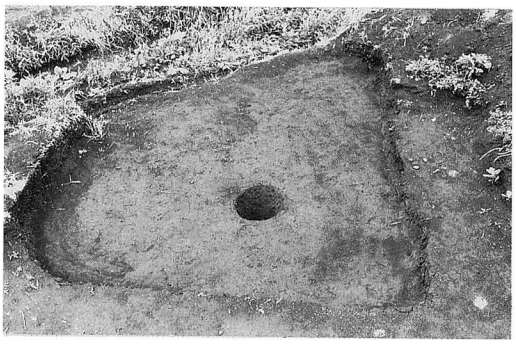
第 1 号住居跡



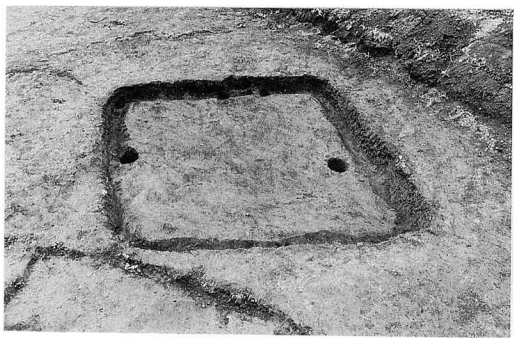
第 2 号住居跡



第 3 号住居跡

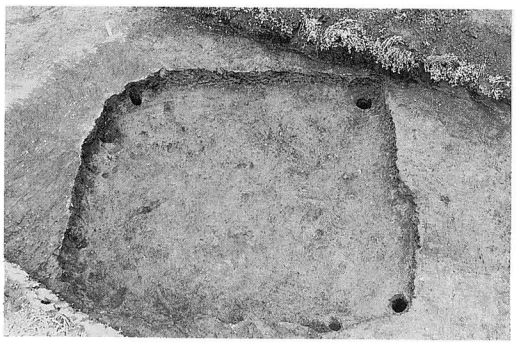


第 4 号住居跡



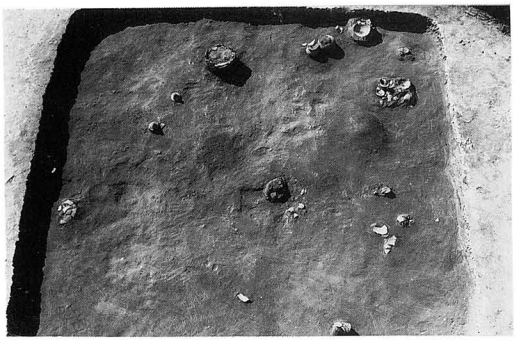
第 5 号住居跡

第 6 号住居跡遺物出土状況



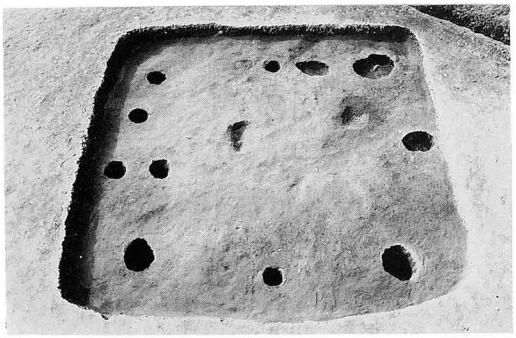
第 6 号住居跡

第 7 号住居跡



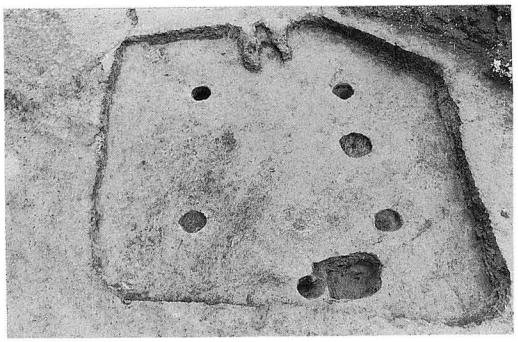
第8号住居跡遺物出土状況

第8号住居跡遺物出土状況



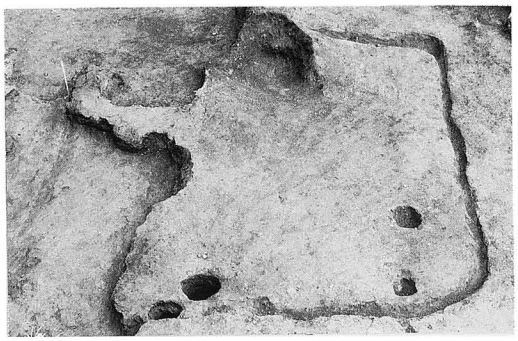
第8号住居跡

第10号住居跡遺物出土状況



第10号住居跡

第14号住居跡遺物出土状況

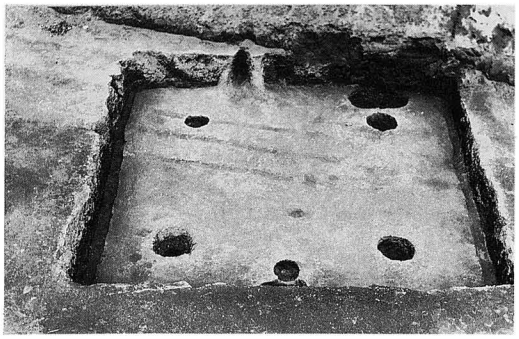


第14号住居跡

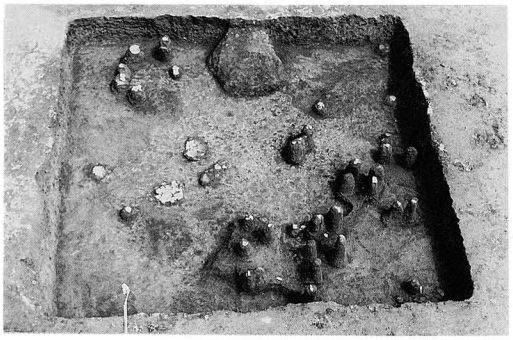
第15号住居跡

第17号住居跡遺物出土状況

第17号住居跡遺物出土状況

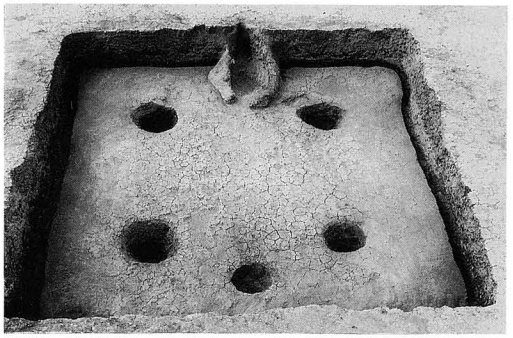


第17号住居跡

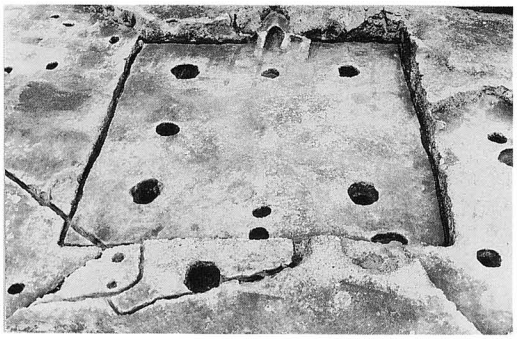


第19号住居跡遺物出土状況

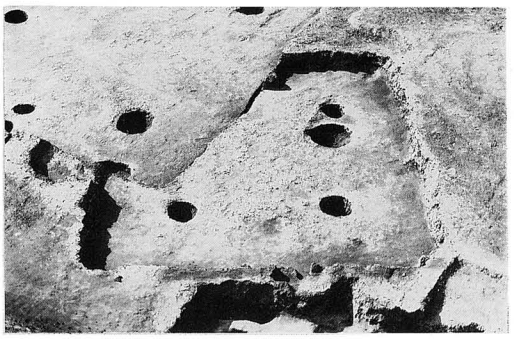
第19号住居跡カマド内遺物出土状況



第19号住居跡

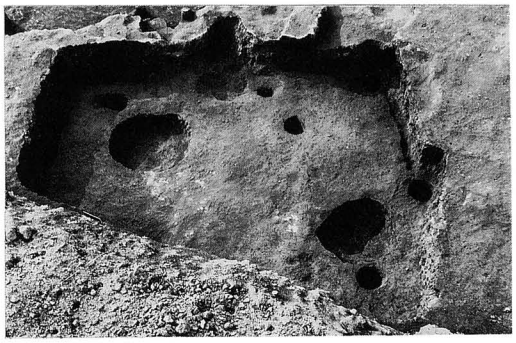


第21号住居跡

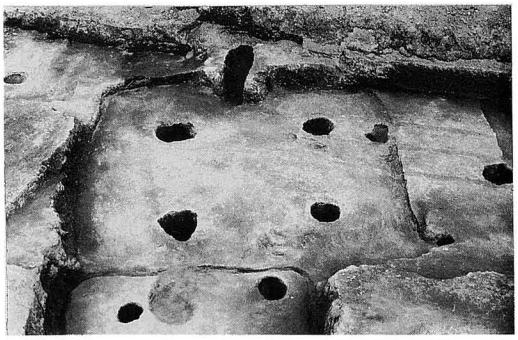


第22号住居跡

第23号住居跡遺物出土状況

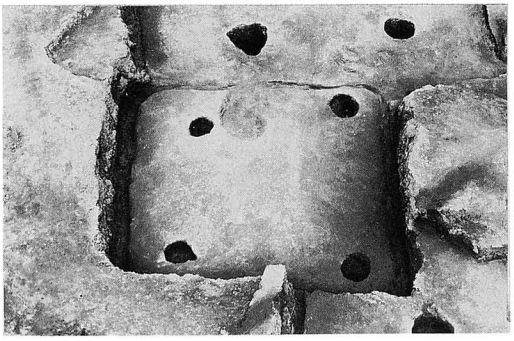


第23号住居跡

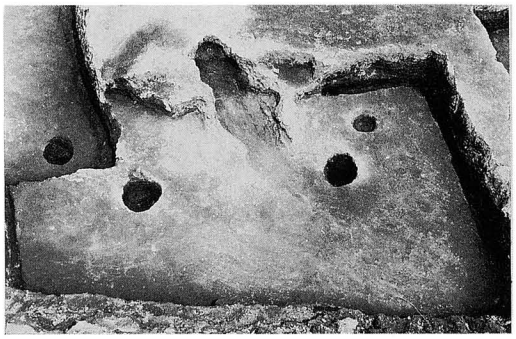


第24号住居跡

第24・25・41号住居跡

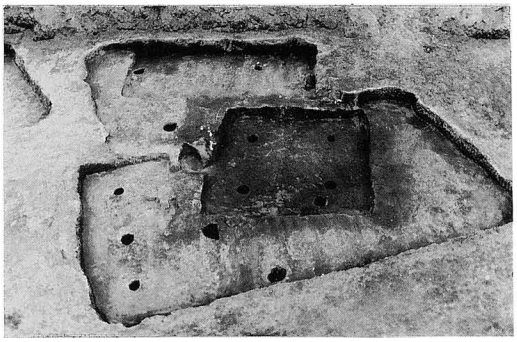


第26号住居跡

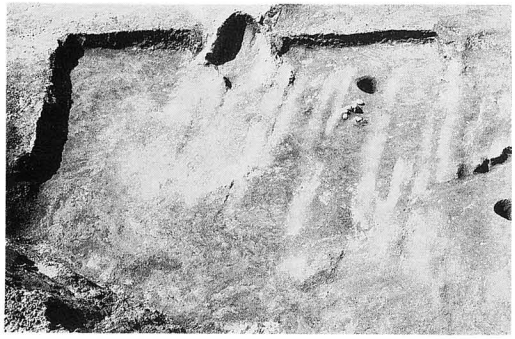


第27号住居跡

第28－A号住居跡遺物出土状況

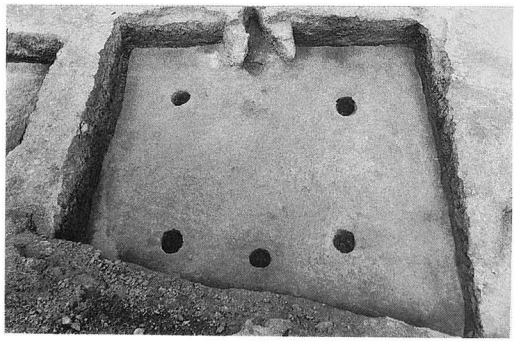


第11－A・B・28－A・B・29号住居跡

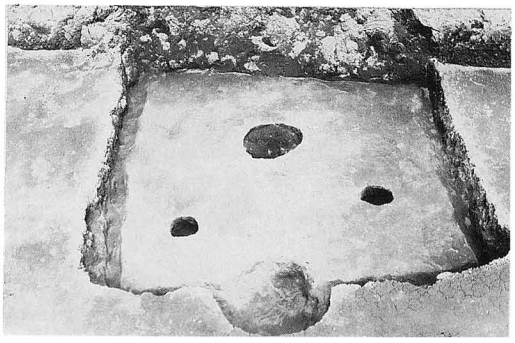


第30号住居跡

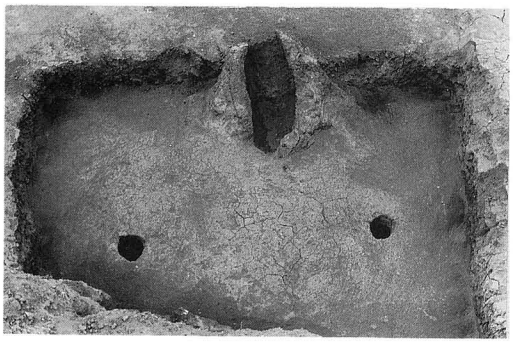
第32号住居跡(炉)



第34号住居跡

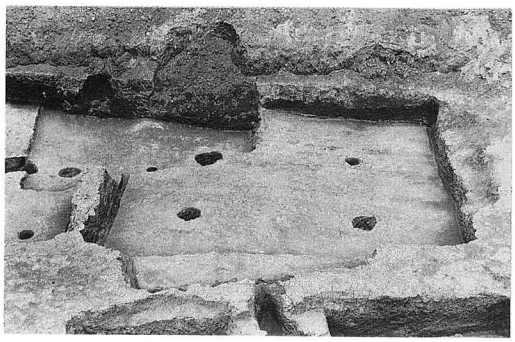


第35号住居跡

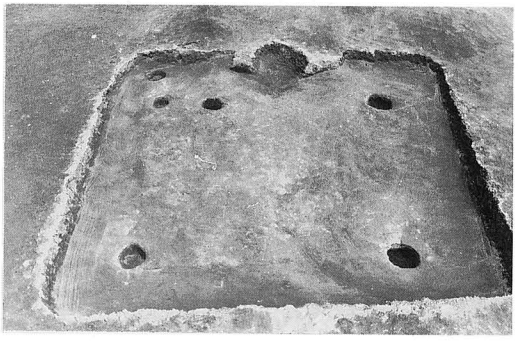


第36号住居跡

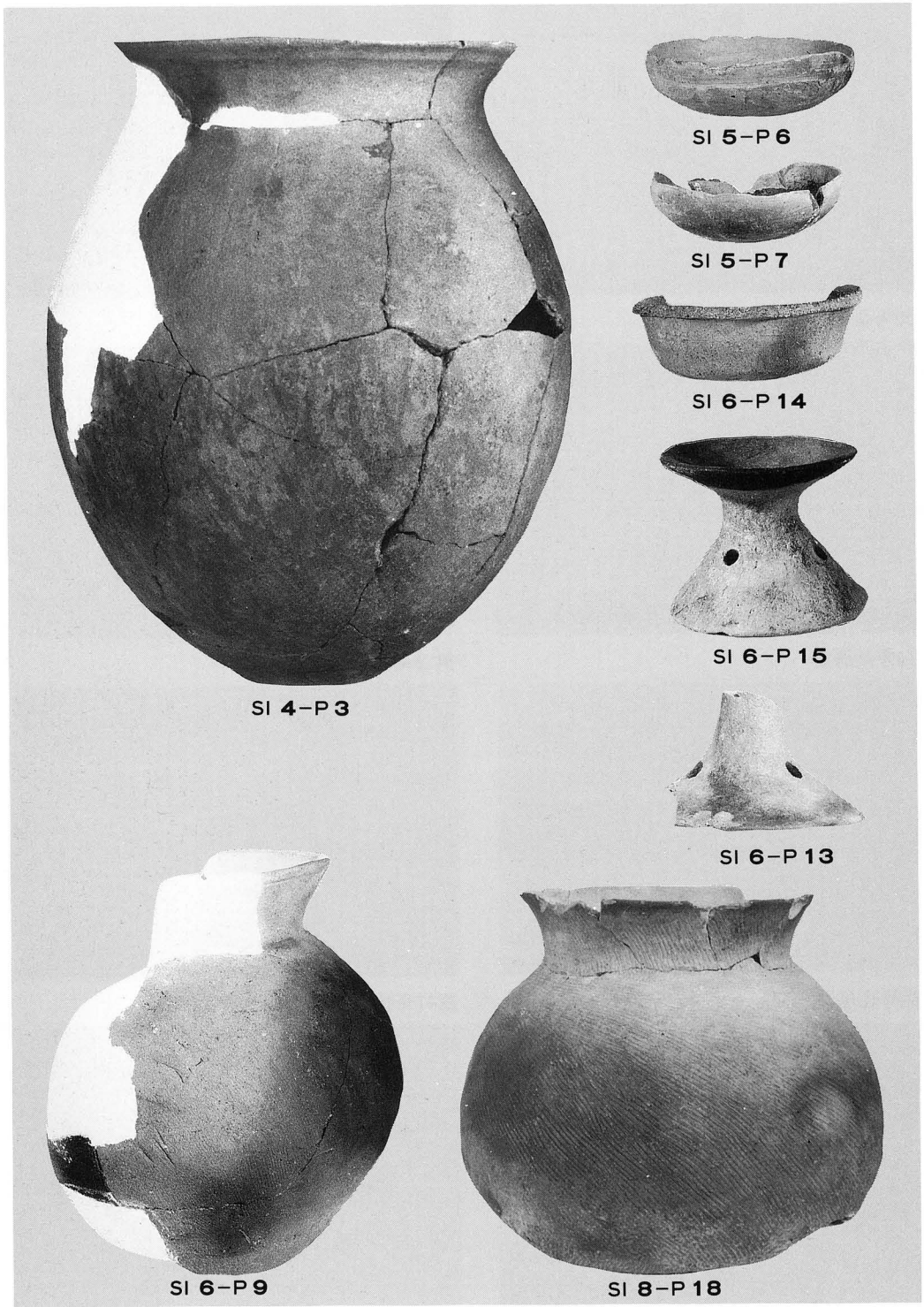
第41号住居跡遺物出土状況



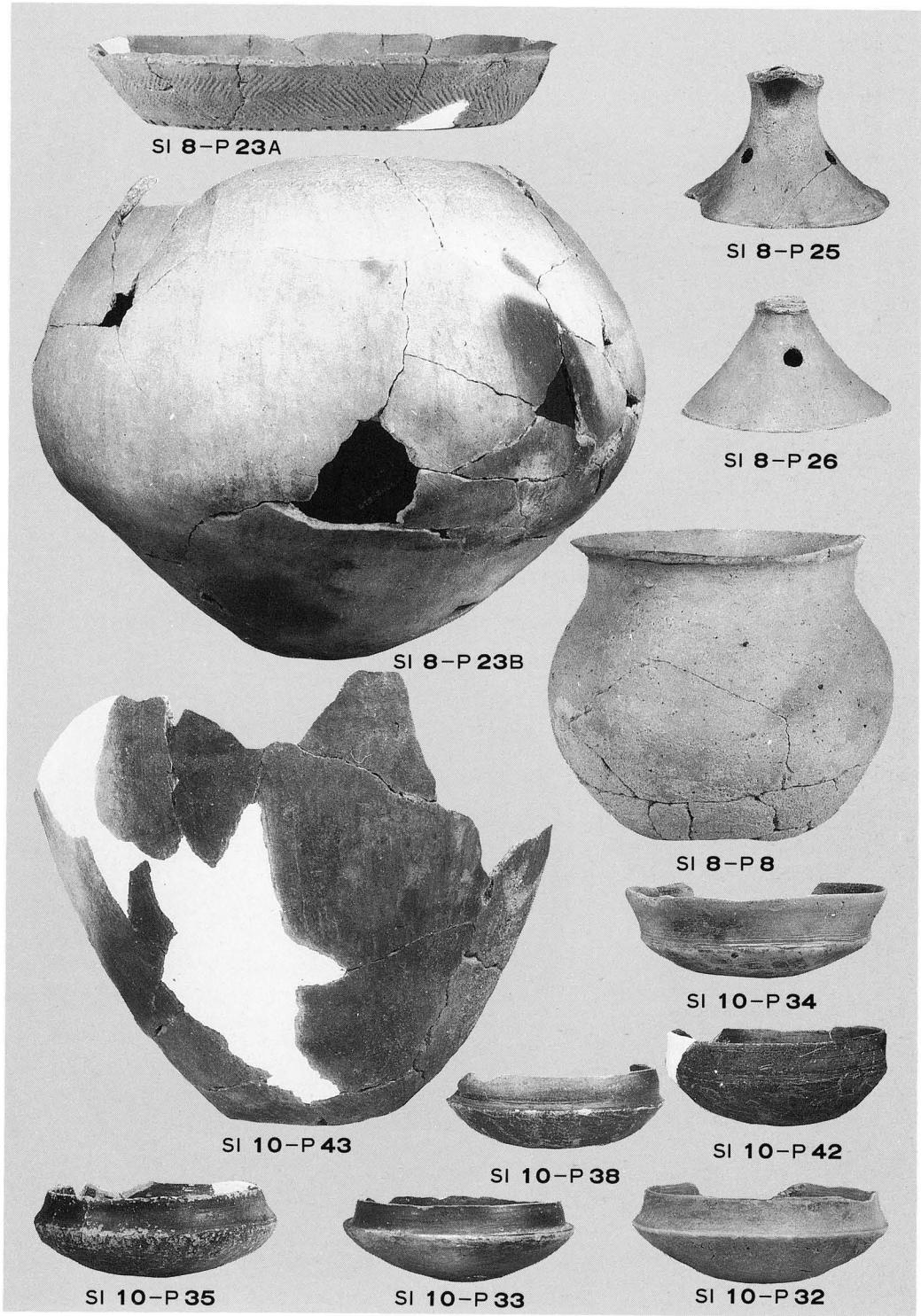
第41・39・43号住居跡



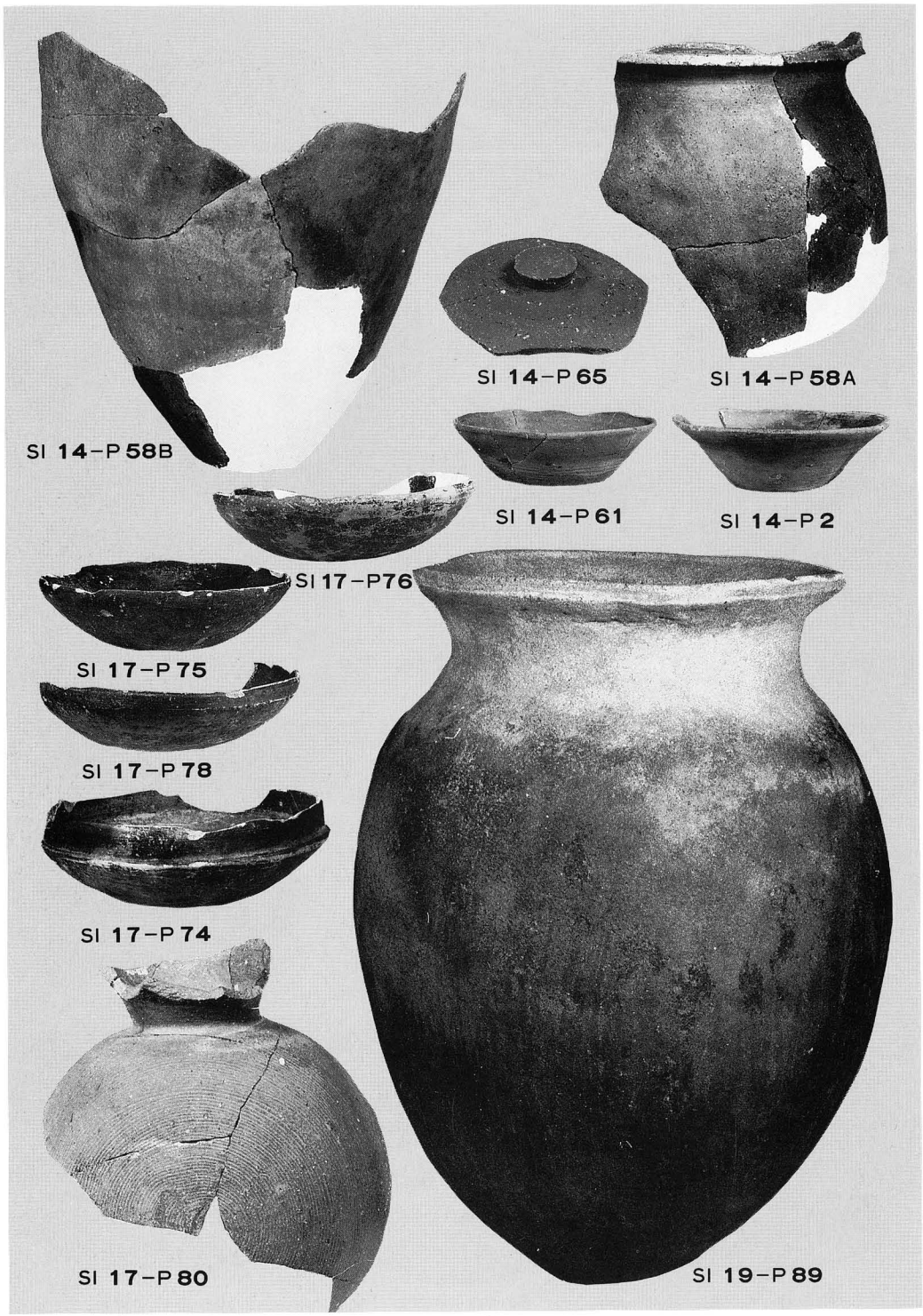
第42号住居跡



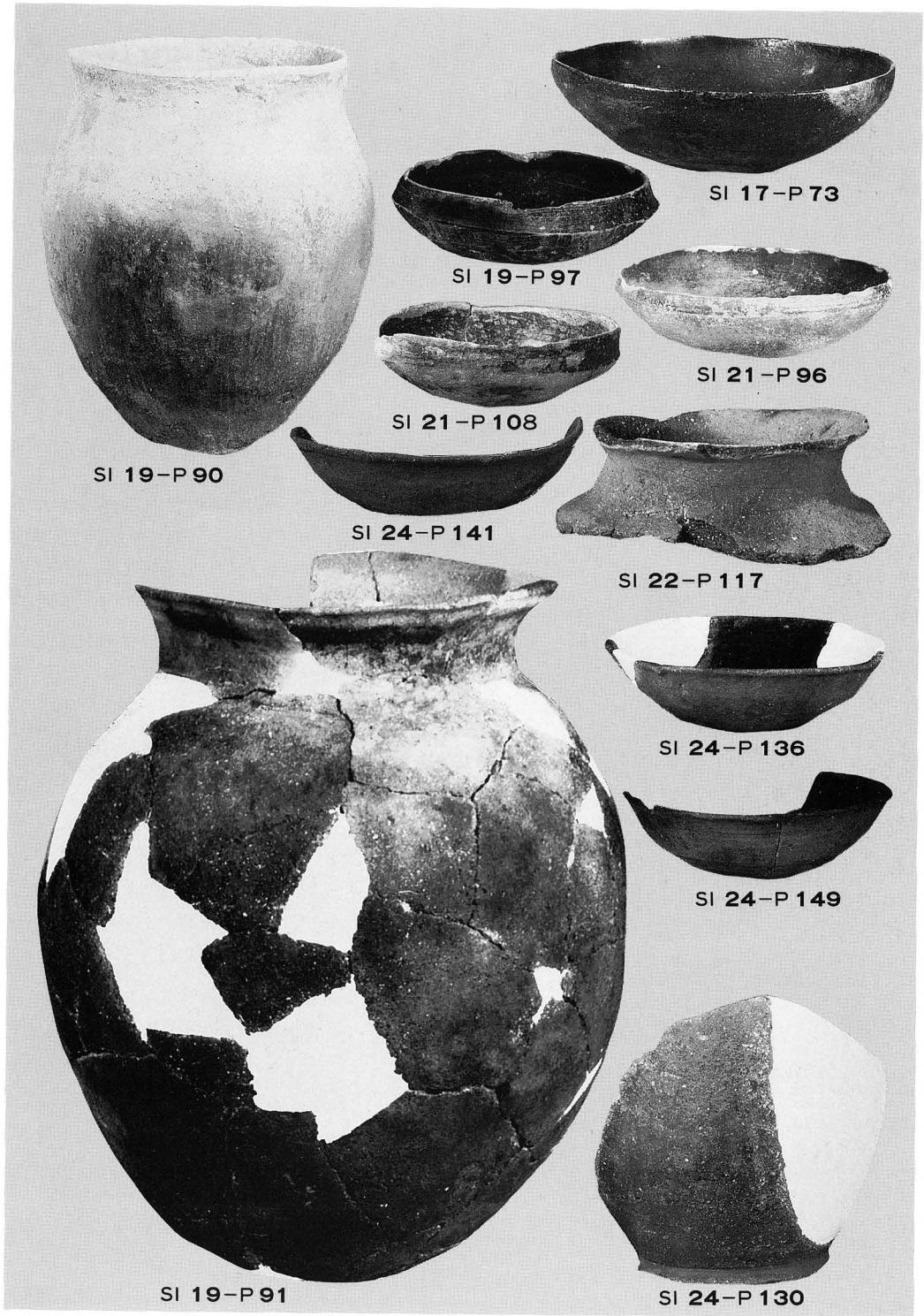
住居跡出土土器


SI 8-P 23A
SI 8-P 25
SI 8-P 26
SI 8-P 23B
SI 8-P 8
SI 10-P 34
SI 10-P 43
SI 10-P 38
SI 10-P 42
SI 10-P 35
SI 10-P 33
SI 10-P 32

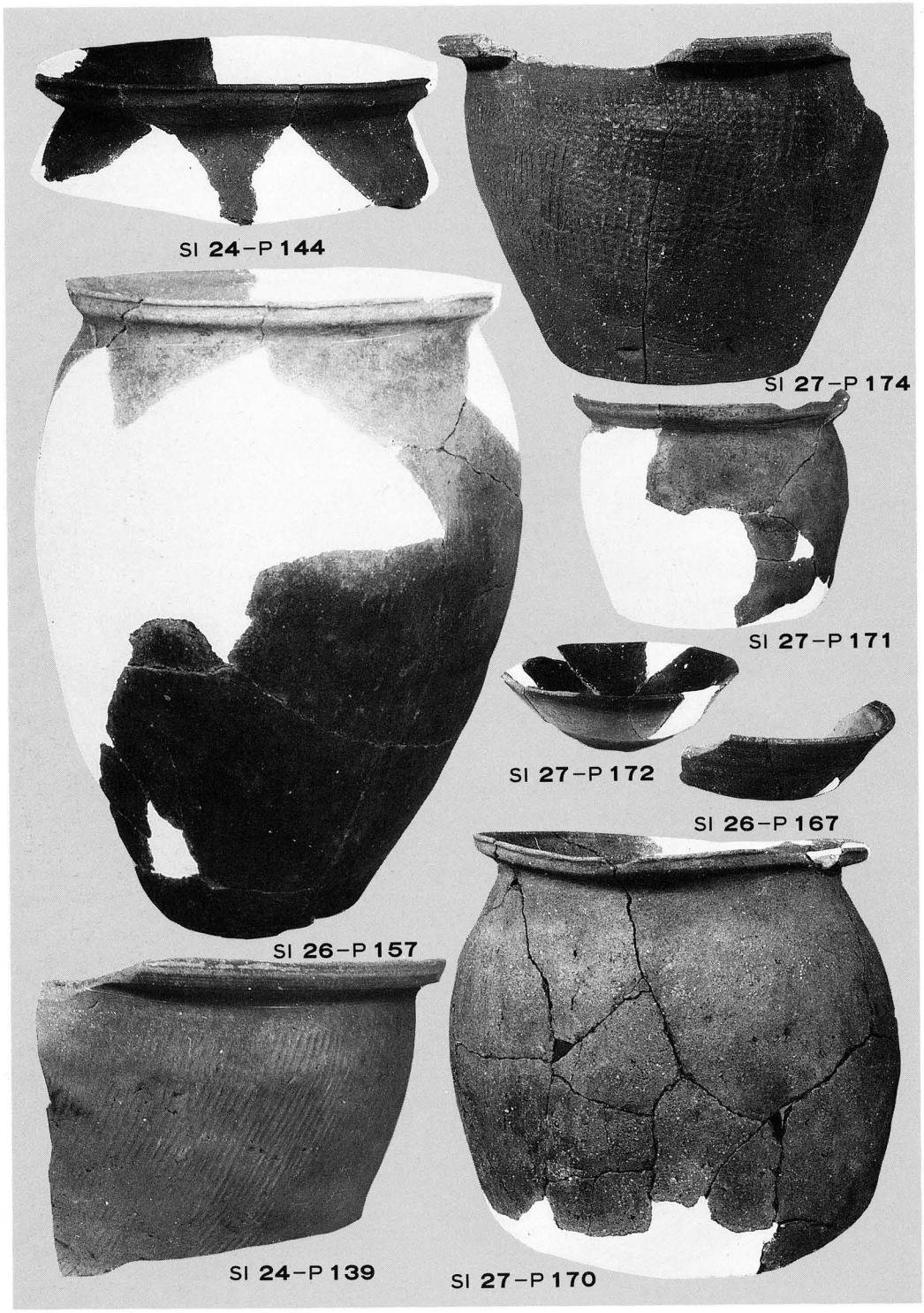
住居跡出土土器


SI 14-P58B
SI 14-P65
SI 14-P58A
SI 14-P61
SI 14-P2
SI 17-P76
SI 17-P75
SI 17-P78
SI 17-P74
SI 17-P80
SI 19-P89

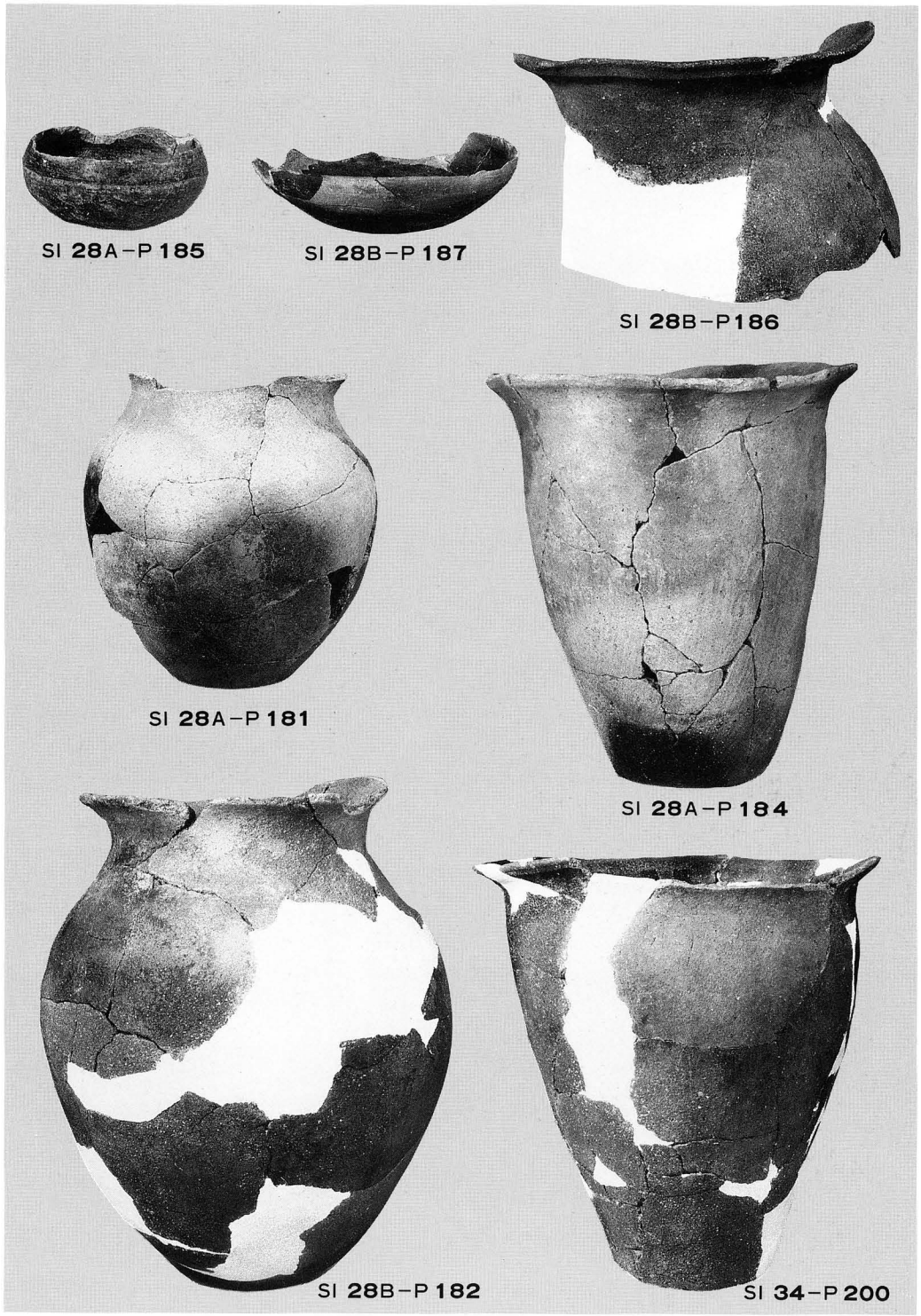
住居跡出土土器


SI 17-P 73
SI 19-P 97
SI 21-P 96
SI 21-P 108
SI 19-P 90
SI 24-P 141
SI 22-P 117
SI 24-P 136
SI 24-P 149
SI 19-P 91
SI 24-P 130

住居跡出土土器

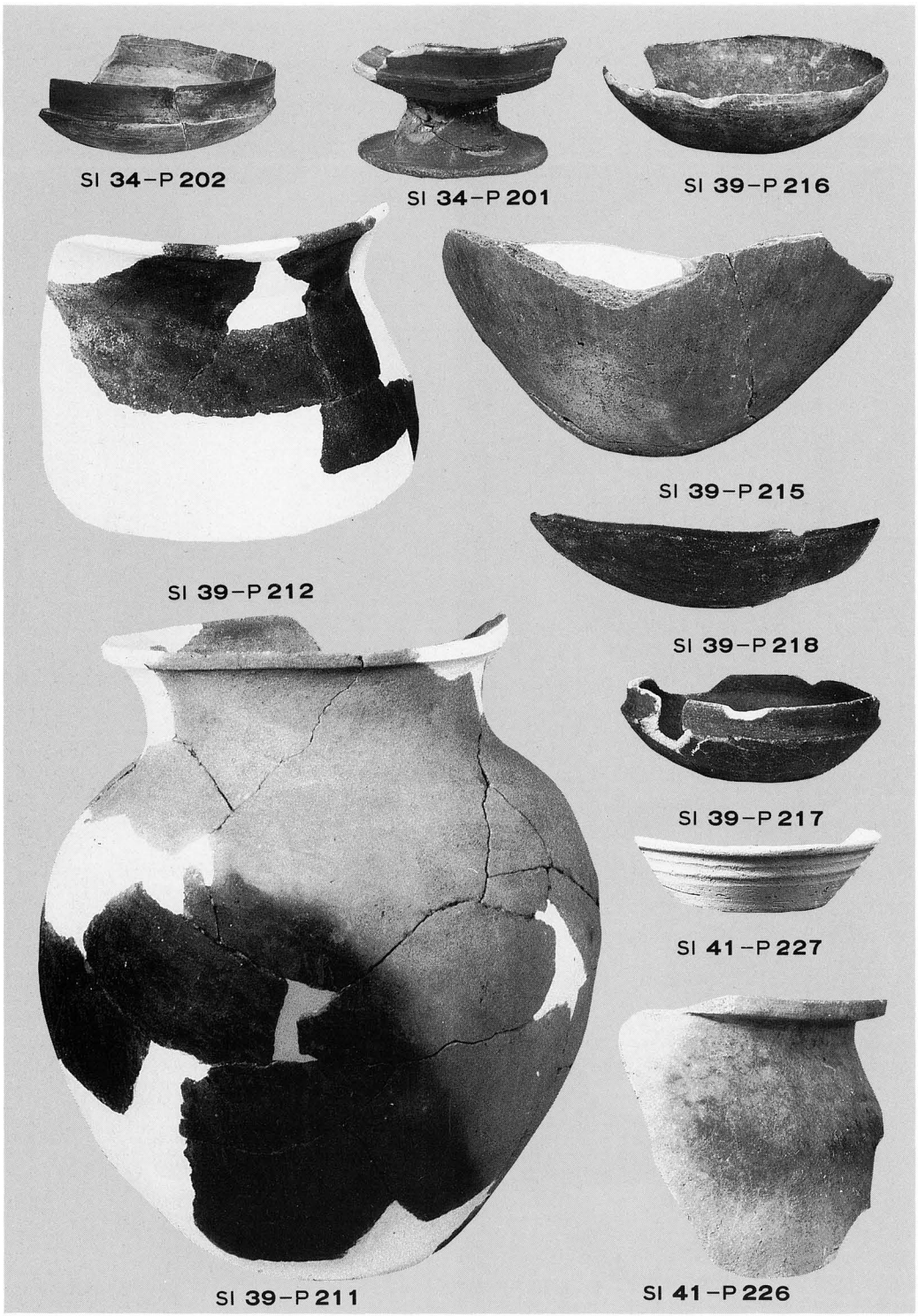

SI 24-P 144
SI 27-P 174
SI 27-P 171
SI 27-P 172
SI 26-P 167
SI 26-P 157
SI 24-P 139
SI 27-P 170

住居跡出土土器

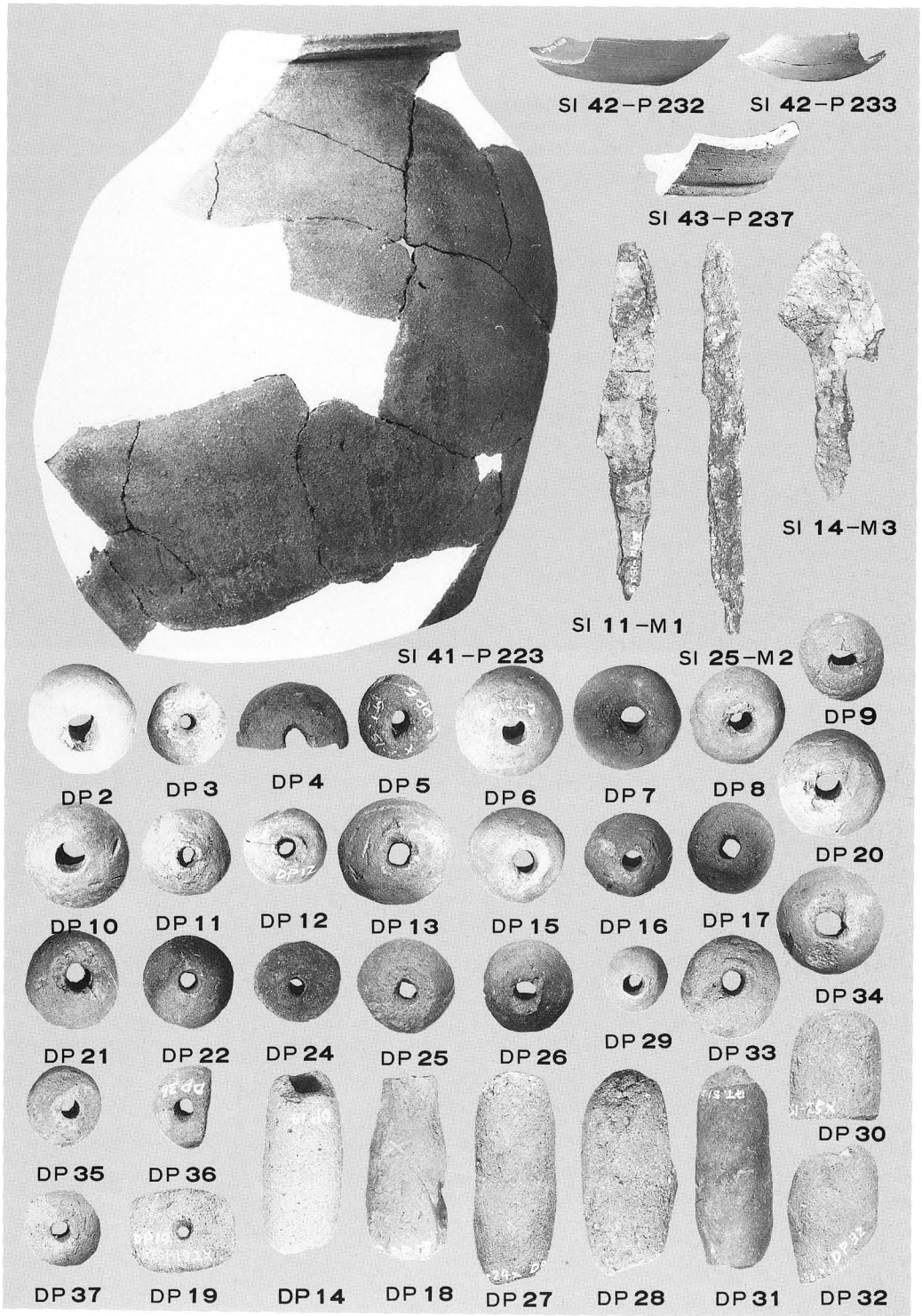

SI 28A－P 185
SI 28B－P 187
SI 28B－P 186
SI 28A－P 181
SI 28A－P 184
SI 28B－P 182
SI 34－P 200

住居跡出土土器

五斗落遺跡



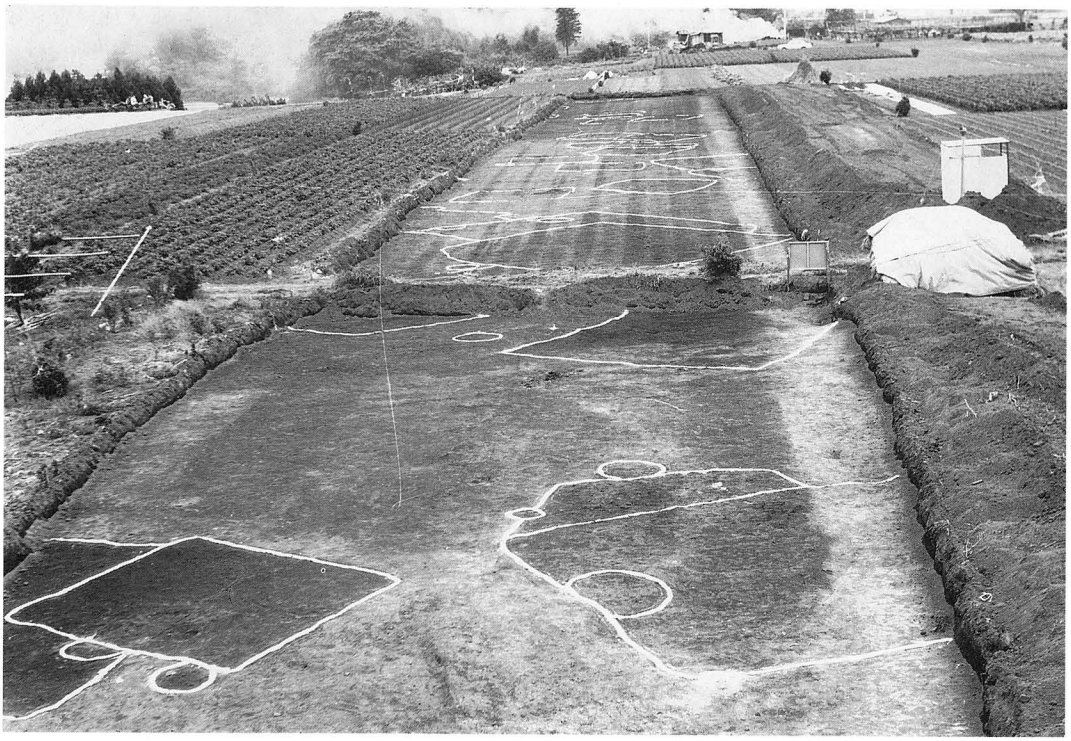
住居跡出土土器


SI 42-P 232
SI 42-P 233
SI 43-P 237
SI 14-M 3
SI 11-M 1
SI 41-P 223
SI 25-M 2
DP 2
DP 3
DP 4
DP 5
DP 6
DP 7
DP 8
DP 9
DP 10
DP 11
DP 12
DP 13
DP 15
DP 16
DP 17
DP 20
DP 21
DP 22
DP 24
DP 25
DP 26
DP 29
DP 33
DP 34
DP 35
DP 36
DP 30
DP 37
DP 19
DP 14
DP 18
DP 27
DP 28
DP 31
DP 32

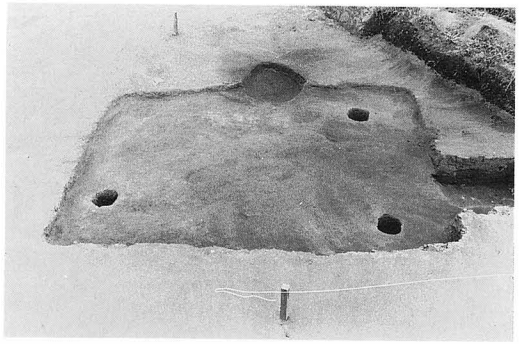
住居跡出土遺物

大 儘 遺 跡

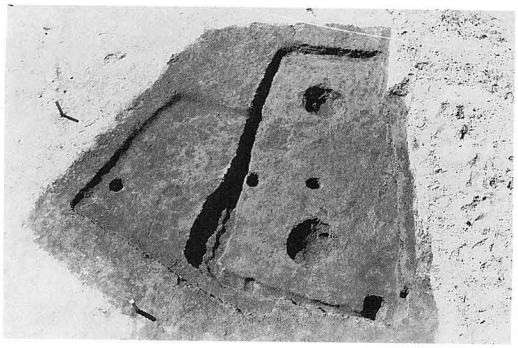
発掘前全景



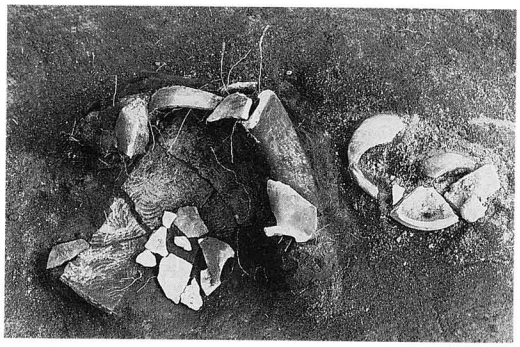
遺構確認



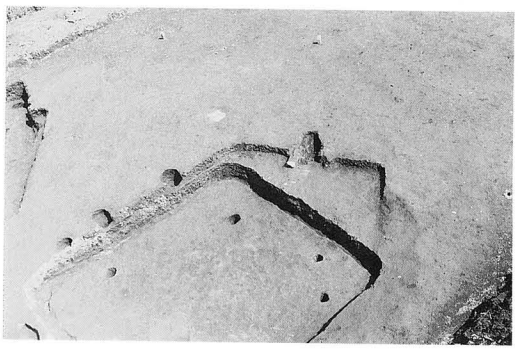
第 1 号住居跡



第 2 号住居跡

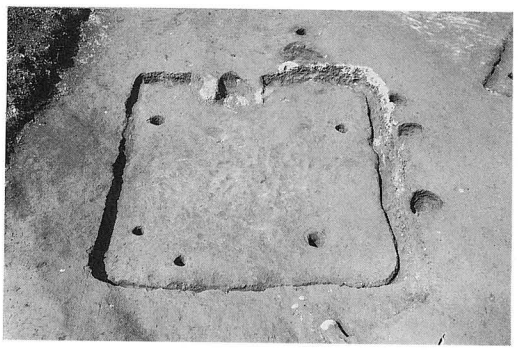


第 3 号住居跡遺物出土状況

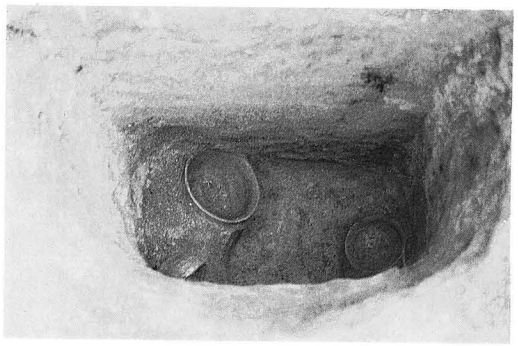


第 3 号住居跡

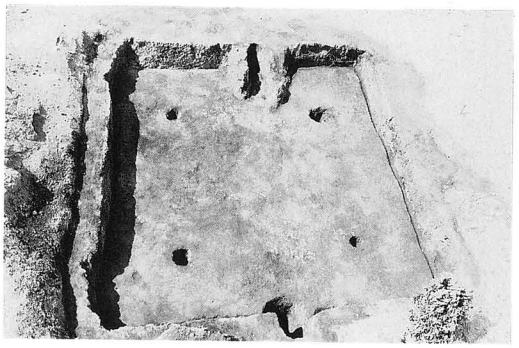
第 4 号住居跡遺物出土状況



第 4 号住居跡



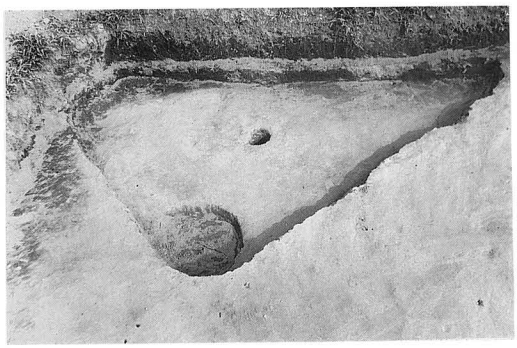
第 5 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



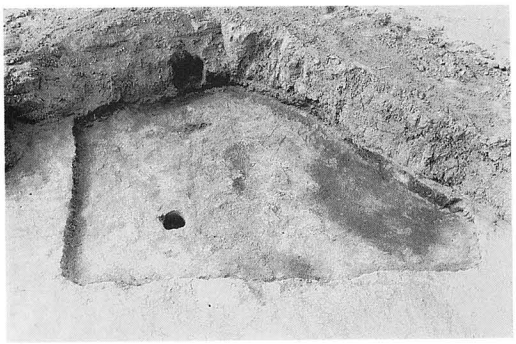
第 5 号住居跡

第6号住居跡

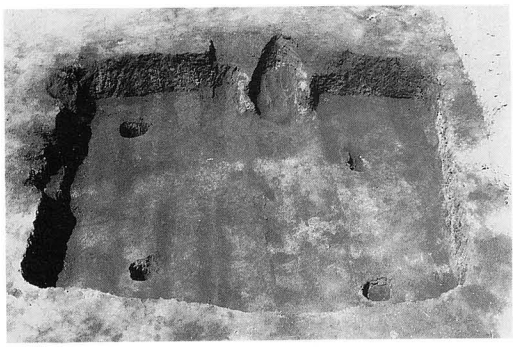
第7号住居跡



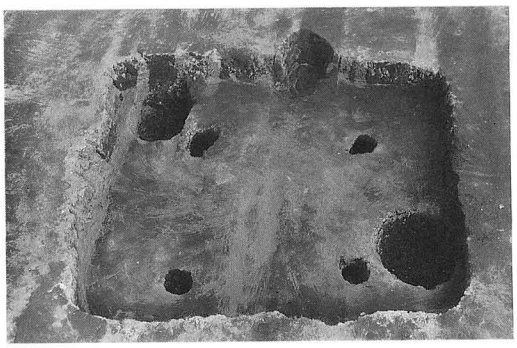
第8号住居跡



第9号住居跡

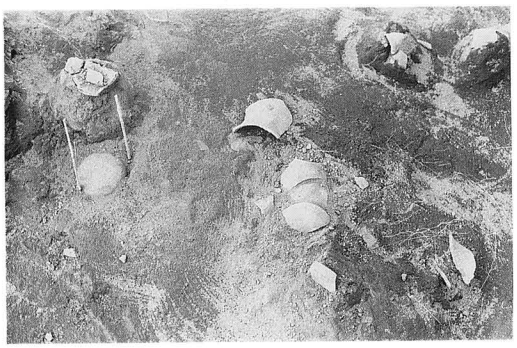


第10号住居跡

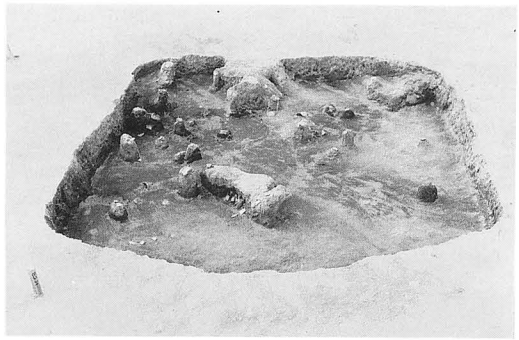


第11号住居跡

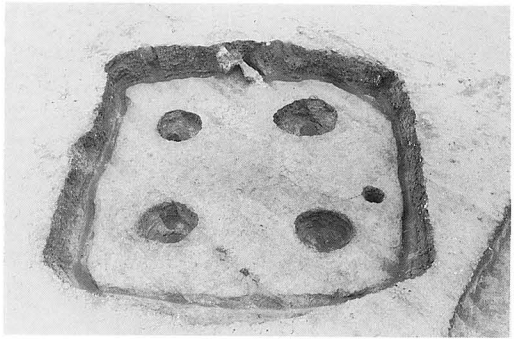
第12号住居跡



第13号住居跡遺物出土状況

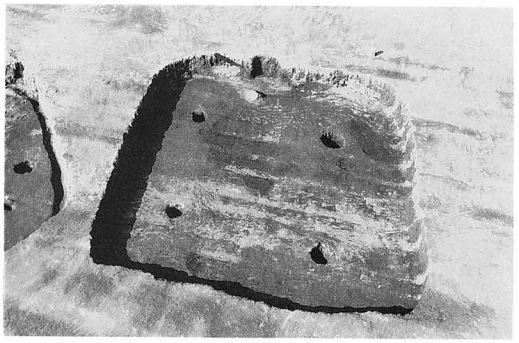


第13号住居跡遺物出土状況

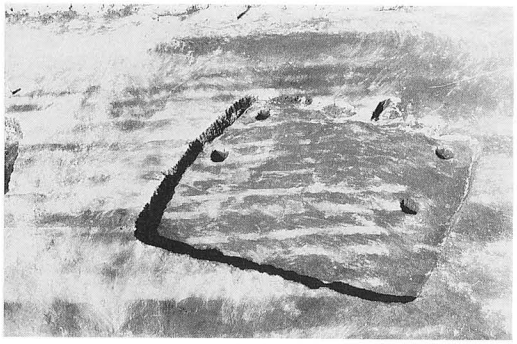


第13号住居跡

第14号住居跡遺物出土状況

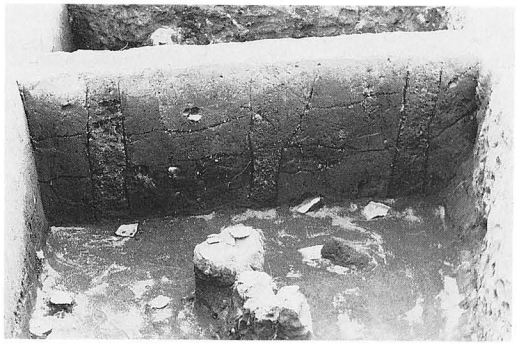


第14号住居跡

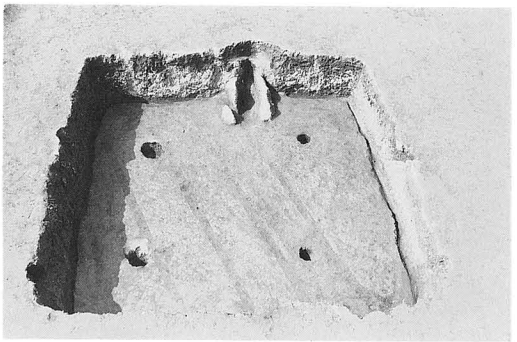


第15号住居跡

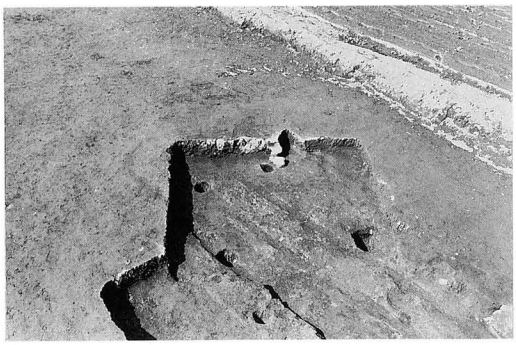
第16号住居跡カマド内遺物出土状況



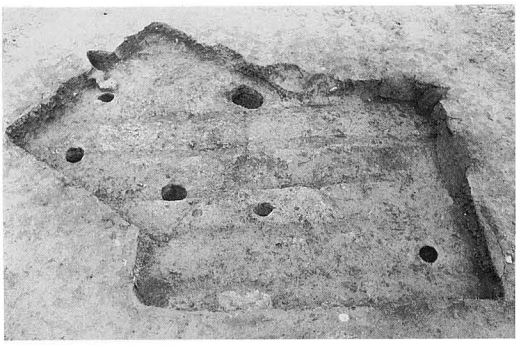
第16号住居跡土層断面



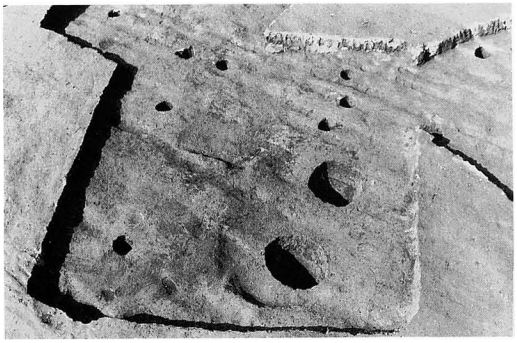
第16号住居跡



第17号住居跡

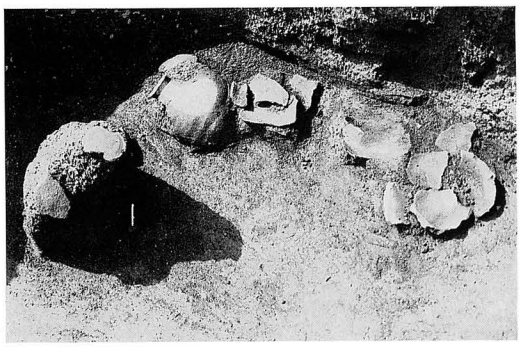


第18号住居跡



第19号住居跡

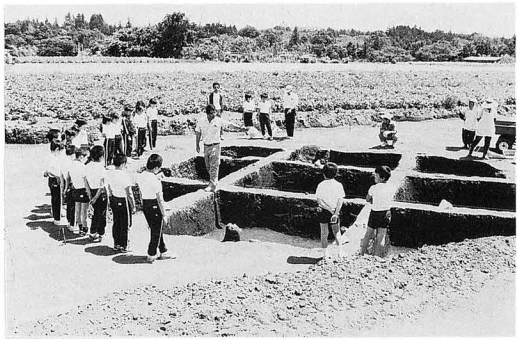
第21号住居跡遺物出土状況



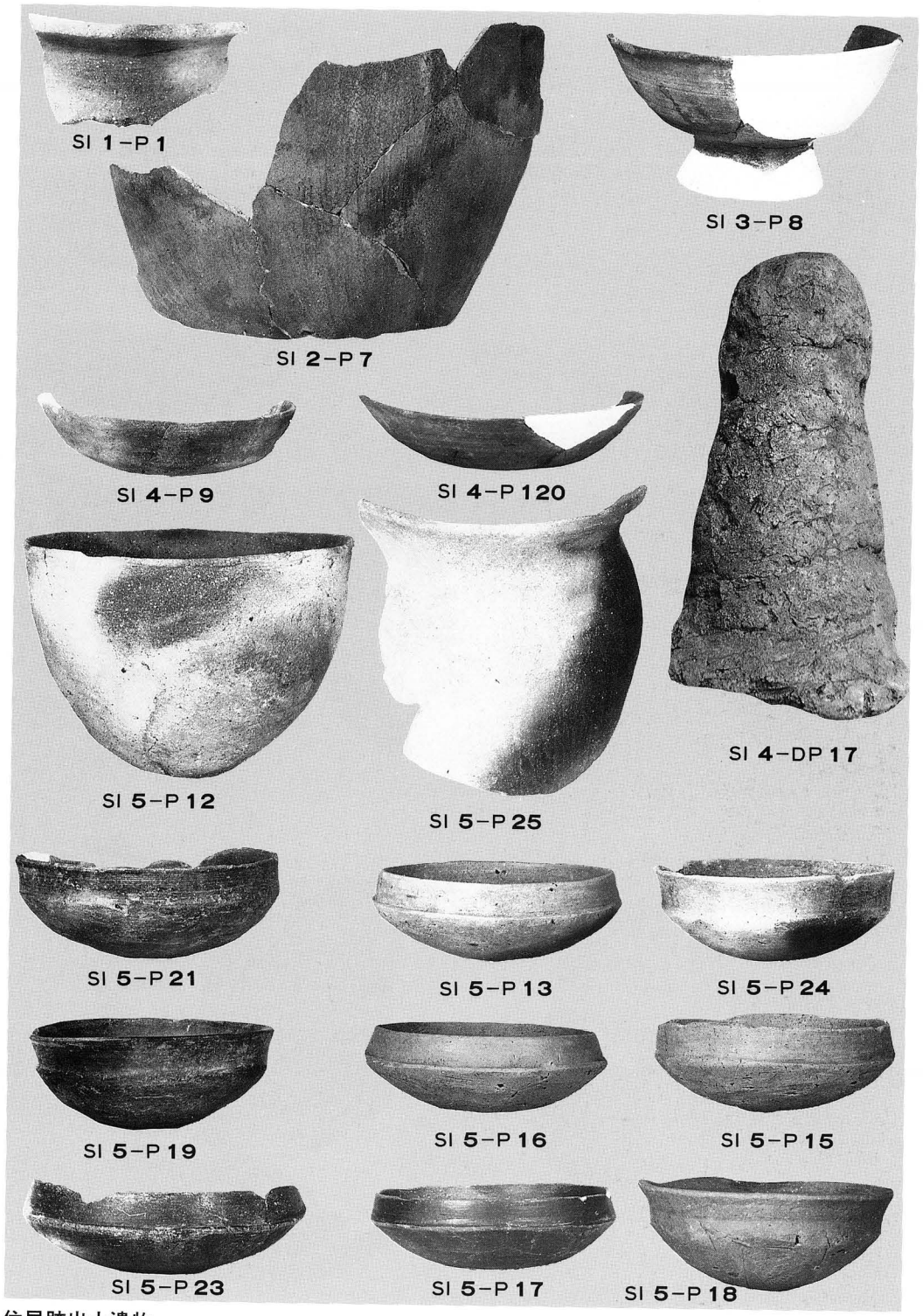
第21号住居跡遺物出土状況

第21号住居跡

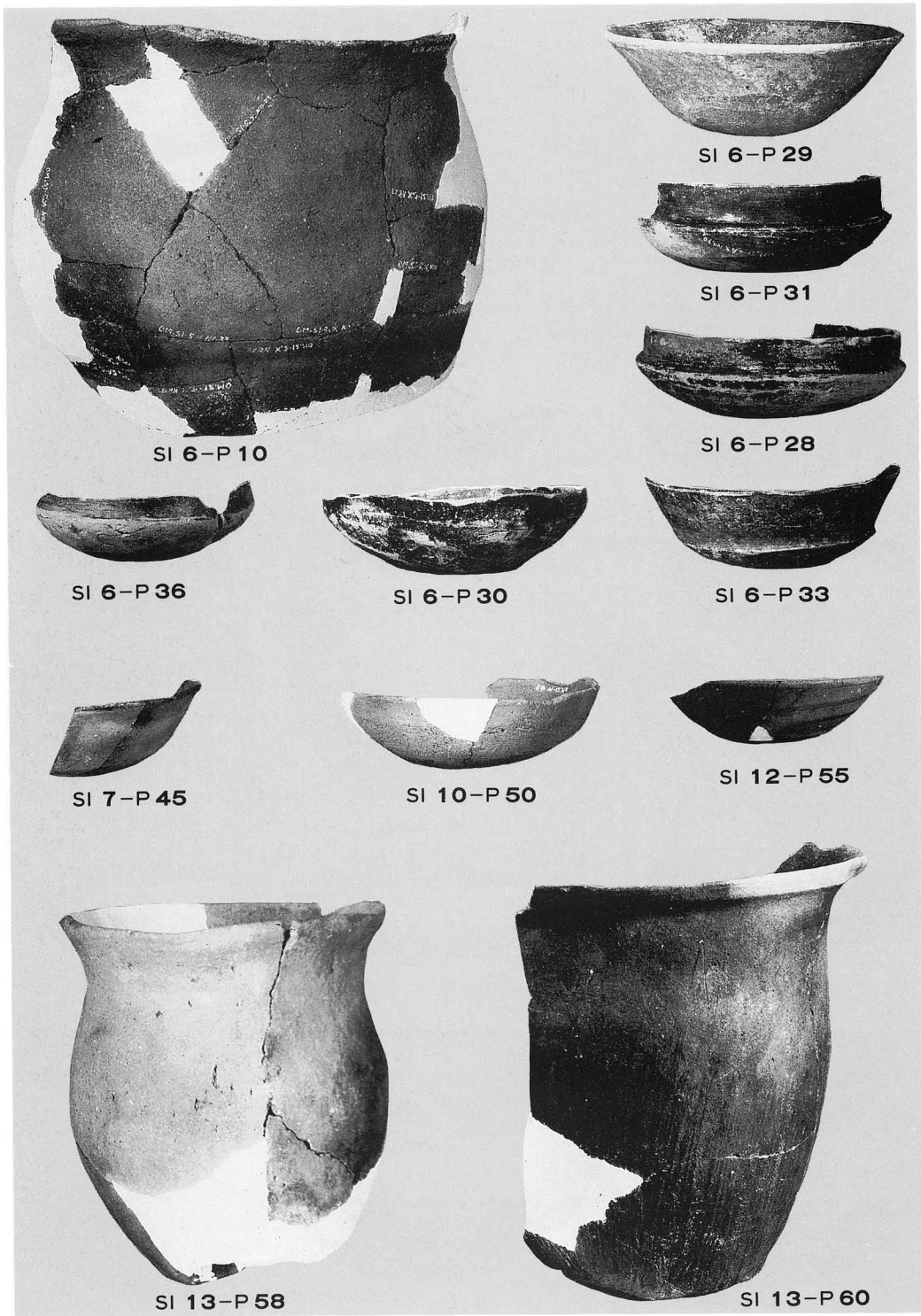
第22号住居跡



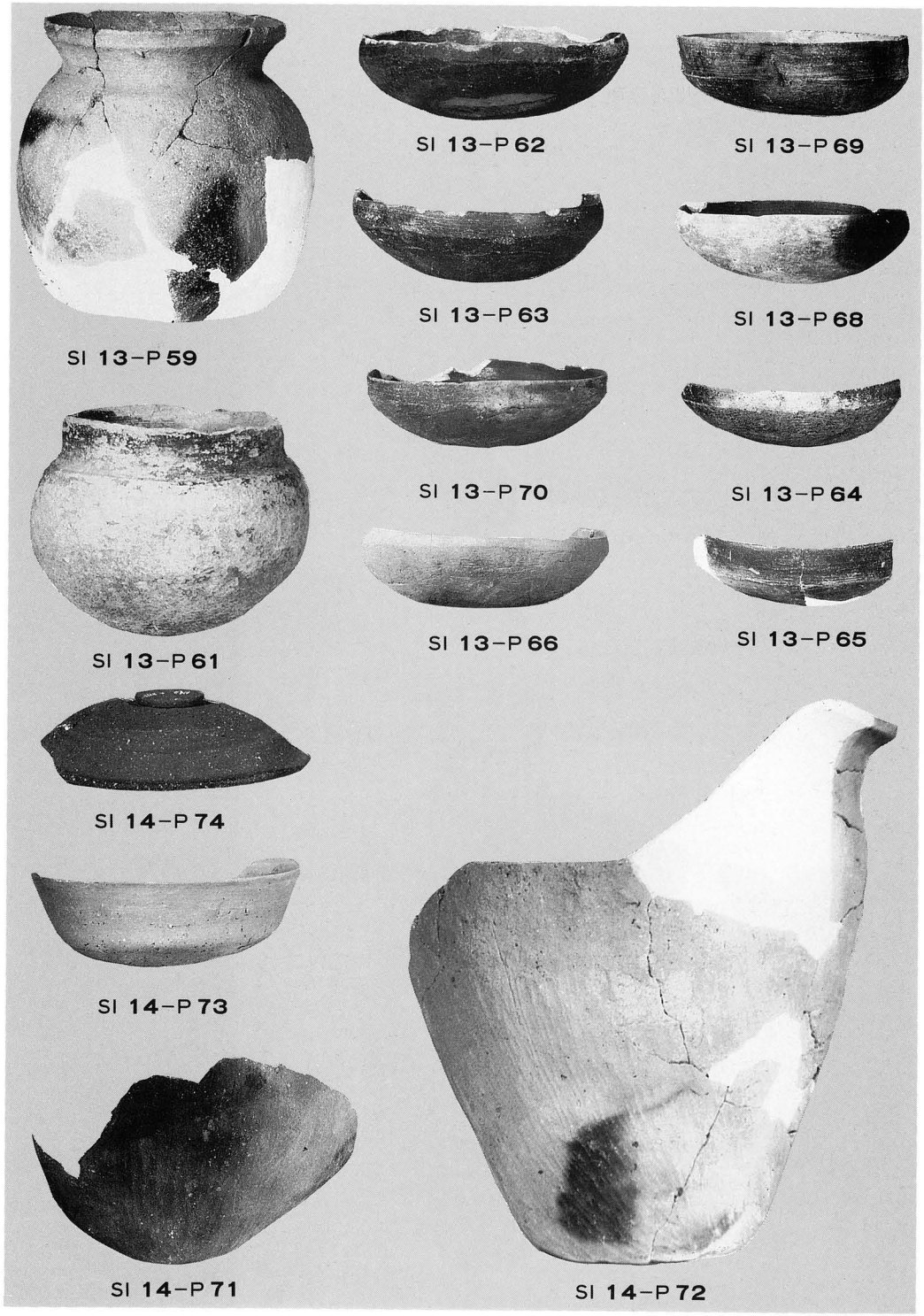
見学者説明


SI 1−P 1
SI 2−P 7
SI 3−P 8
SI 4−P 9
SI 4−P 120
SI 4−DP 17
SI 5−P 12
SI 5−P 25
SI 5−P 21
SI 5−P 13
SI 5−P 24
SI 5−P 19
SI 5−P 16
SI 5−P 15
SI 5−P 23
SI 5−P 17
SI 5−P 18

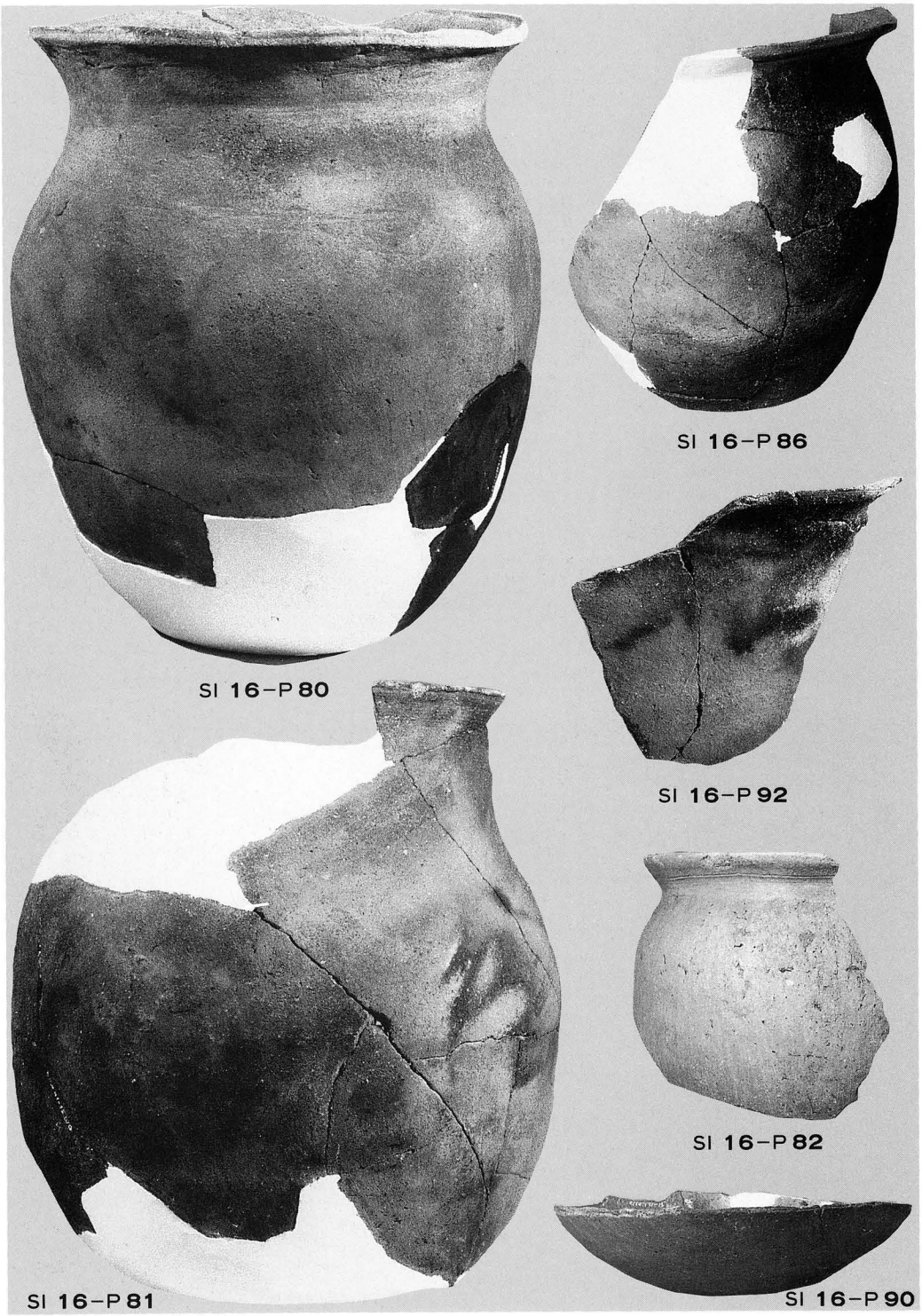
住居跡出土遺物


SI 6-P 10
SI 6-P 29
SI 6-P 31
SI 6-P 28
SI 6-P 36
SI 6-P 30
SI 6-P 33
SI 7-P 45
SI 10-P 50
SI 12-P 55
SI 13-P 58
SI 13-P 60

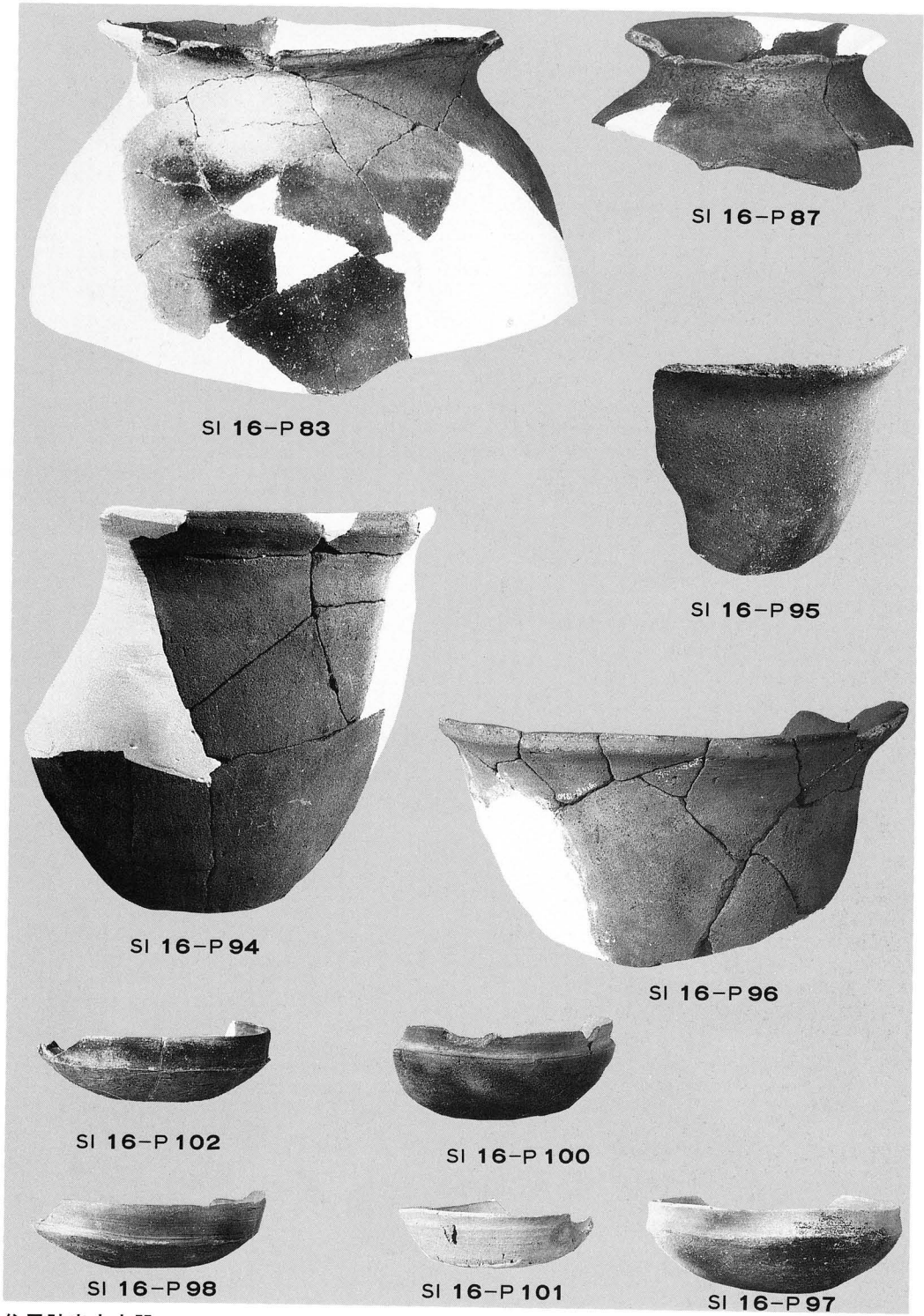
住居跡出土土器


SI 13-P 59
SI 13-P 62
SI 13-P 69
SI 13-P 63
SI 13-P 68
SI 13-P 70
SI 13-P 64
SI 13-P 66
SI 13-P 65
SI 13-P 61
SI 14-P 74
SI 14-P 73
SI 14-P 71
SI 14-P 72

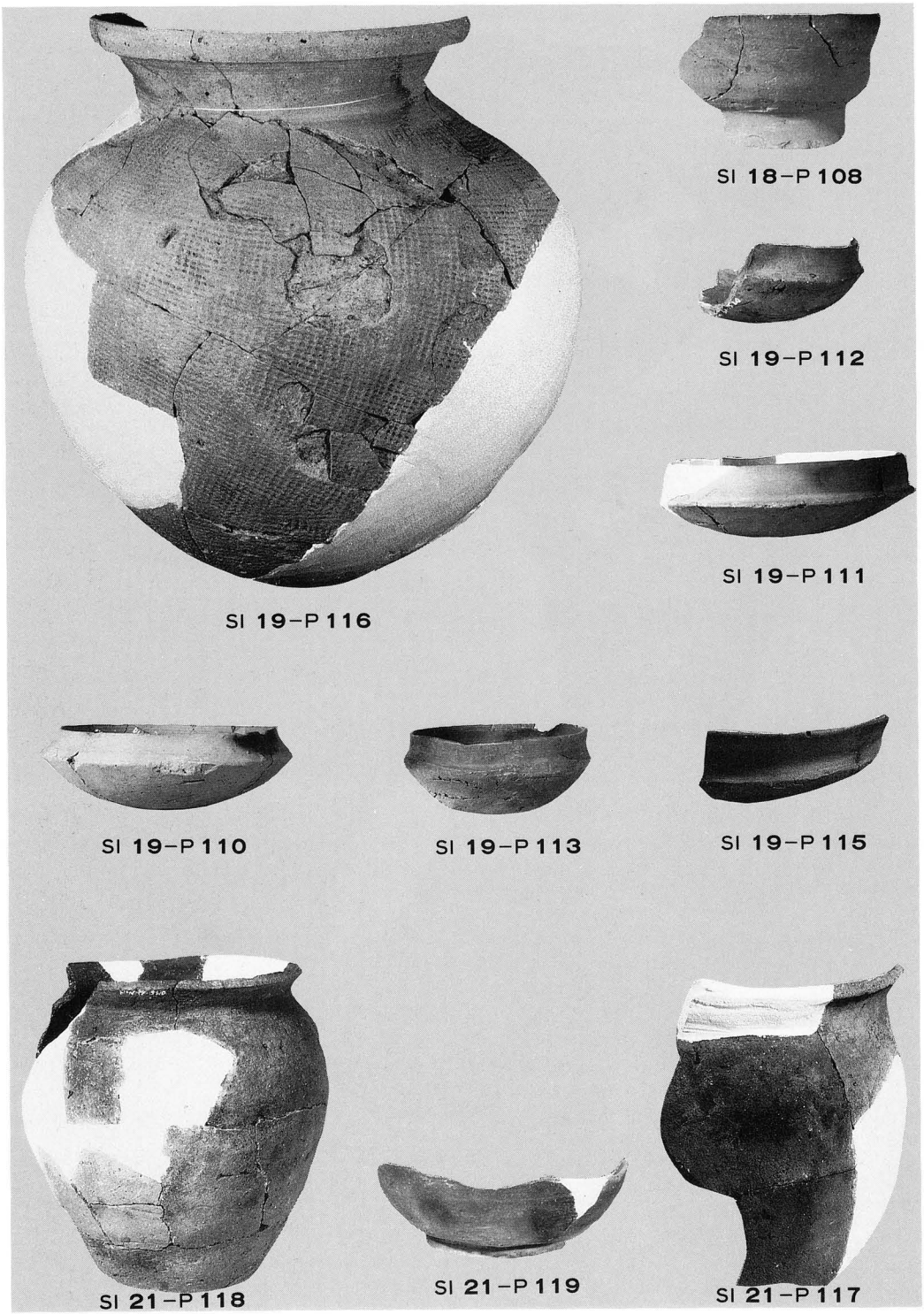
住居跡出土土器



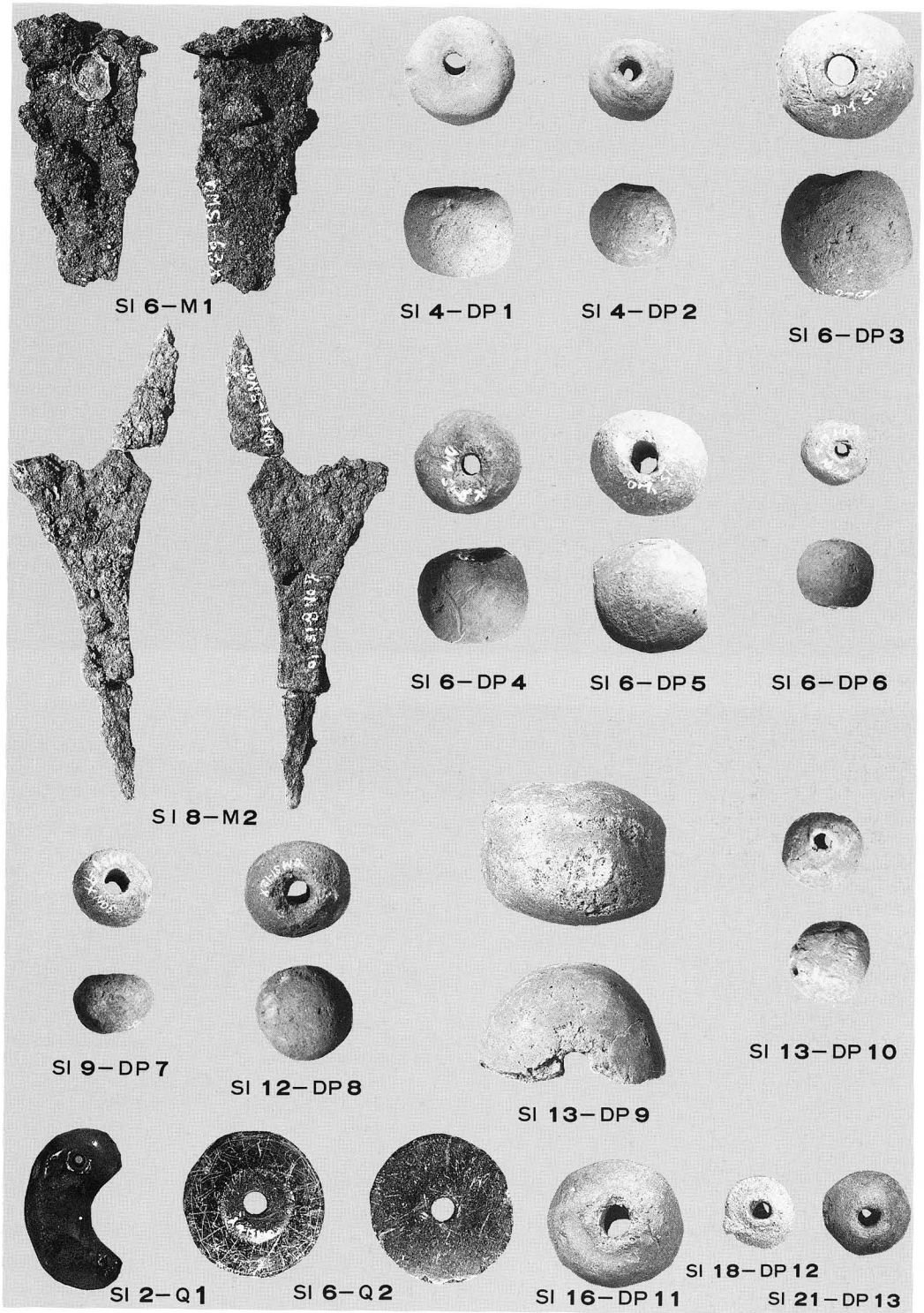
住居跡出土土器


SI 16-P 87
SI 16-P 83
SI 16-P 95
SI 16-P 94
SI 16-P 96
SI 16-P 102
SI 16-P 100
SI 16-P 98
SI 16-P 101
SI 16-P 97

住居跡出土土器

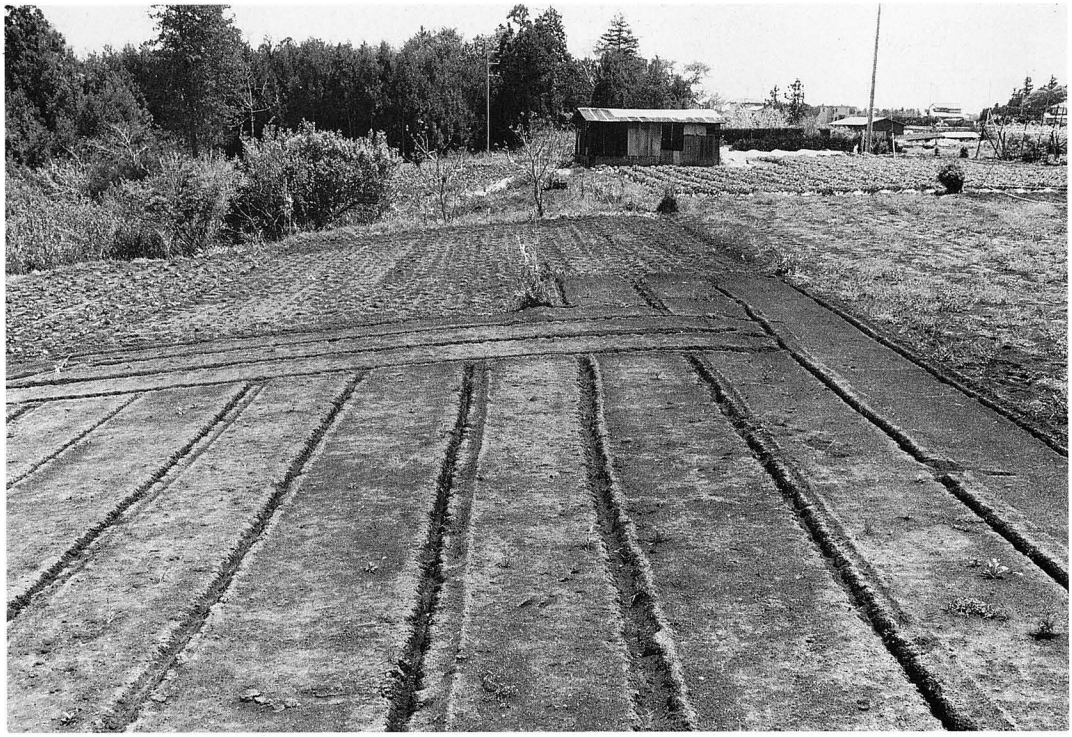

SI 18-P 108
SI 19-P 112
SI 19-P 111
SI 19-P 116
SI 19-P 110
SI 19-P 113
SI 19-P 115
SI 21-P 118
SI 21-P 119
SI 21-P 117

住居跡出土土器


SI 6−M1
SI 4−DP1
SI 4−DP2
SI 6−DP3
SI 8−M2
SI 6−DP4
SI 6−DP5
SI 6−DP6
SI 9−DP7
SI 12−DP8
SI 13−DP9
SI 13−DP10
SI 2−Q1
SI 6−Q2
SI 16−DP11
SI 18−DP12
SI 21−DP13

住居跡出土遺物

弁ノ内遺跡

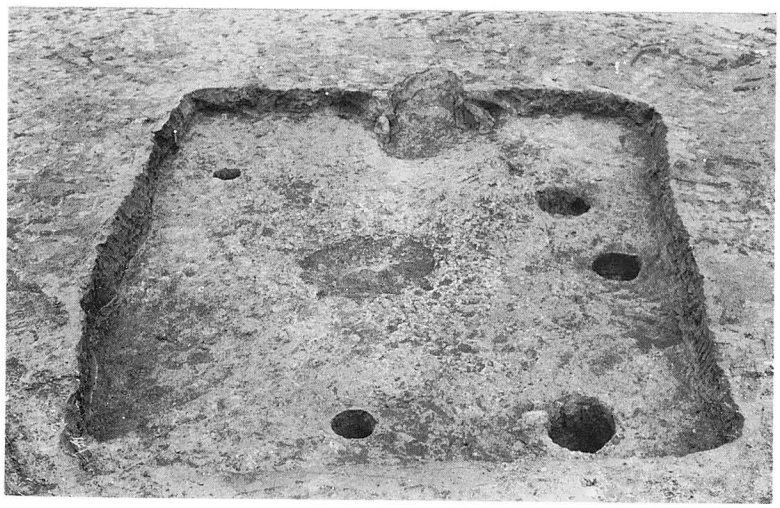


発掘前全景

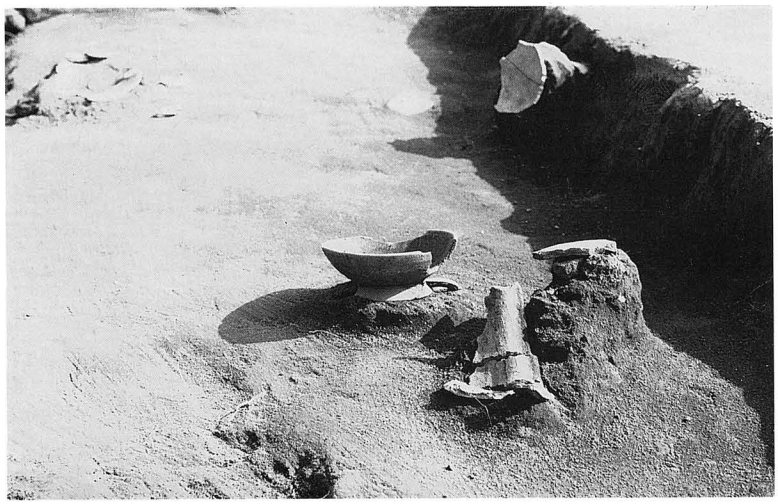
発掘後全景

第１号住居跡
カマド袖部遺物出土状況

第１号住居跡
遺物出土状況



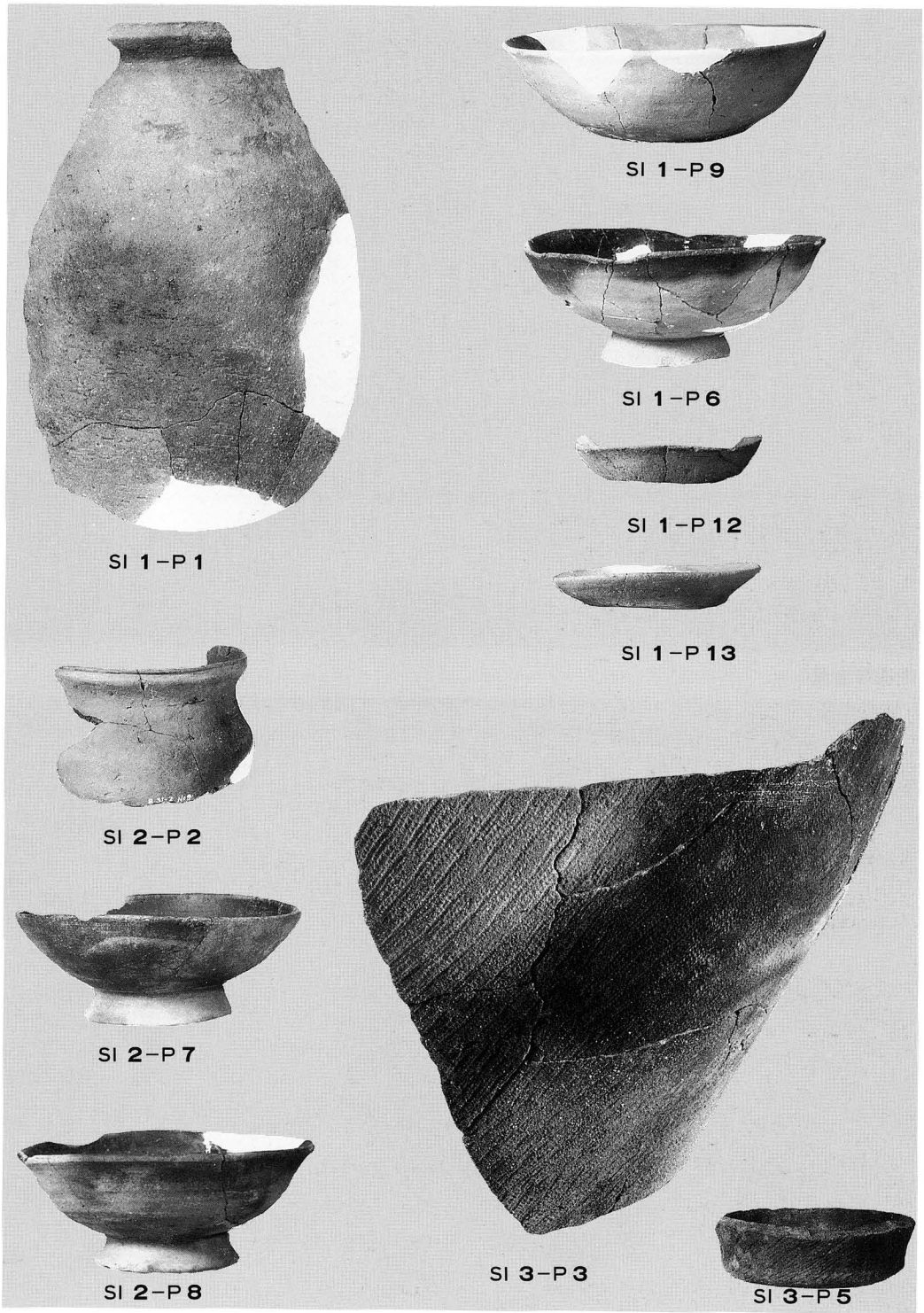
第１号住居跡



第2号住居跡
遺物出土状況

第2号住居跡

第3号住居跡


SI 1−P 1
SI 1−P 9
SI 1−P 6
SI 1−P 12
SI 1−P 13
SI 2−P 2
SI 2−P 7
SI 2−P 8
SI 3−P 3
SI 3−P 5

住居跡出土土器

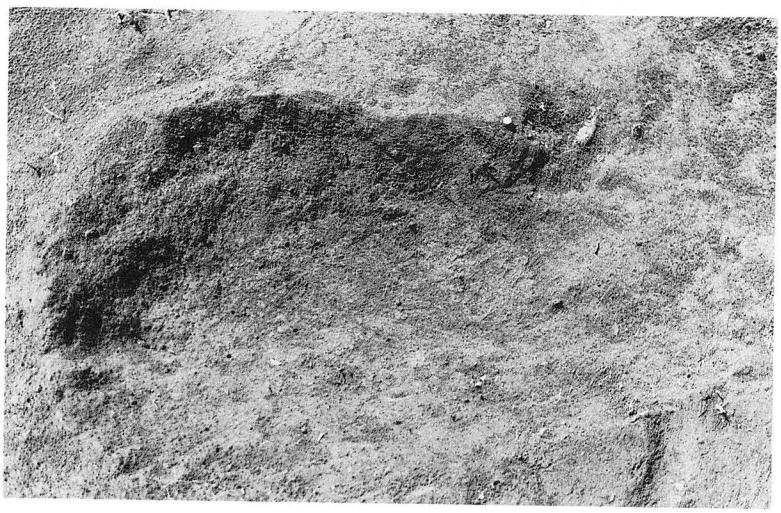
原ノ内遺跡

発掘前全景

発掘後全景

遺物出土状況

第1号屋外炉
土層セクション

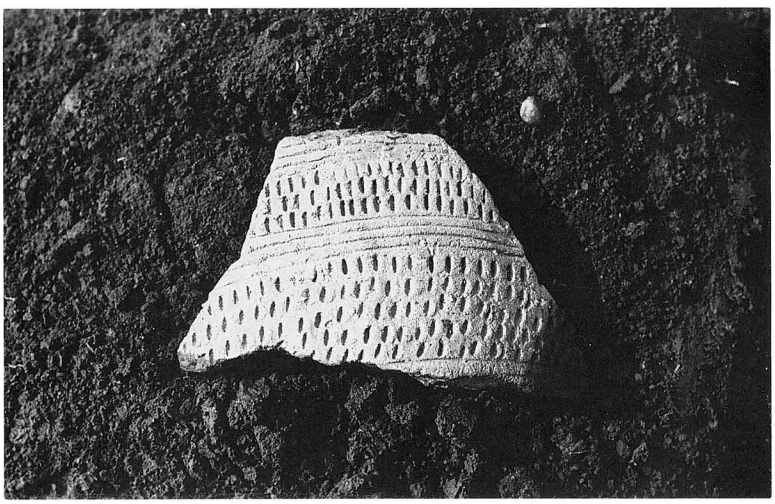


第2号屋外炉
平面完掘

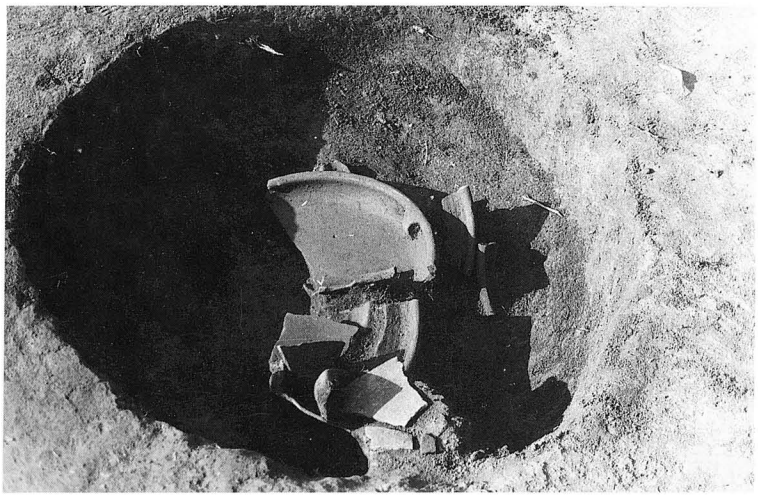
ゴリン山遺跡

発掘前全景

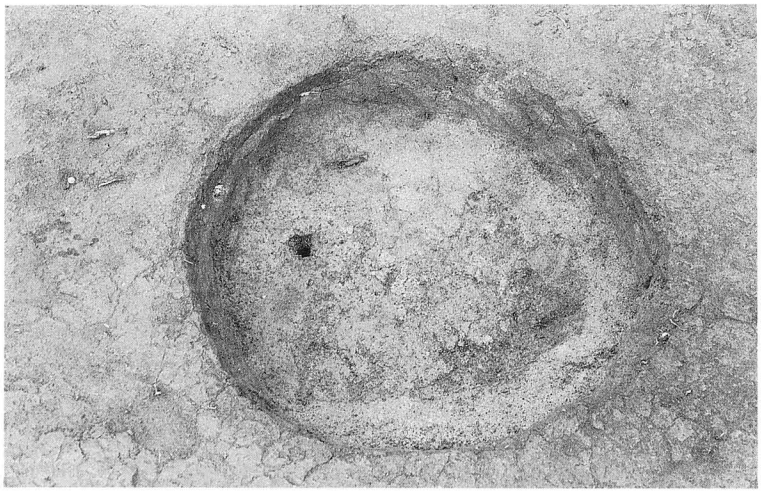
発掘後全景



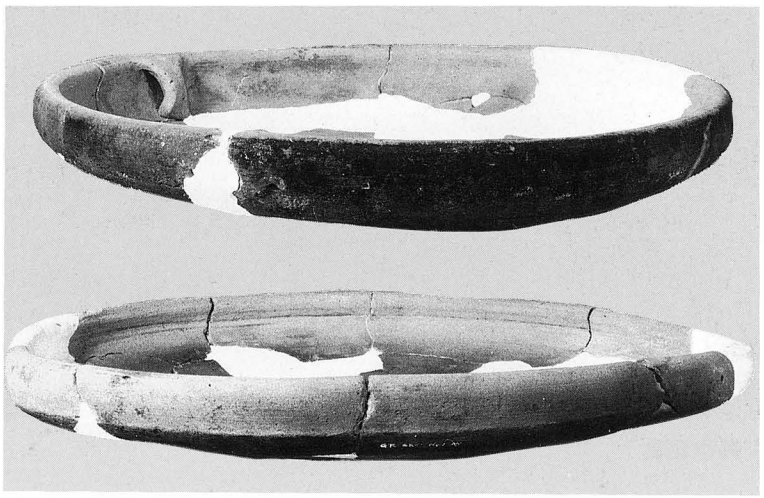
遺物出土状況



第１号土坑遺物
出　土　状　況



第１号土坑



第１号土坑
出土遺物

真 木 ノ 内

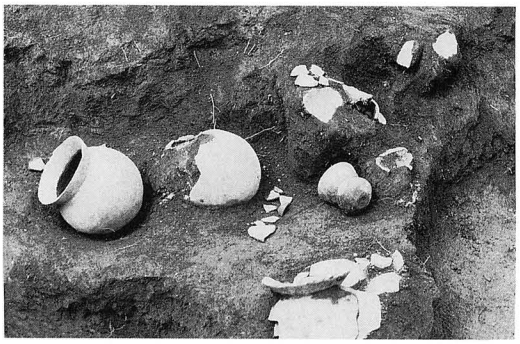
発掘前全景

発掘後全景

第1号住居跡遺物出土状況

第1号住居跡遺物出土状況

第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡遺物出土状況

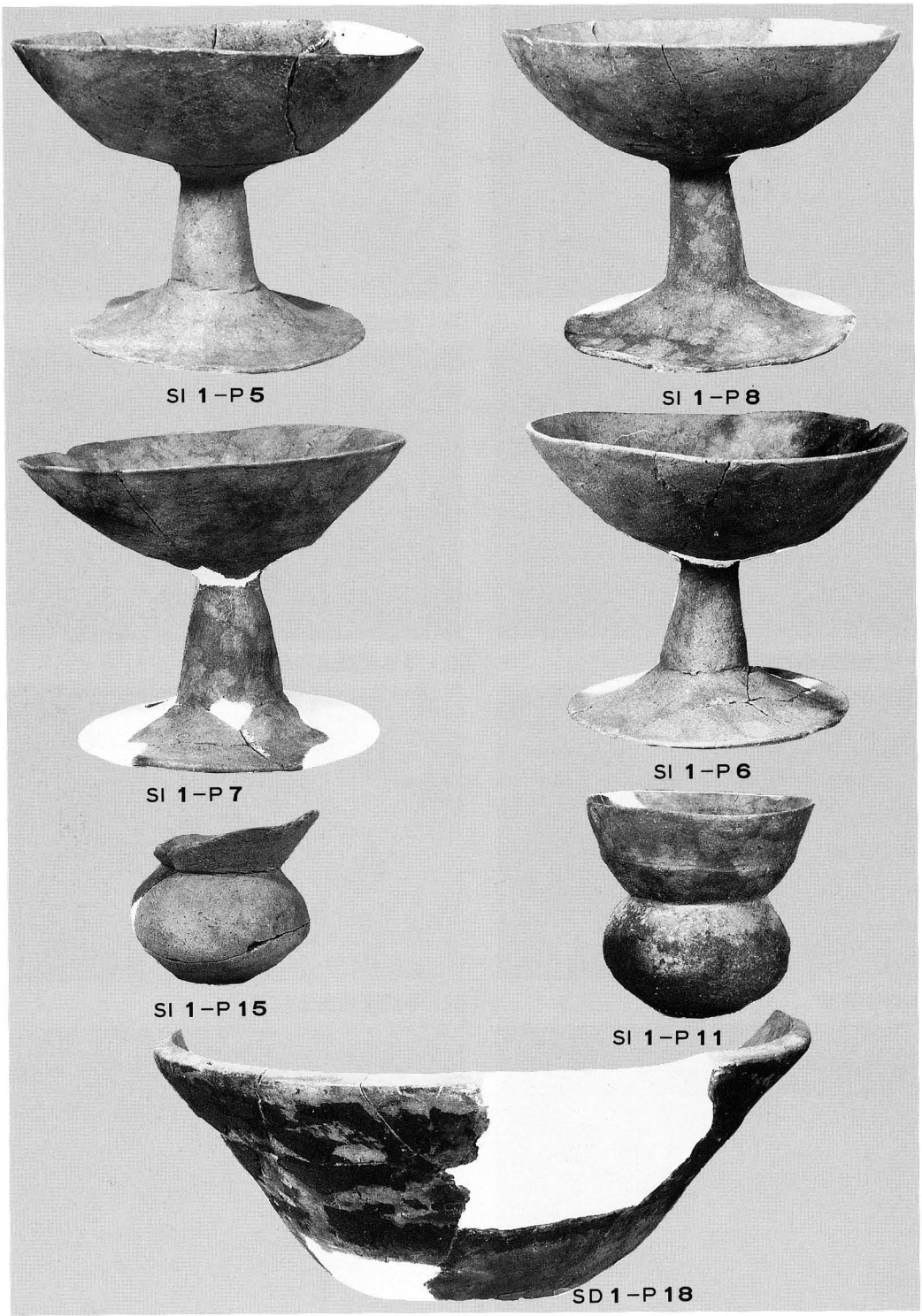
第1号住居跡

第1号溝遺物出土状況

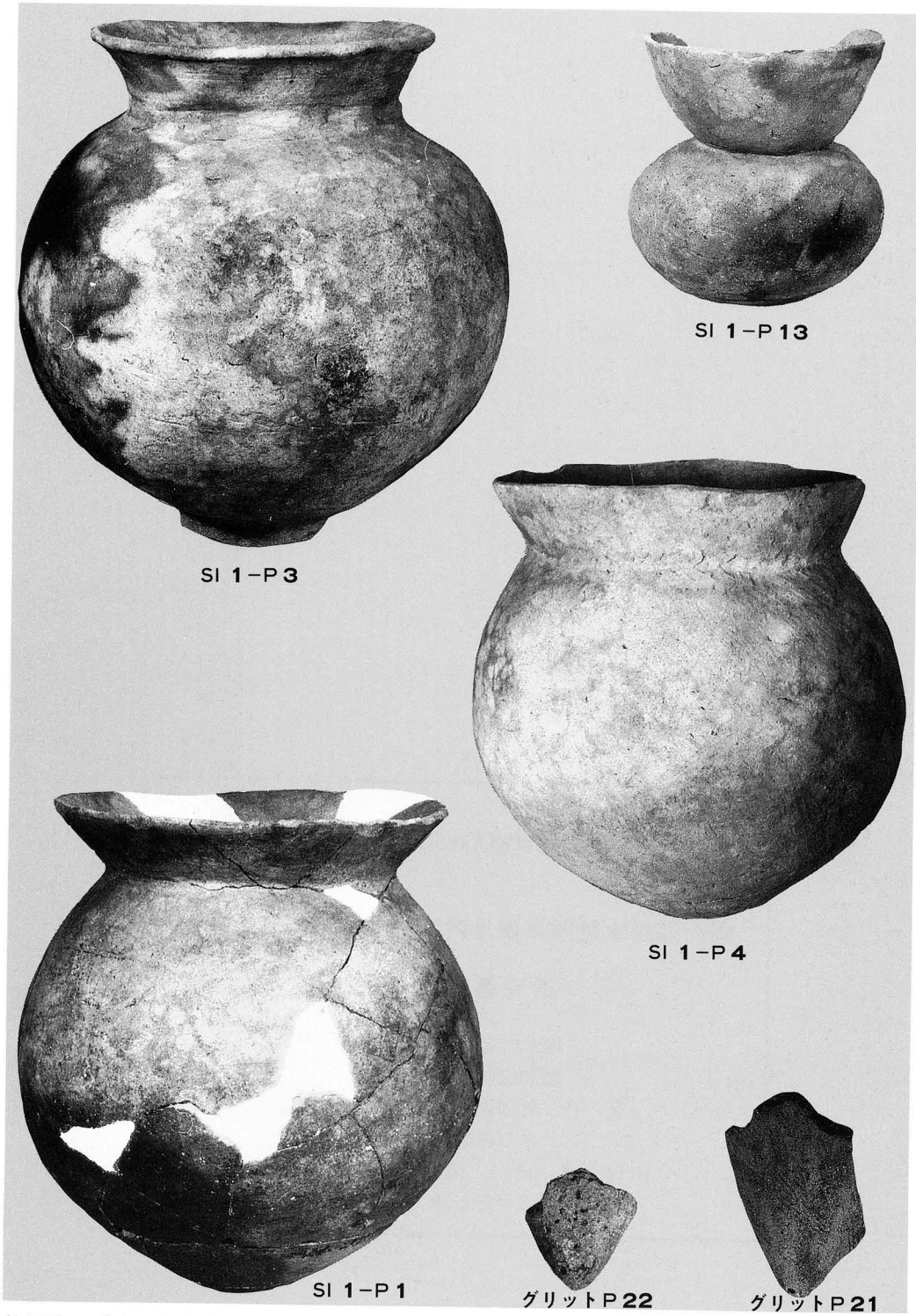
第1号溝

グリット覆土遺物出土状況

真 木 ノ 内



住居跡・溝出土土器



住居跡・グリット出土土器

茨城県教育財団文化財調査報告第43集

霞ケ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

五斗落他5遺跡

昭和62年3月25日印刷
昭和62年3月31日発行
発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印　刷　㈲三　栄　印　刷
水戸市谷津1－50